県道犀川豊前線バイパス建設関係埋蔵文化財調査報告 第２集

塔田琵琶田遺跡第３・５次
塔田五反田遺跡
塔田キカス遺跡第２次

－福岡県豊前市塔田・久路土所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書 第 252 集

上巻（本文編）

２０１６

九州歴史資料館

１　塔田琵琶田遺跡第５次１区３号竪穴住居跡（南から）

２　塔田琵琶田遺跡第５次１区３号竪穴住居跡カマド（南から）

巻頭図版２

１　塔田琵琶田遺跡第５次１区６号竪穴住居跡（東から）

２　塔田琵琶田遺跡第５次１区６号竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）

１　塔田琵琶田遺跡第５次１区 11 号竪穴住居跡（南東から）

２　塔田琵琶田遺跡第５次１区 11 号竪穴住居跡カマド（南から）

巻頭図版４

１　塔田琵琶田遺跡第５次１区 35 号竪穴住居跡（東から）

２　塔田琵琶田遺跡第５次１区７号竪穴住居跡出土破鏡（南から）

序

福岡県では、県道犀川豊前線バイパスの建設に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成 21 年度より実施してきました。本報告書は平成 23 年度から 25 年度にかけて行った福岡県豊前市塔田・久路土に所在する塔田琵琶田遺跡第３・５次、塔田キカス遺跡第２次、塔田五反田遺跡の調査の記録で、県道犀川豊前線バイパスの建設に係る発掘調査報告書の２冊目となります。

塔田琵琶田遺跡の調査では、細長い微高地上に広がる、古墳時代初頭前後、古墳時代中期後半～後期の多数の竪穴住居跡で構成された大規模な集落を確認しました。特に古墳時代前期の竪穴住居跡から破鏡が出土したこと、また古墳時代中期後半～後期の竪穴住居跡に付設された「Ｌ字状カマド」といわれる朝鮮半島由来の特徴的なカマドが多く発見され、正倉院に残る古代の戸籍に記載された渡来系とされる人々との関係が注目されます。また塔田五反田遺跡・塔田キカス遺跡第２次の調査では、古墳時代初頭前後の集落を確認するなど多くの成果があがりました。

本報告書が教育、学術ともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 28 年３月 31 日

九州歴史資料館
館 長　杉光　誠

例　言

1．本書は、県道犀川豊前線バイパスの建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県豊前市塔田・久路土に所在する、塔田琵琶田遺跡第３・５次調査、塔田五反田遺跡、塔田キカス遺跡第２次調査の記録である。県道犀川豊前線バイパス建設関係埋蔵文化財調査報告の第２集にあたる。

2．発掘調査は、平成 23 ～ 25 年度に福岡県京築県土整備事務所の執行委任を受けて九州歴史資料館が実施し、整理報告は福岡県京築県土整備事務所の執行委任を受けて平成 27 年度に九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は吉村靖徳・小澤佳憲・大庭孝夫が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は、吉村・小澤・大庭が行い、発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、岡田諭の下に実施した。

6．出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した第２・３図は豊前市発行の 1/2,500 都市計画図、第４図は『周防灘周辺開発地域土地分類基本調査　中津』、第５図は国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 地形図「中津」を改変したものである。

8．本書で使用した方位は、世界測地系による座標北である。

9．本書の執筆は、第Ⅰ章が吉村・小澤・大庭、第Ⅱ章は大庭、第Ⅲ章は小澤・大庭・細石朋希、第Ⅳ章はパリノ・サーヴェイ（株）・大庭、第Ⅴ章は大庭、第Ⅵ・Ⅶ章は吉村、第Ⅷ章は渡部邦昭が行い、編集は大庭が行った。

目　次

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次
Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯（大庭）…… 1
　2　調査の経過（小澤・大庭・吉村）…… 1
　3　調査・整理の組織（大庭）…… 6
Ⅱ　位置と環境（大庭）…… 8
　1　地理的環境 …… 8
　2　歴史的環境 …… 8
　3　塔田琵琶田遺跡及び関連遺跡の既往の調査 …… 14
Ⅲ　塔田琵琶田遺跡調査の報告 …… 16
　1　塔田琵琶田遺跡の概要（大庭）…… 16
　2　塔田琵琶田遺跡第３次調査の報告（小澤）…… 16
　3　塔田琵琶田遺跡第５次調査１区の報告（大庭・小澤・細石）…… 37
　4　塔田琵琶田遺跡第５次調査２区の報告（大庭）…… 220
　5　塔田琵琶田遺跡第５次調査３区の報告（大庭）…… 223
　6　塔田琵琶田遺跡第５次調査４区の報告（大庭）…… 232
Ⅳ　自然科学分析 …… 234
　1　出土炭化物の年代測定（パリノ・サーヴェイ（株））…… 234
　2　塔田琵琶田遺跡出土カマド粘土の土壌分析（パリノ・サーヴェイ（株））…… 239
　3　塔田琵琶田遺跡第５次１区 30 号竪穴住居跡出土土器の顔料分析（大庭）…… 246
Ⅴ　塔田琵琶田遺跡第５次調査の遺構と遺物の検討（大庭） …… 248
　1　塔田琵琶田遺跡第５次調査における遺構の変遷について …… 248
　2　１区７号竪穴住居跡出土破鏡について …… 252
　3　本遺跡出土飯蛸壺について …… 255
　4　カマドについて …… 258
　5　塔田琵琶田遺跡第５次調査のまとめ …… 262
Ⅵ　塔田五反田遺跡調査の報告（吉村）…… 264
Ⅶ　塔田キカス遺跡第２次調査の報告（吉村）…… 269
Ⅷ　宇島鉄道のあゆみ（渡部）…… 272

図 版 目 次

巻頭図版１　１　塔田琵琶田遺跡第５次１区３号竪穴住居跡（南から）
　　２　塔田琵琶田遺跡第５次１区３号竪穴住居跡カマド（南から）
巻頭図版２　１　塔田琵琶田遺跡第５次１区６号竪穴住居跡（東から）
　　２　塔田琵琶田遺跡第５次１区６号竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）
巻頭図版３　１　塔田琵琶田遺跡第５次１区 11 号竪穴住居跡（南東から）
　　２　塔田琵琶田遺跡第５次１区 11 号竪穴住居跡カマド（南から）
巻頭図版４　１　塔田琵琶田遺跡第５次１区 35 号竪穴住居跡（東から）
　　２　塔田琵琶田遺跡第５次１区７号竪穴住居跡出土破鏡（南から）
図版１　塔田琵琶田遺跡周辺空中写真（約 1/10,000、昭和 36 年国土地理院撮影）
図版２　１　３次調査区全景（上から、上が北）　２　３次調査区北半（上から、上が北）
図版３　１　３次１号竪穴住居跡（西から）　２　３次５・６号竪穴住居跡（北から）
　　３　３次７号竪穴住居跡（南から）
図版４　１　３次８号竪穴住居跡土器出土状況（東から）
　　２　３次８号竪穴住居跡完掘状況（東から）３　３次９・10 号竪穴住居跡（西から）
図版５　３次 ５～８①号竪穴住居跡出土土器
図版６　３次 ８号竪穴住居跡出土土器②
図版７　５次１区全景（合成、上が北）
図版８　１　５次１区北全景（上から、上が北）　２　５次１区中央全景（上から、上が北）
　　３　５次１区南竪穴住居群（北北東から）
図版９　１　５次１区北基本土層（西から）　２　５次１区中央基本土層（西から）
　　３　５次１区西堆積状況（南東から）
図版 10　１　５次１区１・18 号竪穴住居跡（南西から）
　　２　５次１区１～３・５号竪穴住居跡（上から、上が西）
　　３　５次１区２号竪穴住居跡（南東から）
図版 11　１　５次１区２号竪穴住居跡カマド出土状況（南東から）
　　２　５次１区３号竪穴住居跡カマド完掘状況①（東南東から）
　　３　５次１区３号竪穴住居跡カマド完掘状況②（南西から）
図版 12　１　５次１区４号竪穴住居跡（北西から）　２　５次１区５号竪穴住居跡（南東から）
　　３　５次１区５号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版 13　１　５次１区５号竪穴住居跡カマド完掘状況①（南西から）
　　２　５次１区５号竪穴住居跡カマド完掘状況②（北東から）
　　３　５次１区６・10・16 号竪穴住居跡（上から、上が西）
図版 14　１　５次１区６・10・16 号竪穴住居跡（南西から）
　　２　５次１区６号竪穴住居跡カマド出土状況（東から）
　　３　５次１区６号竪穴住居跡カマド完掘状況（南南西から）
図版 15　１　５次１区６号竪穴住居跡曲刃鎌出土状況（北西から）
　　２　５区１区７号竪穴住居跡（北から）　３　５次１区７号竪穴住居跡炉跡（北西から）
図版 16　１　５次１区 10 号竪穴住居跡カマド①（南東から）

2　5次1区10号竪穴住居跡カマド②（南東から）
3　5次1区10号竪穴住居跡カマド③（北東から）
4　5次1区10号竪穴住居跡カマド④（南西から）
図版17　1　5次1区11号竪穴住居跡カマド出土状況（南東から）
2　5次1区11号竪穴住居跡カマド完掘状況（南南西から）
3　5次1区12号竪穴住居跡（南東から）
4　5次1区12号竪穴住居跡カマド出土状況（南東から）
図版18　1　5次1区13号竪穴住居跡（東から）　2　5次1区14号竪穴住居跡（北から）
3　5次1区14号竪穴住居跡カマド（北から）
図版19　1　5次1区15号竪穴住居跡（北東から）
2　5次1区16号竪穴住居跡カマド（南東から）
3　5次1区17号竪穴住居跡（東から）
図版20　1　5次1区18号竪穴住居跡（北西から）　2　5次1区19号竪穴住居跡（南東から）
3　5次1区20（左）・21（右）号竪穴住居跡（南西から）
図版21　1　5次1区22号竪穴住居跡（東から）　2　5次1区23号竪穴住居跡（東から）
3　5次1区24号竪穴住居跡（北東から）
4　5次1区25号竪穴住居跡（北東から）
図版22　1　5次1区26号竪穴住居跡（北東から）　2　5次1区26号竪穴住居跡杓子形土器（東から）
3　5次1区27号竪穴住居跡（南西から）　4　5次1区28号竪穴住居跡（南から）
図版23　1　5次1区31号竪穴住居跡（西から）　2　5次1区32号竪穴住居跡（東から）
3　5次1区32号竪穴住居跡カマド（東から）
図版24　1　5次1区33号竪穴住居跡（北西から）　2　5次1区34号竪穴住居跡（北から）
3　5次1区34号竪穴住居跡出土状況（南から）
図版25　1　5次1区35号竪穴住居跡カマド（南東から）
2　5次1区36号竪穴住居跡（南東から）　3　5次1区36号竪穴住居跡カマド①（南東から）
4　5次1区36号竪穴住居跡カマド②（南から）
図版26　1　5次1区38号竪穴住居跡（東から）　2　5次1区39号竪穴住居跡（北東から）
3　5次1区39号竪穴住居跡直刃鎌出土状況（北東から）
図版27　1　5次1区40号竪穴住居跡（南西から）　2　5次1区41号竪穴住居跡（北から）
3　5次1区44～46・49号竪穴住居跡（南西から）
図版28　1　5次1区44号竪穴住居跡（南西から）　2　5次1区44号竪穴住居跡カマド出土状況(西から)
3　5次1区44号竪穴住居跡カマド完掘状況（南西から）
図版29　1　5次1区45号竪穴住居跡（南西から）　2　5次1区45号竪穴住居跡カマド①（南から）
3　5次1区45号竪穴住居跡カマド②（南東から）
図版30　1　5次1区46号竪穴住居跡（南東から）　2　5次1区46号竪穴住居跡カマド（南東から）
3　5次1区47号竪穴住居跡（南東から）
図版31　1　5次1区48号竪穴住居跡（南から）
2　5次1区50・51号竪穴住居跡、5号土坑（南西から）
3　5次1区53号竪穴住居跡（北から）
図版32　1　5次1区54号竪穴住居跡（北東から）　2　5次1区54号竪穴住居跡カマド（北東から）

3　5次1区55号竪穴住居跡（南西から）
図版33　1　5次1区56号竪穴住居跡（北東から）
2　5次1区56号竪穴住居跡カマド出土状況（北東から）
3　5次1区56号竪穴住居跡カマド完掘状況（北東から）
図版34　1　5次1区57号竪穴住居跡（北東から）　2　5次1区58～60号竪穴住居跡（北東から）
3　5次1区61号竪穴住居跡①（東から）
図版35　1　5次1区61号竪穴住居跡②（南西から）
2　5次1区64号竪穴住居跡（東から）　3　5次1区65・66号竪穴住居跡（南西から）
図版36　1　5次1区65号竪穴住居跡（南西から）　2　5次1区66号竪穴住居跡（南西から）
3　5次1区66号竪穴住居跡屋内土坑（南から）
図版37　1　5次1区66号竪穴住居跡出土状況（西から）
2　5次1区67号竪穴住居跡（北東から）　3　5次1区68号竪穴住居跡（西から）
図版38　1　5次1区70（奥）・71（手前）号竪穴住居跡（東から）
2　5次1区70号竪穴住居跡カマド（東から）
3　5次1区71号竪穴住居跡カマド（東から）
図版39　1　5次1区71号竪穴住居跡刀子出土状況（北から）
2　5次1区73号竪穴住居跡（南から）　3　5次1区74号竪穴住居跡（西から）
図版40　1　5次1区74号竪穴住居跡屋内土坑（西から）
2　5次1区75号竪穴住居跡（北から）　3　5次1区76号竪穴住居跡（北東から）
図版41　1　5次1区77（中央）・40（左）・76（奥）号竪穴住居跡（北西から）
2　5次1区77号竪穴住居跡（北西から）　3　5次1区79号竪穴住居跡（北から）
図版42　1　5次1区86～89号竪穴住居跡（南から）
2　5次1区86・88・89号竪穴住居跡（西から）
3　5次1区89号竪穴住居跡（北から）
図版43　1　5次1区89号竪穴住居跡炉跡（北から）
2　5次1区89号竪穴住居跡炉跡下層（北から）
3　5次1区1号土坑（南から）
図版44　1　5次1区3号土坑（南から）　2　5次1区5号土坑（西から）
3　5次1区6号土坑（西から）
図版45　1　5次2区全景（南東から）　2　5次2区7号土坑（北東から）
3　5次2区8号土坑（南東から）
図版46　1　5次3区と1区南全景（上から、上が南）　2　5次3区全景（上から、上が南）
図版47　1　5次3区90号竪穴住居跡（上から、上が南）　2　5次3区90号竪穴住居跡（南から）
3　5次3区90号竪穴住居跡カマド（西から）
図版48　1　5次3区91号竪穴住居跡（南西から）　2　5次3区92号竪穴住居跡（南東から）
3　5次3区92号竪穴住居跡カマド（東南東から）
図版49　1　5次3区6～8号溝①（上から、上が南）　2　5次3区6～8号溝②（南東から）
3　5次3区6号溝北土層（北から）
図版50　1　5次3区6号溝南土層（北から）　2　5次3区7号溝土層（北から）
3　5次3区道路状遺構検出状況（北西から）

図版51　1　５次３区道路状遺構完掘状況（北西から）　　2　５次４区全景（西から）
　　3　５次４区１号竪穴住居跡（北から）
図版52　５次２～５号竪穴住居跡出土土器
図版53　５次６・７・10①号竪穴住居跡出土土器
図版54　５次10号竪穴住居跡出土土器②
図版55　５次10③・11①号竪穴住居跡出土土器
図版56　５次11②・12～14①号竪穴住居跡出土土器
図版57　５次14②・15・16・18・20・23・26号竪穴住居跡出土土器
図版58　５次27・28・30・31・32・35・39号竪穴住居跡出土土器
図版59　５次37・38・40・41・46・47・50号竪穴住居跡出土土器
図版60　５次48・54・56・57・60・64～67号竪穴住居跡出土土器
図版61　５次68・70・71・75～77・86①号竪穴住居跡出土土器
図版62　５次86号竪穴住居跡出土土器②
図版63　５次86③・87・88①号竪穴住居跡出土土器
図版64　５次88②・89①号竪穴住居跡出土土器
図版65　５次89号竪穴住居跡②、２・５号土坑出土土器
図版66　５次１号溝、遺構面等出土土器
図版67　５次１区縄文土器、石器・石製品、土製品、玉類
図版68　５次１区鉄製品①
図版69　５次１区鉄製品②、２区８号土坑、３区90号竪穴住居跡出土土器
図版70　1　塔田五反田遺跡・塔田キカス遺跡遠景（北東から）
　　2　塔田五反田遺跡全景（西から）　　3　塔田五反田遺跡南半部全景（北東から）
図版71　1　塔田五反田遺跡南半部全景（南西から）　　2　１号掘立柱建物跡（東から）
　　3　溜り状遺構（東から）
図版72　1　塔田五反田遺跡北半部全景（上から、左上が北）
　　2　北半部全景（西から）　　3　基本層序（東壁）
図版73　1　塔田キカス遺跡第２次遠景(北東から)　　2　塔田キカス遺跡第２次全景（上から、左が南）
　　3　塔田キカス遺跡第２次全景（南から）
図版74　1　塔田五反田遺跡宇島鉄道盛土断面（北西から）
　　2　調査区から南東に延びる宇島鉄道の盛土（北西から）　3　宇島鉄道の橋梁（西から）
図版75　塔田五反田遺跡出土遺物
図版76　塔田キカス遺跡第２次出土土器

挿図目次

第１図　塔田琵琶田遺跡の位置 …… 1
第２図　犀川豊前線バイパス調査地点（1/10,000）…… 3
第３図　塔田琵琶田遺跡１～６次調査区位置図（1/5,000）…… 5
第４図　遺跡周辺地形分類図（1/50,000）…… 9
第５図　遺跡分布図（1/50,000）……11
第６図　塔田琵琶田遺跡等関係図（1/5,000・1/120・1/1）……13

第7図　3次　調査区遺構配置図（1/300）……17
第8図　3次　1・2・4～7号竪穴住居跡実測図（1/60）……19
第9図　3次　1・3・5・6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）……21
第10図　3次　7号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）……23
第11図　3次　7号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）……24
第12図　3次　7号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）……25
第13図　3次　8～10号竪穴住居跡実測図（1/60）……26
第14図　3次　8号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）……27
第15図　3次　8号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）……28
第16図　3次　8号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）……29
第17図　3次　8号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）……30
第18図　3次　8号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）……31
第19図　3次　9・10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……32
第20図　3次　遺構検出時等出土土器実測図（1/3）……33
第21図　5次1区　遺構配置図（1/300）……35・36
第22図　5次1区　基本土層（1/60）……38
第23図　5次1区　1・4号竪穴住居跡実測図（1/60）……39
第24図　5次1区　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/6・1/3）……41
第25図　5次1区　2号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……43
第26図　5次1区　2号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）……44
第27図　5次1区　2号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4・1/3）……45
第28図　5次1区　2号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/4・1/3）……46
第29図　5次1区　3号竪穴住居跡実測図（1/60）……47
第30図　5次1区　3号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……48
第31図　5次1区　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）……51
第32図　5次1区　4号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/6・1/3）……53
第33図　5次1区　4号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）……55
第34図　5次1区　5号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……57
第35図　5次1区　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）……59
第36図　5次1区　6号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……61
第37図　5次1区　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/6・1/3）……63
第38図　5次1区　7号竪穴住居跡（1/60）・破鏡出土状況（1/4）実測図……65
第39図　5次1区　7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……67
第40図　5次1区　10号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……69
第41図　5次1区　10号竪穴住居跡覆土上層出土土器実測図①（1/3）……70
第42図　5次1区　10号竪穴住居跡覆土上層出土土器実測図②（1/3）……71
第43図　5次1区　10号竪穴住居跡覆土上層出土土器実測図③（1/3）……72
第44図　5次1区　10号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）……73
第45図　5次1区　10号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）……74
第46図　5次1区　10号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）……75

第 47 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
第 48 図　5 次 1 区　11 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
第 49 図　5 次 1 区　11 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第 50 図　5 次 1 区　11 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
第 51 図　5 次 1 区　12 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第 52 図　5 次 1 区　12・13 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
第 53 図　5 次 1 区　13・15 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
第 54 図　5 次 1 区　14 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第 55 図　5 次 1 区　14・15・17 ～ 19・21 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・91
第 56 図　5 次 1 区　16 ～ 18 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第 57 図　5 次 1 区　16 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
第 58 図　5 次 1 区　16 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
第 59 図　5 次 1 区　19・20 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
第 60 図　5 次 1 区　20・24・25 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
第 61 図　5 次 1 区　21・22 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第 62 図　5 次 1 区　23・25 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
第 63 図　5 次 1 区　23 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
第 64 図　5 次 1 区　24・26 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
第 65 図　5 次 1 区　26・28・30・31 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
第 66 図　5 次 1 区　27・28 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
第 67 図　5 次 1 区　27・33 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
第 68 図　5 次 1 区　30・31 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
第 69 図　5 次 1 区　32・34 号竪穴住居跡（1/60）、32 号住居跡カマド（1/30）実測図 ・・・・・・115
第 70 図　5 次 1 区　32・34 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第 71 図　5 次 1 区　35・37 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第 72 図　5 次 1 区　35 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
第 73 図　5 次 1 区　35・36・39 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
第 74 図　5 次 1 区　36 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
第 75 図　5 次 1 区　37・41・42 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
第 76 図　5 次 1 区　38・40 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第 77 図　5 次 1 区　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・128
第 78 図　5 次 1 区　40 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
第 79 図　5 次 1 区　39・41・42 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・131
第 80 図　5 次 1 区　44 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132
第 81 図　5 次 1 区　44 ～ 46 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・133
第 82 図　5 次 1 区　45 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
第 83 図　5 次 1 区　46 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
第 84 図　5 次 1 区　47・50・53・54 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）・・・・・・・・・・・・・・139
第 85 図　5 次 1 区　47 号竪穴住居跡・炉跡実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
第 86 図　5 次 1 区　48・49 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141

第 87 図　5 次 1 区　48 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……143
第 88 図　5 次 1 区　50・51 号竪穴住居跡実測図（1/60）……145
第 89 図　5 次 1 区　53・57 号竪穴住居跡実測図（1/60）……147
第 90 図　5 次 1 区　54・55 号竪穴住居跡（1/60）、54 号住居跡カマド（1/30）実測図 ……149
第 91 図　5 次 1 区　56 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……150
第 92 図　5 次 1 区　56・57・59 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……151
第 93 図　5 次 1 区　58・59 号竪穴住居跡実測図（1/60）……153
第 94 図　5 次 1 区　60・61 号竪穴住居跡実測図（1/60）……155
第 95 図　5 次 1 区　60・66 ①号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……157
第 96 図　5 次 1 区　61・62・64 ①号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……159
第 97 図　5 次 1 区　64 ②・65・67 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）……160
第 98 図　5 次 1 区　62・65 号竪穴住居跡実測図（1/60）……161
第 99 図　5 次 1 区　64 号竪穴住居跡実測図（1/60）……162
第 100 図　5 次 1 区　66・67 号竪穴住居跡実測図（1/60）……163
第 101 図　5 次 1 区　66 ②・68 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……165
第 102 図　5 次 1 区　68・73 号竪穴住居跡実測図（1/60）……167
第 103 図　5 次 1 区　70・76 号竪穴住居跡（1/60）、70 号住居跡カマド（1/30）実測図 ……169
第 104 図　5 次 1 区　70・71・73 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……171
第 105 図　5 次 1 区　71 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……172
第 106 図　5 次 1 区　74・77 号竪穴住居跡実測図（1/60）……173
第 107 図　5 次 1 区　74・76・77 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）……175
第 108 図　5 次 1 区　75 号竪穴住居跡・炉跡実測図（1/60・1/30）……176
第 109 図　5 次 1 区　75 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）……177
第 110 図　5 次 1 区　75 ②・79 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……178
第 111 図　5 次 1 区　79・80 号竪穴住居跡実測図（1/60）……181
第 112 図　5 次 1 区　81 ～ 84 号竪穴住居跡実測図（1/60）……183
第 113 図　5 次 1 区　85 号竪穴住居跡実測図（1/60）……184
第 114 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡実測図（1/60）……185
第 115 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4・1/3）……186
第 116 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）……187
第 117 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）……188
第 118 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）……189
第 119 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）……190
第 120 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図⑥（1/3）……191
第 121 図　5 次 1 区　87・88 号竪穴住居跡実測図（1/60）……193
第 122 図　5 次 1 区　86・87 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……194
第 123 図　5 次 1 区　88 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……195
第 124 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡・炉跡実測図（1/60・1/30）……196
第 125 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……197
第 126 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）……198

第 127 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・199
第 128 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・200
第 129 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/6・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・201
第 130 図　5 次 1 区　1 ～ 5 号土坑実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・203
第 131 図　5 次 1 区　1・2・5 号土坑出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・205
第 132 図　5 次 1 区　6 号土坑実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
第 133 図　5 次 1 区　6 号土坑出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
第 134 図　5 次 1 区　1 号溝土層実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・206
第 135 図　5 次 1 区　1 号溝出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・207
第 136 図　5 次 1 区　ピット・遺構面等①出土土器実測図（1/4・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・209
第 137 図　5 次 1 区　遺構面等出土土器実測図②（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・211
第 138 図　5 次 1 区　遺構面等出土土器実測図③（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・212
第 139 図　5 次 1 区　遺構面等出土土器実測図④（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・213
第 140 図　5 次 1 区　出土石器・石製品実測図①（1/1・1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・215
第 141 図　5 次 1 区　出土石器・石製品②、土製品、玉類実測図（1/1・1/2）・・・・・・・・・・・・・・・217
第 142 図　5 次 1 区　出土鉄製品・青銅器実測図（1/1・1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・218
第 143 図　5 次 2 区　2 区遺構配置図（1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・220
第 144 図　5 次 2 区　7・8 号土坑実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・221
第 145 図　5 次 2 区　8 号土坑、4 号溝、ピット、SX01、風倒木痕、遺構面等出土土器実測図（1/3）223
第 146 図　5 次 3 区　遺構配置図（1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・224
第 147 図　5 次 3 区　90 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
第 148 図　5 次 3 区　90・92 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・227
第 149 図　5 次 3 区　91・92 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・228
第 150 図　5 次 3 区　６・７号溝土層実測図（1/30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
第 151 図　5 次 3 区　６号溝、ピット、遺構面等出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・229
第 152 図　5 次 3 区　道路状遺構実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・231
第 153 図　5 次 3 区　東壁及びトレンチ 1・2 土層実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・232
第 154 図　5 次 4 区　遺構配置図（1/300）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・232
第 155 図　5 次 4 区　西壁土層（1/30）・93 号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・233
第 156 図　5 次 4 区　93 号竪穴住居跡、遺構面等出土土器実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・233
第 157 図　久路土芝掛遺跡２次１号竪穴住居跡出土炭化材の暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・237
第 158 図　塔田琵琶田遺跡５次各竪穴住居跡出土炭化材の暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・238
第 159 図　カマド粘土の試料写真および植物珪酸体写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・243
第 160 図　カマド粘土薄片写真および拡大写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・244
第 161 図　カマド粘土の薄片拡大写真・・・245
第 162 図　1 区 30 号竪穴住居跡出土土器顔料付着状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・246
第 163 図　1 区 30 号竪穴住居跡出土土器の顔料分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・247
第 164 図　第５次調査区遺構変遷図（1/600）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・251
第 165 図　出土破鏡詳細観察写真・・・253
第 166 図　出土破鏡付着赤色顔料分析・・254

第 167 図　塔田琵琶田遺跡及び周辺遺跡の飯蛸壺（1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・257
第 168 図　カマド廃絶行為が認められるカマド（1/120・1/60）と参考カマド一覧表・・・・・・・・259
第 169 図　塔田五反田遺跡・塔田キカス遺跡遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・264
第 170 図　土層模式図（1/40）・・・265
第 171 図　塔田五反田遺跡１号掘立柱建物跡実測図（1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・265
第 172 図　塔田五反田遺跡出土土器実測図①（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・267
第 173 図　塔田五反田遺跡出土土器実測図②（1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・268
第 174 図　塔田五反田遺跡出土石器実測図（2/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・268
第 175 図　宇島鉄道盛土土層断面図（1/60）・・269
第 176 図　塔田キカス遺跡１号竪穴住居跡実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・269
第 177 図　塔田キカス遺跡出土土器・鉄製品実測図（1/2・1/3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・271
第 178 図　宇島鉄道路線図・・・272

表 目 次

第１表　県道犀川豊前線バイパス関係発掘調査地点一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｘii
第２表　第５次１～４区遺構一覧・対照表・・34・37
第３表　第５次１区出土特殊品一覧表・・219
第４表　放射性炭素年代測定試料一覧・・234
第５表　久路土芝掛遺跡２次竪穴住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定・暦年較正結果・・236
第６表　塔田琵琶田遺跡５次各竪穴住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定・暦年較正結果・238
第７表　植物珪酸体の産状・・・241
第８表　カマド粘土中の砂礫の種類構成・・241
第９表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道車両一覧・・275
第 10 表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道職員数・給与一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・275
第 11 表　宇島鉄道輸送量・損益推移・・275
第 12 表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道年間旅客数推移・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・276
第 13 表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道年間鉄道事業利益・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・276

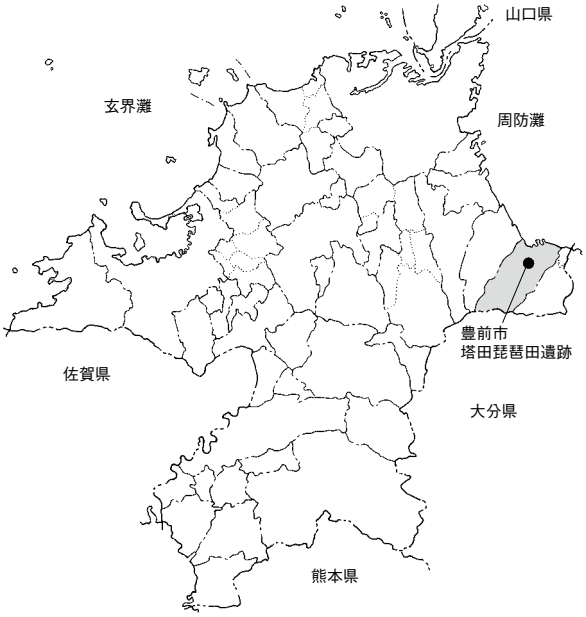
地点	遺跡名	所在地	試掘調査年度	発掘調査年度	発掘調査面積（㎡）	報告年度	調査主体	報告書シリーズ名	犀川豊前線BPシリーズ名
1	塔田五反田遺跡	豊前市塔田	H21	H25	1,000	H27	九州歴史資料館	県第252集	第2集
2	塔田キカス遺跡第2次	豊前市塔田	H25	H25	570	H27	九州歴史資料館	県第252集	第2集
3	塔田キカス遺跡第1次	豊前市塔田	H24	H25	630	H26	豊前市教育委員会	豊前市36集	－
4	久路土芝掛遺跡第4次	豊前市久路土	－	H25	229	H26	豊前市教育委員会	豊前市36集	－
5	久路土芝掛遺跡第2次	豊前市久路土	H21	H21	1,250	H24	福岡県教育委員会	県242集	第1集
6	久路土高松遺跡第2次	豊前市久路土	H21	H22	3,450	H24	福岡県教育委員会	県242集	第1集
7	塔田琵琶田遺跡第5次	豊前市塔田・久路土	H24	H24・25	2,743	H27	九州歴史資料館	県252集	第2集
8	塔田琵琶田遺跡第3次	豊前市久路土	－	H23	290	H27	九州歴史資料館	県252集	第2集

第１表　県道犀川豊前線バイパス関係発掘調査地点一覧（地点番号は第２図と対応）

Ⅰ　はじめに

１　調査に至る経緯

福岡県道32号犀川豊前線（以下「犀川豊前線」と略す。）は、福岡県道113号中津豊前線と交わる福岡県豊前市八屋から国道496号線と交わる京都郡みやこ町犀川帆柱へと至る主要地方道である。旧県道32号豊前甘木線の一部（野峠～みやこ町犀川帆柱間）が国道500号線として取り扱われることになったのに伴い、1993年４月に路線認定され、豊前市から求菩提山を経由してみやこ町域へと至るルートとして整備が行われてきた。



第１図　塔田琵琶田遺跡の位置

現在、犀川豊前線は国道10号線千束交差点から南の求菩提山麓へと延びた低丘陵である千束原台地の上を南北に走っているが、九州島の東側を南北に貫く高規格道路として整備が進められている東九州自動車道の豊前I.C.へのアクセス道路として、新たに現在の犀川豊前線の東側に並行し、国道10号線から延びるバイパスが計画された。

この計画に伴って、福岡県京築県土整備事務所（平成21年度は豊前土木事務所）から埋蔵文化財の有無に関する照会があり、平成21年度に試掘調査を実施し、２ヶ所で埋蔵文化財が確認されたため、平成21年度は久路土芝掛遺跡第２次調査、平成22年度は久路土高松遺跡第２次調査の発掘調査を福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。なお、整理作業は平成23年度より福岡県の埋蔵文化財調査業務が九州歴史資料館に移管されたため、平成24年度に整理・報告書作成業務を九州歴史資料館で実施した（小澤佳憲2013『久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡』福岡県文化財調査報告書第242集　九州歴史資料館）。

その後は京築県土整備事務所と九州歴史資料館が適宜協議を行い、用地買収が完了・協議が整った地点から試掘・確認調査を実施し、埋蔵文化財が確認された範囲の発掘調査を九州歴史資料館が実施した。平成23年度は塔田琵琶田遺跡第３次調査、平成24・25年度にかけて塔田琵琶田遺跡第５次調査、平成25年度は塔田キカス遺跡第２次・塔田五反田遺跡の発掘調査を実施した（第１表・第２図）。上記の平成23～25年度に発掘調査を行い、本書に掲載した遺跡の整理・報告書作業は、平成27年度に京築県土整備事務所の執行委任を受けて九州歴史資料館が実施した。（大庭）

２　調査の経過

塔田琵琶田遺跡第３次調査の経過

本地点に建設が計画された東九州道豊前インターチェンジ取り付き道路の工事については京築県土整備事務所が工事を行うこととなっていたが、その一方で、隣接地に建設されるインターチェンジ本体についてはネクスコ西日本㈱が工事を行う取り決めとなっていた。このため、塔田琵琶田遺跡の要調査範囲は当初から京築県土整備事務所が事業主体となる範囲とネクスコ西日本㈱が事業主体となる範囲とに分けられていた。両者の境界線は、ほとんどが既存の土地区画に則って設定されていたが、第２次調査Ⅰ区と第５次調査１区の境界部分にあたる用水路付近のみは、建設される予

定の施設の形状に従って一部が用水路より西側にはみ出すようにやや不定形に分けられていた。さらに、用水路の西側には、これに沿って南北に伸びる、未買収の用地への通行ルートとなっている里道があり、第２次Ⅰ区の調査を行う段階ではこの部分を幅５ｍほど残しておく必要があった。

第２次Ⅰ区の調査終了後、平成 23 年度の後半には未買収の問題も片付き、用水路の西側に残していた未調査範囲、約 290㎡を追加で調査することになった。対象地は幅５ｍほどでカギ括弧状に伸びており、そのうち半分弱ほどがネクスコ西日本㈱の事業予定地内に、また残り半分ほどが京築県土整備事務所の事業予定地内に含まれていた。

細長い対象地が事業主体ごとにさらに細長く分割される状況から、それぞれの事業範囲ごとに区切って調査を行うのは非効率的と判断されたため、表土剥ぎや埋め戻し作業については隣接するネクスコ西日本㈱整備事業地とあわせておこなうこととし、それぞれに応分の費用負担を求めることとなった。またこのため、検出遺構が第２次Ⅰ区と３次調査区にまたがってひろがる状況にあったが、２次調査ですでに番号を付した遺構の続きが一部３次調査の範囲にかかっているものについては、すべて２次調査の報告の中で述べている。したがって、ここでは３次調査で新たに検出した遺構についてのみ報告することとする。２次Ⅰ区調査の成果についてはすでに報告しているためそちらを参照されたい（小澤佳憲編 2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -22-』 九州歴史資料館）。

調査は平成 23 年 12 月７日より開始し、まず重機を用いた表土剥ぎ、続いて 12 日より作業員を投入して人力による調査に着手した。調査地の西側はすでに第２次調査Ⅰ区として調査を行っており、その成果を援用した結果、遺構面はⅠ区よりも数㎝高くなった。このため、Ⅰ区の調査において検出した遺構のいくつかとは壁の位置などが食い違うようなことにもなった。

旧状は水田であり、基本層位は最上位に耕作土層、その下位に水田床土（粘土質の客土）があり、その直下に黄白色の粘砂質土が広がっていた。付近は埋没台地の最も高い部分にあたり、クロボク土は削平され失われたものであろう。遺構の埋土は上層に存在したであろうクロボク土を主体とするため黒褐色を呈し、容易に地山との見分けがつく状況であった。

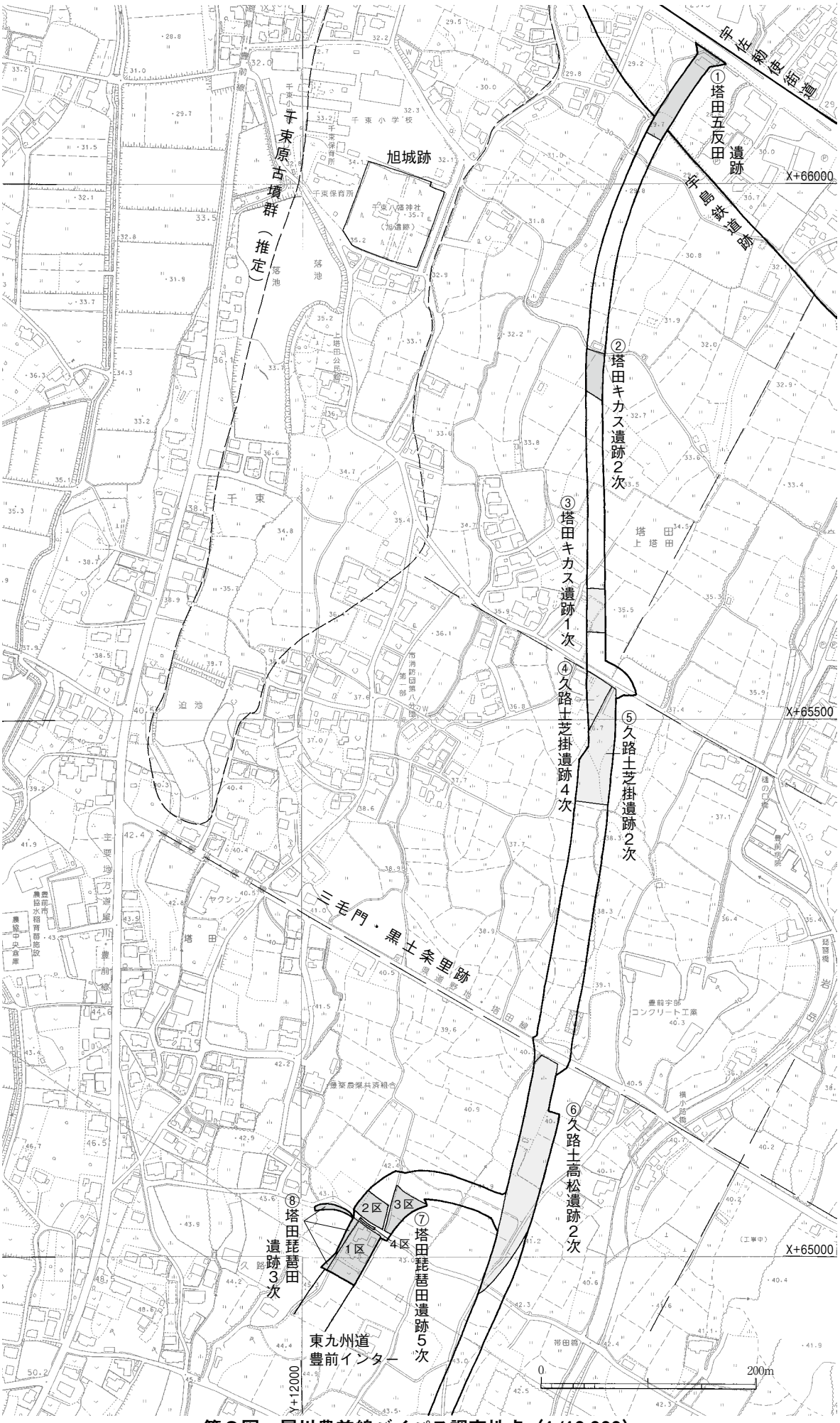
検出に並行して遺構埋土の掘り下げを進め、１月 26 日にはほぼすべての遺構を掘りあげて空撮を行った。その後、作図とダメ押しを行い、２月１日より９日まで重機を用いて埋め戻しを行い、調査を終了した。（小澤）

塔田琵琶田遺跡第５次調査の経過

平成 24 年度は犀川豊前線バイパス本線から東九州道豊前インターに枝分かれするアクセス道路の全ての用地買収が完了したため、平成 23 年度に発掘調査を実施した、道路予定地西端の第３次調査区以外の調査を実施した。まず東九州道第２次調査区及び第３次調査区の東側に隣接し、確実に遺構が展開することが予想された第５次調査区１区については、確認調査は実施せずに直接重機による表土剥ぎを開始した。

１区北側の２～４区及び４区東側の道路予定地については、７月 29・31 日に当館が確認調査を実施し、２～４区には遺構が広がること、４区東からバイパス本線（久路土高松遺跡第２次調査区）までの間は谷状地形が広がり、遺構が存在しないことを確認している。

１区は６月から表土剥ぎを開始し、７月５日から発掘作業員を投入し、遺構検出を行った。基盤土が火山噴火物由来の赤土が黒ボク化したもので、弥生～古墳時代の遺構はこの上面から切り込む



第２図　犀川豊前線バイパス調査地点（1/10,000）

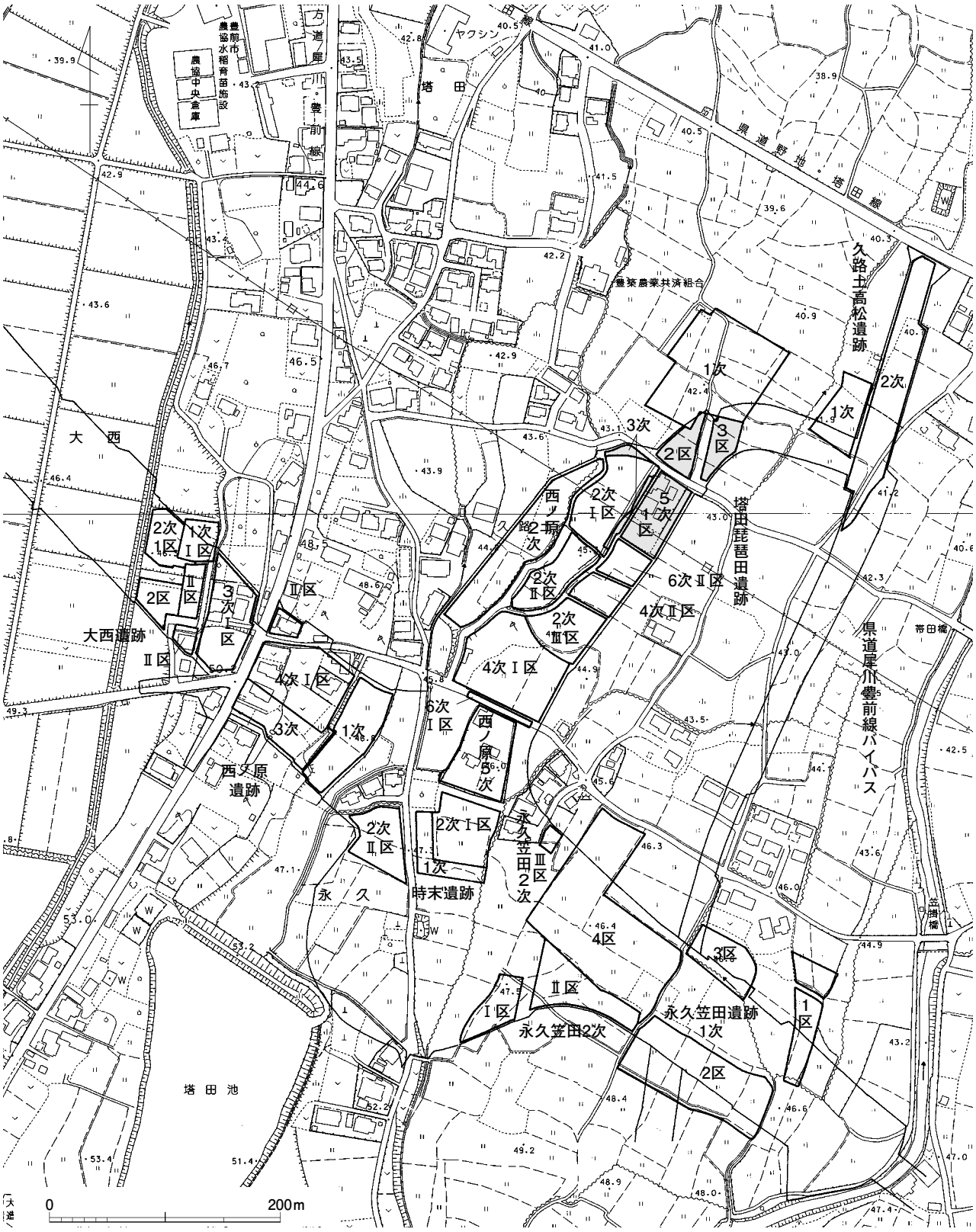
が、黒ボク土である地山と埋土の区別が非常に難しく、かつ多数の竪穴住居跡が切り合って存在したことから、遺構検出は難航した。そのため、まず１区を「コ」の字形に巡る近代の排水溝を掘削し、その壁で遺構の切り合い関係等を確認しながら遺構検出を進めた。

遺構検出は１ヶ月ほどかかったが、８月 10 日から１区北西の１～３号住居跡から遺構掘削を開始し、17 日には７号住居跡から破鏡が出土した。当初は現場用プレハブ及び駐車場は東九州道予定地に仮置きしていたが、その範囲の工事が年明けの１月から本格的に開始されることが決まったため、先の確認調査で遺構密度が薄いことが判明した２～４区の調査を先に終了させ、２～４区に作業ヤードを移設することになり、１区の調査を一旦中断し、８月 22 日から２区の表土剥ぎを開始した。27 日から２区の遺構検出を開始したが、１区より 60㎝ほど遺構面が低く、圃場整備時に上面が削平されていたため、検出できた遺構は予想よりかなり少なかった。９月 12 日に２区全体撮影を行い、２区の調査は終了した。２区終了後に１区のカマドを中心とする個別遺構の掘削と、２区東の３区の遺構検出を同時並行で行った。用地外である３区東側の畑耕作のため、調査区中央に畑の進入路を確保する必要があったことから、調査当初はこの進入路を境に南北に区分けして調査を行ったが、進入路下にも遺構が展開していたことから、最終的にはこの進入路を付け替えして全面調査を行った。３区は 10 月 19 日から遺構検出を開始した。また１区調査区北側は遺構の残りが良く、Ｌ字状カマドも集中していたため、調査に時間がかかった。10 月 23 日には職場安全巡視で、当館副館長以下関係職員の巡視を受けた。その後１・３区の調査を同時並行で進め、１区北半分と３区全体は 11 月２日に空中写真撮影を行った。11 月 12 日には佐賀大学文化教育学部重藤輝行准教授の視察を受けた。３区は進入路部分も含めて 11 月 16 日に調査は完了した。11 月 27 日には１区北半分の調査を終了した。28 日から重機による１区南半分の表土剥ぎと反転作業、その後２・３区は埋戻し作業を行った。12 月 13 日から１区南半分の遺構検出を開始したが、遺構密度は１区北半分と同様高く、遺構検出が難航した。17 日から遺構掘削を開始し、調査終了後埋め戻した２・３区に 12 月 25 日にプレハブ等の建機を移動した。

平成 25 年は１月９日から調査を再開した。１区と２・３区と隔てる市道部分にボックスを設置するため、現市道の北側に迂回路をつくって対応することになった。そのため、京築県土整備事務所及びボックス工事施工業者と協議を重ね、迂回路の供用開始からボックスを設置工事開始するまで数日の調査期間を確保することができた。この市道下の４区は、１月９日に表土剥ぎを行い、10 日に全体写真撮影、11 日に調査は完了し、施工業者に引き渡した。その後は引き続き１区南半分の掘削を行い、２月 14 日には九州大学人文科学研究院辻田淳一郎准教授の視察を受けた。

当初の計画では１区南東部の高まり部分の調査も平成 25 年度中に終了予定であったが、１区の遺構密度が予想以上に高いため、この部分のみ翌平成 25 年度まで調査を延長することで京築県土整備事務所と合意した。２月 28 日に１区南東部の高まり部分を除く、南半部の空中写真撮影を行った。遺物が多く出土したことから、３月 15 日にトラックで九州歴史資料館に遺物を移動した。３月 26 日に平成 24 年度の調査は一旦終了した。

平成 25 年度も引き続き１区南側の調査を行った。なお、人事異動により調査担当者が交代している。重機を用いた表土剥ぎは前年度中に終了しており、調査体制の整った５月中旬より作業員を投入して遺構検出作業を、またそれに引き続き遺構の掘り下げ作業を行う。調査は順調に進み、６月４日に空撮、その後作図とダメ押し作業を行い、６月 21 日に作業員を用いた現地作業を終了した。



第３図　塔田琵琶田遺跡１～６次調査区位置図（1/5,000）

引き続き重機を用いた埋め戻し作業を行い、６月 28 日にすべての現地作業を終了して京築県土整備事務所に引き渡した。（大庭・小澤）

塔田五反田遺跡・塔田キカス遺跡第２次の経過

平成 25 年６月に至り、それまで未買収であった 1.2km区間のうちの北半部の国道 10 号線に接す

る箇所の用地買収が一部を除き完了したことを受け、6月20日に試掘調査を行なった。その結果、遺構が確認されたため発掘調査を実施する必要が生じた（塔田五反田遺跡）。一方、南半分については湿地状になり重機の進入ができない状態で、水が抜ける秋頃をめどに試掘調査を行なうこととなった。当初、当該路線の未調査地については豊前市教育委員会が対応する予定であったが、東九州道関係の報告書作成など繁忙であることから、すでに市教育委員会が調査に着手していた南端部（久路土芝掛遺跡第4次・塔田キカス遺跡第1次）を除いて九州歴史資料館で実施することで協議が整った。

当時、東九州道については椎田南インターチェンジと豊前インターチェンジ間の用地問題が思うように進んでいない状況であった。そのため豊前インターが南からの末端インターになる可能性もあり、想定交通量の問題から速やかに調査を終了し、東九州道豊前インターの供用に合わせて当該路線を開通させる必要があった。

その後、未買収の民有地について発掘調査の承諾を得たことを受け9月20日に現地協議を行ったが、発掘調査に必要な作業ヤードの借地が難航していたため、京築県土整備事務所による調整を待って調査に着手することとなった。

発掘調査は上記の条件が整った10月10日から重機による表土剥ぎを開始し、16日に建機搬入、21日に作業員を投入し遺構検出を開始した。途中、路線の南側の未買収であった用地が解決した10月28日に試掘を行なったところ南半部で遺構が確認され、本調査対象地となった（塔田キカス遺跡第2次）。塔田五反田遺跡は調査対象地内で排土を処理する必要があり、まず、11月27日までに南側の調査を終わらせた後に塔田キカス遺跡の調査を行ない、その間に塔田五反田遺跡の反転を行なった。塔田キカス遺跡の遺構掘削は12月25日に終了し、翌日から塔田五反田遺跡の北半部の調査に着手した。そして、1月28日に両遺跡の空中写真撮影を行なった後、1月28・30日に機材及び建機を撤収して現地調査を完了した。（吉村）

3　調査・整理の組織

塔田琵琶田遺跡・塔田キカス遺跡・塔田五反田遺跡の発掘調査（平成23～25年度）および整理・報告書作成（平成27年度）の関係者は下記の通りである。

福岡県教育委員会	**平成23年度**	**平成24年度**	**平成25年度**	**平成27年度**
総括				
教育長	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠	城戸秀明
教育次長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治
理事兼総務部長				川添弘人
総務部長	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治	
副理事兼文化財保護課長				赤司善彦
文化財保護課長	平川昌弘	伊﨑俊秋	伊﨑俊秋	
企画係長	吉村靖徳	吉田東明	吉田東明	吉田東明
技術主査（地域担当）	宮地聡一郎	宮地聡一郎		宮地聡一郎
主任技師（地域担当）			大庭孝夫	

九州歴史資料館	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 27 年度
総括				
館長	西谷　正	西谷　正	荒巻俊彦	杉光　誠
副理事兼副館長				伊﨑俊秋
副館長	南里正美	篠田隆行	篠田隆行	
参事			飛野博文	飛野博文
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塩塚孝憲
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文		吉村靖徳
企画主幹（文化財調査室長補佐）			吉村靖徳	
技術主査（文化財調査班長）	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	秦　憲二
庶務				
企画主査	塩塚孝憲	長野良博	長野良博	中村満喜子
事務主査		青木三保	青木三保	宮崎奈已
			南里成子	西村知子
主任主事	熊谷泰容	近藤一崇		
主事	谷川賢治	谷川賢治	三好洸一	秦　健太
調査				
企画主幹（文化財調査室長補佐）			吉村靖徳	
技術主査		小澤佳憲	小澤佳憲	
主任技師		大庭孝夫		
整理報告				
企画主幹（文化財調査室長）				吉村靖徳
技術主査（学芸調査室調査研究班長）				小澤佳憲
技術主査				大庭孝夫
主任技師				小林　啓
				岡田　諭

なお、発掘調査及び整理報告にあたっては、福岡県京築県土整備事務所道路課建設係、西日本高速道路株式会社中津工事事務所、豊前市教育委員会教育課（現生涯学習課）、福岡県教育庁京築教育事務所社会教育室、京築管内の市町教育委員会の文化財担当者の皆様には様々な協力をいただいたほか、調査に参加された発掘作業員の皆様、地元の方々のご理解・ご協力をいただいた。この場をかりて深く感謝申し上げます。

文中写真１　現在の塔田琵琶田遺跡
（東から）

Ⅱ　位置と環境

１　地理的環境

本遺跡が所在する豊前市は、福岡県東端部、豊前中津平野の西側に位置する。東は築上郡吉富町・上毛町、西は築上町、南は大分県中津市に接し、北は周防灘に面する。旧国では豊前国に含まれ、面積約 110㎢、人口約２万７千人を擁する地方都市として、行橋市とともに福岡県東部の京築地域の中心的自治体である。

豊前市の南境にはおおむね大分県との県境でもある、犬ヶ岳・経読岳・雁股山・求菩提山という浸食の進んだ溶岩台地からなる山地があり、その山地から放射状に稜線が延び、また山地から流下する諸河川の堆積作用とその後の隆起・海退によって形成された洪積台地及び現在の扇状地、三角州等からなる低地が形成されている。なお、市域の約 70％が山地で、残り約 30％が低地を占める。

旧河川により形成された谷底平野を挟んで西側に位置する大西遺跡・西ノ原遺跡が立地する洪積台地（千束原台地）は、氷河期での海退時期に谷底平野を流れる旧河川の浸食が起こり、間氷期の海進が起こる期間には水没し、海底の砂・礫の堆積とが繰り返され、その後の土地の隆起により形成されたもので、現在でも東西の谷底平野とは浸食により約３ｍの段差が生じている。

本遺跡は標高 43 ｍ前後の扇状地上、第４図の地形分類図では岩岳・佐井川扇状地（黒土扇状地）に位置する。確認調査により本遺跡東側にも谷底平野が広がることが確認されており、本遺跡は谷底平野に東西挟まれた南北に延びた尾根状微高地に位置することがわかる（第６図参照）。この扇状地は岩岳川によって運搬された安山岩質の土砂からなる砂礫層が基盤層で、その上層は細粒ないしは粗粒の黄褐色に近い灰色低地土壌が分布し、黒ボクが埋没したところが多い。本遺跡の調査においても、基本的に一部黒ボクが埋没する黄褐色に近い灰色低地土壌が地山で、旧地形が高かった１区中央及び２区南西は基盤層の砂礫層が一部露出している状況であった。

引用文献

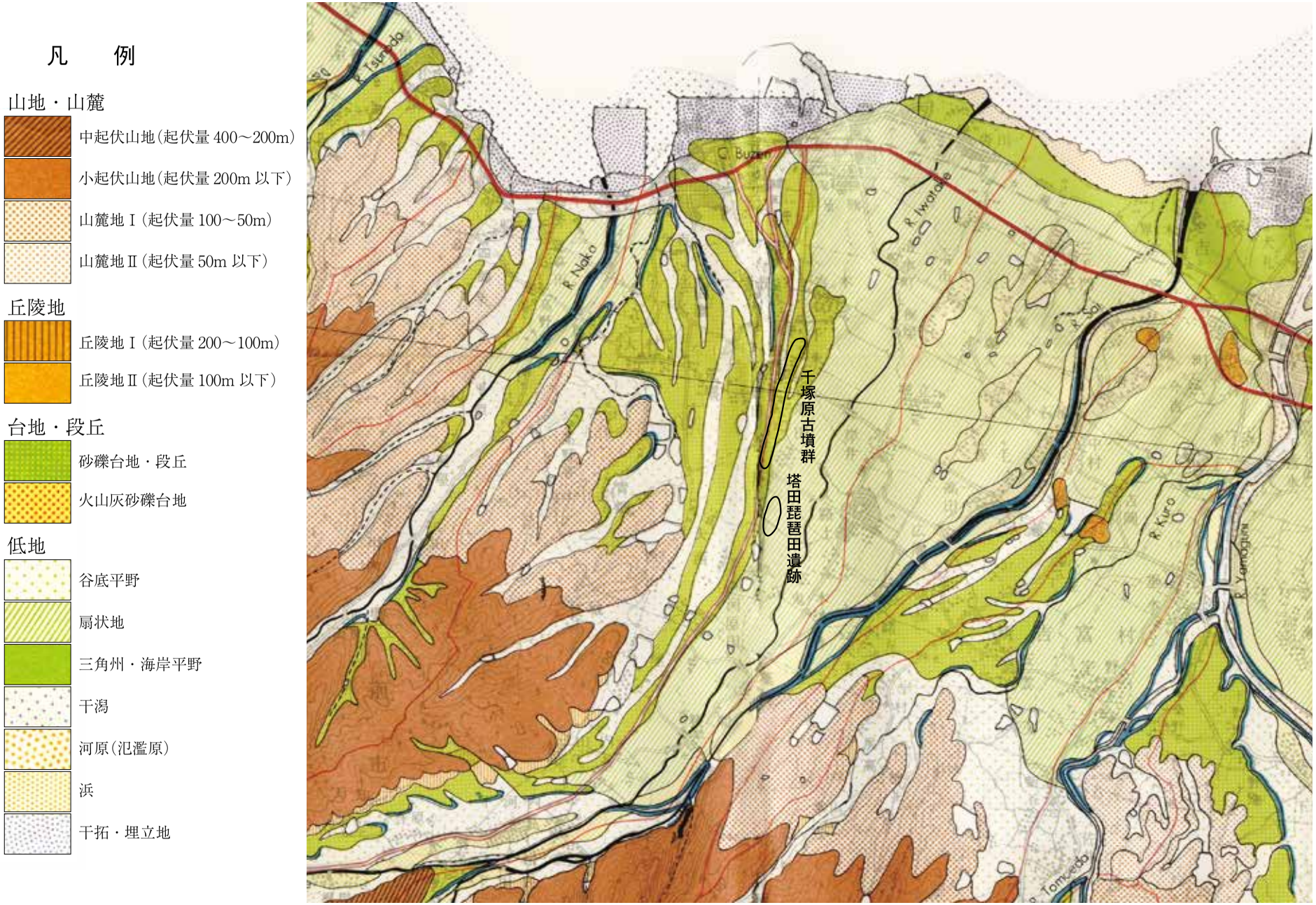
福岡県農政部農地開拓課編 1971『周防灘周辺開発地域土地分類基本調査　中津』

２　歴史的環境

本遺跡周辺では、昭和 60 年代から開始された圃場整備、平成５～７年の工業団地整備、また近年の東九州自動車道建設等の開発に伴い、数多くの遺跡の発掘調査が行われ、各調査報告書でその成果がまとめられている。本遺跡周辺の歴史的環境についてもそれらの調査報告書内でまとめられていることに加え、塔田琵琶田遺跡第２次（小澤佳憲 2015「Ⅱ位置と環境」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -22-』九州歴史資料館）及び今年度刊行予定の塔田琵琶田遺跡第４・６次調査報告書で、小澤佳憲氏が詳細に検討している。そのため、本遺跡周辺の歴史的環境については、詳しくはそれらの報告書ご覧いただくこととし、本書では簡潔に記述することとしたい。

旧石器時代

旧石器時代後期では、荒堀大保遺跡から出土した AT 上位併行とみられるナイフ形石器が市内では最も古く、続いて青畑向原遺跡で二次堆積ながらナイフ形石器・剝片尖頭器・角錐状石器・スクレイパー・細石刃など複数器種の石器が出土している。その他吉木芦町遺跡・下河内大水口遺跡でナイフ形石器、小石原泉遺跡・薬師寺塚原遺跡で角錐状石器が出土している。



第４図　遺跡周辺地形分類図（1/50,000）（『周防灘周辺開発地域土地分類基本調査 中津』を引用・改変）

縄文時代

市内では縄文時代草創期の資料は確認されていない。早期の川原田式土器が吉木遺跡から出土し、続く押型文土器が吉木常末遺跡・赤熊花ノ木遺跡でまとまって出土し、下河内桃ノ木遺跡・下河内歳手遺跡からも出土している。縄文時代前・中期の遺物は極めて少ないが、後期になると西和田式のドングリピット群が多数検出され、また鐘崎式併行期の竪穴住居を検出した小石原泉遺跡等遺跡が急増する。特に自然堤防上に位置する中村石丸遺跡では竪穴住居 10 棟からなる集落を確認しているが、挟間宮ノ下遺跡・川内楠木遺跡もほぼ同じ内容であるため、中村石丸遺跡で確認された集落は周防灘沿岸の後期集落の基本形と考えられる。晩期になると後期に比べ遺跡数が減少している。

弥生時代

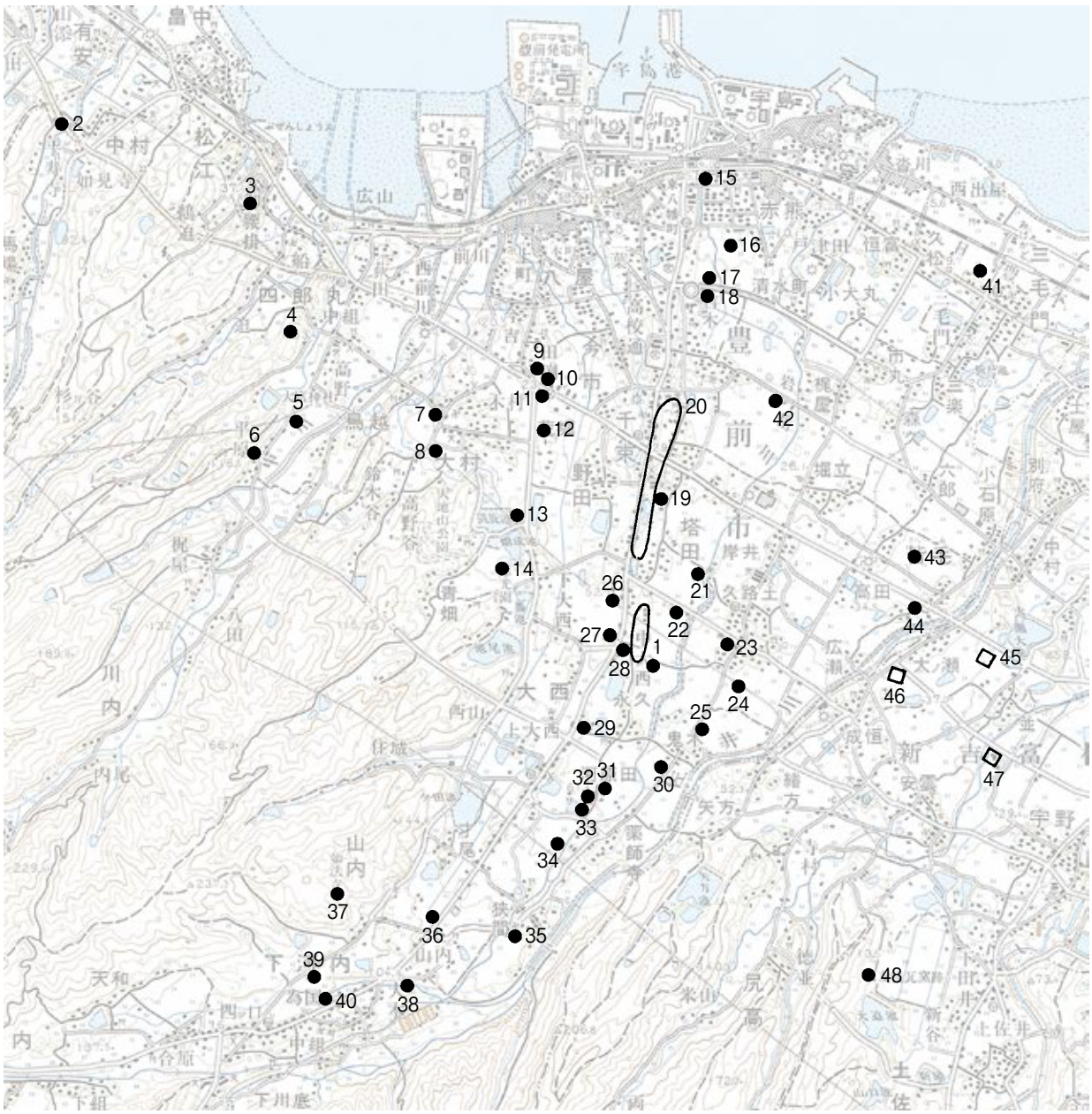
弥生時代早期の資料としては、出土土器から夜臼Ⅰ式併行期の円形住居である河原田塔田遺跡１号住居跡があるが、埋土上層に前期後半や中期前半の土器も混じっているため、早期かどうかは検討が必要である。前期の資料は少なく、表採資料として昭和町遺跡や永久遺跡・東風ノ風遺跡・開立寺遺跡などで土器が出土するが、前期後半～末のものである。弥生時代前期末～中期初頭になると遺跡は急激に増加する。鬼木四反田遺跡では、前期末～中期前半、中期末～後期を中心とする大規模な集落が確認された。検出された多数の竪穴住居から、住居形態の変遷は前期末～中期は円形プラン、後期は長方形プランが主体となることが確認されているが、後期に属するいわゆる「花弁形住居」である西区 24 号住居跡、西区 18 号住居跡は楕円形プランであることは注目される。また出土遺物では中期前半の銅鉇をはじめ、後期と考えられる銅鏃・中広形銅戈・小形仿製鏡が発見され、前期末～後期にわたって流域の拠点的な集落として存続していたと考えられる。

鬼木四反田遺跡から岩岳川を挟んだ対岸には、弥生時代中期初頭～中期後半の墳墓 54 基を検出した河原田塔田遺跡がある。河原田塔田遺跡の墳墓群は、土壙墓・配石土壙墓・箱式石棺からなり、祭祀土器群を伴う。土壙墓から細型銅戈切先が、その他磨製石鏃・ヒスイ製勾玉・碧玉製管玉が出土した。また河原田塔田遺跡西側で弥生時代前期末～後期初頭の集落である河原田善丸遺跡・河原田四ノ坪遺跡を確認しており、先の鬼木四反田遺跡も含めて、この河原田塔田遺跡の墓地を営んだ集団の集落域と考えられ、墓地と集落のセット関係がとらえることのできる貴重な資料である。

後期になると、さらに遺跡数が増加する。特に弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけて 160 棟もの竪穴住居を検出した小石原泉遺跡は、周囲に自然流路が巡り、環濠集落の様相を呈し、流路からは後漢鏡の破鏡が出土する。この小石原泉遺跡は弥生時代後期～中世まで継続する佐井川流域の拠点的な集落である。また鬼木鉾立遺跡では溝から銅矛の耳部が出土している。塔田琵琶田遺跡でも破鏡が２面出土しており、弥生時代～古墳時代前期で青銅器が出土した遺跡は佐井川～岩岳川流域に集中することが特徴である。ちなみに、市内出土の青銅器としては、本例で８例目にあたる。また塔田琵琶田遺跡から自然流路を挟んで西側の丘陵上に位置する西ノ原遺跡・大西遺跡では弥生時代後期後葉に掘削され、古墳時代前期に埋没したと考えられる環濠が調査されており注目される。

古墳時代

市内では本遺跡や小石原泉遺跡等古墳時代前期の集落は確認されているものの、前期及び中期の古墳は確認されていない。山国川左岸の河岸段丘上に位置する上毛町能満寺古墳群では前方後円墳である３号墳を含む前期古墳３基が確認され、同町唐原地区遺跡群では大規模な環濠集落が存在するすることから、古墳時代前期には唐原地区遺跡群を拠点集落とする山国川下流域の集団が本遺跡



1	**塔田琵琶田遺跡**	2	中村石丸遺跡	3	黒部古墳群	4	四郎丸窯跡	5	川内楠木遺跡
6	平原横穴墓群	7	大村天神林遺跡	8	大村石畑遺跡	9	荒堀大保遺跡	10	荒堀雨久保遺跡
11	荒堀車地遺跡	12	荒堀中ノ原遺跡	13	大村シトキ田遺跡	14	青畑向原遺跡	15	昭和町遺跡
16	赤熊花ノ木遺跡	17	吉木常末遺跡	18	吉木遺跡	19	旭城跡	20	千塚原古墳群
21	久路土芝掛遺跡	22	久路土高松遺跡	23	久路土六田遺跡	24	久路土鐘鐔田遺跡	25	鬼木鉾立遺跡
26	東風ノ風遺跡	27	大西遺跡	28	西ノ原遺跡	29	永久遺跡	30	鬼木四反田遺跡
31	河原田塔田遺跡	32	河原田善丸遺跡	33	河原田四ノ坪遺跡	34	薬師寺塚原遺跡	35	挟間宮ノ下遺跡
36	山内柳ヶ坪遺跡	37	如法寺	38	下河内桃ノ木遺跡	39	下河内歳手遺跡	40	下河内大水口遺跡
41	開立寺遺跡	42	吉木芦町遺跡	43	小石原泉遺跡	44	皆毛高屋代遺跡	45	大ノ瀬官衙遺跡
46	フルトノ遺跡	47	下島ヲカ遺跡	48	友枝瓦窯跡				

第５図　遺跡分布図（1/50,000）

周辺まで影響下に置いていた可能性がある。中期前半の集落は久路土芝掛遺跡・小石原泉遺跡等など少数であるが、中期後半～後期、特に後期後半～７世紀前半にかけて遺跡数が急激に増加する。小石原泉遺跡では、古墳時代後期を中心とするカマドを有する竪穴住居 97 棟のうち、28 棟でＬ字状カマドが確認され、また大壁住居とみられる３棟の掘立柱建物も発見されており、かつ鉄製品も多く出土していることなど、渡来系遺構・遺物が多く発見されていることは注目される。また荒堀中ノ原

遺跡では古墳時代後期～７世紀の竪穴住居と掘立柱建物等からなる集落、大村石畑遺跡では古墳時代後期と奈良時代の集落を発見し、いずれも飯蛸壺を含む漁労具が出土していることから、漁労活動も行っていることがわかる。市内の後期古墳は、線刻による文様が刻まれた６号墳を含む黒部古墳群や近年東九州道に伴い調査された径 15 m程度の円墳３基を検出した大村シトキ田遺跡、平原横穴墓群など非常に少ない。本遺跡北西の千束原台地上の千塚原古墳群は、旭城や宇島港の築港で破壊された古墳群と伝わっており、本遺跡を含む岩岳川・佐井川流域の集落の奥津城の可能性がある。

古代

古代では本地域は「上毛郡」になるが、観世音寺所蔵の７世紀末～８世紀初頭のものとされる梵鐘（国宝）にみえる「上三毛」は本地域を含む「上毛郡」をさすと考えられている。古代になると、前段階の古墳時代後期に比べ集落数や集落規模も小さくなる。本遺跡や小石原泉遺跡・大村石畑遺跡・久路土六田遺跡などで小規模な集落が営まれているが、いずれも竪穴住居は一辺３m以下と小型化し、カマドも住居隅に付設するものが多い。また上毛郡衙は上毛町大ノ瀬官衙遺跡、それに先立つ評衙はフルトノ遺跡に比定されている。市内では古代道路跡が小石原泉遺跡・荒堀大保遺跡・皆毛高屋代遺跡・久路土六田遺跡で確認されている。なお古代の官人層の存在をうかがわせる資料として、大村石畑遺跡で銅製鈸具、久路土鐘鐔田遺跡で石帯巡方、荒堀大保遺跡・永久遺跡で円面硯等が出土している。さらに古代官道南北の平野部、三毛門から本遺跡周辺の久路土にかけて条里遺構が遺存する（第２図）。大宝２（702）年の戸籍の戸籍として「上三毛郡塔里」「上三毛郡加自久也里」が正倉院に残っており、「上三毛郡塔里」は「塔田」に比定する説がある。その戸籍には渡来系氏族とされる「秦部」「塔勝」姓が大多数を占め、本遺跡の渡来系遺構との関係が注目される。

中世

市南西に位置する求菩提山は、12 世紀中頃に中興の祖とされる頼厳が入山し、修験道を導入したとされる。山内からは康治元（1142）年の銘を持つ銅板法華経・銅筥（国宝）、山頂付近からは多くの経筒が発見されている。山内柳ヶ坪遺跡では求菩提山護国寺の末寺である如法寺関連のものと考えられる 12 ～ 14 世紀の集落を検出している。また小石原泉遺跡で多数の掘立柱建物跡と溝等で構成される居館と中世墓を検出している。中世における本地域は、鎌倉時代に関東から城井郷（築上町）に地頭職として下向した宇都宮氏一族が支配しており、宇都宮一族である大村氏の居城である大村城関連遺構として、大村石畑遺跡で方形区画と掘立柱建物跡等からなる居館跡が、大村天神林遺跡で 16 世紀後半の茶道具と金箔付土師器皿が出土している。

近世

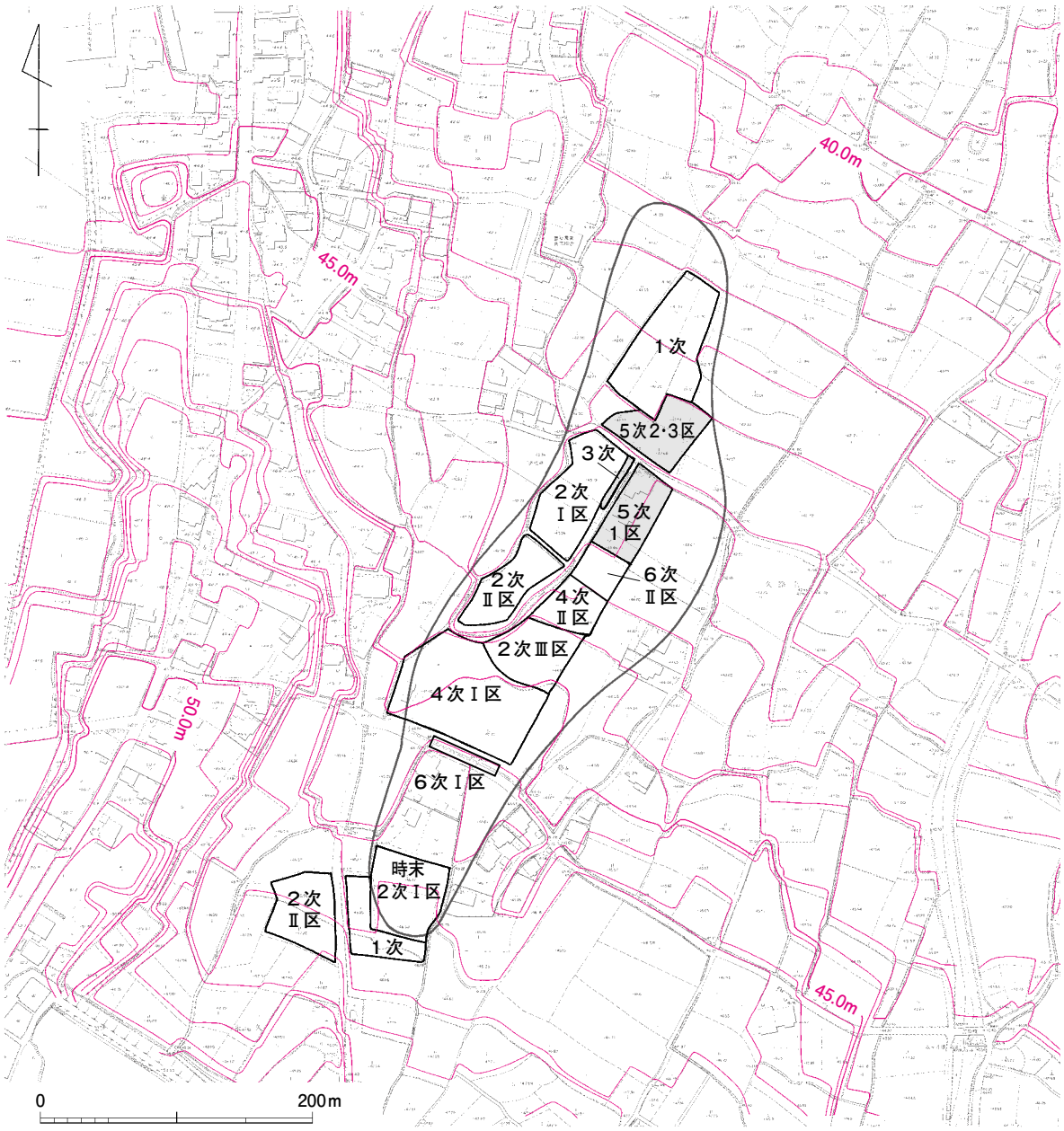
江戸時代になると、本地域は当初黒田・細川氏に支配されたが、寛永９（1632）年以降小笠原氏（小倉藩）が入部し、貞享２（1685）年に小倉新田藩の領地となり、黒土手永として幕末まで小倉新田藩による支配を受けた。明治２（1869）年に小倉新田藩は千束に藩庁を造営し、千束藩と改称した。藩庁である旭城は、明治２年から開始した日本で最後に築城された城郭で、２年２ケ月で廃城となる。現在は千塚原古墳群の石室を利用したとされる高さ２mほどの石垣と馬場が残る。

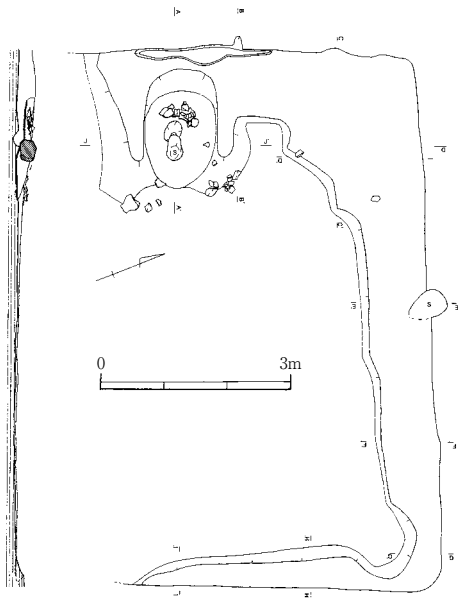
引用・参考文献

2004『福岡県の地名』日本歴史地名大系第 41 巻　平凡社

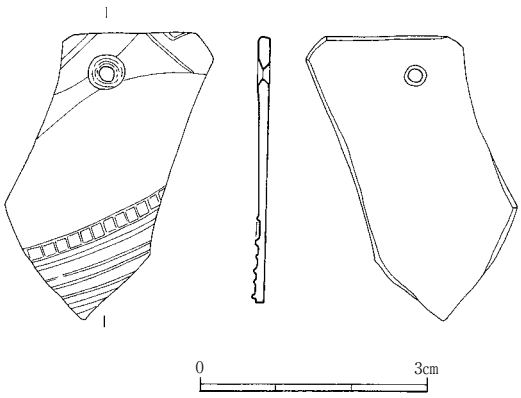
豊前市教育委員会 2005『ぶぜん黎明』2005 求菩提資料館秋の特別展展示図録

※なお、各遺跡の調査報告書については、省略している。





1次住18カマド（1/120）



2次住66出土破鏡（実大）

第６図　塔田琵琶田遺跡等関係図（1/5,000、1/120、1/1）

３　塔田琵琶田遺跡及び関連遺跡の既往の調査

本遺跡の範囲は、塔田琵琶田遺跡第２次調査報告書で圃場整備前の図面等を使用して詳細に検討している（第６図）。まず遺跡西側は東の千束原台地上に立地する西ノ原遺跡とを隔てる谷部の痕跡である南北方向に流れる用水路で区切られる。この用水路東側には千束原台地よりも５～７m程度標高が低い、東西幅 90 ～ 100m、南北長さ 500m ほどの細長い尾根状微高地が伸びており、この上のほぼ全面に古墳時代の集落跡を中心とする本遺跡が展開する。

この微高地上に広がる遺跡の範囲は大規模かつ複数の行政区にまたがることから、埋蔵文化財包蔵地としては、北側の大部分が塔田琵琶田遺跡、南側が西ノ原遺跡第５次及び時末遺跡第１・２次という複数の遺跡名が付与され、これらの遺跡名で発掘調査が行われている。本書でも第２次調査の検討結果にならい、これらがすべて同一遺跡であると見なして、「塔田琵琶田遺跡群」という名称で呼ぶこととしたい。

以下では、塔田琵琶田遺跡群の既往の調査成果について概要を記す。

●塔田琵琶田遺跡第１次調査

遺跡の北端にあたる地点で、県営圃場整備事業に伴い、平成 11 年度に豊前市教育委員会が東区約 3,000㎡、西区約 6,000㎡の計約 9,000㎡発掘調査を実施した。

東区では、平安時代後期～鎌倉時代の灌漑用水路とされる溝５条とピット 200 基余り、土坑 10 基（詳細不明）を検出し、集落の縁辺部と位置付けられている。西区では、弥生時代末～古墳時代前期・古墳時代中～後期を中心とする竪穴住居跡 30 棟、柵列２基、焼土坑２基、土壙墓１基、土坑 21 基、溝３条、ピット 400 基余りを検出した。

集落の変遷においては、２本主柱穴で、三方壁にベッド状遺構を付設した７号住居跡が古墳時代前期前半、２本主柱穴でベッド状遺構を付設しない 11 号住居跡等古墳時代前期～中期前半まで小規模な集落が営まれている。５世紀後半～６世紀後半にかけて集落が急激に拡大し、多数の竪穴住居が西区の北西を中心に形成されている。

特にカマドを有する竪穴住居 19 棟のうち７棟がＬ字状カマドという高い割合を占め、豊前市内でＬ字状カマドの出現が５世紀後半まで遡る最初の事例となった。18 号住居跡カマドはＬ字形カマドであるが、住居１／２程度煙道が住居を巡る、まさしく「オンドル状遺構」といえる内容であることは注目される（第６図）。

・坂梨祐子編 2011『塔田琵琶田遺跡』豊前市文化財報告書第 29 集　豊前市教育委員会

●塔田琵琶田遺跡第２次調査

遺跡中央～西側にあたる地点で、東九州自動車道建設に伴い、平成 23 年度に当館が約 2,800㎡の発掘調査を実施した。

第２次調査では、主に古墳時代前期と中期後半～後期の２時期の多数の竪穴住居からなる集落を確認した。古墳時代前期の遺構は竪穴住居跡 30 棟、土坑５基、土壙墓１基等を検出した。竪穴住居は平面形が方形に近い長方形がほとんどで、主柱穴は２本柱か４本柱、ベッド状遺構は持つもの、持たないものなどバリエーションが認められる。遺物では古墳時代前期後半～中期前半に埋没したと考えられる 66 号住居跡の埋土中から内行花文鏡の破鏡（第６図）が出土しており、長期間の伝世が見込まれることは注目される。

５世紀後半～６世紀後半の遺構は竪穴住居跡 46 棟、掘立柱建物跡１棟、方形竪穴状遺構１基等を検出した。竪穴住居はカマドを有する 32 棟のうち、19 棟がＬ字状カマドという非常に高い割合を示している。遺物では、多くの鉄製品が出土しており、鉄滓も竪穴住居内から出土していることから、集落内での鍛冶の存在が指摘されている。

・小澤佳憲編 2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-22- 塔田琵琶田遺跡第２次』　九州歴史資料館

●塔田琵琶田遺跡第３次調査（本書所収）

●塔田琵琶田遺跡第４次調査

遺跡中央の２ヶ所に分かれた調査区で、東九州自動車道建設に伴い、平成 24 年度に当館が約 5,000㎡の発掘調査を実施した。調査報告書は平成 27 年度末刊行予定である。

第４次調査では、第１・２次調査で確認されている主に古墳時代前期と中期後半～後期の２時期に加え、８世紀代の竪穴住居も含む竪穴住居跡約 150 棟で構成される集落を確認した。８世紀代の竪穴住居は小型で、住居隅に隅カマドを持つものが多く発見されたことは注目される。また遺物では多数の鉄製品に加え、流路から滑石製玉作り関連遺物が発見されている。

●塔田琵琶田遺跡第５次調査（本書所収）

●塔田琵琶田遺跡第６次調査

遺跡中央と南と２地点に分かれており、東九州自動車道建設に伴い、平成 25 年度に当館が約 440㎡の発掘調査を実施した。調査報告書は平成 27 年度末刊行予定である。第６次調査では、既往の調査と同様、主に古墳時代前期と中期後半～後期の２時期にわたる竪穴住居跡約 24 棟を確認した。

●時末遺跡第１次調査

遺跡南端にあたる地点で、東九州自動車道建設に伴い、平成 23 年度に当館が約 1,000㎡の発掘調査を実施した。調査報告書は平成 27 年度末刊行予定である。第１次調査では、古代以降と考えられる土坑 20 基、溝１条を検出し、調査区西側は谷から縄文時代後期～古代の遺物が出土した。

●時末遺跡第２次調査

遺跡南端にあたる２ヶ所に分かれた地点で、東九州自動車道建設に伴い、平成 24 年度に当館が約 1,300㎡の発掘調査を実施した。調査報告書は平成 27 年度末刊行予定である。第２次調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡２棟、古墳時代後期の竪穴住居跡４棟、古代の竪穴住居跡１棟、また古代～中世と考えられる掘立柱建物跡２棟、土坑 20 基、溝２条を確認した。

●西の原遺跡第５次調査（Ｄ区）

遺跡の南側、本遺跡第４次調査区と時末遺跡第１・２調査区に挟まれた地点で、東九州自動車道建設に伴い、平成 23 年度に豊前市教育委員会が約 1,230㎡の発掘調査を実施した。

検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴住居４棟と古墳時代中期前半の可能性がある竪穴住居跡１棟、時期不明の焼土坑１基・土坑 10 基である。竪穴住居のカマドは全て西壁に付設されている。遺物では古墳時代中期～後期の土器のほか、縄文時代早期･後期の土器が比較的多く出土しており、付近に縄文時代の遺構が存在する可能性を示している。

・棚田昭仁 2015『西ノ原遺跡』豊前市文化財報告書第 37 集　豊前市教育委員会

Ⅲ　塔田琵琶田遺跡調査の報告

１　塔田琵琶田遺跡の概要

塔田琵琶田遺跡は、福岡県豊前市塔田・久路土に位置する。本遺跡は豊前市のほぼ中央、東に岩岳川、西に県道犀川豊前線が通る千束原台地が存在する。本遺跡は1976年の遺跡分布地図（福岡県教育委員会1976『福岡県遺跡等分布地図（豊前市・築上郡編）』）で三毛門黒土条里跡（県遺跡番号150069）として初めて埋蔵文化財包蔵地として登録された。その後平成11年に圃場整備に係る試掘調査で遺跡が発見され、豊前市教育委員会によって発掘調査が実施されている（第１次調査）。豊前市刊行の遺跡分布地図では、塔田琵琶田遺跡（市遺跡番号150156）として登録されている（豊前市教育委員会2000『豊前市内遺跡分布地図』）。

第２次調査報告書で行われた圃場整備前図面の田面標高による旧地形の復元によると、圃場整備前の水田地割はその後の開発により埋没した微地形を反映しており、本遺跡は南北に伸びる尾根状微高地上に立地し、その範囲は南北約500ｍ、東西100ｍほどになり、南端では時末遺跡の一部まで含むことが分かる（第６図）。また県道犀川豊前線に伴う第３・５次調査区はほぼ遺跡中央にあたる。

第２・６図の通り、調査次数ごとに区分けを行っている。また各調査次数内で調査工程上及び道路や水路で調査区内が区切られた場合は、小区分けを行っている。５次調査区では、中央に現道が存在していたことから、現道を境に南端は１区、現道下を４区、北西を２区、北東を３区と計４つの調査区に分割して、調査を行い、報告も区分けをして行う。

２　塔田琵琶田遺跡第３次調査の報告

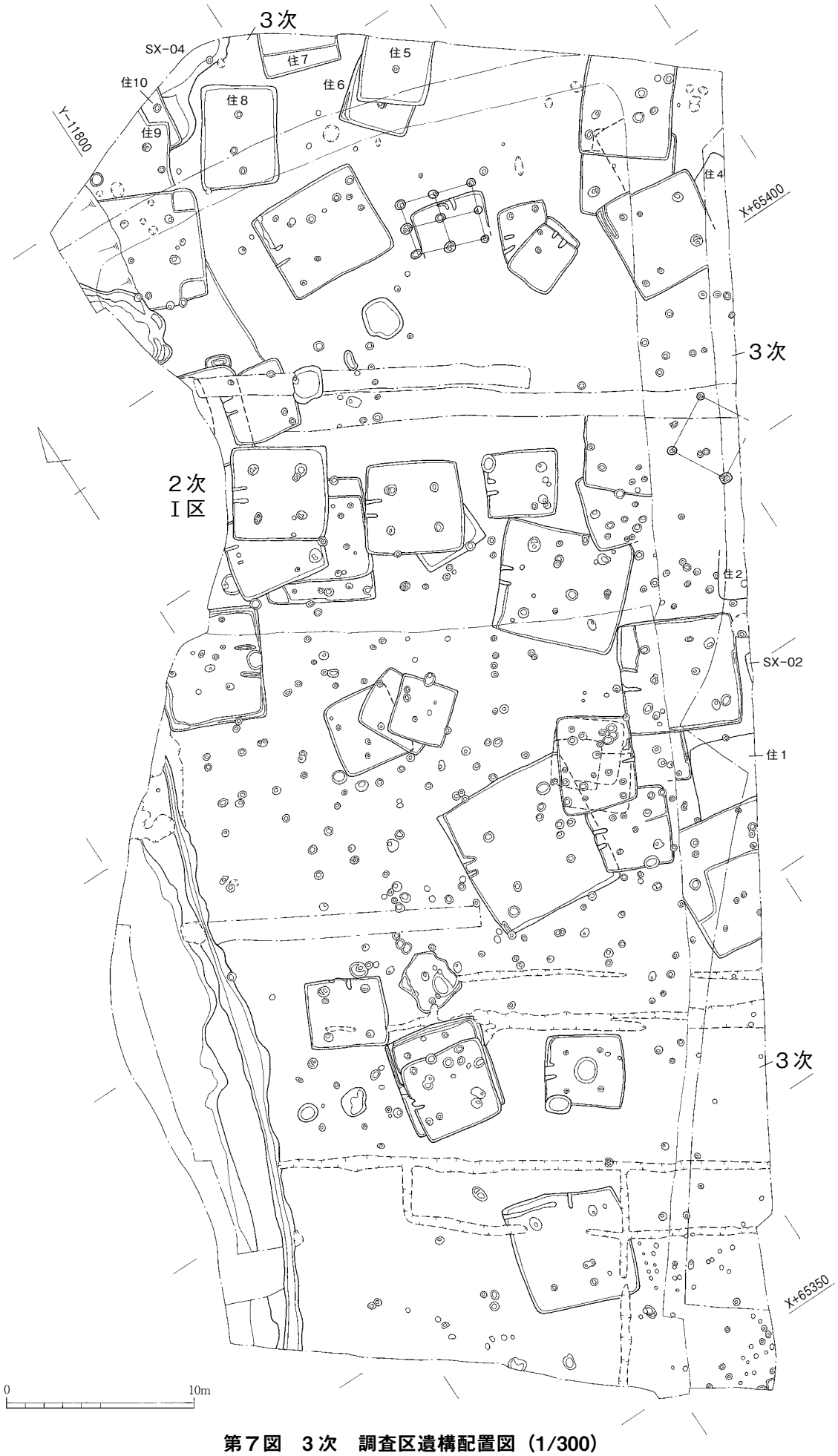
（１）調査の概要

塔田琵琶田遺跡は、福岡県豊前市塔田から、同久路土にかけてひろがっている。このうち第３次調査は、豊前市久路土90–１、91–１～３の各筆のそれぞれ一部を対象として行った。各筆ともに旧状は水田であった。前述のように、塔田琵琶田遺跡第３次調査は、第２次Ⅰ区・Ⅰ区補足調査の隣接地にあたる。第２・３次調査区は事業主体の境界ラインによって不定形にわけられ、カギ括弧状を呈する（第７図）。調査面積は290㎡であった。

第３次調査区は、第２次調査区の北側と東側の残置部分にあたる。したがって、平面形状はカギ括弧状を呈し、北側に位置する東西に細長い部分と、東側に位置する南北に細長い部分からなる。コーナー部分は一部断絶している。第２次調査区との境界は、既存の土地区画ではなく、建設予定のインターチェンジ・取り付き道路の施設形状に則っているため、一部で不定形状を呈する。旧状は水田であり、基本層序は最上位に水田耕作土、その下層には水田床土が見られた。おそらく床土は客土であろう。

水田床土の下が遺構面である。地山は火山灰堆積層からなる。削平深度の浅い部分では、この地山の風化により形成された黒ボク土が残るが、調査区付近は埋没台地の中央部付近にあたり、もとはやや高かったようで、比較的深部にまで削平が及んでおり、黒ボク土は削平されて失われている。したがって、地山は火山灰堆積土の深部にみられる黄白色粘砂質土で、火山弾由来の風化した小礫（腐れ礫）をしばしば含む。北部ではさらに下層にあたる砂礫土が露出する部分もある。

遺構埋土は、本来上層に存在したであろう黒ボク土由来の暗～黒褐色粘砂質土で、しばしば焼土



第７図　３次　調査区遺構配置図（1/300）

や炭化物を含み、比較的判別しやすい。ただし、遺構同士の切り合い関係は認識しがたい場合が多い。

検出した遺構は、竪穴住居跡が９棟、谷状の落ち込み遺構であるSX-04のほか、ピット多数である。なお、ほかに１箇所で竪穴住居跡の床面の可能性のある硬化面を検出し、当初これを３号住居跡としていたが、主柱穴を検出できなかったため欠番としている。以下、個別の遺構について詳細を述べていこう。

（２）竪穴住居跡

本調査区は第２次調査Ⅰ区に隣接しており、多くの遺構がこの調査区から本調査区に向かって広がっている。竪穴住居跡もその多くは両調査区にまたがるが、第２次調査時に番号を振ったものは先だって報告しており、ここでは第３次調査の段階で把握できた住居跡のみを報告する。調査区が狭く、また削平を受けているため、遺構の残りは悪く、断片的な検出にとどまっていて遺構の性格にやや疑問が残るものもあるが、一応調査時の認識にしたがって計９棟の竪穴住居跡の可能性のある遺構を報告する。なお、３号住居跡は欠番である。

１号竪穴住居跡（図版３、第８図）

南北に長く伸びる東側調査区の中央部付近で検出した。２次調査16号住居跡に南側を大きく破壊され、また東側は調査区外に伸びていて、調査区内で検出できたのは北西コーナー部付近のみである。主軸方位は西北西－東南東で、検出範囲での規模は東西4.0m、南北3.5mほどをはかる。残存深さは10㎝以下で、大きく削平されている。カマドや炉跡などは検出されなかった。西壁に周壁溝をめぐらせるが全周はしない。床面には広く硬化面が形成され、貼床はほぼ認められない。床面からはいくつかのピットが検出されたが、そのうち３基を主柱穴の候補として図示した。うち北東側の１基はやや浅く、主柱穴ではないかもしれない。

出土土器は古墳時代前期後半頃に比定され、これが本遺構の埋没時期となろう。

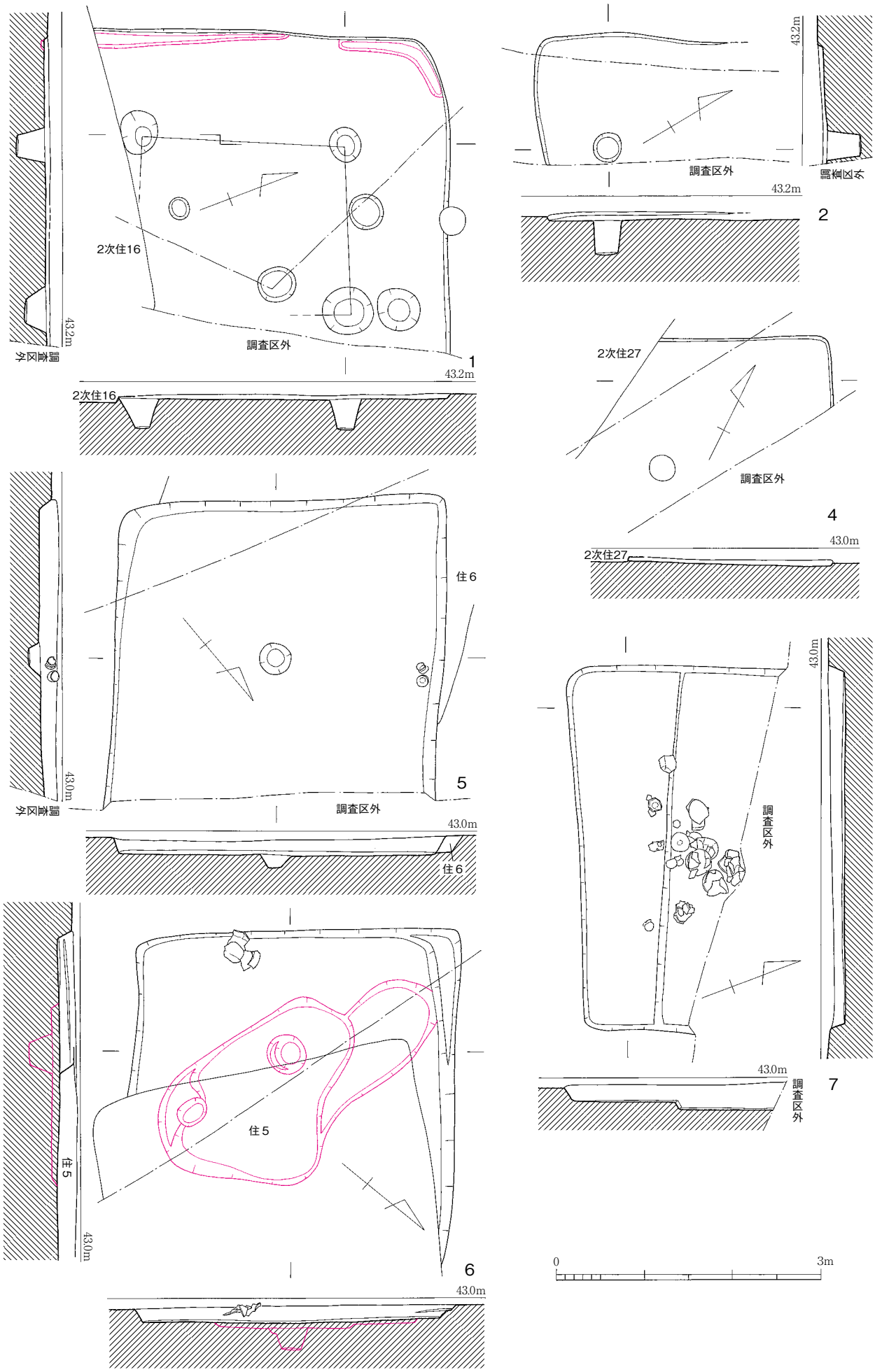
出土遺物（第９図１～４）

弥生土器（１）　１は二重口縁壷の口縁部片である。頸部は締まりが弱く短い。屈曲部は明瞭で外側が突出し、口縁部は直線的に内傾する。床面下層から出土した。

土師器（２～４）　２は壷型土器の頸部片である。頸部はやや弱く締まりゆるやかに屈曲する。口縁部は失われていて細分器種は特定できない。器壁調整は胴部外面がハケ目、内面はケズリ、頸部から上は内・外面ともにナデ仕上げ。３は高坏の坏部片か。口縁部付近のみが残る。口縁部はわずかに内湾しながら斜めに開き、端部をわずかに外に開く。器壁調整は内・外面ともにナデ。４は高坏の脚部片である。斜めに下方に伸び、明瞭に屈曲して強く開く器形を持つ。脚端部はやや内湾する。以上の資料は、１を除いておおよそ４世紀後半頃に属すると考えられる。

２号竪穴住居跡（第８図）

南北に伸びる東側調査区の中央やや北寄りで検出した。主軸方位を北西－南東にとる住居跡で、南・西壁を検出したが、残存深さは数㎝程度と著しく削平されており、北壁側は削平により完全に失われている。また東壁は調査区外に伸びており、規模は不明である。他遺構との切り合い関係はない。検出できた範囲での大きさは、南北2.2m、東西1.4m程度である。床面からは柱穴を１基



第８図　３次　１・２・４～７号竪穴住居跡実測図（1/60）

検出した。主柱穴にしてはやや位置が南壁に寄るが、深さは40㎝ほどとしっかりした掘方を持つ。出土土器はなく、時期は不明。

４号竪穴住居跡（第８図）

南北に伸びる東側調査区の北部で検出した。2次27号住居跡と切り合い、本住居跡の西側が大きく破壊される。また、東・南側は調査区外にひろがっており、北東コーナー部から北壁にかけて検出できたに過ぎない。なお、南壁付近は大きく削平されて失われている。主軸方位は北北西－南南東にとり、残存部分の規模は北壁の延長が1.9m、東壁の延長が0.8mをはかる。深さはきわめて浅く数㎝程度である。床面から深さ30㎝ほどのピットを１基検出している。北壁から1.2m、西壁から1.7mほど離れており、主柱穴となる可能性はあるが断定はできない。出土土器は土師器の細片が数点のみで図示できるものはない。

第２次調査27号住居跡が６世紀前葉に比定されることから、本遺構はこれより古い時期に属すると考えられるが、詳細は不明である。

５号竪穴住居跡（図版３、第８図）

東西に伸びる北側調査区の中央部で検出した。南側で６号住居跡を破壊し、北側は調査区外にひろがる。主軸方位は北西－南東にとり、規模は幅が3.54m、長さは不明ながら検出範囲では3.3mほどをはかる。深さは15㎝ほどとやや残りのよい遺構である。床面からは小形のピットを１基検出したが、主柱穴とは評価しがたい。ほかに炉跡なども検出できなかった。埋土中からは完形に近いものを含めパンケース１箱分ほどの土器が出土したが、大半は床面から浮いており、住居廃棄時の投棄であろう。出土土器から、古墳時代前期の遺構と考えられる。

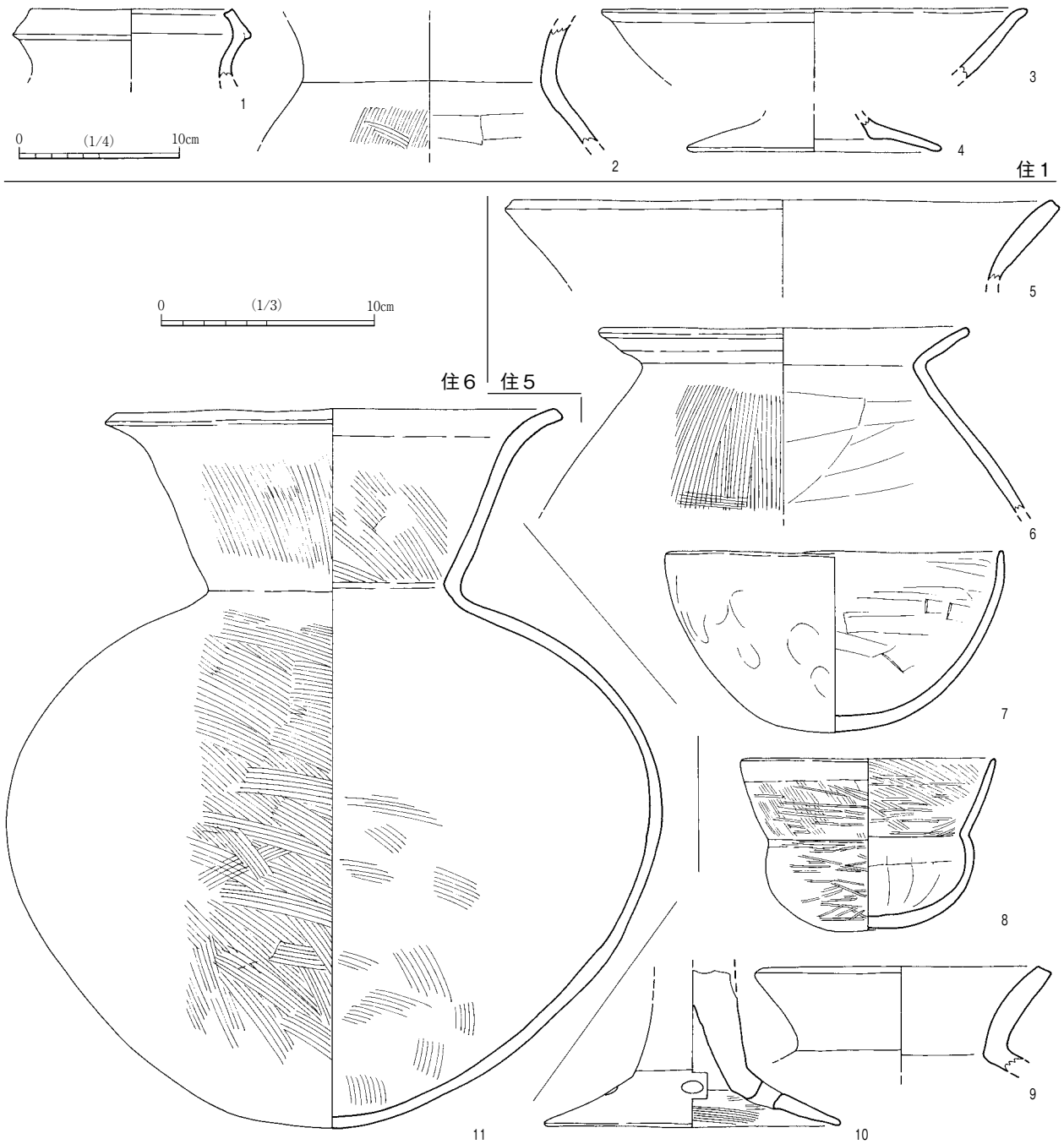
出土遺物（図版５、第９図５～10）

土師器（５～10）　５は大型の甕の口縁部片か。わずかに外湾しながら短く開き、端部を四角く収める。器壁調整はナデ。６は甕の胴上位～口縁部片である。胴部上位はやや直線的に内傾し、頸部で明瞭に屈曲して口縁部は短く強く開く。口縁部外面には指ナデの単位がよく残り、布留式甕の特徴が見られる。胴部の器壁調整は内面がケズリ､外面がハケ目。７は碗である。球状の体部を持つ。器壁外面には指頭圧痕が残り、内面は工具によるナデにより仕上げる。８は小型丸底壷である。体部は平たくつぶれた球状で、頸部で明瞭に屈曲する。口縁部はやや長く、わずかに内湾しながら開く。器壁は体部外面・口縁部内外面を細いヘラ状工具でミガいており、精製器種である。９は直口壷の口縁部である。頸部は強く締まり、口縁部は短く開く。10は高坏の脚部片である。直線的にやや開きながら伸び､中位で屈曲して強く開く。屈曲部はやや丸みを帯びる。屈曲部に穿孔があり、残存部から復元して４孔となると思われる。

以上の資料は古墳時代前期、４世紀中葉頃に位置づけられる。

６号竪穴住居跡（図版３、第８図）

東西に伸びる北側調査区の中央部で検出した。５号住居跡に北側を大きく破壊されている。主軸方位は北東－南西にとり、東西幅は3.42mをはかる。北壁が５号住居跡により破壊され完全に失われているため、南北長は不明だが、残存長は3.3mほどをはかる。深さは25㎝程度と比較的残り



第９図　３次　１・３・５・６号竪穴住居跡出土土器実測図（１は 1/4、他は 1/3）

がよい。床面下に不定形の掘り込みがあり、掘り込みの下層から直径 40cm、深さ 30cmほどのピットを１基検出した。主柱穴であれば２本主柱の住居跡となろうが、床面では気づけなかったのでやや疑問は残る。ほかにピット等は検出できていない。埋土中からはいくつかの土器が出土したがいずれも床面から浮いており住居廃棄時の投棄であろう。出土土器より古墳時代前期の遺構と考えられ、本遺構を切る５号住居跡と近い時期の遺構であろう。

出土遺物（図版５、第９図 11）

土師器（11）　11 は直口壷である。住居跡の西壁付近で床面よりはわずかに浮いた状態でまとまって出土したもので、ほぼ完形に復元できた。胴部はややつぶれた球状を呈し、底部はわずかに尖底状を呈する。頸部は強く締まって明瞭に屈曲し、口縁部はわずかに内湾しながら斜めに開いて端部を強く外湾させる。布留式の範疇に含まれる資料である。

７号竪穴住居跡（図版３、第８図）

東西に伸びる北側調査区の中央やや西寄りで検出した。半分以上が北側の調査区外にひろがっている。主軸方位は西北西－東南東にとり、規模は東西長が南壁側で 3.98m をはかり、南北幅は検出できた範囲で 2.3m ほどをはかる。残存深さは最大で 30㎝ほどと深く、比較的残りがよい。南壁沿いに幅 80 ～ 120㎝ほどのベッド状遺構を地山掘り込みで形成する。床面からは主柱穴や炉跡などは見つかっていない。埋土には略完形の土器が多く投棄されていたが、そのほとんどは床面より浮いており、住居廃棄時の投棄であろう。

出土土器から、古墳時代前期に位置づけられる。

出土遺物（図版５、第 10 ～ 12 図）

土師器（１～ 33）　１～３は直口壷である。いずれも全形を復元できる資料である。１・３は胴部がやや扁平な球状、２は胴部がわずかに細長く底部が尖り気味の形状を持つ資料で、ともに頸部はしっかりと締まり明瞭に屈曲する。口縁部は１が直線的に開き、２はやや外湾しながら開き、３は短く直立気味に伸びるもので３者がそれぞれの形状を持つ。器壁調整は１が胴部外面にタタキの痕跡を残す。２・３は外面がハケ目調整で、口縁部内・外面もハケ目が認められる。２の内面は胴部下半がケズリ、中位はナデ仕上げ。

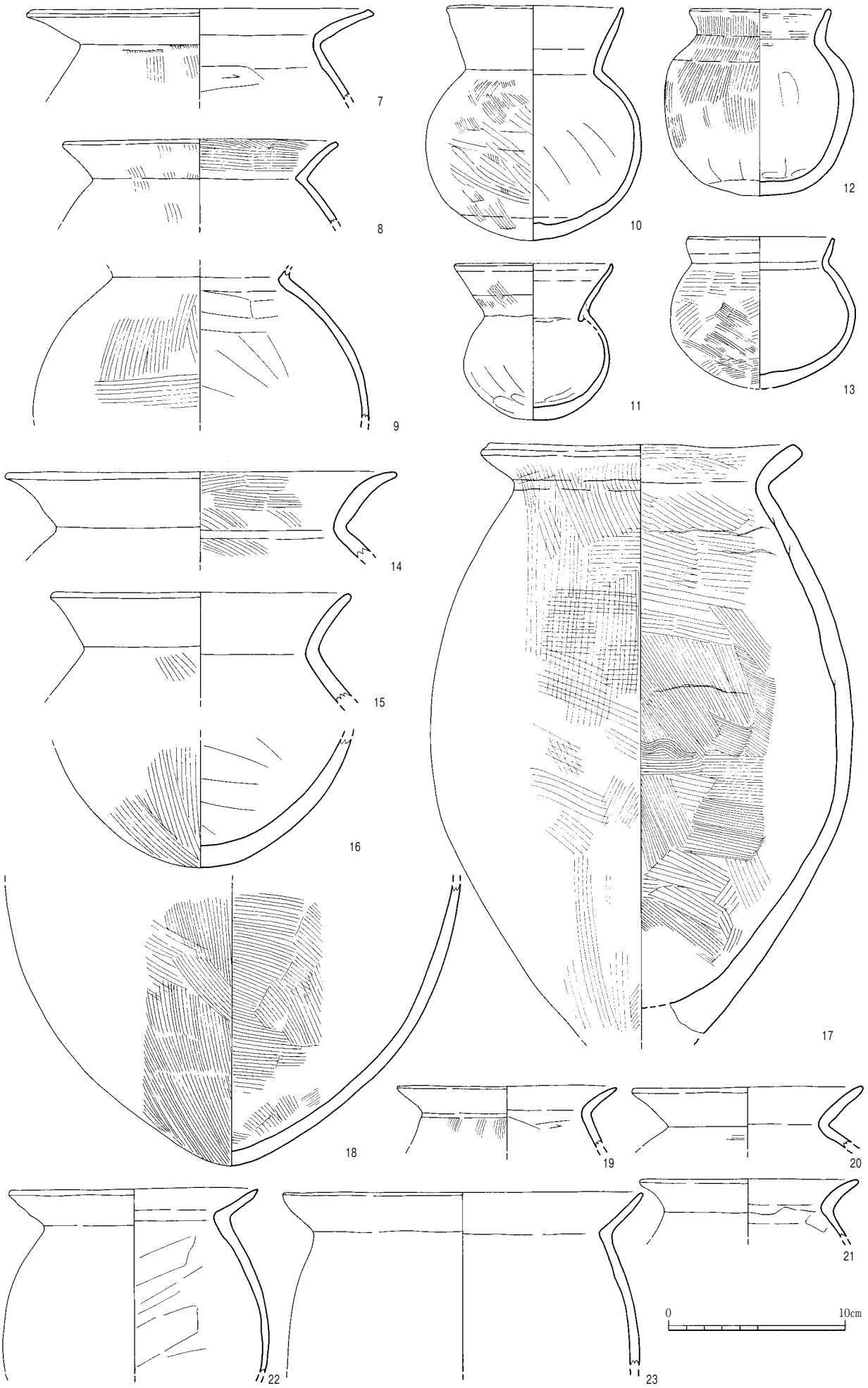
４～９は布留式の系譜を汲む甕型土器であろう。口縁部はいずれも短く外湾しながら開き、多く端部内面を強いナデでへこませる。頸部はしっかりと屈曲するが布留（古）式甕のように強くは開かない。胴部はいずれも球胴ながら底部をわずかに尖底状に成形する。器壁調整は基本的に胴部外面がハケ目、内面はケズリ。10 ～ 13 は小型丸底壷である。10・11 は直口壷で、体部はやや扁平な球状、頸部は強く締まり、口縁部は直線的に開く。12・13 は短頸壷である。体部はややつぶれた球状で頸部はやや強く締まり、口縁部は短く開く。器壁調整は 11 を除き外面ハケ目、内面は指または工具を用いたナデ。11 は外面にも工具を用いたナデ痕跡が認められる。14 ～ 18 は在地系の長胴甕である。14・15 は口縁部片、16・18 は底部片である。17 は底部を除き完形に復元でき、長胴で短く外反する口縁部がつく。口縁部は「く」の字状に屈折して、わずかに外湾しながら開く。16・18 は胴部下位～底部片であるが、長胴尖底で 17 と同様の器形を持つものか。19 ～ 23 も球胴甕である。19 ～ 21 は口縁部のみの破片で、いずれも強く屈曲する頸部と短く外反する口縁部が残る。22・23 は胴部上半以上が残る。口縁部が残る資料のうち、22・23 は口縁部が直線的に開きわずかに内湾する形状で、布留式古段階の甕の系譜を持つ。一方 19 ～ 21 は口縁部がやや外湾しながら広がるものでやや新しく位置づけられよう。24 は高坏の脚部片である。強く開く脚下半部が残る。屈曲部はゆるやかで、穿孔を施すが数は不明。25・26 は小型器台の脚部である。25 は脚が直線的に「八」の字状に開き、中位に穿孔を施す。おそらく３孔か。26 は足が短いもので、やはり中位に３孔を穿つ。27 は脚付碗の碗部片で、内面にミガキ痕が残る。28 ～ 30 は碗である。28 は器壁調整が丁寧になされる。29・30 は手づくね感の残る品で、30 は底部が明瞭に残る。31 は脚付鉢また碗の脚部片である。短く開く。32 はおそらく脚付碗を模した小型の手づくね土器であろう。

以上の資料はおおよそ古墳時代前期中葉前後に位置づけられよう。

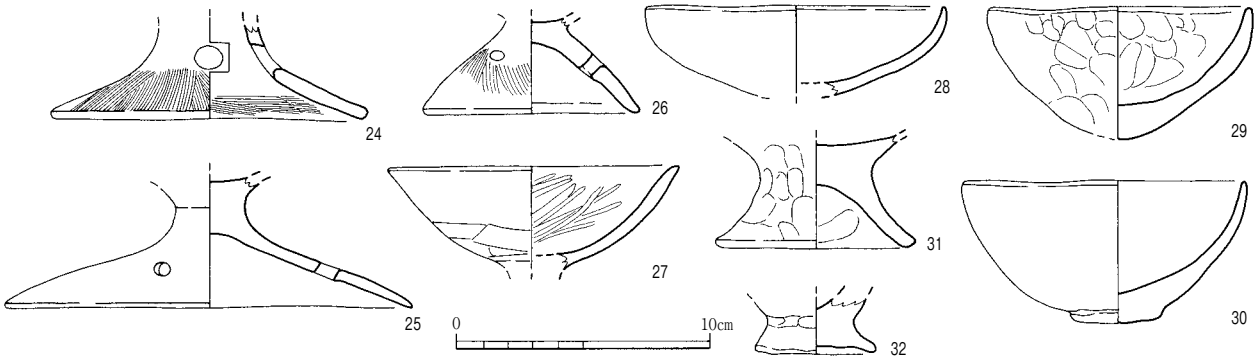
８号竪穴住居跡（図版４、第 13 図）

東西に伸びる北側調査区の西寄りで検出した。主軸方位を北西－南東にとり、やや東西に長い長

第10図　3次　7号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第 11 図　3 次　7 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第12図　3次　7号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）

方形プランの住居跡である。規模は東西長が5.26m、南北幅が3.74mをはかり、残存深さは30㎝程度と比較的深い。床面からは3つのピットを検出し、そのうち2つを主柱穴の候補として図示したが、北側の1基は深さが15㎝程度と浅く疑問が残る。埋土中からは略完形の土器が多量に出土したが、ほとんどは床面から浮いた状態で割れていた。また、地山由来の大小の礫も土器群に混じって多く出土したことから、土器群は礫とともに埋め戻す途中の住居に投棄されたものと考えられる。

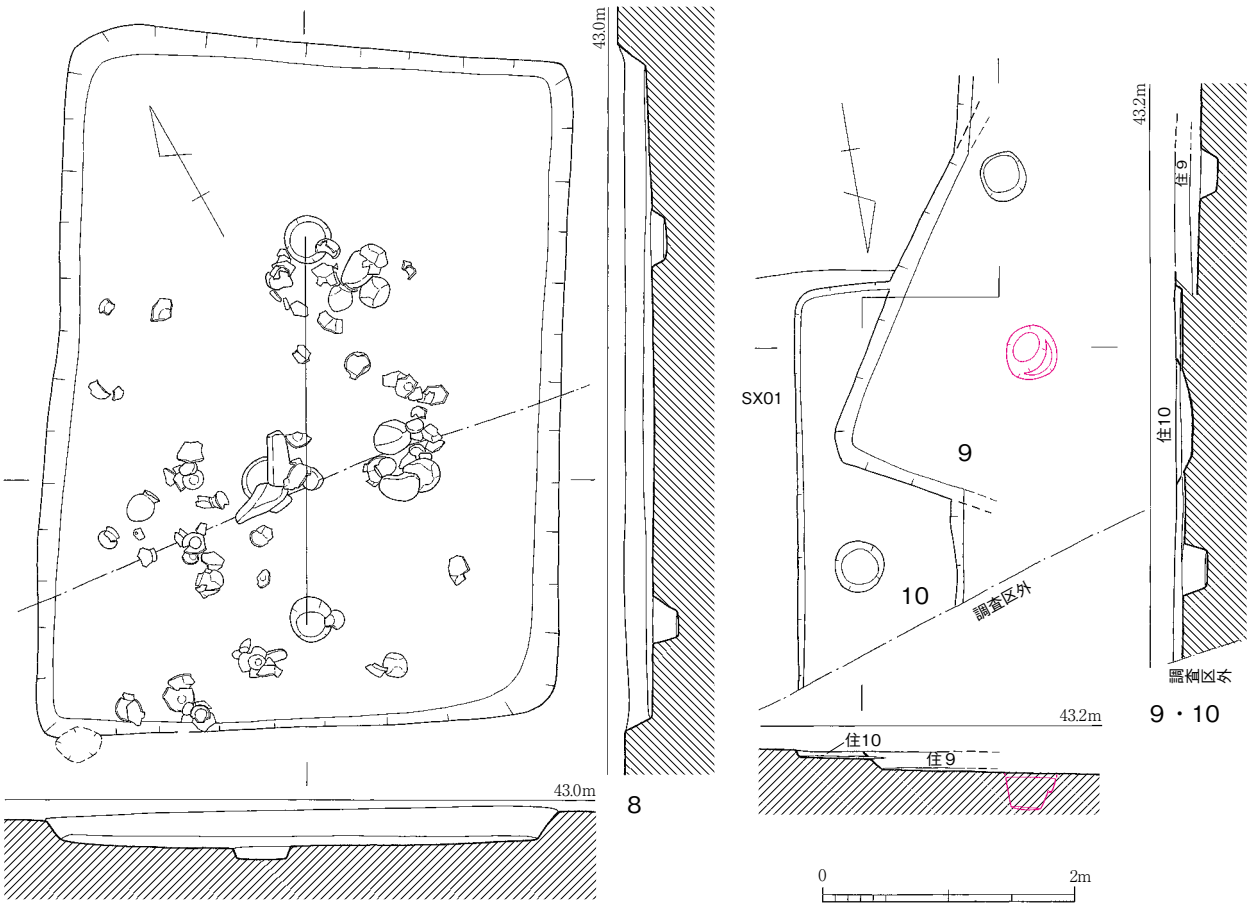
出土土器より、古墳時代前期の遺構と判断できる。

出土遺物（図版5・6、第14～18図）

土師器（1～68）　1～7は直口壷である。1・3は大型の直口壷で、1は全形のわかる資料、2は胴部上半以上が残る。2・4は中型の直口壷で、2はほぼ完形、4は胴部上半以上が残る。いずれも胴部はやや肩が張る球状で、底部の残る1・2はわずかに尖底状となる。器壁調整は2を除き胴部外面をハケ目で、内面をケズリで仕上げる。2は外面上半が暗文状のミガキ、下半は工具ナデ、内面は工具ナデで仕上げる。器壁外面全体に赤色顔料が塗布されており、器壁調整とあわせ精製品とみられる。5は小型の直口壷で胴部は扁平な球状、口縁部は斜めに開く。6・7は直口壷の口縁部片で、6は口縁部がやや外湾しながら開くもの、7は直立気味に上方に伸びるものである。8は壷の胴部片である。口縁部が失われていて細分器種は不明。9・10は二重口縁壷である。9は大型の壷の胴上位～口縁部片で、頸部の締まりが弱く胴部最大径と口縁部径がほぼ等しい。口縁部は直立する。10は中型で、やはり胴上半～口縁部が残る。胴部は球状で頸部はやや強く締まり、口縁部は径が小さく直立する。11は器種不明だが壷型土器の口縁部片か。

12～21は中～小型の鉢である。12～16は中型の鉢で、13が球胴、他は扁平な胴部を持つ。口縁部は12･13がやや外湾しながら斜め上方に伸び、15は直立気味、16は内湾しながら立つ。14は頸部屈曲が不明瞭である。17～19は小型の鉢で、いずれも扁平な胴部をもち、口縁部は17が直線的に開き、18は内湾し、19が外湾する。20・21は口縁部を欠失するが扁平な胴部をもち、やはり小型の鉢であろう。22は球状の胴部のみが残り、小型の壷または甕の胴部片であろう。23は器種不明ながら直口壷の口縁部片か。やや口縁部が短く、甕かもしれない。

24～49は球胴の布留式甕あるいはその系譜に連なる甕の資料である。24～38・42は口縁部が外湾しながら開くものである。口縁部中位の外面がやや肥厚する25・29・30・34・37、口縁部上位内面に強いナデで小さな凹みを形成する29・32～36・38、口縁部がスムーズに湾曲しながら伸びる24・26・28・31・42のようにいくつかの形状のものがあり、特に前2者は口縁部成型方法に布留（古）式甕の影響が看取される。器壁調整は基本的に胴部外面がハケ目、内面がケズリで一部にヘラ状工具などを用いた強いナデ痕跡が認められる。39～41は口縁部がわずかに内湾しながら



第 13 図　3 次　8 ～ 10 号竪穴住居跡実測図（1/60）

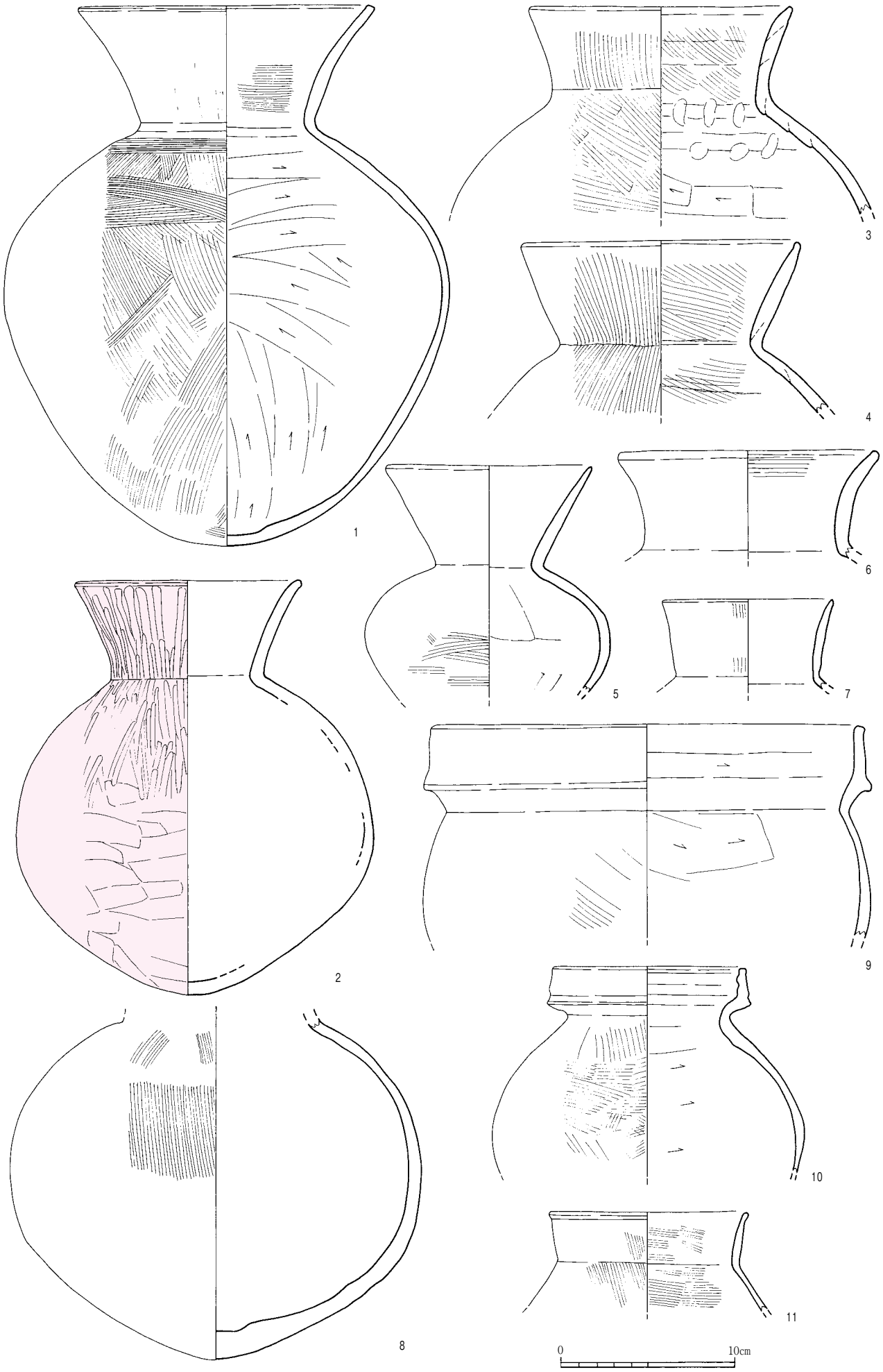
開くもので、布留（古）式甕の範疇に含まれる資料であろう。43 ～ 49 は口縁部が失われた甕型土器の胴～底部片である。球状あるいはやや扁平な形状で、外面をハケ目調整で仕上げる点が共通する。43・44・49 は内面上位にもハケ目調整を施す。50 ～ 54 は長胴の甕型土器であろう。いずれも頸部の屈曲が不明瞭になっていてやや新しい傾向を示すか。53 は胴上位の膨らみが乏しい。いずれも在地系の甕の系譜に連なるものであろう。55 は短頸壷か。扁平な胴部とごく短い口縁部を持つ。56 は口縁部が欠失するが扁平の胴部を持つ甕または壷である。

57 は深い鉢型土器である。58・59 は浅い碗で器壁が薄く特に 58 はヘラミガキを施す精製品である。60 ～ 62 は小型の碗である。いずれも指頭圧痕を残しやや粗製感がある。63 は小型器台の脚部であろう。脚は内湾しながら広がり中位に穿孔を施す。おそらく３孔か。64 は脚付碗で、内面に暗文状のヘラミガキを施す。摩耗によりやや不明瞭ながら外面にもミガキの痕跡が認められ精製品であろう。65 ～ 68 は高坏である。65・66 は胎土の質や色調などから同一個体の可能性のあるものであるが、接合しなかったため別個に提示している。65 が口縁部、66 が坏底部片である。66 の底部外面には接合面が看取される。67・68 も高坏の坏部片である。いずれも坏底部・口縁部境に段を有するが段はごく低く目立たない。68 は内・外面をヘラミガキで仕上げる精製品である。

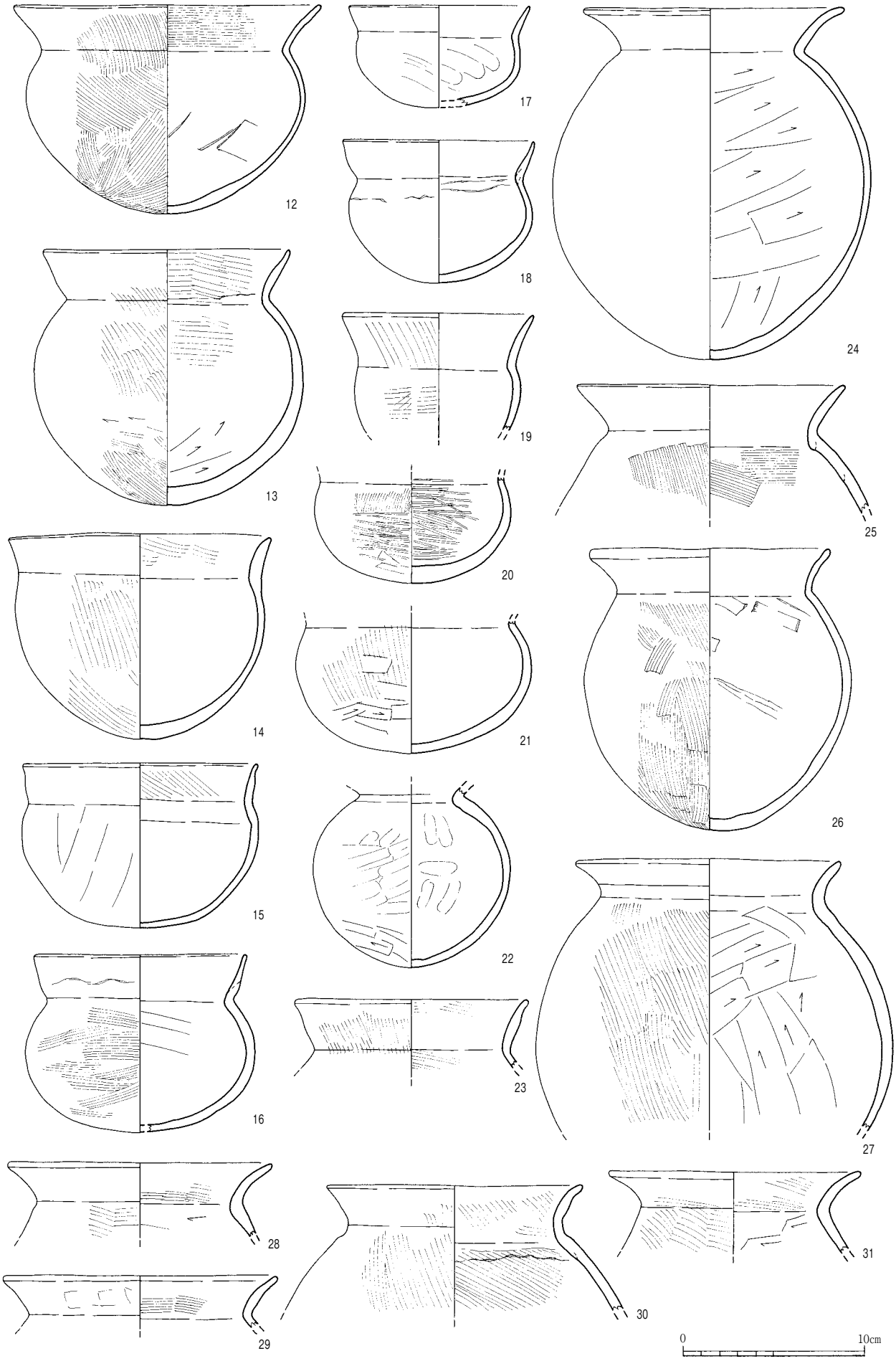
以上の資料群はおおよそ古墳時代前期前半～中頃に位置づけられる資料群であろう。

９号竪穴住居跡（図版４、第 13 図）

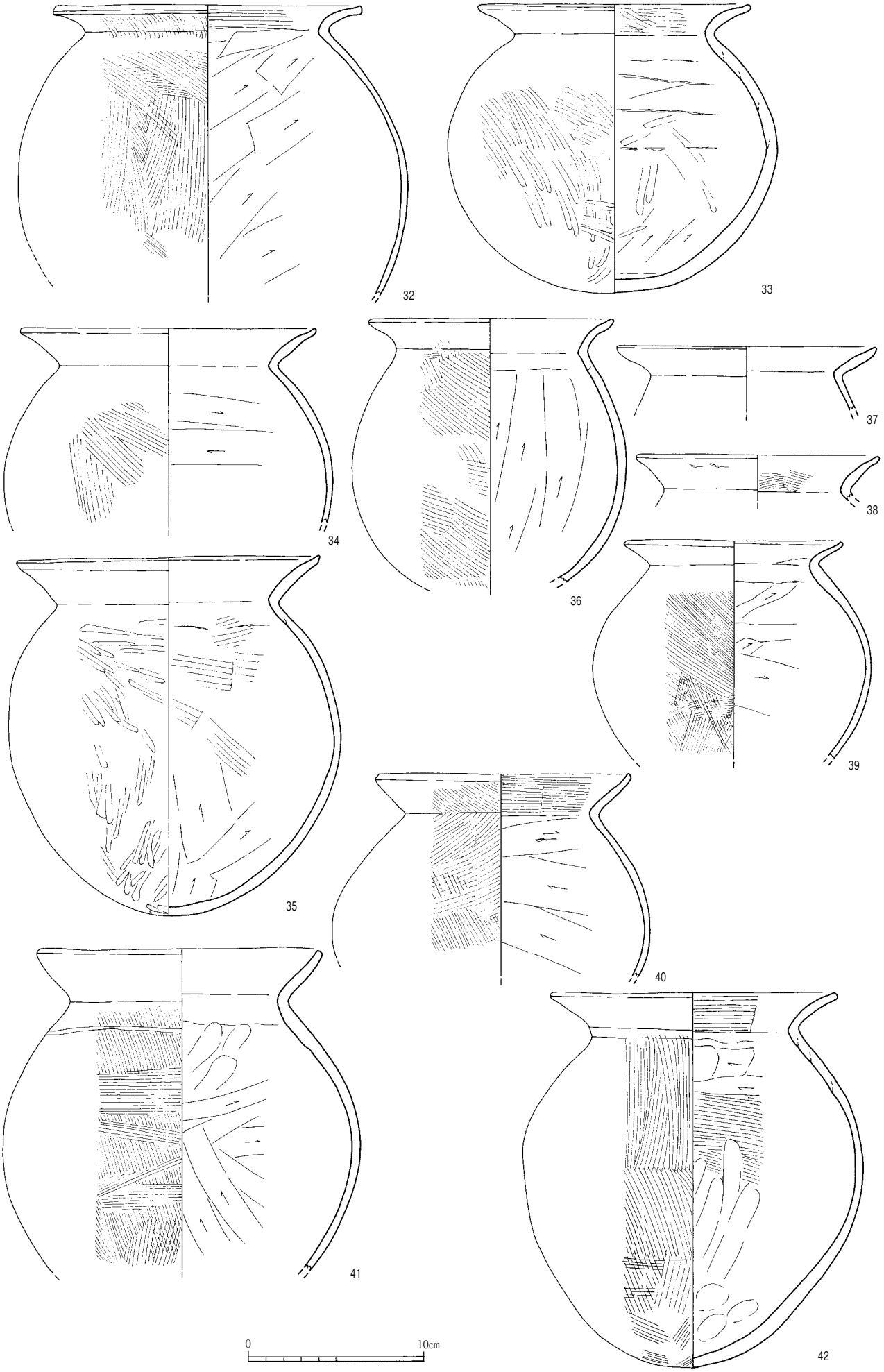
東西に伸びる北側調査区の西端付近で検出した。西側の大半を水田区画の段落ちで破壊されており残りは悪い。10 号住居跡の南側を破壊しておりこれに後出する。当初、10 号住居跡との切り合



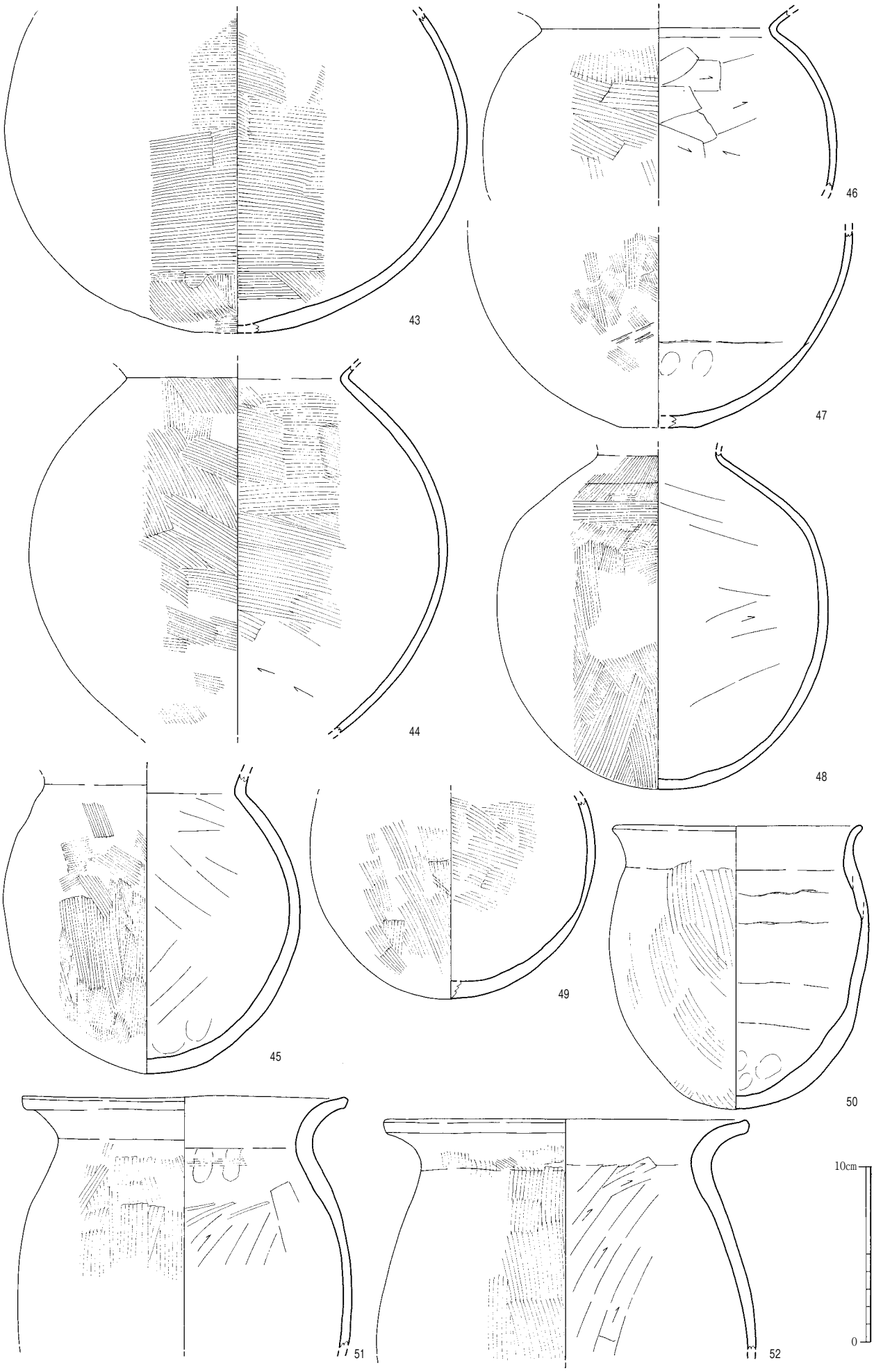
第 14 図　3 次　8 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



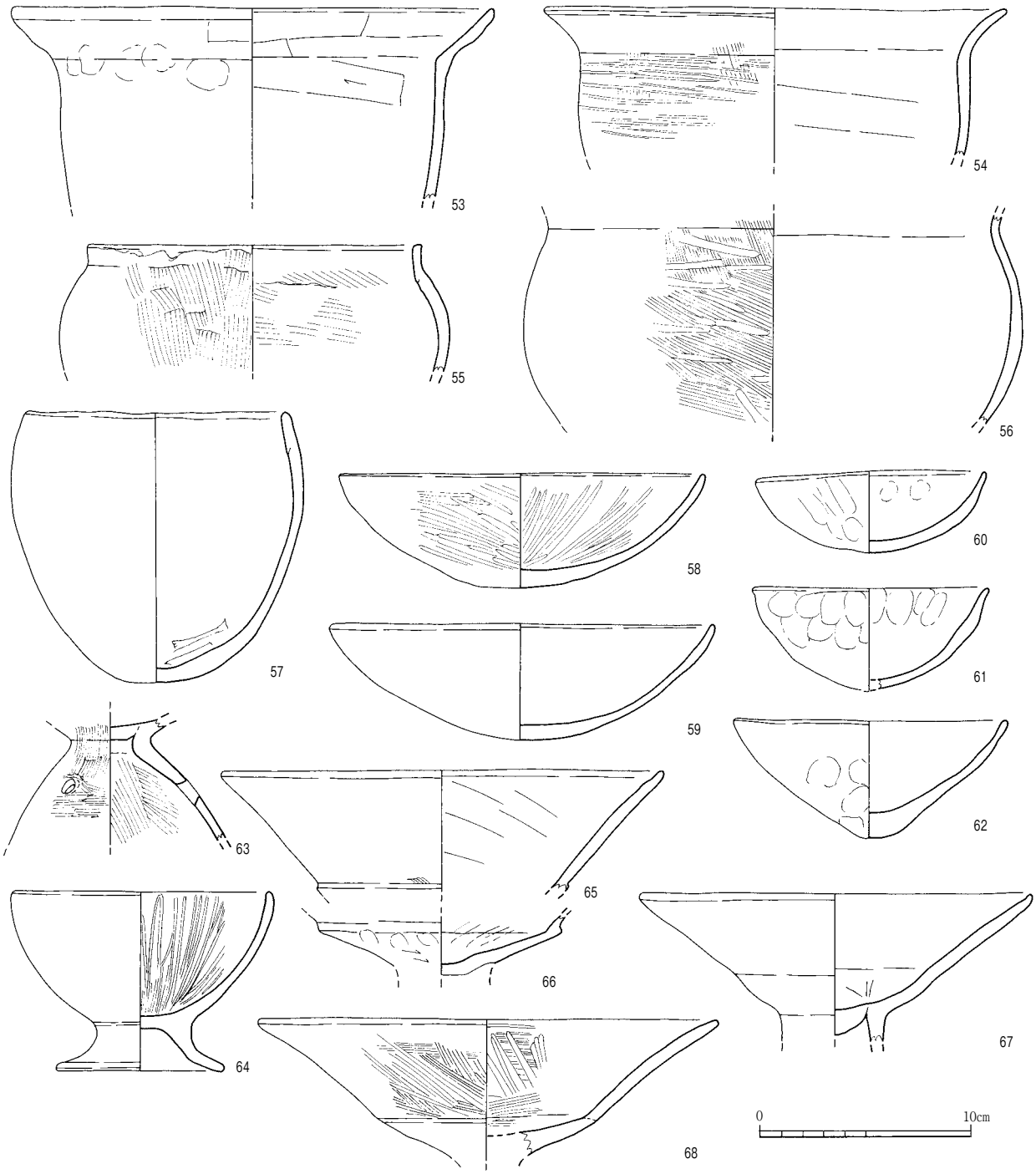
第 15 図　3 次　8 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第16図　3次　8号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第 17 図　3 次　8 号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）



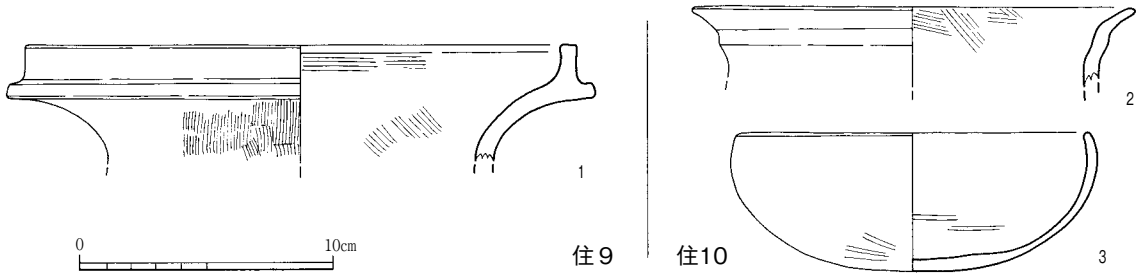
第 18 図　3 次　8 号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）

い関係を逆に認識しており、９号住居跡の壁を一部破壊してしまった。主軸方位は北西－南東にとり、規模は南北長が 2.4m 以上、東西幅は 1.0m 以上をはかる。床面レベルが水田区画の段落ち下段レベルとほぼ等しく、この下段部分から１基のピットを検出した。主柱穴の１つとなる可能性もあるが断定はできない。断片的に残された遺構であり、その性格については不明瞭な部分が残る。

出土土器は１点を示したがそれほど大きな破片ではなく混入の可能性があろう。切り合い関係から、古墳時代中期以降の遺構と考えたい。

出土遺物（第 19 図１）

土師器（１）　１は二重口縁壷の口縁部片である。頸部は強く締まっていて、口縁部に向けて湾曲しながら急激に広がり、屈曲部外面は強く突出して口縁部は上方に短く伸びる。



第 19 図　3 次　9・10 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

10 号竪穴住居跡（図版４、第 13 図）

東西に伸びる北側調査区の西端付近で検出した。西側を９号住居跡に破壊され、北側は調査区外に伸びるため全形は不明だが、残存範囲では 3.1m × 1.2m 以上の規模を持つ。SX-04 谷状落ち込みの上位に掘り込まれた遺構である。床面レベルは９号住居跡より 10㎝以上浅い。床面より１基のピットが検出されたが、深さがやや浅く主柱穴とは評価しがたい。一応、竪穴住居跡として報告しておくが、断片的な遺構であり不明瞭な部分があることは否めない。出土土器から、５世紀後半頃に比定しておきたい。

出土遺物（第 19 図２・３）

土師器（２・３）　２は在地系の甕型土器の口縁部片か。ゆるやかに湾曲しながら広がる。３は碗である。扁平な胴部と強く内湾する口縁部を持つ。やや新しい資料か。

（３）谷状落ち込み遺構

SX-04（第７図）

東西に伸びる北側調査区の西端で検出した。９・10 号住居跡の下層に不定形に伸びる黒褐色粘砂質土の埋土を持つ遺構で、北・西方向に向かって傾斜しつつ調査区外へとひろがっている。第２次調査Ⅰ区 SX-02・03 谷状落ち込み遺構と埋土が類似しており、一連の落ち込みであると考えられる。埋没低台地の西側を区画する自然の谷状地形であろう。古墳時代中期以降の遺構に切られており、埋没はそれ以前であろう。出土土器は土師器・須恵器の小片がビニール袋１袋ほどあるが図示に耐えうるものはない。

（４）その他の出土遺物

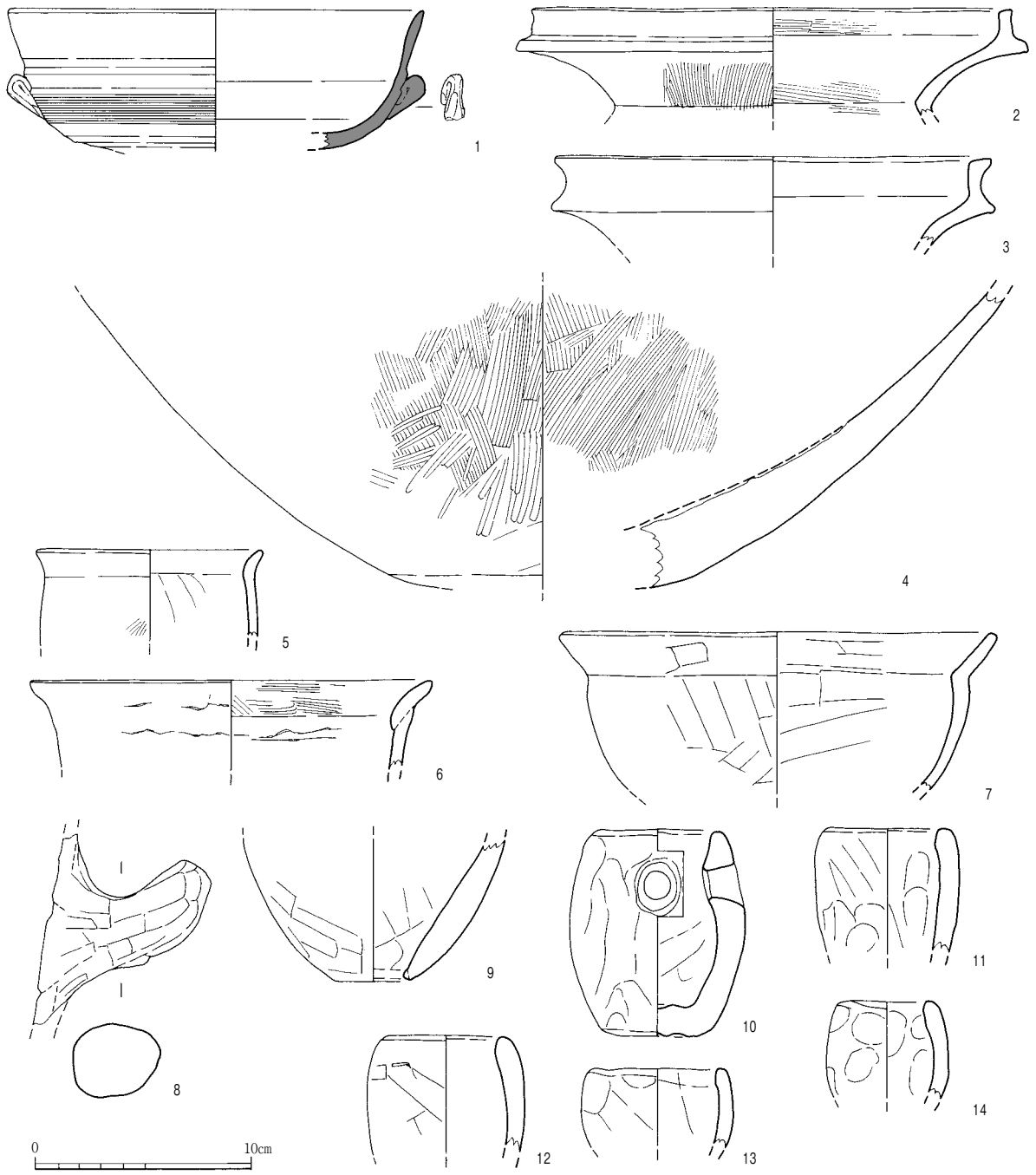
ここでは、遺構掘り下げ時以外に出土した土器のほか、土器以外の出土遺物についてまとめて報告していく。

遺構検出時等出土土器（第 20 図）

包含層出土、遺構検出時出土、撹乱中出土、あるいは表採等により採集した土器について、遺構検出時等とひとまとめにして報告する。

須恵器（１）　１は高坏の坏部片である。底－口縁部屈曲部から上が残る。屈曲部はややきつく湾曲し、口縁部に向けて直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反させる。屈曲部やや上位の外面に把手がつく。屈曲部やや上位外面にカキ目が見られる。5 世紀後葉の資料か。

土師器（２～14）　２・３は二重口縁壷の口縁部片である。いずれも、頸部以上が残る。ともに頸部は逆「八」字状に強く外湾しながら急激に開き、明瞭に屈曲する。屈曲部の外面は大きく突出する。



第 20 図　3 次　遺構検出時等出土土器実測図（1/3）

口縁部は短く直立し、３は口縁端部外面を張り出す。４は大型の壷型土器の底部片であろう。外面底部付近に細いヘラ状工具を用いたナデ成形（ヘラミガキにやや近い）痕跡がよく残る。５・６は甕である。５は小型の甕の口縁部片で、胴部上位の膨らみがわずかで口縁部は短く開く。６は中小型の甕の口縁部片で、胴部上位の膨らみがなくおそらくバケツ状に立ち上がるものであろう。口縁部は内側に粘土帯を貼り付けたような成形で短く開く。やや新しい時期の資料か。７は鉢型土器である。胴部は扁平で短く内湾しながら開く口縁部が付される。器壁調整は内・外面ともに工具ナデ。

８・９は甑である。８は把手部分のみの資料。９はきわめて小型の鉢形土器の底部に円孔が穿たれたものである。造りも粗く器壁も厚い。10 ～ 14 は蛸壷である。いずれも口縁部径が４～６㎝程度のやや小形のもので、表面に指頭圧痕が多く残り作りは粗い。

（５）小結

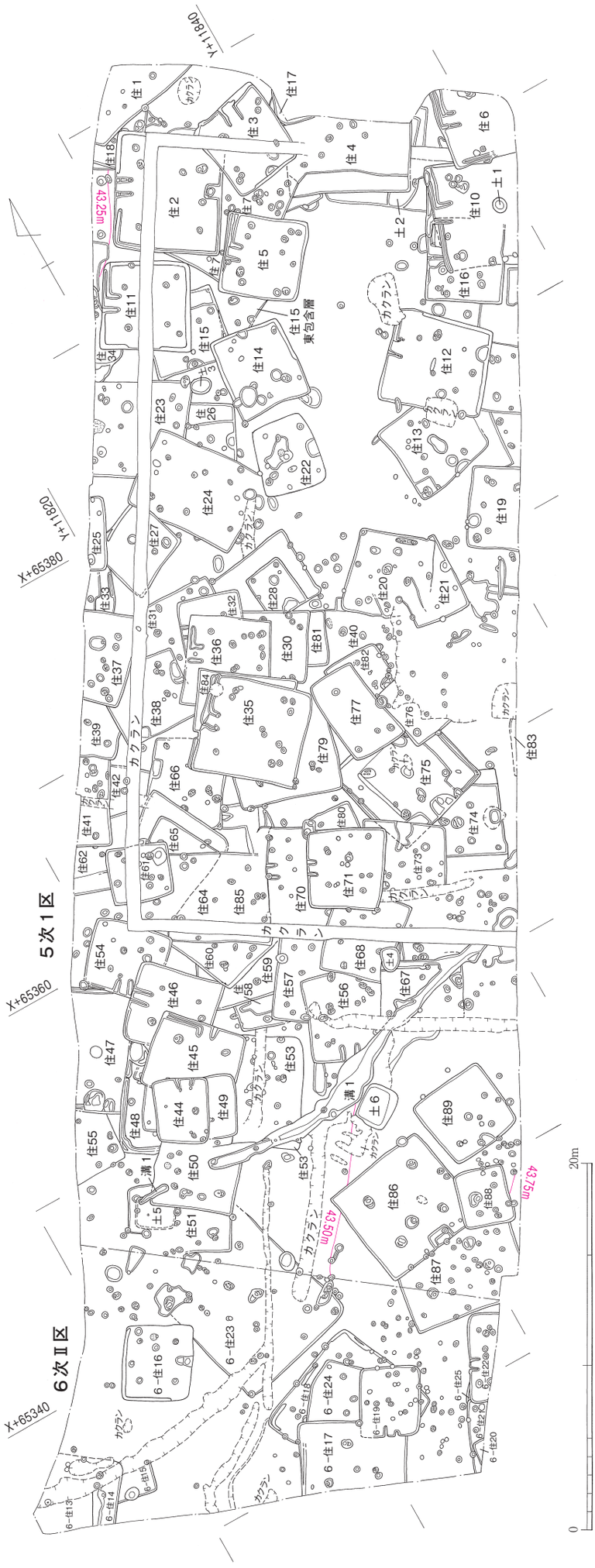
塔田琵琶田遺跡第３次調査地は、隣接する第２次調査地の補足調査のような位置づけとなり、調査区も東西・南北に細長く伸びる形状を呈しているため、それ単独ではややわかりにくい。従って、本稿では第２次調査区の成果と一部連動させながら述べてきた。本来であれば、調査成果のまとめについても第２次調査区の成果と連動させながら述べる必要があろうが、第２次調査の成果についてはすでに別冊で公刊しており、そこである程度のまとめを行っている。そこでここでは、第３次調査の成果に絞って簡単にまとめを行っておきたい。

検出した遺構を整理しよう。竪穴住居は計９棟調査した（３号住居跡は欠番）。うち、古墳時代前期に属するものは１・５～８号の計５棟である。このうち、７・８号住居跡の埋土中からは多量の土器が出土した。ともに住居床面からは浮いた状態で、竪穴部の中央付近がややくぼむように折り重なって堆積していたことから、竪穴住居の廃棄に伴う埋め戻しの際に、不要になった土器が投棄されたものとみられる。比較的完形に近く復元できるものもあるが、大半は部分的に、あるいは大きく欠損するもので、割れて不要になった土器を投棄した可能性が高いが、住居跡自身が削平されていることから、その際に一部が失われた資料も多かったと推測され、土器群の性格について断定的に述べることはできない。出土資料を見ると、いずれも布留式の範疇に収まりながら比較的時間幅を持つ資料群と見られ、たとえば球胴甕の口縁部形態をとってみても、端部を四角く納めて上に引っ張り上げるやや古い形態から、口縁部の途中でさらに外側に開いて端部を丸く収める比較的新しい形態までを含む。比較的長期間にわたり投棄されたのか、あるいは時間幅を持つ土器群を一括で投棄したのかの判断は難しい。

隣接する第２次調査区では、カマドを持つ古墳時代中～後期の住居跡も多く検出されたが、本調査区では確実にカマドを持つと判断できる住居跡は１棟も検出できなかった。用水路を挟んで東側に隣接する第５次調査区でも、やはりカマドを伴う古墳時代中期後半以降の住居跡の割合が少ないことから、第３次調査区付近から東側には古墳時代中期以降の集落は密に展開しなかった可能性がある。こういった集落の構造や時間的な動態については、第６次調査の報告で総括する予定のため、詳しくはそちらを参照されたい。

区	報告時遺構名	調査時遺構名	報告者	区	報告時遺構名	調査時遺構名	報告者	区	報告時遺構名	調査時遺構名	報告者
1区	住1	住1	大庭	1区	住21	住21	大庭	1区	住41	住41	大庭
1区	住2	住2	大庭	1区	住22	住22	大庭	1区	住42	住42	大庭
1区	住3	住3	大庭	1区	住23	住23	大庭	1区	欠番		
1区	住4	住4	大庭	1区	住24	住24	大庭	1区	住44	住44	大庭
1区	住5	住5	大庭	1区	住25	住25	大庭	1区	住45	住45	大庭
1区	住6	住6	大庭	1区	住26	住26	大庭	1区	住46	住46	大庭
1区	住7	住7	大庭	1区	住27	住27	大庭	1区	住47	住47	大庭
1区	欠番(住10覆土上層)	住8	大庭	1区	住28	住28	大庭	1区	住48	住48	大庭
1区	欠番(住10覆土上層)	住9	大庭	1区	欠番			1区	住49	住49	大庭
1区	住10	住10	大庭	1区	住30	住30	大庭	1区	住50	住50	大庭
1区	住11	住11	大庭	1区	住31	住31	大庭	1区	住51	住51	大庭
1区	住12	住12	大庭	1区	住32	住32	大庭	1区	欠番		
1区	住13	住13	大庭	1区	住33	住33	大庭	1区	住53	住53	大庭
1区	住14	住14	大庭	1区	住34	住34	大庭	1区	住54	住54	大庭
1区	住15	住15	大庭	1区	住35	住35	大庭	1区	住55	住55	大庭
1区	住16	住16	大庭	1区	住36	住36	大庭	1区	住56	住56	大庭
1区	住17	住17	大庭	1区	住37	住37	大庭	1区	住57	住57	大庭
1区	住18	住18	大庭	1区	住38	住38	大庭	1区	住58	住58	大庭
1区	住19	住19	大庭	1区	住39	住39	大庭	1区	住59	住59	大庭
1区	住20	住20	大庭	1区	住40	住40	大庭	1区	住60	住60	大庭

第２表　５次１～４区　遺構一覧・対照表①



第 21 図　5 次 1 区　遺構配置図（1/300）

区	報告時遺構名	調査時遺構名	報告者	区	報告時遺構名	調査時遺構名	報告者	区	報告時遺構名	調査時遺構名	報告者
1区	住61	住61	大庭	1区	住80	住80	大庭	1区	土5	土5	大庭
1区	住62	住62	大庭	1区	住81	住81	大庭	1区	土6	土6	小澤・細石
1区	欠番(住41と同一)	住63	大庭	1区	住82	住82	大庭	2区	土7	土1	大庭
1区	住64	住64	大庭	1区	住83	住83	大庭	2区	土8	土2	大庭
1区	住65	住65	大庭	1区	住84	住84	大庭	**溝**			
1区	住66	住66	大庭	1区	住85	住85	大庭	1区	溝1	溝1	大庭
1区	住67	住67	大庭	1区	住86	住86	小澤・細石	2区	溝2	攪乱	大庭
1区	住68	住68	大庭	1区	住87	住87	小澤・細石	2区	溝3	攪乱	大庭
1区	欠番(住62と同一)	住69	大庭	1区	住88	住88	小澤・細石	2区	溝4	攪乱	大庭
1区	住70	住70	大庭	1区	住89	住89	小澤・細石	3区	溝5	溝1	大庭
1区	住71	住71	大庭	3区	住90	住90	大庭	3区	溝6	溝2	大庭
1区	欠番		大庭	3区	住91	住91	大庭	3区	溝7	溝3	大庭
1区	住73	住73	大庭	3区	住92	住92	大庭	3区	溝8	溝4	大庭
1区	住74	住74	大庭	4区	住93	住93	大庭	3区	溝9	攪乱	大庭
1区	住75	住75	大庭	**土坑**				3区	溝 0	攪乱	大庭
1区	住76	住76	大庭	1区	土1	土1	大庭	3区	溝11	攪乱	大庭
1区	住77	住77	大庭	1区	土2	住52	大庭	4区	溝12	攪乱	大庭
1区	欠番(住75覆土上層)	住78	大庭	1区	土3	土3	大庭				
1区	住79	住79	大庭	1区	土4	ピット	大庭				

第２表　５次１～４区　遺構一覧・対照表②

３　塔田琵琶田遺跡第５次調査１区の報告

（１）調査の概要

１区は５次調査区の中央、南北方向に延びた尾根状微高地上に位置する本遺跡でもちょうど中央にあたる、約 1,600㎡の範囲である。当区の北西に２区、北東に３区、北に４区、西には第３次調査区と第２次調査Ⅰ区、南には第６次調査Ⅱ区が位置する。

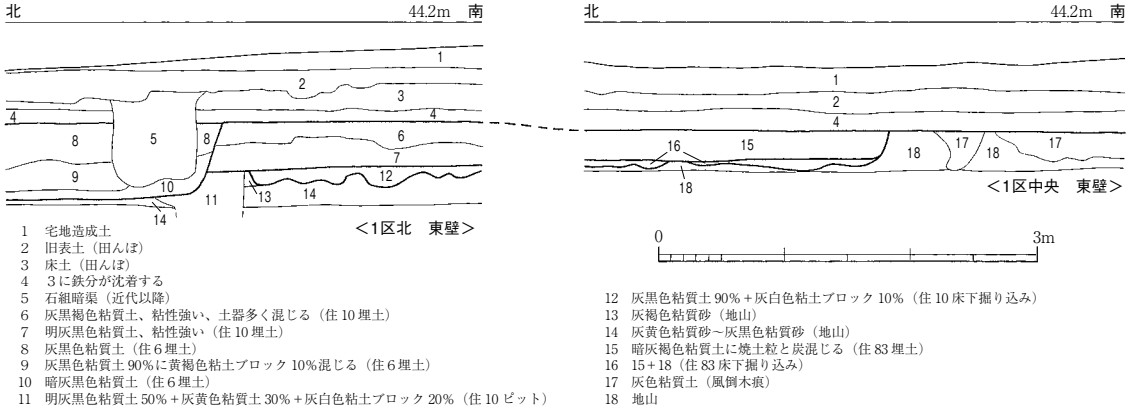
３区の調査前は宅地で、圃場整備対象外であったことから、遺構面は２区より 70㎝、３区南端より 60㎝以上高い。ただし宅地も水田を盛土して造成したことが、第 22 図からわかる。

地山は火山灰堆積層である黄褐色砂質土とそれが風化した黒ボク土からなり、遺跡北側では黒ボク土が良く残存していた。また１区中央では黒ボク土の下層である黄褐色砂礫土が一部露出し、かつこの部分の竪穴住居跡の残りも悪いこと、北東隅の６号住居跡は深さ 50㎝と残りが良いことから、旧地形は１区中央より北西側に向かって緩やかに傾斜していたと想定される。また１区南東隅の 86 ～ 89 号住居跡は、旧地形が反映されていると思われる宅地前の水田区画の影響で 20㎝程度の高さで方形に高まっていた。以上のことから、旧地形は１区南東隅を頂点に北西側に緩やかに傾斜することが推測される。

遺構埋土は、黒ボク土に有機物などが混入して粘性が高まった暗灰褐色～灰黒色系の土を基調とするが、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構の埋土上層は暗めの埋土で、古墳時代中～後期の遺構は灰褐色系の土が埋土上層であることから、埋土上層の色調の違いである程度の時期の違いは把握できた場合が多い。

検出した遺構は、竪穴住居跡 80 棟、土坑６基、溝１条、ピットである。遺構の所属時期は弥生時代後期終末～古墳時代前期、古墳時代中期後半～後期の２時期を主体とし、中世前期の遺構が若干分布する状況であった。

文中写真２　１～３号住居跡付近（北西から）



第22図　5次1区　基本土層　(1/60)

（2）竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版10、第23図）

1区北西隅に位置し、2号住居跡に切られ、18号住居跡を切る。住居大半が調査区外で、調査区内では南壁ほぼ全体と西壁のほんの一部を検出したにとどまる。住居の規模は東西6.8ｍ以上、南北2.8ｍ以上、深さ最大30cmを測る方形住居になると思われる。住居主軸は北から14°程度西に振れると考えられる。

床面ではピット4基検出し、深さからＰ2が主柱穴の一つになる可能性がある。床面直上で在地系大甕胴部（3）の破片が2重に重なるような状態で出土した。また床面からは浮いているものの、南壁に近い位置で土師器高坏（9）、床面から20cmほど浮いた状態で土師器直口壺（1）が出土した。埋土は暗めの灰褐色粘質土である。住居床下全面で床下掘り込みを検出した。

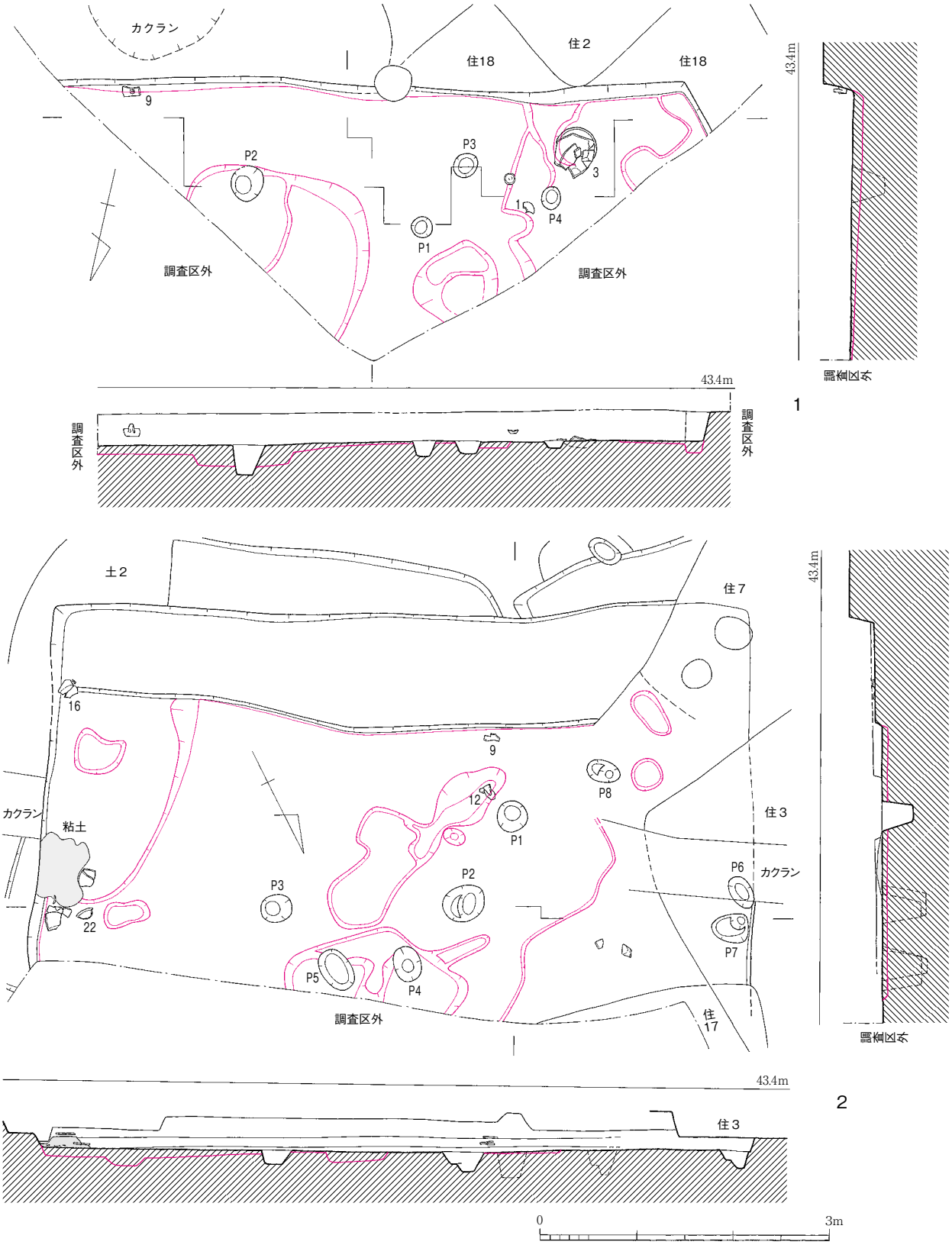
古墳時代後期（8・11～13）の土器が多く混じるが、3が床面直上から出土していることから、住居の時期は古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（第24図）

土師器（1～20）　1は在地系直口壺である。外面胴部下位にはケズリ、胴部上位にはハケを施すが、両者の前後関係は不明である。胴部内面は指押さえ痕がある。外面には黒斑とススあり。色は黄褐色。2は直立する口縁部の在地系二重口縁壺である。口縁端部はナデで面取りする。内外面はスリップを塗布する。生地は橙褐色。3は在地系大型壺胴部で、最大胴部径は61cmを測る。胴部下位にはハケ後低平な突帯を貼り付けているが、突帯は端部をヘラ工具で押さえつけ、後同工具で刻目を施したものである。内面もこの突帯部分に対応するようにナデが残る。最上部の割れ口は擬口縁で、ここまでで一旦乾燥させて成形したことがわかる。外面には黒斑、内面にはススが付着するが、47号住居跡土器炉（第84図2）と同じく、土器炉として転用された可能性がある。色は灰黄褐色。

4・5は在地系甕で、いずれも口縁端部は丸く収める。4は口縁部と胴部の境が緩やかである。色は外褐色、内黄褐色。5は肩が張らない胴部から口縁部がそのまま直立する器形である。胴部内外面には細かいハケを施す。外面には黒斑・ススが認められる。色は外褐色、内橙褐色。6は在地系小型甕で、内面頸部には指押さえ痕が残る。色は黄褐色。7は在地系甕底部。外面には7～8本が1単位の細かなハケを施し、内面下位は外面と同じ細かなハケのちケズリを行う。外面には被熱痕及び厚くススが付着する。色は黄褐色。8は古墳後期の甕口縁部で口縁端部は水平まで折り曲げる。外面はナデ、内面は工具ナデのちナデ調整で、工具痕が残る。色は灰橙褐色。

9～13は高坏である。9は碗形の坏部で、脚部とは充填法で接合する。外面はハケ後ナデ、坏



第 23 図　5 次 1 区　1・4 号竪穴住居跡実測図　(1/60)

部内面底部には工具痕が認められる。外面は被熱痕及びススがあり、色は黄褐色。10 ～ 13 は脚部。10 の外面は縦ミガキ後スリップを施し、内面の一部はケズリを施す。ほぼ乾燥状態で 4 方向に穿孔を施す。外面にはスリップを塗布する。生地は黄褐色。11 の坏部内外面はミガキ、脚部内外面は工具ナデを施す。色は橙褐色を呈する。12 の内外面には指押さえ痕が残る。色は黄褐色。13 は脚部で、内外面ともハケのち粗いミガキを施す。色は灰橙褐色。14 は在地系鉢で、外面に粘土継

文中写真３　２号住居跡屋内土坑
（北東から）

ぎ目痕が残る粗製のもの。底部は平底になるか。色は黄褐色。

弥生土器（15）　15 は弥生後期の器台上部片。外面はハケのち横ナデを施す。色は灰黄褐色。

遺構検出時出土土器（16 ～ 20）　16 ～ 20 は当住居遺構検出時に出土したものである。16 は在地系二重口縁壺で、屈曲部には下向きの三角突帯を巡らす。口縁外端部は若干つまみ出し、外面にはハケ工具による最大七条の櫛描波状文を施す。色は灰黄褐色。17 は内面にミガキが残ることから、弥生後期終末の壺と考えられる。凸レンズ底で、小さな平底を残す底部外面にはヘラ工具による「十字」刻みを行う。外面には黒斑があり、色は外黄褐色、内橙褐色。18 は弥生後期高坏脚部である。穿孔は１ヶ所ほぼ乾燥時に行っており、外面は縦方向のミガキ、内面上位には絞り痕が残る。色は黄褐色。19 は古墳後期高坏脚部で、外面はハケ後ミガキを施す。色は橙褐色。20 は古墳後期碗で、外面下位はケズリ後内外面にミガキを施し、さらに内外面黒化処理を行う。生地は灰褐色を呈する。

２号竪穴住居跡（図版 10・11、第 25 図）

１区北西隅近くに位置し、１・３・７・18 号竪穴住居跡を切るが、３号住居跡とは切り合い関係を誤り、図面とは異なり、３号住居跡を切る。住居中央から北壁にかけて鍵型の近代溝（撹乱）により壊されるが、住居の規模は主軸長 6.84 m、東西 6.48 m、深さ 25㎝を測るほぼ正方形の大型住居である。住居の主軸は北から 59° 西に振れる。壁周溝は、西壁中央に付設されたカマド周辺以外は住居全周すると想定される。またカマドと対面する住居東壁中央やや北寄りに方形を呈する屋内土坑を検出し、その埋土は暗灰褐色粘質土に焼土が細かく混じる土である。

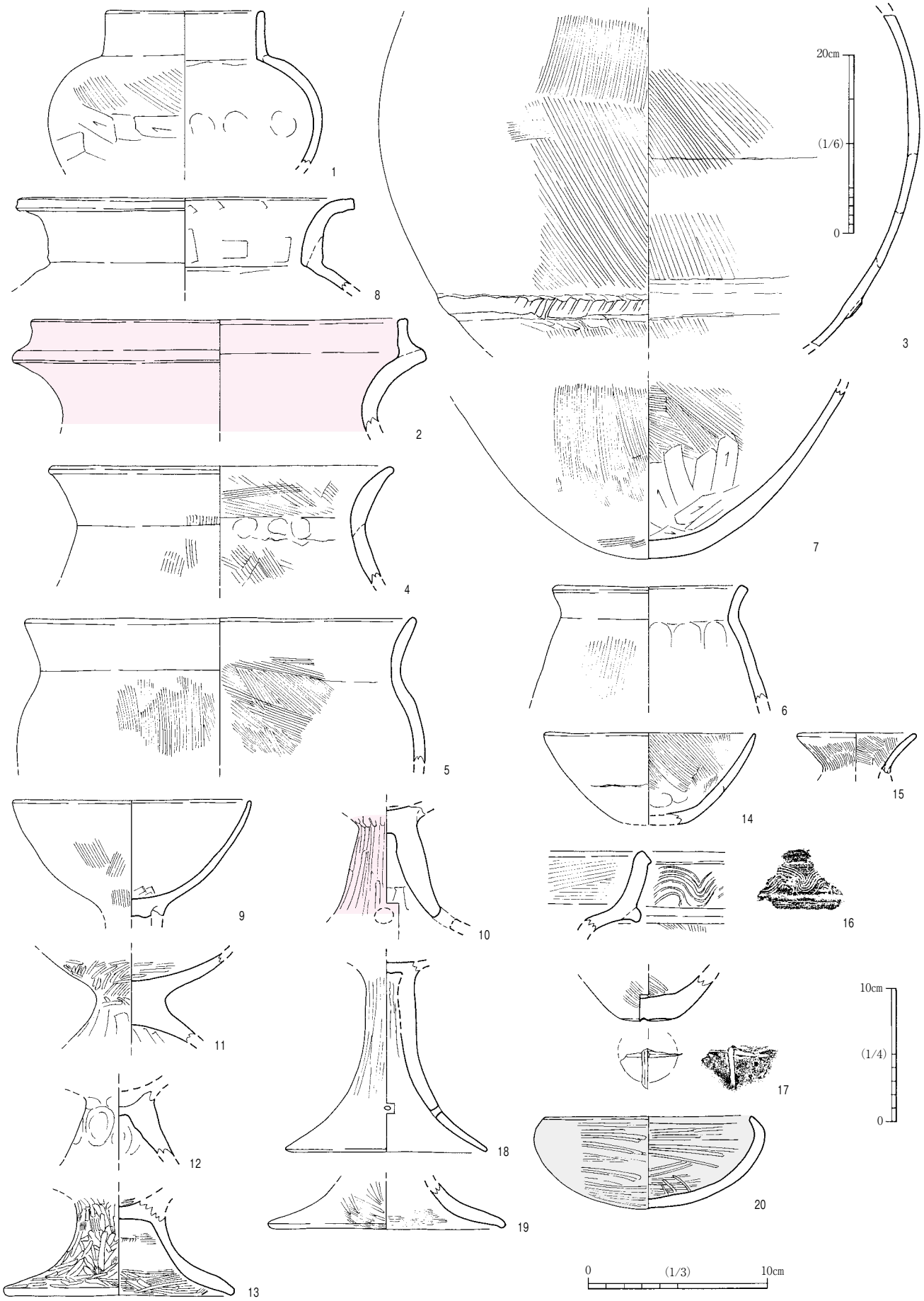
床面ではピット７基検出し、位置と深さからＰ２・３・５・７が主柱穴となる４本柱の住居である。床面直上では粘土が４ヶ所及び焼土塊が１ヶ所まとまって存在するが、機能は不明である。床面から３㎝程度浮いた状態で土師器壺（２）と土師器甕（16）、住居中央の床面から 10㎝程度浮いた状態で土師器甕（13）・碗（30）が出土した。住居埋土は明るめの灰褐色粘質土に焼土粒が多く混じる。床下掘り込みは６ヶ所確認した。

住居の時期は、須恵器は古相であるが、土師器甕内面の稜及び甕胴部の長胴傾向、23 の高坏脚部の器壁の薄さ、40 の碗の厚さと 41 の碗の器高の低さから、６世紀前半に位置づけられると考えられる。

文中写真４　２号住居跡カマド出土状況
（南東から）

カマド（図版 11、第 25 図）

住居西壁中央に付設した造り付けカマドで、壁から左袖は 100㎝、右袖は 94㎝突出する。カマド床面に住居埋土である５・６層が堆積していることから、両袖はカマド廃絶時に大きく壊されていると考えられ、両袖は高さ３㎝ほどしか残存して



第 24 図　5 次 1 区　1 号竪穴住居跡出土土器実測図（2・15・17・18 は 1/4、3 は 1/6、他は 1/3）

いない。また両袖の断面観察から、袖基底部下に住居床面である硬化面が存在することから、住居床面を貼ったのちに両袖を構築していることを確認できる。

カマド奥壁から83cm手前の位置に石製支脚があり、その部分で袖間は51cmを測る。支脚前面には灰黄色粘土に焼土が混じる焼面（濃いアミ）と、さらにその前面には灰色粘土に焼土・炭が混じるカマドかき出し土（薄いアミ）を確認した。支脚周辺では土師器甕（12）がカマド床面から５cm以上浮いた状態で、かつバラバラな状態で出土した。

土層では２～４・７・９・11層がカマド天井崩落土、８層がカマド使用時の堆積土、12～14層がカマド袖構築土、16層がカマド構築前の掘り込みである。土層及び袖の破壊行為の存在から、カマド廃絶時にカマドを大きく破壊していると思われる。

出土遺物（図版52、第26～28図）

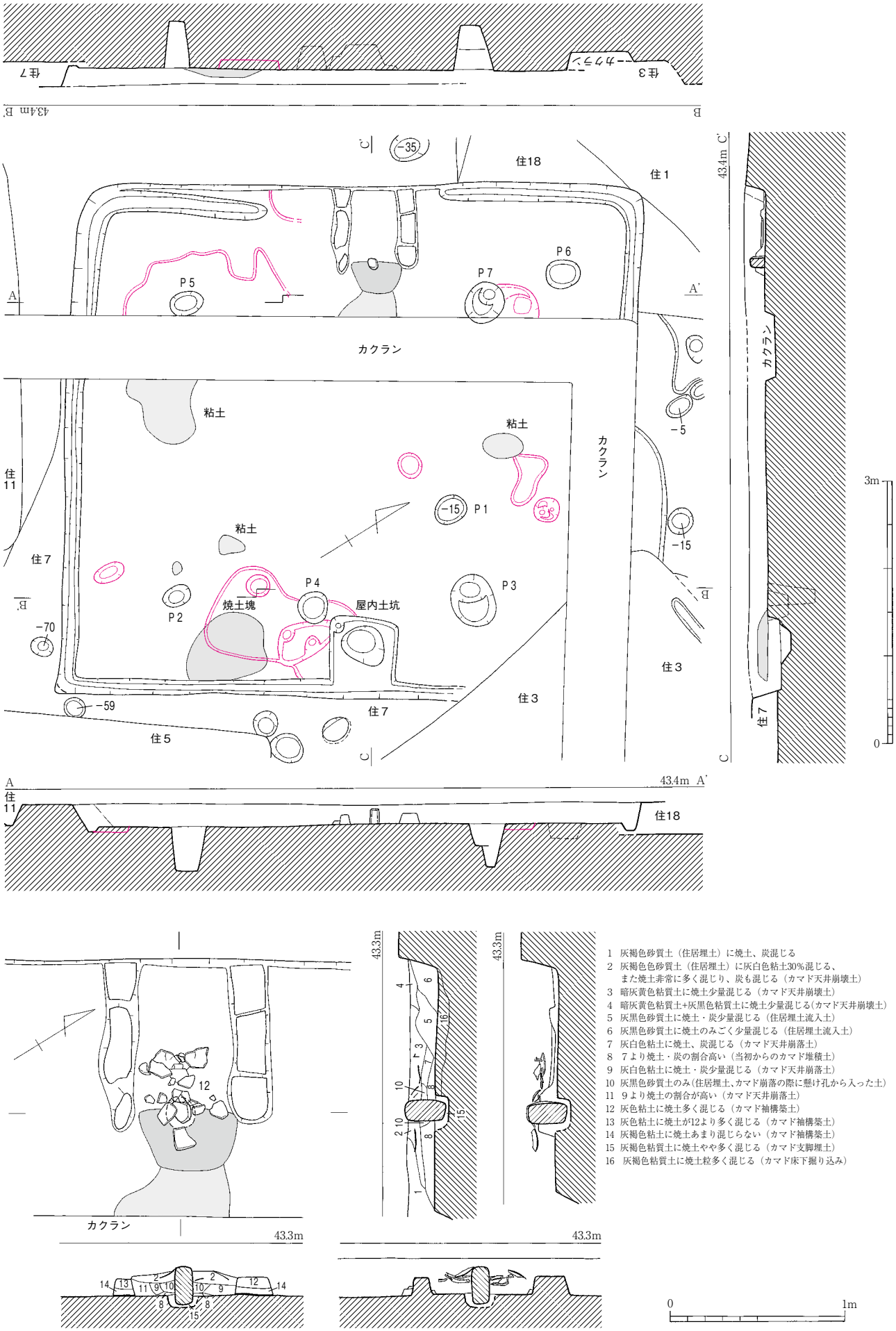
須恵器（１）　１は坏身である。復元口径11cmと若干小さく感じるが、小片のため径は自信がない。口縁端部はナデで面取りする。焼成はやや甘く、色は灰色である。

土師器（２～53）　２・３はいずれも頸がよく締まる直口壺口縁部で、器壁は厚く、外面はミガキを施す。２は口縁端部が内湾気味に立ち上がり、色はこげ茶色。３の内面には指押さえ痕が残る。色は外灰褐色、内褐色。

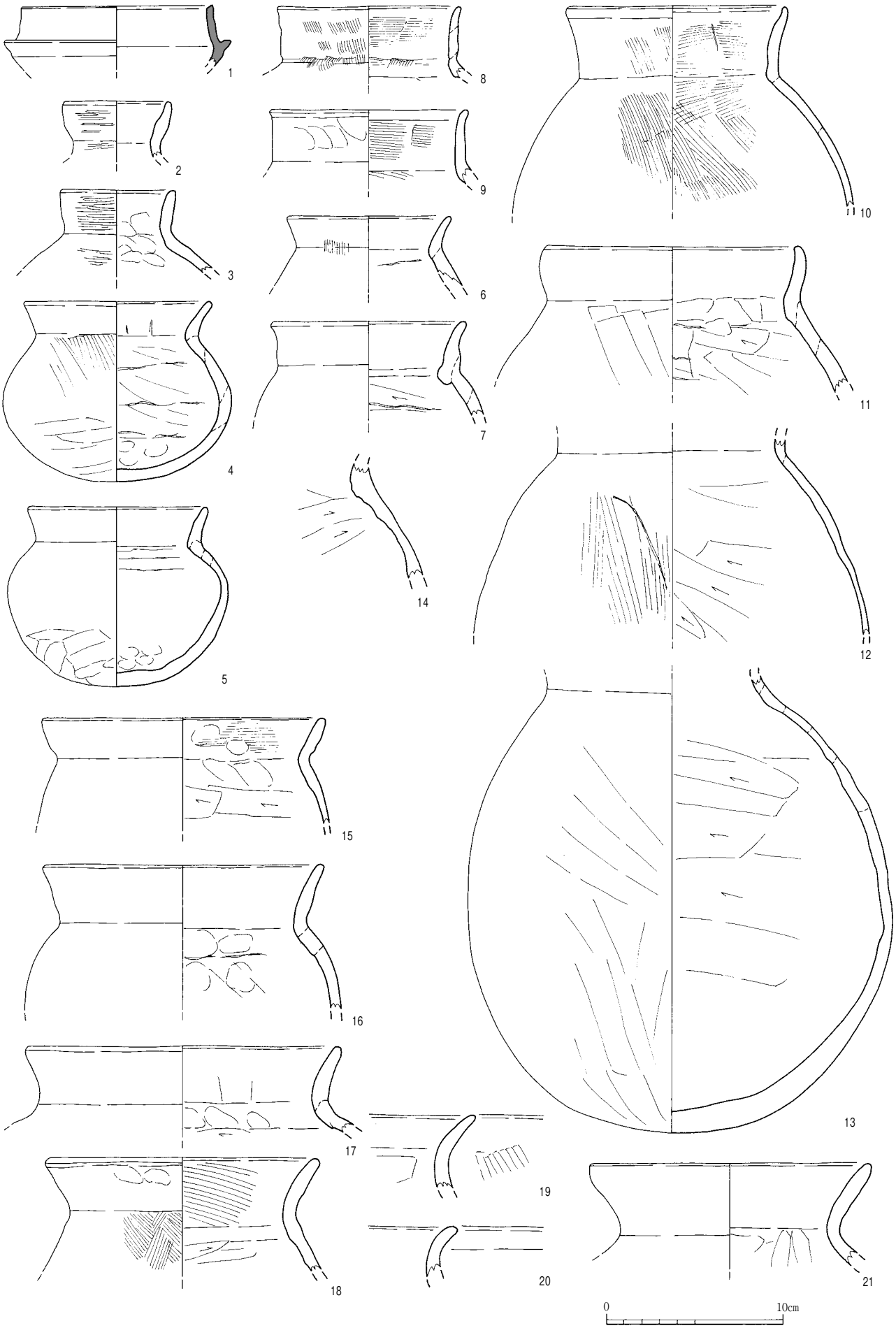
４～21は甕である。４～７は口縁部が外傾するもの。いずれも外面下位にはケズリを施し、内面には粘土継ぎ目痕が顕著に残る。４は口縁部内面に工具痕あり。焼成はやや甘く、色は灰褐色。５は胎土は精良で、色は灰褐色。６の色は灰褐色。７は頸部内面が口縁部との接合の結果突出するもので、外面には被熱痕が顕著に残る。色は灰黒色。８・９は口縁部が直立するもの。いずれも被熱痕あり。８の内外面はハケのち横ナデ、胴部内面にはケズリを施す。頸部内面には粘土継ぎ目痕が残る。色は灰黄褐色。９は口縁端部を若干外反させたもので、色は黄褐色。10～13は直口縁で、胴部は長胴である。10は口縁端部を内上方につまみ上げたもの。外面には被熱痕と薄くススが付着。色は外茶褐色、内灰黄褐色。11は内湾する口縁部を持ち、器壁は厚い。胴部外面は工具ナデ後ナデ、胴部内面はケズリを行う。色は灰褐色。12は胴部外面工具ナデで、工具ナデの際のキズが残る。胴部内面中位以下はケズリを施す。胎土には砂粒をやや多く含み、色は外黄褐色、内灰褐色。外面に被熱痕あり。13は図上復元したもので、胴部最大径は47.5cmを測る。胴部外面は工具ナデ、胴部内面は浅いケズリを胴部中位以上に施す。また外面には黒斑２ヶ所とススが全体的に付着する。胎土には砂粒非常に多く混じり、色は灰黄褐色。14は頸部で、色は暗茶褐色。Ｐ１内出土。

15～18は長い口縁部が外反するもの。15の口縁部外面一部は被熱のため剥離し、口縁部内面には横ハケが残る。ススは外面と口縁部内面に付着する。16は肩が張る胴部で、内外面は工具ナデ後ナデで調整する。外面と口縁部内面は被熱痕が顕著で、胴部内面には炭化物が付着する。17の胴部内面はケズリを行い、口縁部内面には工具痕が残る。外面にはスス、内面には炭化物が付着する。色は灰黄色。18は胴部外面と口縁部内面に施したハケ原体は異なるものを使用したことがわかる。外面には黒斑と薄くススが付着する。色は灰黄褐色。19～21は口縁部が強く屈曲する。19の内面は工具ナデのちナデを施す。色は黄褐色。20の外面には被熱痕があり、色は褐色。21は長い口縁部で、胴部内面には縦ナデ痕が残る。色は黄褐色。

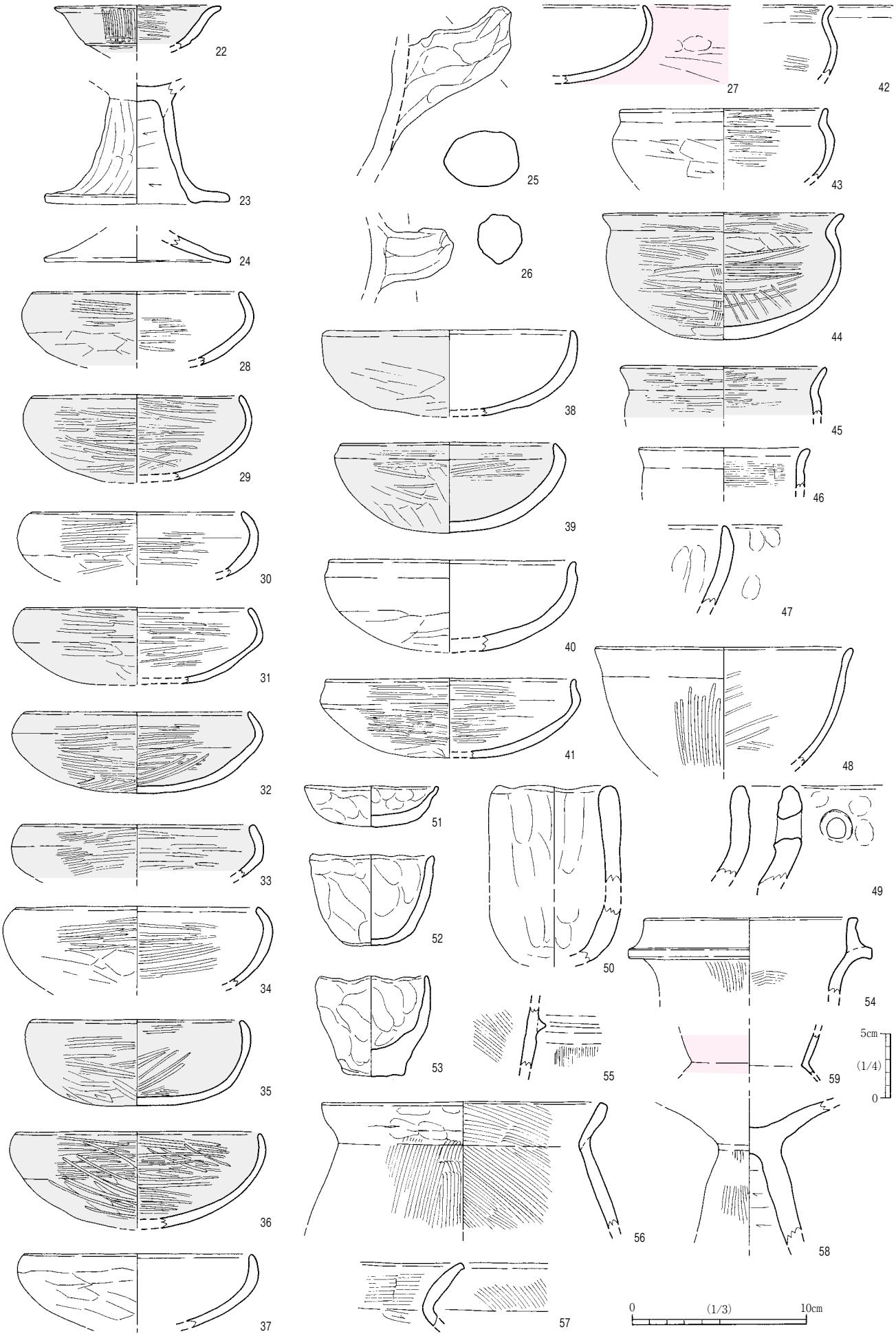
22～24は高坏である。22は口縁端部を水平まで短く折り曲げたもの。屈曲部には鈍い稜を巡らす。内外面はミガキ後黒化処理を行う。生地は黒色。23は脚部で、外面はナデ、内面はケズリで調整す



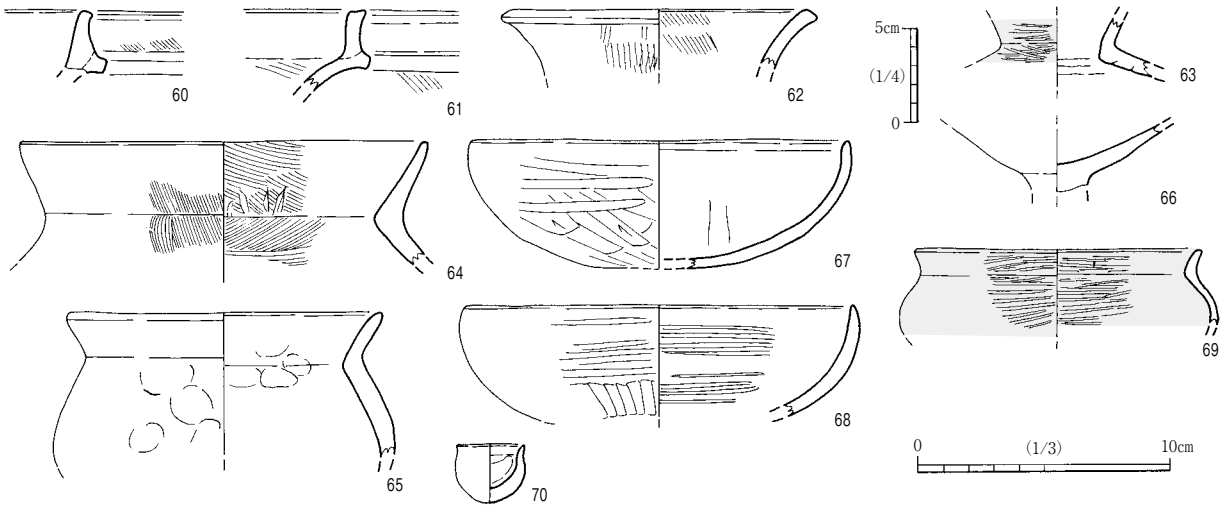
第 25 図　5 次 1 区　2 号竪穴住居跡・カマド実測図　　(1/60・1/30)



第 26 図　5 次 1 区　2 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第 27 図　5 次 1 区　2 号竪穴住居跡出土土器実測図②（54・55 は 1/4、他は 1/3）



第 28 図　5 次 1 区　2 号竪穴住居跡出土土器実測図③（60 ～ 62 は 1/4、他は 1/3）

る。外面にはススが付着する。色は橙褐色。24 は高坏脚部。色は橙褐色。25・26 は甑把手である。25 は長い把手で、体部との接合に工具ナデを用いる。色は灰黄褐色。26 の色は黄褐色。

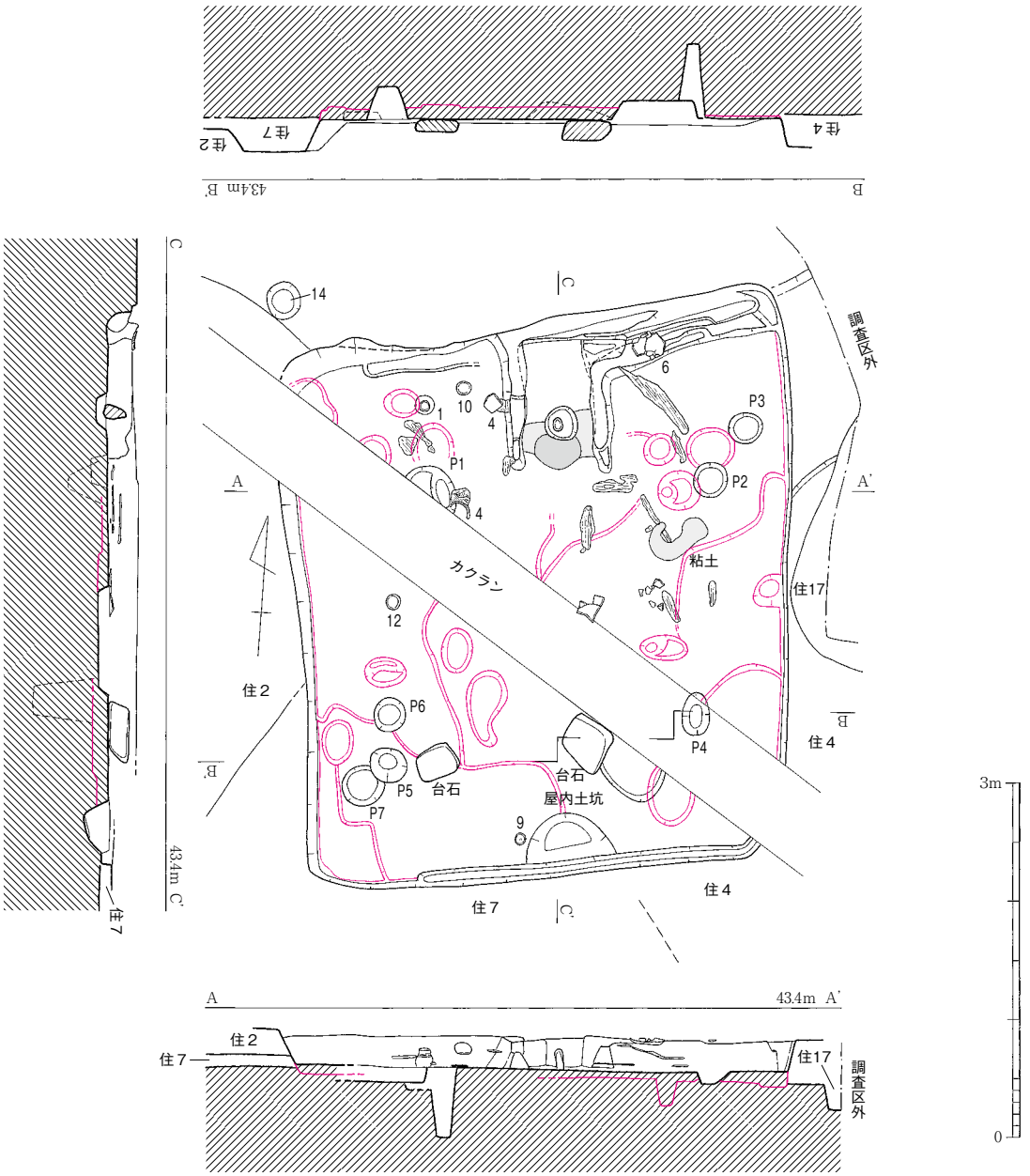
27 ～ 41 は碗である。27 ～ 34 は口縁部が強く内湾するもの、35 ～ 38 は口縁部が直立するもの、39・40 は口縁部外面を横ナデすることで屈曲させたようにみせるもの、41 は口縁端部を外反させるものに分類し、その分類ごとに口径順に割り付けを行った。

27 の外面体部下位はケズリ、後内外面ナデで調整する。外面にはスリップを塗布する。生地は黄橙褐色。28 ～ 32、34 ～ 36・39・41 は外面下位にはケズリ、後内外面全体にミガキを施す。33 は内外面ミガキ、37・38・40 の外面下位はケズリを行うが、ミガキは行わず、内外面ともナデで調整する。28・31・38 は外面のみ、29・32・33・35・36・39 は内外面とも黒化処理を行う。色は 34 が黄褐色、37 が灰黄褐色、38 が灰橙褐色、40 が橙褐色で、それ以外の生地の色は灰褐色を基調とする。31・32 は内湾度が強く、屈曲部が稜状になる。35 は胴部最大径が下がる、鉢状のもの。39・40 は器壁が厚い。41 の外面底部には「×」のヘラ記号を施す。黒斑あり。

42 ～ 46 は外反口縁鉢である。42・43 は内面のみミガキで調整する。42 の外面には被熱痕及びススが付着する。色は黒色である。43 の外面下位はケズリを行い、その後外面上位はナデを施す。内面にはミガキを行う。44 は復元口径 14cm、復元器高 7.3cm を測るもので、外面下位はケズリ後ハケ、内面は工具ナデ、後内外面全体に粗いミガキを行い、さらに黒化処理を行う。生地は灰褐色。45・46 は口縁端部が短く外反させるもの。45 は内外面ミガキのち黒化処理を行う。生地は灰褐色。46 は外面に被熱痕あり。色は灰黄褐色。47 は器壁が厚めの直口鉢である。色は黄褐色。カマド内出土。48 は若干口縁部が外反する鉢で、外面には縦方向のミガキ、内面にも粗いミガキを施す。色は黄褐色。49・50 は蛸壺である。49 は焼成前に 1 ヶ所穿孔し、色は淡黄褐色。50 は外面底部に黒斑があり、色は灰黄褐色。

51 ～ 53 は手づくね土器。51 は完形の浅鉢形で、口径 7.6cm、器高 2.3cm を測る。色は黄褐色。52・53 は深鉢形で、いずれも外面に黒斑あり。52 の色は灰黄褐色、53 の色は黄橙褐色。

弥生土器・土師器（54 ～ 59）　54 ～ 59 は弥生後期～古墳時代前期の土器で、混入品。54 は在地系二重口縁壺である。色は黄褐色。55 ～ 59 は土師器。55 は在地系甕胴部でハケのち三角突帯を貼り付けたもの。色は黄褐色。56・57 は在地系甕である。56 の外面にはスス、内面には炭化物が付着する。色は灰褐色。57 の胴部内面はケズリを行う。色は灰黄褐色。58 は器壁の厚い在地系高坏で、

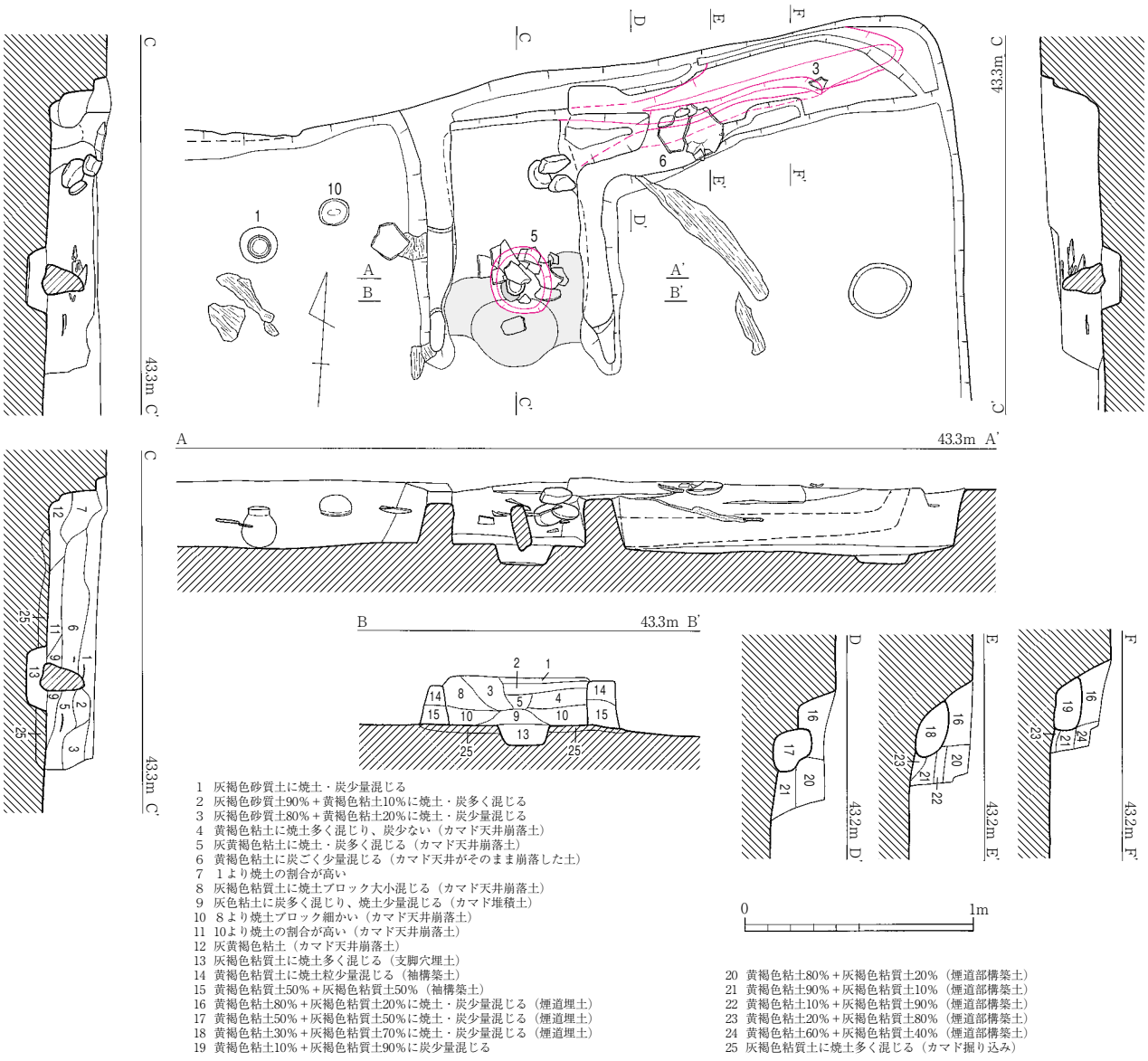


第 29 図　5 次 1 区　3 号竪穴住居跡実測図　(1/60)

脚部内面はケズリを行う。坏部内面は黒化する。色は黄橙褐色。59 は精製の小型丸底壺で、外面にはスリップを塗布する。生地は灰黄色。

住居床下掘り込み出土土器（60 ～ 70）　60・61 は在地系二重口縁壺口縁部である。60 は屈曲部を貼り付けて突帯状としたもの。61 は接合により突帯状にしたもの。60 の色は褐色。61 は灰橙色。62 は弥生後期器台上部片。色は褐色。

63 ～ 70 は土師器。63 は小型壺頸部で、外面はミガキを施し、黒化処理も行う。色は暗褐色。64 は在地系甕で、内湾気味の口縁部内面にハケ工具痕が巡る。外面にススが付着する。色は灰黄褐色。65 は器壁が厚めで、色は灰黄色。66 は高坏。色は淡黄褐色。67 ～ 69 は碗である。67 の外面は工具ナデ後幅太のヘラナデを行う。内面には工具痕あり。68 の体部外面下位はケズリ、その後内外面は粗いヘラナデを行う。内面には工具痕あり。色は橙褐色。69 は外反口縁鉢で、内外面ミガキ後黒化処理を行う。生地は灰褐色。70 は手づくね土器。外面は黒化する。色は灰橙褐色。



第 30 図　5 次 1 区　3 号竪穴住居跡カマド実測図　　(1/30)

３号竪穴住居跡（巻頭図版１、図版 10・11、第 29 図）

１区北端の中央に位置し、２号住居跡に切られ、４・７・17 号住居跡を切るが、２号住居跡で先述したように２号住居跡とは切り合い関係を誤ってしまった。住居の規模は主軸長 4.75 m、東西 4.33 m、深さ最大 26cmを測り、平面形はやや北西方向に歪む方形住居跡である。住居主軸方位は北から４°西に振れる。

北壁中央には住居北東隅に煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。カマドと対面する位置の住居南壁中央に 75cm× 40cm、深さ 23cmの屋内土坑を置く。床面ではピット７基検出し、位置と深さからＰ１・２・４・５が主柱穴となる４本柱の住居である。また壁周溝が住居北西と南壁のみ巡る。

カマド近くの床面直上で土師器壺（１）、床面から 10cm浮いた状態の土師器壺（４）・碗（10）と住居中央の床面直上で住居廃絶時にそのまま廃棄したと思われる台石２個が出土した。また住居南の屋内土坑横の床面から若干浮いた状態で土師器碗（９）、住居西側床面直上で土師器碗（12）、それ以外の遺物は床面から５cm以上ほど浮いた状態で出土した。またカマド周辺には炭化材がまとまって出土したが、ほとんどが床面から数cm浮いており、住居廃絶時に住居で使用した不要な建築

材を廃棄したものであると想定される。住居埋土は明るめの灰褐色粘質土に炭が多く混じる。住居床下で多くの掘り込みを確認した。覆土から磨石（第141図11）が出土した。また出土した炭化材は樹種同定により、ハイノキ節とクヌギ科が同定されている（第４表、p234）

住居の時期は、土師器甕の内面の稜が認められ、土師器碗は薄くかつ黒色処理が施されていないことから、５世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版11、第30図）

住居北壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部から東に延び、住居北東隅から竪穴住居外に出る構造のカマドである。カマド右袖外には土師器壺（１）が床面直上に、煙道天井部には土師器甕（３・６）が置かれており、カマド廃絶時に何らかの祭祀行為を行っていたことが推測できる。カマド袖は、壁から左袖は117㎝、右袖は136㎝直線的に突出する。カマド燃焼部奥壁及び煙道部の一部は住居廃絶後に住居壁上端の一部が住居内側に15㎝ほど崩れ込んでいたことから内側のラインが本来の住居壁となる。

燃焼部奥壁の手前90㎝に長楕円形の河原石を利用した石製支脚を設置し、支脚部分で袖間は58㎝を測る。支脚は28×27㎝、深さ９㎝の支脚ピットで固定されるが（赤色ピット）、石製支脚の長さ20㎝のうち、支脚ピットには３㎝ほどしか埋められておらず、安定性には欠け、支脚周囲を粘土等で固定し、補強していたと思われる。この支脚を３㎝ほど囲んだ小さな硬化面（濃いアミ）とその周囲には灰褐色粘土に焼土多く混じり、炭はごく少量混じる土で構成された焼面（薄いアミ）が認められる。支脚上には土師器甕（５）が床面から10㎝程度浮いた状態で出土した。

煙道部は燃焼部奥壁から長さ152㎝延びるが、燃焼部の主軸とは直角ではなく、10°ほど北に振れる。検出段階では煙道部に一面粘土が広がることから、煙道部天井が落ち込んだものと考えたため、燃焼部から粘土中央を掘削したが、途中で煙道部天井部が残存することを確認したため、掘り誤ったことに気付いた。第30図では黒が検出段階の粘土状況、赤が天井を取り外した段階の状況を図化している。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造である。

煙道部トンネルは長さ120㎝ほど検出でき、Ｅ－Ｅ′・Ｆ－Ｆ′の断面から幅24㎝、高さ12㎝程度の不整形な形状のトンネル構造が確認できる（17～19層）。粘土で構築された煙道部壁は粘土を互層状に積み上げるが、10㎝前後残る厚い粘土で構築された天井部については、天井部を支えるため、なんらかの骨組みが存在したことが予想されるが、本遺跡他のＬ字状カマドを含めて検出できなかった。煙道部先端は斜めに上がるが、住居外まで煙を排出するにはあと20㎝以上の長さが必要であることから、煙道部先端から住居外まで別の構造物（竹等）が存在したのであろう。煙道部埋土には炭は少量しか混じらず、住居埋没時に外から流入した土が埋土の主体となる。

カマド埋土は、４・５・６・８・10～12層がカマド天井崩落土、９層がカマド使用時の堆積土となるが、支脚上に置かれた土師器甕（５）や住居埋土が主体となる３層の存在から、住居廃絶時にカマド燃焼部を破壊する行為を行っていると想定される。

出土遺物（図版52、第31図）

土師器（１～18）　１～８は甕である。１は内湾しながら直立する口縁部で、胴部最大径が胴部下位にくる重心の低い胴部を持つ。完形品で口径９㎝、器高17㎝を測る。胴部内面は頸部までケズリを行い、それ以外の内外面はナデで調整する。色は淡黄褐色。２・３は小型甕である。２の胴部

内面はケズリを施す。外面にはススが付着し、色は褐色。３の胴部下位は工具ナデ後ナデ、後外面全体にハケを施し、内面胴部はケズリを頸部まで行い、口縁部内面はハケ後横ナデを施す。外面には黒斑、被熱痕、ススが認められる。色は灰黄褐色。４は１より大型のものであるが、同じく内湾しながら直立する口縁部を持つ。外面頸部には工具ナデの際に付いたと思われる工具痕があり、胴部内面は頸部までケズリを行う。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。５の胴部内面は縦方向のナデを施し､頸部には粘土継ぎ目痕が残る。色はこげ茶色。カマド内出土。煙道天井部に置かれた６は、復元口径 21.6cmを測る大形のもので、器壁も厚い。口縁端部はさらに外反させ、胴部外面は工具ナデ後ナデを施し、胴部内面は一部のみ浅いケズリを施す。外面には黒斑、ススあり。胎土には砂粒多く含み、色は外灰黄褐色、内褐色。７・８は短い口縁部を若干外反させるもの。７の外面は被熱し､内面にはススが付着する。色は灰黄色。８は短口縁で､胴部外面は工具ナデ後ナデで調整する。色は灰色。

９～ 15 は碗である。９は口縁部が内湾するもの、10 ～ 14 は口縁端部が外反し、12 ～ 14 は深さがあるもの、15 は素口縁のものである。９の外面下位はケズリを行い、後内外面ミガキを丁寧に施す。内面下位にはススが付着する。色は黄褐色～橙褐色を呈する。10 は完形品で、口径 13.7cm、器高 5.2cmを測る。外面下位は工具ナデ、上位はより丁寧な工具ナデを施し、内面はミガキを施す。色は黄橙褐色～橙褐色。11 は端部を強く外反させるもので、外面には被熱痕とススあり。色は橙褐色。歪みが顕著な 12 は内外面粗いミガキを施す。色はこげ茶色。13 は弱く外反するもので、底部にはケズリを施し､後内外面全体にミガキを施す。口縁部内面にはススが付着する。色は橙褐色。14 の調整は、外面はハケ、内面はミガキである。色は橙褐色。完形品である 15 は、口径 10.1cm、器高 6.6cmを測る。口縁端部が歪み、波打っている。内外面ミガキを施し、外面には被熱痕と薄くススが付着する。色は灰黄茶色。16・17 は手づくね土器で、いずれも黒斑あり。16 の色は茶褐色、17 の色は灰黄白色。18 は古墳前期の在地系甕である。口縁内端部を肥厚させ、内面は頸部までケズリを施す。外面にはススが付着する。色は灰黄褐色。混入品。

弥生土器（19・20） 19・20 は混入品。19 は豊前系高坏口縁部。色は黄褐色。20 は在地系高坏口縁部で、内面には暗文状のミガキを施す。色は灰黄褐色。

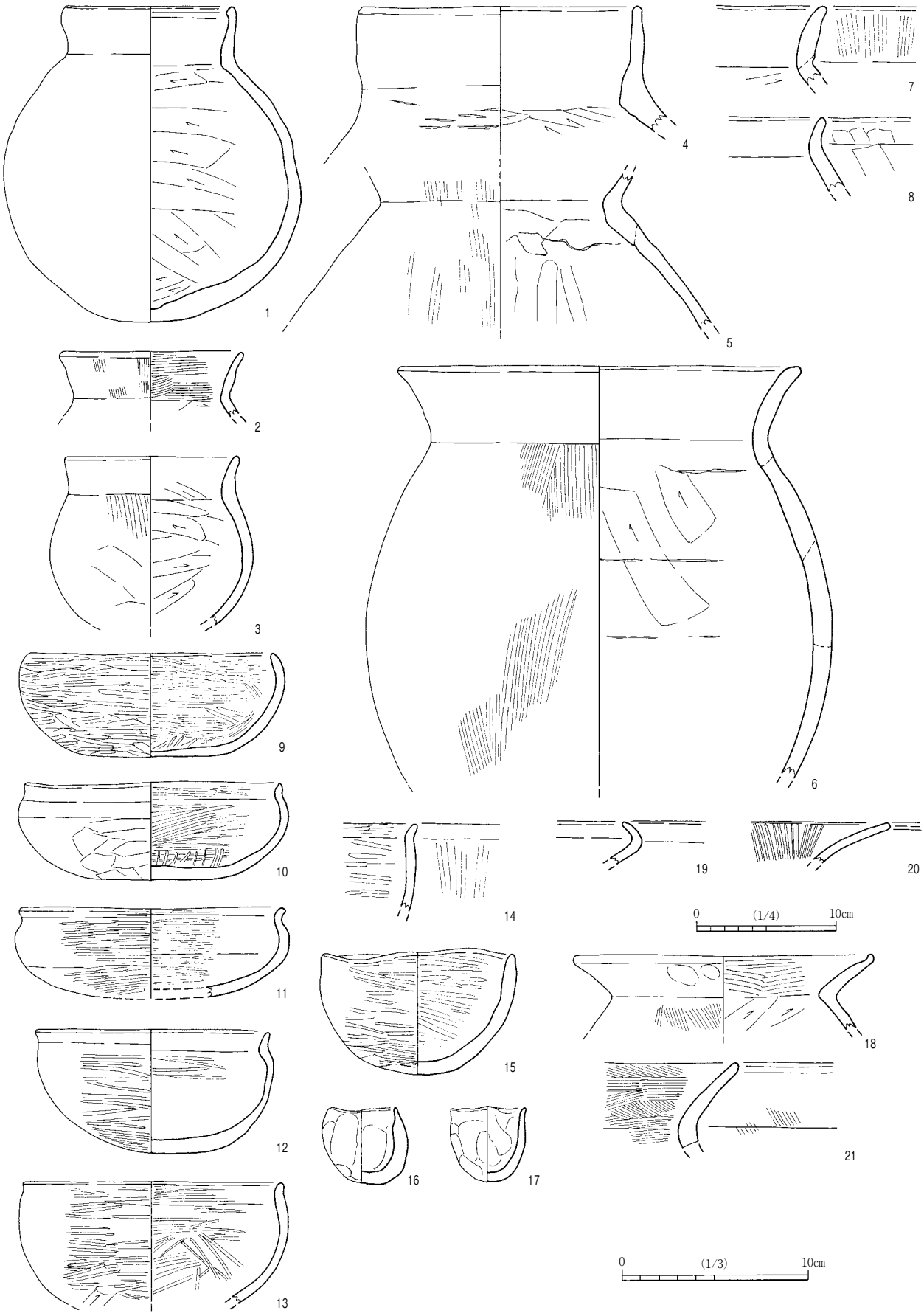
床下掘り込み出土土器（21） 21 は古墳前期在地系甕口縁部。外面にはススが付着。色は灰黄褐色。

４号竪穴住居跡（図版 12、第 23 図）

１区北の中央北端に位置し、３・７・17 号住居跡に切られ、２号土坑を切る。住居北半分が調査区外であるが、住居の規模は東西 7.48 m、南北 4.25 m以上、竪穴部の深さは最大 42cmを測る、大型の方形住居である。住居の主軸方位は北から 63° 西に振れる。

住居南壁に地山削り出しのベッド状遺構を付設するが、南西部でベッド状遺構が途切れ、その部分に土器がまとまって出土したことから、ベッド状遺構は南西部で途切れていたと思われる。ベッド状遺構の規模は幅最大 126cm、高さ 15cmを測る。竪穴部東壁際には 75cm× 53cm、高さ 12cmの黄白色粘土のかたまりが存在するが、その役割は不明である。この粘土塊と接し、床面直上で土師器鉢（22）が出土した。

床面ではピット８基を検出したが、炉跡も検出できなかったため、主柱穴配置は不明である。竪穴部東壁では床面直上、南西部土器集中部分（文中写真５）では床面から 10cmほど浮いた状態で



第 31 図　5 次 1 区　3 号竪穴住居跡出土土器実測図（19・20 は 1/4、他は 1/3）

文中写真５　４号住居跡南西部土器出土状況（西から）

土器が出土した（１・２・８・11・13・14・15）。また竪穴部南東隅には弥生時代後期終末の高坏坏部（16）がベッド状遺構壁に貼り付いた状態で出土した。住居埋土は灰茶褐色粘質土である。竪穴部全面で床下掘り込みを確認した。覆土より鉄鏃の茎部（第142図12）が出土した。

住居の時期は、２・15の底部にわずかに稜が残り、14は小さな平底を残すことから、弥生時代後期終末と考えられる。

出土遺物（図版52、第32・33図）

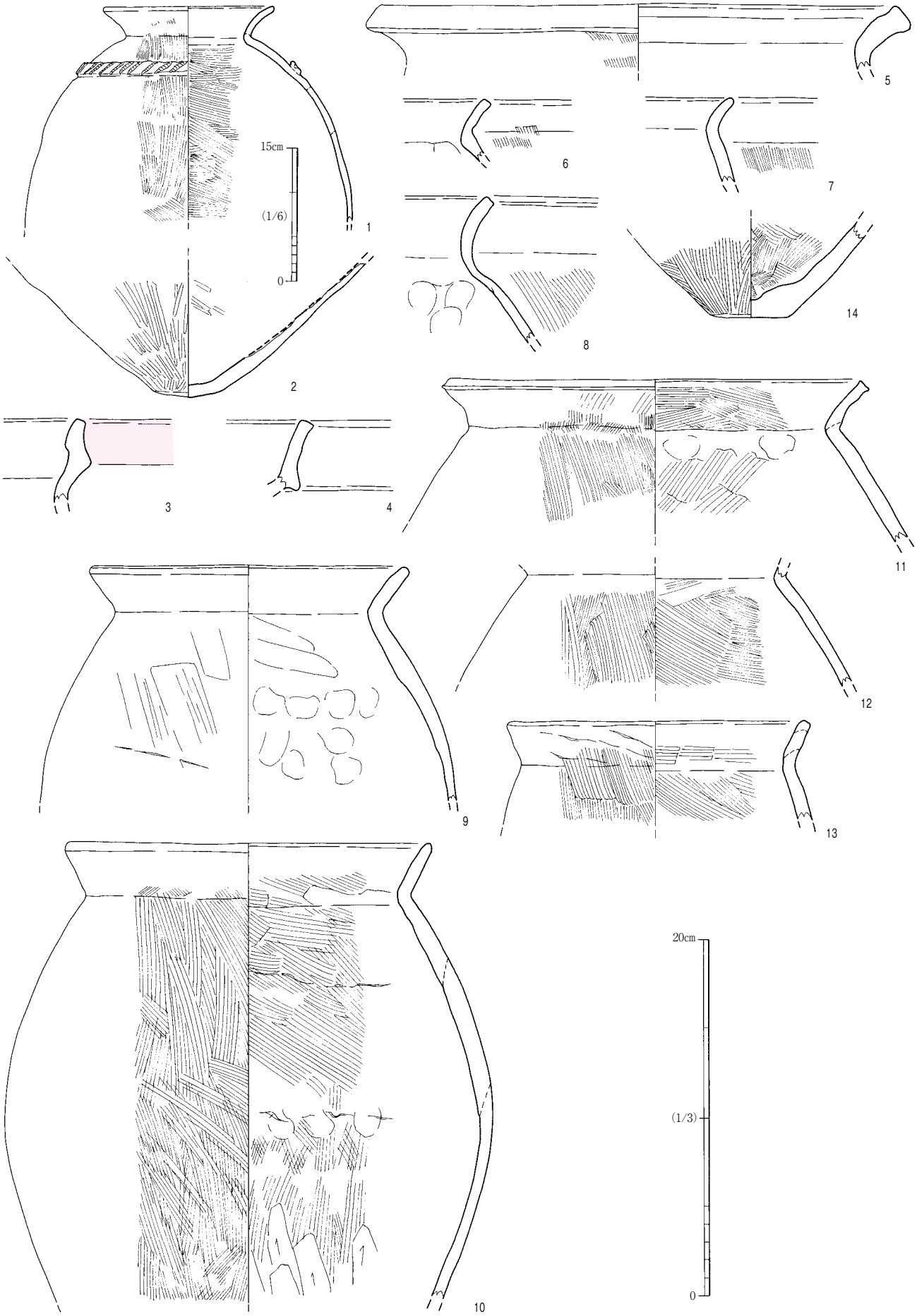
当住居跡出土土器は弥生時代後期終末～古墳時代前期前半に属するが、底部など土器編年上で特徴的な部位が残っていなければ、弥生・古墳時代の時期判別は難しいものがほとんどであった。そのため当住居跡出土土器は弥生土器でも基本的に１/３に統一し、掲載した。

弥生土器・土師器（１～30）　１・２は在地系大型壺である。１は復元口径19.2cmを測る。外面全体はハケの後、端部にハケ工具による刻目を施した突帯を肩部に巡らした珍しいもの。外面には黒斑があり、色は淡橙褐色。２は内外面ミガキを施す。内面は剥離が顕著である。色は黄橙褐色。３は在地系二重口縁壺で、口縁部外面のみスリップを施す。色は黄褐色。４も在地系二重口縁壺の口縁部か。色は灰黄褐色。

５は在地系大型甕口縁部で、復元口径29cmを測る。色は灰黄褐色。６～15は在地系甕である。黒斑は10・12・14・15、被熱痕は８～10、ススは６・10・11・14・15に認められる。色は、６・７が灰黄褐色、８・９が黄褐色、10・12が橙褐色、11・13が褐色、14が灰橙褐色、15がこげ茶色を呈する。６は小型甕で、内面には指押さえ痕が残る。７は口縁端部を丸く収める。８は肩が張る胴部から口縁部が強く湾曲、外反するもの。９は内外面とも顕著な被熱を受け、さらに断面まで及ぶもの。胴部外面は工具ナデ後ナデ､内面はナデで調整。10の胴部は縦ハケ後粗く細いハケを施す。胴部下位はハケのちケズリを施している。また胴部内面中位にはハケのち指押さえを行っていることから、最大胴部径付近で一旦乾燥し、成形を行ったと思われる。11は内外面細かいハケで調整する。口縁端部はナデで面取りする。13は焼成温度が低かったためか、内外面黒化する。口縁部外面には粘土継ぎ目痕が残る。14は弥生後期終末の小さな平底を残す甕底部。15は全体が復元できたもので、復元口径23.7cm、復元器高40.7cmを測る長胴の甕。口縁端部はナデで面取りする。底部と胴部の境にはわずかに稜の痕跡を残す。胴部外面はハケ後胴部中位のみ一部ケズリを行い、内面は口縁部と胴部のハケ原体は異なるものを使用する。胴部内面にはコゲが点々と残る。

文中写真６　４号住居跡粘土塊出土状況（北北西から）

16～20は在地系高坏である。色は16が黄褐色、17・19が橙褐色、18・20が暗黄褐色。16は深さがあり、明瞭な屈曲部を持つもので、器壁が厚い。口縁部外面はハケのち粗いミガキを施す。内面にはススが付着する。17は口縁部を水平まで強く



第32図　5次1区　4号竪穴住居跡出土土器実測図①（1・2は1/6、他は1/3）

外反させたもので、内外面は暗文状のミガキを施す。18 ～ 20 は脚部である。18 の外面は縦ミガキを施し、内面には絞り痕が残る。外面には黒斑あり。19 も外面には縦ミガキを施し、ススが付着する。20 の坏部内面には炭化物、脚柱部の内外面にはススが付着する。

21 ～ 28 は鉢で、21・22 は強く外反する口縁部、23 ～ 25 は弱く外反する口縁部、26 ～ 28 は直口縁のものである。色は 21 が茶褐色、22・25・26 が灰黄褐色、23・24 が黄褐色、27・28 が橙褐色を呈する。21 は器壁の薄いもので、内外面の体部下位は工具ナデ後ナデで調整する。22 は胎土が精良なもので、底部は小さめの平底である。体部外面は工具ナデ後ナデ、体部内面は丁寧なナデで調整する。内面底部は剥離する。23・24 の口縁端部はナデで面取りする。24 の内面には黒斑あり。25 は器壁が非常に厚いもので、口縁端部はさらに肥厚させている。口縁端部に黒斑あり。27・28 はわずかに平底を残すもの。27 の外面と断面に顕著な被熱痕がある。外面にススが付着する。28 も被熱痕・スス及び黒斑が認められる。

29・30 は手づくね土器で、色はいずれも灰黄褐色。

５号竪穴住居跡（図版 10・12・13、第 34 図）

１区北の中央北西寄りに位置し、７号住居跡を切る。南には 15 号住居跡東包含層が存在する。住居の規模は主軸長 4.3 m、南北 4.5 m、深さ最大 32㎝を測るほぼ正方形住居跡である。住居主軸方位は北から 40° 西に振れる。西壁中央には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。住居西壁は住居廃絶後壁上端が住居内側に 10㎝ほど崩れていたことから、内側のラインが本来の住居壁となる。

床面ではピットを 12 基検出したが、Ｐ６・９・11 は住居床面のしみをピットと間違え掘削したもので、位置と深さからＰ２～５が主柱穴となる４本柱の住居である。床面直上から若干浮いた位置で、土師器甕（９・11）が出土した。埋土は明るめの灰褐色粘質土で、床面近くには焼土・炭が多く溜まっていた。住居全面で床下掘り込みを確認した。

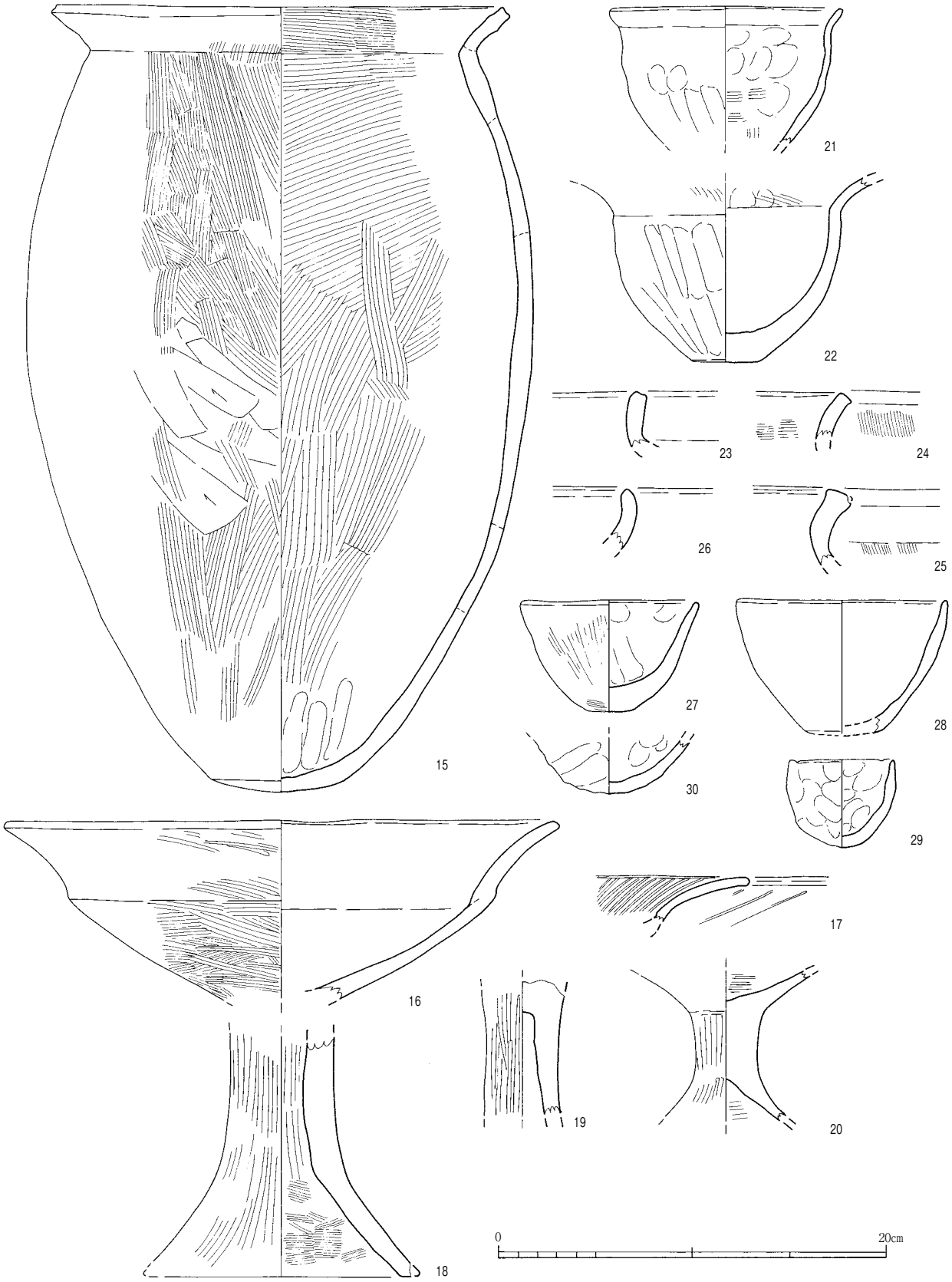
１は小田・長編年Ｉ - ３期の須恵器高坏口縁部で、土師器甕頸部内面の稜も認められるため、住居の時期は、５世紀末に近い、５世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版 12・13、第 34 図）

住居西壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部から北に向かって延び、住居北西隅から竪穴住居の外に出る構造となる。

カマド袖は、左袖一部を上層ピットにより壊され、左袖はやや先端を掘り失っているが、基底部の粘土の範囲から壁から 93㎝直線的に突出し、右袖は壁から 91㎝やや内傾して突出する。燃焼部奥壁の手前 45㎝に三角形の河原石を利用した石製支脚を設置し、支脚部分で袖間は 54㎝を測る。支脚は 29 × 22㎝、深さ９㎝の支脚ピットで固定されるが（赤色ピット）、石製支脚の長さ 17㎝うち、支脚ピットには６㎝ほど埋められている。この支脚の右手前の一部に小さい硬化面とその周囲に白色粘土に焼土が 80％混じり、炭が

文中写真７　５号住居跡カマド完掘状況（南から）



第 33 図　5 次 1 区　4 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

少量混じる土で構成された焼面（アミ）が認められる。

煙道部は燃焼部奥壁から長さ 171cm、燃焼部主軸からほぼ直角に曲がり延びる。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同様、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造

である。煙道部は下端で幅８㎝前後と幅狭いもので、断面はＵ字形を基本とする（７・８層）。Ｄ－Ｄ′で上端が狭くなることから煙道部トンネルの高さは15㎝程度になると思われる。煙道部先端は緩やかに斜めに上がるが、住居外まで煙を排出するにはあと20㎝以上の長さが必要であることから、煙道部先端から住居外まで別の構造物（竹等）が存在したのであろう。煙道部埋土には炭はほとんど混じらず、７層は煙道部天井が崩れた土、８層は使用時の堆積土である。

カマド埋土は、１～６層がカマド天井崩落土、８層がカマド使用時の堆積土となり、住居廃絶時にカマド燃焼部上部を破壊していると想定される。

出土遺物（図版52、第35図）

須恵器（１）　１は高坏口縁部である。口縁端部をわずかに外反させ、口縁下に位置するナデによる鈍い突帯下に四条の櫛描波状文を施す。色は灰色。

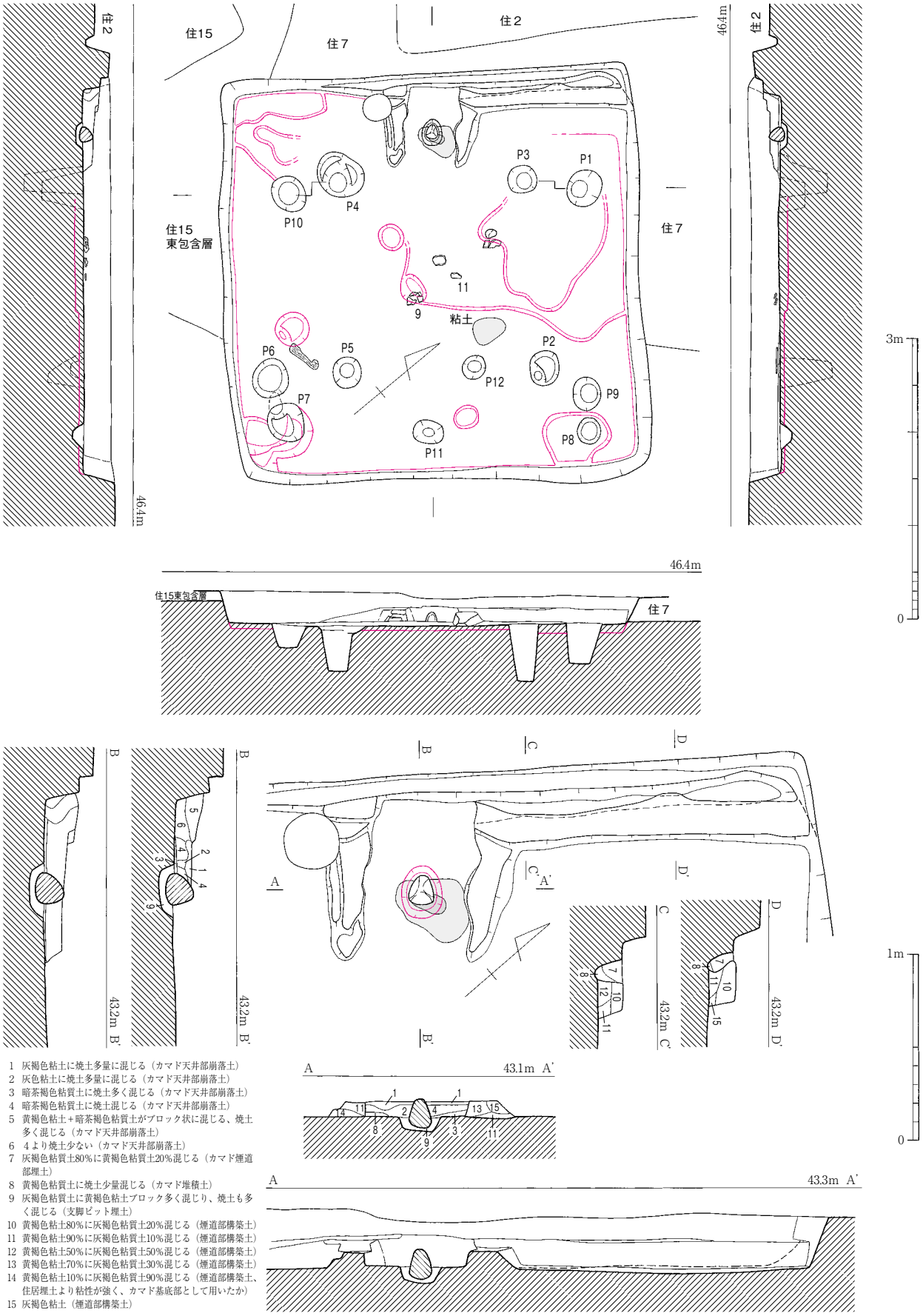
弥生土器・土師器（２～31）　２～12は甕である。５・11は黒斑、７・９・10は被熱痕、６・７・10～12はスス、７・９・12の内面には炭化物が認められる。色は２～７・９～12が灰黄褐色、８が茶褐色を呈する。２～６は頸部内面の稜がなだらかなもの。２の頸部内面にはハケが認められる。３・４の胴部内面はケズリを施す。５・６は口縁部内外面にハケを施す。６は口縁部全体が肥厚し、細かいハケを内外面施す。口縁端部はナデで面取りする。７は内面頸部までケズリを施し、口縁部内面には粘土継ぎ目痕あり。10の胴部外面には短いハケを施している。11は短く外反する口縁端部をナデで面取りする。12は小型甕で、胴部外面には工具ナデ、内面はケズリで調整する。カマド内出土。13は甑底部で、半円形の孔を２ヶ所開けている。桟の断面は三角形である。内外面にはケズリを施す。色は橙褐色。

14は高坏口縁部で､口縁部と坏部との境の稜は鋭い。内外面はハケで調整する。色は暗灰黄褐色。15は碗で、外面下位はケズリを施し、その後内外面粗めのミガキ、さらに内外面に黒化処理を行っている。生地は橙褐色。16は粗製鉢。外面には被熱痕があり、色はこげ茶。

17～31は弥生後期終末～古墳時代前期前半の土器で混入品。17・18は在地系袋状口縁壺。17は口縁端部をさらに短く外反させるもの。口縁部外面には暗文状のミガキを施し、屈折部にはヘラ工具による浅い刻みを施す。色は灰黄褐色。18は口縁部外面にヘラ工具による山形文を刻んだものか。小片のため、全体の文様構成は不明である。色は灰黄褐色。カマド粘土内出土。19はＶ様式系壺底部で、底部輪台技法で成形したと考えられる。外面はタタキ、内面にはミガキを施す。色は灰黄色。20は在地系甕で、口縁端部を工具で浅く刻んでいる。胴部内面はケズリを施す。外面にはススが付着。色は灰黄褐色。21は在地系高坏口縁部で、器壁は非常に薄い。坏部内面下位はミガキを施している。外面は黒化する。色は灰黄褐色。

22～26は甕である。22・26の口縁端部は肥厚させる。22・25・26の外面にはススが付着する。色は22・23・26が灰黄褐色、24の外が暗茶褐色、内が暗灰黄褐色、25が黄褐色を呈する。23・24は在地系甕である。23は器壁が厚く、内湾気味に口縁部が立ち上がり、口縁端部はナデで面取りする。24は口縁端部をさらに外反させるもので、内外面ハケで調整する。26・26は布留系譜の甕口縁部で、25は内面頸部近くまでケズリを行う。26は口縁端部を肥厚させる。口縁部外面には粘土継ぎ目痕あり。胴部内面のケズリは頸部まで施す。

27は高坏口縁部で、色は橙褐色。28は布留系直口鉢であるが、器壁が厚い。外面は被熱のため、調整不明。内面には暗文状のミガキを施す。色は灰黄褐色。29は在地系外反口縁鉢で、外面は被



1 灰褐色粘土に焼土多量に混じる（カマド天井部崩落土）
2 灰色粘土に焼土多量に混じる（カマド天井部崩落土）
3 暗茶褐色粘質土に焼土多く混じる（カマド天井部崩落土）
4 暗茶褐色粘質土に焼土混じる（カマド天井部崩落土）
5 黄褐色粘土＋暗茶褐色粘質土がブロック状に混じる、焼土多く混じる（カマド天井部崩落土）
6 4より焼土少ない（カマド天井部崩落土）
7 灰褐色粘質土80%に黄褐色粘質土20%混じる（カマド煙道部埋土）
8 黄褐色粘質土に焼土少量混じる（カマド堆積土）
9 灰褐色粘質土に黄褐色粘土ブロック多く混じり、焼土も多く混じる（支脚ピット埋土）
10 黄褐色粘土80%に灰褐色粘質土20%混じる（煙道部構築土）
11 黄褐色粘土90%に灰褐色粘質土10%混じる（煙道部構築土）
12 黄褐色粘土50%に灰褐色粘質土50%混じる（煙道部構築土）
13 黄褐色粘土70%に灰褐色粘質土30%混じる（煙道部構築土）
14 黄褐色粘土10%に灰褐色粘質土90%混じる（煙道部構築土、住居埋土より粘性が強く、カマド基底部として用いたか）
15 灰褐色粘土（煙道部構築土）

第 34 図　5 次 1 区　5 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60･1/30）

熱する。色は茶褐色。30 は底部が尖底の粗製鉢で、器壁は非常に厚い。内外面ナデ調整で、外面には被熱痕あり。色は灰黄褐色。31 も在地系粗製鉢で、口縁部内外面に指押さえの成形痕が顕著に残る。外面はタタキ後ナデで調整し、後内面の一部をハケで調整する。外面にはススが付着し、色は暗灰黄褐色。カマド支脚ピット内出土。

６号竪穴住居跡（巻頭図版２、図版 13 ～ 15、第 36 図）

１区北東端に位置し、10 号住居跡を切る。住居北東約１/２が調査区外であるが、住居の規模は主軸長 4.04 ｍ以上、東西 4.55 ｍ以上、深さ最大 50㎝を測り、深さからすると１区の中で最も残りの良い方形住居跡である。住居主軸方位は北から 78° 西に振れる。西壁には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。カマドと対面する位置である南壁際に焼土塊があるが、周囲に炭化物が散らばることから、住居廃絶時に不要な建築材等を焼いた痕跡と思われる。

住居床面は貼床ではなく、地山の黄褐色粘質土を平坦にして床面を造り出している。その直上には炭層が広がっていた。床面ではピット３基検出し、Ｐ１・２は位置と深さから主柱穴となる４本柱の住居と想定される。なおＰ３は平面形が方形で、Ｐ２に近接することから、建て替えを示している可能性がある。またＰ１の断面は直立するが、Ｐ２は内側に傾斜する断面であるためこの柱穴構造が竪穴住居上屋構造にどのように反映されたかは不明である。また壁周溝は南東部で途切れたようになっているが、図化し忘れたもので、調査では住居南壁際を巡ることを確認している。

床面から５㎝ほど浮いた位置で土師器碗（17）と高坏（13）、大甕底部（９）が出土し、床面からの高さ 40㎝ほどの南西壁際で完形の曲刃鎌（第 142 図１）が出土した。住居埋土は灰黒色粘質土である。床面掘り込みは３ヶ所検出した。

住居の時期は、１・２は小田・長編年Ⅰ - ３期古相、また土師器甕内面頸部に稜があり、土師器甑は器高と口径がほぼ１対１となり、把手の位置高い。また土師器碗の器壁は薄いことから、５世紀後半に位置づけられる。なお、土師器碗に行なう黒化処理は本遺跡では初現となる。

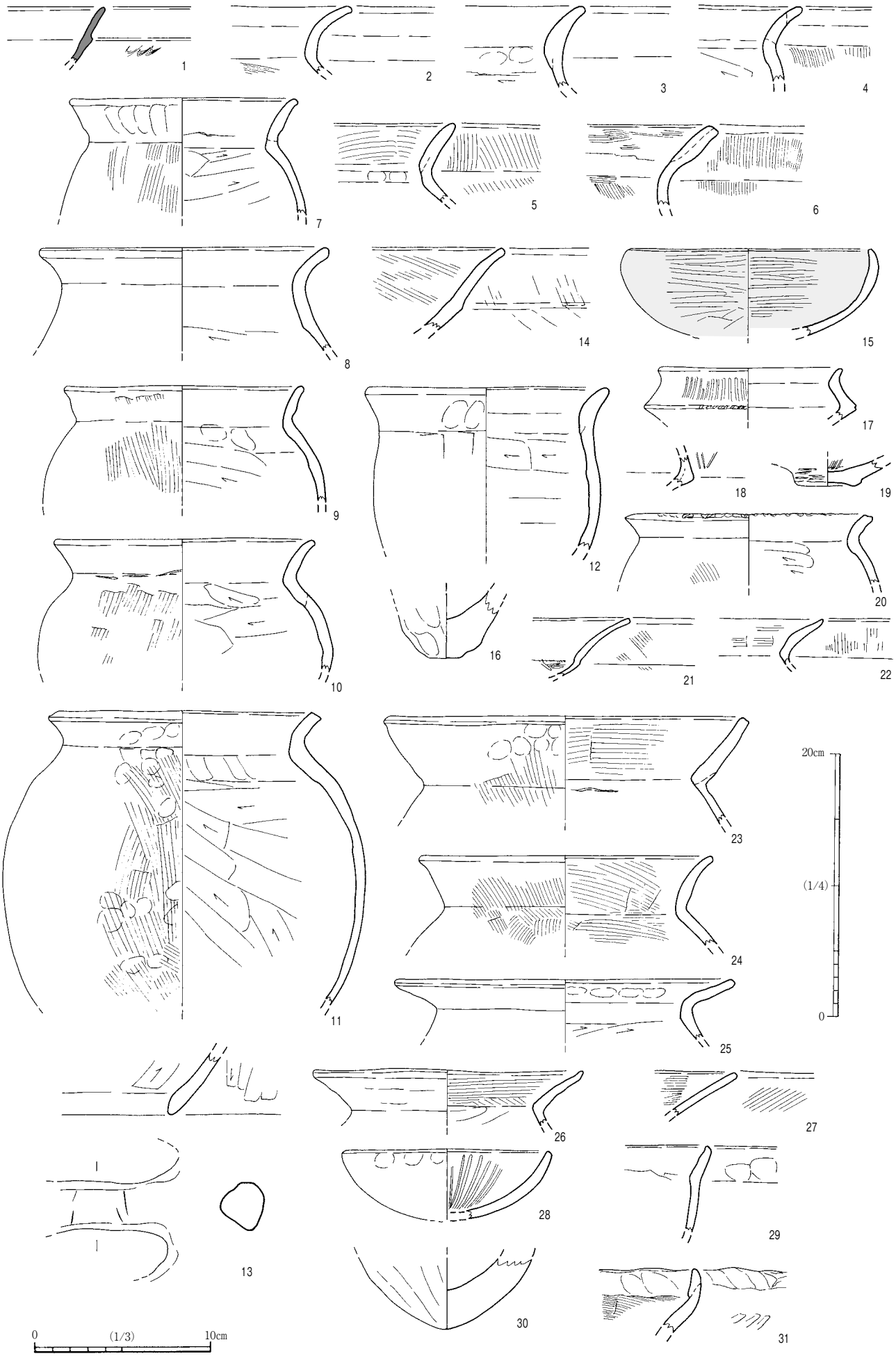
カマド（図版 14、第 36 図）

住居西壁に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部主軸からほぼ直角に曲がり北に延び、調査区外で未調査であるが、住居北西隅から竪穴住居の外に出たと思われる。

検出段階ではカマド燃焼部全体が灰黄色粘土で 10㎝ほど覆われており、燃焼部の輪郭も平面では検出できないほどであった。全て図化できなかったが、支脚前後にある１層がカマドを被覆した土となる。また支脚前後にカマド使用時の灰層である３層が存在することから、カマド廃絶時には灰をかき出さず、そのままでカマド封じ行為を行った可能性がある。

カマド袖は、壁から左袖は 118㎝、右袖は先端を若干掘り失っているが 117㎝直線的に突出する。カマド燃焼部奥壁及び煙道部の一部は住居廃絶後、壁上端が一部住居内側に 15㎝ほど崩れ落ちていたことから、内側のラインが本来の住居壁となる。

燃焼部奥壁の手前 70㎝に河原石を利用した石製支脚を設置し、支脚部分で袖間は 58㎝を測る。支脚は床面上にそのまま置かれたもので、固定するピットはなく、高さも 10㎝と低いものである。支脚前面には 27 × 15㎝の範囲に広がる細長い硬化面（濃いアミ）とその周囲には灰色粘土に焼土多く混じり、炭がごく少量混じる土（薄いアミ）で構成された焼面が認められる。支脚上では土師器甑（10）が出土し、カマドに使用されたものである可能性がある。また土製紡錘車（第 141 図



第 35 図　5 次 1 区　5 号竪穴住居跡出土土器実測図（17 ～ 21 は 1/4、他は 1/3）

15）の出土から、カマド廃絶時の祭祀行為の存在を示す。

煙道部は燃焼部奥壁から長さ160cm検出し、さらに北に延びるが、煙道部先端は調査区壁際の近い位置にあると予想される。３号竪穴住居跡カマドと同様、検出段階では煙道部一面粘土広がっていたが、３号住居跡とは異なり、煙道部天井が落ち込んだものである。第36図では黒が検出段階の粘土状況、赤が天井を取り外した段階の状況を図化している。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造である。

煙道部は幅25cm前後を測る。粘土で構築された煙道部壁は粘土を互層状に積み上げるが、16層は住居埋土と類似する粘性の強い土で構築する。このことは、カマド構築の際に基礎として粘性の強い土を用い、粘土のみで構築したのではないことがわかる。また粘土が不足したことによる利用の可能性も考えられる。煙道部埋土である13層はカマド堆積土である、炭は少量しか混じらず、11層の煙道部天井部崩落土が主体となる。

カマド埋土は、カマド廃棄時に住居埋土である７層がまず流入し、さらにカマド天井崩落土が10層と７～９層、４～６層と大きく３つに分層できることから、廃絶時に大きく３回燃焼部天井を壊している可能性がある。なお、先述の通り煙道部天井も落ち込むが、カマド廃絶行為に伴い壊しているのかは判断できなかった。

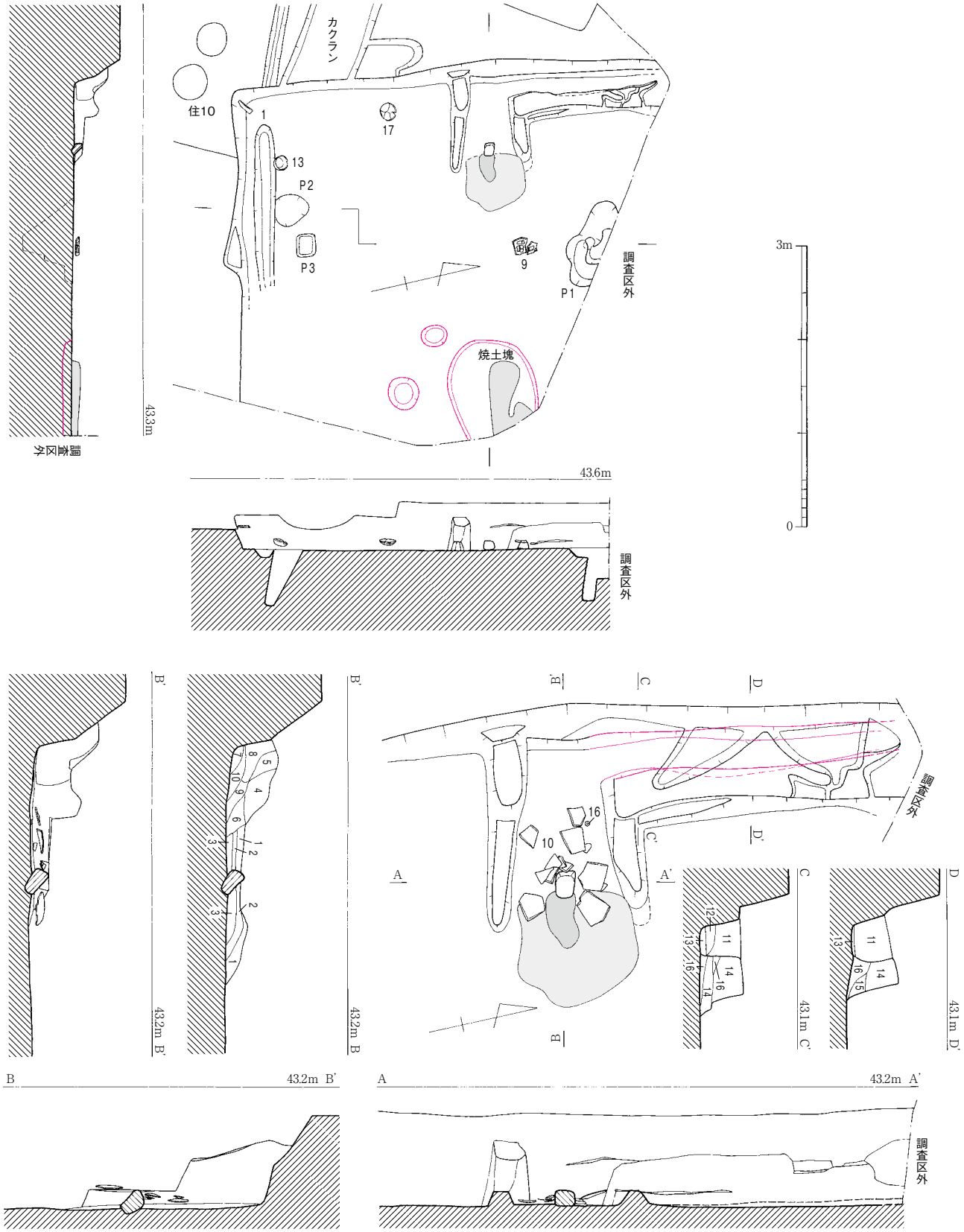
出土遺物（図版53、第37図）

須恵器（１・２）　１は天井部に逆高台状のつまみを付けた坏蓋である。天井部との境には鋭いが低めの稜を巡らし、口縁内端部はナデにより窪む。復元口径12.5cmで、色は青灰色。２は口縁端部を上下に拡張させた小型甕口縁部。色は灰色。

土師器（３～27）　３は直口壺の頸部で、口縁部内外面はハケ後横ナデを施す。色は黄茶褐色。４～９は甕である。色は４が茶褐色、５・９が灰黄褐色、６～８が黄褐色を呈する。４は直立気味の口縁部。５の胴部内面はケズリを施したか。６は強く外反させたもの。カマド煙道出土。８は内外面被熱を受ける。９は大甕底部で、外面は丁寧なナデを施す。外面には黒斑あり。10は甑で、復元口径29.2cmを測る。外面は工具ナデ、内面はケズリを施す。胴部中位には挿入式の把手を付けていたが、外れている。外面には黒斑とススが認められる。色は灰黄褐色。カマド内出土。

11～15は高坏である。色は11・13が橙褐色、12・14が黄橙色、15が灰黄褐色。11・12は器壁が厚いもの。11は脚部との接合方法は充填法である。12は屈曲部割れ口にハケを施しており、口縁部と貼り付けやすくしている。13は碗形の坏部で、その内外面丁寧なミガキを施すが、内面の方がより丁寧である。脚部とは付加法で接合する。外面は被熱及びススが付着する。14・15は脚部で、15は内外面及び断面まで被熱する。

16～20は碗である。色は16がこげ茶色、17が灰黄褐色、18が橙褐色、19が灰黒色、20が茶褐色を呈する。16は口縁部を短く外反させるもので、外面下位はケズリを施した後内外面粗いミガキを施す。小片のため、径不安。17～19は口縁部を内湾させるもの。17は完形品で、口径14.4cm、器高5.8cmを測る。外面下位はケズリ後外面全体ハケを行い、内面は工具ナデのちナデを施す。口縁端部はナデで面取りする。18の外面下位はケズリを施す。19は内外面ミガキ後黒化処理を行う。20は口縁部を弱く外反させるもの。21・22は鉢である。21は外反口縁鉢で、口縁部内外面にはミガキを施す。色は黒灰色。22はほぼ完形の平底の直口鉢で、精製品。口径6.8cm、器高4.7cmを測る。内外面に粗いミガキを施す。



1 灰黄色粘土（カマドを被覆土）
2 橙褐色粘土（焼土）
3 灰層（カマドから灰をかき出した土）
4 灰黄褐色粘質土に灰黒色粘質土と焼土･炭がブロック状に混じる
5 4に焼土・炭混じらない
6 灰黄褐色粘質土に焼土・炭少量混じる
7 灰黒色粘質土
8 灰黒色粘質土に焼土多く混じる
9 灰黄褐色粘質土に灰黒色粘質土と焼土がブロック状に混じる
10 黄褐色粘質土（カマド天井崩落土）
11 黄褐色粘質土80%＋灰黒色粘質土20%（カマド煙道部天井崩壊土）
12 灰黒粘質土（崩落した住居壁）
13 黄褐色粘質土50%＋焼土50%　炭少量混じる（カマド堆積土）
14 灰黄褐色粘質土(黄褐色粘土と灰黒色粘質土(住居埋土)が混ざったもの)(煙道部構築土)
15 黄褐色粘土（煙道部構築土）
16 灰黒色粘質土で粘性が強い（カマド基盤土、煙道部構築土）

0　1m

第 36 図　5 次 1 区　6 号竪穴住居跡・カマド実測図　(1/60・1/30)

23 ～ 27 は手づくね土器の鉢である。色は 23 が橙褐色、24・26・27 が灰黄色、25 は灰橙色を呈する。23 は完形品で、口径 3.5㎝、器高 2.2㎝を測る。27 の外面には黒斑あり。

弥生土器（28） 28 は弥生後期の在地系大甕肩部片で、混入品。肩部に端部をヘラ工具による刻目を入れた三角突帯を巡らす。色は灰黄褐色。

７号竪穴住居跡（巻頭図版４、図版 15、第 38 図）

７号竪穴住居跡は１区北の中央北西寄りに位置し、２・３・５・11 号住居跡に切られ、４号住居跡を切る。上層の住居群により大きく壊され、住居東壁は検出できなかったが、４号住居跡南西で土器が集中出土しており、ちょうどきれいに土器の出土が途切れる部分があったため、その箇所に東壁が存在した可能性が高く、破線で示している。住居規模は東西 6.94 ｍ前後、南北 5.7 ｍ、深さは西壁で 25㎝を測るやや東西に長い長方形住居となると想定される。

住居床面は張り床ではなく、地山である黄褐色粘質土を平坦にすることで床面としていた。その床面ではピット 26 基検出し、位置と深さからＰ９・16・20・24 が主柱穴となる４本柱住居になる可能性が高いが、その他にもピット内が一段掘り下がる柱痕跡のあるピットＰ２・21・22・25 があり、主柱穴以外の補助柱が存在した可能性がある。

住居中央のＰ１は小さいながらも炉で、埋土は灰褐色粘質土に焼土が混じる。住居南西のピットがない範囲には、ベッド状遺構が存在した可能性がある。他の壁にもベッド状遺構を付設していた可能性があるが、３・５号住居跡によって大きく壊されているため、確認できなかった。住居南壁のＰ７付近で出土した土師器甕（10）は床面直上から出土した。住居埋土は暗めの灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みを３ヶ所で確認した。

住居南東隅、南壁から 30㎝ほど離れた位置で、後漢鏡である内行花文鏡の破鏡が出土した。出土時には弥生時代後期終末の高坏口縁部片（16）の下で、ほぼ水平状態で出土したものの、住居床面から 10㎝ほど浮いた位置にあった。その周囲を精査したところ、破鏡に伴う遺構は確認できなかったことから、住居埋没時に破鏡も廃棄した可能性が高いものと考えられる。

本遺跡では、第２次調査Ⅱ区 66 号竪穴住居跡の検出面にほど近い埋土中から同じ内行花文鏡の破鏡（第６図）が出土している。66 号住居跡は古墳時代中期前半に埋没した住居であり、しばらくの伝世期間が想定されることは本事例と異なる。

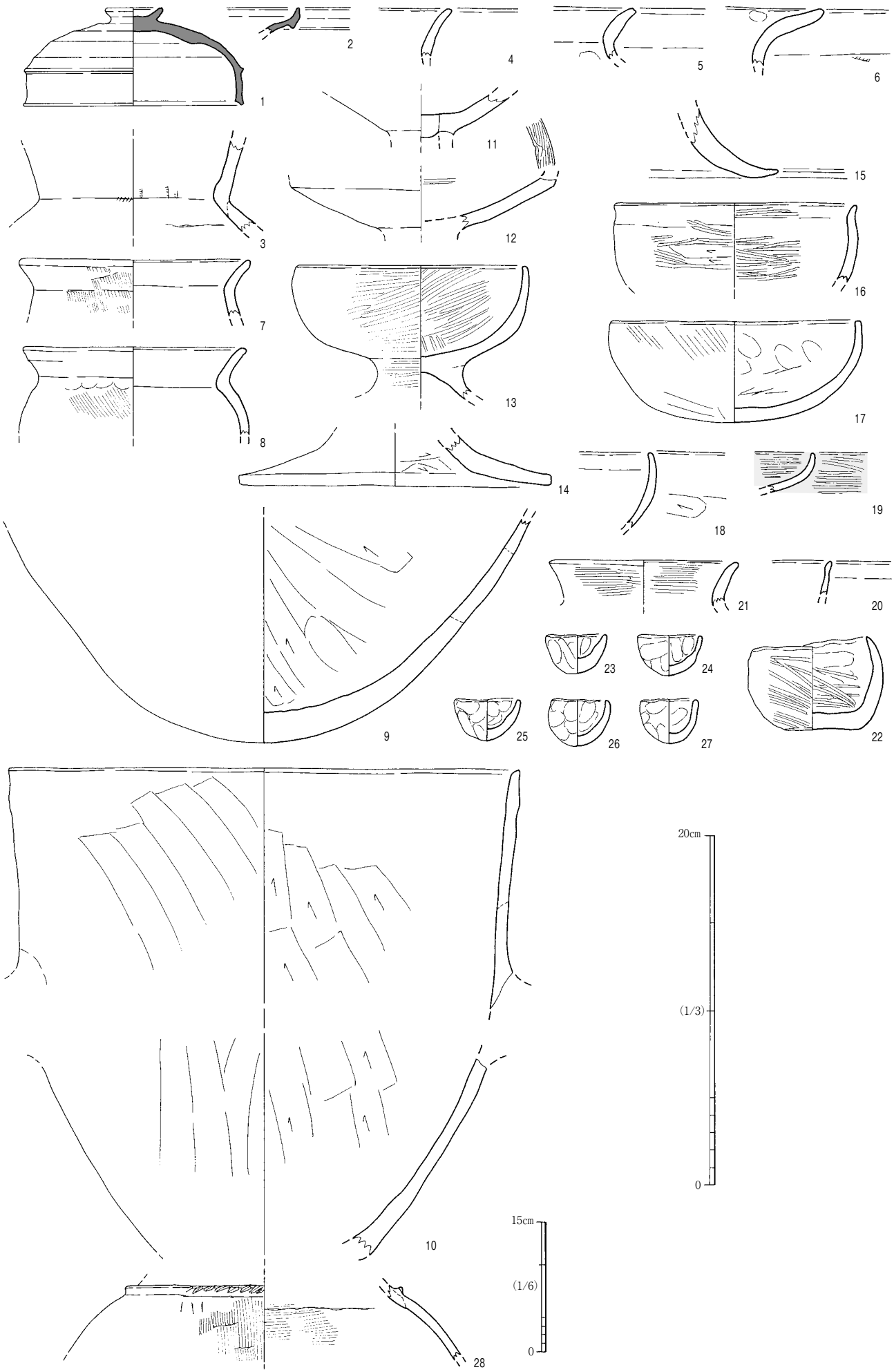
住居の時期は、在地系と畿内系土師器が共伴しており、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 53、第 39 図）

土師器（１～ 24） １・２は在地系二重口縁壺口縁部で、いずれも弥生系譜の二重口縁部を痕跡程度に作り出している。色はいずれも灰黄褐色。１は器壁が厚く、口縁端部を口頸部上に乗せた状態で貼り付けるが、内面は屈折部がないように粘土を充填し、なだらかになっているため、外面の擬口縁部が突帯状に強調されている。２は内外面に粘土継ぎ目痕、指押さえ痕が明瞭に残る粗製のもの。内面のハケは粗く、後一部ナデを行う。外面には被熱痕と、内外面にススが付着する。

３～５は在地系壺で、いずれも色は灰黄色である。３は器壁の厚い短頸壺。４は直口である。５は口縁端部がナデで窪む。６は畿内系中型直口壺で、胴部外面上位のハケは短く不定方向に施す。胴部内面にもハケを施すが、頸部上下は指押さえ痕が明瞭に残る。色は橙褐色。

７～ 15 は甕である。10 は黒斑、８・10・11 ～ 13 はススが認められる。色は７・11 ～ 13 が灰



第 37 図　5 次 1 区　6 号竪穴住居跡出土土器実測図（28 は 1/6、他は 1/3）

黄褐色、８・９が灰橙褐色、10 が褐色、14・15 が橙褐色を呈する。８は口縁端部をナデで面取りし、胴部下位はハケ後ナデを施す。９の胴部内面のハケ目は粗い。10 はＶ様式系・布留系・在地系の要素が合わさったもので、復元口径 18.8㎝、復元器高 26.5㎝に復元される。口縁端部を上方に肥厚させ、胴部外面下位は粗いハケ、上位は細かいハケと上下でハケ原体が異なる。胴部内面下位は工具ナデ､上位は工具ナデのちナデを施したもの。内面には炭化物が付着する。13 は器壁が厚く、古墳後期甕の可能性がある。14・15 は小型の粗製甕である。14 の外面は工具ナデのちナデ、内面はナデで調整し、指押さえ痕・粘土継ぎ目痕が顕著に残る。15 も内外面工具ナデ後ナデを行う。

16 ～ 21 は高坏である。色は 16・18・19 が灰黄褐色、17 が暗黄茶褐色、20 が淡橙褐色、21 が黄褐色～橙褐色を呈する。16 ～ 18 は在地系高坏坏部。16 は破鏡の上に重なるように出土した。屈折部は段になり、外面はハケのち横ナデ、内面はハケ後横ミガキ後暗文状ミガキを一定間隔で施している。17 の内外面はハケ後暗文状のミガキを施す。内外面が被熱する。18 は外面に黒斑と被熱痕あり。外面には暗文状のミガキを施す。19 ～ 21 は脚裾部。19 の外面には深いハケ目を施し、内面はミガキを施す。20・21 は畿内系か。20 は内外面にハケを施し、外面のみ縦ミガキを行う。21 は内外面にハケを施した後縦ミガキを行う。22・23 は鉢で、いずれも色は灰黄褐色。22 は直口鉢口縁部で、外面は深めのハケを施す。23 の内面は粗いミガキを行う。24 は平底の手づくね土器。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色を呈する。

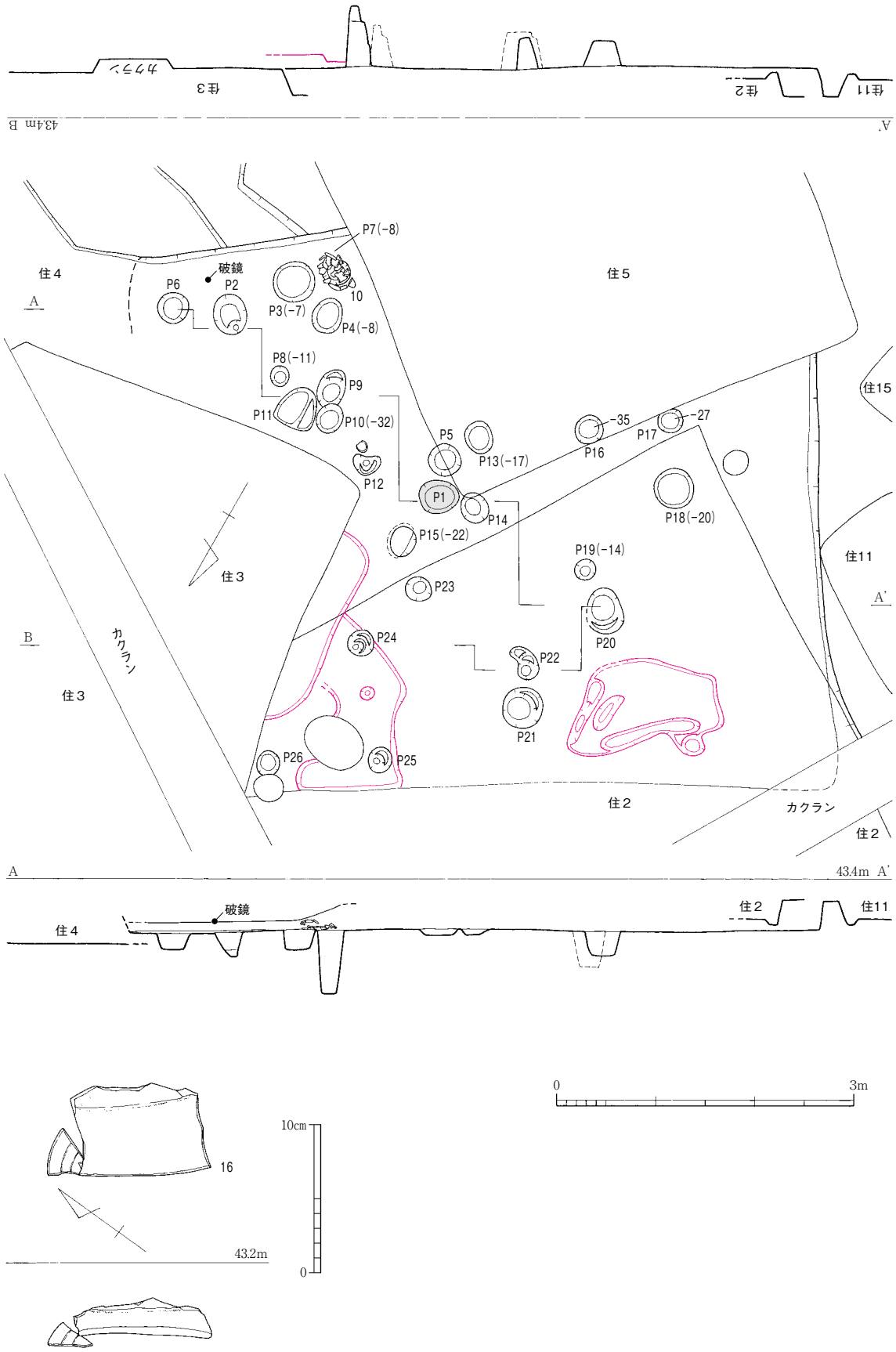
10 号竪穴住居跡（図版 13・14・16、第 40 図）

１区北東の壁際に位置し、６号住居跡及び１号土坑に切られ、16 号住居跡、２号土坑を切る。調査当初は３棟の竪穴住居が切り合うと考え調査したため、住居西壁の一部、南壁のほとんど、住居南側床面の張り床部分５㎝ほどを掘り失っている。また当初の検出ラインを誤ったため､掘り誤った３棟から出土した土器は、当住居覆土上層出土土器として報告する（第 41 ～ 43 図）。掘り失った住居西壁は、残存する壁周溝と北西壁から破線で復元し、同じく南壁は壁周溝が途切れる部分と南東隅で検出した壁ラインが一致するため、南壁も破線で復元した。

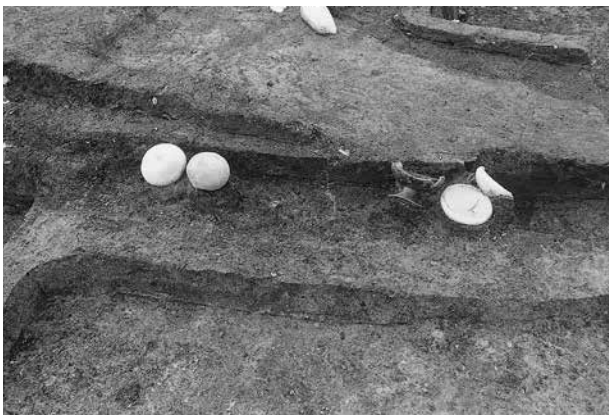
約１／３強が調査区外であるが、住居の規模は主軸長 4.7 ｍ以上、南北６ｍほど、深さは 13㎝を測る方形住居跡である。住居主軸方位は北から 19° 西に振れる。西壁には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。

住居床面ではピット 10 基検出し、位置と深さからＰ２・３が西側の主柱穴列となる４本柱の住居と想定される。なお、Ｐ２・３はいずれも径 60㎝を超える規模の大きなピットであり、かつＰ３は東西にテラスを持ち、平面形も長楕円形となることから、住居廃絶時に柱を抜き取った可能性を考えている。壁周溝は西壁と北壁を巡り、西壁周溝の一部はカマドの下層となることから、壁周溝を最初に掘り、その後カマドを造り付けたことがわかる。住居南側を中心に床面から 10㎝ほど浮いた位置で大量の土器が出土しているが（第 44 ～ 47 図）、出土位置とレンズ状堆積内から出土していることから、ほとんどが住居埋没時に投

文中写真８　10 号住居跡カマド完掘状況
（南東から）



第 38 図　5 次 1 区　7 号竪穴住居跡（1/60）・破鏡出土状況（1/4）実測図



文中写真９　10 号住居跡カマド煙道出土状況（東南東から）

棄されたものと考えられる。住居埋土は灰黒色粘質土で、土器が集中して出土した南側を中心にレンズ状堆積が認められる。住居北西で床面掘り込みを確認した。覆土からスクレイパー（第 140 図３）、砥石（第 140 図５）が出土した。

出土土器では、須恵器では第 41 図 13 は口径が小さく、第 41 図 16 は小田・長編年Ⅰ - ３期であるものの、土師器では甕頸部内面の稜は顕著ではないこと、第 42 図 28・29、第 45 図 20 のように土師器高坏の稜は鈍く、痕跡的であること、土師器高坏の脚柱部は中実になること、土師器碗の器壁はやや厚めであることから、６号住居跡出土土器より新相なものが多い。しかし、第 22 図の基本土層図では６号住居跡が当住居跡を切るため、５世紀末に近い５世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版 16、第 40 図）

住居西壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部から北に向かって延び、住居北西隅から竪穴住居の外に出る構造となる。カマド袖は、壁から左袖は 98㎝、右袖は 114㎝若干外に開き気味に突出する。燃焼部奥壁の手前 70㎝に長楕円形の河原石を利用した石製支脚を設置する。支脚部分で袖間は 77㎝を測り、袖間が広い大型のカマドである。支脚は 41 × 30㎝、深さ 10㎝の支脚ピットで固定されるが（赤色ピット）が、石製支脚の長さ 17㎝うち、支脚ピットには６㎝ほど埋められている。支脚上面で土師器甕（第 44 図 13）が出土した。支脚手前には灰色粘土に焼土が多く、炭は少量混じる土で構成された硬化面が認められる（アミ）。カマドは５㎝ほどの住居貼り床上に造りつけられており、また先述したようにカマド下層に壁周溝が延びている。

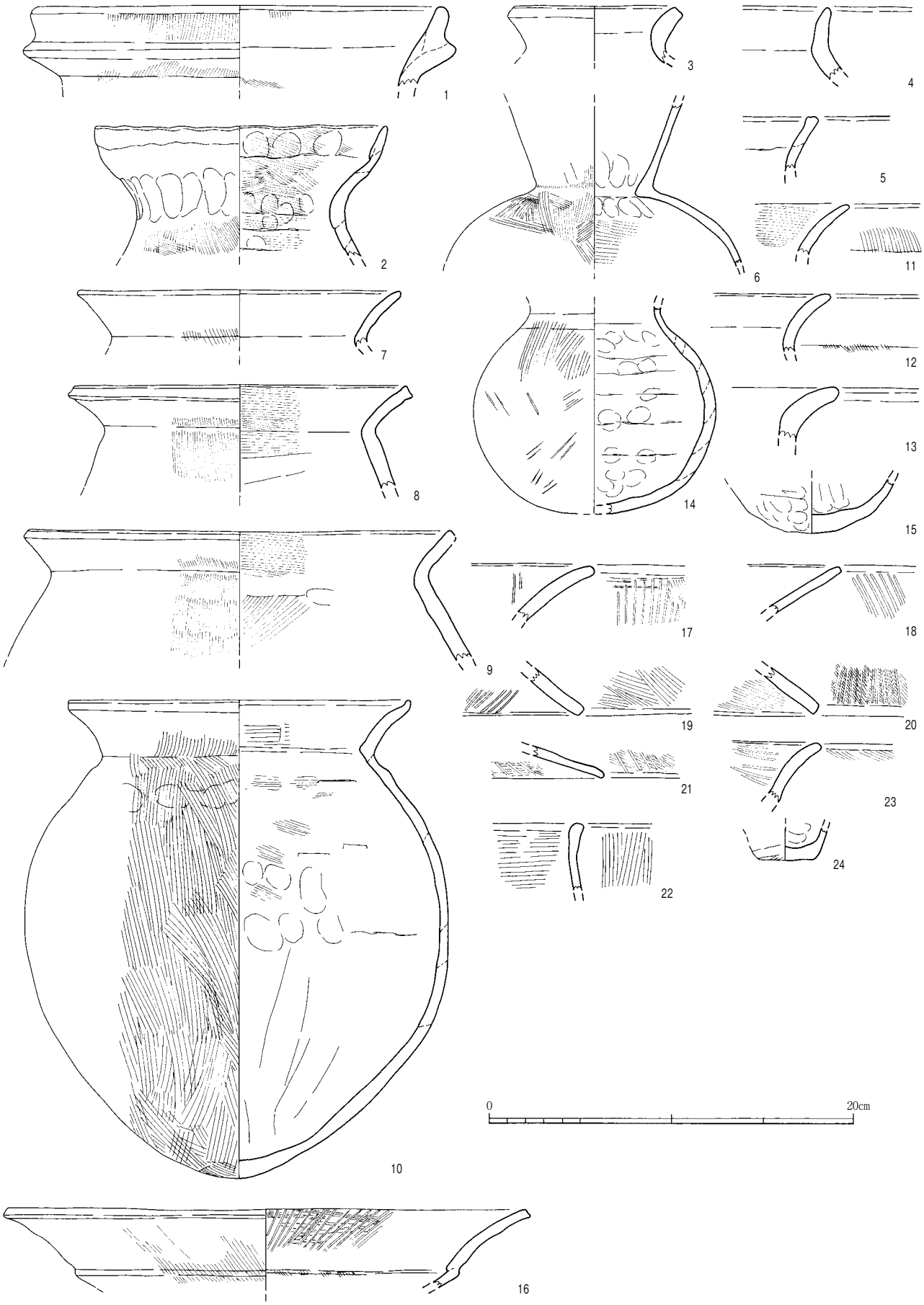
煙道部は一部上層ピットで壊されるが、燃焼部奥壁から長さ 219㎝、燃焼部主軸から若干西に振れて延びる。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造である。煙道部は下端で幅 15㎝前後を測り、断面はＵ字形を基本とする（10 ～ 12 層）。煙道部先端は幅 10㎝程度と狭くなり、緩やかに上がるが、住居外まで煙を排出するにはあと 17㎝以上の長さが必要であることから、煙道部先端から住居外まで別の構造物（竹等）が存在したのであろう。

カマド埋土は１・２・３・７層がカマド天井崩落土、６層がカマド使用時の堆積土となる。煙道部埋土は、12 層は煙道部天井が崩れた土、10・11 層はカマド廃絶後の流入土である。また完形の土師器碗３点（第 47 図 66・72・76）、土師器直口鉢（第 46 図 48）と土師器高坏１点（第 45 図 29）がカマド煙道部内に意図的に入れられた状態で出土している。

このことから、カマド廃絶時に煙道部及び燃焼部上部を大きく壊し、カマド廃絶行為の一つとして煙道内に完形の土器を入れたと想定される。

覆土上層出土遺物（図版 53・54、第 41 ～ 43 図）

先述したように、検出当初は竪穴住居３棟が切り合うと考え調査したが、最終的に竪穴住居２棟が切り合うことが確認された。10 号住居跡上層と考えた住居番号２つが欠番となり、10 号住居跡に収まる範囲で出土した土器が第 41 図１～ 11、16 号住居跡の範囲も一部含むものを第 41 ～ 43 図



第 39 図　5 次 1 区　7 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

12 ～ 69 として報告するが、第 41 ～ 43 図 12 ～ 69 もほとんどが 10 号住居跡に属すると考えられる。

須恵器（１） １は口縁部が立ち上がる坏身で、復元口径 10.6cmを測るが、小片のため径は不安がある。色は青灰色。

土師器（２～ 11） ２・３は甕で、いずれも外面にはススが付着し、色は灰黄褐色。２の胴部内面はケズリ後一部ヘラ工具によるナデを行っている。３は口縁部が「く」の字状になるもの。ケズリは頸部内面まで施す。４は小型の甑で、外面は工具ナデのちナデ、内面下位はケズリを施す。色は黄茶色。５・６は甑の桟で、断面はいずれも楕円形である。５の色は黄褐色、６の色は茶褐色。

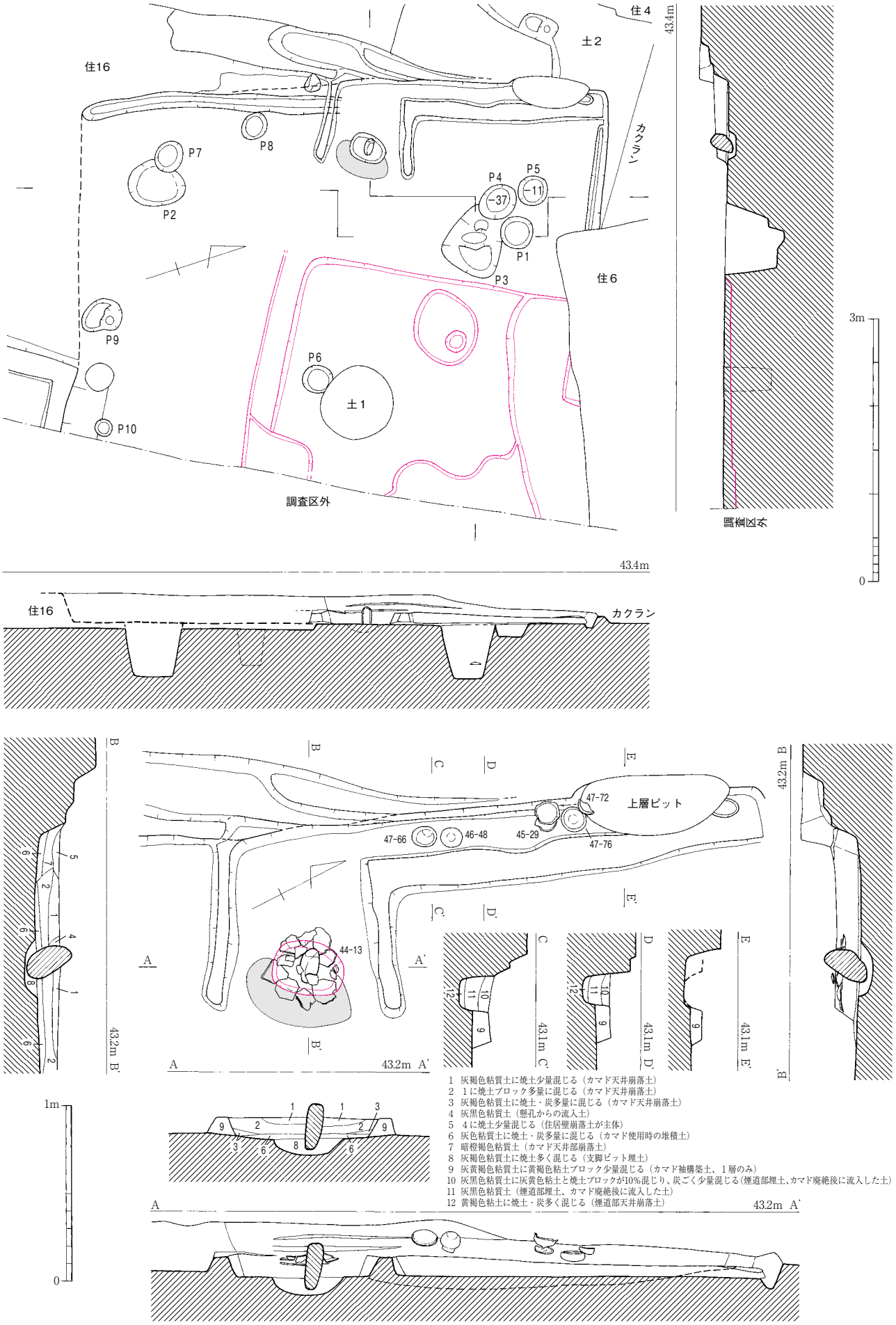
７～ 10 は高坏である。７の色は灰褐色、８・10 が灰黄褐色、９が灰橙褐色を呈する。７は外反口縁の坏部で、内外面細かいミガキを密に施す。８～ 10 は脚部である。８の坏部内面はミガキが残る。９の外面はミガキ後スリップを施す。10 は内外面ナデを行い、内外面、断面とも被熱する。

11 は口縁端部を短く外反させた鉢で、ハケ後外面にはスリップを塗布する。

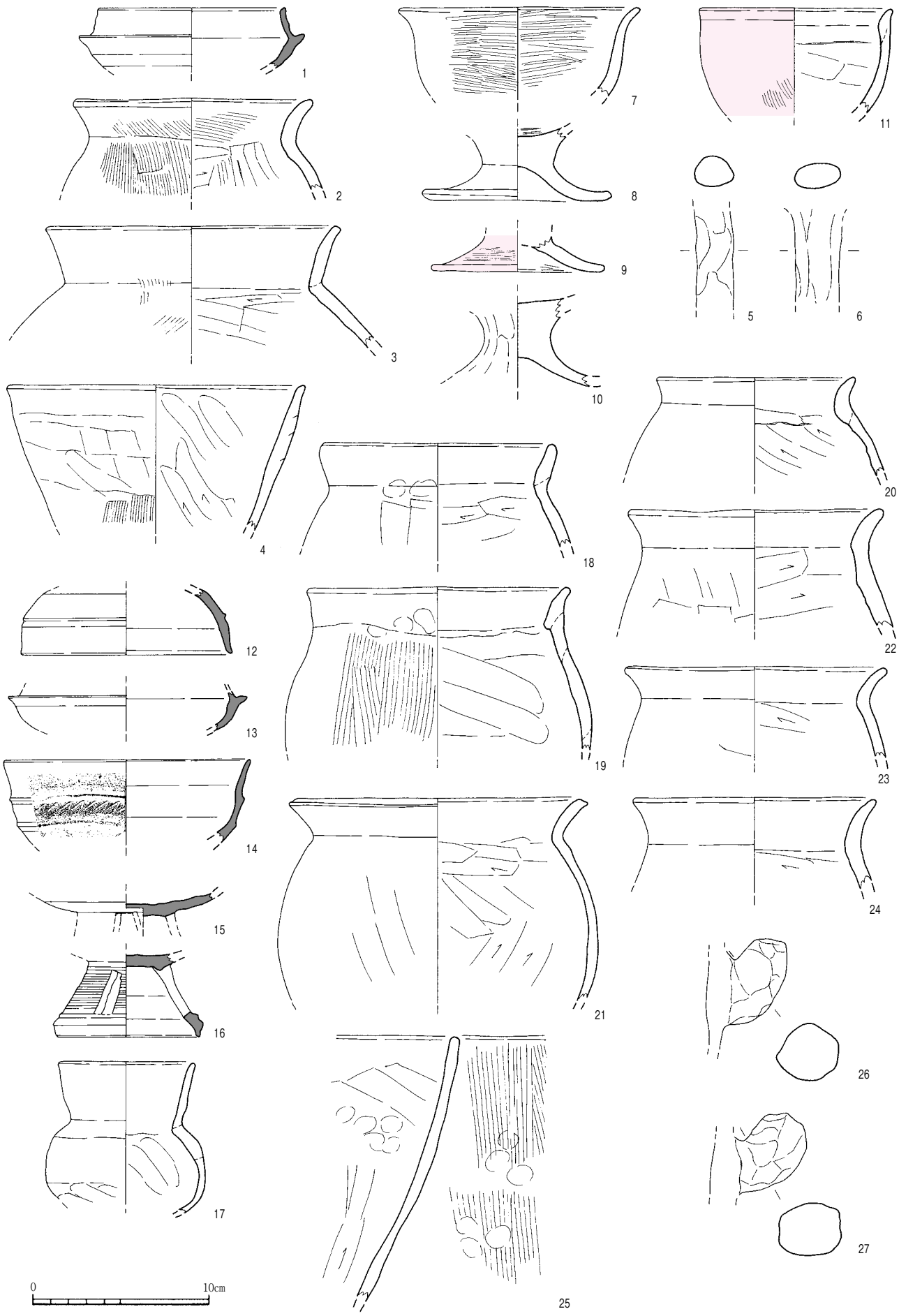
須恵器（12 ～ 16） 色は 12・16 が青灰色、13 ～ 15 が灰色を呈する。12 は坏蓋で、天井部との境には鈍い稜を巡らす。口縁端部は外につまみ出す。復元口径 12cmを測る。13 は坏身で、受け部には自然釉が付着する。14 は無蓋高坏坏部で、体部に巡らした二条のナデによるにぶい稜の間に最大８条の櫛描波状文を施す。15 は高坏坏部の底部で透かしを施すが、孔数は不明である。16 は脚部で、外面には粗いカキ目を施す。透かしは３ヶ所施す。

土師器（17 ～ 69） 17 は小型丸底壺である。外面下位にはケズリを行う。内外面強いナデを施す。色は黄褐色。18 ～ 24 は甕である。23 は黒斑、19・20 は被熱、18・19・20・21 はススが認められる。色は 18 が黄褐色、19・20・23 が灰黄褐色、21 が灰橙褐色、22・24 が褐色を呈する。18 は器壁がやや厚くかつ短く内湾する口縁部で、胴部外面は工具ナデで調整する。19・20 は短く外反する口縁部を持つ。19 は口縁部との接合により、内面頸部が突出するもの。胴部内面はナデを施す。20 は内面頸部までケズリを施す。21 は球状の胴部で、胴部外面は工具ナデ後ナデ、内面は頸部までケズリを施す。22 は器壁が厚く、胴部外面は工具ナデ、内面は頸部までケズリを施す。25 ～ 27 は甑である。25 の内面は工具ナデ後ナデを行い、外面には黒斑あり。色は橙褐色。26・27 は短い把手である。26 の外面にはススが付着する。内面にはケズリを施す。色は茶褐色。27 の色は橙褐色。

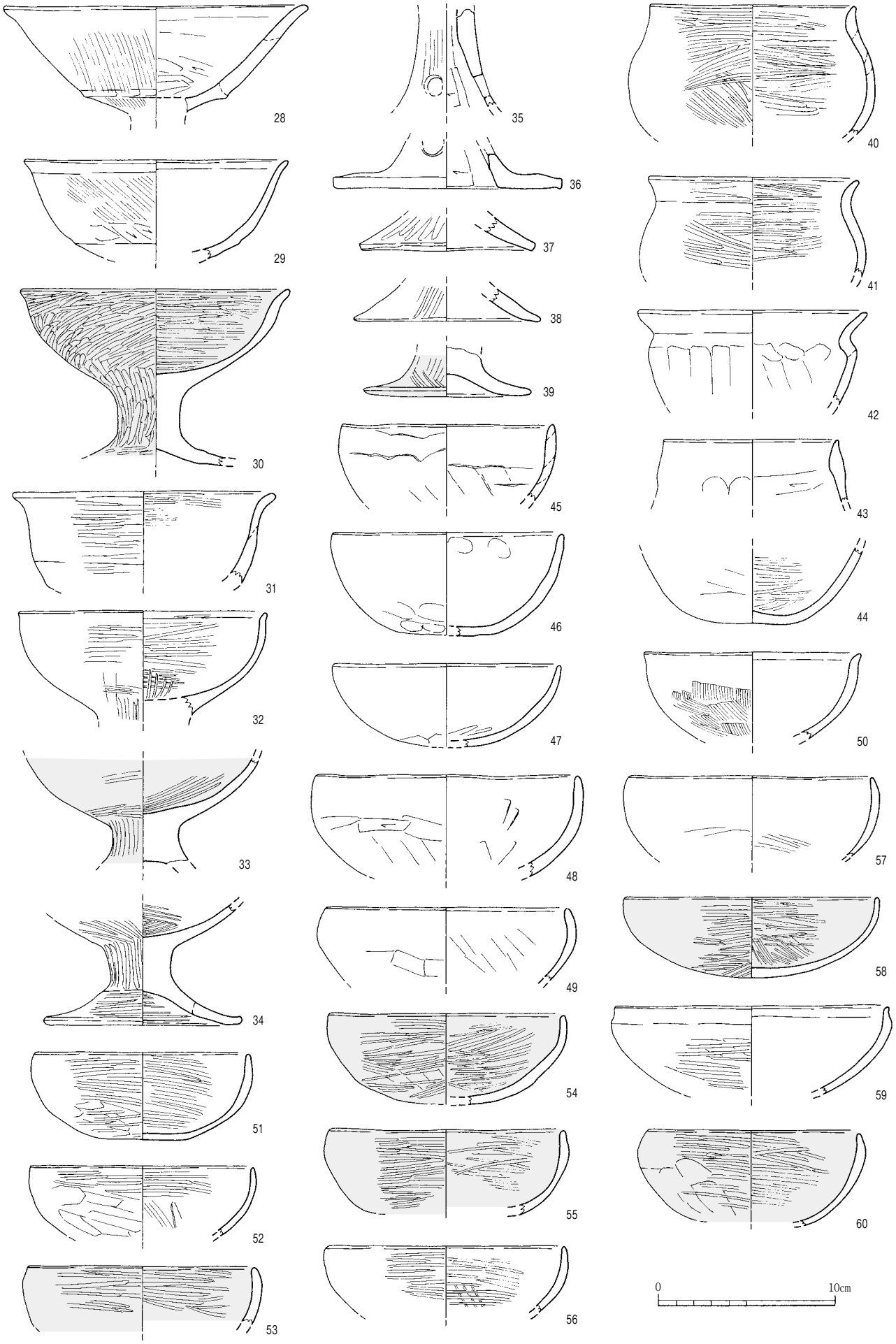
28 ～ 39 は高坏である。30・33・39 は黒化処理を行っている。28・29 にはススが認められる。色は 28 の外は茶褐色、内は灰褐色、29 は橙褐色、30 ～ 33・37 は灰褐色、34 は灰黄白色、35・39 は褐色、36 は灰橙褐色、38 は黄褐色。28 は器壁が厚く、口縁部は逆「ハ」の字状に開く坏部である。屈折部は鈍い稜状に巡る。外面はハケ後横ナデ、坏部内面はケズリを施す。29 ～ 34 は坏部が碗状になるもので、口縁端部が残る 29 ～ 32 はいずれも口縁端部を外反させる。29 はナデで屈曲部の稜をつくり出すもので、外面の一部はハケのちケズリを施している。30 は内外面ミガキを施すが、口縁部外面にミガキ前の指押さえ痕が残る。復元口径 15.2cmを測る。31 は口縁端部を強く外反させる。32 は口縁端部を弱く外反させ、外面下位にはミガキ前のケズリが残る。33 の坏部外面上位はヘラナデ状の幅太いミガキを行い、脚柱部外面には縦ミガキを施す。34 は脚裾部内面まで全面丁寧にミガキを施した精製品である。35 ～ 39 は脚部である。35 は外面縦方向のヘラナデ、内面はケズリを施す。穿孔は３ヶ所焼成前に行う。36 は脚裾部を水平まで折り曲げたもので、器壁が厚い。穿孔は焼成前に施すが、孔数は不明である。37・38 の外面は幅太いヘラナデを施す。39 は低脚で、外面はヘラナデ後ミガキを施す。



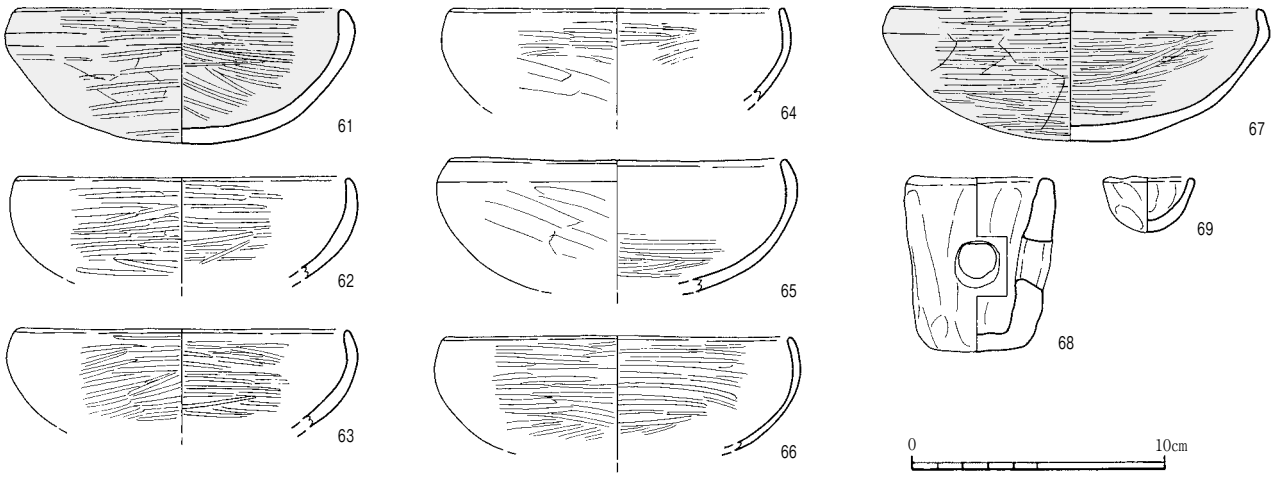
第 40 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第 41 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡覆土上層出土土器実測図①（1/3）



第 42 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡覆土上層出土土器実測図②（1/3）



第 43 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡覆土上層出土土器実測図③（1/3）

40 ～ 44 は鉢で、40 ～ 42 は外反口縁、43 は直口である。40 は口縁部がわずかに外反する無頸のものである。外面下位はケズリを行い、後内外面ミガキを行うが、内面のミガキは外面に比べ粗い。色は褐色。41 も内外面にミガキを施し、胎土は精良である。外面には黒斑あり。色は外こげ茶、内茶褐色。42 は強く口縁部を外反させ、体部外面は工具ナデ、内面はナデを行う。色は茶褐色。43 は内面ケズリを行う。色はこげ茶色。44 は底部片で、外面は工具ナデ、内面にはミガキを施す。外面には被熱痕あり。色は外暗灰黄色、内灰黒色。

45 ～ 67 は碗である。45 ～ 50 はミガキを施さないもの、51 ～ 58 は直口のもの、59 は外反口縁、60 ～ 67 は口縁部が内湾するものに分類し、口径順に割り付けを行った。調整は体部外面下位ケズリを行うものに 46・47・49・51・52・54・59・60・61・64・65・67、ケズリより浅い工具ナデ状のケズリを行うものは 45・48 である。53 ～ 55・58・60・61・67 は内外面とも黒化処理を行う。49・60・65 は黒斑、45・62 はススが認められる。色は 45 が灰黄色、46 が灰褐色、47 ～ 49・51・52・57・63・64 は橙褐色、50 は茶褐色、53 ～ 55・58・59 は灰褐色、56・62・66 はこげ茶色、60・61・67 は暗茶褐色、65 が黄褐色を呈する。

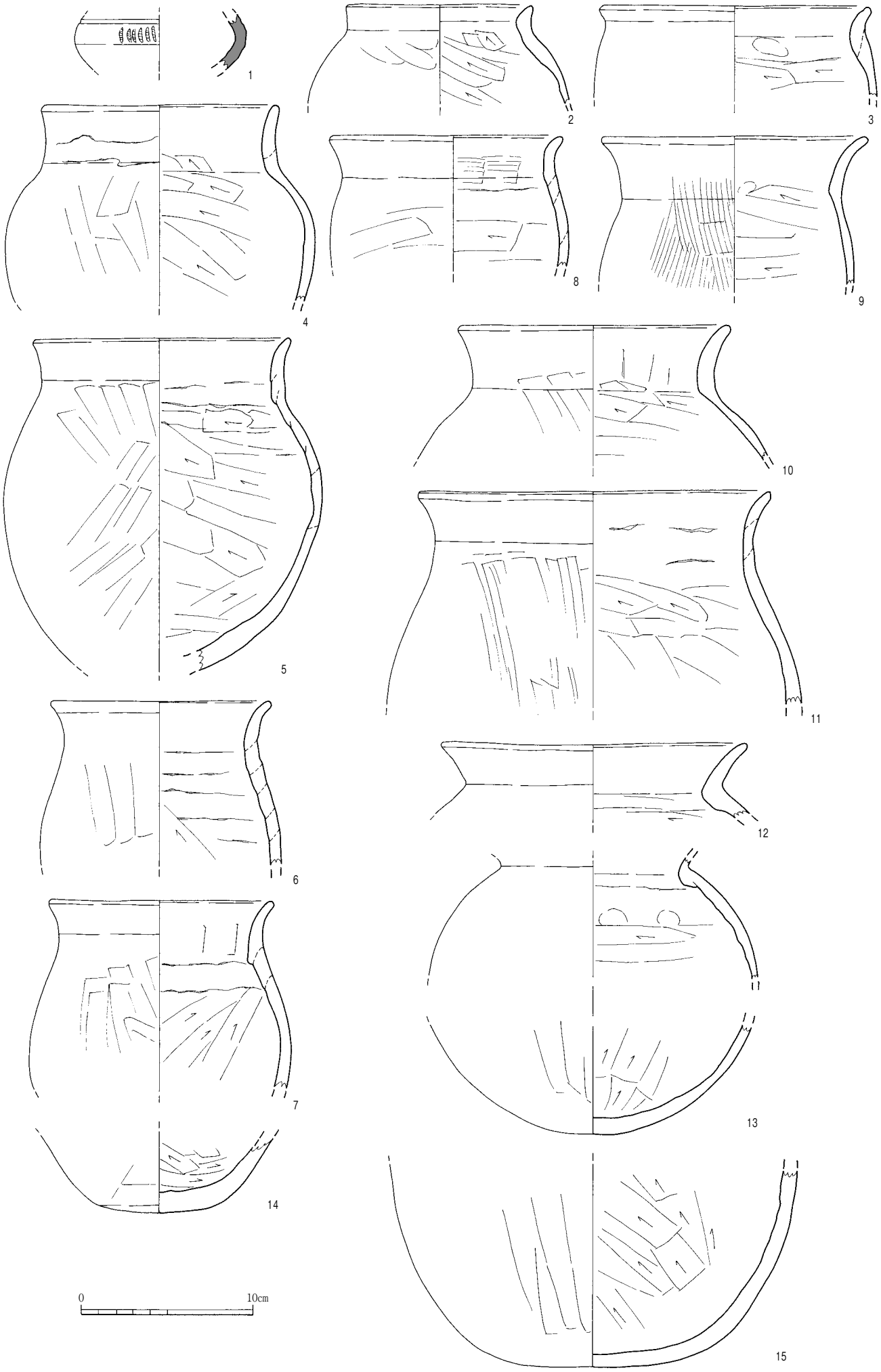
45 は内外面に粘土継ぎ目痕が残る粗製のもの。内面にはナデの稜が残る。47 ～ 49 は内面に工具痕が残る。50 は口縁部を若干外反させるもので、外面下位は短いハケを施す。52 の内面下位には工具痕が残る。55 は外面中位以下の器壁が薄くなっているが、ミガキ前のケズリによると考えられる。59 は口縁部外面に強い横ナデを施すことより外反口縁状になる。61 は復元口径 13cmを測る。67 は強いケズリにより、体部中位の器壁が薄くなる。復元口径 14.8cmを測る。

68 はほぼ完形の蛸壺で、口径 5.8cm、器高 7 cmを測る。体部中位に焼成前に 1 孔を施す。色は灰黄橙色。69 はほぼ完形の手づくね土器。口径 3.7cmを測る。外面には黒斑あり。色は灰黄色。

10 号住居跡覆土出土土器（図版 54・55、第 44 ～ 47 図）　1 ～ 85 は 10 号住居跡と認識した以降に出土した土器である。

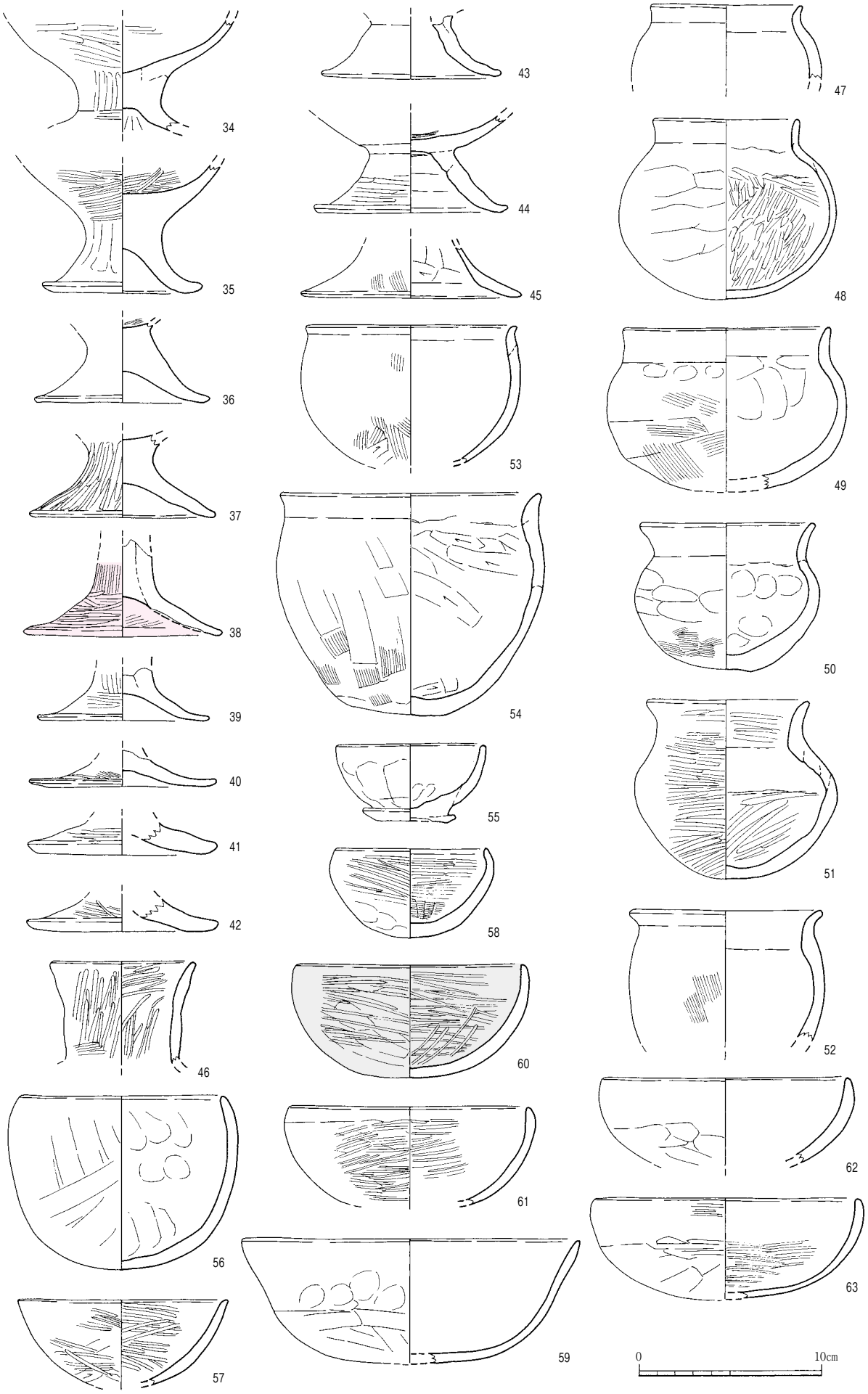
須恵器（1）　1 は甕で、体部外面上位に浅い凹線を巡らし、その下にハケ工具による刻目を巡らす。外面には自然釉が付着する。色は灰色。

土師器（2 ～ 85）　2 ～ 15 は甕である。2・3 は外反する短口縁、4・5 は直口、6 ～ 10 は外反、11・12 は内面頸部が稜を持つものに分類し、口径順に割り付けを行った。4 ～ 8・10・11・13 ～ 15 の胴部外面は工具ナデ後ナデを施す。2・4・5・9 ～ 12 の内面は頸部までケズリを施す。7・8・10 は口縁部内面に工具ナデ痕が残る。3・5・6 ～ 8・13 ～ 15 は被熱痕、5・7・8 ～ 10・



第 44 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）

第 45 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第 46 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）

14・15はスス、４・５・15は胴部内面に炭化物が認められる。色は２・７が淡橙褐色、３が黄橙色、４・10・13が灰橙褐色、５・８・11・14・15が灰黄褐色、６が褐色、９・12が橙褐色である。

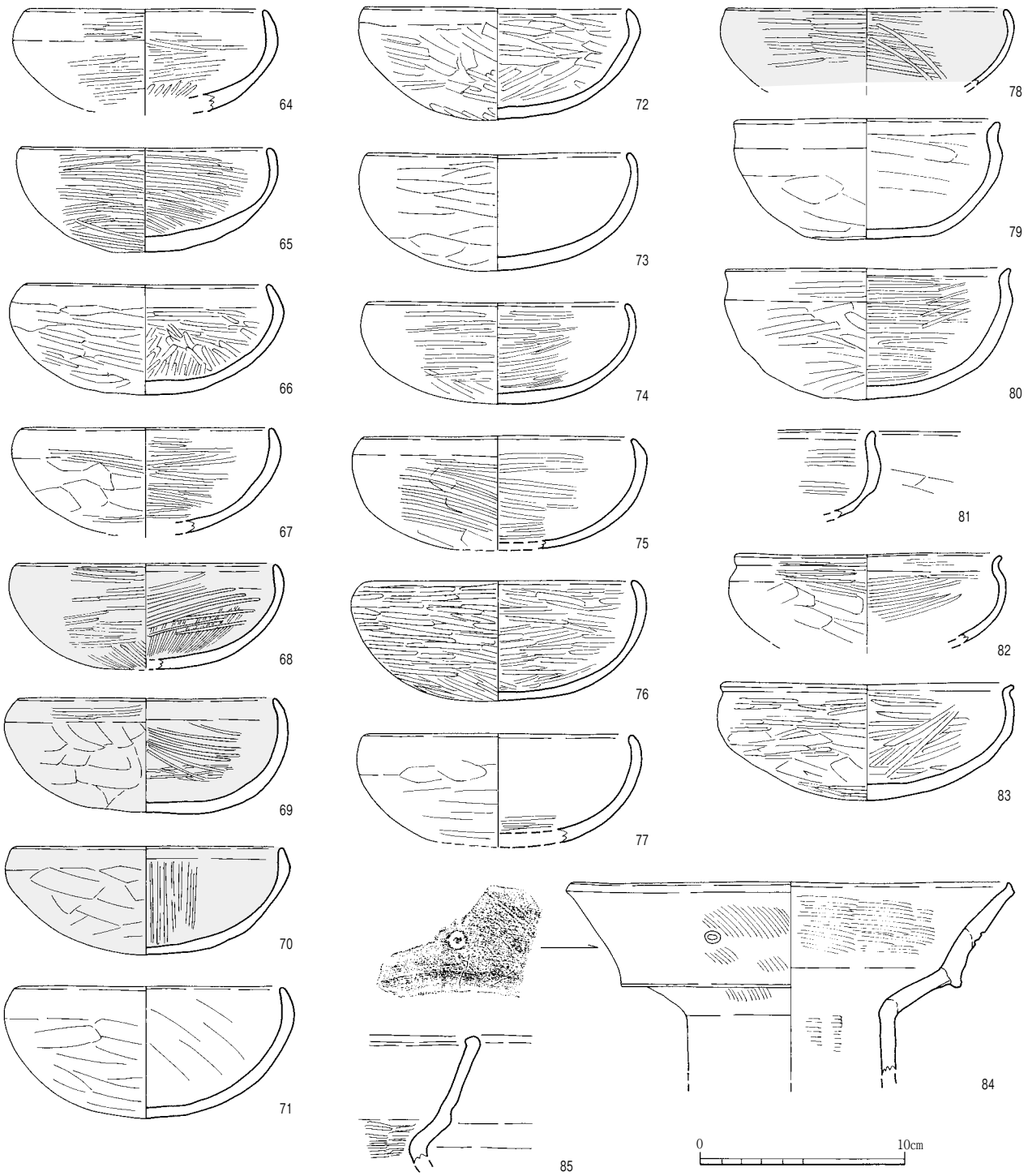
３の外面は被熱痕が顕著で、胴部内面には粘土継ぎ目痕が残る。４の口縁部外面には粘土継ぎ目痕が残る、粗製のもの。５は胴部外面に厚くススが付着する。６は胴部内面に粘土継ぎ目痕が明瞭に残り、1.5cm前後の粘土紐を積み上げて成形したことがわかる。９の胴部内面は大きくケズリを施す。11・15は大型甕である。11の口縁部内面には粘土継ぎ目痕が残る。12は口縁部が「く」の字形に強く屈折する。13は同一個体であるが、接合できなかった。15は平底である。

16～19は甑で、いずれも色は橙褐色である。17～19は把手が付くもの。16はバケツ形の器形で、復元口径26cmを測る。外面は工具ナデ後ナデ、内面はケズリを施す。底部は半円状の孔が２孔開けられている。外面には黒斑が認められる。17・19は内面ケズリのち縦方向の粗いヘラナデを施している。

20～45は高坏である。20・21は屈曲部に稜を持つもので、脚部が高いものである。23～30は碗形の坏部で、口縁部が外反するもの。31は碗状の内湾する口縁部を持つもの、32～35は坏部の一部と脚部が残るもの、36～45は脚部のみのものである。椀形の坏部に付く脚部は低脚である。21・23・25・27・31の坏部外面下位はミガキ前にケズリを施す。25・38は内外面にスリップを塗布し、27の外面もスリップを塗布した可能性がある。21・28～32は黒化処理を行う。25・26・27・42は黒斑、26・28・32・45は被熱痕、34はススが認められる。色は20・23・26・35・38～40・42～45が橙褐色、21が褐色、22がこげ茶色、24が暗茶褐色、25・27・34が黄褐色、28・33が灰黄褐色、29・31・32・36・37・41が灰黒色、30が灰褐色を呈する。

20はナデによる鈍い稜を巡らせる。外面には工具ナデ後ナデを施す。21は復元口径14.5cm、底径12.6cm、復元器高12.5cmを測る。坏部下位の内外面はケズリ後ミガキを施す。脚裾部は布による丁寧なナデを行い、脚柱部内面はケズリを行う。この器形で黒化処理を施すものは珍しい。脚部との接合は充填法である。22の外面は縦ナデを施す。23～27は口縁端部を弱く外反させるもの。23は外面全体にミガキを施す。坏部との接合は付加法である。24は完形品で、口径13.5cm、底径9.7cm、器高10.4cmを測る。脚部内面以外は丁寧なミガキを施す。25もほぼ完形品で、口径13.7cm、底径10cm、器高10.3cmを測る。脚部内面以外は丁寧なミガキを施し、さらにスリップを塗布する。26は内外面に顕著な被熱痕がある。脚部とは充填法で接合する。28～30は口縁端部を強く外反させるもの。29はほぼ完形品で、口径15.7cm、底径10.6cm、器高10.1cmを測る。脚部内面以外は丁寧なミガキを施し、脚部外面は幅太いミガキを施す。カマド煙道内からの出土。30は口縁部を強く外反させる。31は最後に坏部外面中位から脚部外面に向かって縦ミガキを施したことがわかる。完形に近いもので、復元口径12.8cm、復元底径9.8cm、復元器高9.2cmを測る。31～34・38は脚部内面に工具痕がある。32の外面のミガキは坏部→脚柱部→脚裾部の順に施したことがわかる。また坏部内面は上下２段暗文状の縦ミガキを施す。34の内外面ミガキは幅太いもの。35の脚部外面はナデ調整。36・37の焼成は甘い。37の脚部外面は縦方向のヘラナデを行う。38は脚部内外面にミガキを施す。39～42は外面のみミガキを施す。43は坏部と充填法で接合する。44の脚部外面はヘラナデを行い、脚部内面は横ナデの稜が残る。46は中型直口壺で、口縁部内外面とも粗い縦方向のミガキを施す。色は橙褐色を呈する。

47～56は鉢である。47～49は直口、50～52は外反口縁、53・54は無頸、55・56は素口縁



第 47 図　5 次 1 区　10 号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）

である。48・50・51 は黒斑、47・51 はスス、54 は被熱痕が認められる。色は 47・48・52・53・56 が黄褐色、49・51 は灰黄褐色、50 は黄橙色、54・55 は褐色を呈する。47 の胴部外面は工具ナデ後ナデを行う。48 は完形品で、口径 8.1cm、器高 9.9cmを測る。胴部外面はケズリ後ナデ、胴部内面はミガキを施すが、口縁部内面はナデを施す。カマド煙道内出土。49 の胴部外面は工具ナデ後ハケを施す。50 の外面は胴部中位までケズリ後ハケとナデを施す。内面頸部に粘土継ぎ目痕が残る。51 の外面全体はミガキ、内面中位はナデ、口縁部と胴部下位はミガキを施す。復元口径 9 cm、復元器高 9.3cmを測る。53 の外面下位は工具ナデを施す。54 は大型品で、胴部外面全体を工具ナデ後ナデ、内面はケズリを施す。口縁部内面は黒化する。復元口径 14.4cmである。55 は粗製の脚状の

ものが付くもので、ほぼ完形品。口径 8.3cm、器高 4.8cmを測る。内外面ともナデ調整。56 は深い碗状のもので、外面は工具ナデ後ナデ、内はナデを施す。

57 ～ 83 は碗である。57・58 は素口縁の小型品、59 は素口縁の大型品、60 ～ 63 は直口、64 ～ 78 は内湾口縁、79 ～ 83 は外反口縁と分類し、それぞれ口径順に割り付けを行った。外面下位をケズリ後内外面全体にミガキを施すものは、57・60・61・63・66・68 ～ 70・72・74 ～ 76・80・82・83 である。内外面黒化処理を行うものは、60・68 ～ 70・78 である。58・61・71・76 は黒斑、63・73 は被熱痕、73・74 はススあり。色は 57・82 が灰黄褐色、58 は褐色、59・72・75・76 は黄褐色、60 は灰褐色、61・66・73 は灰黄褐色、62・65・71・74・77・81・83 は橙褐色、63・67 はこげ茶色、64・68・69・78 ～ 80 は灰黒色、70 は暗褐色を呈する。57 は口縁部がそのまま開くもので、内外面は粗いミガキを施す。58 はほぼ完形で、口径 8.3cm、器高 4.8cmを測る小型品。底部外面はナデ調整を施し、内面底部にはミガキ前の工具ナデの工具痕が残る。59 は平底で、底部外面は工具ナデを施す。大型品で、復元口径 18.6cmを測る。

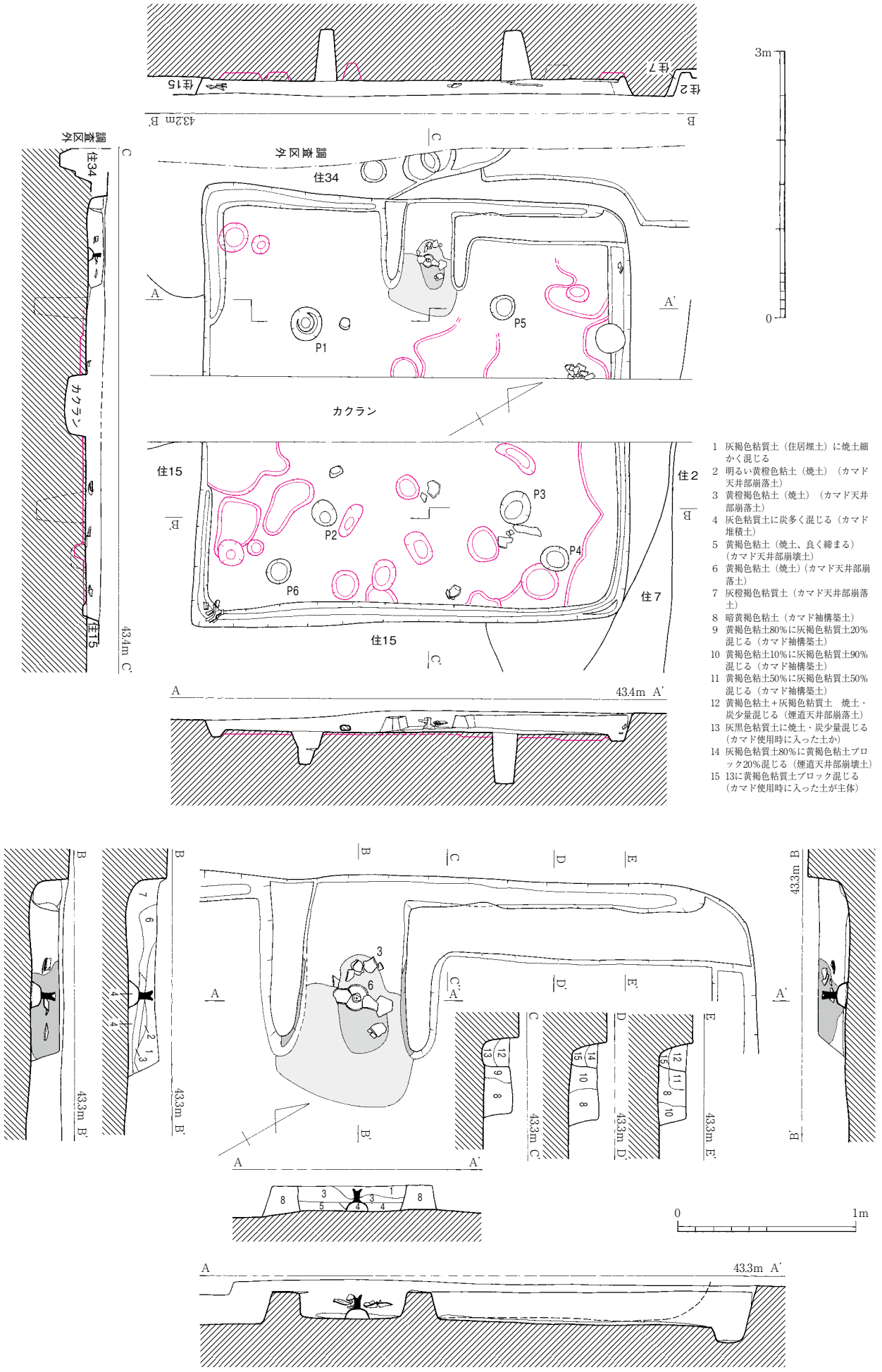
60 は内外面粗いミガキを施す。完形品に近いもので､復元口径 12.7cmを測る。器壁は厚めである。62 の外面下位はケズリ後内外面ナデを施す。65 は外面下位のミガキ前のケズリが確認できないが、ケズリを行っている可能性が高い。ほぼ完形品で、口径 12.2cm、器高５cmを測る。66 は完形品で、口径 12.2cm、器高 5.4cmを測る。外面に施したミガキは幅太くヘラナデといっても良いもの。内面のミガキは短く施す。カマド煙道内出土。68 の内面は暗文状ミガキ後横ミガキを施す。70 はケズリにより器壁が薄くなっていることがよく分かる。内面は暗文状ミガキを施す。71 の外面下位はケズリを施し、内面は工具ナデ後ナデを行う。72 はほぼ完形品で、口径 13cm、器高 5.5cmを測る。内外面ヘラナデを施す。カマド煙道内出土。73 の外面下位はケズリ後外面全体にヘラナデを施す。内面はナデ調整である。外面に顕著な被熱を受ける。76 もほぼ完形品で、口径 13.3cm、器高 5.9cmを測る。口縁部内面には指押さえ痕が残る。79 の外面下位はケズリで、器壁が薄くなっている。内面はナデを施す。80 の外面下位はケズリ、後外面全体ミガキを施す。内面もミガキを施す。82・83 は口縁端部を短く外反させたもので、玉縁状になる。83 はほぼ完形品で、口径 14.4cm、器高 5.7cmを測る。内外面に施したミガキの長さは短い。

84・85 は古墳前期の二重口縁壺口縁部である。いずれも色は灰黄褐色で、混入品。84 は畿内系二重口縁壺で、口縁部外面には竹管文を巡らしたと考えられるが、小片のため１ヶ所しか残存していないものの、全周すると考えられる。85 は頸部内面にミガキを施す。外面にはススが付着する。

11 号竪穴住居跡（巻頭図版３、図版 17、第 48 図）

１区北の西壁際に位置し、７･15･34 号住居跡を切る。住居の規模は主軸長 4.76 m、南北 4.9 m、深さ最大 24cmを測るほぼ正方形住居跡である。住居主軸方位は北から 60° 西に振れる。西壁中央には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。

床面ではピット６基検出したが、位置・深さからＰ１・２・３・５が主柱穴となる４本柱の住居である。壁周溝はカマドと南壁中央以外は巡る。土器が床面から５cmほど浮いた状態で出土したものがほとんどであるが、南東隅壁際では一部壁と床面を掘りすぎ、切り合う 15 号住居跡の土器、また南西部では切り合う 34 号住居跡の土器を当住居出土土器として取り上げてしまった。なお、出土土器の出土位置からの所属遺構の推定は、遺物の項で検討している。埋土は灰褐色粘質土に焼



第 48 図　5 次 1 区　11 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

文中写真 10　11 号住居跡カマド完掘状況
（北北東から）

土が多く混じる土で、住居全面で床下掘り込みを確認した。

５・６の土師器高坏は脚柱部が中実で、器高も高いことから、６世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版 17、第 48 図）

住居西壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部から北に向かって延び、住居北西隅から竪穴住居の外に出る構造となる。カマド袖は、左袖燃焼部を一部掘り失っているが（破線で示す）、壁から左袖は 100cm、右袖は 104cm直線的に突出する。燃焼部奥壁の手前 62cmに土師器高坏（６）を天地逆にして支脚に転用しており、この支脚上で土師器甕（３）が出土した。この支脚部分で袖間は 53cmを測る。この支脚前後のカマド袖両壁は非常に良く焼けている（濃いアミ）。この支脚手前には暗灰色粘土に炭が非常に多く混じり焼土も混じる焼面（濃いアミ）と、その周囲には灰色粘土に焼土・炭が多く混じる層（薄いアミ）が広がる。

煙道部は燃焼部奥壁から長さ 169cm、燃焼部主軸からほぼ直角に曲がり延びる。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造である。煙道は燃焼部との境が下端で幅 10cm、先端で下端７cmと、上端は煙道部先端まで 15cm前後と変わらないが、先端に向かって徐々に狭くなる構造となる。断面はＵ字形を基本とする（12～15 層）。煙道部先端は緩やかに斜めに上がるが、住居外まで煙を排出するにはあと 25cm以上の長さが必要であることから、煙道部先端から住居外まで別の構造物（竹等）が存在したのであろう。煙道部埋土は 12・14 層がカマド煙道天井部崩落土、13・15 層がカマド使用時の堆積土を主体とする。また煙道部の袖は互層状ではなく、住居側から付加する構造で、やや厚さがある。

カマド燃焼部埋土は、２・３・５～７層がカマド天井崩落土、４層がカマド使用時の堆積土となり、住居廃絶時にカマド燃焼部・煙道部上部を破壊していると想定される。

出土遺物（図版 55・56、第 49・50 図）

土師器（１～26）　先述のとおり、１～９は当住居に伴う６世紀後半のもの、10～26 は 15・34 号住居跡に伴う可能性が高い古墳時代前期の土器である。出土位置から推定すると、10・12・13・16・17・25 は 15 号住居跡、14・15・22・23 は 34 号住居跡に伴う可能性が高い。

１～４は甕である。２～４の胴部外面は工具ナデ後ナデを施す。４は黒斑、２～４は被熱痕が認められる。色は１が黄褐色、２・４が暗灰橙褐色、３が橙褐色である。１は水平近くまで強く外反する口縁部で、内外面ともナデで調整する。２は内面全面に工具ナデ後ナデを施す。３は頸部の締まりがないものである。内面は頸部までケズリを施す。４は平底で、器壁は厚い。

５・６は高坏である。いずれも内外面ミガキを施した外反口縁の坏部で、中実の脚部外面もミガキを施すもので、脚部との接合は付加法、色は橙褐色を呈する。５は復元口径 17.8cm、復元器高 12.5cmを測る。黒斑あり。６はカマド支脚に転用されたほぼ完形品で、口径 14.8cm、底径 9.9cm、器高 12.4cmを測る。坏部内外面のミガキは丁寧である。外面は支脚に使用されたため、顕著な被熱が認められる。７は高坏で、碗形の坏部を持つ。脚部との接合は充填法である。器壁は厚い。外面

第 49 図　5 次 1 区　11 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）

は顕著な被熱を受け、色はこげ茶色。８は脚付鉢である。内面のみミガキを施す。脚部外面には指押さえ痕が顕著に残る。色は橙褐色。９は碗で、口縁部外面は強い横ナデにより窪み、外反口縁状になる。外面下位はケズリ後内外面全体へラナデを施す。外面には黒斑があり、色は橙褐色。

10 ～ 12 は畿内系壺である。10 は黒斑、11・12 はススが認められる。10・11 は畿内系直口壺である。10 は全形が復元できるもので、復元口径 14.5cm、復元器高 31cmを測る。口縁部内面はナデで窪む。内外面とも粗いハケを施し、外面のみスリップを塗布する。色は灰褐色。11 は外面全体に顕著な被熱痕が認められる。内面には炭化物が付着する。色は灰黄褐色。12 は重心が低い胴部で、外面上位の細かなハケのち、下位のみ粗いハケを施す。上下のハケ原体は異なる。内面中位以上はハケを施すが、粘土継ぎ目痕が残る。内面底部は指押さえ痕が残り、炭化物も付着する。色は外淡橙褐色、内灰黄褐色。

13 ～ 19 は甕である。17 は黒斑、13・17 ～ 19 は被熱痕、17・18 はススが認められる。色は 13・16 が暗茶褐色、14 が橙褐色、15 が茶褐色、17 ～ 19 が灰黄褐色を呈する。13 ～ 15 は在地系である。13の口縁部は「く」の字状に屈折する。外面には顕著な被熱痕がある。14は内外面ハケ後ナデを施す。胴部内面にはハケ原体に付着した、かき取った状態の粘土塊が付着することから、粘土が生乾き状態でハケを施したことがわかる。16 は畿内系と在地系の要素が見られるもの。胴部外面は右上がりのタタキ後ハケを施したもので、胴部内面はハケを施す。17 は布留系甕で、口縁端部を若干肥厚させる。外面は縦ハケ、内面は頸部内面までケズリを施す。18 はほぼ完形品で、口径 15.8cm、器高 18.2cmを測る。底部は尖底気味である。胴部内外面は工具ナデ後ナデで調整する。胴部内面には炭化物が薄く付着する。19 も在地系で、内面は短いハケを施す。床下掘り込み出土。

20・21 は高坏である。20 は皿状の坏部がかなり歪むもので、復元 21.9cm、復元器高は 12.6cmを測る。そのまま開く坏部の内外面及び脚部外面はハケ後粗いミガキを施す。脚部には０・２時半・５時・８時・10 時の５ヶ所に焼成前穿孔を施す。脚部内面はナデ後ハケを施す。色は橙褐色。21 は脚部で４ヶ所穿孔するが、少しずれて施される。内面はハケで絞りを行う。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。

22 ～ 25 は鉢である。色は 22 が黄茶褐色、23 が橙褐色、24 が黄褐色、25 が灰黄褐色を呈する。22 は布留系外反口縁鉢である。内外面に細かいが粗いミガキを施す。23 は畿内系直口鉢で、内面は暗文状のミガキを施す。24・25 は在地系の外反口縁鉢。25 は復元口径 21.6cmを測る、逆ヘルメット状の器形となる。外面下位はハケ後ナデを施し、指押さえ痕が顕著に残る。内面下位はナデ、上位はハケを施す。外面下位には被熱痕、外面上位にはススが付着する。

26 は縦方向の孔を開けた把手状土製品である。鉢に付けたものの可能性がある。内外面ナデ調整で、色は黄褐色。胎土から他遺跡産（搬入品）の可能性がある。

12 号竪穴住居跡（図版 17、第 51 図）

１区北の東寄りに位置し、13 号住居跡を切る。住居の規模は主軸長 5.44 m、南北 5.06 m、深さ最大 24cmを測る、やや東西に長いがほぼ正方形住居跡である。住居主軸方位は北から 49° 西に振れる。西壁中央には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。

カマド主軸から若干北側にずれた東壁で、96 × 72cm、深さ 14cmを測る屋内土坑を検出した。屋内土坑の埋土は灰黒色砂質土に黄褐色粘土ブロックが少量混じる。床面ではピット７基検出してお

第50図　5次1区　11号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）

り、位置・深さからＰ１・５・７が主柱穴となる４本柱の住居と思われるが、南西隅の主柱穴は検出することができなかったため、主柱穴構造は確定できない。壁周溝は北・東壁に巡り、Ｐ３北側の細長い溝（Ｐ８）は住居内仕切り溝と思われる。土器は床面から５cm程度浮いたものがほとんどであり、屋内土坑出土土器（４・７・13・14）も10cm以上浮いた状態で出土した。埋土は土層図

文中写真 11　12 号住居跡カマド完掘状況
（南東から）

からレンズ状に堆積するが、６層は住居壁崩落土である。住居全面で床下掘り込みを確認した。

出土土器から、住居の時期は６世紀前半に位置づけられる。

カマド（図版 17、第 51 図）

住居西壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道先端は撹乱を受けているが、煙道はカマド燃焼部から北に向かって延び、住居北西隅から竪穴住居の外に出る構造になると思われる。

カマド袖は、カマド廃棄時に両袖先端を壊していると想定されるため残りが悪いが、壁から左袖は 82cm、右袖は 72cm、やや「ハ」の字状に開きながら突出する。燃焼部奥壁の手前 38cmに良く被熱する土師器高坏（２）を天地逆にして支脚に転用したと思われるが、床面から５cm浮いており、カマド廃棄時に支脚に転用した土師器高坏を一度外して、支脚があった場所にあらためて廃棄したと想定される。また支脚想定位置全面には硬化面（濃いアミ）、その前面には灰をかき出した層（薄いアミ）が認められることから、この部分に支脚を置いていたことは確実である。この支脚部分で袖間は 64cmを測る。

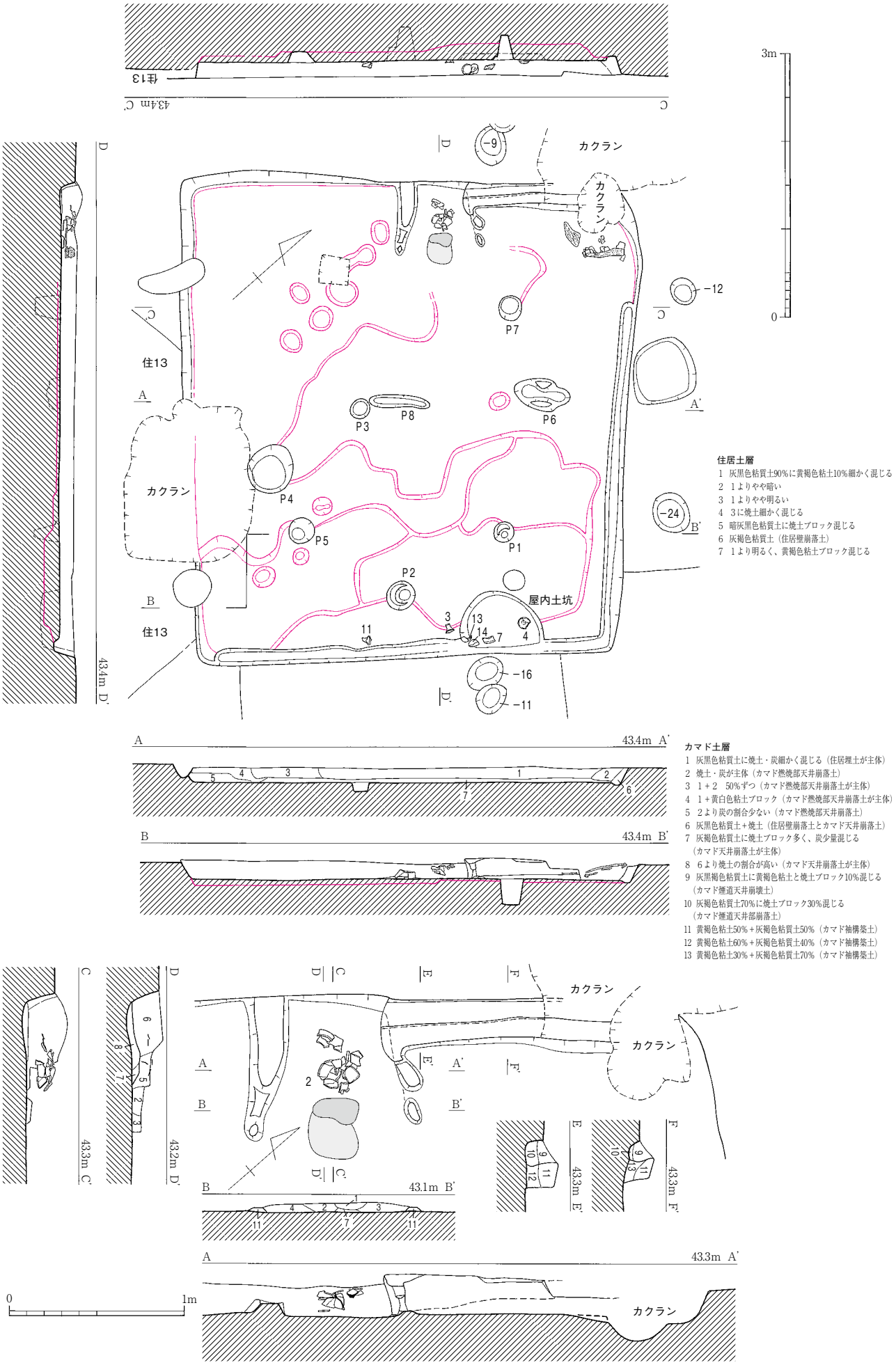
煙道部は燃焼部奥壁から長さ 130cm検出でき、燃焼部主軸からほぼ直角に曲がり延びる。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造である。煙道の幅は燃焼部との境で 15cm、幅が計測できる最も先端部分で幅 10cmと先端に向かって徐々に狭くなる構造となる。煙道部断面はＵ字形を基本とし、９・10 層はいずれも煙道部天井崩落土である。煙道部床面は先端に向かって緩やかに上がる。袖は黄褐色粘土を主体とする粘土を用いて構築しており、住居埋土とは明瞭に区別される。煙道部袖は 11 ～ 13 層を互層状に積み上げて構築する。

カマド燃焼部埋土は、２～５・７・８層はカマド天井崩落土が主体で、カマド廃絶時に燃焼部天井を一部破壊し（７・８層）、支脚の高坏を取り上げた後に、天井と煙道及び袖部を大きく壊していると想定される。

出土遺物（図版 56、第 52 図１～ 15）

土師器（１～ 15）　１は口縁部が直立する壺である。胴部外面はハケを施し、胴部内面には粘土継ぎ目痕が明瞭に残る。外面は被熱し、色は黄茶褐色～橙褐色。２・３は高坏である。２は支脚に転用されたことから、外面は顕著な被熱痕とススが認められる。口縁端部を短く外反させた碗形の坏部で、外面には深いハケを施す。坏部内面はミガキを施したか。脚部は内湾しつつ「ハ」の字状に開く珍しいもの。色は橙褐色～灰黄褐色。３は脚部で、外面はナデ、内面もケズリのちナデを施す、粗製のもの。色は黄橙褐色。４はほぼ完形の碗で、口径 13.4cm、器高 5.6cmを測る。口縁部外面は強いナデにより外反口縁になる。外面底部には粘土生乾き状態でハケを施す。内面底部には工具痕あり。外面には被熱痕及びススが認められる。色は灰黄褐色。

５～ 15 は弥生後期終末～古墳時代前期前半の土器で、混入品。５は在地系直口壺口縁部である。色は灰橙褐色。６は在地系二重口縁壺で、口縁部外面に工具により上下二条の浅い凹線を巡らし、その間にハケ工具による最大九条の文様を一定間隔で施す。色は黄褐色。７～ 10 は甕である。色



第 51 図　5 次 1 区　12 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

は７・10が黄褐色、８が灰黄褐色、９が暗黄褐色を呈する。７の頸部外面には胴部に工具ナデを施した際の工具端部痕が多く認められる。８は口縁端部をナデで面取りする。９は内面頸部までケズリを施す。10は口縁端部を肥厚させたもので、Ｖ様式系の系譜を引くものと考えられる。内外面ハケ後横ナデを施す。外面には黒斑あり。

11は高坏脚部で、脚部上端部はハケ工具による刻目を施し、坏部と接合しやすくしている。穿孔は３ヶ所行った可能性がある。色は淡橙褐色。12～14は鉢である。12は内外面粗いハケ後ナデを施す。13の胴部外面は不定方向のハケを施す。内面には粘土継ぎ目痕あり。色は黄橙色～橙褐色。14は平底を残す直口鉢で、外面は粗いハケを施す。外面は被熱痕とスス、内面には炭化物が付着する。色は灰橙褐色。15は手づくね土器で外面には工具痕と黒斑あり。色は暗黄褐色。

13号竪穴住居跡（図版18、第53図）

１区北の東寄りに位置し、12号住居跡に切られる。住居北東部は12号住居跡及び撹乱により大きく壊されるが、住居の規模は東西4.8ｍ、南北4.6ｍ、竪穴部の深さは最大15cmを測る、ほぼ方形の住居である。住居の主軸方位は北から12°西に振れる。

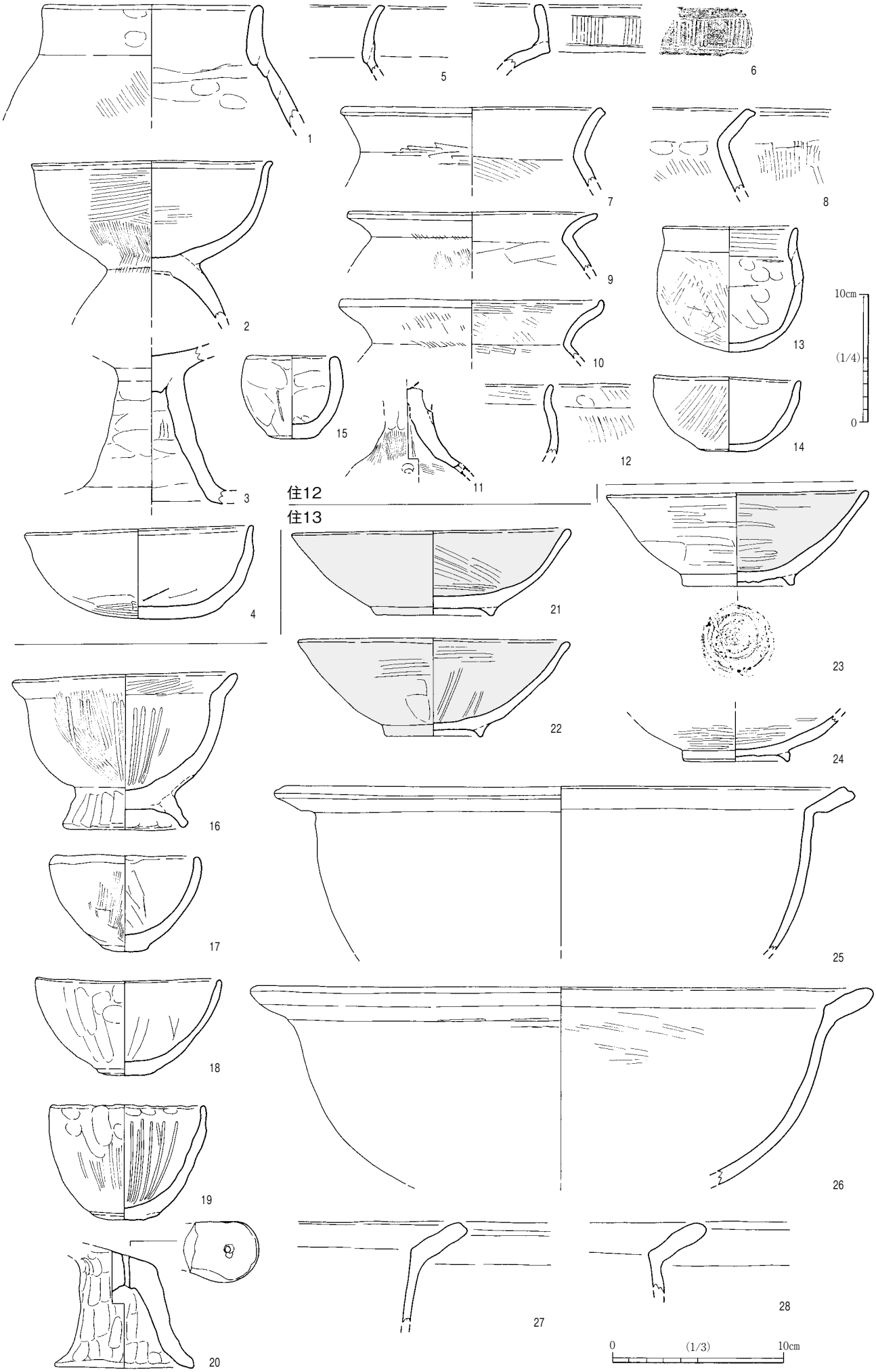
住居南西１ヶ所のみ地山削り出しのベッド状遺構を付設する。ベッド状遺構の規模は幅100cm前後、高さ7cm前後を測る。床面ではピット７基検出し、位置からＰ５・７が主柱穴となる可能性があるが、東側の主柱穴列が検出できなかったため、主柱穴配置は不明である。またＰ２は住居中央に位置し、炉跡の可能性があるが、埋土に焼土・炭が混じっていないため、炉跡ではないと判断した。住居南壁中央には暗灰色砂質土が埋土の屋内土坑を付設する。竪穴部中央北寄りの床面直上から脚付鉢（16）、住居南西隅の床面直上から鉢（19）が出土し、屋内土坑から鉢（17･18）が出土した。住居埋土は灰褐色粘質土である。竪穴部全面で床下掘り込みを確認した。なお、当住居を切り込むＰ10・11から中世の土器（22～29）が出土している。

18・19の底部にはわずかに稜があり、住居の時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

出土遺物（図版56、第52図16～28）

弥生土器（16～20）　16はほぼ完形の脚付鉢で、口径17.6cm、底径9.8cm、器高12.3cmを測る。器形は外反口縁鉢に低脚の高台状の脚部が付くもので、器壁は厚い。外面はハケのち粗いミガキ、内面はナデのち暗文状のミガキを粗く施す。脚部には成形時の指押さえ痕が良く残る。外面には被熱痕及びススが認められ、色は灰橙色。17～19は直口鉢で、凸レンズ底の底部にはわずかに胴部との境が残る。17は外面ハケ、内面工具痕が残る。色は黄褐色。18はほぼ完形品で、口径14.6cmを測る。外面に粘土のヒビが顕著に残る、粗製品である。内面には工具ナデを施した後、布等による丁寧なナデを施す。外面には黒斑あり。色は黄褐色。19も外面に粘土のヒビが認められるものであるが、内外面暗文状のミガキを施す。底部外面は粘土を後で貼り付けている。外面には黒斑があり、色は灰黄色。20は支脚で、突起部は欠損するが、それ以外は完全に残る。中央は径４㎜程度の焼成前穿孔を施し、内外面とも指押さえ痕が明

文中写真12　13号住居跡屋内土坑
（北東から）



第 52 図　5 次 1 区　12・13 号竪穴住居跡出土土器実測図（5～20 は 1/4、他は 1/3）

瞭に残る。外面は被熱痕が顕著で、色は褐色。

中世土器（21 ～ 28） ほとんどＰ 11 から出土したもので、Ｐ 11 は中世前期の掘立柱建物跡等のなんらかの遺構を構成していた可能性がある。21 ～ 23 は黒色土器で、色は灰黄褐色～黒色。21・22 は内外面黒化した黒色土器Ｂ類で、内外面ミガキを施す。21 はほぼ完形品で、口径 16.5cm、底径７cm、器高５cmを測る。22 の外面下位にはケズリ痕が残る。Ｐ 11 出土。23 は内面のみ黒化する黒色土器Ａ類で、内外面ミガキを施すが、外面下位はその前のケズリ痕が残る。底部内面見込みには回転ヘラ切り痕が残る。Ｐ 11 出土。24 は瓦器碗で､内外面ミガキを施す。色は灰褐色。Ｐ 11 出土。25 ～ 28 は口縁部を外折させた土師質土器鍋である。内外面ナデ調整を基本とし、外面にはススが付着し、色は茶褐色である。27 はＰ 10 出土で、25・26・28 はＰ 11 出土。26 の内面には工具ナデ痕が残る。

14 号竪穴住居跡（図版 18、第 54 図）

１区北の中央に位置し､15 号住居跡を切る。当住居付近は遺構検出面で礫層が露出することから、旧地形では最も高い場所にあたると思われる。住居の規模は主軸長 4.5 ｍ、東西 4.1 ｍ、深さ最大 13cmを測るやや南北に長い方形住居である。住居の主軸は北から４°東に振れる。

カマドは南壁中央に付設された珍しいもので、壁周溝は北壁全面及び東・西壁の半分巡る。カマドと対面する住居北壁中央に屋内土坑があり、埋土は暗灰褐色粘質土である。床面ではピット５基検出し、位置と深さからＰ１～３が主柱穴で、南西の主柱穴は撹乱により失われたと想定されることから、４本柱の住居になる。住居北壁際の床面から 10cmほど浮いた状態で、土師器甕（１）と碗（５）、住居中央の床面から若干浮いた位置で土師器高坏（４）が出土した。住居埋土は土層図からレンズ状に堆積するが、１と２～４とは土質が異なる。床下掘り込みは住居全面で確認した。覆土より鉄鏃の茎部（第 142 図 14）が出土した。

１の土師器甕の稜はしっかりあるが、４の高坏脚部が中実であることから、６世紀前半に位置づけられると考えられる。

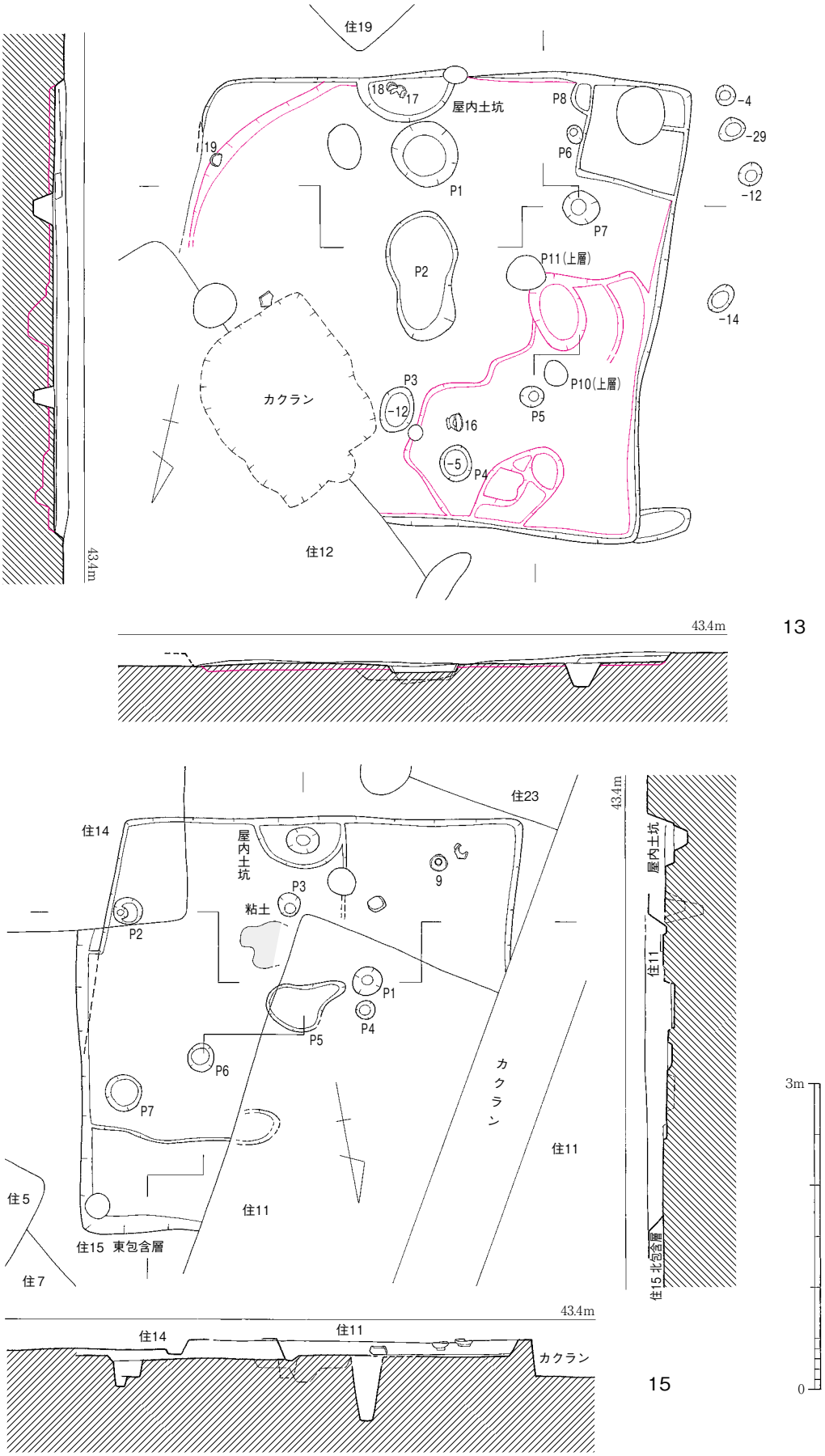
カマド（図版 18、第 54 図）

住居南壁中央に付設したカマドで、検出段階から地山の礫層が露出し、図化した石はすべて地山の石である。両袖とも完全壊され、支脚に転用された土師器高坏（３）とその前面に硬化面（濃いアミ）と焼面（薄いアミ）を確認したことから、カマドの存在を確認できた。

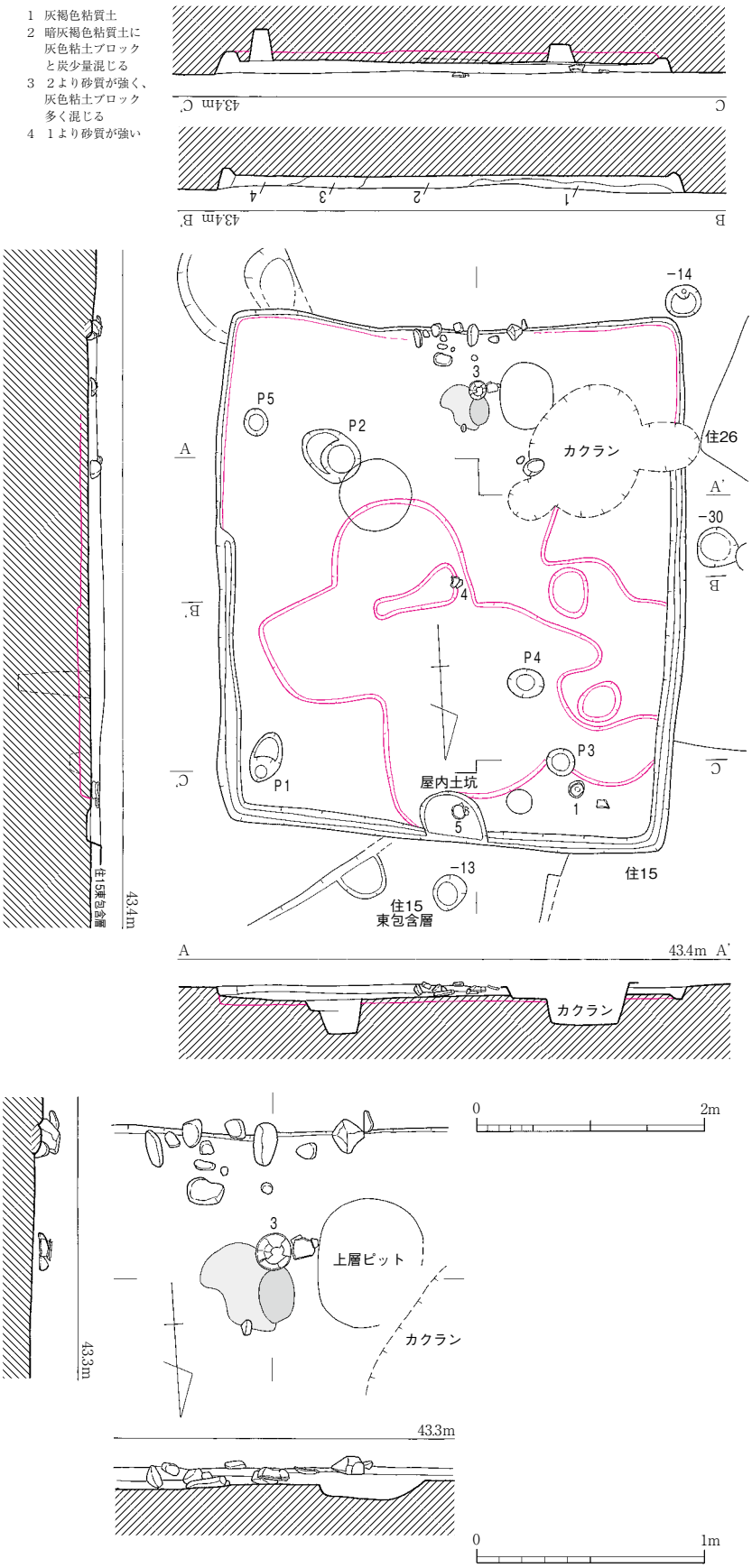
支脚は壁から 45cm手前に高坏（３）を天地逆にして置いており、その前面 24 × 15cmの範囲で硬化面､その東側に焼土と炭が広がる焼面を検出した。また支脚前後の床面上には灰色粘質土に焼土･炭が大量に混じる土が広がっており、カマドが壊された土と想定される。

出土遺物（図版 56・57、第 55 図１～７）

土師器（１～７） １・２は甕で、色はいずれも灰黄褐色である。１は外面に被熱痕とススがあり、底部内面には炭化物が付着する。ケズリは内面頸部まで施す。２はカマド内出土で、口縁端部をナデで面取りする。３・４は高坏である。いずれも口縁端部を短く外反させたもので、坏部内外面はミガキを施す。３は支脚に転用されたため、外面には顕著な被熱痕がある。坏部は完形で、口径 13.7cmを測る。外面には黒斑あり。色は橙褐色。４も顕著な被熱のため、内外面剥離が進む。脚部との接合は付加法である。脚部内面には工具痕あり。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。



第 53 図　5 次 1 区　13・15 号竪穴住居跡実測図（1/60）



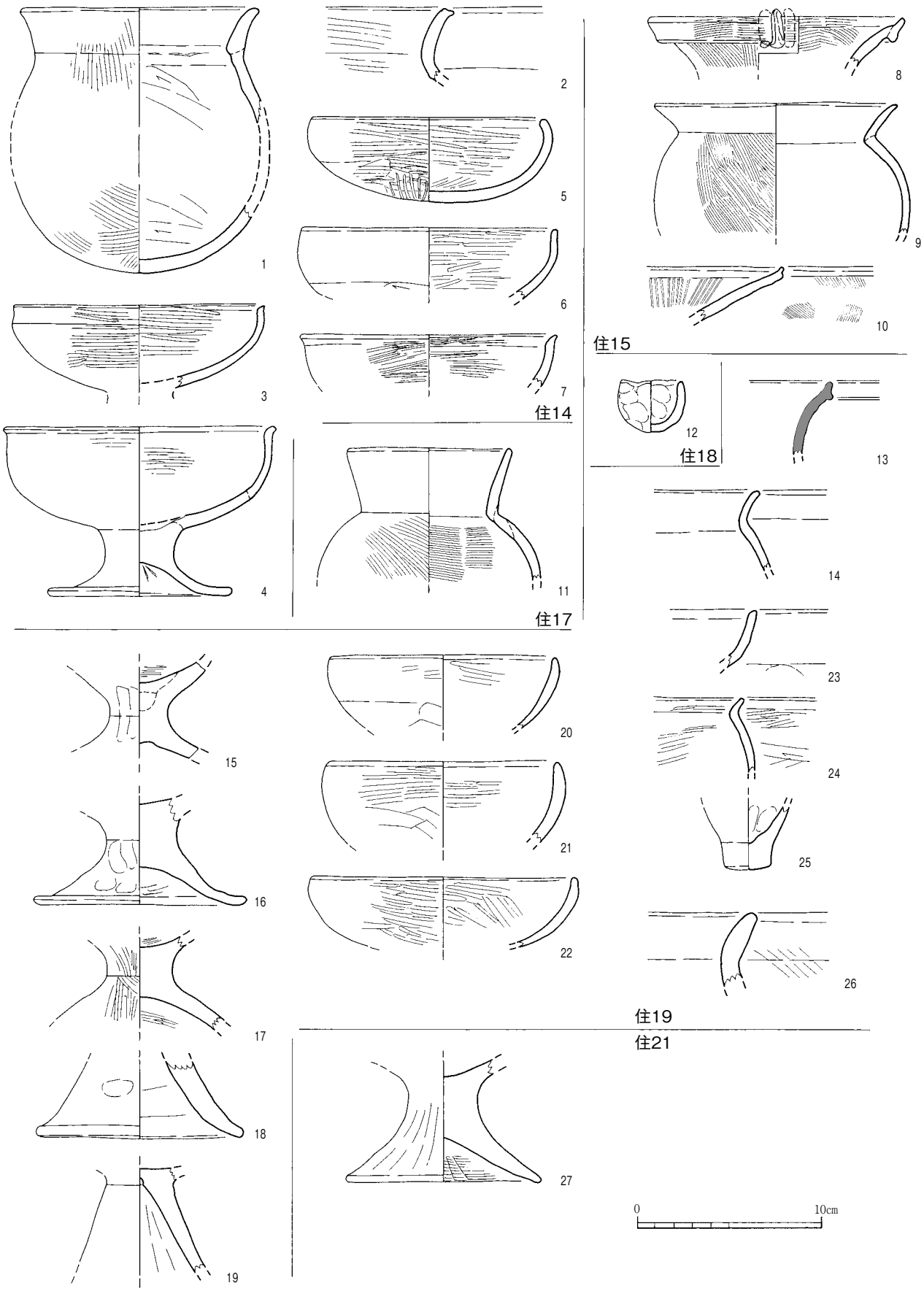
第 54 図　5 次 1 区　14 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

５～７は碗で、色は橙褐色。５の口縁部が強く内湾する、ほぼ完形品で口径 12.6cm、器高 4.5cm を測る。外面底部にはケズリを施し、後内外面全体にミガキを施す。なお外面は最後に下位にミガキを施している。外面には黒斑あり。６は端部が若干外反するもので、外面下位はケズリを施すが、内面のみミガキが残る。７は短く口縁部を外反させたもので、内外面に細かなミガキを施す。

15 号竪穴住居跡（図版 19、第 53 図）

１区北の西寄りに位置し、11・14・23 号住居跡に切られる。東には 15 号住居跡東包含層を確認した。住居北西部は 11 号住居跡に大きく壊されるが、住居の規模は東西 4.02 m、南北 4.02 m、竪穴部の深さは最大 17cm を測る、正方形の住居である。住居の主軸方位は北から 10° 東に振れる。住居北側のみ地山削り出しのベッド状遺構を検出したが、北東部の一部のみでどの方向に延びるかは不明である。このベッド状遺構の規模は幅最大 90cm、高さ３cm 前後を測る。

床面は黄褐色土の地山を平坦に整形し、造り出していた。また住居中央南寄りには床面に粘土を貼っている部分（アミで示す）を確認した。この床面ではピット７基検出し、位置・深さからＰ１が主柱穴となる可能性があるが、東側の主柱穴列を検出できなかったため、主柱穴配置は



第 55 図　5 次 1 区　14・15・17 ～ 19・21 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

不明である。またＰ５は住居中央に位置し、炉跡の可能性があるが、埋土に焼土・炭が混じっていないため､炉跡ではないと判断した。住居南壁中央には灰褐色砂質土が埋土の屋内土坑を付設する。

竪穴部南西の床面から10cmほど浮いた状態で土師器甕（９）が出土した。また11号住居跡でも先述しているが、11号住居跡出土土器には当住居跡に属すると考えられるものがある。住居埋土は暗めの灰褐色粘質土である。

出土土器から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版57、第55図８～10）

土師器（８～10）　８は口縁部を上下に拡張させてハケを施した後、口縁内端部から口縁部外面全体に棒状浮文３本を１セットで張り付ける、いわゆる近江系の棒状浮文土器である。胎土から搬入土器の可能性がある。近隣では上毛町郷ヶ原遺跡に類例がある。色は灰黄褐色。

９は在地系甕で、球状の胴部に「く」の字状に外反する口縁部を持つ。外面に黒斑とススあり。色はこげ茶色。10は在地系高坏口縁部か。内面には暗文状のミガキを施す。内外面及び断面にも被熱痕あり。色は暗黄褐色。

16号竪穴住居跡（図版13・14・19、第56・57図）

１区北東壁際に位置し､10号住居跡に切られ､近接する１号土坑にも切られている可能性がある。調査当初は３棟の竪穴住居が切り合うと考え調査したため、西壁の一部（破線で復元）と南西隅の床面を掘り過ぎている。住居の規模は主軸長4.15ｍ、南北は東壁が10号住居跡により完全に壊されているため、カマド煙道部先端までで4.9ｍを測り、深さは最大40cmの、やや南北に長い方形住居になると考えられる。住居主軸方位は北から31°西に振れる。西壁には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。

住居床面ではピット12基検出し、位置と深さからＰ２・３・６・８が主柱穴列となる４本柱の住居である。なお、Ｐ２・８はいずれも径40cmを超える大きなピットであることから、住居廃絶時に主柱穴を抜き取った可能性を考えられる。住居南側の床面から５cm程度浮いた位置に炭化材が集中するが、住居廃絶時に不要な材を燃やしたと想定される。この炭化材のうち３点の樹種同定を行ったところ、いずれもクヌギ節であった（第４表、P234)。土師器甑（２）は住居中央の床面から10cm以上浮いた位置から出土した。住居埋土は灰黒色粘質土に炭が多く混じる。

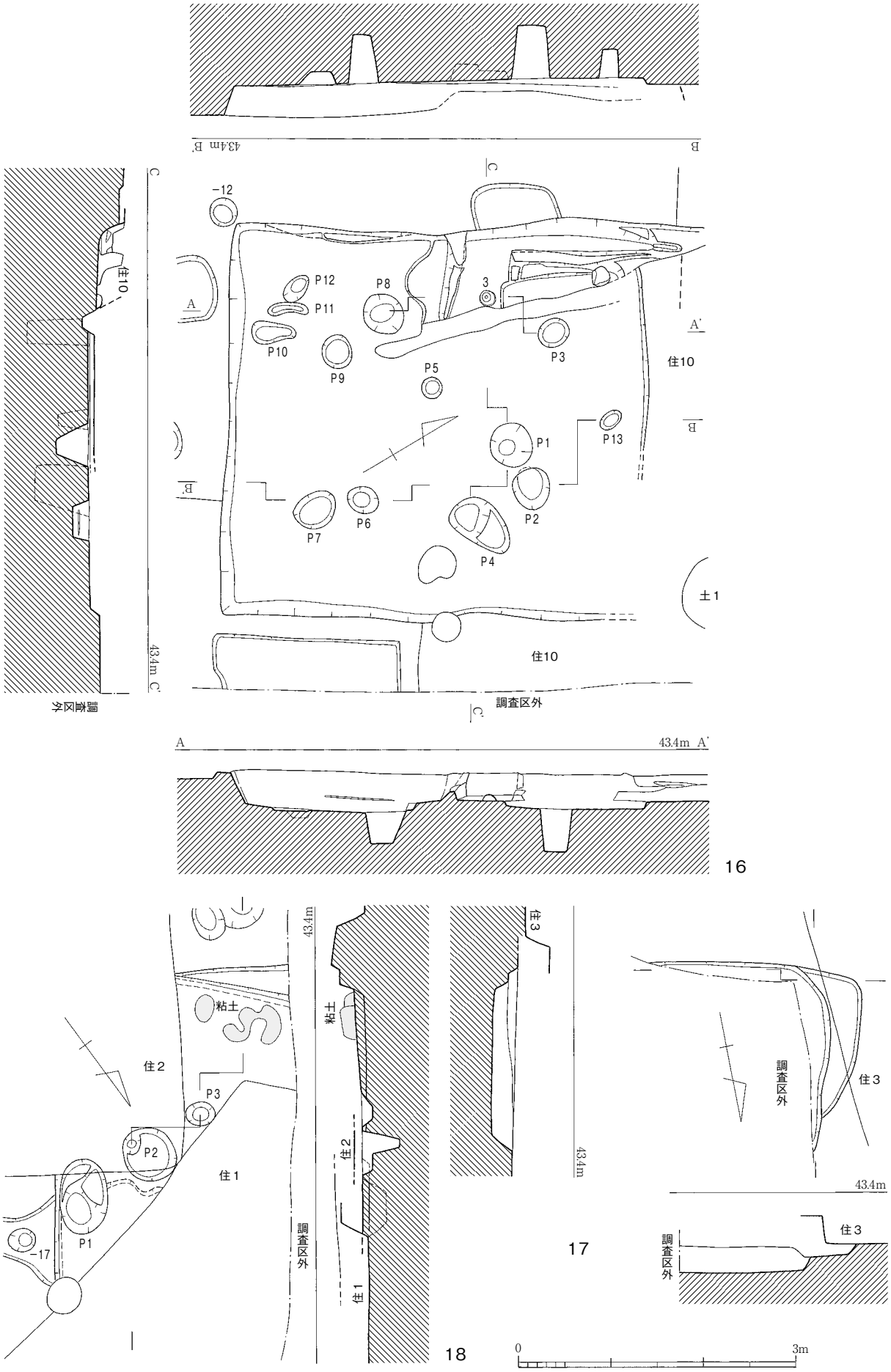
１の土師器甕の頸部内面の稜はしっかりしており、また切り合い関係から、５世紀後半に位置づけられる。

文中写真13　16号住居跡（西から）

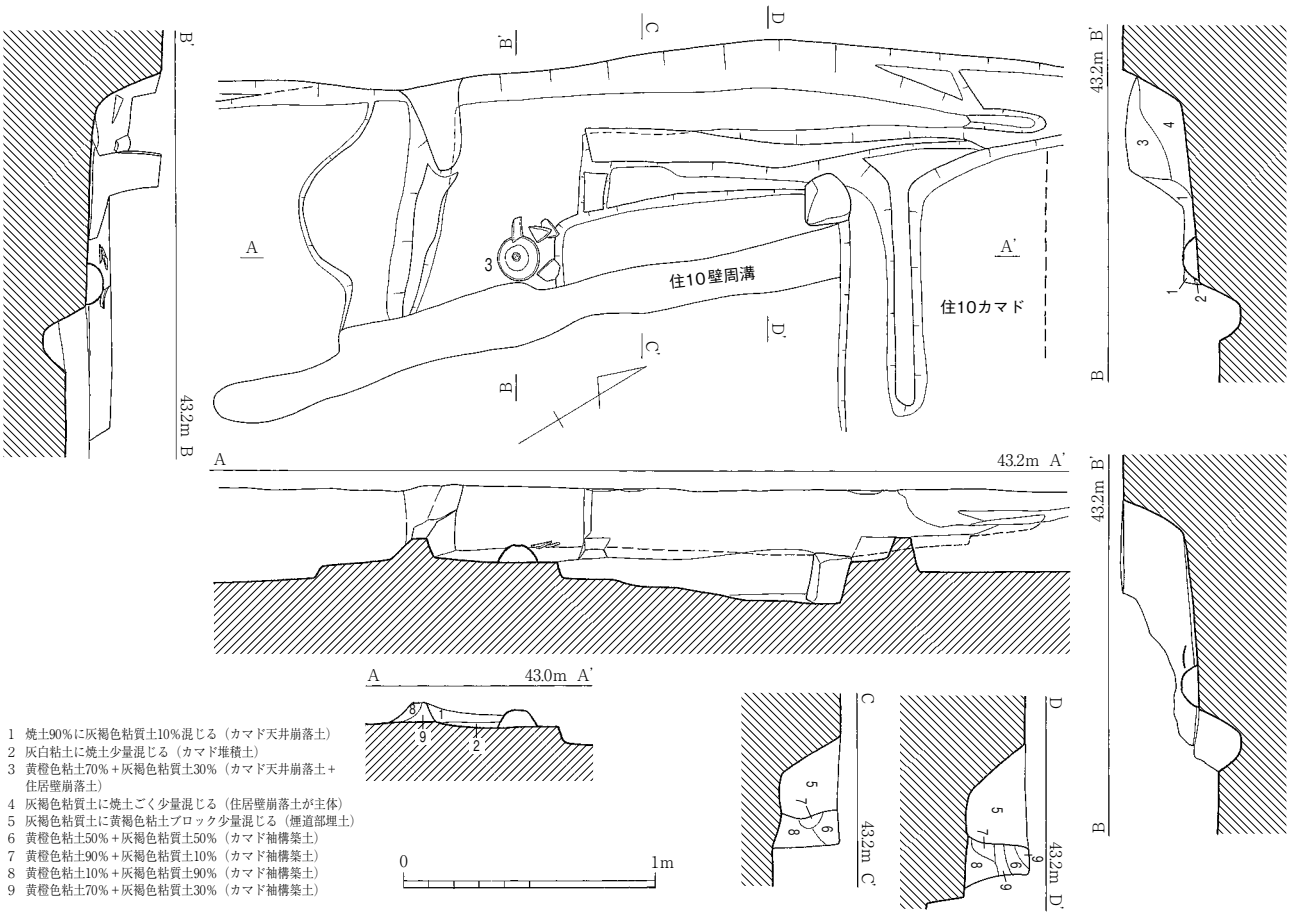
カマド（図版19、第57図）

住居西壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部から北に向かって延び、住居北西隅から竪穴住居の外に出る構造となる。

カマド袖先端及び前面は10号住居跡により大きく壊される。現状で袖は右袖で壁から91cm､「ハ」の字状に突出し、右袖はほとんど残存していない。燃焼部奥壁の手前65cmに土師器高坏（３）を天地逆に置き転用した支脚を設置するが、その前面の



第 56 図　5 次 1 区　16 ～ 18 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 57 図　5 次 1 区　16 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

硬化面及び焼面は壊されてしまったためか確認できなかった。煙道部は燃焼部奥壁から長さ 183cm、燃焼部主軸からほぼ直角に曲がり延びる。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造である。煙道部壁は黄褐色系粘土を互層状に積み上げて構築しているが、地山の土である灰黒色系の土を混ぜているため、くすんだ色となる。

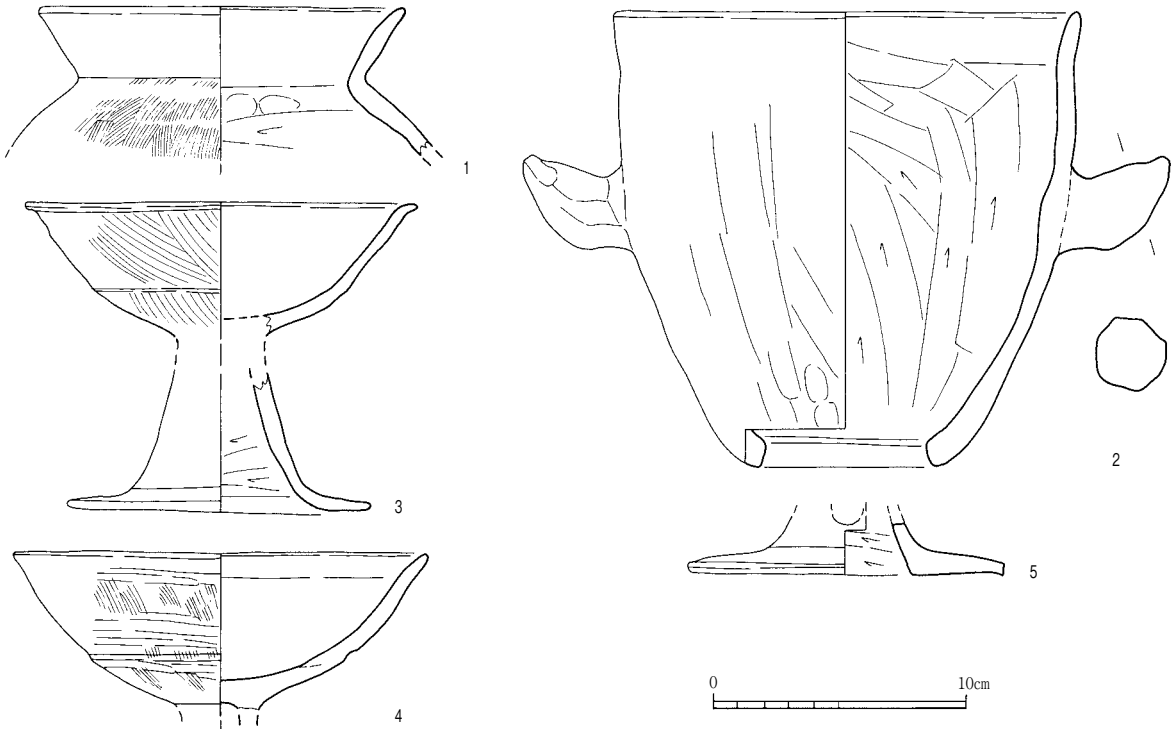
住居壁側を最大 10cm程度掘りすぎているため、幅は燃焼部側の上端で 24cm、下端で 15cm、煙道部先端の上端で８cm、下端で４cmを測るが、徐々に狭くなる構造となると思われる。煙道部断面はＵ字形を基本とし、床面は緩やかに上がるが、先端部は一段高くなる。煙道部埋土は５層のみで、煙道部天井崩落土を基本とする。

カマド埋土は１層がカマド天井崩落土、２層がカマド使用時の堆積土となる。袖の残存状況及び住居壁土を主体とする３・４層の存在から、カマド廃絶時に煙道部及び燃焼部上部を大きく壊していると予想される。

出土遺物（図版 57、第 58 図）

10 号住居跡で先述したように、10 号住居跡覆土上層出土土器の中に当住居跡出土土器が含まれる可能性があるが（第 41 ～ 43 図 12 ～ 69）、ここでは確実に当住居跡出土土器のみ図示した。

土師器（１～５）　１は甕で、胎土に金雲母を多く含むことから、他遺跡からの搬入土器である可能性がある。外面にはススが付着する、色は黄褐色。２は全形が復元できた甑で、復元口径 18.6cm、復元底径 6.8cm、復元器高 18.1cmを測る。外面は工具ナデ、内面は工具ナデのち下位のみケズリを施す。底部は単孔である。外面には黒斑があり、色はこげ茶色。３は支脚に転用した高坏である。



第 58 図　5 次 1 区　16 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

口縁端部は水平近くまで短く外反させ、屈曲部の稜は鈍い。外面はハケ後横ナデ、内面はナデを施す。脚部との接合は充填法と思われる。外面は被熱痕が顕著で、色は橙褐色。４は外面にハケ後のヘラナデにより稜を作り出した高坏坏部である。内面はナデを行う。外面には被熱痕あり。色は橙褐色。カマド内出土。５は水平近くまで脚裾部を曲げた高坏脚部である。穿孔は１ヶ所あるが、孔数は不明である。色は橙褐色。

17 号竪穴住居跡（図版 19、第 56 図）

１区北端の中央に位置し、３号住居跡に切られることは確実であるが、４号住居跡との前後関係は埋土の特徴及び出土土器から４号住居跡を切る。調査区壁際で住居南西隅のほんの一部を検出したにとどまるため、規模・主軸方位・主柱穴とも詳細は不明である。深さは最大 19cmを測る。埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘土ブロック多く混じる。覆土から石包丁（第 140 図４）が出土した。

出土土器から、５世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（第 55 図 11）

土師器（11）　11 は直口壺で、胴部内外面はハケを施す。口縁部内外面にはススが付着する。色は灰黄褐色を呈する。

18 号竪穴住居跡（図版 20、第 56 図）

１区北西端に位置し、１・２号住居跡に切られる。住居の大半が調査区外であり、住居南東部を２号住居跡に大きく壊され、南壁と東壁の一部を検出したにとどまる。住居の規模は南北 3.5 m以上、東西 2.55 m以上、竪穴部の深さは最大 25cmを測る方形住居である。

床面は黄褐色土の地山を平坦に整形し、造り出していた。また住居南壁際で明灰褐色を呈する粘土塊（アミ）を２ヶ所検出した。床面ではピット３基検出し、一段深い掘り込みを持つＰ２が主柱穴の可能性がある。住居埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘土ブロックが非常に多く混じる。住居床下

掘り込みを住居全面で確認した。

切り合い関係及び１号住居跡に当住居跡に属する可能性がある弥生時代後期終末の土器が混じるため、弥生時代後期終末に位置づけられる。

出土遺物（図版 57、第 55 図 12）

土師器（12） 12 は手づくね土器である。内外面指押さえ痕が残る。色は黄橙色。

19 号竪穴住居跡（図版 20、第 59 図）

１区中央東壁際に位置する。西壁中央にカマドを付設し、住居１／２程度が調査区外になるが、住居の規模は主軸長 2.8 m以上、南北 4.47 m、深さは最大 15cmを測る方形住居である。住居の主軸方位は北から 55° 西に振れる。床面ではピット４基検出し、位置と深さからＰ１・２が西側の主柱穴列となる４本柱住居と思われる。住居埋土は暗灰褐色粘質土で、床下掘り込みは住居全面で確認した。

第 55 図 17 の脚部がＵ字状に開く土師器高坏脚部は、12 号住居跡からも出土しているため、６世紀前半に位置づけられると考えられる。

カマド（第 59 図）

西壁中央の壁から 65cm離れた場所で、径 30cmを測る円形のしっかり焼けた硬化面（アミ）のみを確認した。14 号住居跡カマドと同じく、袖はすべて壊され、残存していないため、構造は不明。

出土遺物（第 55 図 13 ～ 26）

須恵器（13） 13 は口縁端部を上下に拡張させた壺口縁部である。色は灰色。

土師器（14 ～ 26） 14 は甕口縁部である。色は黄褐色。15 ～ 19 は高坏脚部である。色は 15・16・18 が橙褐色､17 が灰黄褐色､19 が黄橙褐色を呈する。15 ～ 17 は坏部が碗形を呈する可能性が高い。15 の坏部内面はミガキを施し、脚部外面はナデを施す。16 の脚部内面には工具痕あり。17 は全面ミガキを施すもの。脚部は内湾気味に「ハ」の字状に開く。18 は端部を折り曲げたもので、内外面に被熱痕あり。19 は坏部と付加法で接合するもので、接合部にはヘラ工具による刻みをいれている。外面はミガキを施した可能性が高く、内面はケズリを行う。

20 ～ 24 は碗である。色は 20 が褐色、21 が灰茶色、22 が灰黄褐色、23 がこげ茶色、24 が橙褐色を呈する。内外面ミガキを施すものは、20 ～ 22・24 である。20・23・24 の外面下位にはケズリ痕が残る。21 の外面下位はケズリではなく、工具ナデ痕が残る。22 は黒斑あり。23 は全面被熱痕あり。24 の内面のミガキは粗い。25 はミニチュア土器の底部か。底部は凸レンズ底である。色は黄橙褐色。26 は甕である。色は灰黄褐色。床下掘り込み出土。

20 号竪穴住居跡（図版 20、第 59 図）

１区中央の北東寄りに位置し、40 号住居跡に切られ、21 号住居跡を切る。検出時に 21 号住居跡との切り合い関係を誤ったため東壁と南壁の一部を掘り失ったが、東壁下端の一部を検出できたため、住居の規模は判明した。住居の規模は南北 4.55 m、東西 4.45 m、深さは最大 15cmを測る、正方形の住居である。住居の主軸方位は北から 38° 東に振れる。

床面ではピット 14 基検出し、住居ほぼ中央のＰ１が炉で、埋土は暗灰褐色粘質土に焼土が少量混じる土である。Ｐ 10 は深さ・位置とも４本柱の主柱穴としては問題がないが、その他のピット

はいずれも深さが浅いものが多く、主柱穴配置は不明である。またＰ６は住居壁際ではあるものの、形態から住居内仕切り溝ないしは壁に板を貼った痕跡の溝となる可能性がある。住居内からは比較的多くの土器が出土したが、ほとんどの土器は床面から５cmほど浮いた状態で出土した。

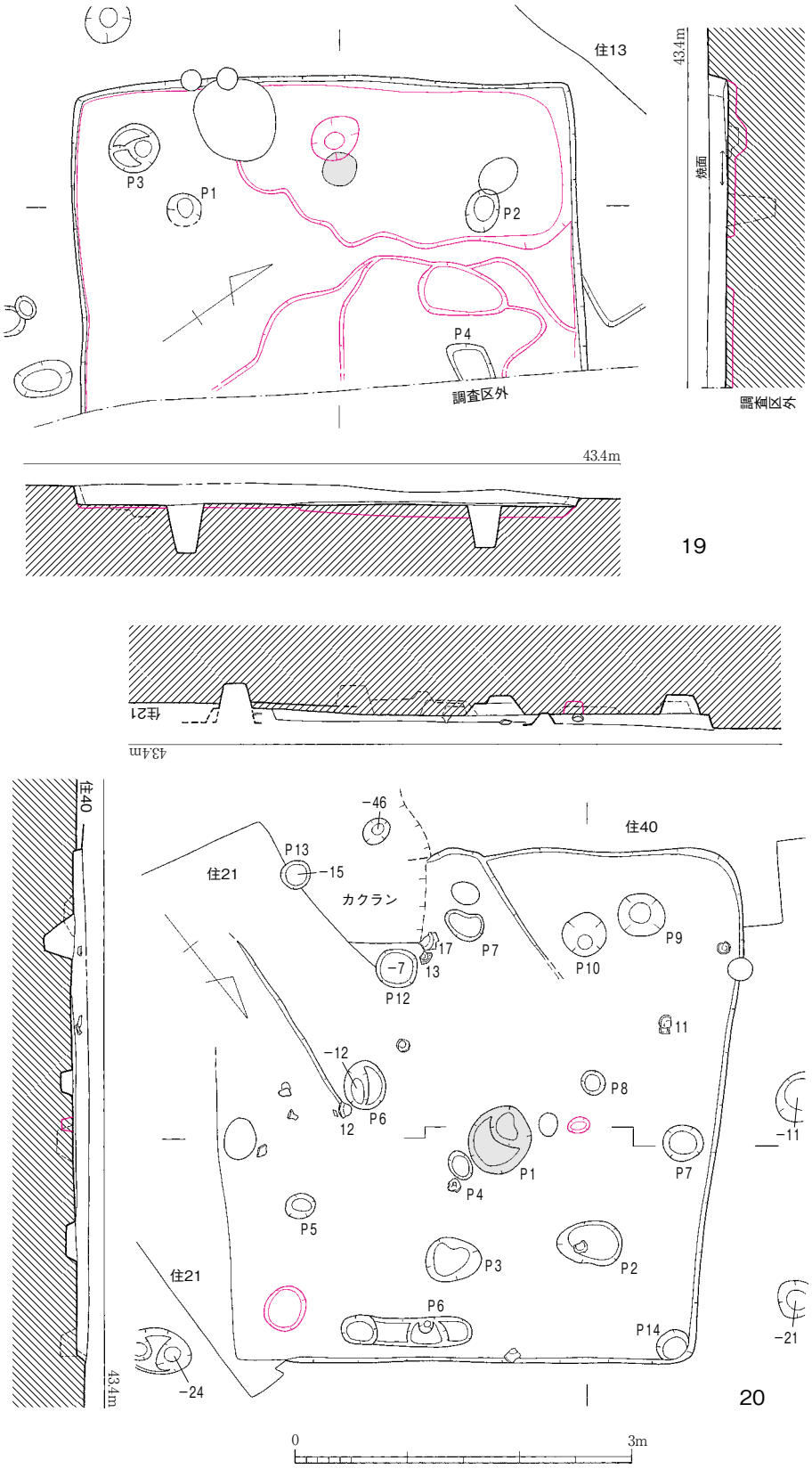
住居埋土はレンズ状に堆積し、外側の埋土は粘性のある暗灰褐色粘質土が基調で、住居中央の埋土は暗灰褐色粘質土に黄褐色粘土が多く混じる土となる。住居床下掘り込みを２ヶ所確認した。

在地系と布留系土器が共伴していることから、住居の時期は古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版57、第60図１～20）

土師器（１～20）

１・２は在地系壺か甕の底部である。１の外面は工具ナデ後ナデ、内面底部には工具痕が残り、その上はハケを施す。色は黄茶褐色。２はわずかに小さな平底を残す凸レンズ底で、外面はタタキのちハケを施す。外面にはススが付着する。色は暗褐色。３は在地系甕口縁で、口縁端部をさらに外反させる。胴部内面はケズリを施す。色は灰褐色。４～６は高坏である。４は在地系高坏口縁部で、内外面にミガキを施す。色は橙褐色。５は在地系の脚部で、外面には縦ナデの稜が残る。



第59図　５次１区　19・20号竪穴住居跡実測図（1/60）

坏部内面は磨滅し、脚部内面はハケを施す。色は灰橙色。６も付加法で坏部と接合した脚部で、脚裾部内面はハケ、脚柱部内面はケズリを行う。焼成前に２ヶ所穿孔を施す。色は橙褐色。

７～20は鉢である。７・９～13・16・17は黒斑、16は被熱痕、20はススが認められる。色は７～10・14・16～20が灰黄褐色、11が黄茶褐色、12・13が黄褐色、15が暗褐色。７はほぼ完形品の手づくね風の粗製鉢。口径11.2cm、底径5.6cm、器高8.3cmを測る。外面は工具ナデ後ナデ、内面はナデを施すが、内外面とも粘土継ぎ目痕が顕著に残る。８は内面に暗文状のミガキが残る。９は布留系で、ほぼ完形品。口径10cm、器高3.6cmを測る。外面はナデ、内面はミガキを施す。10もほぼ完形品で、口径11.8cm、器高3.1cmを測る。底部外面にはケズリを施し、内外面ナデ後スリップを施す。11～19は外反口縁鉢である。11は完形に近い在地系で、復元口径11.4cm、復元器高8.1cmを測る。胴部外面はハケ後一部ナデ、内面は工具ナデ後ナデを行う。12・13は布留系で、体部外面はケズリ後ナデを施す。13は長い口縁部が開くもので、内面には工具痕が残る。16・17は在地系である。16の体部内外面はハケのちナデを施す。17は尖底で、体部外面は工具ナデ後ナデ、内面はケズリで調整する。

床下掘り込み出土土器（18～20）　18は在地系の鉢で、外面ハケ、内面ミガキを施す。19・20は在地系の外反口縁鉢である。19の口縁部外面はケズリを行う。

21号竪穴住居跡（図版20、第61図）

１区中央の北東寄りに位置し、20・40号住居跡に切られる。20・40号住居跡及び撹乱により住居西側を大きく壊されており、東壁は全体検出できたが、北・南壁は一部検出したにとどまる。また住居北東隅の一部は掘りすぎており、破線で復元する。

住居の規模は南北4.26ｍを測るが、東西はＰ４まで当住居のピットと考えると、東西幅4.3ｍ以上となる。深さは最大18cmを測る方形住居である。住居の主軸方位は座標北である。

住居東壁ほぼ中央で、円形の屋内土坑を検出した。床面ではピットを５基検出し、深さからＰ２・３・４が主柱穴となる可能性があるが、主柱穴配置は確定できない。

住居床下掘り込みは住居東側を中心にピット状の浅い掘り込みを確認したが、住居中央の南北に延びる段差は住居西壁にベッド状遺構が付設されていた痕跡の可能性がある。床面から５cm程浮いた状態で高坏（27）が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土土器及び切り合い関係から、古墳時代前期に位置づけられる。

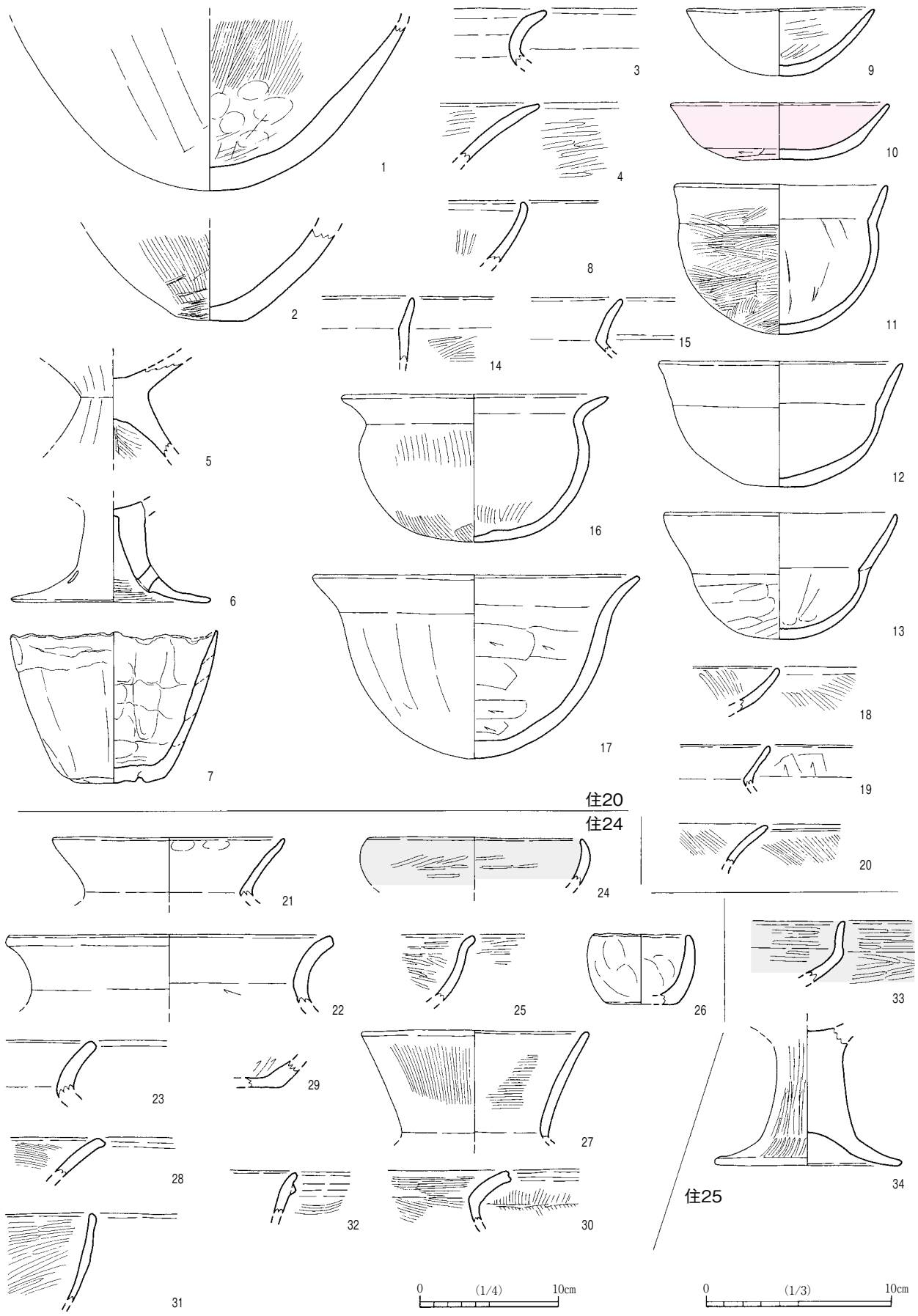
出土遺物（第55図27）

27は在地系高坏脚部で、脚部内面はハケ工具で絞りを行っている。色は灰黄色。

22号竪穴住居跡（図版21、第61図）

１区中央の北寄りに位置し、24号住居跡に切られる。当住居付近は礫層が露出することから、旧地形では最も高い場所にあたると思われ、住居壁下端まで削平されていた。住居の規模は南北4.0ｍ、東西3.4ｍのやや南側が広がる方形住居である。住居の主軸方位は北から９°東に振れる。

住居東壁中央で、灰褐色粘質土に焼土が少量混じる埋土の方形の屋内土坑を検出した。住居中央には径30cmの焼土の広がりを検出し、その南側には一部焼土のかたまりと重複する位置でＰ９を検出した。Ｐ９の埋土は２cmほどの厚さの焼土層下に炭層が広がっていることから、灰穴炉の可能



第 60 図　5 次 1 区　20・24・25 号竪穴住居跡出土土器実測図（29・30 は 1/4、他は 1/3）

性がある。またその上層の焼土のかたまりは地床炉の可能性があり、炉を造り替えた可能性がある。床面ではＰ９以外でピットを８基検出し、位置・深さからＰ１・２・７が主柱穴となる可能性があり、２本柱、４本柱住居いずれも考えられ、２本柱→４本柱への住居建て替えも考慮する必要がある。住居全面で床下掘り込みを確認した。

出土遺物で図示できるものはないが、屋内土坑及び炉跡を持つ住居形態から弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる。

23 号竪穴住居跡（図版 21、第 62 図）

１区北の西壁際に位置し、24 号住居跡、３号土坑に切られ、15・26 号住居跡を切る。住居西壁は調査区外まで延びるが、カマド焼面と思われる焼土の広がりを西壁際で検出していることから、あと１ｍ以内で西壁に至ると思われる。住居の規模は主軸長 5.1 ｍ以上、東西 5.17 ｍ、深さ最大 10㎝を測る、やや東西に長い方形住居になると想定される。住居の主軸は北から 57° 西に振れる。

床面ではピット 14 基検出し、位置と深さからＰ１・７・11・12 が主柱穴となる４本柱の住居である。また住居北東隅の床面で粘土塊を３ヶ所確認した。住居東壁中央床面直上で土師器高坏（16）が出土した。住居埋土は明るい灰褐色粘質土である。床下掘り込みは住居全面で確認した。覆土より刀子片（第 142 図７）が出土した。

１の須恵器壺内面はナデ消していること、土師器甕の頸部内面の稜が鈍く、14・16 の土師器高坏脚部が中実であること及び切り合い関係から、６世紀前半に位置づけられると考えられる。

カマド（第 62 図）

住居西壁中央に付設されたと思われ、調査区内ではカマド前面の焼面のみ確認した。調査区内では袖の痕跡も検出できなかったことから、14・19 号住居跡カマドと同様、住居廃絶時に袖まで壊されている可能性がある。

出土遺物（図版 57、第 63 図）

須恵器（１）　１は壺頸部である。外面には自然釉が厚く付着し、調整は不明。内面はナデ消している。色は灰色。

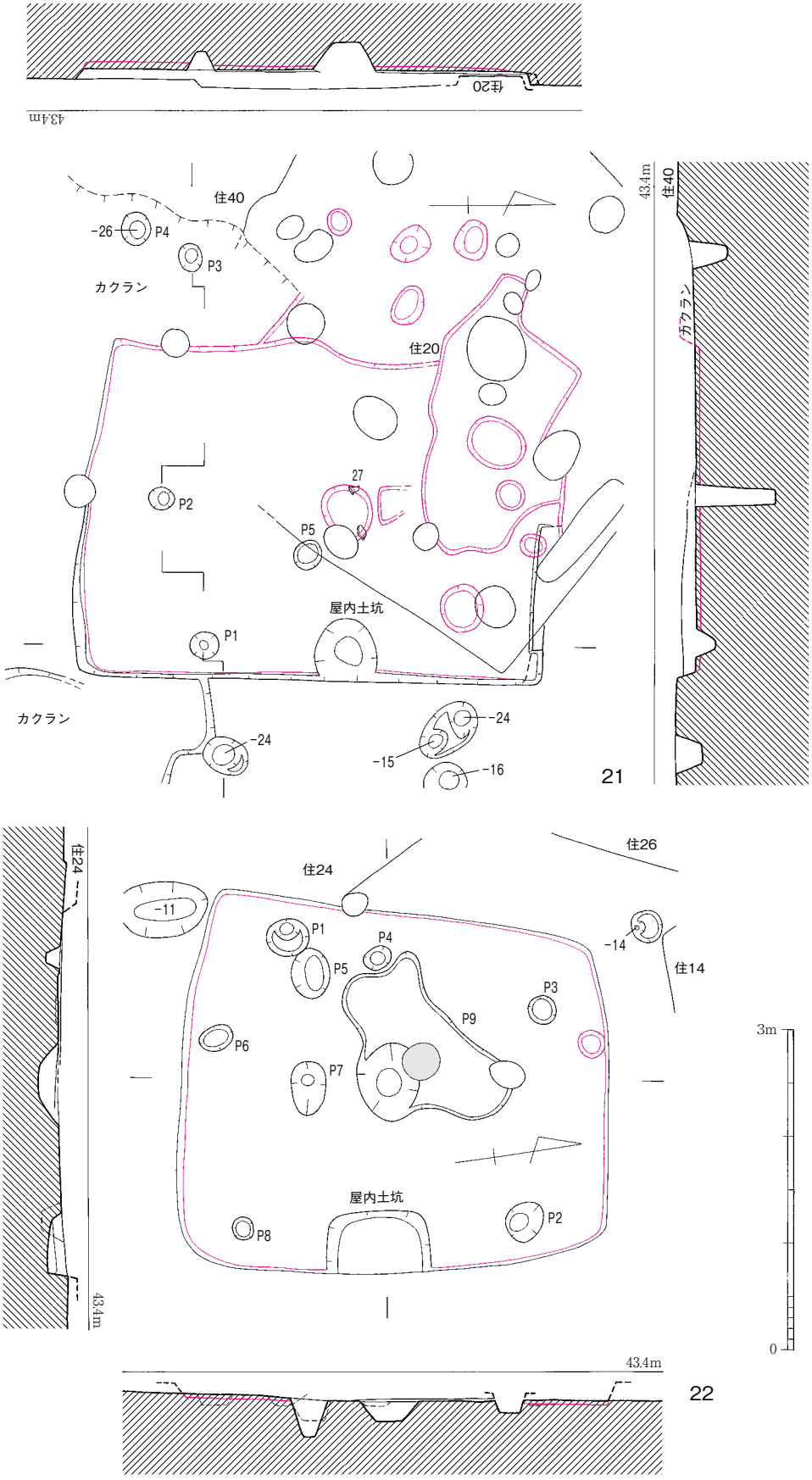
土師器（２～33）　２～13 は甕である。３は黒斑、７は被熱痕あり。色は２・３・８～13 が灰黄褐色、４が暗褐色、５・６が茶褐色、７が橙褐色を呈する。２は口縁部が直立し、口縁端部はナデで面取りする。胴部外面のハケは粗く、胴部内面は頸部までケズリを施す。３は頸部の締まりがなく、そのまま口縁部が弱く外反させるもの。外面は工具ナデ、胴部内面は頸部までケズリを施す。４～６は口縁部が強く外反するもの。５・６は内外面ナデ調整で、胴部内面には粘土継ぎ目痕が残る。８・９は口縁部が強く外反する。11 は口縁部が橙褐色、胴部が白黄褐色と異なる粘土を用いたことがよく分かることから、図版でも示す（図版 57）。

文中写真 14　23 号住居跡カマド前面焼面（東南東から）

14 ～ 18 は碗形の坏部を持つ高坏である。14・15 は素口縁、16・18 は口縁端部が短く外反する。色は 14・17 が灰黄褐色、15・18 が橙褐色、16 が灰黒色を呈する。14 の坏部内外面はミガキを施し、

脚部外面は縦ナデで調整する。15は脚部と付加法で接合し、内外面はナデで調整しており、指押さえ痕が残る。16は完形に近いもので、復元口径14.1cm、復元底径10.2cm、復元器高9.6cmを測る。内外面幅が太いヘラナデを施し、外面全体及び坏部内面は黒化処理を行っている。17の脚裾部は工具ナデ後横ナデを施す。18は胎土から坏部と脚裾部が同一個体の可能性があるため、合せて図示した。坏部外面下位は工具ナデを施し、内面はミガキを行う。

19～28は碗である。25以外はいずれも内外面にミガキを施し、その後、21は内面、25は外面、26は内外面全体に黒化処理を行う。20・28は黒斑、27・28は被熱痕あり。色は19・20・26・27



第61図　5次1区　21・22号竪穴住居跡実測図（1/60）

が橙褐色、21・28 が灰黄褐色、22 が黄茶褐色、23 が暗灰黄褐色、24 が茶褐色、25・26 が暗灰色を呈する。19 ～ 21 は口縁部の外反が弱いもの。21 は内外面幅太いヘラナデ状のミガキを施す。22・23 は口縁部が強めに短く外反するもの。24・25 は器壁が厚く、口縁部が弱く外反するもの。25 の外面下位はケズリ、内面にはナデを施す。26 ～ 28 は反転復元できたもの。26 は口縁部が直立するもので、外面下位はケズリ後ミガキを施す。27・28 は口縁部が短く外反するもの。

29 ～ 33 は古墳前期の土器で、混入品である。29 は在地系甕で、内面には縦ナデ痕が残る。色は灰黄褐色。30 は高坏脚部で、焼成前ほとんど乾燥した状態で１ヶ所穿孔する。外面は被熱する。31 は口縁部が大きく開く在地系鉢で、胴部内面下位はケズリを施す。外面には顕著な被熱痕あり。色は茶褐色。32 は手づくね土器。色は褐色。33 はほぼ完形品の小型鉢で、口径 9.2㎝、器高３㎝を測る。外面はナデ、内面にはハケを施す。色は黄褐色～橙褐色。

24 号竪穴住居跡（図版 21、第 64 図）

１区中央の北西寄りに位置し、22・23・26・27 号住居跡を切る。当住居付近は礫層が露出することから、旧地形では最も高い場所にあたり、南壁のほとんどは削平され失われており、南西部の一部を検出したにとどまる。また 27 号住居跡とは切り合い関係を誤り、北西部の壁を掘り失ったため、破線で復元している。住居の規模は南北 6.43 m、東西 4.63 m、深さ最大７㎝を測る、23 号住居跡と同様、南北に長い長方形住居になる。住居の主軸は北から 35° 西に振れる。

床面ではピット 13 基検出し、位置と深さからＰ２・６・７・11 が主柱穴となる４本柱の住居と思われるが、住居中央に位置するＰ１・３・13 も深さがあり、補助的な柱穴を構成していた可能性がある。またカマドも住居北壁に存在した可能性があるものの、ちょうど撹乱があったためか、カマドの痕跡はまったく確認できなかった。住居埋土は明るい灰褐色粘質土で焼土が非常に多く混じる。床下掘り込みは住居全面で確認し、特に住居中央東寄り、Ｐ 13 東に位置する床下掘り込み小ピット群は住居を掘削した工具痕の可能性がある。

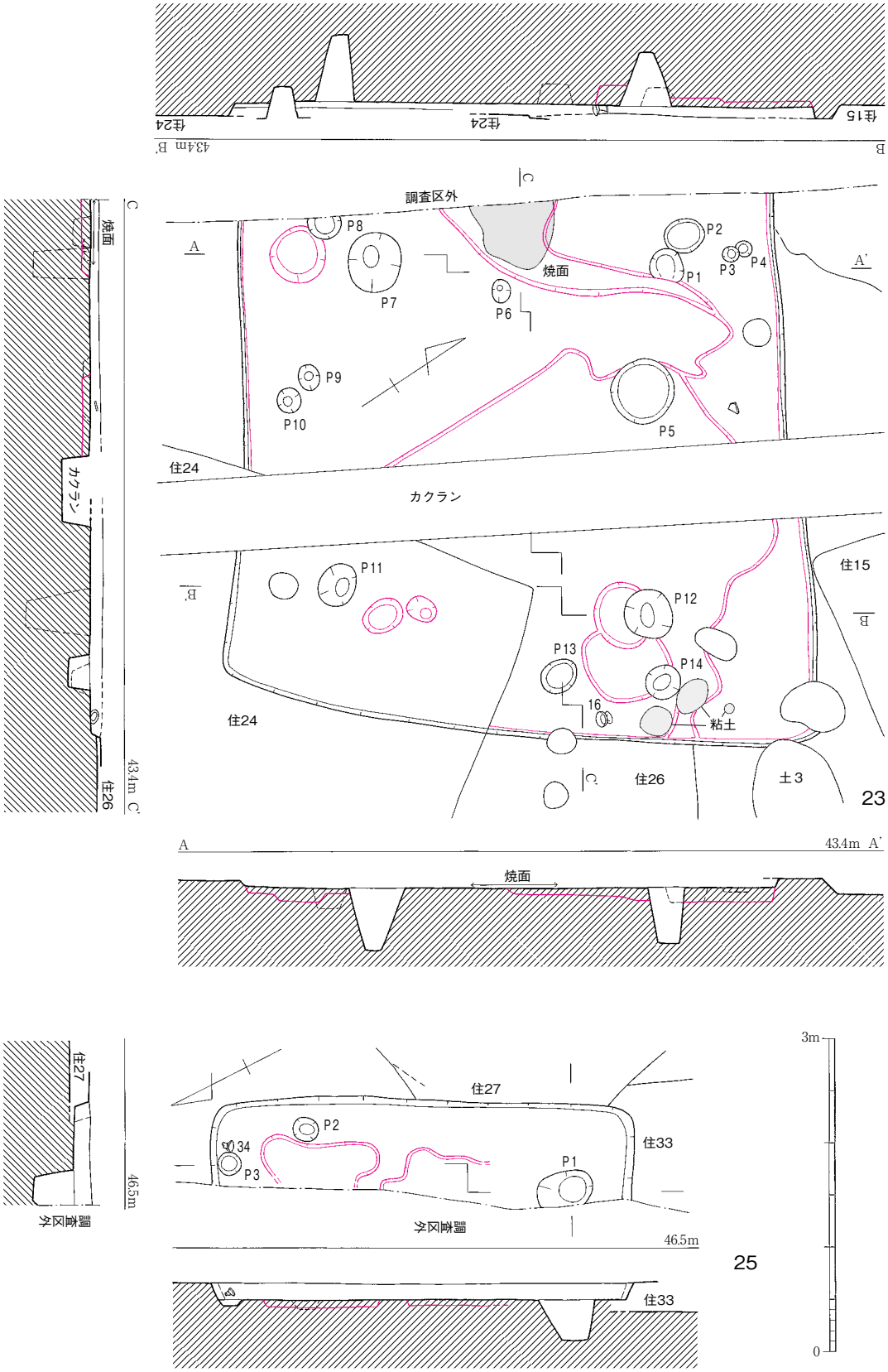
22 の土師器甕内面頸部の稜は顕著ではなく、24 の土師器碗の器壁が厚いこと及び切り合い関係から、６世紀前半～中頃に位置づけられると考えられる。

出土遺物（図版 67、第 60 図 21 ～ 32）

土師器・弥生土器（21 ～ 31） 21 ～ 26 は古墳後期の土器で、当住居に伴うもの。21 は壺口縁部である。色は灰黄褐色。22・23 は甕口縁部である。22 の胴部内面はケズリを施し、内外面とも被熱痕あり。色は 22 は灰黄褐色。23 は茶褐色。24 は口縁部が内湾する碗で、内外面ミガキのち黒化処理を行う。生地は暗灰黄褐色。25 は短く外反する口縁部の碗で､内外面ミガキを施す。色は橙褐色。26 は手づくね土器。色は灰褐色。

27 ～ 29 は弥生後期～古墳前期土器で混入品。27 は在地系直口壺で、口縁端部にはススが付着する。色は灰橙褐色。28 は在地系甕口縁部で、色は灰黄褐色。29 は平底が残る弥生後期甕底部。色は灰黄褐色。30 ～ 32 は床下掘り込み出土。30 は在地系甕で、内面には黒斑あり。色は灰黄褐色。31 は内面のみミガキを施した鉢。色は灰黄褐色。

縄文土器（32） 32 は口縁端部のやや下がった位置に三角突帯を巡らした晩期後半の深鉢口縁部。外面は工具による擦過、内面はナデで調整する。色は灰黄褐色。



第 62 図　5 次 1 区　23・25 号竪穴住居跡実測図（1/60）

25 号竪穴住居跡（図版 21、第 62 図）

1 区中央の西壁際に位置し、27・33 号住居跡を切る。住居大半が調査区外で、住居の規模は南北 4.07 m、東西 0.9 m以上、深さ 15cmを測る方形住居である。住居の主軸方位は北から 64° 西に振れると思われる。

床面ではピット３基検出し、位置と深さからＰ１が４本柱主柱穴の候補となるが、対の主柱穴は不明である。住居埋土は灰褐色粘質土に焼土粒が多く混じる。床下掘り込みは住居全面で確認した。

34 の土師器高坏脚部が中実であること、33 の土師器模倣坏及び切り合い関係から、６世紀後半に位置づけられると考えられる。

出土遺物（第 60 図 33・34）

土師器（33・34） 23 は口縁部を直立させた碗で、内外面ミガキのち黒化処理を行う。生地は茶褐色。34 は高坏脚部。外面全体ミガキを施し、内面には黒斑あり。色は橙褐色。

26 号竪穴住居跡（図版 22、第 64 図）

１区北の西寄りに位置し、23・24 号住居跡に切られ、近接する 14 号住居跡にも切られる可能性がある。住居の規模は東西 4.7 m、南北 3.8 m、竪穴部の深さは最大 25㎝を測る、東西にやや長い方形住居である。住居の主軸方位は北から 26° 東に振れる。

竪穴部北壁中央には暗灰褐色粘質土を埋土とする屋内土坑を設け、屋内土坑以外の住居西壁及び東壁から北東隅にかけて地山削り出しのベッド状遺構を付設する。ベッド状遺構の規模は西側で幅最大 125㎝、高さ６㎝、東側で幅最大 94㎝、高さ７㎝を測る。

竪穴部床面ではピットを 12 基検出した。竪穴部中央に位置するＰ１は埋土が灰褐色粘質土に焼土が混じることから炉であり、その両側に位置するＰ２・３が主柱穴となる２本柱の住居である。竪穴部床面直上で、土師器小型丸底壺（３）と鉢（５・６）、杓子形土製品（７）が出土した。住居埋土は暗めの灰褐色粘質土である。竪穴部全面で床下掘り込みを確認した。

出土土器はすべて在地系であること及び２は小さな平底を残していることから、住居の時期は弥生時代後期終末に位置づけられる。

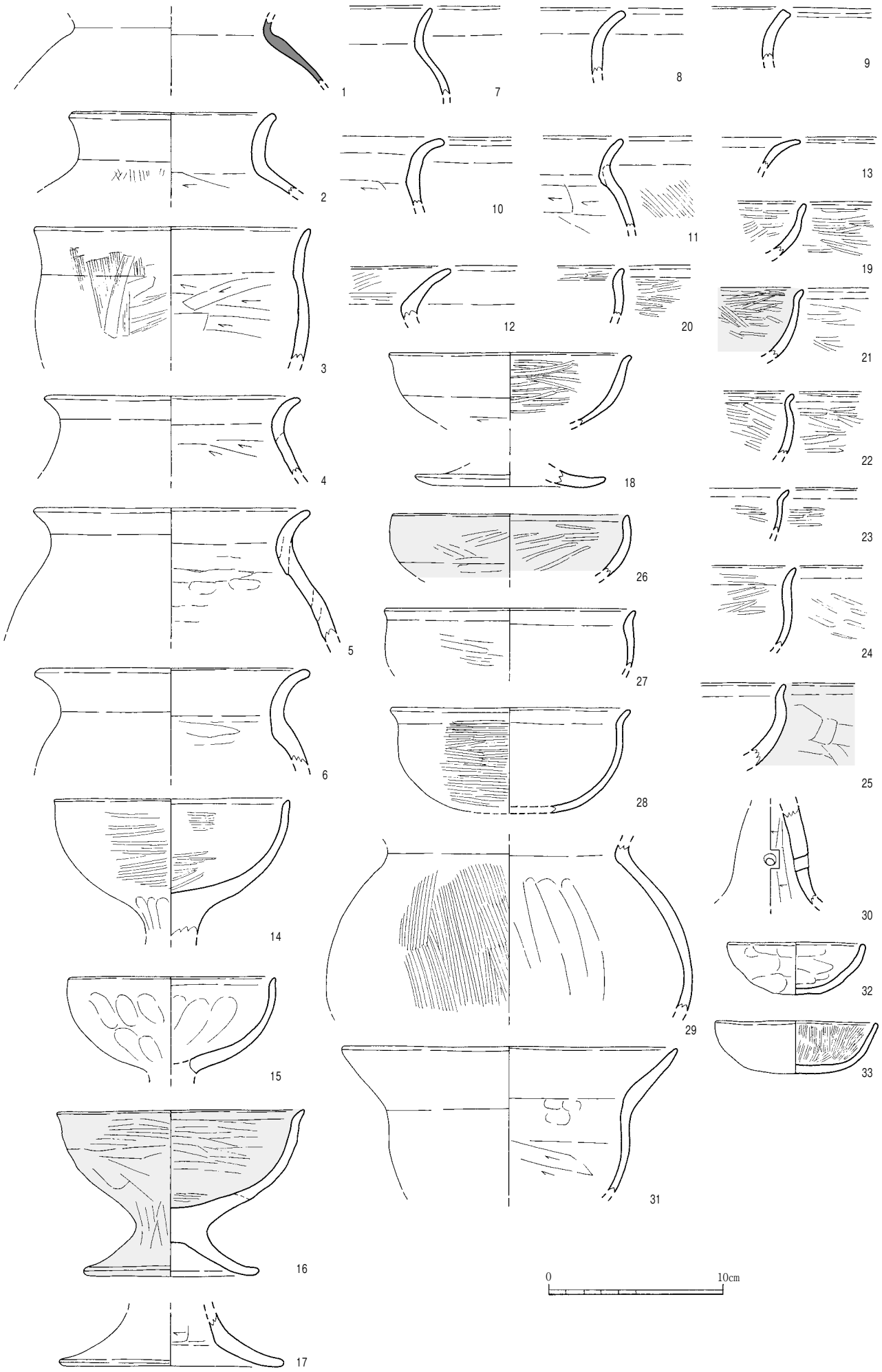
出土遺物（図版 57、第 65 図１～９）

土師器・弥生土器（１～９） １・２は在地系甕である。１は口縁部で、内外面ハケ後ナデを施す。色は黄褐色。２は平底の弥生後期終末の甕底部で、外面には黒斑あり。色は茶褐色。

３～６は在地系鉢である。３は黒斑、４は被熱痕あり。色は３・５・６が灰黄褐色、４が黄橙褐色を呈する。３は外反口縁で、ほぼ完形品。口径 9.4㎝、器高 6.8㎝を測る。底部外面はヘラナデ、口縁部内面はハケ、内面はナデを施す。４～６は直口鉢で、いずれもほぼ完形品。４は口径 9.9㎝、器高 6.7㎝を測る。底部に円形粘土の単位が確認されることから、まず円形粘土で底部をつくり、その後粘土紐を積み上げたことがわかる。５は口径 11.5㎝、器高 5.9㎝を測る。底部外面は短い手持ちヘラケズリを施す。内面には工具痕あり。６は口径 13㎝、器高 12.8㎝を測る。外面底部はケズリ、内面底部は工具痕が残る。外面には粘土のヒビが顕著にみられる。

文中写真 15　26 号住居跡（北から）

７は杓子形土器で、柄先端部は欠損するが、残存長 20.2㎝、頭径 7.3㎝、頭高 5.4㎝、柄残存長 12.9㎝を測る。頭の内面は丁寧なナデを施すが、頭外面は指押さえ痕が残る程度のナデを施している。柄は基本的にナデ調整であるが、頭に近い部分は幅が狭いケズリで調整を丁寧に行う。胎土は



第 63 図　5 次 1 区　23 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

精良で、色は黄褐色。

８・９は古墳後期土器で混入品。８は甕で、色は灰黄褐色。９は高坏坏部で、外面には細かいハケを施す。外面は被熱痕とススが認められる。色は褐色。

27 号竪穴住居跡（図版 22、第 66 図）

１区中央の西寄りに位置し、24・25 号住居跡に切られ、33 号住居跡を切る。住居北東から南西にかけて撹乱により大きく壊される。住居の規模は東西 3.9 m、南北 3.43 m、深さは最大 31㎝を測る、正方形の住居である。住居北西部の壁は一部掘りすぎている。住居の主軸方位は北から 66°東に振れる。床面ではピットを３基検出し、Ｐ３は位置・深さから主柱穴となる可能性があるが、その他の主柱穴は不明である。北壁の一部に壁周溝が巡る。西壁際のほぼ床面直上で土師器壺（１）・甕（２）・鉢（８）などがまとまって出土した。住居埋土は灰茶褐色粘質土である。住居東側で床下掘り込みを確認した。覆土から凹石（第 141 図 13）が出土した。

２～４は在地系と畿内系の融合した土器であることから、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 58・67 第 67 図１～ 13）

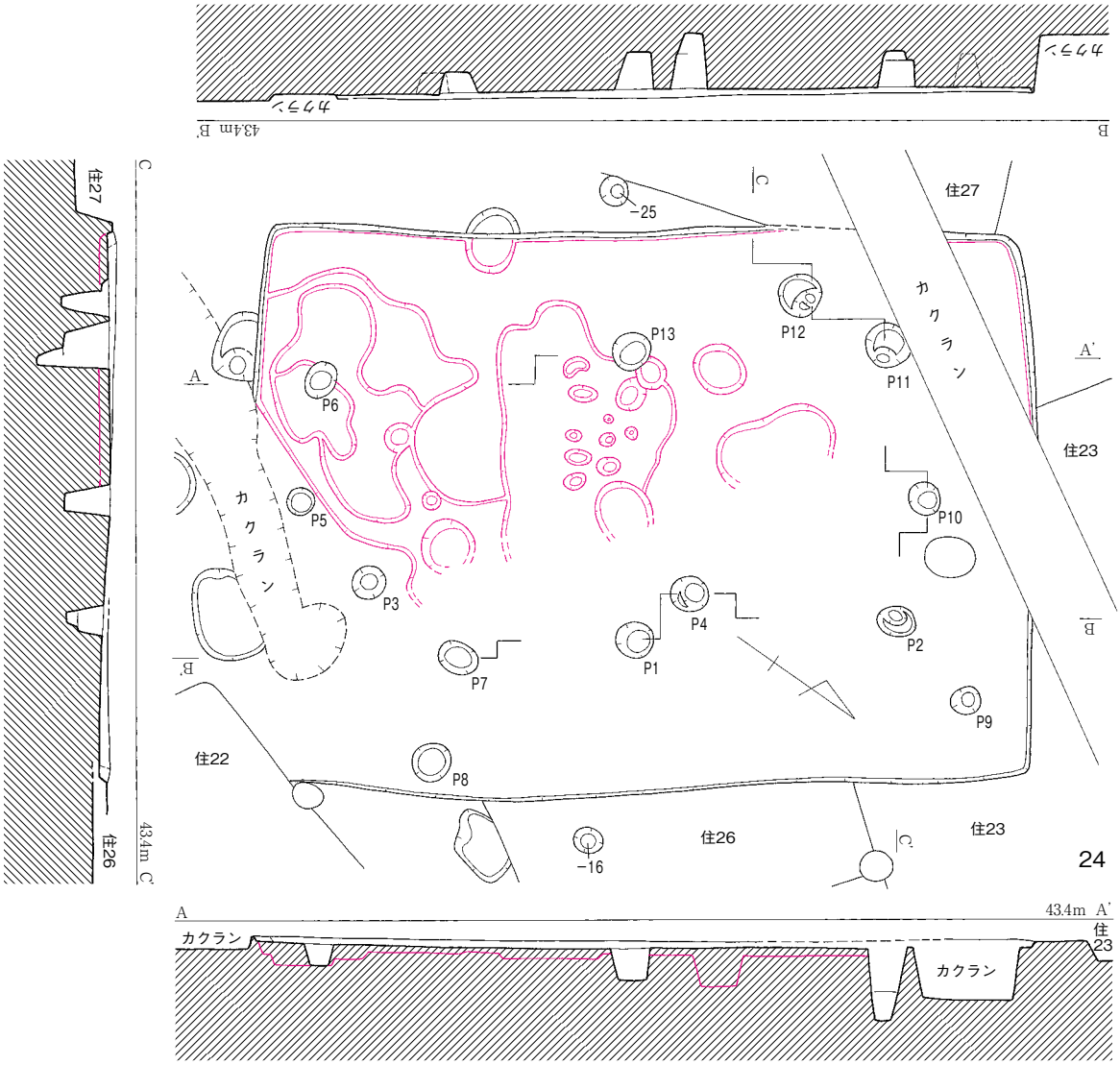
土師器（１～ 10）　１は在地系直口壺である。焼成が甘く、黒化が顕著である。胎土には砂粒多く含み、色は淡黄褐色。２～４は甕である。いずれも外面にススが付着する。２は在地系と畿内系の両方の要素がみられるもので、胴部外面上位は斜めハケ後頸部まで縦ハケを施す。内面中位以下は一部粗いハケ後ケズリを行う。色は黄茶褐色。３は布留系譜の甕で、器壁が厚い。横ナデが縦ハケ後に胴部中位に行われ、最後に細かなハケを粗く施す。内面頸部までケズリを行う。色は茶褐色。４も布留系譜の甕で、外面は斜め・横ハケのち粗い縦ハケ、内面は丁寧なケズリを行う。色は灰茶褐色。５・６は高坏である。５は逆「く」の字形に屈折する坏部で、外面はハケ後粗い縦ミガキ、内面も暗文状の縦ミガキを施す。色は外灰黄褐色、内茶褐色。６は脚部で、外面は被熱のため、器表が荒れる。色は茶褐色。７は布留系直口鉢で、外面下位はケズリ、内面は暗文状のミガキを施す。外面には黒斑あり、色は黄褐色。８は粗製の大型鉢で、外面はナデ、内面は上位のみハケを施す。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。９は在地系の外反口縁鉢。体部外面下位はハケ後ナデを施す。色は灰黄褐色。10 は布留系小型器台口縁部である。外面にはハケを施す。色は灰黄褐色。

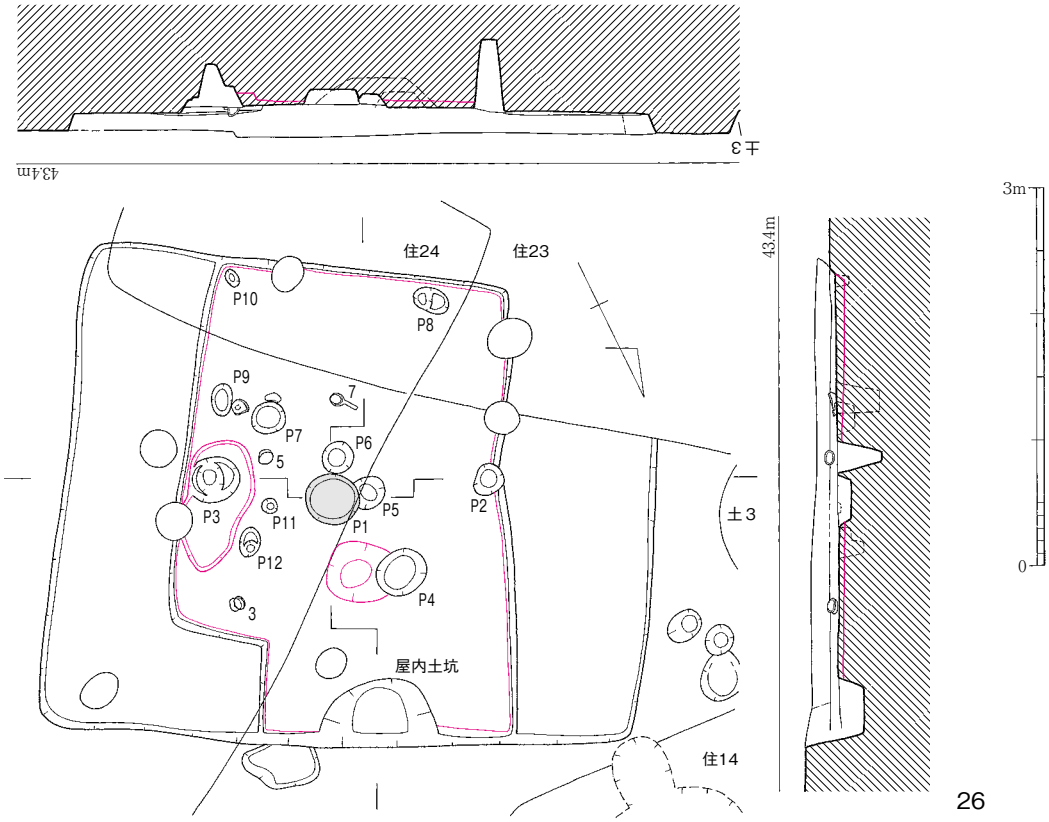
縄文土器（11・12）　いずれも住居埋土出土の混入品。11 は口縁端部から下がった位置に三角突帯を巡らした、晩期深鉢口縁部。外面は擦過、内面はナデで調整する。色は褐色。12 は復元口径 23.4㎝ほどに復元できる晩期の浅鉢である。内外面板状工具による擦過を施し、一部ナデでナデ消しを行っている。口縁端部にはわずかに突出するヒレ状の突起を張り付けるが、何ヵ所突起を付けたが不明である。胎土は精良で、色は灰黄褐色。なお、12 のように完形に近く復元できる縄文土器があることから、付近に縄文晩期の遺構が存在した可能性がある。

当住居跡付近遺構面等出土土器（13）　13 は在地系二重口縁壺である。頸部との境にヘラ工具による刻目を入れた低平な三角突帯を巡らす。色は黄褐色。

28 号竪穴住居跡（図版 22、第 66 図）

１区中央に位置し、30 ～ 32・36 号住居跡に切られる。住居西側は 31・32 号住居跡によって壊されるが、住居の規模は南北 3.93 m、東西 4.95 m以上、竪穴部の深さは最大 11㎝を測る、東西に





第 64 図　5 次 1 区　24・26 号竪穴住居跡実測図（1/60）

長い長方形住居である。住居の主軸方位は北から10°西に振れる。

住居北・東・西壁の三方に地山削り出しのベッド状遺構を付設し、竪穴部南壁中央には暗灰褐色粘質土を埋土とする屋内土坑を設ける。ベッド状遺構の規模は北側で幅最大103cm、高さ５cm、東側で幅最大95cm、高さ６cmとなる一方、西側は幅155cm以上と幅広くなりすぎるため、西壁は想定よりも手前にあり、掘り失っている可能性がある。

竪穴部床面ではピットを４基検出したが、いずれも浅く主柱穴配置は不明である。住居埋土は暗めの灰褐色粘質土で、竪穴部床面には炭層が広がる。

10の布留系甕から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版58、第65図10・11）

土師器（10・11） 10は布留系甕で、口縁端部は折り曲げたように肥厚させる。胴部外面は横ハケ、内面は細かなケズリを施す。外面全体に顕著な被熱痕と厚くススが付着。色は灰黄褐色～橙褐色。11は鉢形の手づくね土器である。底部中心からずれた位置に焼成後１ヶ所穿孔する。色は灰褐色。

30号竪穴住居跡（第68図）

１区中央に位置し、32・35・36・84号住居跡に切られ、28・81号住居跡を切る。上層の竪穴住居により大きく破壊され、東壁全体、北壁と南壁の一部を検出したにとどまる。住居の規模は南北3.4ｍ、東西3.65ｍ以上、深さ最大13cmを測る東西に長い長方形住居になると想定される。住居の主軸は北から60°西に振れる。

床面ではピット６基検出し、位置と深さからＰ１・３・４・５が主柱穴となる４本柱の住居と思われる。床面から10cmほど浮いた状態で土師器甕（13）、床面直上で内面にベンガラが付着した土師器外反口縁鉢（14）と炭化材が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。床下掘り込みは住居全面で確認した。

在地系と布留系土器の共伴及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版58、第65図12～14）

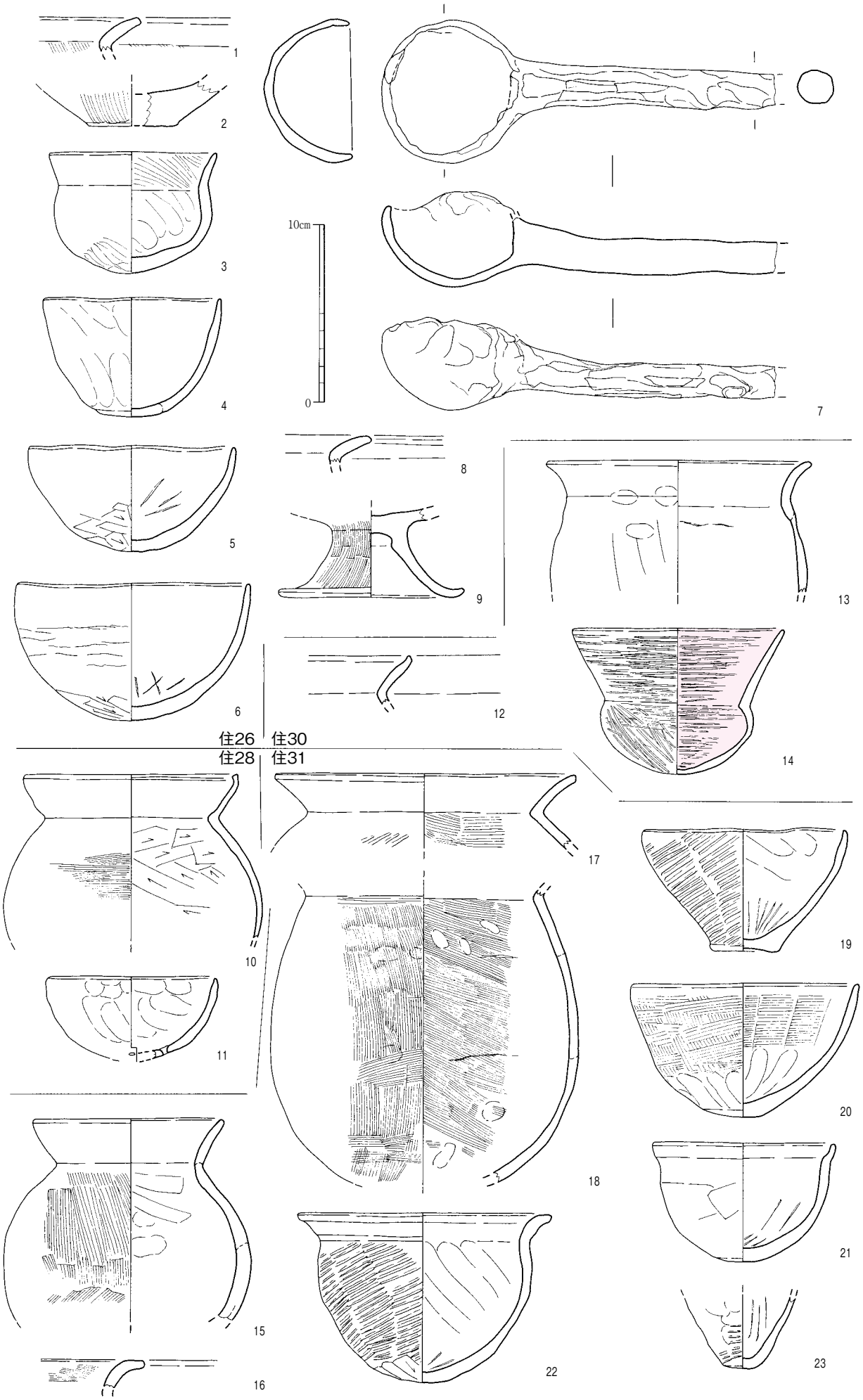
土師器（12～14） 12・13は在地系甕口縁部である。12の口縁端部は肥厚させる。外面には被熱痕とススあり。色は褐色。13の胴部外面は工具ナデのちナデを施す。外面にはススが付着する。色は灰黄褐色。14は布留系外反口縁鉢で、完形に近く残るもの。復元口径12cm、器高8.2cmを測る。内外面密なミガキを施すが、内面全体にはベンガラが厚くべっとりと付着していた。その状況からベンガラを入れた容器の可能性が考えられる。詳細はⅣ-３（Ｐ246・247）を参照いただきたい。

31号竪穴住居跡（図版23、第68図）

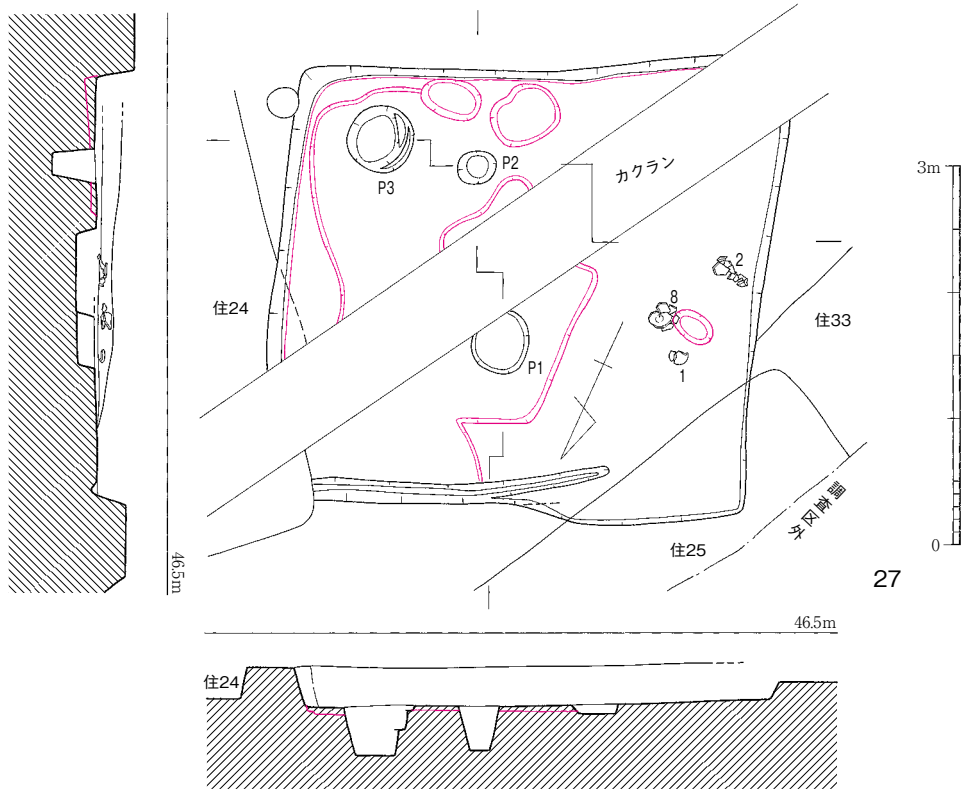
１区中央のやや北西寄りに位置し、32・36・38号住居跡に切られ、28号住居跡を切る。また撹乱を挟んで37号住居跡とも切り合い関係を持ち、出土土器から37号住居跡が切る。上層の竪穴住居により大きく破壊され、北壁と東壁の一部を検出したにとどまる。住居の規模は南北4.4ｍ以上、東西4.9ｍ以上、深さ最大８cmを測る、方形住居である。住居の主軸はほぼ座標北である。

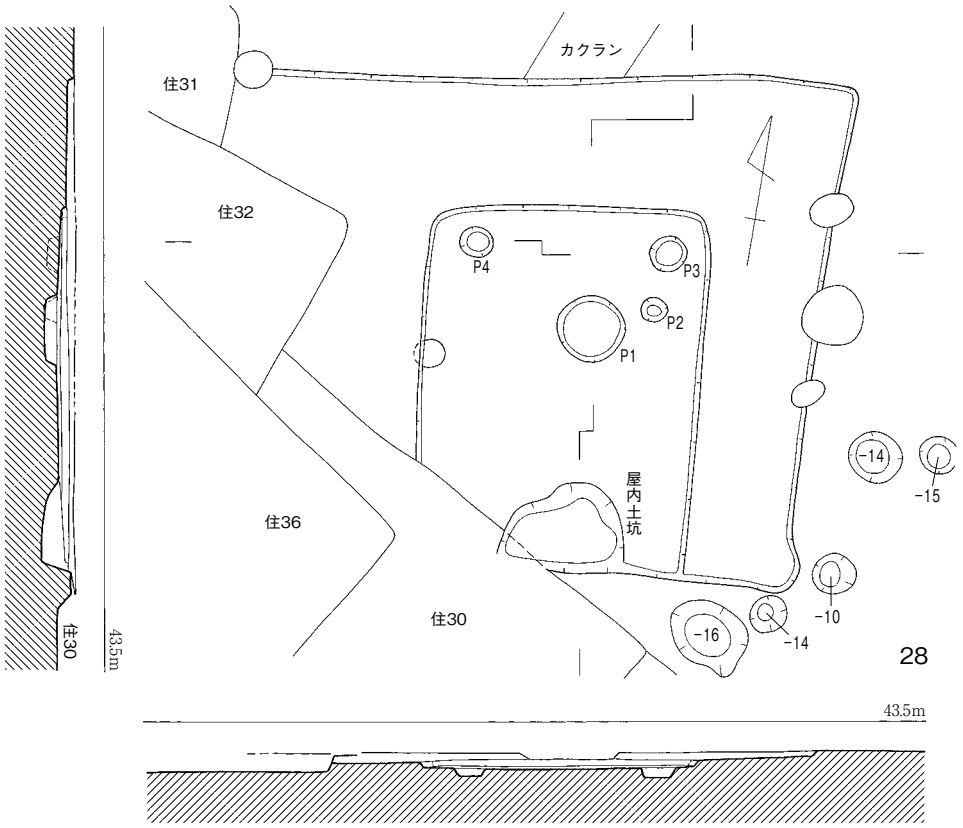
床面ではピット10基検出し、位置と深さからＰ１・３・６・10が主柱穴となると想定しているが、Ｐ３-10間の柱間が1.65ｍ、Ｐ１-６の柱間も２ｍ程度と東西間の柱間が狭いことが特徴である。

床面直上で土師器鉢（20）と炭化材が、床面から少し浮いた状態で土師器鉢（22）が出土した。



第 65 図　5 次 1 区　26・28・30・31 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）





第 66 図　5 次 1 区　27・28 号竪穴住居跡実測図（1/60）

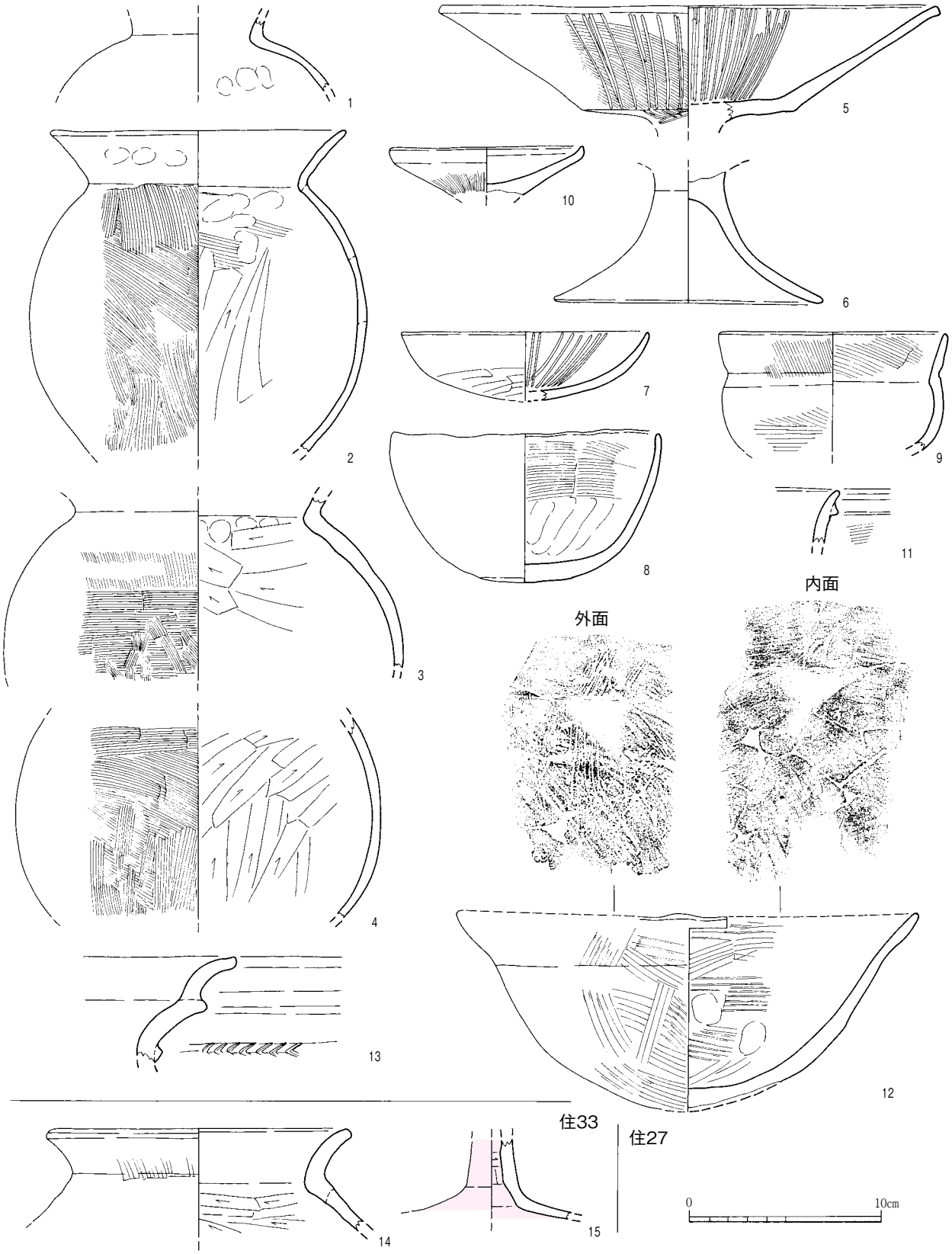
住居埋土は暗灰褐色粘質土に炭が混じる土である。床下掘り込みは住居全面で確認した。

出土土器から、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半まで時期幅があるが、最終埋没は古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 58、第 65 図 15 ～ 23）

弥生土器・土師器（15 ～ 23）　15 ～ 18 は甕である。色は 15・17 が灰黄褐色、16 が灰褐色、18 が褐色を呈する。15 は長めの口縁部が立ち気味のもの。胴部内面は一部工具ナデ後ナデで調整する。胴部外面には被熱痕とスス、内面には炭化物が付着する。16 は在地系甕で、口縁上端部を若干つまみ出す。17 はＶ様式系譜の甕で、胴部外面は右上がりのタタキ、内面にはハケを施す。18 は在地系甕胴部で、寸胴となるもの。内外面細かいハケを密に施す。外面にはススが多く付着する。

19 ～ 23 は鉢である。19 ～ 22 の外面には黒斑が、19・22 はススが付着する。色は 19 が灰褐色、20・22 が灰黄褐色、21 が橙褐色、23 が黄褐色を呈する。19 は完形に近いもので、復元口径 11.5 cm、復元底径 3.9cm、復元器高 6.9cmを測る。やや上げ底になる平底で、外面は右上がりのタタキを



第 67 図　5 次 1 区　27・33 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

施す。内面には工具痕あり。20 はわずかに体部との稜が認識できる凸レンズ底を持ち、外面下位はハケのちナデ、外面上位は縦ハケのち横ハケを施す。内面上位は絞りを行うような細かなハケを施す。完形に近いもので、復元口径 12.8cm、復元器高 7.6cmを測る。内面には炭化物が付着する。21 は短い口縁部が内湾しながら外反する。ほぼ完形で、口径 10.2cm、器高 6.7cmを測る。体部内外

面とも工具ナデのちナデで調整する。22 は口縁部が強く外反するもので、体部外面には右上がりのタタキを施し、底部のみタタキ後ケズリを行う。内面底部には工具痕、それより上位はナデ上げの稜が残る。23 の外面は横タタキのちナデを行い、内面には工具痕が残る。

32 号竪穴住居跡（図版 23、第 69 図）

１区中央に位置し、36 号住居跡に切られ、30・31 号住居跡を切る。住居２/３は上層である 36 号住居跡に大きく壊されるが、住居全面床下掘り込みを施していたことから住居規模が判明した。住居の規模は主軸長 3.78 m、東西 3.58 m、深さ最大 15㎝を測るほぼ正方形の小型住居である。住居の主軸は北から 67° 西に振れる。

住居西壁中央には造り付けカマドを付設する。床面ではピット４基検出し、いずれも主柱穴となる４本柱の住居である。床面直上ではカマド右横から土師器甕（２・３）、床面中央でも土師器甕（６）が出土し、砥石（第 140 図６）、台石や炭化材も床面直上から出土した。これ以外の土器は床面から３㎝以上浮いた状態で出土した、住居埋土は黒色粘質土である。

土師器甕の頸部内面の稜が鈍く、８の土師器高坏の脚部が中実であること及び切り合い関係から、住居の時期は６世紀前半に位置づけられると考えられる。

カマド（図版 23、第 69 図）

住居西壁中央に付設した造り付けカマドで、両袖とも 36 号住居跡により大きく壊されていたものの、基底部及び袖石ピットが残存していたことから、カマドの構造が判明した。壁から両袖とも 94㎝、若干「ハ」の字状に開きながら突出し、燃焼部奥壁も若干住居壁から突出する。その奥壁から 53㎝手前に支脚ピットを検出し、その支脚ピット部分で袖間は 45㎝を測る。支脚ピット前後の 80㎝の範囲に焼面（アミ）が広がるが、その焼面は支脚周辺は炭が多く、その周囲には焼土が多く広がる。支脚ピット上では土師器甕がバラバラな状態で出土した。

カマド埋土は、１・３・４層はカマド天井崩落土が主体、２層は住居埋土が主体、５・６層は袖構築土である。このことから、カマド廃棄時に天井部を大きく壊していると考えられる。

出土遺物（図版 58、第 70 図１～12）

土師器（１～12）　１～７は甕である。１・２は黒斑、２・３・６は被熱痕、３・４・７はススが認められる。色は１・２・４が灰黄褐色、３が茶褐色、５・６が橙褐色、７が暗茶褐色を呈する。１は口縁部が強く外反するもの。胴部外面には長さが短めの縦方向の細かいハケ、内面は頸部までケズリを行う。２･３はいずれもほぼ完形品で、重心が低い球状の胴部から短い口縁部が外折する。２は口径 13.5㎝、器高 15.9㎝を測り、胴部外面は縦ハケ後、底部のみケズリを施す。胴部内面もケズリを行う。３は口径 14㎝、器高 18.3㎝を測るもので、胴部内外面は工具ナデ後ナデを施す。口縁部内面には粗いハケ後横ナデを施す。外面の被熱は顕著である。胴部内面には炭化物が付着する。

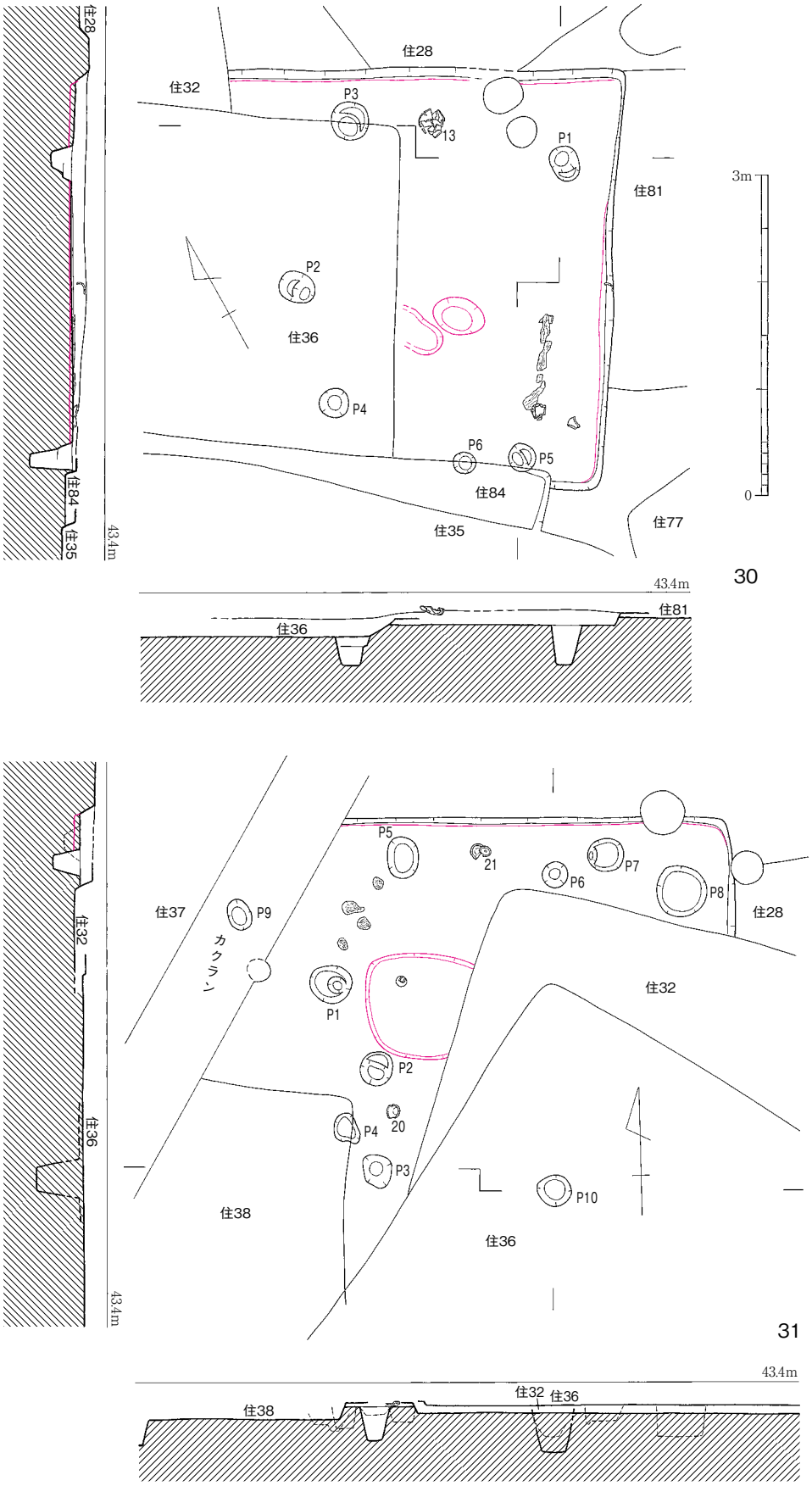
４～６は小型甕である。４の外面は工具ナデ後ナデを施すが、内面の工具痕は一部しか施していないことから、粘土紐を貼り付ける際に継ぎ目部分のみ工具ナデを施したものと考えられる。５は底部で内外面ケズリを施す。６は球状の胴部で、内外面ナデで調整する。

８･９は高坏脚部である。８は中実の脚柱部で、脚柱部外面はナデ、脚裾部外面はミガキを施す。坏部との接合は充填法である。全面黒化する。色は灰黒色。９の色は灰黄褐色。10 は口縁部が弱く内湾する碗で、ほぼ完形品。口径 13㎝、器高 5.3㎝を測る。外面下位はケズリを行い、後内外面

ミガキを施す。生地は橙褐色。11は手づくね土器で、口径3.6cmを測るほぼ完形品。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。12は古墳前期在地系二重口縁壺で混入品。色は橙褐色である。

33号竪穴住居跡（図版24、第69図）

1区中央の西壁際に位置し、25・27・37号住居跡に切られる。住居東側大半は調査区外で、東壁を検出したにとどまる。住居の規模は南北4m以上、東西1.65m以上、竪穴部の深さは最大20cmを測る、方形住居である。住居の主軸方位は北から31°東に振れる。住居東壁には地山削り出しのベッド状遺構を付設し、ベッド状遺構は南東部が幅が広くなるため、南側に住居入口が存在した可能性がある。東壁の一部には壁周溝が巡る。床面ではピット1基検出し、深さから主柱穴となる可能性がある。住居埋土は暗灰褐色粘質土。住居床下掘り込みは1ヶ所確認した。



第68図　5次1区　30・31号竪穴住居跡実測図（1/60）

14は在地系と畿内系の融合した土器であること及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（第67図14・15）

土師器（14・15） 14は甕で、頸部外面にはハケが残り、内面は頸部までケズリを施す。色は橙褐色。15は高坏脚部であるが、内外面スリップを塗布したもの。生地は橙褐色。

34号竪穴住居跡（図版24、第69図）

１区北の西壁際に位置し、11号住居跡に切られる。住居東側大半は調査区外で、調査区内では東壁と南壁の一部を検出したにとどまる。当初は土坑として調査したが、平坦な床面と規模から竪穴住居と判断した。そのため東・南壁は若干掘りすぎた箇所がある。

住居の規模は南北4.35ｍ以上、東西1.8ｍ以上、深さは最大36㎝を測る、方形住居である。住居の主軸方位は北から５°東に振れる。床面ではピット４基検出したが、いずれも浅く主柱穴配置は不明である。埋土から土器が出土したが、いずれも床面から10㎝以上浮いており、住居埋没に伴い廃棄されたものである。

また出土位置から11号住居跡出土土器として報告した第49・50図14・15・22・23は当住居跡に伴う可能性が高い。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土土器は在地系が主体であることから、古墳時代前期前半に位置づけられる。

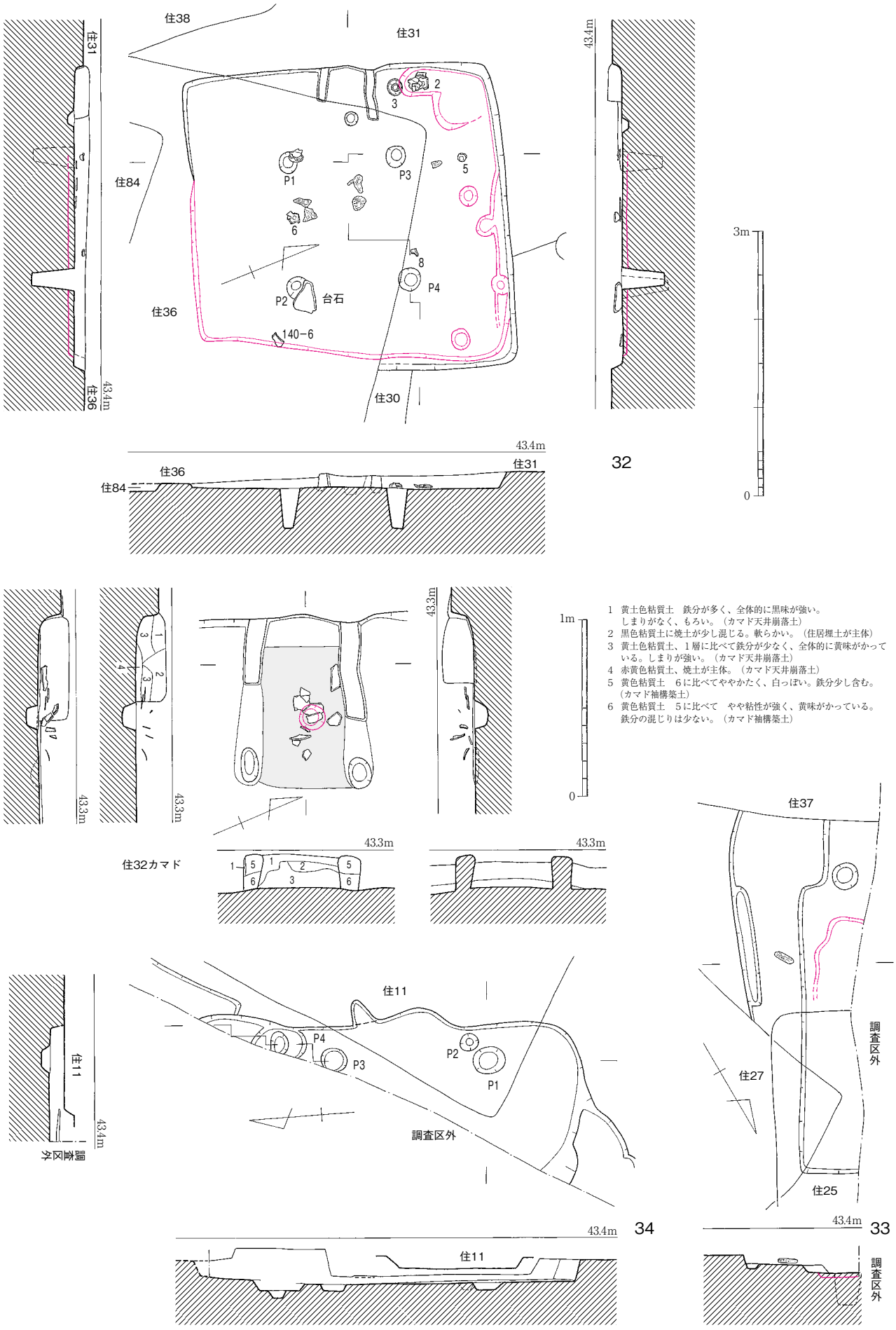
出土遺物（第70図13～20）

土師器（13～20） 13は口縁部が大きく開く在地系直口壺である。外面は縦ハケ後横ナデを施す。色は橙褐色。14～18は在地系甕である。14・16は被熱痕、14・15・18はススが認められる。色は14が橙褐色、15が茶褐色、16～18が灰黄褐色を呈する。14は長い口縁部で、長胴の器形となるものと思われるが、小片のため、径が不安である。内外面ハケを施す。15は口縁外端部にナデ凹線が巡る。胴部外面右上がりのタタキを施し、胴部外面下位は工具ナデ後ナデを施す。内面全体はハケを施す。16・17は器壁が薄いもので、内外面ハケ後ナデを施す。18は大型の甕で、口縁端部は強く外反させ、特に口縁部の器壁は薄めである。19は脚付鉢で器形が珍しいもの。球状の体部外面は細かなミガキを施し、内面は工具ナデ後ナデを施す。色は橙褐色。20は布留系高坏脚裾部で、外面にはミガキが残る。焼成前に穿孔するが、孔数は不明。色は黄褐色。

35号竪穴住居跡（巻頭図版４、図版25、第71図）

１区中央に位置し、30・36・38・60・79・84号住居跡を切り、近接する77号住居跡も切る可能性がある。住居の規模は主軸長5.7ｍ、東西5.3ｍ、深さは最大20㎝を測る、平面形はほぼ正方形の大型住居跡である。住居主軸方位は北から50°西に振れる。西壁中央には住居北西隅に煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。

床面ではピット11基検出し、位置と深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居である。なお、Ｐ１以外の主柱穴周辺にはピット内を一段掘り込むものが複数存在するため、住居が建替えられたことを示す可能性がある。床面直上で須恵器坏蓋（３）と坏身（７）が出土した。住居埋土は上層が灰黄色粘質土で鉄分を含み、下層が灰黒色粘質土で、小礫含み、鉄分多く含む。住居床下で多くの掘り込みを確認した。当住居跡付近の遺構面から打製石鏃（第140図２）、磨石（第141図10）、



1 黄土色粘質土　鉄分が多く、全体的に黒味が強い。しまりがなく、もろい。（カマド天井崩落土）
2 黒色粘質土に焼土が少し混じる。軟らかい。（住居埋土が主体）
3 黄土色粘質土、1層に比べて鉄分が少なく、全体的に黄味がかっている。しまりが強い。（カマド天井崩落土）
4 赤黄色粘質土、焼土が主体。（カマド天井崩落土）
5 黄色粘質土　6に比べてややかたく、白っぽい。鉄分少し含む。（カマド袖構築土）
6 黄色粘質土　5に比べて　やや粘性が強く、黄味がかっている。鉄分の混じりは少ない。（カマド袖構築土）

第 69 図　5 次 1 区　32・34 号竪穴住居跡（1/60）、32 号住居跡カマド（1/30）実測図

台石（第141図12）が出土した。

住居の時期は、５～７から６世紀後半に位置づけられるが、19の土師器碗は器壁が厚く、黒化処理するものとしては最終段階に位置づけられよう。

カマド（図版25、第72図）

住居西壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部から北に延び、住居北西隅から竪穴住居外に出る構造のものである。カマド主軸と住居主軸が20°程度西にずれるが、当住居では住居主軸に合わせてカマドを調査したため、住居主軸に合わせて図化している。

カマド袖は、両袖とも先端に袖石を置き、壁から左袖は105cm、右袖は103cm直線的に突出する。左袖石下端は袖石ピットに入っていないため、住居廃絶時に左袖石のみ外している可能性がある。両袖石手前には袖石の上に置き焚口を構成していた天井石が床面直上に落ちた状態で検出した。天井部燃焼部側が強く被熱しており（薄いアミ）、現在の下面は被熱していないため、本来は燃焼部側が下面であった可能性が高い。なお、袖石上に天井石を置いた当時の状態では、床面からの高さが焚口では25cm程度、天井石上面では50cm程度を測り、燃焼部の高さが復元できる重要な情報を得ることができた。

燃焼部奥壁の手前60cmに長楕円形の河原石を利用した石製支脚を設置し、支脚部分で袖間は71cmを測るため、６号竪穴住居跡カマドと並び、当遺跡では大型のカマドであることがわかる。支脚は17 × 13cm、深さ11cmの支脚ピットで固定されるが（破線ピット）、石製支脚の長さ29cmうち、支脚ピットには11cmほど埋められている。この支脚周囲には明確な硬化面はなく、燃焼部床面全面で焼土と炭が広がる層を検出した。また天井石前面、32 × 21cmの範囲に焼土と炭が多く混じる範囲（濃いアミ）を確認し、この範囲が焼面と思われる。

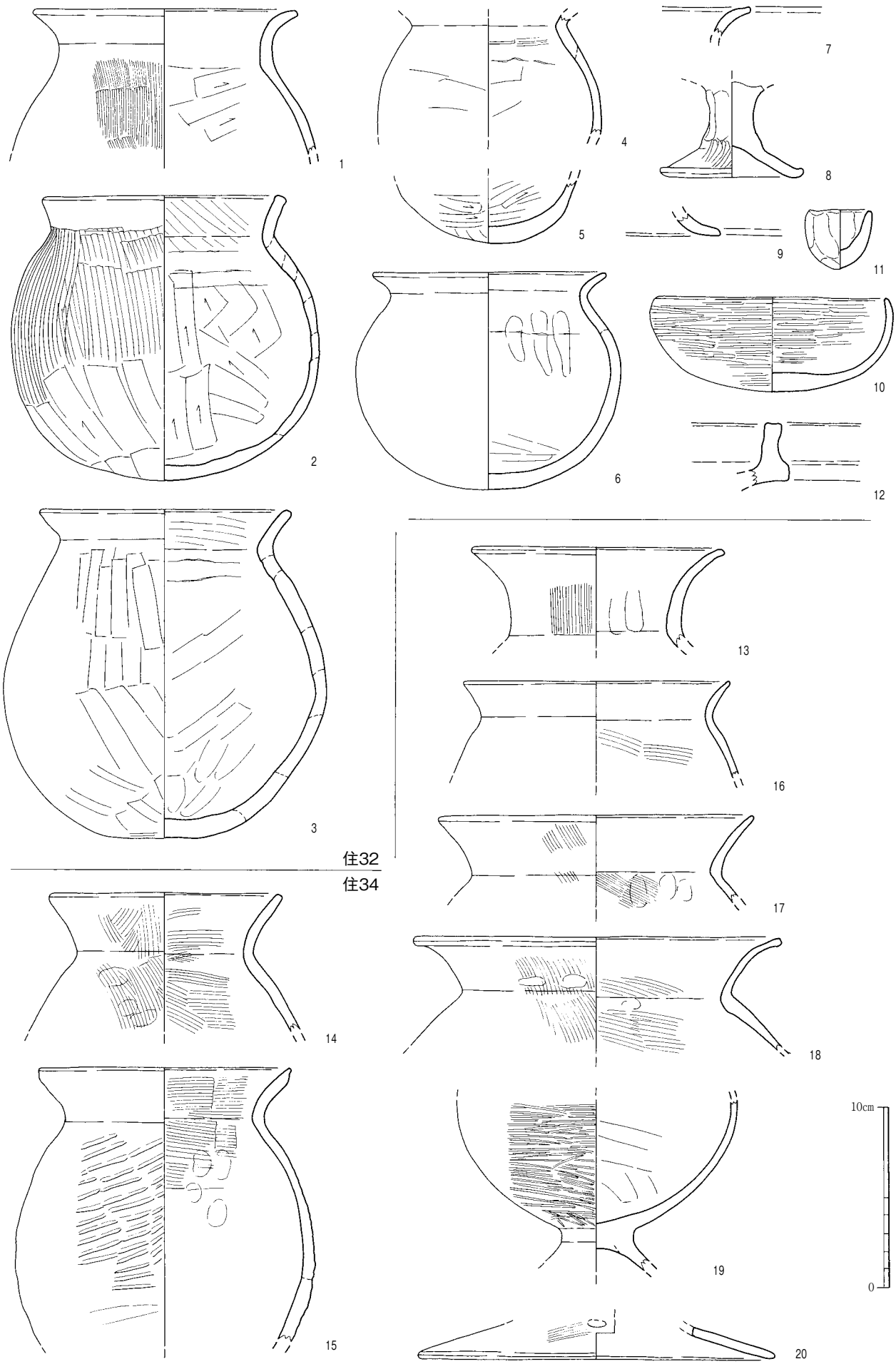
煙道部は燃焼部奥壁から長さ216cm延び、燃焼部主軸とはほぼ直角に北に延びる。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造で、煙道壁は両袖と同じく、７・８層で積み上げて構築する。他のカマド煙道部壁と比べ、厚さが13cm程度と薄い。煙道部の幅は燃焼部側で27cm、先端で幅26cmとほぼ一緒で、また煙道部床面もほぼ平坦になる。煙道先端が住居壁外まで延びることを確認した１区では唯一のものである。煙道部埋土は、１層は住居埋土が主体、３層が壁崩落土である。

カマド埋土は、２～４層がカマド天井・壁崩落土、６層がカマド使用時の堆積土となるが、天井石と左袖石を外していること、２～４層から住居廃絶時にカマド燃焼部を破壊する行為を行っていると想定される。

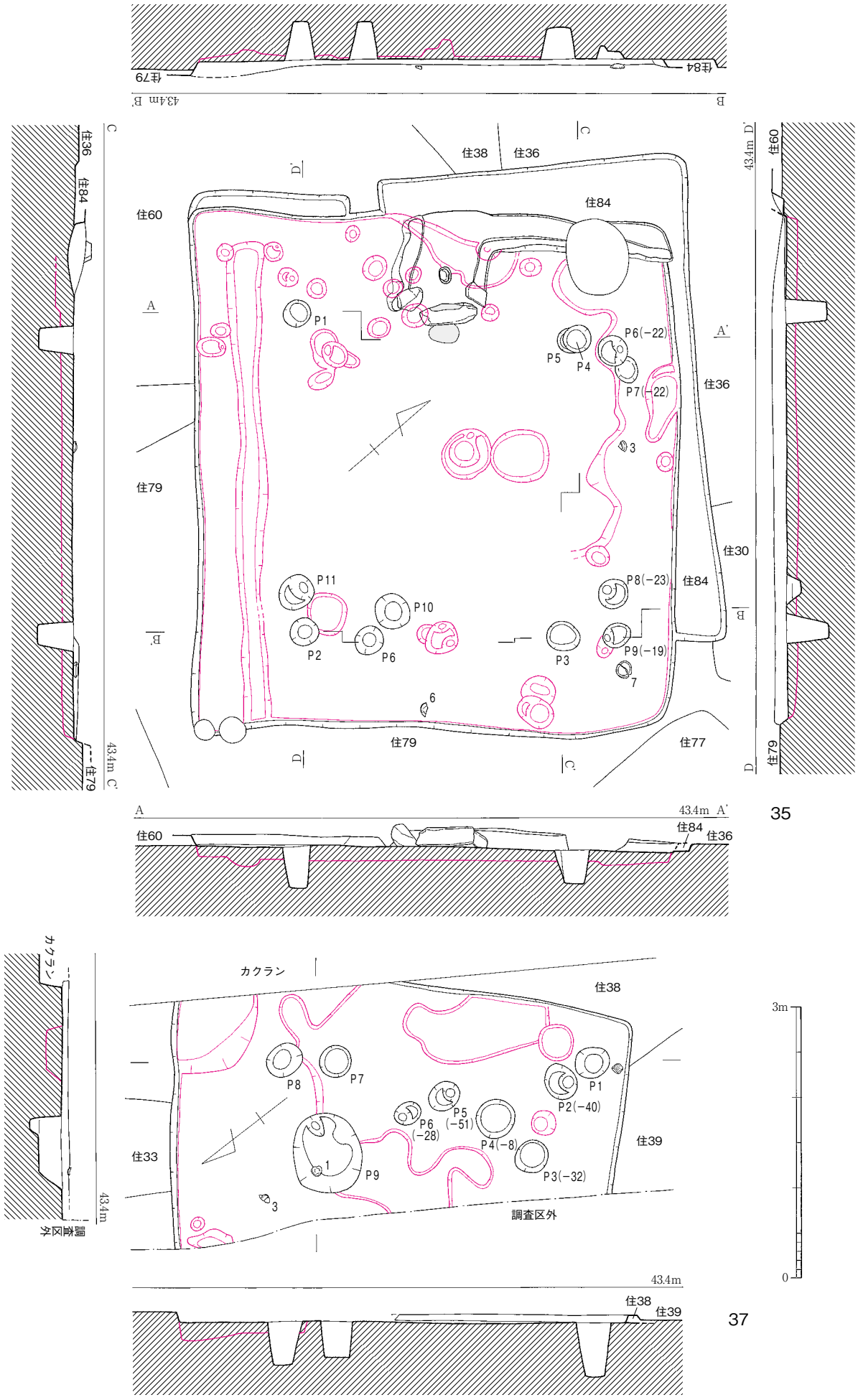
出土遺物（図版58、第73図１～25）

須恵器（１～９）　１～３は坏蓋で、いずれも天井部との境の稜が巡らないもの。１は復元口径14.8cmを測る。口縁端部は外につまみ出し、外面には自然釉が付着する。色は灰白色。２は口縁端部を丸く収めるもので、色は灰黄色。３は器高が低いもので、復元口径16cmを測る。天井部にはヘラ切りの段がそのまま残る。色は灰色。４～７は坏身で、色はいずれも灰色である。４は受け部の立ち上がりが５～７に比べ高く立ち上がるもの。６は内面、７が外面に自然釉が付着する。７の受け部には重ね焼きした別の個体の器壁が一部残る。８は壺口縁部で、内面には自然釉が付着する。色は暗灰色。９は口縁外端部を肥厚させた壺口縁部。外面にはナデ凹線が一条巡る。色は灰色。

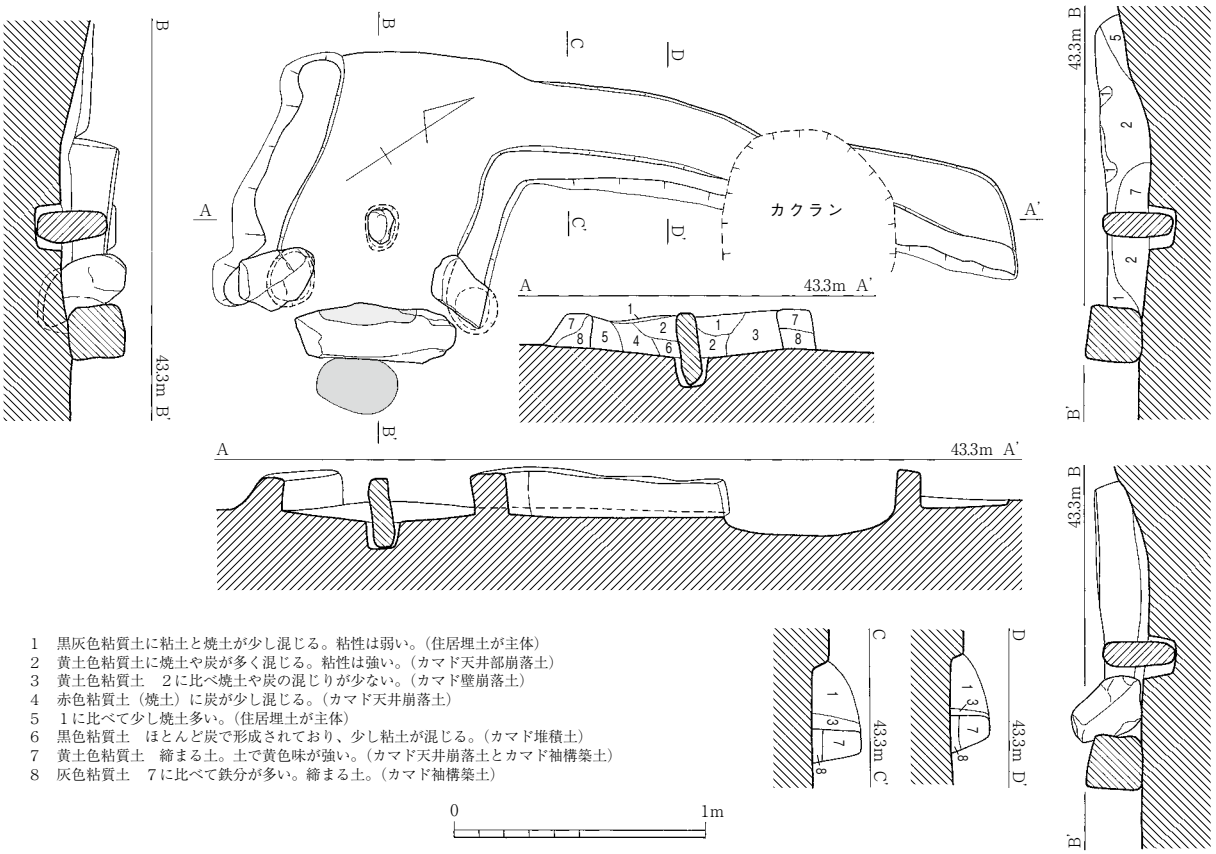
土師器（10～25）　10～14は甕である。11・13・14は被熱痕、12はススが認められる。色は



第 70 図　5 次 1 区　32・34 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 71 図　5 次 1 区　35・37 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 72 図　5 次 1 区　35 号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

10・12 が橙褐色、11 が黄褐色、13 が明褐色、14 が灰黄色である。10 は口縁部が直立するもので、外面には指押さえ痕が残る。12 は短く外反する口縁部となる可能性が高い。13 の胴部外面は工具ナデ後ナデ、内面は工具ナデ、口縁部内面は粗いハケ後ナデを施し、内面には炭化物が付着する。外面の被熱は顕著である。14 の外面は粗いハケ後ナデ調整を行う。外面の被熱は顕著である。

15 は脚付鉢で、外面は横ミガキ後縦ミガキ、内面は暗文状のミガキを施す。色は暗灰色。16・17 は鉢である。16 は口縁端部を若干外反させるもの。外面下位はケズリを行い、その後内外面ミガキを施す。内面にはススが付着する。色は灰橙褐色。17 は内外面ナデ調整を行う。色は灰黄色。18 は直口壺口縁部で、外面は浅いケズリを施す。色は淡橙褐色。

19・20 は碗である。19 は口縁部が直立する碗で、器壁が厚い。外面下位にケズリを施し、後内外面ミガキ、さらに内外面黒化処理を行う。外面底部には焼成後に刻んだ「×」のヘラ記号あり。生地は灰茶色。20 は口縁端部を短く外反させたもので、内外面ミガキのち黒化処理を行う。色は灰褐色を呈する。

21・22 は手づくね土器。21 は高坏形で、色は暗灰黄褐色。被熱は受けていない。22 は鉢形で、口径 3.1cmを測るほぼ完形品。外面には黒斑あり。色は白黄褐色。23 は蛸壺。焼成前に穿孔を 1 ヶ所施す。色は黄橙色である。24 は古墳前期在地系甕で、混入品。口縁端部は上方につまみ出す。色は灰黄褐色。25 は当住居跡付近遺構面出土の蛸壺。焼成前に 1 ヶ所穿孔する。色は白黄褐色。

36 号竪穴住居跡（図版 25、第 74 図）

1 区中央に位置し、35・84 号住居跡に切られ、30 ～ 32・38 号住居跡を切る。住居南東部を 35・

84 号住居跡によって大きく壊され、また上面も削平が顕著であることから、住居北西隅は壁下端しか残存していない。住居の規模は主軸長 4.6 m、南北 4.45 m、深さ最大６㎝を測る、正方形住居跡である。住居主軸方位は北から 59° 西に振れる。西壁中央には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設するが、煙道部先端は削平されており、失われている。

床面ではピット 13 基検出し、位置・深さからＰ１～４ないしはＰ５が主柱穴となる４本柱の住居である。なお、Ｐ６・８・９・10 はピット内が一段深くなるないしは深いピットで、切り合う他の住居の柱穴を当住居の柱穴としている可能性がある。須恵器坏蓋（26）は床面から８㎝浮いた状態で出土した。住居埋土は灰褐色粘質土である。床下掘り込みは２ヶ所で確認した。

出土土器から６世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版 25、第 74 図）

住居西壁中央に付設したＬ字状カマドで、煙道はカマド燃焼部から北に向かって延び、住居北西隅から竪穴住居の外に出る構造と思われるが、煙道先端は削平されて残存していない。

カマド袖も奥壁側が削平を受けたため一部失われているが、両袖とも壁から 90㎝突出する。燃焼部奥壁の手前 40㎝にやや角張る河原石を利用した石製支脚を設置するが、石製支脚は左に傾き、23 × 20㎝、深さ 11㎝を測る支脚ピットからほとんど外れた状態で検出した。支脚ピットの埋土は黒色粘質土に地山ブロックが混じる土で１層と似るため、支脚が倒れた後に流入した土である。この支脚部分で袖間は 63㎝を測る。支脚前面には 41 × 35㎝の範囲に硬化面（アミ）が広がる。

煙道部は燃焼部奥壁から長さ 125㎝以上煙道部壁が確認され、住居北西隅まで燃焼部主軸からほぼ直角に曲がり延びていたと想定される。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造であるが、煙道部壁は粘土と地山である灰黒色土を混ぜた土（４層）で構築している。煙道部の幅は燃焼部側で幅 11㎝ほどを測り、先端部に行くと幅広くなるが、削平により幅広くなっていると思われる。

カマド埋土は、１層が住居埋土と類似する土、２・３層がカマド天井崩落土、４層がカマド構築土となる。このことからカマド廃絶時に支脚を意図的に倒す行為を行い、その後カマド天井部を大きく壊している可能性がある。

出土遺物（第 73 図 26）

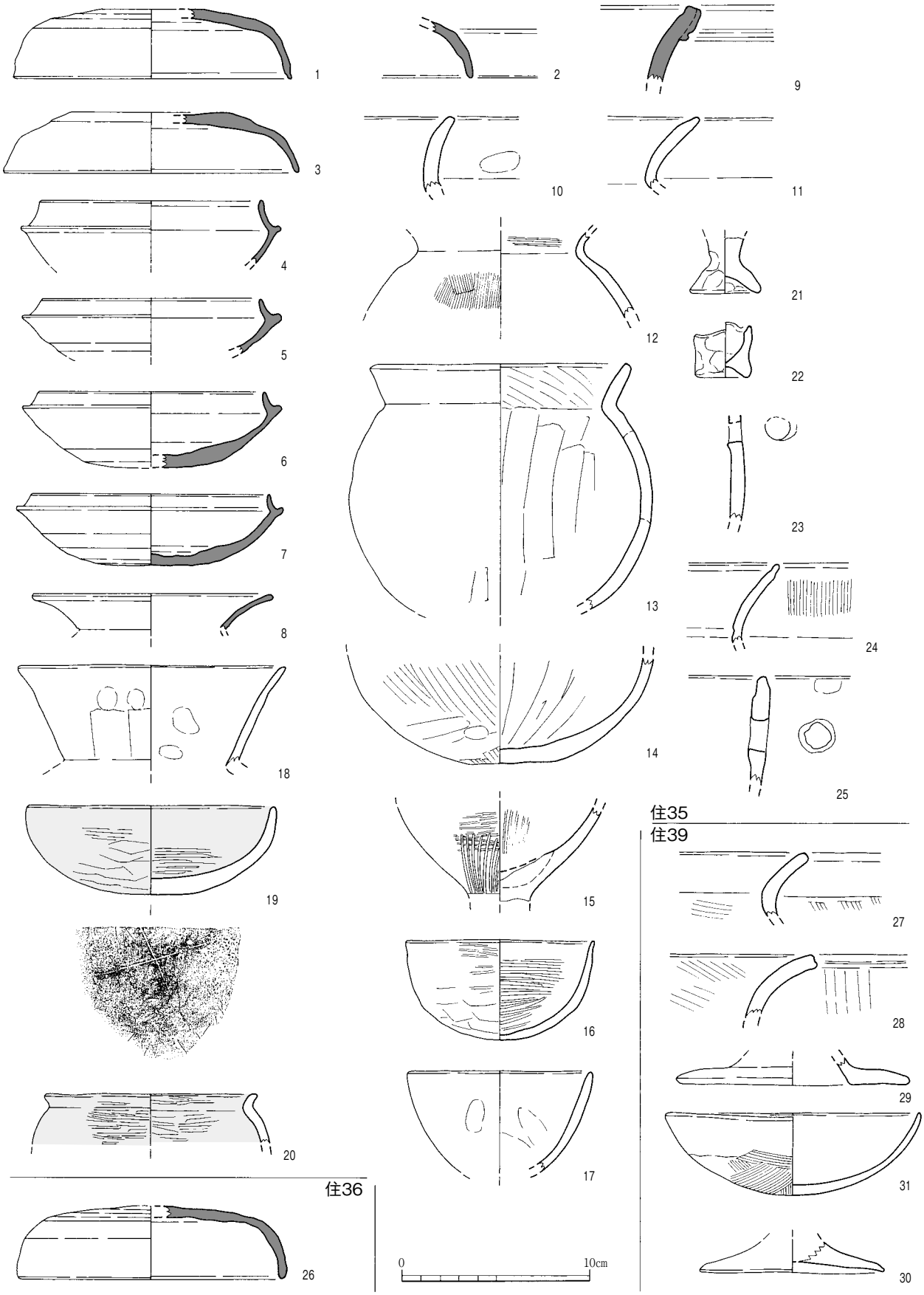
須恵器（26）　26 は須恵器坏蓋で、復元口径 14.6㎝を測る。天井部との境の稜はなく、外面全体自然釉が付着する。色は灰色～黒灰色。

37 号竪穴住居跡（第 71 図）

１区中央の西壁際に位置し、31・33・38・39 号住居跡を切る。住居西側が調査区外で、住居北西を撹乱により壊されるが、住居の規模は南北 4.95 m、東西 2.55 m以上、深さ最大８㎝を測る、方形住居になると想定される。住居の主軸は北から 52° 西に振れる。

床面ではピット９基検出し、位置と深さからＰ１・８が東側の主柱穴列となる４本柱の住居と思われる。Ｐ１・８以外にもＰ２・５・６・９のように一段掘り込みがある深いピットがあり、切り合う住居のピットを当住居のピットとしている可能性がある。

住居出土土器は床面から５㎝ほど浮いた状態で出土した。住居埋土は灰褐色粘質土に焼土・炭が混じる。床下掘り込みは住居全面で確認した。



第 73 図　5 次 1 区　35・36・39 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

住居の時期は、１・２の須恵器坏及び切り合い関係から、６世紀中頃～後半に位置づけられ、また５・10の土師器模倣坏から、当地域ではこの頃から土師器模倣坏が出現することがわかる。

出土遺物（図版59、第75図１～11）

須恵器（１・２）　１は坏蓋で、復元口径13.4cmを測る。天井部との境には稜の突出はないが、屈折部をつくり出すことで、稜の役割を果たしている可能性がある。口縁端部は若干外反させる。外面全体には自然釉が付着する。色は灰色。２は坏身口縁部で、端部はナデにより窪む。色は灰色。

土師器（３～６）　３は甑で、把手を張り付け、その後外面にハケ、内面にケズリを施す。色は黄褐色。４は高坏脚部で、脚裾部端部は丸く収め、若干下方につまみ出す。色は黄褐色。５は碗で、いわゆる土師器模倣坏である。外面下位はケズリ、後内外面全体ミガキを行う。さらに内外面に黒化処理を施す。生地は茶褐色。６は注口付鉢の注口部か。体部との接合部にはハケを施し、それ以外はナデで調整する。両側端部を欠損するが、断面がトンネル状ではなく、「U」字形に上方が一部開放していた可能性が高い。色は褐色。

床下掘り込み出土土器（７～11）　７は須恵器坏蓋で、天井部との境には鈍い稜を巡らす。口縁端部にはナデ凹線を巡らす。色は灰色。８は土師器甕で、口縁端部を若干外反させる。外面は被熱痕、内面はススが付着する。色は黄褐色。９は小型甕で、口縁部内外面のみハケを施す。体部外面は工具ナデを行う。色は灰黄褐色。10はいわゆる土師器模倣坏で、５よりも型式的には新しい。受け部を痕跡程度につくり出し、外面下位はケズリ、それ以外はミガキを施す。色は橙褐色。11は製塩土器脚部と思われる。色は橙褐色。

38号竪穴住居跡（図版26、第76図）

１区中央の西寄りに位置し、35・36・37・84号住居跡に切られ、31・39号住居跡を切る。上層の住居跡及び住居北壁中央から南西にかけて撹乱により大きく壊される。住居の規模は東西4.5ｍ、南北4.05ｍ、深さは最大19cmを測る、正方形の住居である。住居の主軸方位は座標北である。

住居東壁やや北寄りに125×64cm、深さ最大31cmの屋内土坑を置き、床面ではピットを５基検出した。位置・深さからＰ２・４が主柱穴となる可能性があるが、２本柱の住居とすると、北側に寄りすぎているため、２本柱とするのは難しいか。またＰ５は深さが浅いため住居床下掘り込みの可能性がある。住居埋土中から土器が多く出土したが、北西の台石以外は床面より５cm以上浮いた状態で出土したことから、住居埋没時に投棄したものと考えられる。住居埋土は灰茶褐色粘質土。

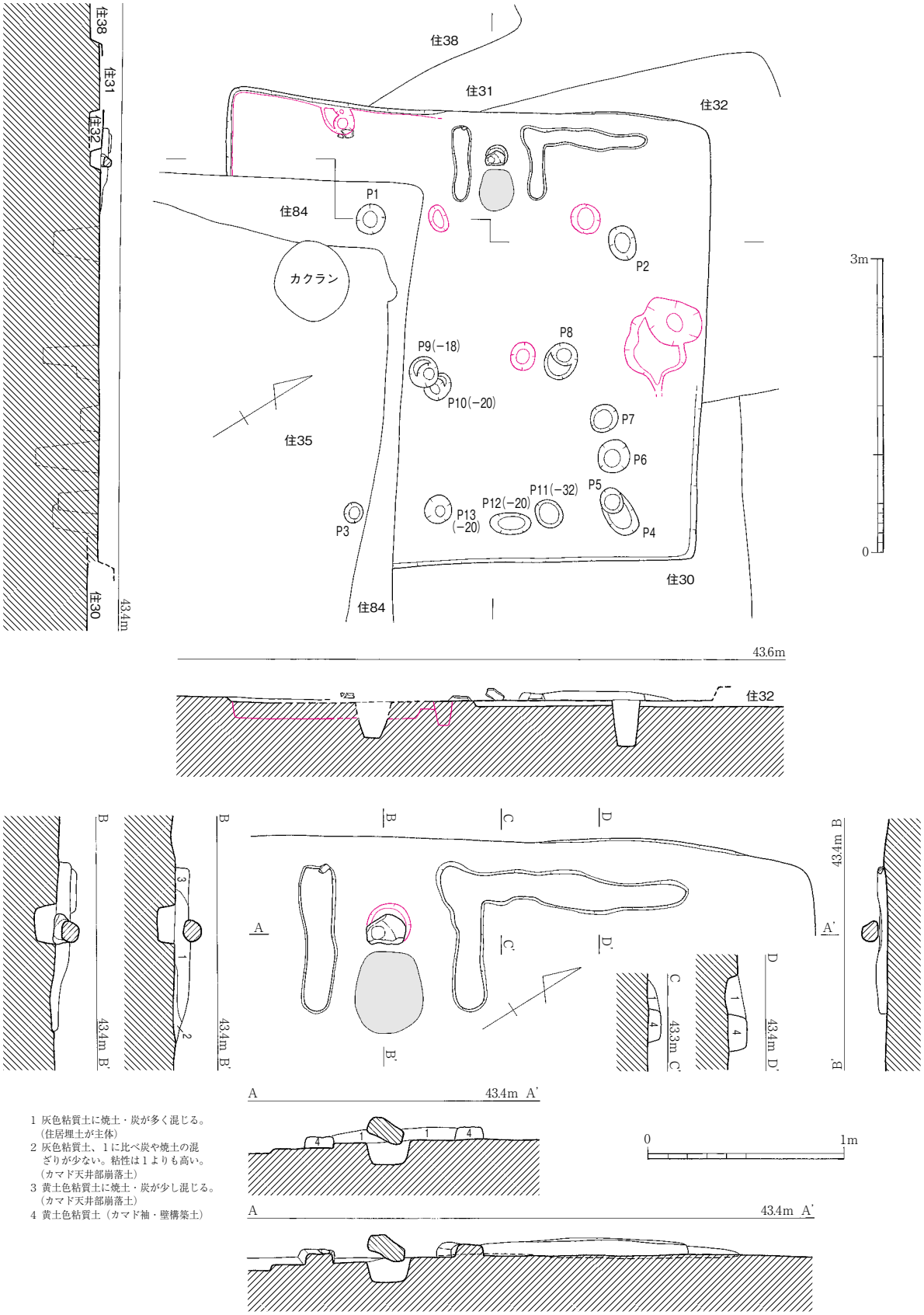
１の須恵器高坏脚部は小田・長編年Ⅰ-３期。土師器甕頸部内面の稜は鈍く、21・22の土師器碗の器壁も厚めであることから、住居の時期は５世紀後半に位置づけられる。

文中写真16　38号住居跡出土状況（東から）

出土遺物（図版59、第77図）

須恵器（１）　１は高坏脚部で、台形透かしを４ヶ所施す。色は灰色。

土師器（２～33）　２は直口壺口縁部で、色は茶褐色。３～11は甕である。７・10は黒斑、９・10は被熱痕、３・６・９はススが認められる。色は３・９が橙褐色、４が黄橙色、５は白黄褐



第 74 図　5 次 1 区　36 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

色、6～8は灰黄褐色、10は灰橙色、11は黄褐色を呈する。3の頸部外面には工具痕が残る。4は胎土が精良で、蛸壺と同じ胎土を用いる。5の外面は粗いハケを用い、内面には強い横ナデを施す。内面には粘土継ぎ目痕が残る。6は若干内湾する直口縁で、胴部外面は工具ナデ後ナデを施す。7はほぼ完形のもので、口径13.2cm、器高17.4cmを測る。胴部外面下位はケズリ、胴部外面上位は

工具ナデ後ナデを施す。外面に付着する粘土塊は、胴部内面に施したケズリでかき取った粘土塊が付いたものと考えられる。８の外面は工具ナデ後ナデ、内面の胴部中位以下はケズリ、口縁部内面には工具痕が残る。また内面には粘土継ぎ目痕が明瞭に残る。胎土には砂粒多く含む。９は長めの口縁部が外反し、口縁部内面にはハケ工具痕が残る。10 は直立する口縁部で、器壁は厚い。11 は古墳前期の甕か。口縁端部は内湾する。色は黄褐色。12・13 は甑把手で、内外面ナデ調整を行う。色は 12 が灰黄褐色、13 が褐色を呈する。12 はススが付着する。14 は高坏脚部で、内外面とも顕著な被熱のため、調整不明。穿孔は４ヶ所行ったか。色は黄褐色。

15 ～ 28 は碗である。15・16 は口縁部が直立するもの、17 ～ 19・23 は口縁部が内湾するもの、20 ～ 22 は口縁端部を短く外反させるもの、24 はいわゆる土師器模倣坏で、受け部をつくるもの、25 ～ 28 は口縁部を強めに外反させるものに分類し、口径順に割り付けを行った。調整は外面下位をケズリのち内外面全体にミガキを施すものは 18・19・22・25、内外面ミガキを施すものは 16・17･23･24･26 ～ 28 である。また調整後さらに内外面黒化処理を行うものは 17 ～ 19･24･26 である。色は 15・21・22 が灰黄褐色、16・20 が黄橙色、17・19・26 が灰黒色、18 が暗茶褐色、23 が橙褐色、24 が淡褐色、25 が黄褐色、27 が灰橙褐色、28 が明褐色を呈する。15 は外面下位はケズリ、外面上位はハケ、内面はナデを施す。最後に内外面スリップを塗布する。16 は深さがあるもの。17 は口縁部を強く内湾させたもの。内外面とも丁寧なミガキを施す。18 は完形で、口径 12.6㎝、器高 5.3㎝を測る。20 の外面中位以下はケズリ、内面はミガキを施す。内面底部には工具痕が残る。外面には黒斑あり。21 は外面下位をケズリ、その後外面全体をハケ、内面は粗いミガキを施す。内面は黒化する。24 は模倣坏であるため、混入品の可能性がある。25 の口縁外端部は工具により調整する。28 の体部内面はヘラナデ状に幅広いミガキ施している。

29・30 は手づくね土器。29 は口径 3.2㎝の完形品。色は灰褐色。30 は口径 3.6㎝のほぼ完形品。色は灰褐色。31・32 は蛸壺で、いずれも内外面ナデ調整。31 の外面には黒斑あり。色は橙褐色。32 の色は黄褐色。

33 は古墳前期の在地系外反口縁鉢で混入品。体部外面はケズリを行う。色は灰黄褐色。

39 号竪穴住居跡（図版 26、第 79 図）

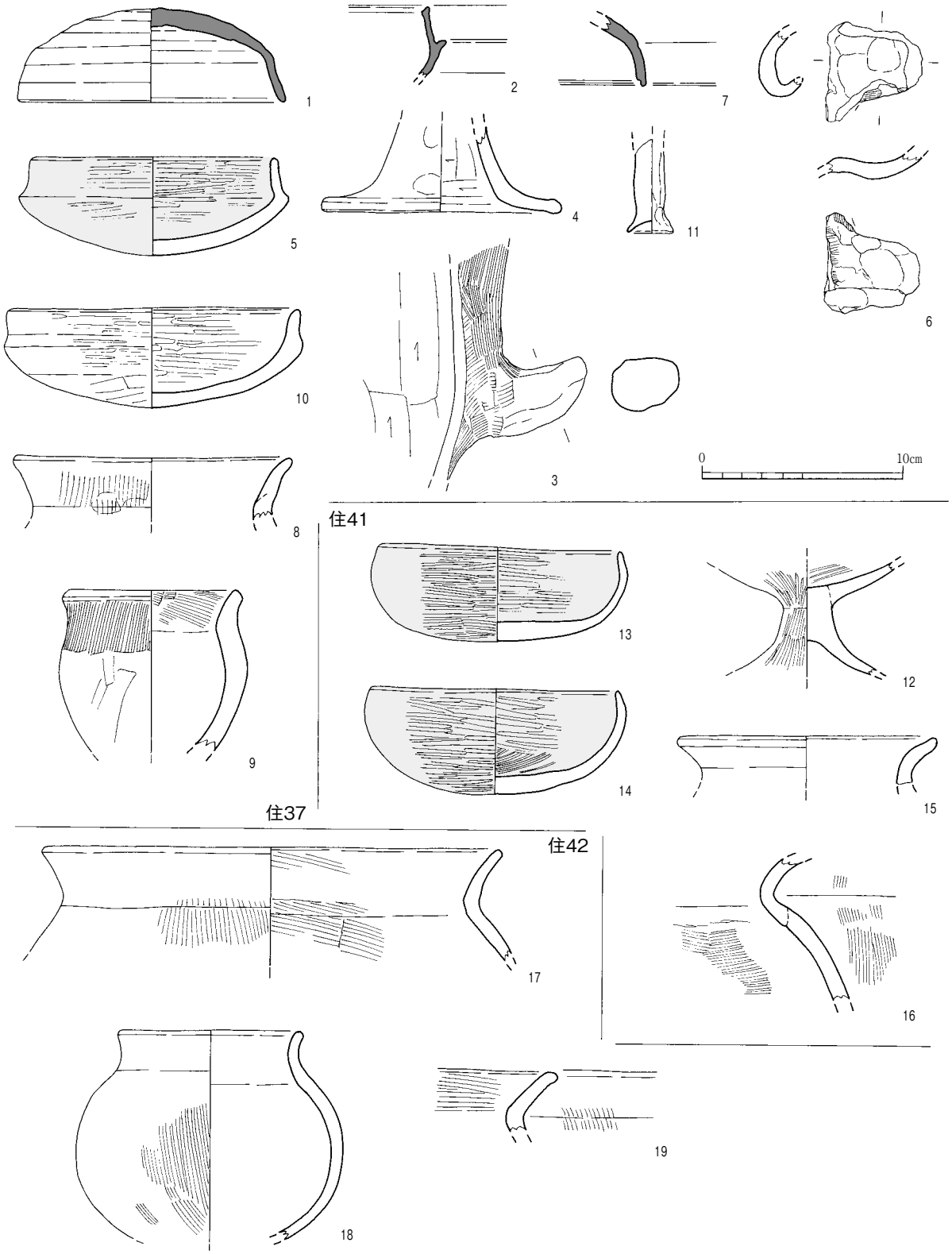
１区中央の西壁際に位置し、37・38 号住居跡に切られ、図面上は 41 号住居跡を切る状況であるが、出土土器から 41 号住居跡との切り合い関係を誤り、41 号住居跡にも切られると思われる。住居大半が調査区外で、上層の竪穴住居跡により住居北側を大きく壊される。住居の規模は南北 3.07 m以上、東西 2.2 m以上、深さ 14㎝を測る方形住居である。住居の主軸方位は北から 31°東に振れると思われる。

床面ではピット３基検出し、位置と深さからＰ２・３が主柱穴の４本柱の住居となる可能性がある。住居南壁際で直刃鎌（第 142 図２）が出土した。床下掘り込みは住居北側を中心に確認した。

出土土器から古墳時代前期前半に位置づけられると考えられる。

出土遺物（図版 58、第 73 図 27 ～ 31）

土師器（27 ～ 31）　いずれも古墳時代前期の土器である。27・28 は在地系甕口縁部で、色は黄褐色。29 は脚裾部で、端部を水平まで折り曲げたもの。外面には被熱痕あり。色は茶色。30 は低脚の高坏脚部。色は灰褐色。31 は布留系直口鉢で、ほぼ完形品。口径 13.8㎝、器高 4.5㎝を測る、底



第 75 図　5 次 1 区　37・41・42 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

部外面にはハケ目を施す。色は灰黄褐色。

40 号竪穴住居跡（図版 27・41、第 76 図）

1 区中央に位置し、76 号住居跡に切られ、20・21 号住居跡を切る。当住居付近は礫層が露出することから、旧地形では高い場所にあたると考えられ、削平が顕著であったことと、上層の竪穴住

居跡に大きく壊されることから、住居北壁のみ検出したにとどまる。また30・76・77・81・82号住居跡との切り合い関係を誤り、当住居の方が新しい。

住居の規模はＰ12が当住居跡の主柱穴と思われるので、そこまで含めると南北4.1ｍ以上、東西は北壁の焼土塊がカマドであったとすると、35号住居跡と切り合う部分まで当住居とすると広くなりすぎる気がするため、確実に当住居跡の柱穴であるＰ３からＰ７まで測ると東西4.1ｍ以上になる。また深さは最大７㎝を測り、方形住居と想定される。

床面ではピット12基検出し、位置と深さからＰ１・12が西側の主柱穴列となる４本柱の住居と予想されるが、東側の主柱穴列は検出できなかった。北壁西側には98×53㎝、厚さ７㎝の橙白色粘土塊（薄いアミ）があるが、機能は不明である。その東にはカマドの痕跡の可能性がある焼土塊（濃いアミ）が存在する。住居埋土は灰褐色粘質土である。覆土から砥石（第140図７）が出土した。

１の須恵器の稜は鈍いが、小田・長編年Ⅰ-３期の可能性があり、住居の時期は５世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（図版59、第78図１～８）

須恵器（１）　１は直口壺口縁部で、復元口径10.5㎝を測る。ナデによる上下二条の突帯の間に最大七条の櫛描波状文を施す。内面には厚く自然釉が付着するため、調整は不明である。色は灰色。

土師器（２～８）　２～４は甕である。２は外反する口縁部で、胴部外面は工具ナデのちナデ、内面はナデを施す。外面にはスス、内面には炭化物が付着する。色は灰黄褐色。３・４は把手付甕である。３は胴部中位２ヶ所に把手を付けたと考えられる。復元口径19.8㎝を測り、胴部外面は工具ナデ、内面は頸部までケズリを施す。色は黄茶褐色。４は胴部中位の孔に把手を挿入したもので、把手は２ヶ所付けたものと考えられる。内面はケズリを施す。色は黄褐色。５は蛸壺で、ほぼ完形品。復元口径8.5㎝、復元器高10.4㎝を測る。口縁部外面の一部のみハケを施し、焼成前に１ヶ所穿孔する。色は黄褐色。５～７の蛸壺は本遺跡で最古段階のもので､胎土から搬入品と考えられる。

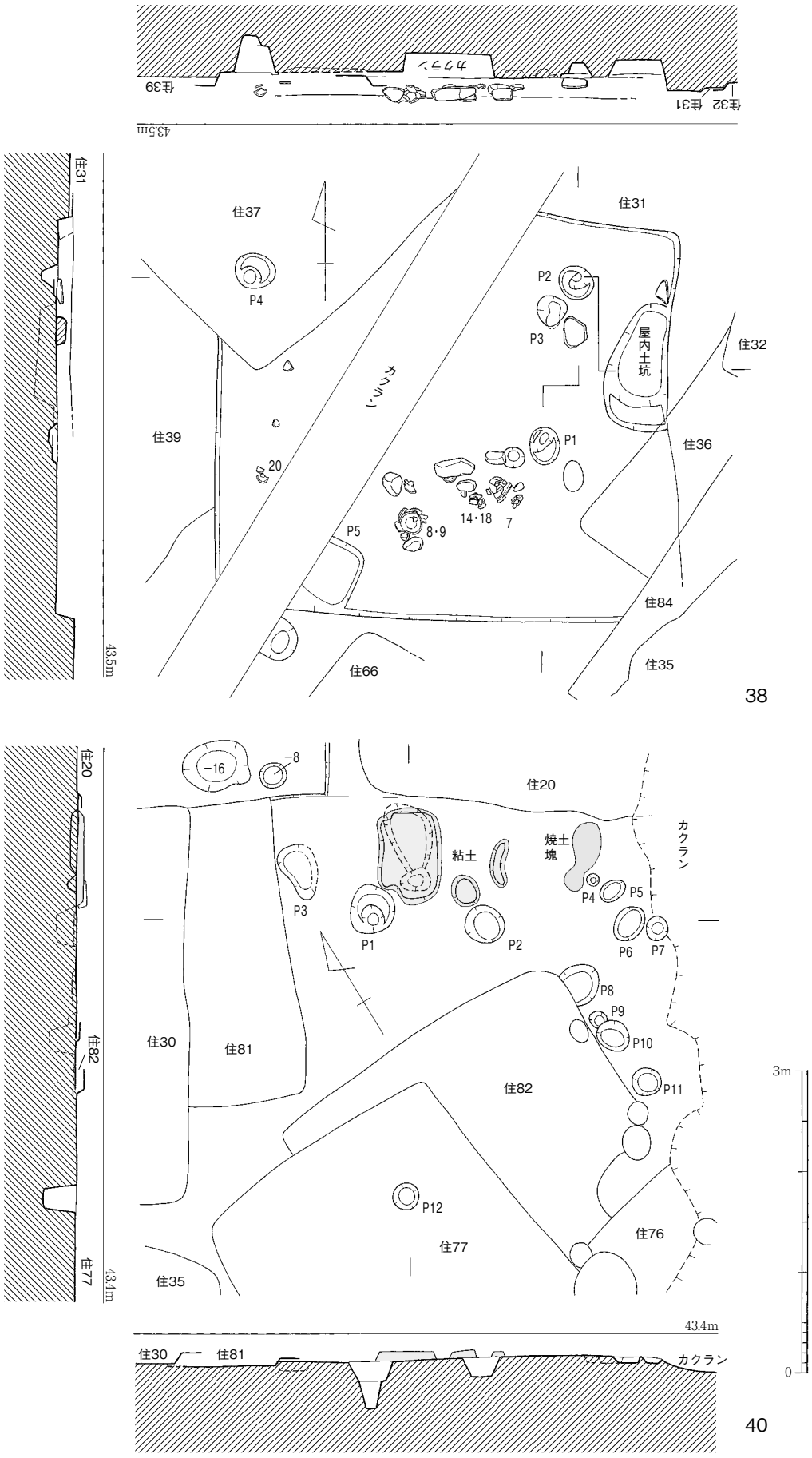
床下掘り込み出土土器（６～８）　６・７は蛸壺で、いずれも色は黄褐色である。６の外面は工具ナデを施し、工具痕も残る。７は口縁部外面の一部のみハケを巡らし、焼成前に１ヶ所穿孔する。８は甕口縁部で、内面頸部までケズリを施す。色は黄橙褐色。

41号竪穴住居跡（図版27、第79図）

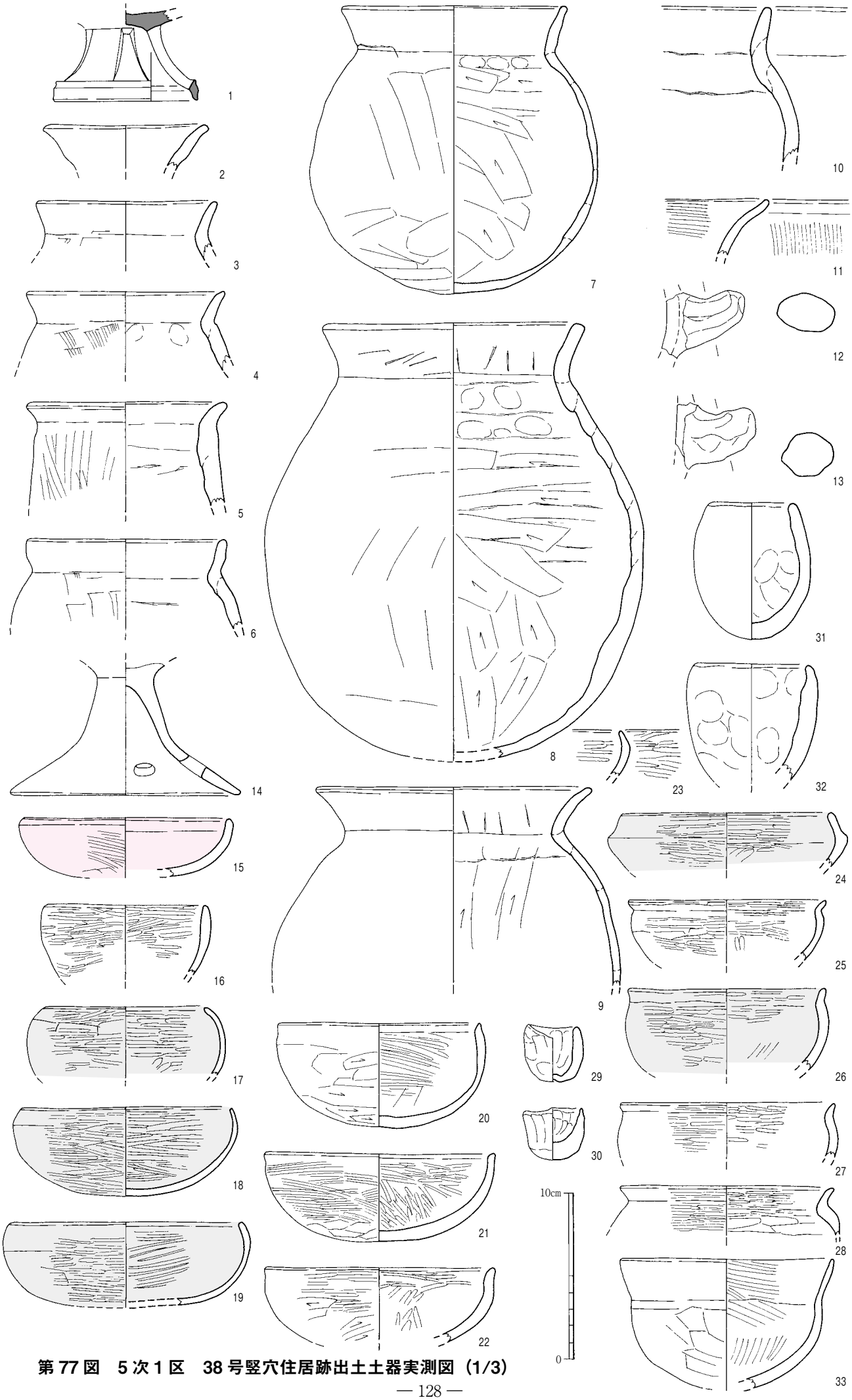
１区中央の西壁際に位置し、42・62号住居跡を切る。39号住居跡で先述したが、出土土器から39号住居跡との切り合い関係を誤り、39号住居跡も切る。住居大半が調査区外で、住居の規模は南北4.9ｍ以上、東西1.7ｍ以上、深さ24㎝を測る方形住居である。住居の主軸方位は北から26°東に振れると思われる。

床面ではピット８基検出し、Ｐ４～６・８が深さから主柱穴となる可能性があるが、南側の柱穴は検出できなかったため、主柱穴構造は不明であるものの、深さと形態からＰ２・３が主柱穴の４本柱の住居となる可能性がある。住居南壁際で鉄鎌が出土したが、整理途中で現在行方不明になっている。土師器椀（14・15）はいずれも床から10㎝以上浮いた状態で出土した。住居埋土は灰褐色粘質土に炭少量混じる。住居床下掘り込みも確認した。

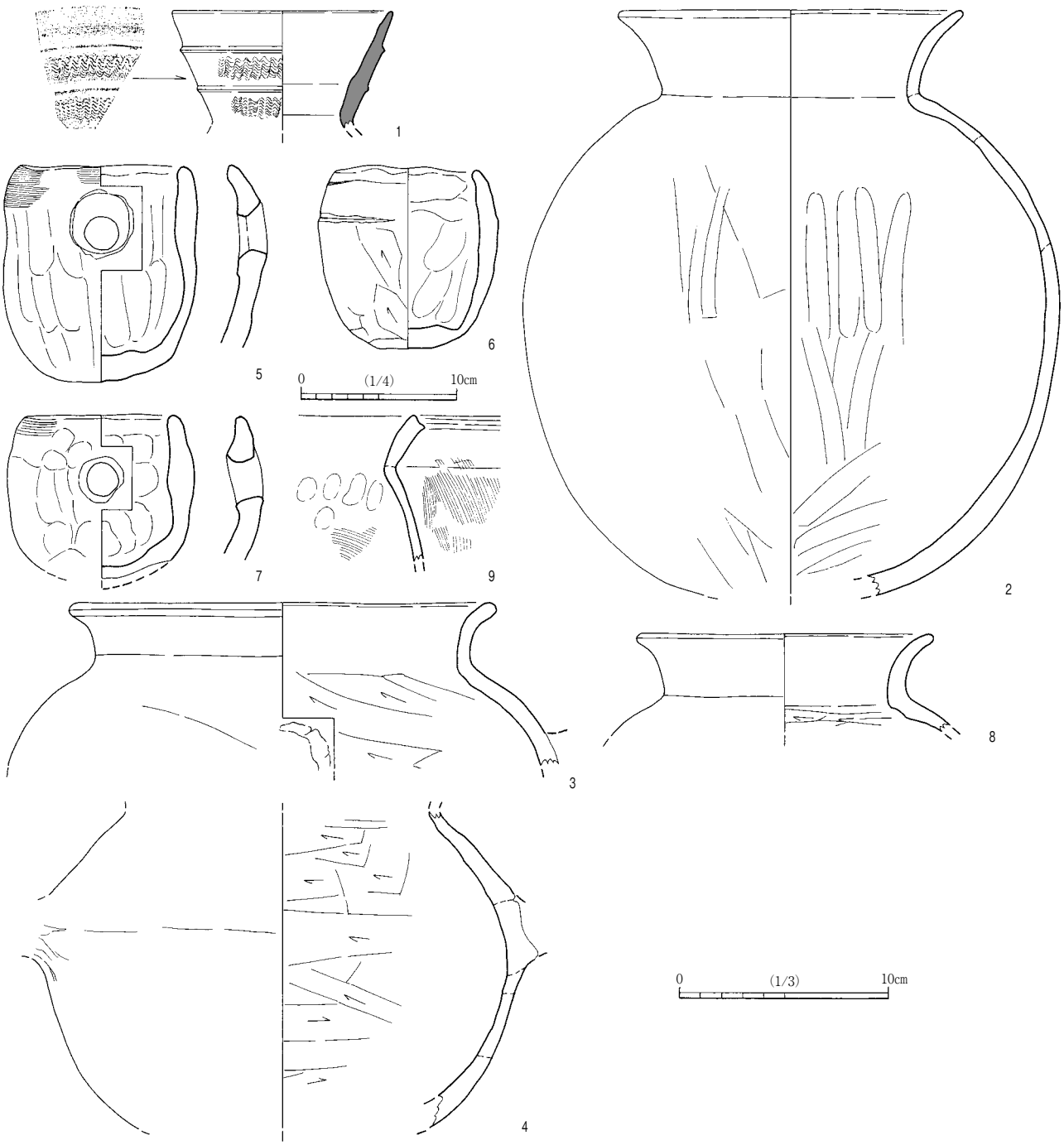
12の土師器高坏脚部は中実で、13・14の土師器碗は器壁が厚く、15・16の土師器甕の頸部内面の稜は明瞭でないことから、住居の時期は６世紀前半に位置づけられると考えられる。



第 76 図　5 次 1 区　38・40 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 77 図　5 次 1 区　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 78 図　5 次 1 区　40 号竪穴住居跡出土土器実測図（9 は 1/4、他は 1/3）

出土遺物（図版 59、第 75 図 12 ～ 16）

土師器（12 ～ 16）　12 は高坏で、脚部との接合は付加法である。内外面ミガキを施し、色は灰黄褐色。13・14 は口縁部が内湾する碗で、いずれもほぼ完形のもの。またいずれも内外面ミガキを施し、後黒化処理を行う。13 は直口気味のもので、口径 12.1cm、器高 4.9cmを測る。生地は灰黒色。14 の外面下位はケズリ、内面は太めのミガキを施し、後暗文状のミガキを体部中位まで施す。口径 12.5cm、器高 3.5cmを測る。生地は灰黄褐色。15・16 は床下掘り込み出土。15・16 は甕である。15 の口縁端部は若干上につまみ上げる。15 の色はこげ茶色。16 の色は黄褐色。

42 号竪穴住居跡（第 79 図）

1 区中央の西寄りに位置し、41・62・65・66 号住居跡に切られる。また住居中央の南北が撹乱

を受けており、北壁の一部を検出したにとどまる。住居の規模は南北 2.8 m以上、東西 2.2 m以上、深さ 10cmを測る。住居の主軸方位は北から 39° 西に振れると思われる。床面ではピット２基検出し、いずれも深いことから主柱穴になる可能性がある。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みも確認した。

出土土器及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（第 75 図 17 ～ 19）

土師器(17 ～ 19)　17 は在地系甕口縁部で､外面にはススが付着する。色は灰橙褐色。18 は直口鉢で、外面には黒斑、被熱痕、胴部内面には炭化物が付着する。色は灰黄褐色。19 は床下掘り込み出土の在地系甕口縁部である。色は黄褐色。

44 号竪穴住居跡（図版 27・28、第 80 図）

１区南西に位置し、45・48・49・50 号住居跡を切る、当住居周辺で密集する竪穴住居群の中で切り合いが最も新しいものである。住居の規模は主軸長 3.61 m、東西 2.9 m、深さ最大 15cmを測る。平面形は住居隅が丸味を帯びた、やや南北に長い方形の小型住居である。住居の主軸は北から 26° 東に振れる。住居北壁中央やや東寄りに造り付けカマドを付設する。

床面ではピット３基検出したが、深さが浅く、位置的にも主柱穴とはならない。住居埋土は灰褐色粘質土に炭が少量混じる。

１の須恵器坏蓋及び切り合い関係から、６世紀末に位置づけられる。

カマド（図版 28、第 80 図）

住居北壁中央やや東寄りに付設したカマドである。両袖先端部は袖石を用いているが、検出段階では両袖石とも袖石ピットから外れており、カマド廃絶時に袖石まで意図的に外している可能性が高い。壁から袖石ピットまで左袖は 68cm、右袖は 70cm突出する。

燃焼部奥壁から 35cm手前に石製支脚を置き、支脚石とほぼ同じ大きさの径 10cmの支脚ピットで支脚を固定し、支脚は床面から９cm飛び出ている。その部分で袖間は 64cmを測る、カマドの規模にしては袖間が広いものである。両袖石の間には袖石上に架けた天井石が落ちた状態で検出し、天井石下には 35 × 30cmの範囲で焼面を検出した（アミ）。袖石と天井石で焚口を復元すると、焚口の高さ 25cm、天井石を架けると 42cmほどの高さに復元できる。

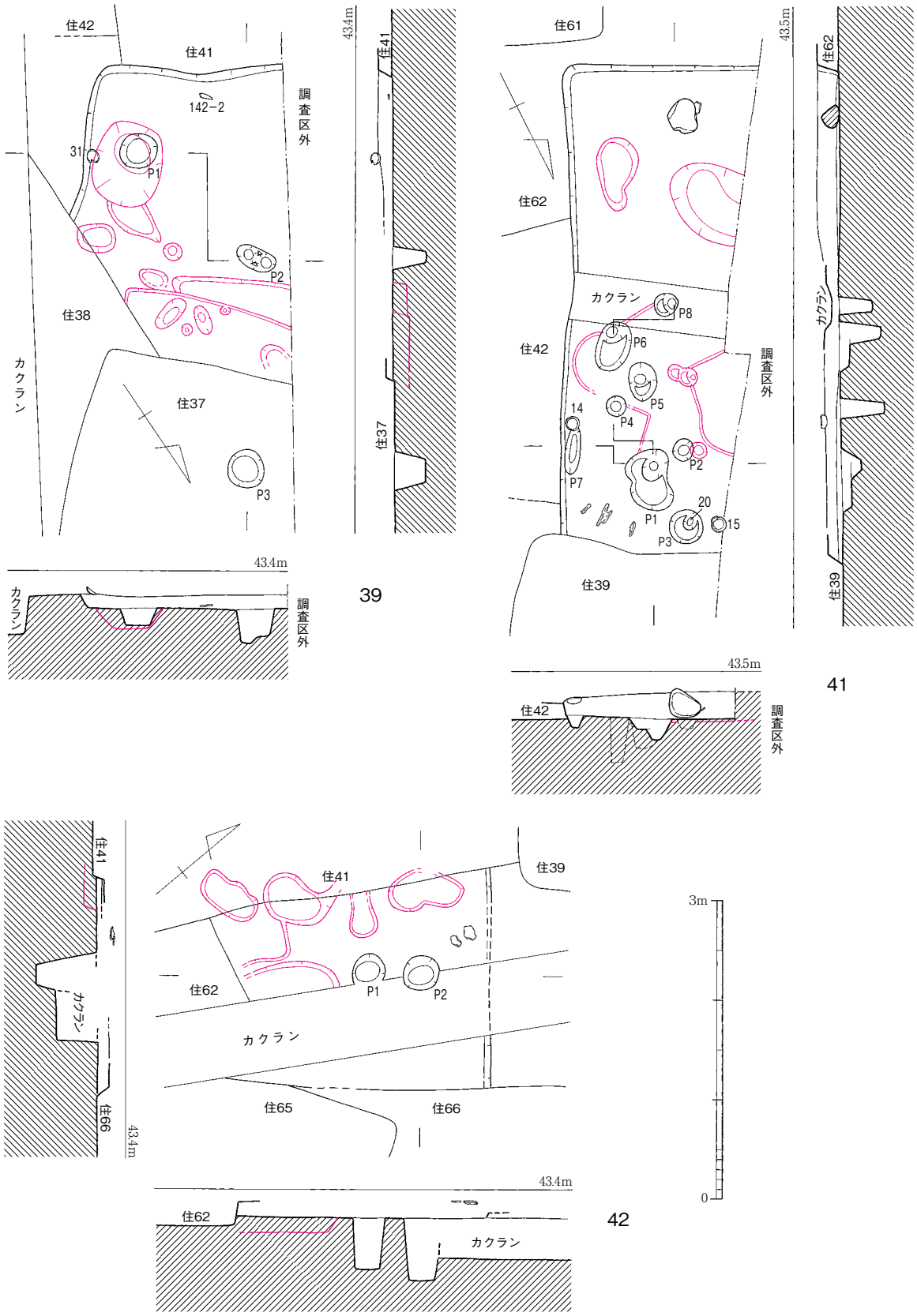
土層では３～７層がカマド天井崩落土で、袖石を外す行為や落ち込む天井石、土層から、カマド廃絶時にカマド天井及び袖を大きく壊していると考えられる。

出土遺物（第 81 図１～８）

須恵器（１）　１は坏蓋で復元口径 13cmを測る。天井部との境は鈍い稜を巡らす。色は灰色。

土師器（２～５）　２～４は古墳前期の在地系甕で混入品。２・４はスス、３には被熱痕あり。色は２が灰黄褐色、３が白黄橙色、４が橙褐色である。２の胴部内外面はハケ後ナデを施す。４の胴部内面はハケのちナデを施す。口縁外端部は肥厚させる。カマド内出土。５はほぼ完形の手づくね土器。口径 3.3cm、器高 2.85cmで、色は黄橙褐色。

床下掘り込み出土土器（６～８）　６は須恵器甕口縁部で、口縁端部はナデにより窪む。口縁部外面に六条の櫛描波状文を巡らす。外面には自然釉が付着し、色は暗灰色。７は高坏脚部であるが、小片のため径が不安で、少し広すぎる可能性が高い。透かしの孔数は不明。色は暗灰色。８は古墳

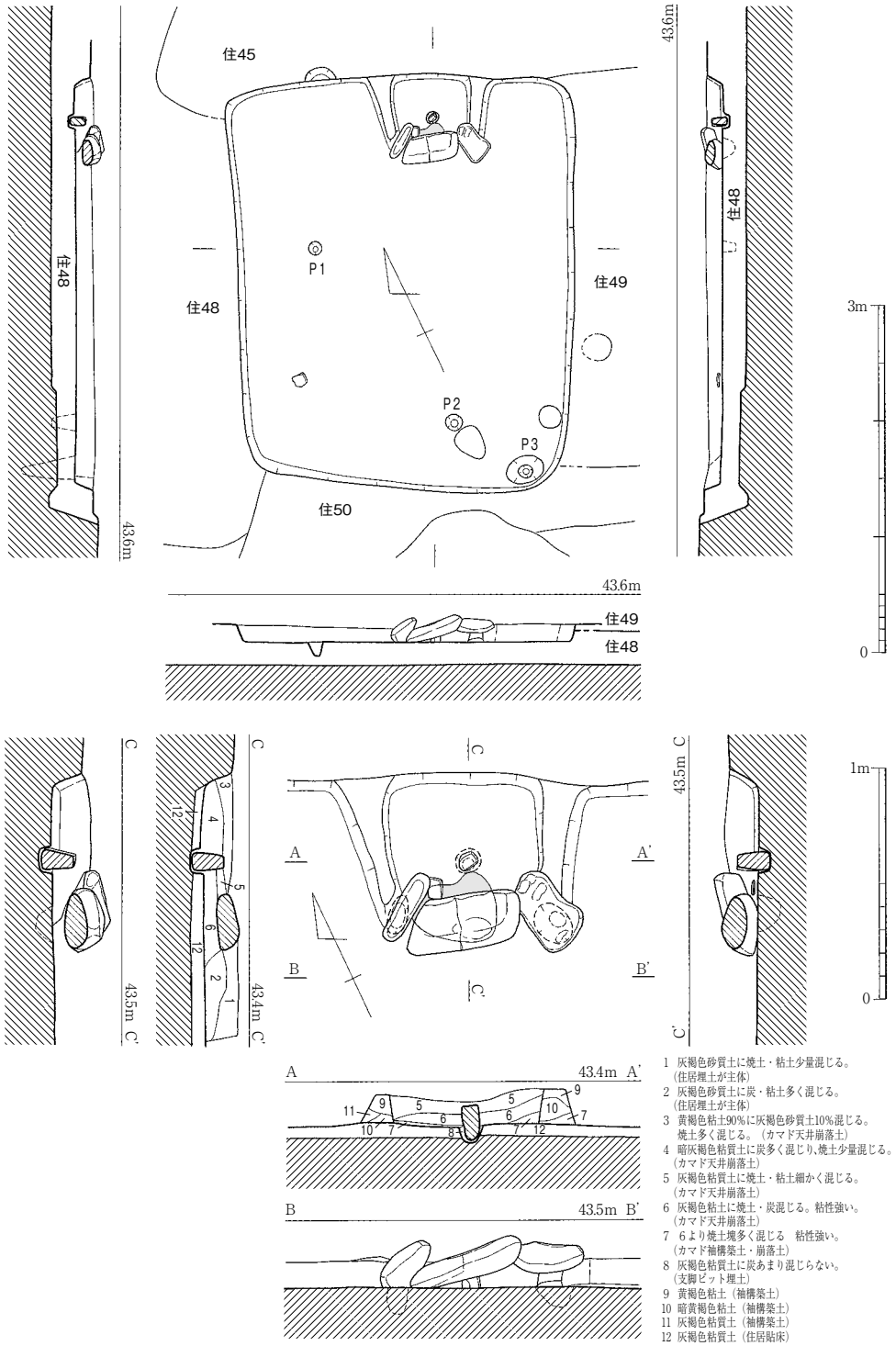


第 79 図　5 次 1 区　39・41・42 号竪穴住居跡実測図（1/60）

前期在地系二重口縁壺口縁部で、外面には黒斑あり。色は黄褐色。

45 号竪穴住居跡（図版 27・29、第 82 図）

1 区南西寄りに位置し、44・49 号住居跡に切られ、46・48・53 号住居跡を切る。住居南東部を



第80図　5次1区　44号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

44・49号住居跡に壊されるが、住居の規模は主軸長4.8 m、南北4.9 m、深さ10 cmを測る、ほぼ正方形住居跡である。住居主軸方位は北から47°東に振れる。住居北壁中央には住居北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。

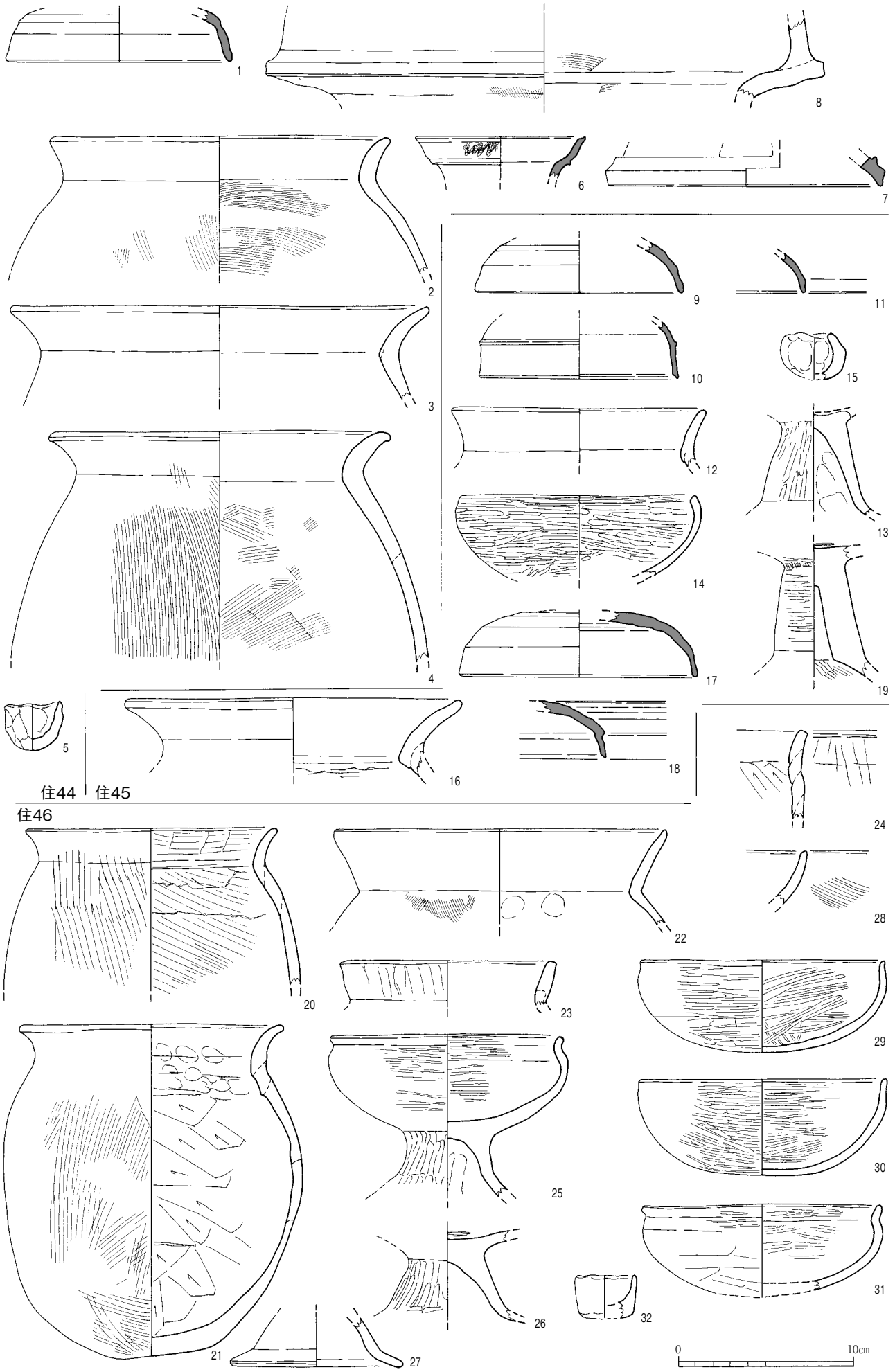
床面ではピット４基検出し、位置・深さからいずれも主柱穴となる４本柱の住居となる。なお、Ｐ２・４はピット形状が楕円形になることから、住居廃絶時に柱を抜いている可能性がある。住居中央西側に広がる138 cm×77cmの粘土は、貼床となる可能性がある。住居埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘土ブロックが混じる。

９・11・17の須恵器から、住居の時期は６世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版29、第82図）

住居北壁中央に付設したＬ字状カマドである。煙道はカマド燃焼部から西に向かって延び、住居北西隅から竪穴住居の外に出るという、カマド燃焼部から左側に向かって煙道が延びる当区で唯一の珍しいものである。

カマド袖は、壁から左袖は72cm、右袖は65cm直線的に突出する。燃焼部奥壁の手前32cmと近い位置に支脚ピットからほぼ外れた状態で検出した石製支脚を確認した。石製支脚は長さ24cmの長



第 81 図　5 次 1 区　44 ～ 46 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

文中写真 17　45 号住居跡カマド完掘状況
（北西から）

楕円形の河原石を用いる。支脚ピットは 15 × 10 cmの大きさで、石製支脚をとちょうど合わせた状態で掘削しているが、石製支脚が奥側に倒れた状態であったことから、カマド廃絶時に意図的に倒している可能性が高いことを示す。支脚前面には濃いアミで示したしっかり焼けた硬化面とその前面にも薄いアミで示したやや焼け方が弱い硬化面を検出した。また支脚前後には土師器甕がバラバラな状態で出土している。

煙道部は燃焼部奥壁から長さ 225cm、燃焼部主軸からほぼ直角に曲がり西側に延びる。本遺跡で確認されたＬ字状カマドと同じく、煙道壁は一方は住居壁を利用し、住居内側のみ粘土で壁を構築する構造であるが、両袖及び煙道壁の基礎部分、高さ５cm程度は住居埋土と同じ土（11 層）で構築し、その上を粘土の 13 層で壁を構築する。見通し図でも線で粘土の使用範囲を示している。これはカマド構築時に粘土が不足していたためか、基底部のみ地山の土を用いた可能性が考えられる。

煙道部は幅 15cm前後で煙道先端まで延びるが、煙道下端幅が煙道中央から先端に向かって急激に狭くなり、それに合わせるように煙道部床面は緩やかに上がる。住居外まで煙を排出するにはあと 15cm以上の長さが必要であることから、煙道部先端から住居外まで別の構造物（竹等）が存在したのであろう。

カマド埋土は、１～５層がカマド天井・袖の崩落土であり、石製支脚が外されていることも考えると、住居廃絶時に石製支脚を外し、燃焼部及び煙道部上部を破壊したと想定される。

出土遺物（第 81 図９～ 19）

須恵器（９～ 11）　９～ 11 は坏蓋である。９・11 は稜がまったくないもので、10 が鋭い稜が巡るため、10 は型式が古く、混入品と思われる。９は復元口径 13.2cmを測り、口縁端部は丸く収める。色は灰色。カマド前面出土。10 は復元口径 11.4cmを測り、口縁端部はナデ凹線が巡る。色は暗灰色。11 の色は青灰色である。

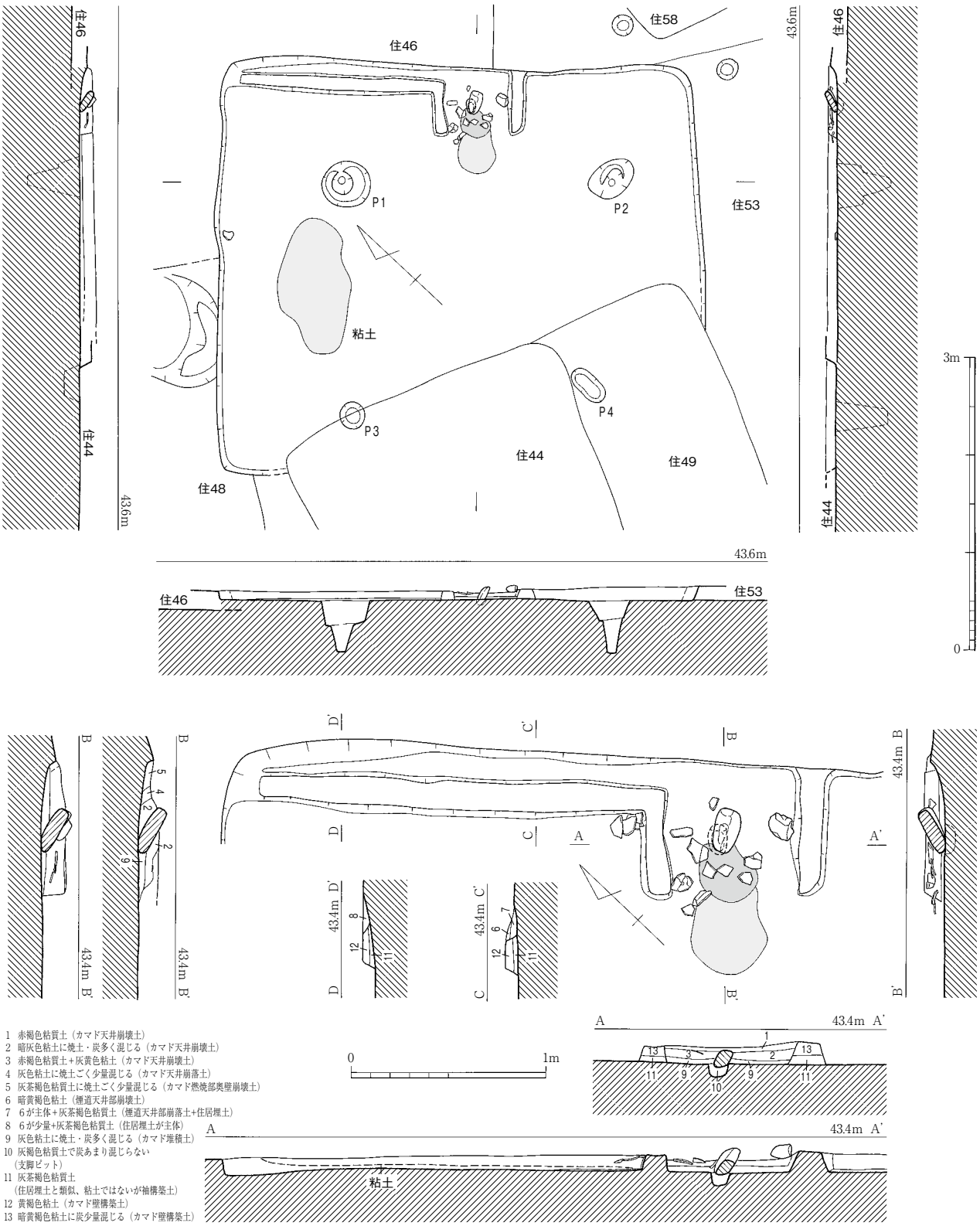
土師器（12 ～ 16）　12 は直口の甕で、色は褐色。13 は精製の高坏脚部で、外面はミガキ、内面はナデ調整を行う。坏部とは付加法で接合する。色は灰褐色。14 は碗で、口縁部は弱く内湾する。内外面にはミガキを密に施す。色は灰褐色。15 は手づくね土器。色は淡橙褐色。カマド前面出土。16 は古墳前期の在地系壺口縁部である。色は黄褐色。混入品。

床下掘り込み出土土器（17 ～ 19）　17・18 は須恵器坏蓋である。17 は復元口径 13.6cmを測り、天井部との境には稜がなく、外面には自然釉が付着する。色は灰色。18 は大きく突出する稜が巡るもので､口縁内端部にはナデ凹線を施す。外面～口縁部内面は薄く自然釉が付着する。色は暗灰色。

19 は古墳前期の中実の高坏脚部で、外面はハケのち横ミガキ、坏部内面にはミガキが残り、脚部内面はハケ、脚柱部内面はナデで調整する。色は黄褐色。

46 号竪穴住居跡（図版 27・30、第 83 図）

１区南西に位置し、45 号住居跡に切られ、48・54・59・60 号住居跡を切る。遺構検出を誤り、



第 82 図　5 次 1 区　45 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

住居西壁を 30cm程度掘りすぎてしまい、西壁は下端のみしか確認できなかった。また 60 号住居跡とも切り合い関係を誤り、出土土器から当住居跡が 60 号住居跡を切る。住居南東部は 60 号住居跡で壊されるものの、壁下端は確認できた。住居の規模は主軸長 4.35 m、南北 4.4 m、深さ最大 18 cmを測る、平面形はほぼ正方形住居である。住居主軸方位は、北から 40° 西に振れる。住居西壁中央に造り付けカマドを付設する。

文中写真 18　46 号住居跡
（東南東から）

床面ではピット５基検出し、位置と深さからＰ１～４が主柱穴の４本柱の住居となる。また北西にある溝は住居内仕切り溝となる可能性がある。床面から３㎝以上浮いた状態で大量の炭化材と土師器碗（29・30）等の土器が出土したが、炭化材は出土状況から住居埋没時に不要な材を燃やした可能性が高いものである。住居埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘土ブロックが多く混じる。住居全面で住居床下掘り込みを確認した。覆土より鉤状の端部を持つ鉄鏃の茎部？（第142 図 13）が出土した。

20・21 の土師器甕の頸部内面の稜はしっかりしていないが、土師器碗・高坏は器壁が薄く、また高坏脚部は中実ではないため、５世紀後半に位置づけられると考えられる。

カマド（図版 30、第 83 図）

住居西壁中央に付設したカマドで、検出を誤り、奥壁は 30㎝ほど掘りすぎてしまい、奥壁は下端のみ検出できた。奥壁下端から両袖とも 82㎝突出する。燃焼部奥壁から 34㎝手前に、土師器高坏（25）を天地逆にして転用した支脚を置く。その支脚部分で袖間は 42㎝を測る。焼面は検出できていない。また支脚はカマド袖と同じ粘土を坏部に入れて固定する。支脚前後で土師器甕（21）、土師器碗（31）がまとまって出土したが、カマド燃焼部内で使用することのない土師器碗の存在から、これらの土器はカマド廃絶時にカマド内に入れられたと考えられる。

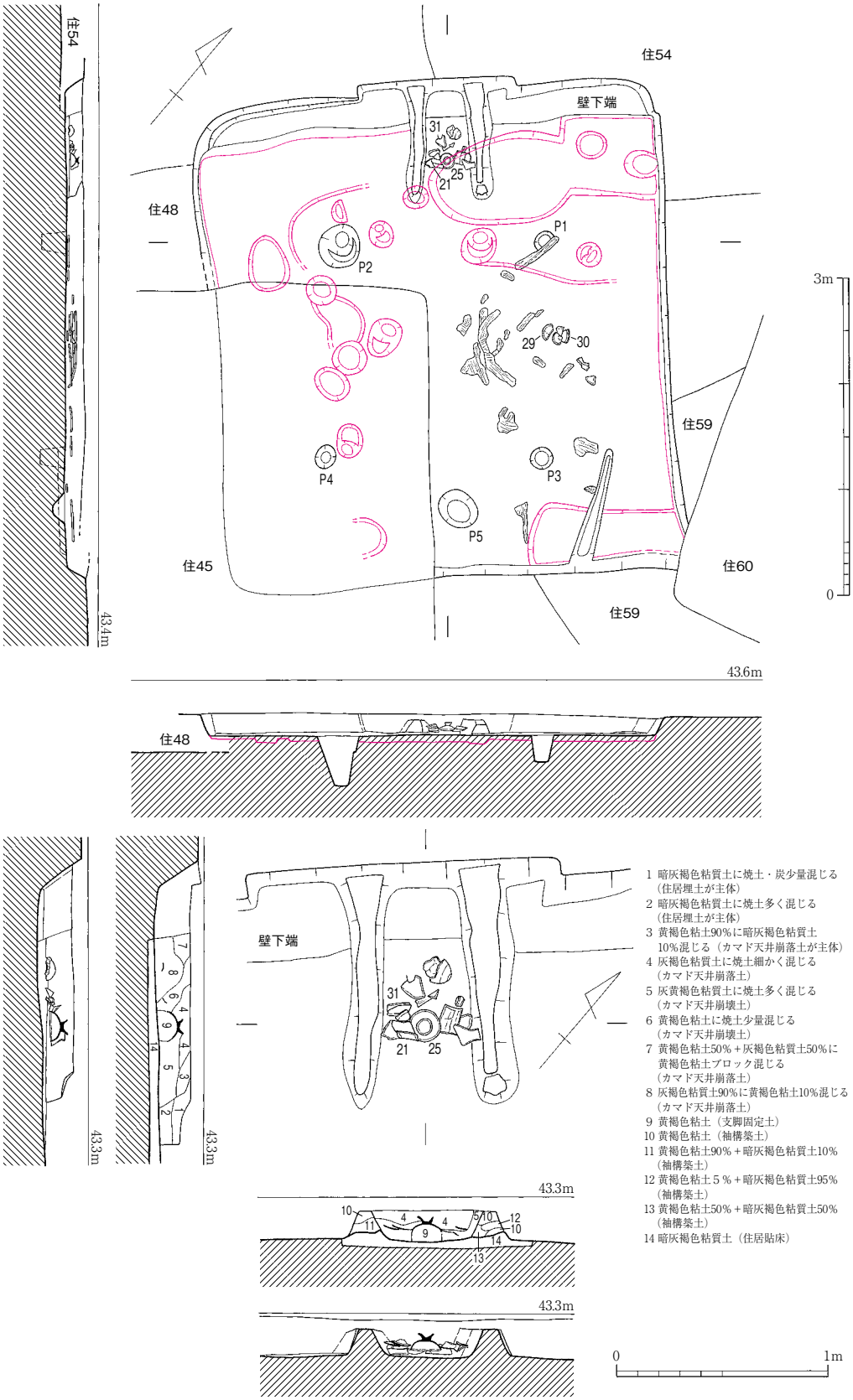
土層では３～８層がカマド天井崩落土で、先述した土器の出土状況からもカマド廃絶時にカマド天井及び袖を大きく壊していると考えられる。

出土遺物（図版 59、第 81 図 20 ～ 32）

土師器（20 ～ 32）　20 ～ 24 は甕である。21・22 はススが認められる。色は 20・21 が橙褐色、22・23・24 が褐色である。20 は内外面に粗いハケを施す。胴部内面には粘土継ぎ目痕が残る。21 は完形に近いもので、復元口径 15.3㎝、復元器高 19.1㎝を測る。胴部外面はハケ、内面はケズリを施す。頸部内面には粘土継ぎ目痕が残る。22 は長めの口縁部が「く」の字形に開く。23・24 の口縁部外面には粗いハケが残る。

25・26 は碗状の坏部を持つ高坏である。25 はカマド支脚に転用されたもので、内外面顕著な被熱痕が認められる。口縁部が短く外反し、坏部内外面にはミガキを施す。脚部外面はヘラナデを行う。26 は脚部で、坏部内面はミガキ、脚部外面もミガキを施す。色は橙褐色。27 も高坏脚部。色は橙褐色。28 は直口の鉢である。色は茶褐色。

29 ～ 31 は口縁部を弱く外反させた碗で、29・31 は外面下位にケズリ、後内外面ミガキを施す。30 は内外面ミガキのみ確認される。色は 29・31 が橙褐色、30 は灰茶色。29 の内面は粗いミガキを施す。30 はほぼ完形で口径 14.2㎝、器高 5.6㎝を測る。外面には黒斑あり。31 は口縁部外端部をナデにより面取りし、玉縁状になる。32 は手づくね土器。外面には黒斑があり、色は灰褐色。



第 83 図　5 次 1 区　46 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

47 号竪穴住居跡（図版 30、第 85 図）

1 区南西壁際に位置し、46・48・54・55 号住居跡に切られる。住居東は 46・48 号住居跡に壊され、住居西側は調査区外まで延びる。そのため住居北・南壁の一部を検出したにとどまる。住居の規模は、南北 6.75 m、東西 2.85 m以上、深さは最大 35cmを測る、大型の方形住居と想定される。

住居南壁には灰黄褐色砂質土が埋土の屋内土坑を付設し、住居中央の炉と屋内土坑を結んだ線が住居主軸とすると、住居主軸は北から30°東に振れる。床面ではピット７基検出し、位置と深さからＰ２が主柱穴となる４本柱の住居と予想されるが、Ｐ２以外の主柱穴は不明である。住居中央で在地系大型壺底部（２）を炉床面に使用した炉（Ｐ７）を検出した。土器内はほぼ炭で充填されており、灰穴炉となる可能性がある。住居北壁及び南壁には壁周溝が巡る。住居埋土は灰褐色粘質土である。床面から30㎝浮いた状態で土師器甕（３）が出土した。

２は平底を僅かに残すことから弥生時代後期終末までさかのぼるが、３・４の在地系とＶ様式系の融合した土器が出土したため、住居の埋没時期は古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版59、第84図１～７）

土師器（１～７）　１は在地系直口壺口縁部で、外面にはススが付着する。口縁端部はナデで面取りする。色は白黄褐色。２は土器炉として転用された在地系大型壺で、凸レンズ底部は小さな平底を残す。内外面はハケ調整を基本とするが、外面底部付近のみ細い縦ミガキを施す。外面には黒斑と被熱痕があり、内面は炉に転用されたことからススが濃く付着する。色は灰黄褐色。

３・４は在地系と布留系の要素が合わさった甕で、口縁部は立ち気味である。３は復元口径14.5㎝、復元器高18.6㎝を測る。胴部外面は縦ハケ、内面は底部付近のみケズリ、他は粗いハケを施す。外面には被熱痕とススが付着、内面には炭化物が付着する。色は黄褐色。４は内面頸部近くまでケズリを施す。口縁部内面には工具痕あり。外面には薄くススが付着し、色は褐色。５は弥生後期高坏で、坏部内面と外面にはミガキを施す。色は褐色。６は小型外反口縁鉢の胴部である。外面には粗いハケのちミガキを一部施す。色は灰黄褐色。７は古墳後期甑で混入品。外面にはスス、内面には炭化物が付着する。色は橙褐色。

48号竪穴住居跡（図版31、第86図）

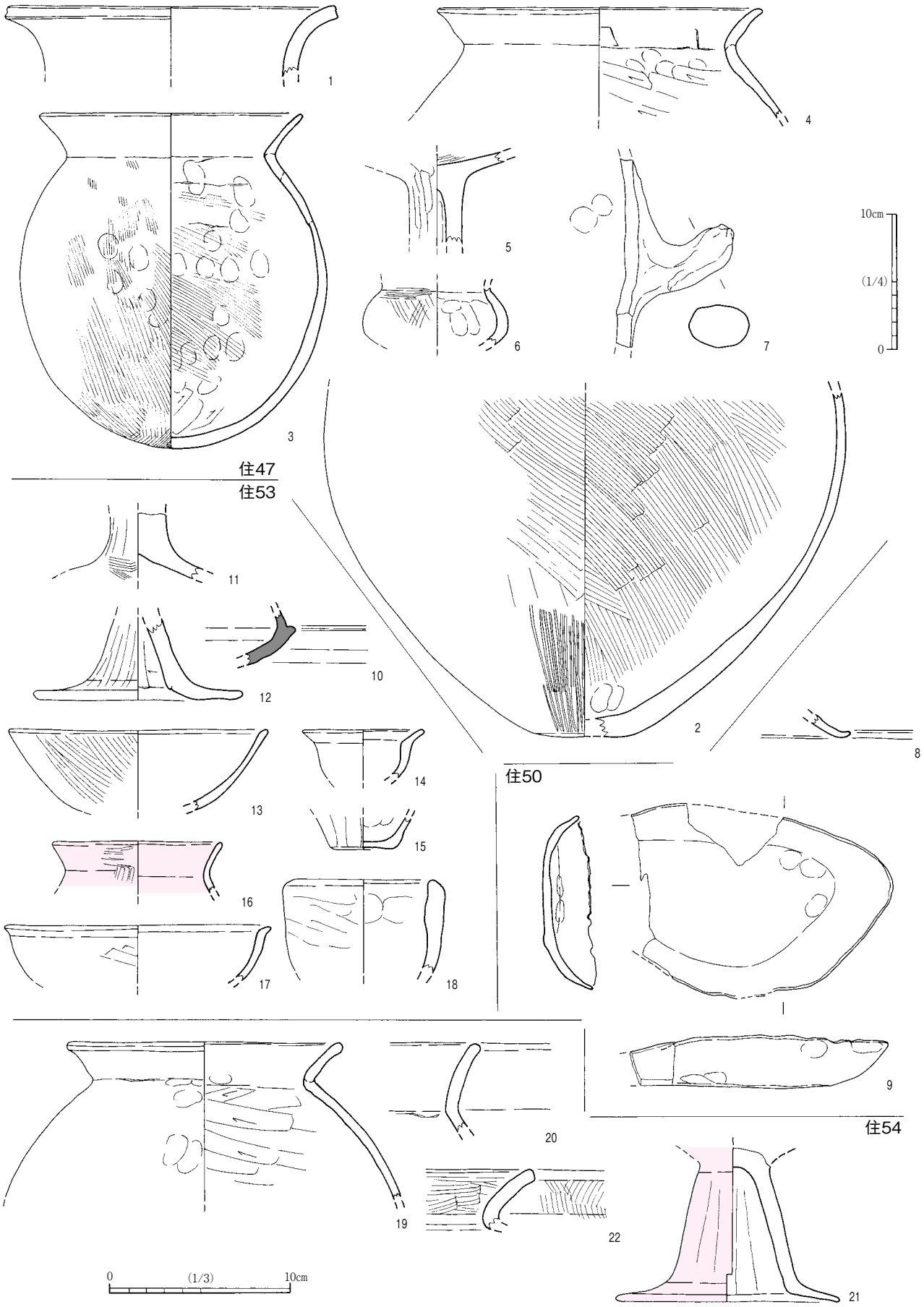
１区南の南西寄りに位置し、44・45・46・49・50・53・55号住居跡に切られ、47号住居跡を切る。住居の規模は南北6.33ｍ、東西6.15ｍ、竪穴部の深さは最大37㎝を測る、残りの良い大型の方形住居である。北壁と南壁は平行するものの、東・西壁と直角にならず各々歪みがあるため、平面形は平行四辺形状になる。住居の主軸方位は北から54°西に振れる。

住居南壁全面及び東・西壁の一部で地山削り出しのベッド状遺構を検出したが、西壁のベッド状遺構の北端はピットがあるため現状では失われているが、もう少し北側に延びていた可能性がある。

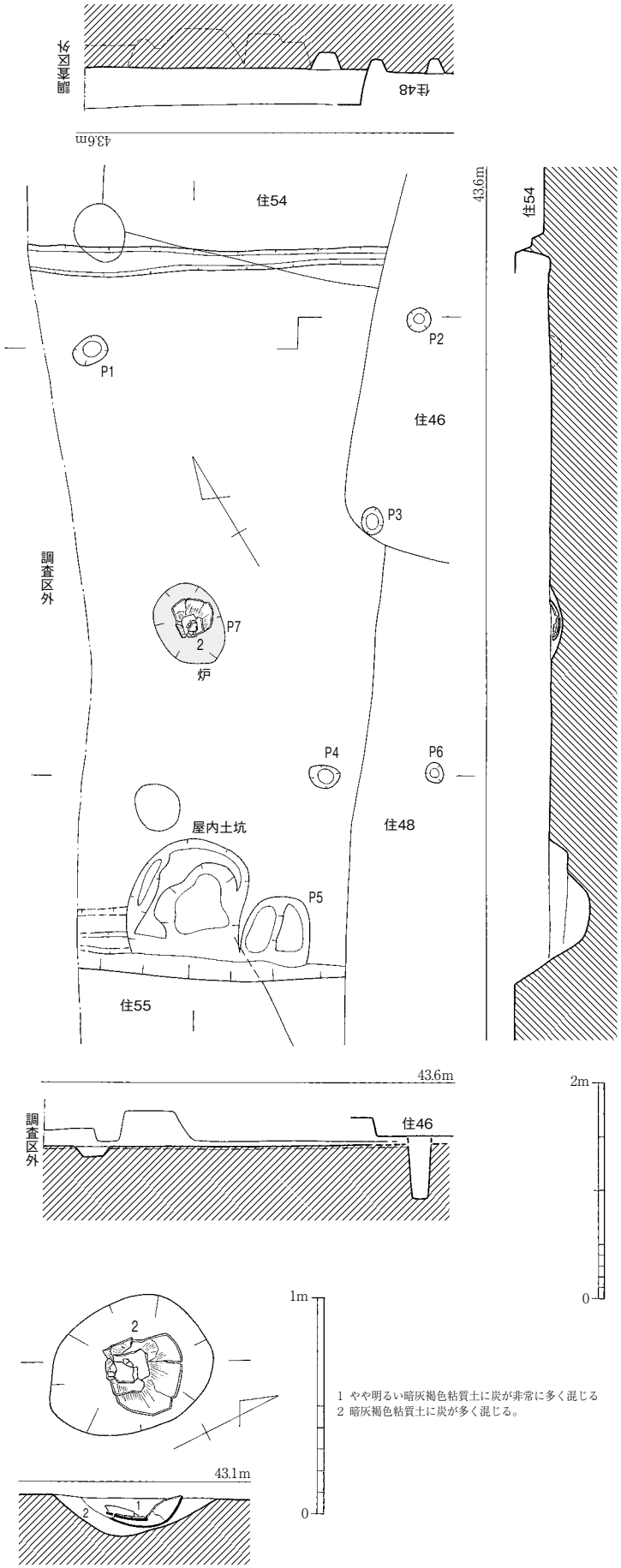
竪穴部中央には埋土が暗灰褐色砂質土に炭が多く混じる炉があり、東壁中央には暗灰褐色粘質土を埋土とする屋内土坑を付設する。住居北西隅にも115×112㎝の規模の土坑が存在するが、埋土は当住居と同じであるが、壁周溝を切ることから、当住居跡に伴うかどうかは確定できなかった。

文中写真19　48号住居跡出土状況
（南から）

竪穴部床面ではピット14基検出し、位置と深さからベッド状遺構に接し、竪穴部の四隅に位置するＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居と想定されるが、Ｐ５・７、Ｐ10～11、Ｐ14・16は深さがあることと、大型住居であることから補助



第 84 図　5 次 1 区　47・50・53・54 号竪穴住居跡出土土器実測図（2・5 は 1/4、他は 1/3）



第85図　5次1区　47号竪穴住居跡・炉跡実測図
（1/60・1/30）

柱が存在した可能性がある。またP 13は位置から47号竪穴住居跡に伴う可能性がある。

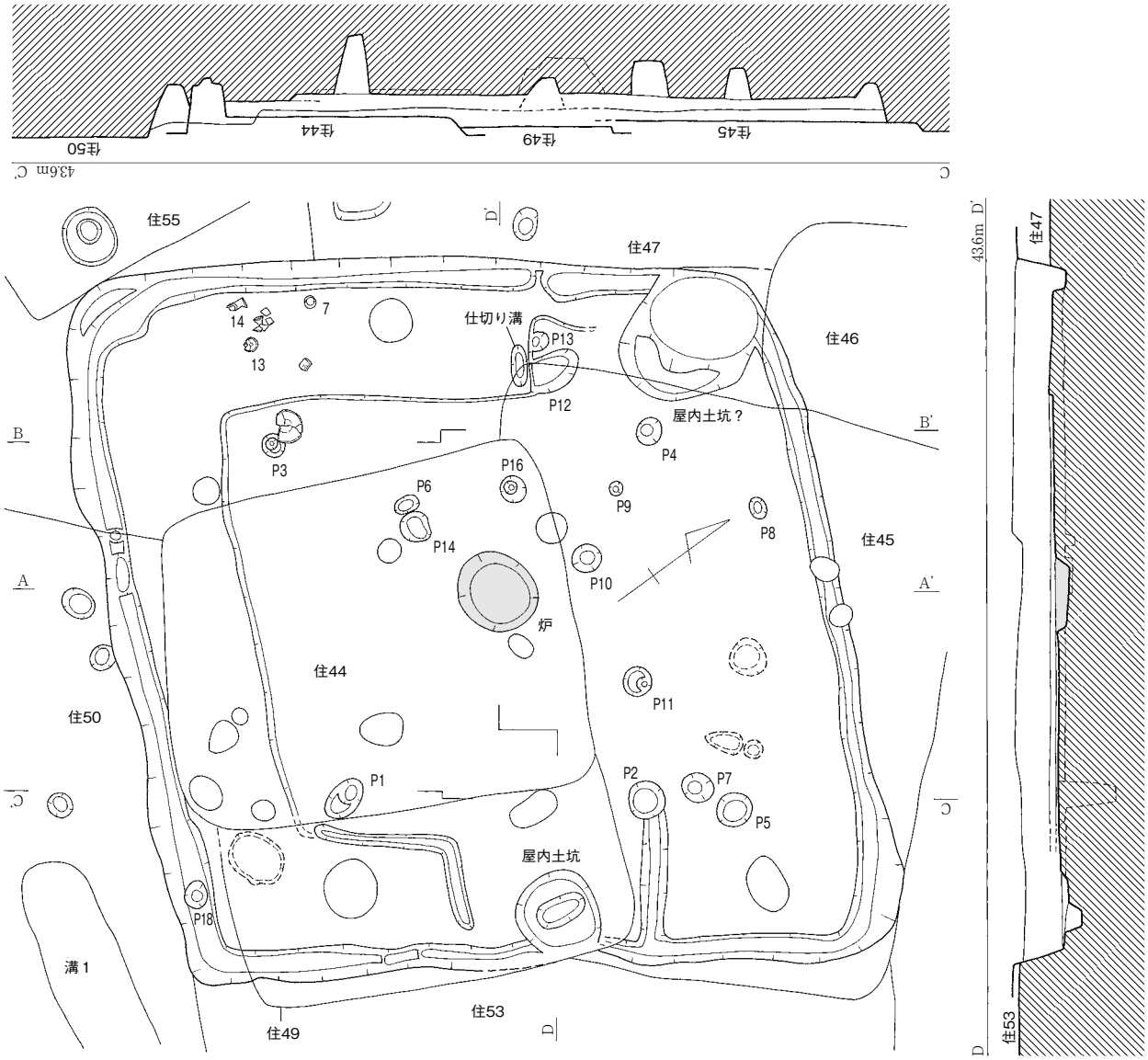
壁周溝は住居壁全面及び屋内土坑北と南を巡り、西側ベッド状遺構北端にある溝は住居内仕切り溝の可能性がある。住居南西隅のベッド状遺構付近で土器が出土し、土師器壺（7）と高坏坏部（13）はベッド状遺構直上、土師器高坏脚部は15cm程浮いた状態（14）で出土した。住居埋土は灰黄褐色粘質土である。

出土土器は在地系土器が主体であり、住居の時期は古墳時代前期前半に位置づけられる。

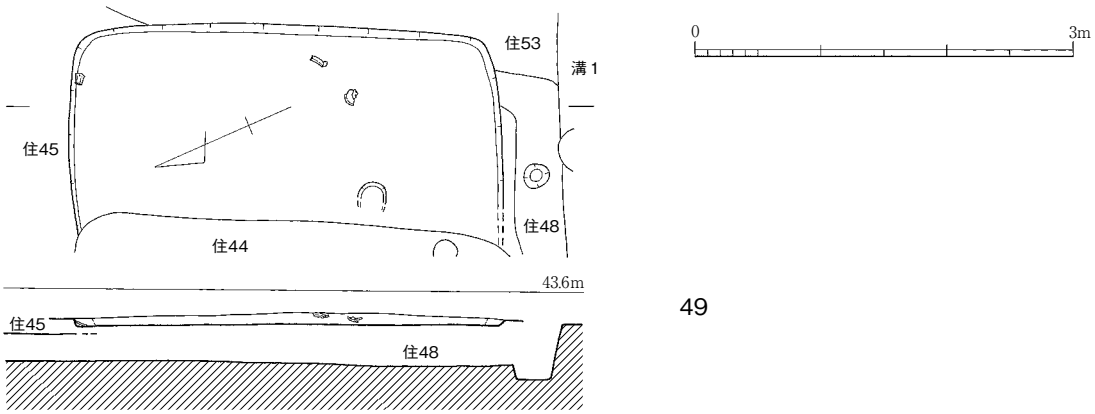
出土遺物（図版60、第87図）

土師器（1～24）　1～7は壺である。2・7は黒斑、1・7は被熱痕が認められる。色は1・2・7が灰黄褐色、3が茶褐色、4が黄褐色、5・6が黄橙色を呈する。1・2は直口壺口縁部である。2の外面は縦ハケ後横ナデを施す。3・4は在地系二重口縁壺口縁部で、いずれも口縁上端部はナデで面取りする。4は内外面横ナデ後スリップを施す。5は在地系直口壺で内外面細かいハケのちナデを施す。6は口縁上端部をつまみ出した在地系直口壺口縁部である。7はほぼ完形の小型丸底壺で、口径9.3cm、器高10.2cmを測る。長めの口縁部は内湾気味である。球状を呈する胴部内面には工具痕あり。胴部内面には粘土継ぎ目痕あり。

8～12は在地系の甕である。9は黒斑、10は被熱痕、10はススが認められる。8は白灰黄色、9・10・12はこげ茶色、11は褐色を呈する。8は口縁端部を丸く収め、口縁内端部はナデによ



48



49

第 86 図　5 次 1 区　48・49 号竪穴住居跡実測図（1/60）

り窪む。９は胴部内面中位以下という下がった位置にケズリを施す。10 は頸部の締まりがない器形で、外面は被熱による剥離が顕著である。内面には粘土継ぎ目痕が残る。

13 ～ 16 は高坏である。13 は粗製の小型高坏で、ちょうど屈折部には横方向の工具ナデを施した際の工具痕が残る。脚部との接合は充填法である。色は暗茶褐色。14 は脚柱部外面及び坏部内面はハケのちミガキを施す。色は灰黄茶色。15 は脚裾部である。脚裾部端部の器壁は薄い。色は黄橙色。16 は布留系の坏部口縁部で、内外面ともハケのち暗文状のミガキを施す。色は黄橙色。

17 ～ 22 は在地系鉢である。18・19 は黒斑、22 は被熱痕あり。色は 17・22 が橙褐色、18 ～ 20・21 が灰黄褐色を呈する。17 ～ 19 は外反口縁鉢である。18 の口縁端部はナデで面取りする。外面及び口縁部内面はハケ後ナデを施す。19 は器壁が厚く、体部内面は工具ナデ後ナデを施す。20 ～ 22 は直口鉢である。21 の外面は工具ナデ後ナデで調整する。22 の外面は被熱痕あり。23 は手づくね風の粗製鉢である。底部はケズリ後ナデ、内面は工具ナデを施す。色は褐色。

24 は完形の蛸壺である。口径７㎝、器高５㎝を測る。内外面ナデ調整で、中央に焼成前に１ヶ所穿孔を施す。色は灰黄褐色。混入品。

須恵器（25）　25 は坏身口縁部で、外面には自然釉が付着する。色は灰色を呈する。混入品。

49 号竪穴住居跡（図版 27、第 86 図）

１区南中央のやや西寄りに位置し、44 号住居跡に切られ、45・48・53 号住居跡を切る。住居の大半を 44 号住居跡により壊されるが、住居の規模は南北 3.43 ｍ以上、東西 1.54 ｍ以上、深さ最大９㎝を測る方形住居である。住居の主軸方位は北から 24° 東に振れると思われる。

床面ではピット１基検出し、深さ 30㎝を測るため主柱穴となる可能性があるが、他の主柱穴は検出できなかった。住居埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係から古墳時代後期に位置づけられる。

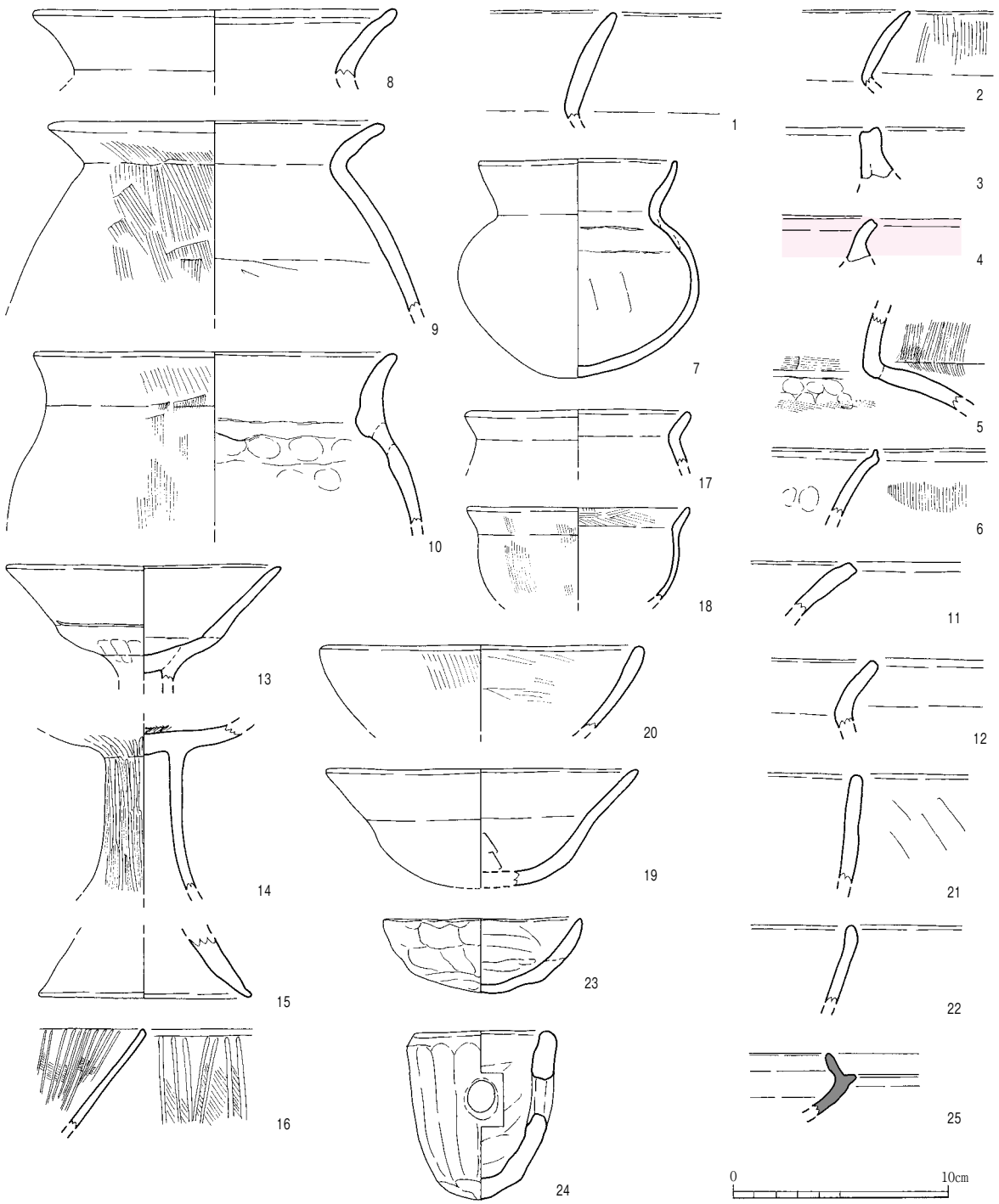
50 号竪穴住居跡（図版 31、第 88 図）

１区南の南西寄りに位置し、44・49 号住居跡、１号溝に切られ、48・51・53 号住居跡、５号土坑を切る。当住居跡付近は削平が顕著で、住居壁も最大３㎝しか残っておらず、西壁も下端のみ、北東部壁はまったく検出できなかった。住居の規模は主軸長 4.65 ｍで、南北は西壁近くで検出したカマドの硬化面が西壁中央に位置したとすると、南北幅は 4.4 ｍ程度を測るほぼ正方形住居になると想定される。住居の主軸は北から 53° 西に振れる。

文中写真 20　50 号住居跡（南西から）

床面ではピット９基検出し、位置と深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居である。またこのピット４基以外でも深さがあるピットが多く、他の住居の柱穴を当住居の柱穴として報告している可能性がある。住居埋土は灰褐色砂質土である。床下掘り込みは住居全面で確認した。床下掘り込みから土錘（第 141 図 14）が出土した。

出土土器及び切り合い関係から、古墳時代後期に位置づけられると考えられる。



第 87 図　5 次 1 区　48 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

カマド（第 88 図）

西壁から 45cm手前の位置で、径 35cmを測る硬化面を検出したことから、住居西壁にカマドが付設されたことが判明した。袖の痕跡も検出できなかったことから、住居廃絶時に袖まで壊されている可能性がある。

出土遺物（図版 59、第 84 図８・９）

土師器（８・９）　８・９は床下掘り込み出土。８は高坏脚裾部。外面は黒化する。色は暗褐色。９は平面形が舟形ないしは隅丸三角形になる特異な形態の鉢である。底部は平底で、端部に向かって薄くなり、端部は平坦ではなく、やや波打っている。内外面被熱が顕著である。色は灰黄褐色。９は古墳前期の可能性が高く、本来は当住居跡下層遺構にあたる５号土坑に伴う可能性がある。

51 号竪穴住居跡（図版 31、第 88 図）

１区南西に位置し、50 号住居跡、１号溝に切られ、５号土坑を切る。当住居跡付近は削平が顕著で、住居壁は最大３㎝しか残っておらず、南西壁はまったく検出できなかった。住居の規模は主軸長 5.6 ｍで、南北 3.8 ｍ程度の東西に長い長方形住居になると想定される。住居の主軸は北から 62° 西に振れる。西壁から 140㎝東に径 25㎝前後の焼面を検出し、この焼面がカマド焼面の可能性があるが、西壁から離れすぎていることは気になる。

床面ではピット８基検出し、位置と深さからＰ１・６が南側の主柱穴列となる４本柱の住居となる可能性が最も高いと思われるが、北側の主柱穴列は住居内では検出できず、住居外のＰ９・10 が北側の主柱穴列であったとすると、住居南北幅は５ｍほどになり、かつ先述の焼面がカマドに伴う可能性が低くなる。そのため、Ｐ９・11 は当住居跡に伴わないと判断した。住居埋土は灰褐色砂質土である。床下掘り込みは住居全面で確認した。

出土遺物で図示できるものはないが、切り合い関係から、古墳時代後期に位置づけられる。

53 号竪穴住居跡（図版 31、第 89 図）

１区南中央に位置し、45・49 号住居跡、１号溝に切られ、48 号住居跡を切る。当住居跡付近は削平が顕著で､住居壁下端のみと床面とピットのみ検出できた。住居の規模は南北 6.15 ｍ､東西 3.75 ｍ以上の方形住居になる。住居の主軸は北から 32° 東に振れる。

床面ではピット 18 基検出し、位置と深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居となる。この４基以外のピットでもＰ７・９・10・12・13・14 は深さがあることから、住居の建替えないしは補助柱が存在した可能性がある。住居埋土は灰茶褐色粘質土である。床下掘り込みは住居全面で確認した。覆土より鉄鎌の折り返し部？（第 142 図３）が出土した。

10 の須恵器坏身及び切り合い関係から、６世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（第 84 図 10 ～ 18）

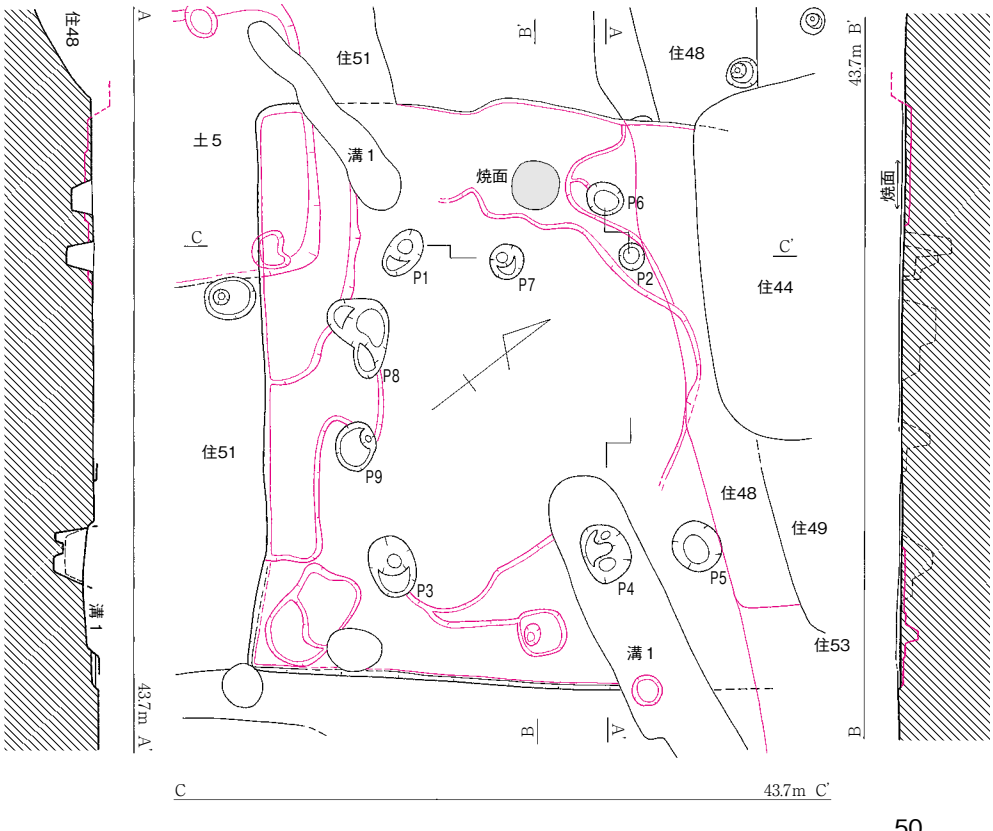
須恵器（10） 10 は器壁が厚い坏身である。色は灰色。

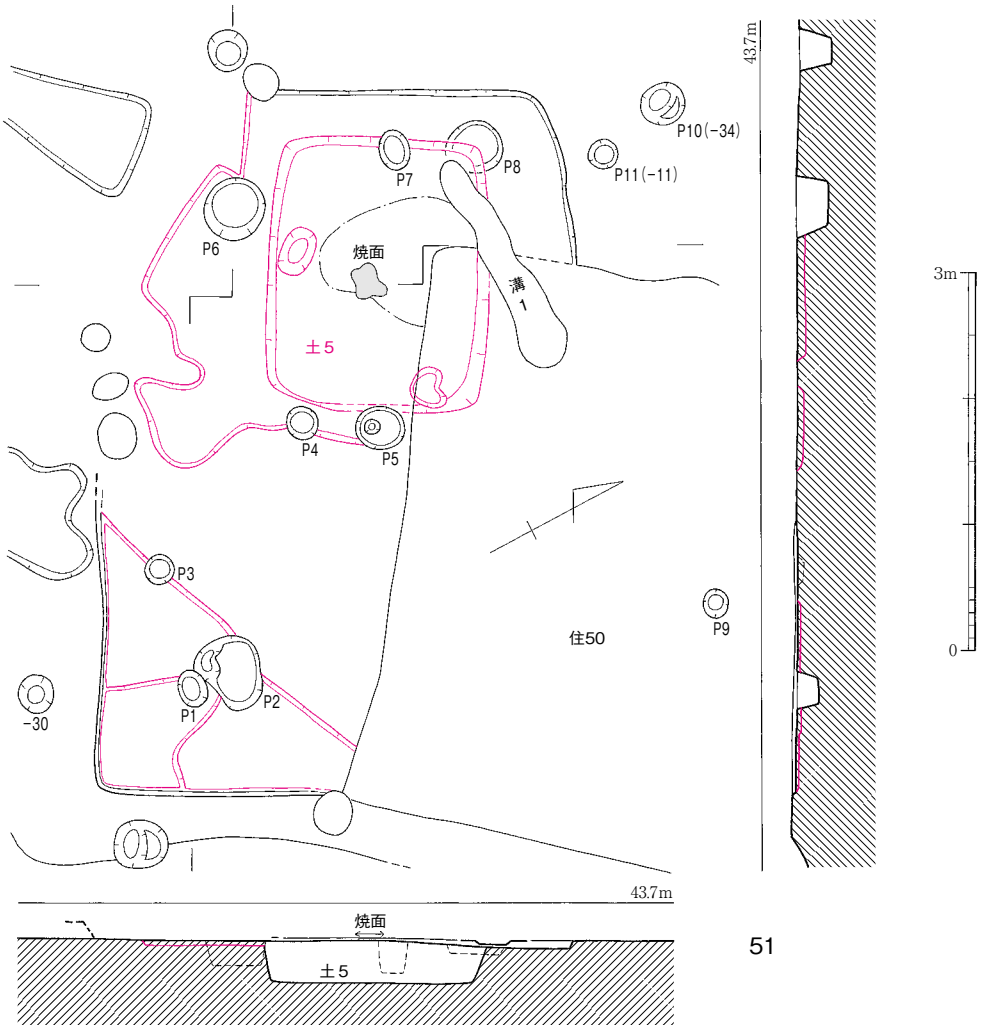
土師器（11 ～ 15） 11・12 は高坏脚部である。11 の脚柱部外面は縦ナデ、脚裾部外面は一部ハケを施す。内外面被熱が顕著である。色は灰黄褐色。12 の脚柱部外面は粗いハケ後ナデを施し、内面はケズリを施す。色は灰黄褐色。13 は古墳前期の鉢か。外面はハケ、内面はナデを施す。外面には被熱痕あり。色は黄橙色。14・15 はミニチュア土器。14 は外反口縁鉢形で、色は茶褐色。15 は鉢形で、底部は平底、色は茶褐色。

床下掘り込み出土土器（16 ～ 18） 16 は古墳前期の外反口縁鉢。外面にはミガキを施し、後スリップを塗布する。生地は灰黄褐色。17 は口縁端部を短く外反させた碗で、外面は工具ナデのちナデを施す。色は橙褐色。18 は蛸壺で、色は外が暗黄茶褐色、内がこげ茶色。

54 号竪穴住居跡（図版 32、第 90 図）

１区南の西壁際に位置し、46 号住居跡に切られ、47・60 号住居跡を切る。遺構検出を誤り、46 号住居跡の調査時に 30㎝程度当住居跡覆土を掘りすぎてしまっている。また 64 号住居跡とも切り合い関係を誤り、出土土器から 64 号住居跡に切られる。住居の規模は主軸長 3.95 ｍ、南北 4.28 ｍ、深さ最大 25㎝を測る、平面形はほぼ正方形の住居である。住居主軸方位は北から 42° 東に振れる。





第 88 図　5 次 1 区　50・51 号竪穴住居跡実測図（1/60）

住居南壁中央に造り付けカマドを付設し、南壁に付設するカマドは１区では 14・56 号住居跡カマドと当住居のみである。

床面ではピット８基検出し、位置からＰ１～４が主柱穴の４本柱の住居となると思われるが、Ｐ１・２はいずれも深さが浅いもので、主柱穴としては不安が残る。床面直上では土師器甕（19）と高坏脚部（21）が出土した。住居埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘土ブロックが多く混じる。住居全面で住居床下掘り込みを確認した。

19 の土師器甕の頸部内面の稜はしっかりしており、21 の土師器高坏脚部もハの字状に裾部が広がること及び切り合い関係から、５世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版 32、第 83 図）

住居南壁中央に付設したカマドである。壁から左袖は 97㎝、右袖は 76㎝突出する。支脚は検出できなかったが、断面図の箇所で袖間 42㎝を測る。燃焼部奥壁から 94㎝手前に径 20㎝ほどの弱い焼面を検出した（アミ）。土層では２層が住居埋土主体であるが、カマド天井崩落土を含み、４・５層がカマド袖構築土である。カマド廃絶行為の有無は不明である。

出土遺物（図版 60、第 84 図 19 ～ 22）

土師器（19 ～ 22） 19・20 は甕で、色は灰黄褐色。19 は口縁部が「く」の字形に屈折する布留系甕で、口縁部を胴部に接合した際の段差が明瞭に残る。胴部外面はナデ、胴部内面は頸部までケズリを施す。外面にはススが付着する。混入品。20 は直立する長い口縁部の甕。口縁部内外面に黒斑あり。胴部内面には粘土継ぎ目痕がある。カマド内出土。21 は高坏脚部である。外面はナデのちスリップを施し、内面はケズリとナデを施す。色は黄褐色。

22 は古墳前期の在地系甕口縁部で、内外面ハケを施す。口縁端部はナデで面取りし、色は橙褐色を呈する混入品である。

55 号竪穴住居跡（図版 32、第 90 図）

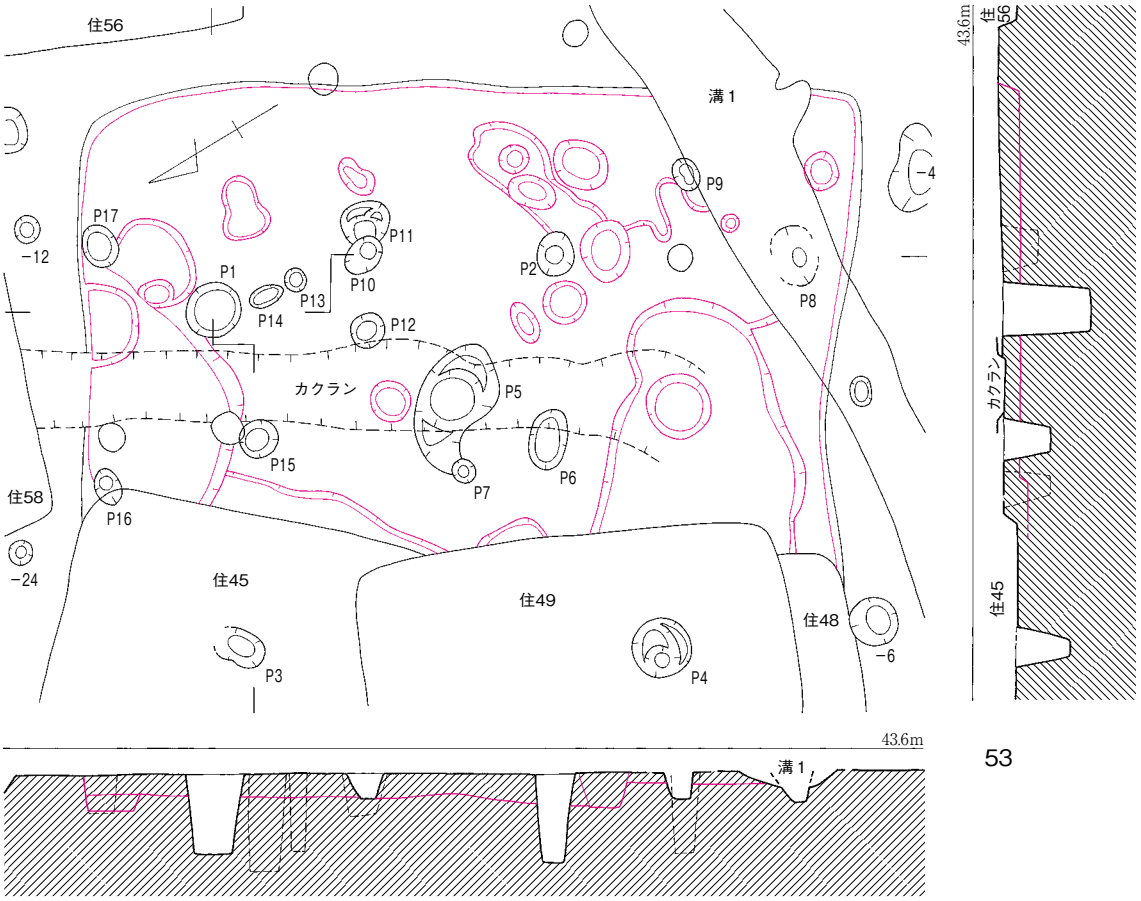
１区南西壁際に位置し、47・48 号住居跡を切るが、47 号住居跡とは切り合い関係を誤り、住居北東部を掘り失った。当住居跡付近は削平が顕著で、住居壁下端、床面、ピットのみ検出できた。住居の規模は南北 3.65 ｍ以上、東西 3.1 ｍ以上の方形住居になる。住居の主軸は座標北である。
床面ではピット４基検出し、位置からＰ１・２が東側主柱穴列となる４本柱の住居になると思われる。住居埋土は明灰褐色粘質土である。床下掘り込みは住居中央部で確認した。

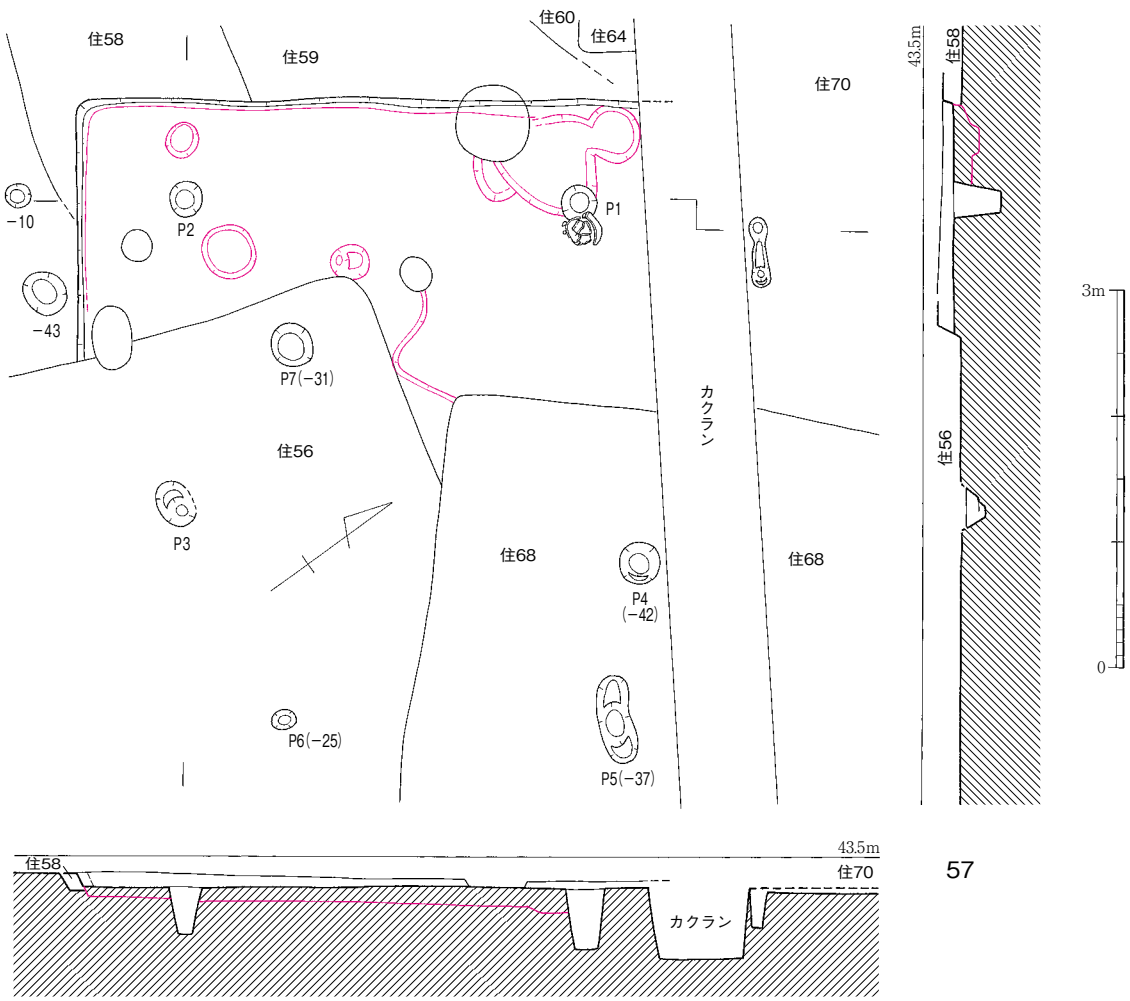
出土土器で図示できるものはないが、埋土から古墳時代後期に位置づけられる。

56 号竪穴住居跡（図版 33、第 91 図）

１区南の中央に位置し、67 号住居跡、１号溝に切られ、57 号竪穴住居跡を切る。68 号住居跡とは切り合い関係を誤り、当住居が 68 号住居跡を切る。住居南東部と中央部は１号溝により多く壊されるが、住居の規模は主軸長 4.85 ｍ程度、東西 4.38 ｍ以上、深さ最大 22㎝を測る。平面形は北壁が大きく歪んだ形態の方形住居になる。住居主軸方位は北から 30° 東に振れる。住居南壁に造り付けカマドを付設する。

床面ではピット 15 基検出し、位置と深さからＰ１～４が主柱穴の４本柱の住居となると思われるが、Ｐ６・９は位置・深さ・形態から住居建て替えられた可能性を示すピットである。床面から





第 89 図　5 次 1 区　53・57 号竪穴住居跡実測図（1/60）

５cm以上浮いた状態で土師器甑（７）、カマド右袖外の床面上で土師器甕（３）、また住居南東部を中心に大量の炭化材が出土したが、炭化材は出土状況から住居埋没時に不要な材を燃やした可能性が高いものである。また床面住居埋土は灰褐色粘質土に焼土・炭がブロック状に混じる。住居全面で住居床下掘り込みを確認した。

２の土師器甕は６世紀前半のものより、口縁部が短く、長胴傾向に復元される可能性が高く、また１の須恵器坏及び切り合い関係から、６世紀後半に位置づけられると考えられる。

カマド（図版 33、第 91 図）

住居南壁に付設した珍しいカマドで、カマド左側は１号溝により大きく壊される。壁から左袖は83cm程度、右袖は 88cm突出する。燃焼部奥壁から 44cm手前に河原石を使用した石製支脚を置くが、支脚ピットはなく、３cmほど床面を掘り窪めて固定してもので、不安定であり、調査では気付かなかったが、支脚周囲を粘土等で固定した可能性が高い。その支脚部分で袖間は 57cmを測る。支脚前面に 36 × 31cmの硬化面を検出した（アミ）。燃焼部奥壁で土師器甑（７）、また支脚周辺で土師器甕（２）が床面から５cm程度浮いた状態かつバラバラな状態で出土した。カマド右袖と接した位置に土師器甕（３）が出土した。

土層では１・２・４・５層がカマド天井崩落土で、３層が住居埋土を主体とする土である。３層の存在及び土器の出土状況から、カマド廃絶時に土器をバラバラにし、その後カマド天井及び袖を大きく壊したと考えられる。

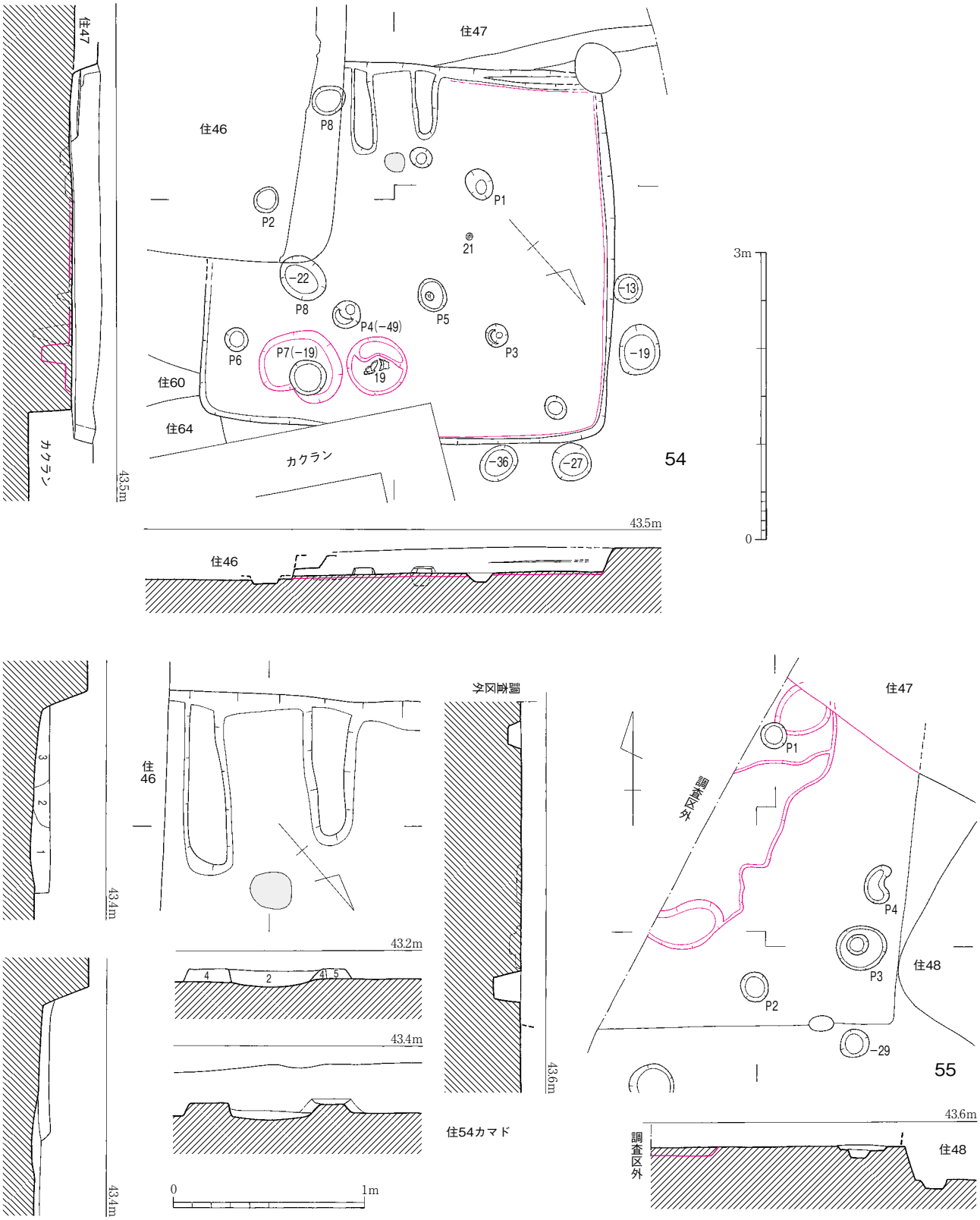
出土遺物（図版 60、第 92 図１～ 15）

須恵器（１）　１は坏蓋で、復元口径 13cmを測る。丸く収めた口縁端部をわずかに外反させ、外面には薄く自然釉が付着する。色は淡灰色。

土師器（２～ 15）　２～５は甕である。２は黒斑、２・３は被熱痕、２・３はススが認められる。色は２・５が灰黄褐色、３・４が橙褐色を呈する。２は短く外反する口縁部で、胴部外面には粗いハケ、内面は頸部までケズリを施す。胴部は長胴になると考えられる。３は球状の胴部で、外面はハケ、内面は頸部近くまでケズリを施し、内面には炭化物が付着する。４は肩が張らない胴部に直立する口縁部を持つ。内面は工具ナデ後ナデを施す。６・７は甑である。６の底部は半円状に２孔開けたもので、外面は工具ナデ後ナデ、内面はケズリ後ナデを施す。色は灰黄褐色。７は復元口径 28.9cm、復元器高 17.8cmを測り、底部は単孔である。外面は工具ナデ後ナデ、内面は浅いケズリを施す。外面には薄くススが付着する。色は橙褐色。

８～ 11 は碗で、８・９は口縁部が直立気味に内湾するもの、10 は口縁端部が弱く外反するもの、11 は口縁部が弱く外反するものである。色は８～ 10 が灰黄色、11 が橙褐色を呈する。８は外面下位にケズリを施し、後内外面はミガキを施す。９・11 は外面体部中位までケズリを施す。10 は内外面ミガキを施す。11 の体部外面は工具ナデ後ナデを施す。

12 ～ 14 は鉢で、色は 12 が灰褐色、13・14 は灰黄褐色。12 は外反口縁鉢で、体部外面は工具ナデを施す。13 は粗製の素口縁の鉢で、内外面ナデ調整。14 は直口鉢で、外面には黒斑あり。15 は手づくね土器。ほぼ完形品で、口径 5.1cm、器高 4.1cmを測る。口縁端部はナデで面取りし、色は灰黄褐色。床下掘り込み出土。

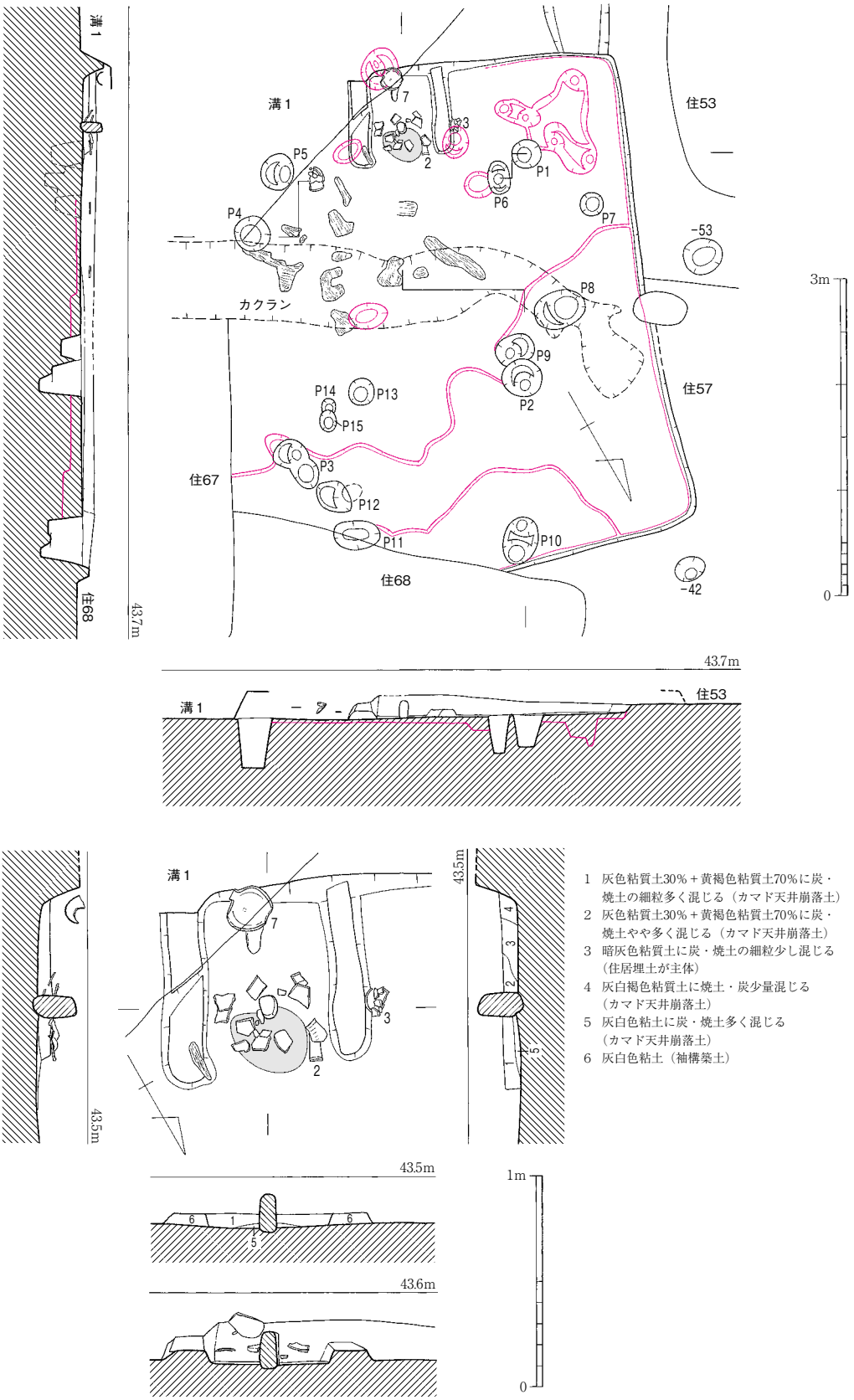


1　灰褐色粘質土に焼土・炭少量混じる（住居埋土が主体）
2　灰褐色粘質土に焼土・炭やや多く混じる（住居埋土が主体で、カマド天井崩落土混じる）
3　灰褐色粘質土に焼土・炭ごく少量混じる（住居埋土が主体）
4　明灰褐色粘質土（袖構築土）
5　4＋黄褐色土（地山）50％ずつ混じる（袖構築土）

第 90 図　5 次 1 区　54・55 号竪穴住居跡（1/60）、54 号住居跡カマド（1/30）実測図

57 号竪穴住居跡（図版 34、第 89 図）

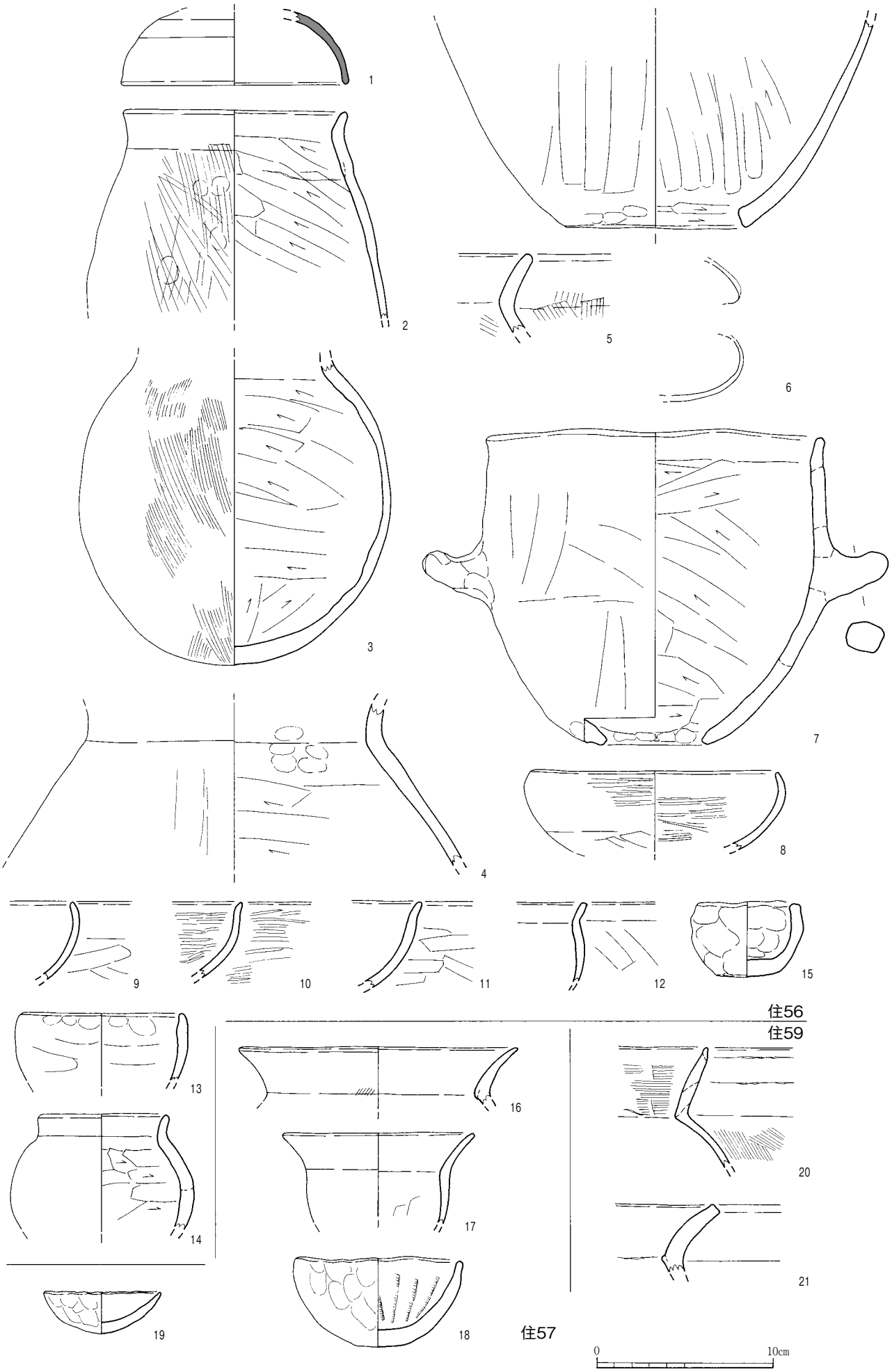
1 区南中央に位置し、56・68 号住居跡に切られ、58・59 号竪穴住居跡を切る。60・70 号住居跡とも接するため、切り合い関係を持つ可能性があり、出土土器から 70 号住居跡には切られ、60 号



第 91 図　5 次 1 区　56 号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

住居跡とは古墳時代前期前半と同時期であることから、前後関係は不明である。

当住居跡は 56・68 号住居跡に東側を大きく壊されるが、Ｐ１～４が位置・深さから当住居の主柱穴と考えられることから、規模は南北 4.5 m以上、東西４m程度の方形住居になると思われる。なおＰ５・６としたピットも埋土から当住居に属する可能性があるが、そうすると東西幅が 5.3 m



第 92 図　5 次 1 区　56・57・59 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

以上になるため、Ｐ３・４が東側の主柱穴列と判断し、Ｐ５・６は当住居に伴う可能性があることを指摘するにとどめておく。住居の主軸は北から 35° 東に振れる。住居北東で出土した土師器甕胴部片（本書不掲載）は床面から 10cm近く浮いた状態で出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。床下掘り込みは住居西側全面で確認した。

出土土器及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 60、第 92 図 16 ～ 19）

16 は外に大きく開く口縁部を持つ在地系甕である。色は灰黄褐色。17 は在地系鉢である。体部内面には工具痕あり。外面には黒斑あり。色は暗黄茶褐色。18・19 は手づくね土器で、いずれも黒斑があり、色は灰黄褐色を呈する。18 の内面にはハケ工具痕が残る。19 の胎土は精良である。

58 号竪穴住居跡（図版 34、第 93 図）

１区南の中央に位置し、56・57・59・60・64・68 号住居跡に切られ、46・53 号住居跡にも切られる可能性がある。当住居跡は上層の住居群に大きく壊され、住居壁は住居南から南西の一部を検出したにとどまる。Ｐ１・２が南側の主柱穴列であることは確実で、Ｐ３も北東の主柱穴となる可能性がある。Ｐ３まで当住居跡とすると、住居規模は東西 4.5 ｍ以上、南北 3.6 ｍ以上を測り、深さは最大 23cmを測る、方形住居跡になるか。住居の主軸方位は北から 10° 東に振れる。

住居南壁と西壁には幅 70 ～ 80cm、高さ５cmほどのベッド状遺構を付設する。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。床下掘り込みは２ヶ所で確認した。

出土土器は図示できるものはないが、切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

59 号竪穴住居跡（図版 34、第 93 図）

１区南の中央に位置し、46・57・60・64 号住居跡に切られ、58 号住居跡を切る。当住居跡は上層の住居群に大きく壊され、住居壁は住居南壁と西壁の一部を検出したにとどまる。Ｐ１～４が主柱穴となる４本柱の住居であり、Ｐ５が埋土から当住居に伴うと考えられることから、住居の規模は東西５ｍ以上、南北 3.65 ｍ以上を測り、深さは最大 15cmを測る、方形住居跡である。住居の主軸方位は北から 77° 西に振れる。

住居中央の床面直上で在地系壺（20）、南壁に貼り付いた状態で土師器甕胴部片が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。床下掘り込みは４ヶ所確認した。

出土土器及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

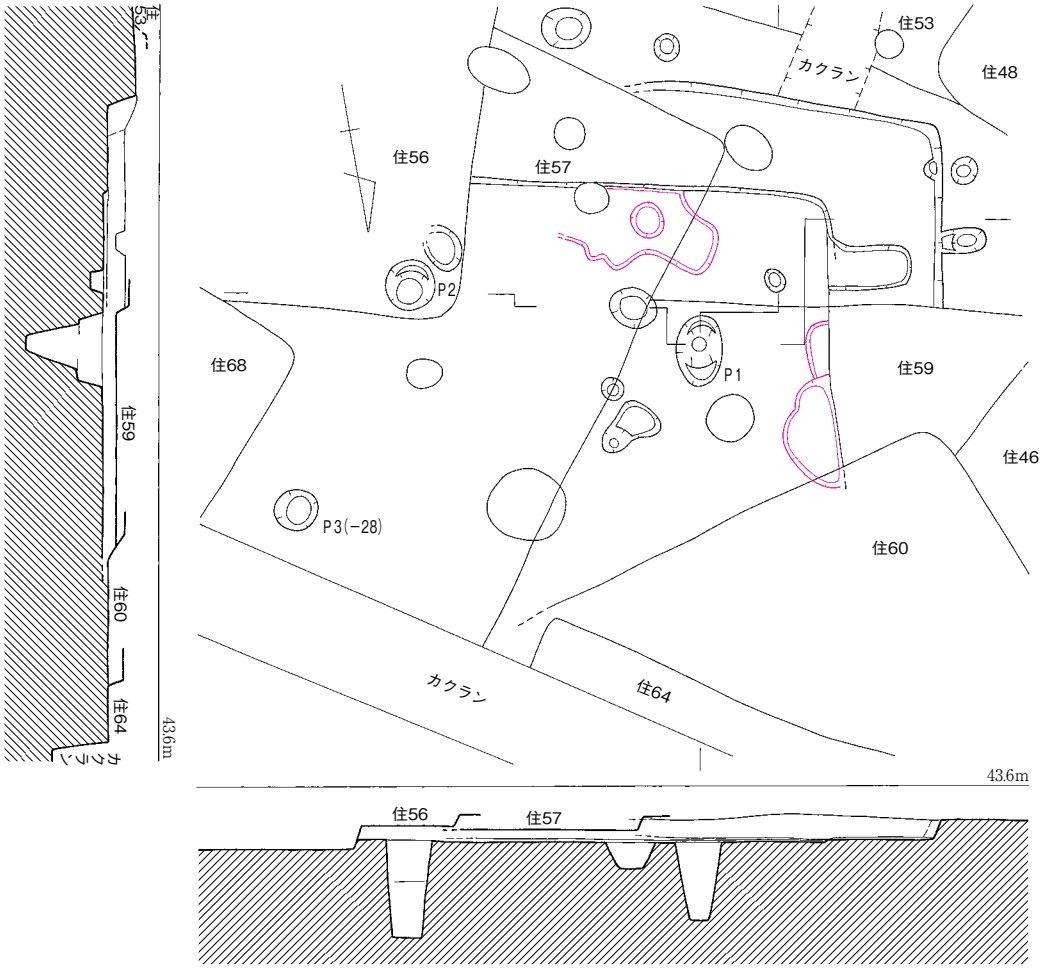
文中写真 21　60 号住居跡出土状況（西から）

出土遺物（第 92 図 20・21）

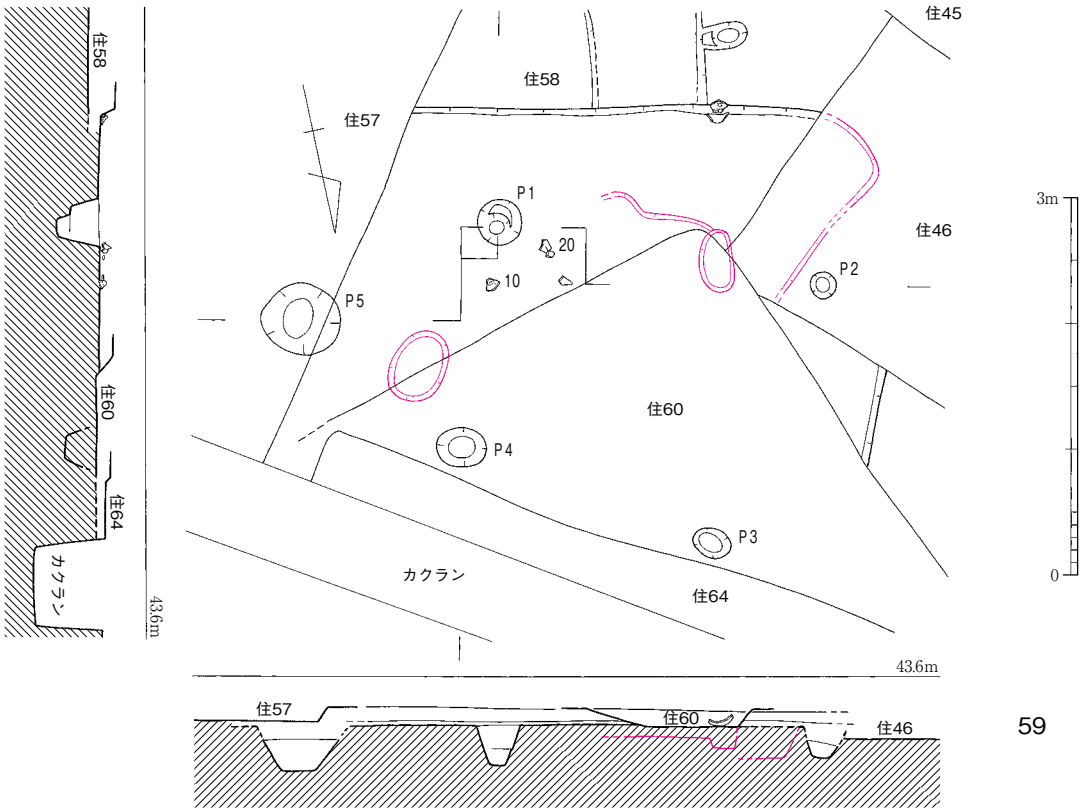
土師器（20･21）　20 は在地系直口壺口縁部である。口縁外端部はナデにより窪む。口縁部内面はハケ後ナデを施す。外面にはススが付着する。色は灰黄褐色。21 は在地系甕口縁部である。色は灰黄褐色。

60 号竪穴住居跡（図版 34、第 94 図）

１区南の中央に位置し、46・54・64 号住居跡に切られ、59 号住居跡を切る。46 号住居跡とは切り



58



59

第 93 図　5 次 1 区　58・59 号竪穴住居跡実測図（1/60）

合い関係を誤って調査し、当住居跡が切られる。また57号住居跡と切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から両住居とも古墳時代前期前半にあたり、前後関係は不明である。当住居跡は上層の住居群に大きく壊され、住居壁は住居南壁と西壁の一部を検出したにとどまる。Ｐ１～３が主柱穴となる４本柱の住居と考えられることから、住居の規模は南北4.2ｍ以上、東西3.4ｍ以上、深さは最大15㎝を測る、方形住居跡である。住居の主軸方位は北から22°西に振れる。

住居中央床面直上及び床面から若干浮いた状態で甕（４・６）・大型鉢（12）が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土に炭が少量混じる。床下掘り込みは住居南西で確認した。

４～６・８は在地系と畿内系の融合した土器で、かつ切り合い関係から、住居の時期は古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版60、第95図２～12）

土師器（２～12）　２・３は在地系直口壺口縁部。２の外面にはススが付着する。色はこげ茶色。３は口縁端部をナデで面取りし、内面には黒斑あり。色は灰黄褐色を呈する。

４～８は甕である。４～６・８は黒斑、４は被熱痕、４・６はススが認められる。色は４～７が灰黄褐色、８が灰橙褐色を呈する。４～６、８は布留系譜の甕である。４は口縁内端部を若干つまみだしている。胴部外面はハケのち一部横ナデ、胴部内面は頸部近くまでケズリを施す。６の胴部外面中位は縦ハケ後横ハケを施す。内面下位と中位２ヶ所に帯状に炭化物が付着する。７は在地系甕口縁部である。

９～12は在地系の外反口縁鉢である。11・12は被熱痕、10～12はススが付着する。色は９・11が灰黄褐色、10が黄茶褐色、12が黄褐色を呈する。10の体部外面は粘土生乾き状態でハケを施したため、ハケ端部が盛り上がっている。11の体部外面は工具ナデ後ナデ、内面は工具ナデ後に７㎜前後の細かなケズリを施す。12は復元口径33㎝、復元器高24.9㎝を測る大形品で、底部は尖底気味である。内面は丁寧なナデを施している。内面一部は黒化する。

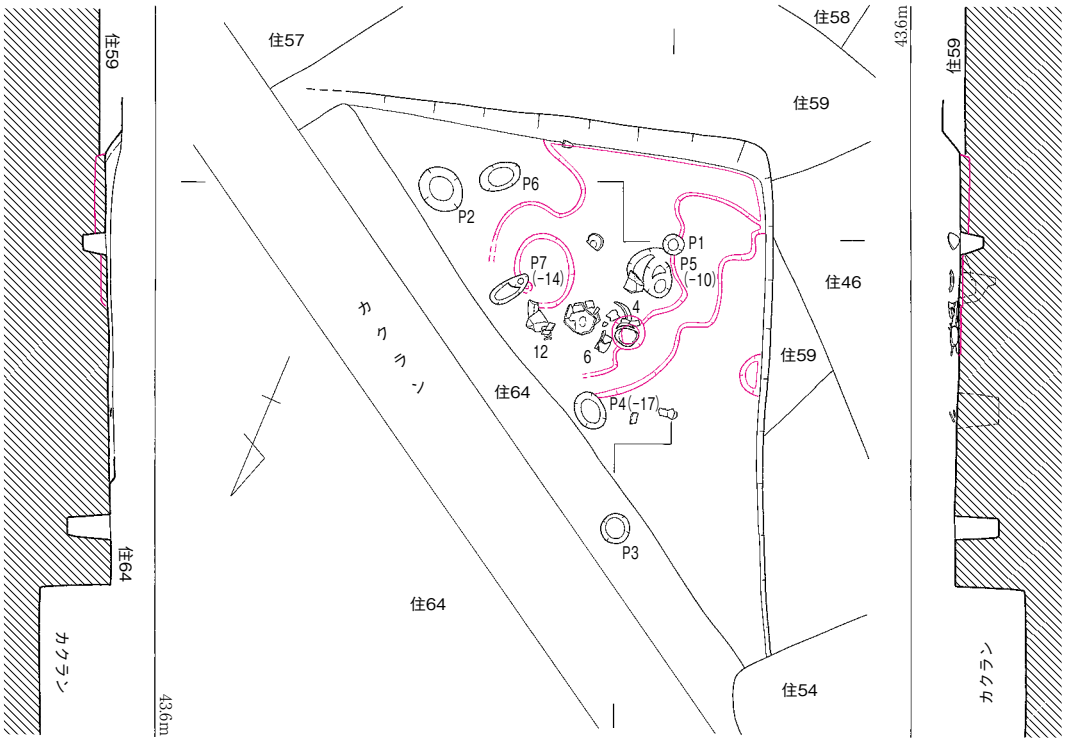
61号竪穴住居跡（図版34・35、第94図）

１区中央の南西に位置し、62・65号住居跡を切る。64号住居跡とは切り合い関係を誤って調査し、出土土器から当住居の方が64号住居跡に切られると思われる。住居中央の南北にかけて撹乱により大きく壊される。住居の規模は東西3.41ｍ、南北3.05ｍ、深さは最大27㎝を測る平面形はやほぼ正方形の小型住居である。住居の主軸方位は北から20°東に振れる。

床面ではピットを10基検出し、位置と深さからＰ３ないしはＰ６、Ｐ２、Ｐ９と南西部は撹乱により失われた柱穴が主柱穴となる４本柱の住居になると思われる。住居北東のＰ５は土師器大型甕底部（５）をピット床面に設置したものであるが、47号住居跡炉跡のように埋土に炭が充填されていないこと、住居北東に偏ることから機能は不明である。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。住居西側で床下掘り込みを確認した。

文中写真22　61号住居跡Ｐ５（東から）

出土土器は在地系土器が主体であることから、古墳時代前期前半に位置づけられる。



60

61

第 94 図　5 次 1 区　60・61 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第 96 図１～９）

土師器（１～９）　１～５は在地系甕である。５は黒斑、３はススが認められる。色は１が暗褐色、２が黄橙色、３・５が灰黄褐色、４が暗茶褐色を呈する。１・２は口縁端部をナデで面取りし、２の内面には粘土継ぎ目痕が残る。３の口縁端部は上方に拡張させている。５はＰ５内底面に設置された大型甕底部で、先述したように土器炉に転用された可能性がある。内面はハケのち一部ケズリを施す。内面には炭化物が付着する。

６・７は在地系外反口縁鉢である。６は口縁部が直立し、復元口径 12.8cmを測る。色は灰黄褐色。７は口縁部の器壁が厚く、体部外面はケズリを施す。体部内面はハケを施す。外面には黒斑、被熱痕及びススが認められる。色は黄橙褐色。８は手づくね土器である。色は白黄褐色～橙褐色。９は口縁部が直立する古墳後期の高坏坏部か。外面下位はケズリ、後内外面ミガキを施す。色は暗褐色を呈する。混入品。

62 号竪穴住居跡（第 98 図）

１区中央の南西壁際に位置し、41・61 号住居跡に切られ、42 号住居跡を切る。また 65 号住居跡とも切り合い関係を持つと考えられ、出土土器からいずれも古墳時代前期の住居となるため、前後関係は不明である。住居大半が調査区外で、調査区内では北・南壁の一部を検出したにとどまる。住居の規模は南北 3.9 m、東西 3.9 m以上、深さ最大 23cmを測る方形住居である。住居主軸方位は北から 15° 東に振れる。

南壁に幅 95cm、高さ最大５cmのベッド状遺構を付設する。竪穴部床面ではピット２基検出し、いずれも主柱穴となる２本柱住居になると思われる。炉跡は検出できなかった。床面直上で台石が出土した。住居埋土は暗灰茶褐色粘質土である。住居床下掘り込みは４ヶ所で確認した。

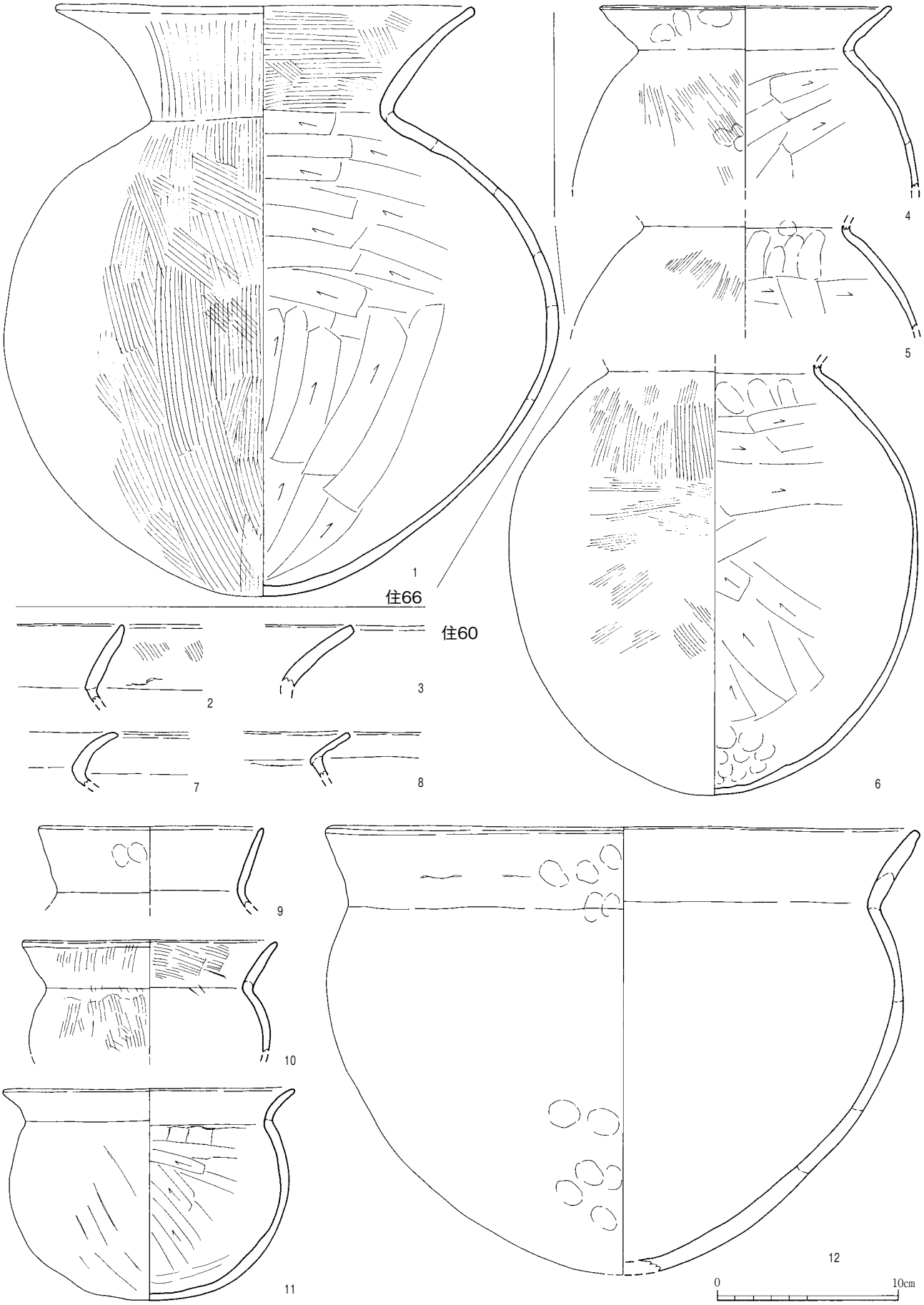
切り合い関係及び出土土器は在地系土器が主体であることから、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（第 96 図 10・11）

土師器（10・11）　10・11 は床下掘り込みからの出土。10 は在地系甕口縁部である。内外面のハケは、口縁部を先に施した珍しいもの。口縁端部は工具ナデを行う。色は灰黄褐色。11 は在地系高坏口縁部。色は黄褐色である。

64 号竪穴住居跡（図版 35、第 99 図）

１区中央の南寄りに位置し、70 号住居跡に切られ、60・61・65 号住居跡を切る。当住居下層には 85 号住居跡が存在する。先述のとおり、54・61 号住居跡とは切り合い関係を誤っており、当住居が新しい。住居南側の東から西側にかけて撹乱を受けるが、住居規模は南北 4.9 m、東西は南壁では 5.7 mを測るが、径 40cm前後のカマド焼面と思われる焼土の広がり（アミ）の南西で完形の土師器甑（第 97 図１）が出土しているが、南壁で検出できた西壁の可能性がある段差より西側にはみ出す。南西で検出した段差が西壁とすると、土師器甑がどの住居にも属さないことになるため、西壁はすべて削平されており、南壁で検出した段差は住居床下掘り込みに伴う段差としておきたい。しかし通常焼面の手前に土師器甑が存在することが多く、焼面と土師器甑との位置関係は疑問が残る。住居の深さは、最大７cmほどの東西に長い長方形住居である。住居主軸方位は北から 58° 西に振れる。



第 95 図　5 次 1 区　60・66 ①号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

床面ではピット13基検出し、位置・深さからＰ１～４が主柱穴の４本柱の住居となるが、東西の主柱穴間が４ｍを超すことから、少なくとも一段掘り込みがあるＰ５・６・９で補助柱を構成していた可能性がある。床面直上から土器が出土し､床下掘り込みからもそれ以上の量の土器が出土したが、床下掘り込み出土土器の一部は当住居下層住居である85号住居跡に伴う可能性がある。

住居埋土は灰褐色粘質土である。床下掘り込みは南壁部分のみ検出した。覆土より緑泥片岩製の管玉（第141図19）が出土した。

切り合い関係及び13～17の土師器甕の頸部内面の稜はしっかりするが、５世紀後半の土師器甕と比べ、全体的な成形が雑な印象であるため、６世紀前半でも古相に位置づけられよう。

出土遺物（図版60、第96図12～27、第97図１）

土師器（12～27）　12は壺頸部である。外面はミガキ、内面はナデで調整する。内面には粘土継ぎ目痕と指押さえ痕が明瞭に認められる。外面にはススが付着する。色は橙褐色。13～17は甕である。14・15は黒斑、13～15は被熱痕、14はススが認められる。色は13・14・16が灰黄褐色、15・17が暗黄褐色である。13は器壁が厚く、口縁端部を丸く収める。14は直立する口縁部で、胴部内面はケズリ後縦ナデを施す。15は頸部の締まりがなく、弱く外反する口縁部を持つ大型品で、胴部外面は粗いハケを施す。18・19は甑である。口縁端部はナデにより内端部のみ窪む。外面には細かいハケ後ナデを施した後一部スリップを塗布した可能性があるが、スリップは全体的に付着していないため、施したかどうかは不明である。色は茶褐色である。19は把手で、内面は把手貼り付け後にケズリを施す。色は白黄褐色。20は高坏脚部である。色は灰黒色。

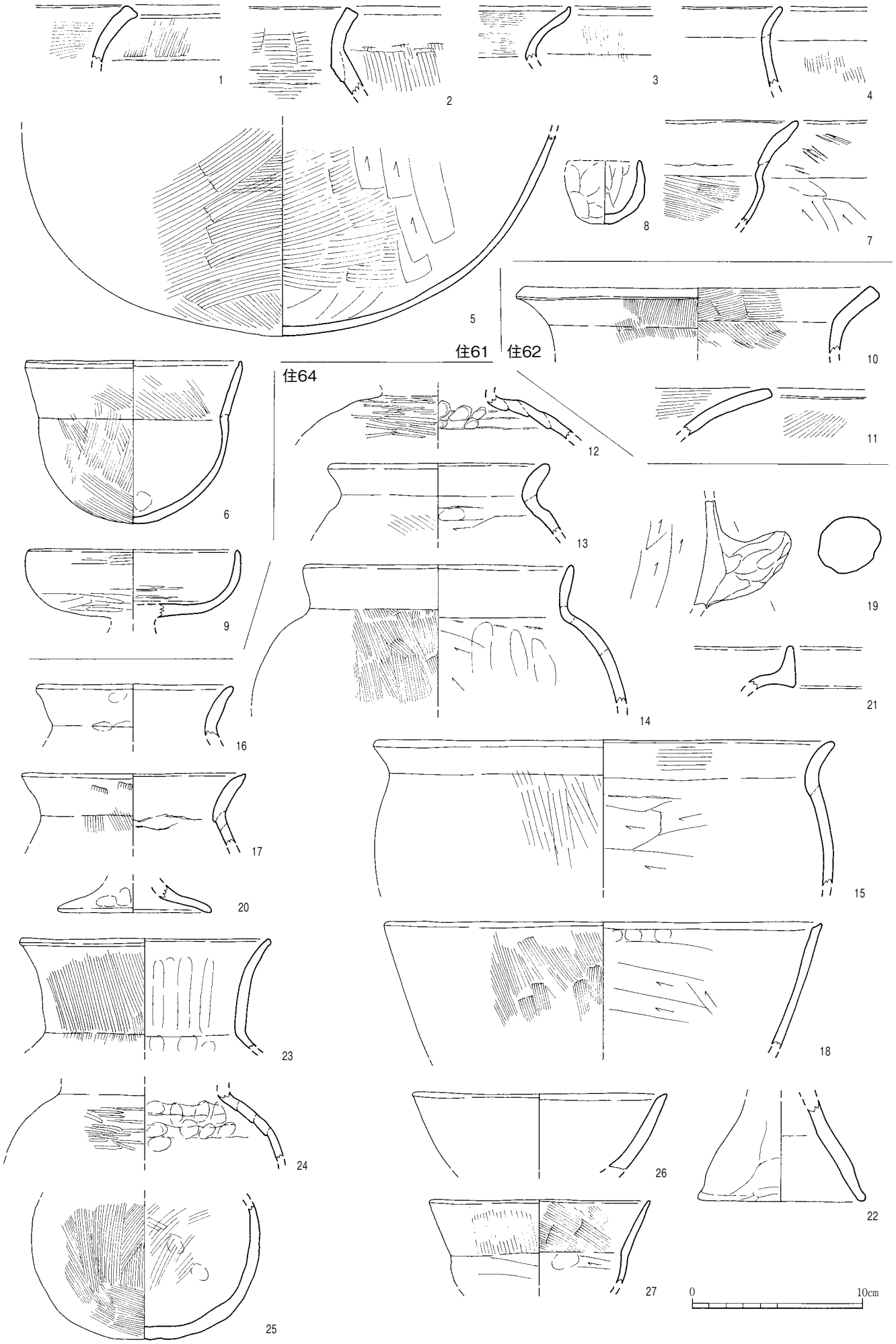
21・22は古墳前期土器で、混入品。21は在地系二重口縁壺口縁部で、口縁部は直立する。色は暗黄茶褐色。22は器台下部片。色は灰黄褐色。

床下掘り込み出土土器（23～27）　23は在地系直口壺口縁部で、外面の一部にススが付着する。内面は縦ナデ後横ナデを施す。色は茶褐色。24は古墳後期壺頸部で、外面はミガキ、内面には粘土継ぎ目痕と指押さえ痕が明瞭に残る。色は褐色。25は古墳後期小型甕の球状を呈する胴部で、外面は細かいハケ、内面は粗いハケを施す。外面には黒斑、被熱痕、内面には炭化物痕が認められる。色は暗黄褐色。26は古墳後期高坏口縁部で、口縁端部は弱く外反させるもの。色は茶褐色。27は在地系外反口縁鉢で、体部外面は工具ナデ、 体部内面はケズリを施す。口縁部内面は細かいハケを施す。外面にはススが付着し､色は橙褐色。23･27は当住居跡下層の85号住居跡に伴う可能性がある。

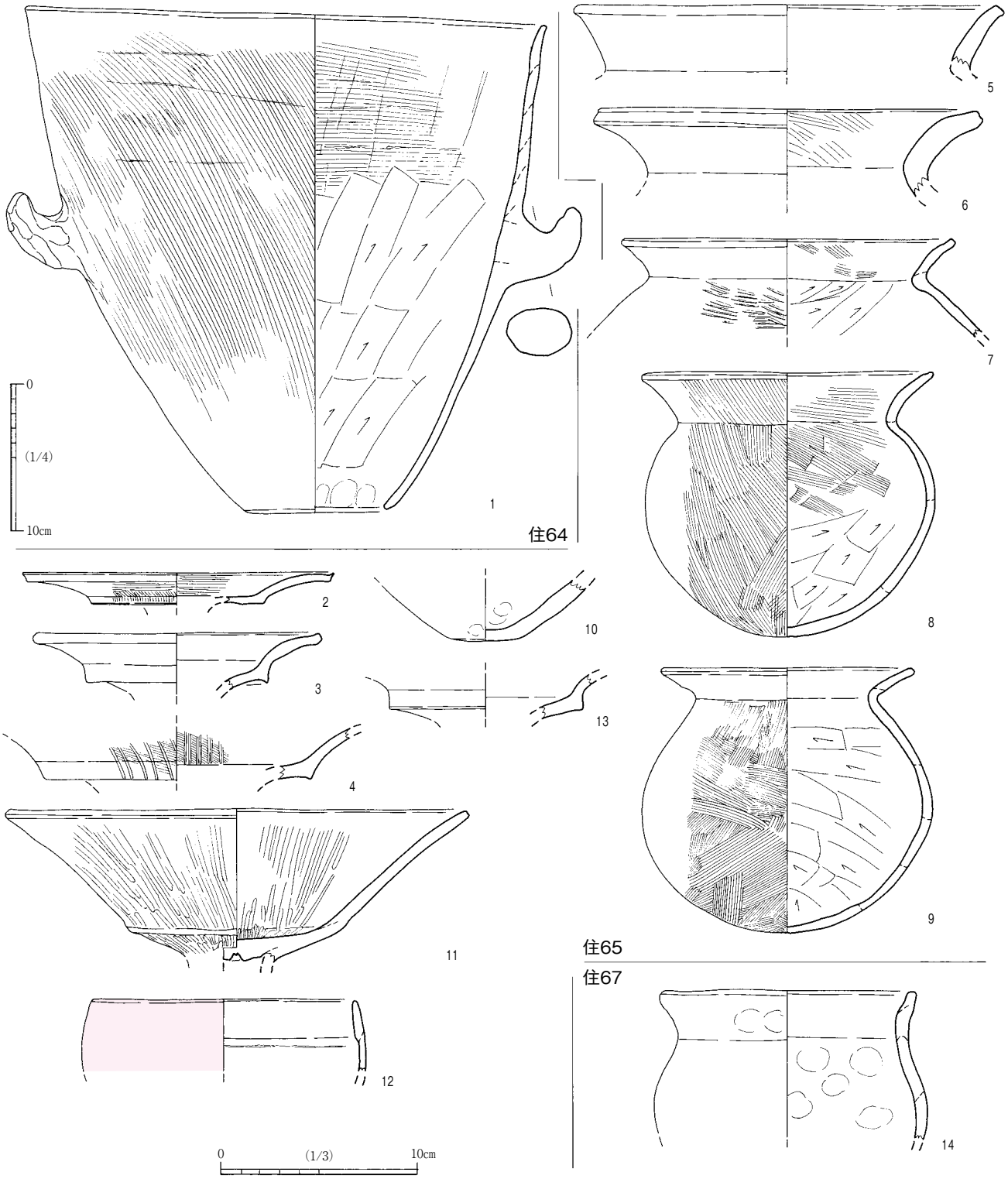
当住居跡出土土器か（第97図１）　１は完形に近い土師器甑で、先述したように当住居に伴う可能性が高いもの。復元口径26.8㎝、復元底径7.3㎝、復元器高25.4㎝を測る。外面にはハケを施し、口縁部と底部は後に横ナデを施す。内面はハケ後体部中位以下にはケズリを施す。内外面には粘土継ぎ目痕が残る。外面には黒斑、ススがあり、色は灰黄褐色。

65号竪穴住居跡（図版35・36、第98図）

１区中央の南西寄りに位置し、61・64号住居跡に切られ、66号住居跡を切る。また62号住居跡と切り合い関係を持つと思われるが、前述のとおり切り合いの前後関係は不明である。住居内は鍵型に撹乱を受けるが、住居の規模は南北5.03ｍを測り、東西幅は最大6.25ｍ以上となるが、その場合は西壁が撹乱を挟んで北と南で検出できるはずであるため、西壁を掘り過ぎ、掘り失った可能性があるため、東西幅は短くなる可能性が高い。竪穴部の深さは最大27㎝を測る、東西に長い長



第 96 図　5 次 1 区　61・62・64 ①号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

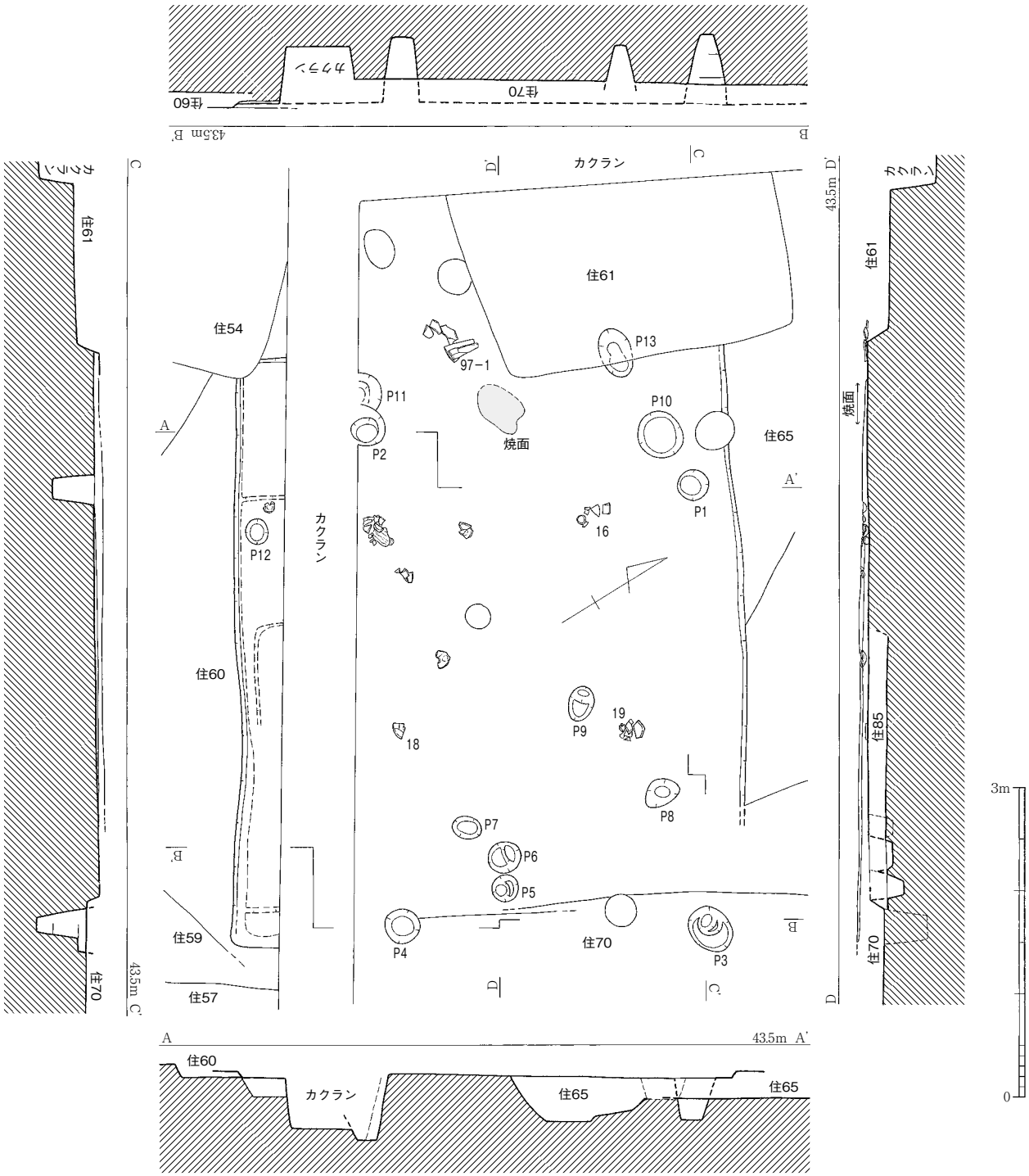


第 97 図　5 次 1 区　64 ②・65・67 号竪穴住居跡出土土器実測図（10 は 1/4、他は 1/3）

方形住居である。住居の主軸方位は北から 21° 西に振れる。

住居東壁全面と北壁の一部に地山削り出しのベッド状遺構を付設する。なお、屋内土坑西の段差もベッド状遺構になる可能性があるが、高さが３cm前後と低いこと、またベッド状遺構の壁の傾斜も緩やかであることから、ベッド状遺構ではないと判断した。東側のベッド状遺構は幅 90cm、高さは６cmを測り、ベッド状遺構直上で台石と床面からやや浮いた状態で畿内系二重口縁壺口縁部（３）が出土した。竪穴部南壁には明灰褐色砂質土を埋土とする屋内土坑を設ける。竪穴部床面ではピットを７基検出し、位置からＰ１・２が４本柱の東側の主柱穴列、ないしはＰ１・２で２本柱

第 98 図　5 次 1 区　62・65 号竪穴住居跡実測図（1/60）



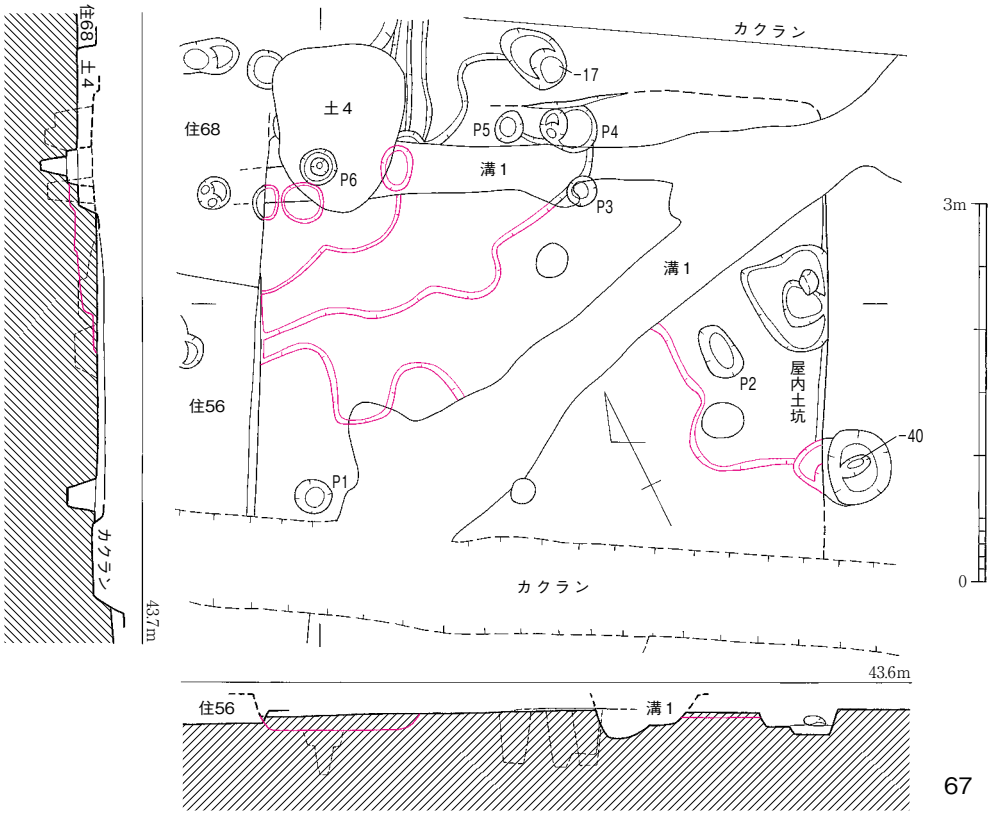
第 99 図　5 次 1 区　64 号竪穴住居跡実測図（1/60）

の主柱穴を構成するという、２・４本柱の住居いずれの可能性がある。またＰ３・４も深さがあるため、補助柱を構成していた可能性もある。住居東側の床面直上で土師器甕（８・９）が出土した。住居埋土は暗灰茶褐色粘質土である。住居床下掘り込みは２ヶ所確認した。覆土から打製石鏃（第 140 図１）が出土した。

出土土器は畿内系が主体であること及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 60、第 97 図２～ 13）

土師器（２～ 13）　２～４は畿内系二重口縁壺口縁部である。色はいずれも黄褐色である。２は口縁部を水平近くまで外反させるもので、口縁上端部は若干つまみ出す。外面はハケ後ミガキ、内面はミガキを施す。内面には黒斑あり。３の内外面は横ナデで調整である。口縁上端部は若干つまみ



第 100 図　5 次 1 区　66・67 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出している。4は内外面ハケ後縦ミガキを一定間隔で施し、内面の縦ミガキは２本１単位で施す。5・６は在地系で、いずれも色は灰黄褐色。２～４、13という当住居跡から畿内系二重口縁壺が多く出土することは特徴的である。５は甕口縁部の可能性もあり、外面にはススが付着する。６の口縁端部はナデで面取りし、口縁内端部はナデで窪む。器壁は厚い。

７～10は甕である。７・10は黒斑、８・９は被熱痕、８・９はススが認められる。色は７・８・10が灰黄褐色、９が黄橙褐色を呈する。７は庄内系譜のもので、口縁端部を肥厚させる。胴部外面は平行タタキのち左上がりタタキを施す。内面は頸部までケズリを施す。８・９は完形品。８はどちらかというとＶ様式系譜のもので、口径15cm、器高13.6cmを測る。外面全体縦ハケを施し、長めの口縁部のみ後横ナデを施す。内面は胴部中位以下にはケズリを行い、中位以上はハケ後ナデを施す。９は布留系譜の、やや重心が下がった位置にある寸胴の胴部を持つもので、口径14.8cm、器高13.6cmを測る。胴部外面は横ハケ後上位と下位は斜めハケを施す。胴部内面は頸部から下がった位置までケズリを施す。内面には炭化物が付着する。色は黄橙褐色。10は弥生後期の凸レンズ底で、わずかに平底を残す。

11は長い口縁部が逆「ハ」の字状に開く庄内系譜の高坏坏部で、復元口径23.8cmを測る。内外面縦方向のミガキを施す。12は口縁部が内湾気味の在地系直口鉢で、外面にはスリップを塗布する。色は黄褐色を呈する。13は畿内系二重口縁壺口縁部で、内外面はナデ調整である。色は灰黄褐色。床下掘り込み出土。

66号竪穴住居跡（図版36・37、第100図）

１区中央の南西寄りに位置し、35・65・84号住居跡に切られる。上層の竪穴住居により、住居南側と北東側を大きく壊される。北壁は調査では検出しているが、図化し忘れたため、破線で復元している。住居の規模は南北4.6ｍを測り、東西4.2ｍ、深さ最大22cmを測るほぼ正方形の住居である。住居の主軸方位は北から35°東に振れる。

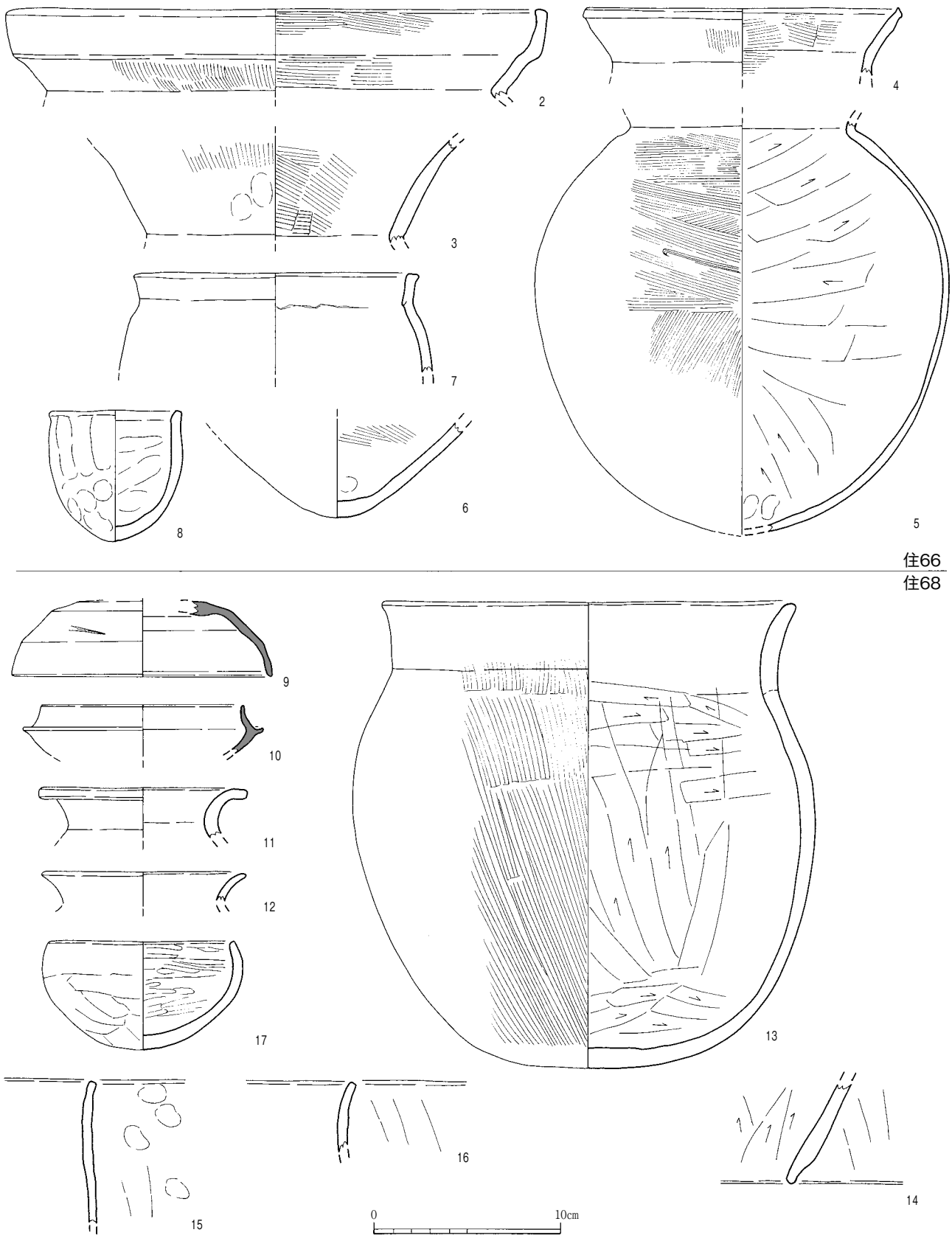
住居西壁中央やや北寄りに方形の屋内土坑を付設し、床面ではピット９基検出した。位置・深さからＰ１・２が主柱穴の２本柱の住居となる。炉は確認できなかった。住居中央の床面直上で台石、屋内土坑から土師器甕（５・６）、住居中央東寄りの床面直上で土師器直口壺（第95図１）が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みは７ヶ所確認した。

在地系と布留系が共伴すること及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版60、第95図１・第101図２～８）

土師器（第95図１、第101図２～８）　第95図１はほぼ完形の畿内系直口壺で、口縁部が「ハ」の字形に大きく開き、底部は尖底気味である。口径23.4cm、器高32.4cmを測る。外面全体は縦ハケ後、胴部は粗い斜めハケを施し、口縁部は横ナデを施す。内面は頸部までケズリを施し、口縁部内面はハケを施す。外面には黒斑あり。色は外が灰黄褐色～淡橙褐色、内が灰褐色を呈する。

第101図２・３は在地系壺で、色はいずれも灰黄褐色。２は在地系二重口縁壺で、復元口径29cmを測る。口縁部は直立し、内外面ハケ後ナデを施す。３は在地系直口壺である。外面はハケ後ナデを施す。４～６は甕である。５・６はススが認められる。色は４・６が暗黄茶褐色、５が灰黄褐色を呈する。４は在地系甕口縁部で、口縁端部を上下に若干拡張させる。５・６は屋内土坑出土。５は布留系譜の胴部で、器壁は薄い。外面中位以上は縦ハケ後横ハケ、胴部内面は頸部までケズリ



第 101 図　5 次 1 区　66 ②・68 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

を施す。内面底部には炭化物が付着する。６は底部が突出する器形である。内面には炭化物が付着する。７は口縁端部をナデで面取りする直口鉢で、外面は被熱による剥離がある。外面にはススも付着する。８は蛸壺で、口縁端部は工具ナデを施す。色は灰黄褐色を呈する。混入品。

67 号竪穴住居跡（図版 37、第 100 図）

１区中央の南東に位置し、４号土坑、１号溝に切られ、56・68 号住居跡を切る。住居内は１号溝と撹乱により、住居壁は東壁の一部及び西壁は下端の一部のみ、北壁はほんの一部分のみを検出したにとどまる。住居の規模は東西 4.55 m、南北 3.55 m以上、深さ１㎝程度と残りの悪い方形住居である。住居東壁には屋内土坑を付設し、床面ではピット６基検出した。位置からＰ１・６は西側の主柱穴列の可能性があるが、東側の主柱穴列は検出できなかったため、主柱穴配置は確定できなかった。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みは２ヶ所確認した。

切り合い関係及び出土土器から、古墳時代後期に位置づけられる。

出土遺物（図版 60、第 97 図 14）　床下掘り込み出土の土師器甕である。内外面は指押さえ痕が残る。外面には強い被熱痕とススが認められる。色は褐色を呈する。

68 号竪穴住居跡（図版 37、第 102 図）

１区中央の南東寄りに位置し、67・71 号住居跡、４号土坑に切られ、56・57 号住居跡を切る。住居中央は撹乱、住居南東部と北西部は上層の竪穴住居跡に壊されるが、住居の規模は南北 4.5 m、東西 4.4 m、深さ深さ 10㎝を測る、ほぼ正方形の住居である。住居主軸方位は北から 40° 東に振れる。

床面ではピット 11 基検出し、位置・深さからＰ１～４が主柱穴と思われる４本柱の住居であるが、位置・深さからＰ８・11 も主柱穴となりうるピットであり、住居建て替えを示す可能性がある。住居東壁際の一部のみ壁周溝と思われる溝を検出したが、北東壁ラインと合わない及び壁周溝はこの部分のみの確認のため、断定は出来ない。また撹乱を挟んで住居北側の床面直上で土師器甕(12)、完形の土師器碗（16）などの土器及び炭化材が出土した。住居埋土は灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みは住居全面で確認した。

８・９の須恵器坏及び切り合い関係から、６世紀後半に位置づけられる。

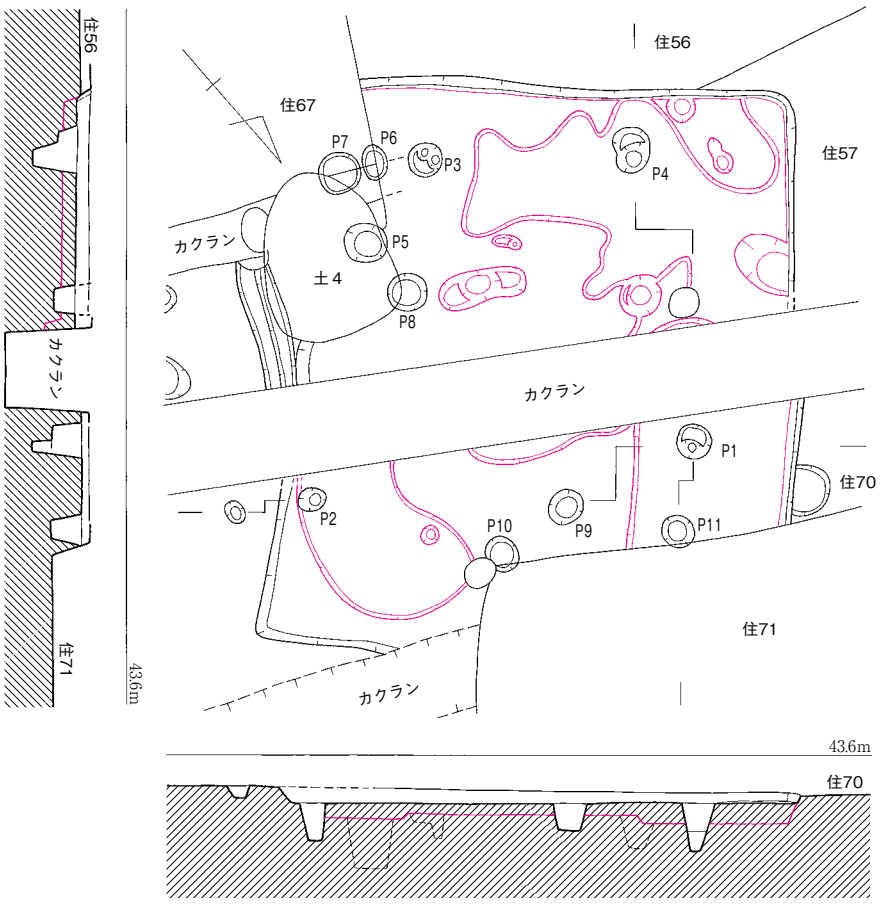
出土遺物（図版 61、第 101 図９～17）

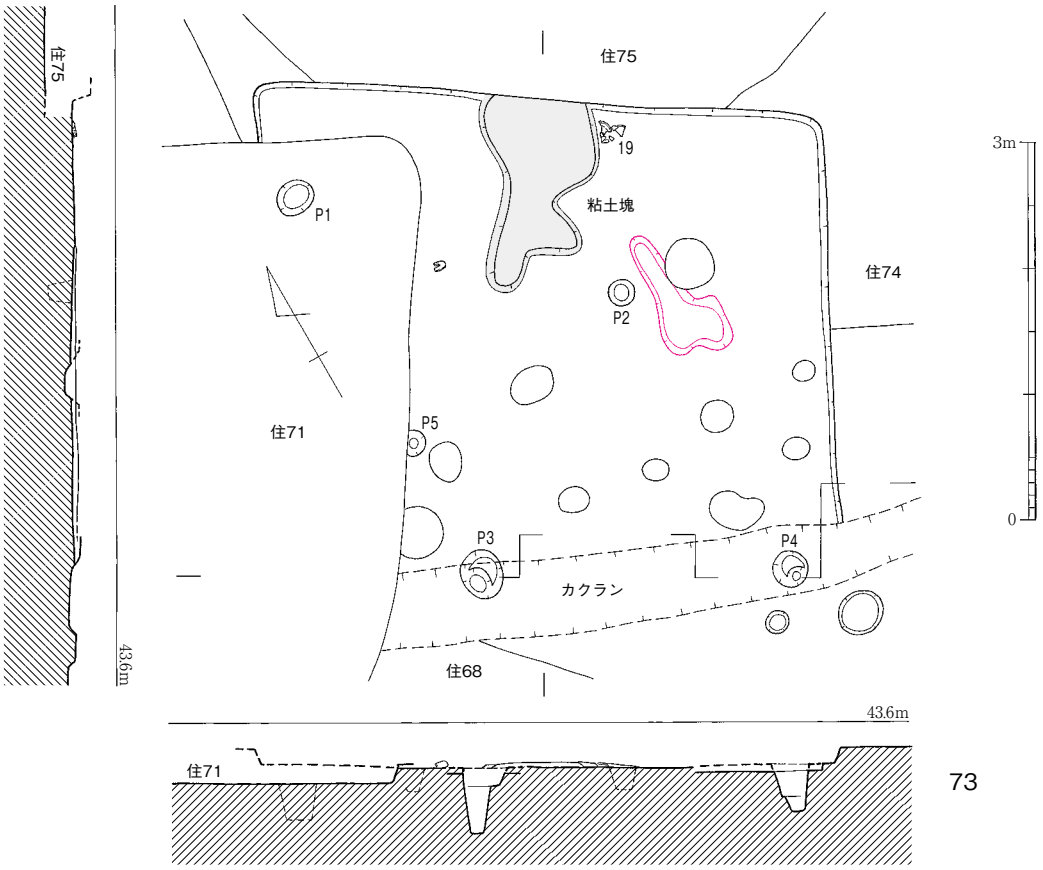
須恵器（９・10）　９は坏蓋で、復元口径 14㎝を測る。天井部のみヘラケズリを施し、外面中位にはヘラ記号が１本線で残るが、小片のため全容は不明である。外面には自然釉が付着する。色は灰色。10 は坏身で、 復元口径 11㎝を測る。色は灰色。

土師器（11 ～ 17）　11 ～ 13 は甕である。11・12 は強く外反させた口縁部である。11 の口縁端部はナデで面取りする。色は灰黄褐色。12 の色は暗黄茶褐色。13 はくびれ部がほとんどなく、長い口縁部を持つ大型甕で、復元口径 22.4㎝、復元器高 25.2㎝を測る。胴部内面は横ケズリのち縦ケズリを施す。外面には黒斑・ススがあり、内面には薄く炭化物が付着する。色は黄褐色。

文中写真 23　68 号住居跡出土状況（北西から）

14・15 は甑である。14 は甑底部で、外面は工具ナデ、内面はケズリを施す。外面には黒斑あり、色は暗褐色。床下掘り込み出土。15 は器壁が薄いが甑となるか。外面は工具ナデのちナデを施し、外面にはスス、内面には炭化物が付着する。色は





第 102 図　5 次 1 区　68・73 号竪穴住居跡実測図（1/60）

暗黄茶褐色。16 は直口鉢口縁部か。外面には黒斑あり。色は茶褐色。17 は口縁部が若干内湾する完形の碗で、口径 20㎝、器高 5.8㎝を測る。外面下位にはケズリを施す。外面上位は磨滅しているが、ミガキを施し、内面は太いミガキを施す。外面には被熱痕及びスス、内面には炭化物が付着する。色は黄褐色を呈する。

70 号竪穴住居跡（図版 38、第 103 図）

１区中央の南寄りに位置し、71 号住居跡に切られ、64・68・80 号住居跡を切る。住居全体は顕著な削平を受けており、西壁南半分は壁下端のみ、住居南東部は図では 68 号住居跡が切るように見えるが、削平により東壁全て失われたもので、68 号住居跡を切る。また住居北東部を 71 号住居跡に壊されるため､北壁と西壁の一部を検出したにとどまる。住居西壁に造り付けカマドを付設する。

床面では７基のピット検出し、位置・深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居となるため、東側主柱穴列で住居の規模を計測すると、住居の規模は主軸長 3.18 ｍ以上、東西 5.25 ｍ以上、深さ最大８㎝を測る。なおＰ７は形態から壁周溝の一部である可能性があること、撹乱を挟んだ南側まで壁が延びないことは確実で、そうすると平面形は東西に長い長方形住居になると思われる。住居主軸方位は北から 61° 西に振れる。住居埋土は灰褐色粘質土である。住居ほぼ全面で住居床下掘り込みを確認した。

１～３・５の土師器甕の頸部内面には稜があり、古相であるが、土師器模倣坏があること及び切り合い関係から、６世紀中頃～後半に位置づけられる。

カマド（図版 38、第 103 図）

住居西壁に付設したカマドである。壁から左袖は 71㎝、右袖は袖先端を掘り失ったが、袖基底部に残る粘土の範囲から 76㎝突出する。燃焼部奥壁から 40㎝手前に河原石を使用した石製支脚を置くが、奥に倒れ、支脚ピットにほとんど入っていない状態で検出したことから、カマド廃絶時に意図的に石製支脚を奥に倒した事例と考えられる。支脚ピットは 20 × 14㎝、深さ６㎝を測り、その前面にはしっかり焼けた硬化面（濃いアミ）とさらにその前面は弱い焼面（薄いアミ）を確認した。カマド袖は暗灰褐色粘土で構築する。

先述のように石製支脚がカマド廃絶時に倒されたと思われることから、カマド廃絶時にカマドを破壊する行為を行っていると思われる。

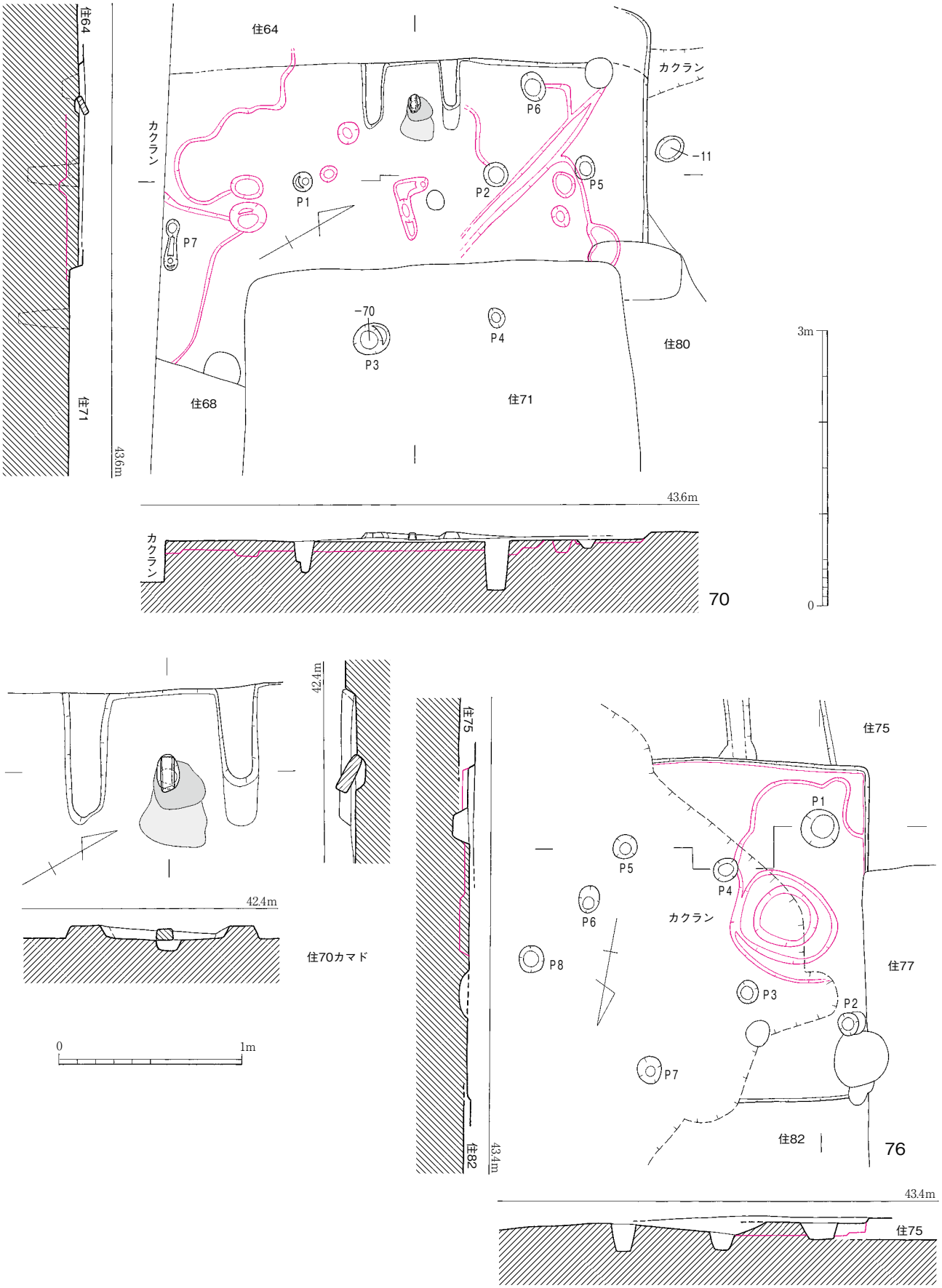
出土遺物（図版 61、第 104 図１～８）

土師器（１～８）　１～３は甕である。１・２はカマド内出土。色は１が灰黄橙色、２・３が黄橙色である。１の胴部外面は工具ナデ、胴部内面はケズリとナデを施す。２・３は内外面ナデで調整する。４は高坏脚柱部で、内面には粘土継ぎ目痕が明瞭に認められる（図版 61）。

５～８は床下掘り込み出土。５は甕口縁部で、色は灰黄褐色。６・７は碗で、色は白黄褐色。６の外面は縦方向の粗いミガキ、内面も粗いミガキを施す。７は内外面ミガキを施す。８は、いわゆる土師器模倣坏口縁部。調整は磨滅のため不明。色は暗黄茶褐色。

71 号竪穴住居跡（図版 38・39、第 105 図）

１区中央の南寄りに位置し、68・70・73・80 号住居跡を切る。住居の規模は主軸長 4.16 ｍ、南北 4.25 ｍ、住居壁は最大深さ 18㎝、残存する袖石上端で計測すると深さ 24㎝を測る。平面形は住



第 103 図　5 次 1 区　70・76 号竪穴住居跡（1/60）、70 号住居跡カマド（1/30）実測図

文中写真 24　71 号住居跡出土状況
（北東から）

居隅が丸味を帯びた隅丸の正方形住居である。住居主軸方位は北から 62° 西に振れる。住居西壁中央には造り付けカマドを付設する。

床面では 11 基のピット検出し、位置・深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居となる。なお住居西側のＰ５・11 は深さもあることから、住居建て替えを示す可能性がある。住居床面から若干浮いた状態で大量の炭化材及び須恵器坏蓋（９）・土師器碗（14）、刀子（第 142 図６）、床面直上で大型紡錘車（第 141 図 17）が出土した。この炭化材は出土状況から不要な建築材を住居埋没時に燃やしたものと思われる。住居埋土は灰褐色粘質土に炭やや多く混じる。住居ほぼ全面で住居床下掘り込みを確認した。出土土器及び切り合い関係から、６世紀後半に位置づけられる。

カマド（図版 38、第 105 図）

住居西壁中央に付設したカマドである。両袖先端部は袖石を用いており、壁から袖石先端まで、左袖は 76㎝、右袖は 92㎝直線的に突出する。なお、両袖石とも粘土を用いた袖（５～７層）とは若干隙間があるが、右袖石は袖石ピットの間にも隙間があり、住居埋土である黒色系土が入っている。このことから、カマド廃絶時に袖石を若干動かしたため、その部分の粘土が外れてしまっている可能性が考えられる。

燃焼部奥壁から 35㎝手前に石製支脚を置き、15 × 13㎝、深さ９㎝と石製支脚より若干大きな規模の支脚ピットで固定する。石製支脚は長さ 22㎝あるが、支脚は床面から 13㎝飛び出している。袖間は支脚部分で幅 47㎝、袖石で幅 41㎝を測る。支脚前面で径 30㎝の硬化面を検出した（アミ）。硬化面の中心は黒と白が混ざった土で、そのまわりは赤くなる。また支脚周辺では土師器甑（12）が床面から浮きかつバラバラな状態で出土した

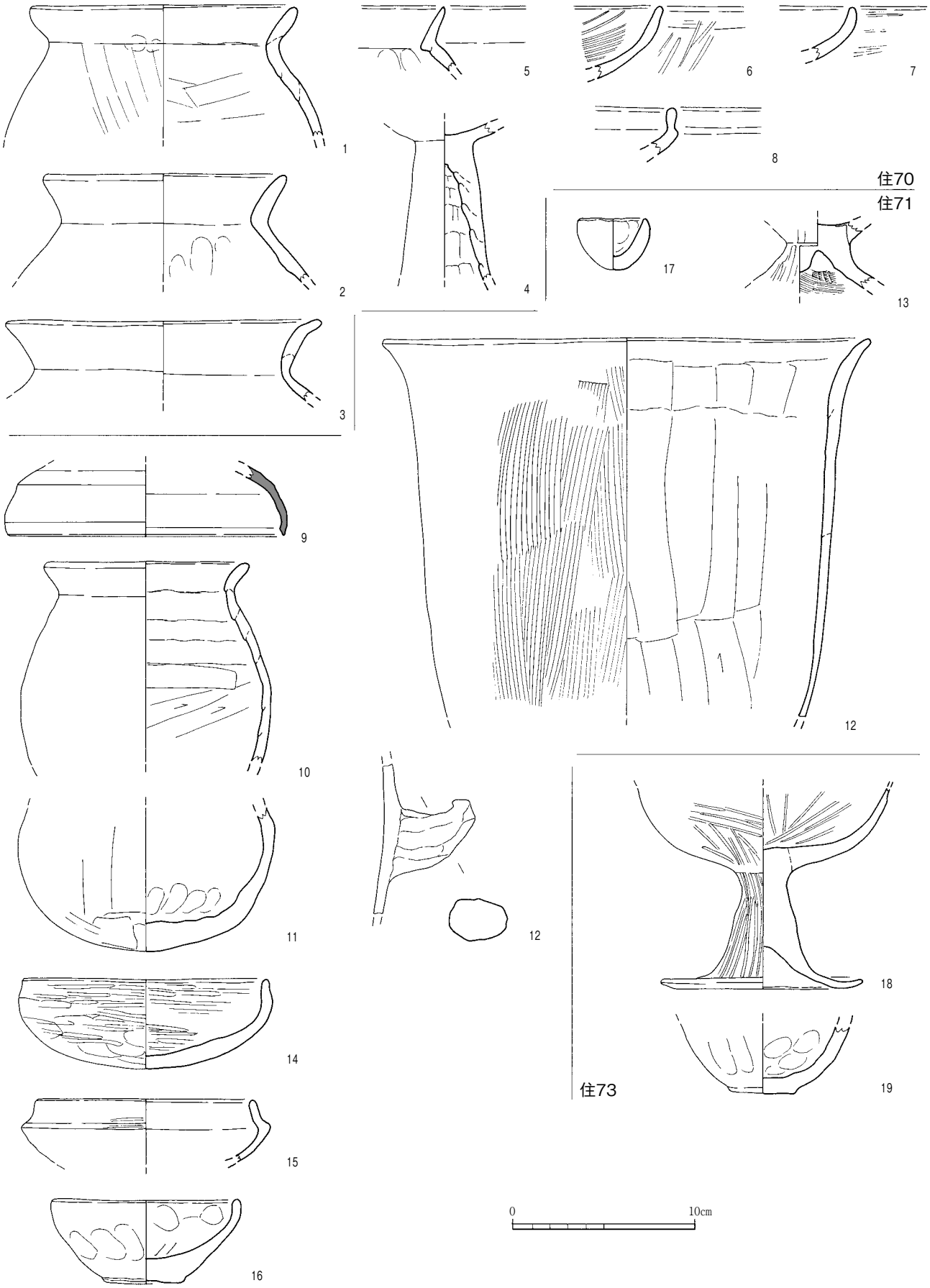
土層では１～４層がカマド天井崩落土で、左袖石を動かしている可能性があること、燃焼部内出土土器の状況から、カマド廃絶時にカマド天井及び袖を大きく壊していると考えられる。

出土遺物（図版 61、第 104 図９～ 18）

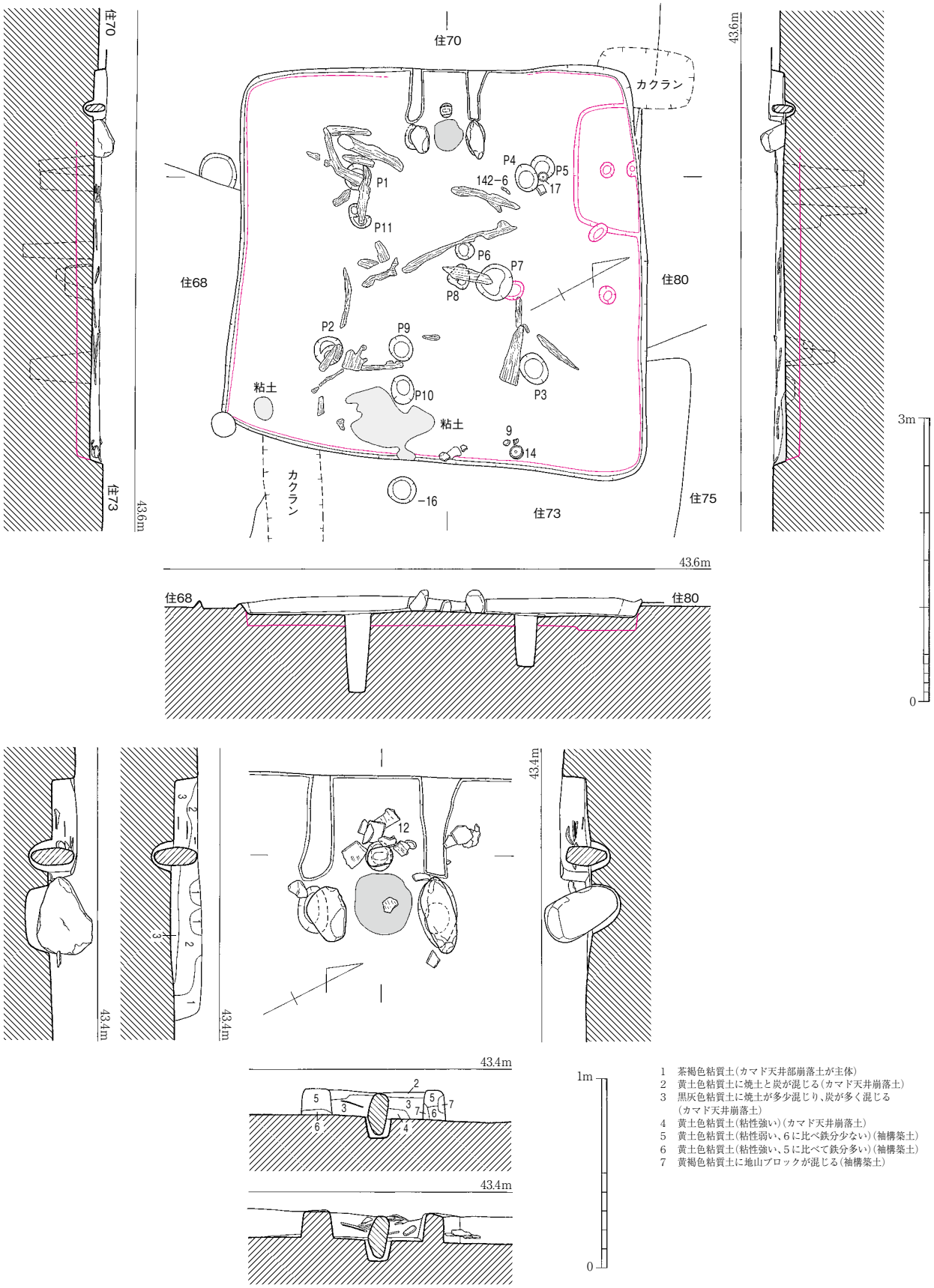
須恵器（９）　９は坏蓋で、口縁端部はナデによる窪む。天井部との境は回転ヘラケズリのわずかな段が付き、稜を意識している可能性がある。外面には自然釉が付着する。色は灰色。

土師器（10 ～ 18）　10・11 は甕である。10 は長胴の胴部に口縁部が短く外反する。外面は顕著な被熱を受けるが、ナデを施したものか。内面胴部中位以下はケズリを施す。胴部内面には粘土継ぎ目痕が残る。色は茶褐色。11 の外面は工具ナデ後ナデを施し、内面はナデ調整である。外面には黒斑があり、色は灰黄褐色。12 は甑で接合しなかった把手は左下に図化した。12 は復元口径 27㎝を測り、ほぼ直立する胴部からそのまま口縁部が外反する。外面はハケ、内面はケズリを施し、その後口縁部内外面は横ナデを施す。内外面には被熱痕とススがあり、色は灰黄褐色。

13 は高坏脚部である。外面は縦方向のヘラナデ、内面はハケで絞りを行う。色は橙褐色。14 はほぼ完形の碗で、口径 13.6㎝、器高５㎝を測る。口縁部は直立し、調整は内外面下位にケズリ、後内外面全体にミガキを施す。外面には被熱痕あり。色は黄橙色。15 は碗のいわゆる土師器模倣坏で、



第104図　5次1区　70・71・73号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



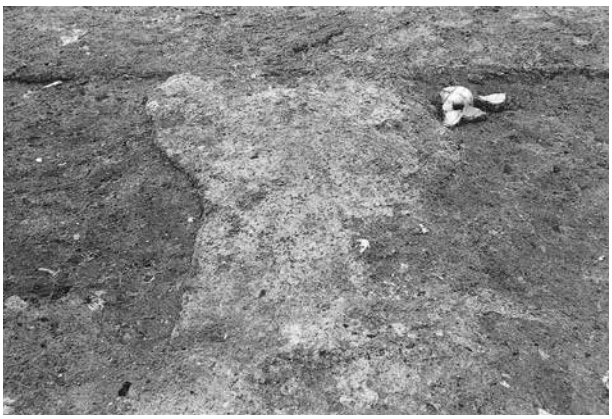
第105図　5次1区　71号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

内外面摩滅するが、内外面ミガキを施したものか。色は黄橙褐色。16はほぼ完形の鉢で、口径10.4cm、底径4.6cm、器高4.6cmを測る。底部は平底で、調整は内外面ナデ調整を施すが、内面底部には工具痕あり。色は黄褐色。17はほぼ完形の手づくね土器で、口径3.8cmを測る。色は黄橙色。

第 106 図　5 次 1 区　74・77 号竪穴住居跡実測図（1/60）

73 号竪穴住居跡（図版 39、第 102 図）

1 区中央の南東寄りに位置し、71 号住居跡に切られ、74・75 号住居跡を切る。住居南壁は撹乱で失われており、西壁の大部分も 71 号住居跡により壊される。住居の規模は東西 4.5 m、南北 3.7



文中写真 25　73 号住居跡粘土塊
（南西から）

m以上、深さ最大２㎝前後の残りの悪い方形住居である。住居主軸方位は北から 30° 東に振れる。

住居北壁中央に 153 × 93㎝の範囲に黄褐色粘土が広がるが、焼面及び袖も検出できなかったことからカマドではなく、粘土の役割は不明である。

床面ではピット５基検出し、位置・深さＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居と思われるが、主柱穴配置がかなり歪むため、疑問が残る。床面直上から土師器高坏（19）と完形の蛸壺が出土したが、蛸壺は整理途中で行方不明になっている。住居埋土は灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みは１ヶ所確認した。

出土土器及び切り合い関係から、６世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（第 104 図 18・19）

土師器（18・19）　18 は碗状の坏部を持つ高坏で、脚部との接合は付加法と考えられる。坏部内外面粗いミガキを行うが、脚裾部外面は縦ミガキを施す。色は黄橙色。19 は鉢で、底部は高台状の平底になる。色は灰黒色。

74 号竪穴住居跡（図版 39・40、第 106 図）

１区中央の東壁際に位置し、73・75 号住居跡に切られる。当住居は全体が削平を受けており、南壁は一部のみ検出でき、また 73・75 号住居跡により住居西側が大きく壊される。住居の規模は東西 3.85㎝以上、南北 5.43 m、竪穴部の深さは最大 11㎝を測る、おそらく東西に長い長方形住居になると考えられる。住居の主軸方位は北から 63° 西に振れる。

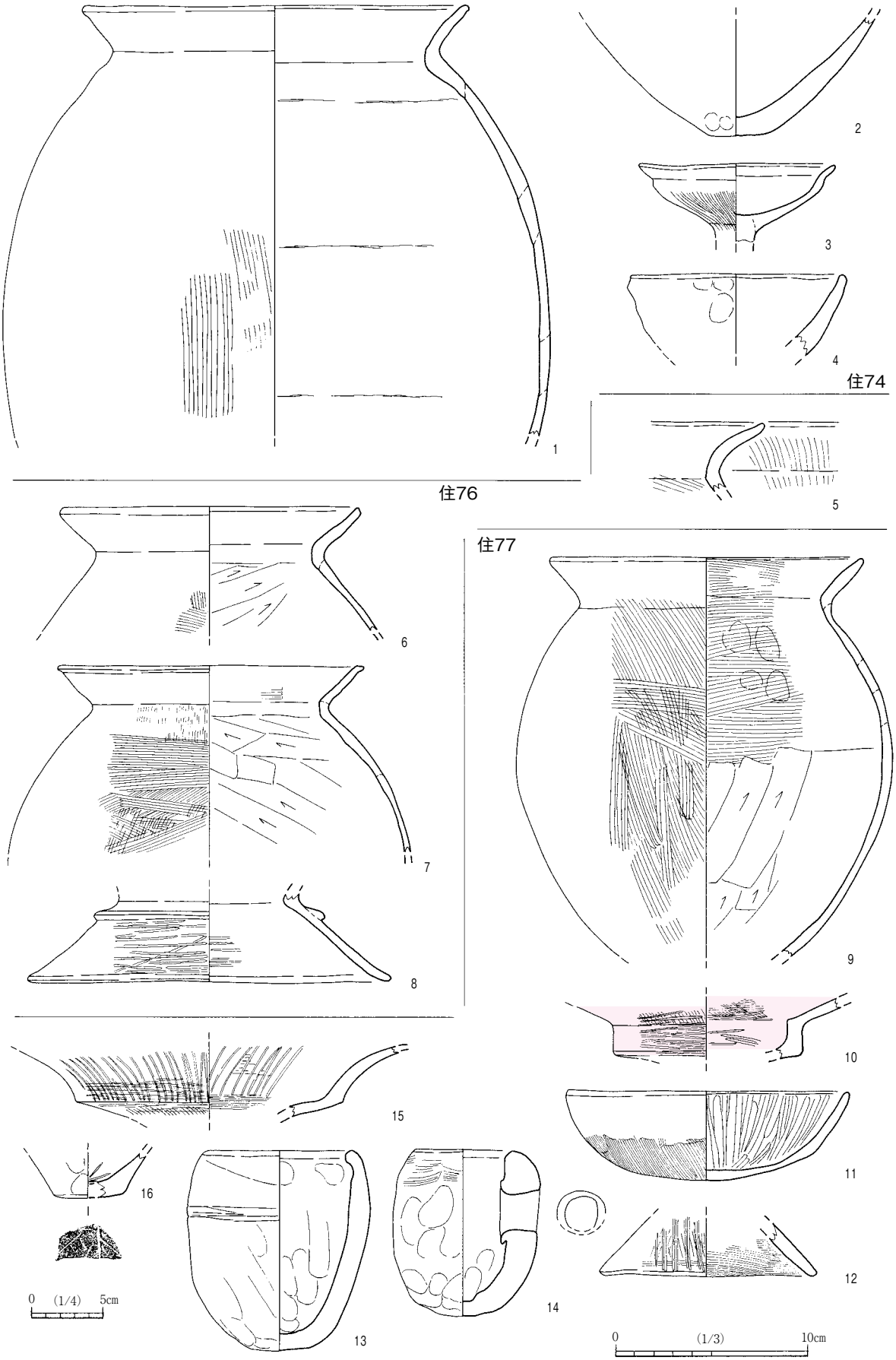
住居北・南壁の２方に本調査区で唯一の地山削り出しではない黄色粘土で構築した造り付けのベッド状遺構を付設する。ベッド状遺構の規模は北側で幅最大 85㎝、高さ４㎝、南側で幅最大 83㎝、高さ２㎝を測る。

竪穴部東壁中央には灰褐色粘質土を埋土とする屋内土坑を設けるが、上層の楕円形を呈するものは撹乱で、70 × 57㎝、深さ 21㎝の方形を呈する下層の土坑が当住居の屋内土坑となる。屋内土坑から土師器甕（１）が出土した。竪穴部床面中央では暗灰褐色粘質土に炭が混じる埋土の炉を検出し、その南北のＰ１・２が主柱穴となる、２本柱の住居である。床面から５㎝程度浮いた状態で粗製鉢（４）、Ｐ３内から土師器高坏坏部（３）が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土で、住居東側で床下掘り込みを確認した。

２は小さな平底を残すこと及び切り合い関係から、弥生時代後期終末に位置づけられる。

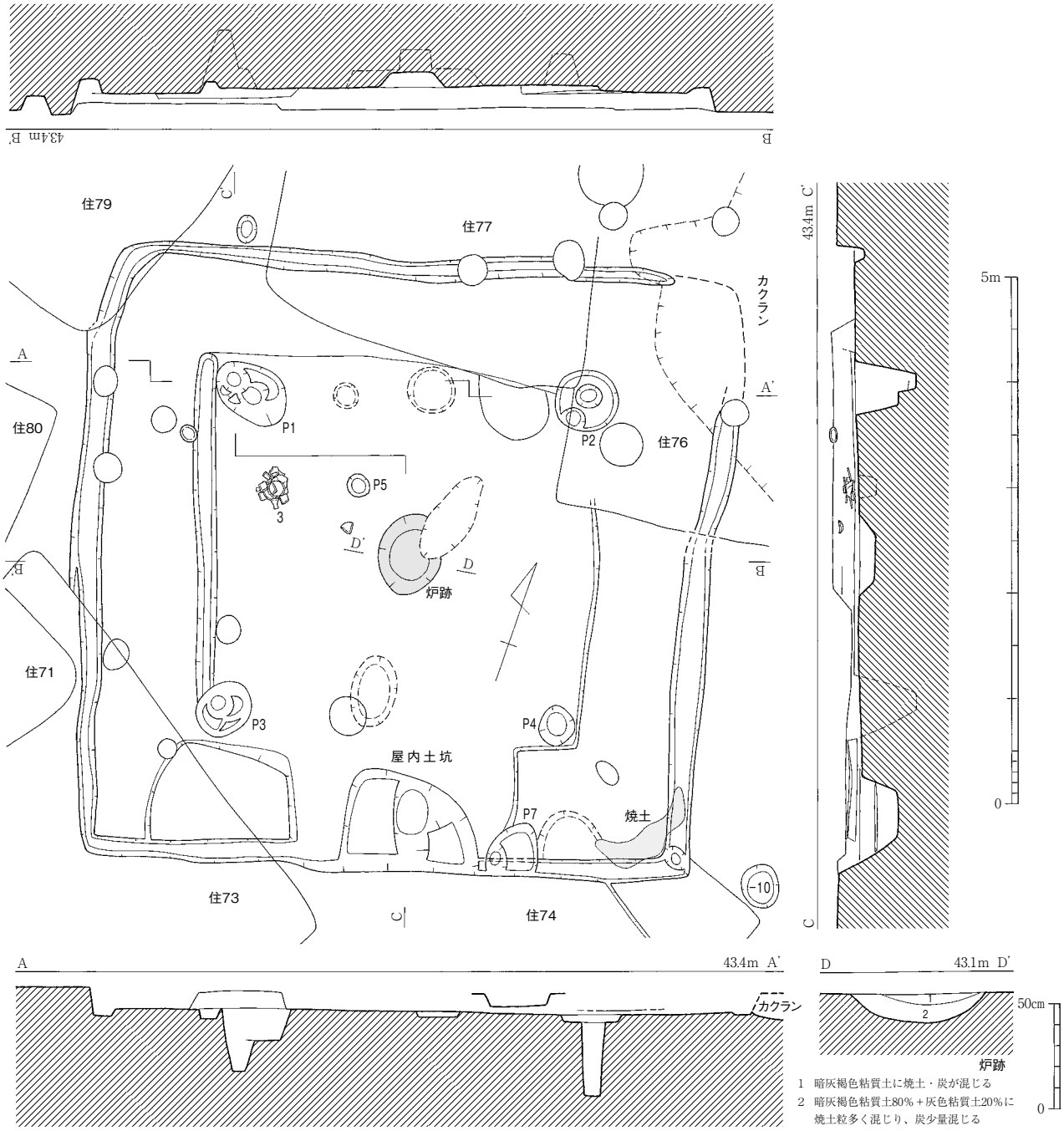
出土遺物（第 107 図１～４）

土師器（１～４）　１・２は在地系甕である。１は頸部が締まる長胴の大型甕で、復元口径 20.2㎝を測る。被熱のため器表が荒れるが、胴部外面はハケ、胴部内面はナデを施している。胴部内面には粘土継ぎ目痕があり、幅 2.5㎝前後の粘土紐で成形したことがわかる。外面にはススが付着する。色は灰黄褐色。２は凸レンズ底で、小さな平底を残す。外面は被熱のため、器表が荒れ調整は不明。内面には炭化物が付着する。色は灰褐色。３は口縁部が外反する、在地系小型高坏坏部である。脚



第107図　5次1区　74・76・77号竪穴住居跡出土土器実測図（2・10は1/4、他は1/3）

部との接合は充填法と考えられる。色は黄茶褐色。4は在地系の粗製鉢で、内面には黒斑あり。色は灰黄褐色。

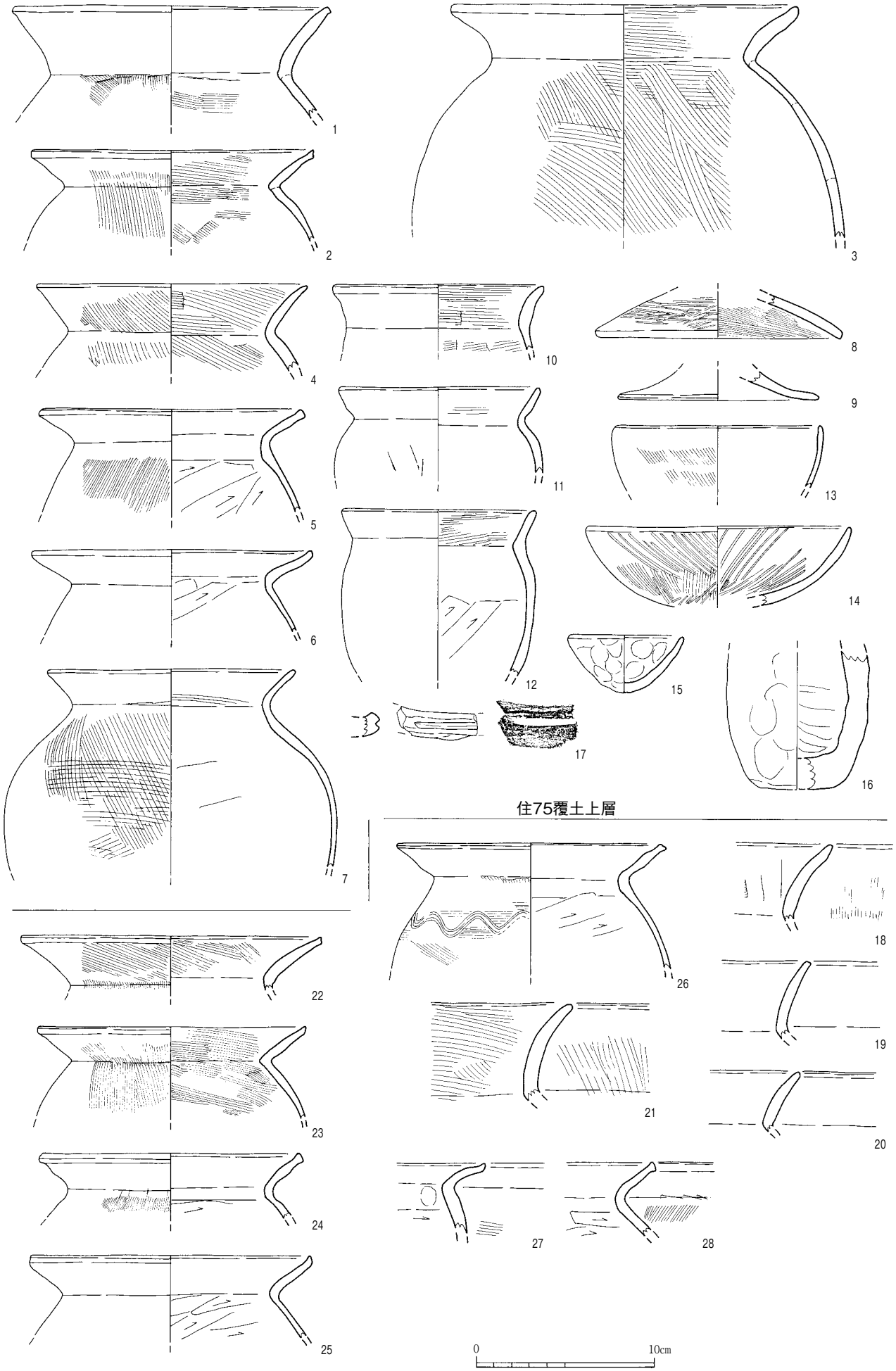


第 108 図　5 次 1 区　75 号竪穴住居跡・炉跡実測図（1/60・1/30）

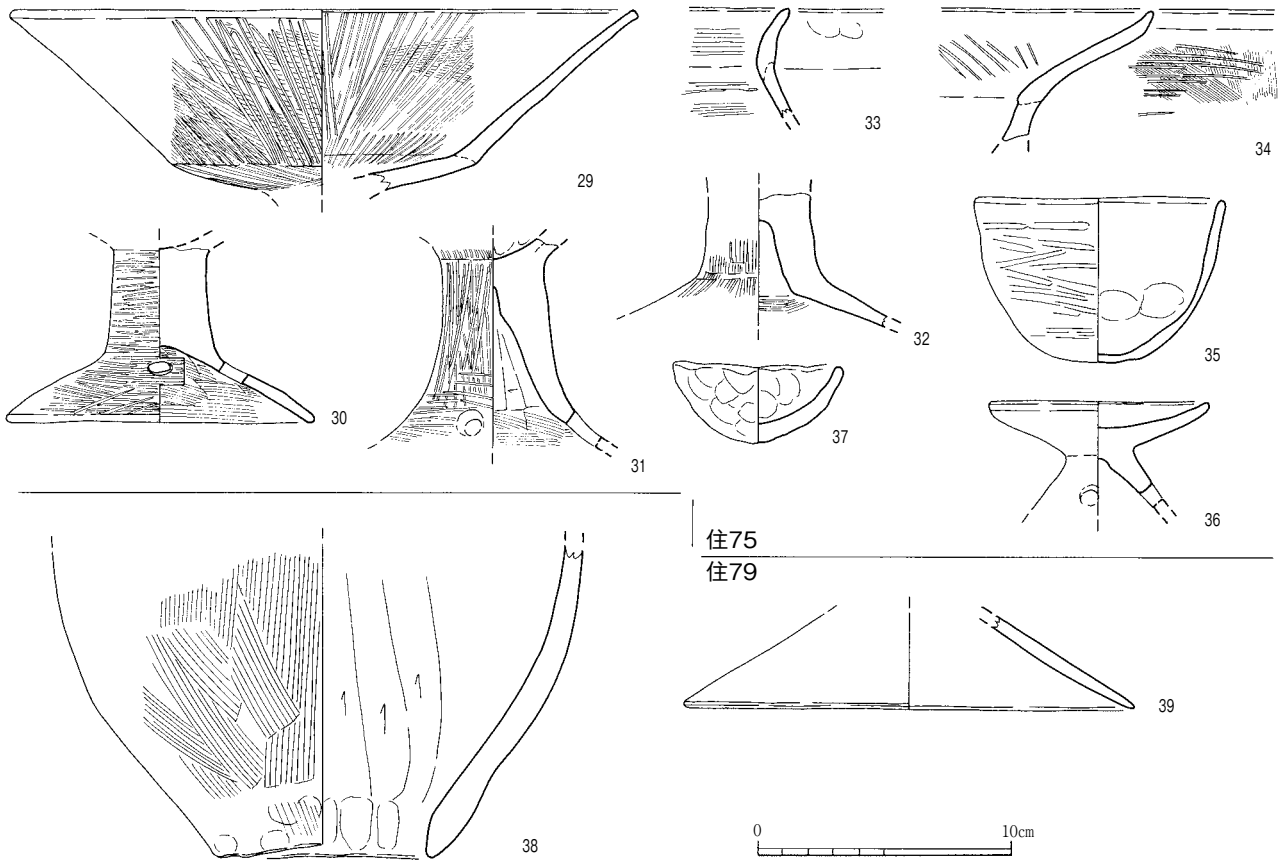
75 号竪穴住居跡（図版 40、第 108 図）

1 区中央の東寄りに位置し、73・76・77・79 号住居跡に切られ、74 号住居跡を切る。71 号住居跡北東隅とも接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土土器から当住居が古い。住居の規模は南北 5.77 m、東西 6.08 m、竪穴部の深さは最大 24cmを測る、ほぼ正方形住居になる。住居の主軸方位は北から 19° 西に振れる。

住居南壁中央に暗灰褐色砂質土＋黄褐色砂質土が埋土の屋内土坑を置き、屋内土坑がある南壁中央以外は地山削り出しのベッド状遺構を付設する。ベッド状遺構の規模は北側で幅最大 88cm、東壁で最大 85cm、高さ 4 cm、西側で幅最大 92cm、高さ 2 cmを測る。なお、南西側のベッド状遺構は高さ 7 cmと他のベッド状遺構に比べ一段高くなるが、この部分が本来のベッド状遺構の高さを示



第 109 図　5 次 1 区　75 号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/3）



第 110 図　5 次 1 区　75 ②・79 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

すと考えられる。壁周溝はベッド状遺構と同じく、南壁中央以外巡らせており、途切れる北東隅は削平されたため、失われたと思われる。また竪穴部の壁周溝は西壁のみ巡らす。ベッド状遺構南東隅で焼土の広がり（薄いアミで示す）を検出した。

竪穴部床面中央では 75 × 60cm、深さ 14cmを測る炉を検出し、埋土は焼土･炭が混じることから、灰穴炉となる可能性がある。竪穴部床面ではピット７基検出し、竪穴部隅に位置するＰ１～４が主柱穴になる４本柱の住居となる。Ｐ１・３は楕円形となる形態及びＰ３には 26・31・32・35 の土器が柱穴内に落ち込んだ状態で出土したことから、住居廃絶時に柱を抜いた可能性がある。住居埋土は暗灰褐色粘質土で、住床下掘り込みは４ヶ所で確認した。覆土より圭頭形鉄鏃の鏃身部（第 142 図 10）が出土した。

第 109 図 26 は典型的な布留甕で、第 109 図５～７・24 ～ 28 も布留系甕、また在地系と畿内系が融合した土器も多いこと及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 61・67、第 109・110 図１～ 37）

遺構検出段階では当住居上層に別の竪穴住居が存在すると考え掘削したが、当住居埋土の違いを誤っていることが判明したため、別の住居跡出土土器として取り上げたものは当住居覆土上層出土土器として報告する。

覆土上層出土土器（第 109 図１～ 17）

土師器（１～ 16）　１～７は甕である。３は黒斑、２・６は被熱痕、２～７はススが認められる。色は１・２・４が淡橙褐色、３・５・７が灰黄褐色、６は暗黄茶褐色を呈する。１～４は在地系甕である。１は長めの口縁部を持ち、胴部内外面はハケを施す。２は胴が張るもので、口縁端部はナ

デで面取りする。３は口縁部の器壁が厚く、端部が内湾気味になる。胴部内外面はハケを施す。内面には炭化物が付着する。５～７は布留系甕である。５・６の口縁端部は肥厚させる。内面のケズリは５が頸部からやや下がった位置まで、６が頸部まで施す。７の胴部外面は縦ハケ後横ハケを粗く施す。胴部内面は工具ナデ後丁寧なナデを施す。

８は布留系高坏か器台の脚部で、外面は細かなミガキ、内面はハケを施す。外面には黒斑あり。色は橙褐色。９は在地系高坏脚部で、内外面は顕著な被熱のため、調整不明。色は黄褐色。10～14は鉢である。10～12は在地系外反口縁鉢で、色は10・12が灰黄褐色、11がこげ茶色である。11の体部外面は工具ナデ後ナデ、口縁部内面はハケ後横ナデを施す。12の体部内面下位はケズリを施す。外面には黒斑とススあり。13は在地系直口鉢で、色は灰黄褐色。14は布留系の鉢で、外面ハケ後ミガキ、内面は暗文状のミガキを施す。外面にはススあり。色は黄茶褐色。15は手づくね土器。ほぼ完形品で、口径6.5cm、器高3.3cmを測る。内面には黒斑あり。16は古墳後期の蛸壺か。内外面ナデを施す。色は灰黄褐色。混入品。

縄文土器（17） 17は縄文後期深鉢口縁部で、口縁部外面に工具による凹線を施す。色は灰褐色。

覆土出土土器（第109・110図18～37）

土師器（18～37） 18～21は在地系直口壺口縁部である。色は18・21が茶褐色、19が暗黄茶褐色、20が灰黄褐色である。18の内面には工具痕あり。20の外面にはススが付着。21は内外面粗いハケを施し、後横ナデを施す。22～28は甕である。23～26の外面にはススが付着する。色は22・26が灰黄褐色、23・25が茶褐色、24が灰黄褐色、27が橙褐色、28が褐色を呈する。22・23は在地系で、内外面ハケを施し、口縁部内外面は後横ナデを施す。口縁端部は、22はナデで面取り、23は内端部を若干つまみ出す。24～28は布留系甕口縁部で、24・25・27・28は口縁端部を肥厚させる。内面のケズリは25が頸部まで、24・26・27・28が頸部からやや下がった位置まで施す。25の口縁端部はナデで面取りする。26の胴部外面は横ハケ後ハケ工具による二条波状文を巡らした典型的な布留甕である。

29～32は高坏である。色は29が橙褐色、30・32が灰黄褐色、31が黄橙褐色を呈する。29は布留系の精製品で、復元口径24.6cmを測る。内外面ハケ後暗文状の縦ミガキを丁寧に施す。30は中実の脚部で、外面は密なミガキ、内面はハケを施す。穿孔は３ヶ所焼成前に施す。31の外面は縦ミガキ後下位のみ横ミガキを施す。内面裾部はハケ、脚柱部はケズリを施す。穿孔は焼成前に３ヶ所施す。32は在地系脚部で、内外面にハケを施す。

33～35は在地系鉢である。33は口縁部が弱く外反するもので、外面にはススが付着する。色は茶褐色。34は長い口縁部が大きく開く外反口縁鉢で、口縁端部は外側に面を持つようにさらに外反させている。外面はハケ後粗いミガキ、内面は粗いミガキを施す。色は灰黄褐色。35は完形に近いもので、復元口径10cmを測る直口鉢。外面は粗いミガキを施す。内面には炭化物が付着し、色は橙褐色～黄褐色。36は布留系小型器台で、摩滅のため調整は不明。穿孔は４ヶ所か。外面にはススが付着し、色は灰黄褐色。37はほぼ完形の手づくね土器で、口径6.8cmを測る。外面の一部は黒化し、色は褐色。屋内土坑出土。

76号竪穴住居跡（図版40・41、第103図）

１区中央の東寄りに位置し、77号住居跡に切られ、75・82号住居跡を切る。当住居付近の遺構

面は礫層が露出することから、旧地形では高い場所にあたると思われる。住居東半分以上は撹乱により失われるが、Ｐ１・２・５・７が主柱穴となる４本柱の住居と考えられ、東側の主柱穴列であるＰ５・７まで住居の範囲とすると、住居の規模は南北 3.7 m、東西 2.77 m以上、深さ最大６㎝を測る、方形住居になる。住居主軸方位は北から 10°西に振れる。

床面及び東側の撹乱内で当住居に属すると考えられるピットを合計８基検出した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みは１ヶ所確認した。

６・７の布留系甕及び８の山陰系鼓形器台の存在及び切り合い関係から古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 61、第 107 図５～８）

土師器（５～８）　５は強く開く在地系壺口縁部で、内面に被熱痕あり。色は灰黄褐色。６・７は布留系甕である。６は口縁端部を内上方につまみ出したもので､胴部外面は縦ハケ後横ハケを施す。内面は頸部近くまでケズリを施す。外面にはススが付着する。色は灰黄褐色。７は口縁外端部を外につまみ出したもので、胴部外面は縦ハケ後横ハケ、内面は頸部までケズリを施す。口縁部内面にはハケ工具痕あり。外面には黒斑があり、色は橙褐色。８は山陰系鼓形器台の下部片で、内外面ミガキを施す。色は淡黄橙褐色。床下掘り込み出土。

77 号竪穴住居跡（図版 41、第 106 図）

１区中央の東寄りに位置し、75・76・82 号住居跡を切る。40・79 号住居跡とは顕著な削平のため、切り合い関係を誤り、出土土器から当住居の方が古い。住居壁は最大５㎝程度と大きく削平を受ける。住居の規模は南北５m、東西 3.1 mを測る、南北に長い長方形の住居である。住居主軸方位は北から３°西に振れる。

床面ではピット４基検出し、深さからＰ１・４が主柱穴の候補となるものの、主柱穴配置は不明である。住居床面から少し浮いた状態で土師器甕（９）と鉢（11）が出土した。住居埋土は灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みは住居全面で確認した。

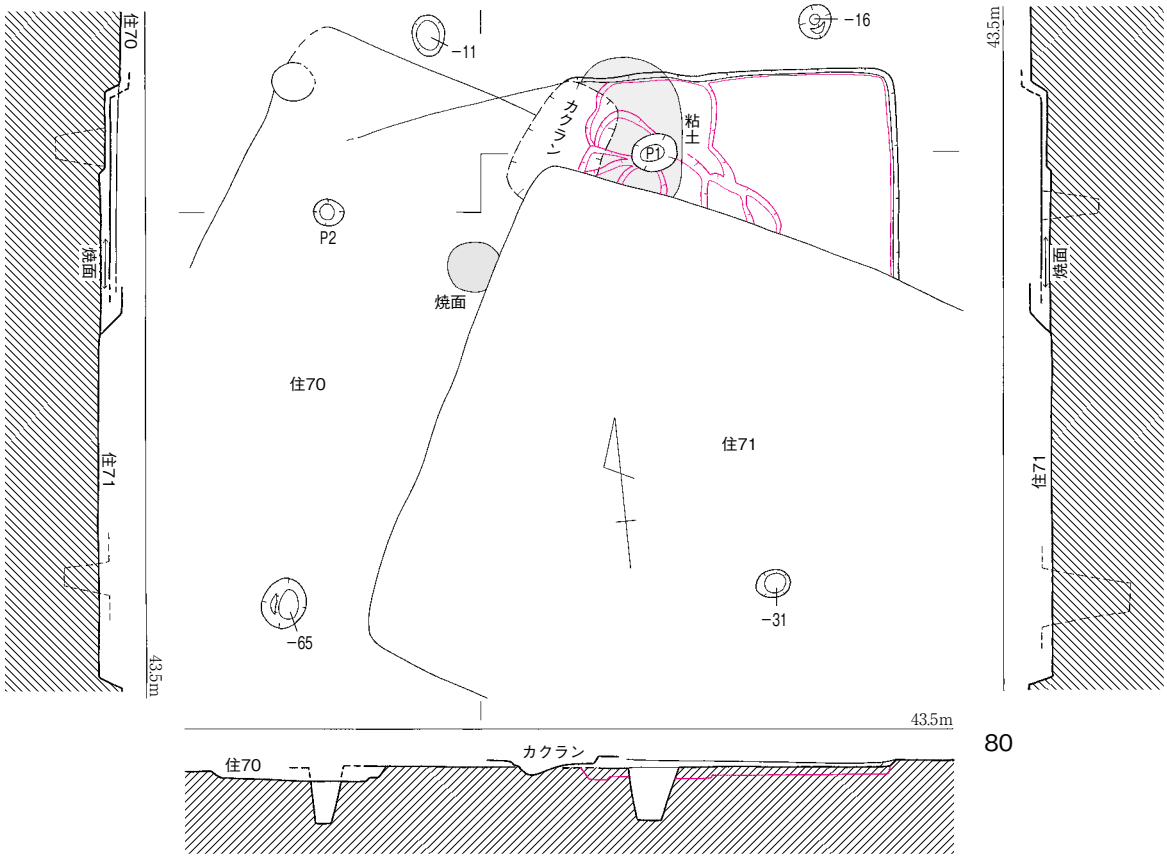
９・10 ～ 12・15 の布留系土器及び切り合い関係から、古墳時代前期前半に位置づけられる。

出土遺物（図版 61、第 107 図９～ 16）

土師器（９～ 16）　９は布留系甕で、復元口径 16.8㎝を測る。胴部外面は縦ハケで一部横ハケを施し、最後に胴部外面下位に幅細い縦ハケを粗く施す。胴部内面はハケのち、中位以下はケズリを施す。外面はスス、内面には炭化物が付着する。色は茶褐色。10 は精製の布留系高坏の坏部で、調整は内外面ハケ後ミガキを基本とする。内外面にはスリップを塗布する。色は橙褐色。11 は布留系直口鉢で、外面下位はケズリ後ハケ、内面は幅太めの縦ミガキを密に施す。色は黄褐色。12 は布留系器台の脚部か｡外面はハケ後２本１単位の暗文状の縦ミガキ､内面はハケを施す｡色はこげ茶色。

13・14 は蛸壺である。色は黄褐色で、胎土も精良であることから、古墳後期のもので、混入品と考えられる。13 の内外面は工具ナデ後ナデを施す。14 は口縁部外面のみ横ハケを施し、焼成前に１ヶ所穿孔を施す。

15・16 は床下掘り込み出土。15 は布留系高坏坏部である。外面はハケ後縦ミガキ、さらに横ミガキを一部に施す。内面はハケ後ミガキを施す。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。16 は凸レンズ底の鉢底部。底部外面には木の葉の圧痕が残る。内面には工具痕が認められる。色は灰黄色。



第 111 図　5 次 1 区　79・80 号竪穴住居跡実測図（1/60）

79 号竪穴住居跡（図版 41、第 111 図）

１区中央に位置し、35 号住居跡に切られ、75 号住居跡を切る。77 号住居跡とは切り合い関係を誤り、出土土器から当住居が新しい。住居北側は削平が顕著で、東壁北半分は壁下端のみ検出し、また住居大部分を 35 号住居跡により壊されるため、住居北壁はまったく検出できなかった。住居の規模は東西 5.83 m、南北５m以上、深さは南壁で 10cmを測る方形住居である。住居主軸方位は北から 16° 東に振れる。

床面ではピット７基検出し、位置と深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居である。また床面ほぼ直上で土師器甑（38）と炭化材が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。住居床下掘り込みを住居全面で確認した。

出土土器及び切り合い関係から６世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（第 110 図 38・39）

土師器（38・39） 38 は古墳後期甑底部で、歪みが顕著である。孔は単孔で、外面はハケ、内面はケズリを施す。外面にはススが付着する。色は暗黄茶褐色。39 は布留系高坏脚部。調整は磨滅のため不明である。色は外が淡橙褐色、内が灰褐色。混入品。

80 号竪穴住居跡（第 111 図）

１区中央のやや南東寄りに位置し、70・71 号住居跡に切られる。住居大半を 70・71 号住居跡に壊されているため、住居北東隅の一部を検出したにとどまる。住居の規模は東西 4.25 m、南北 1.65 m以上、深さは最大４cmを測る、方形住居である。住居主軸方位は北から６° 東に振れる。

住居北壁中央で黄褐色粘土が 100cm以上× 65cm以上の範囲に広がる粘土塊を検出したが（薄いアミ）、カマドではなく、役割は不明である。また住居西側で径 40cmの焼面を検出した（濃いアミ）が、位置的には炉となる可能性がある。床面ではピット２基検出し、いずれも主柱穴となり、70・71 号住居跡で調査したピット２基とセットで４本柱の住居になる可能性が高い。住居埋土は灰褐色粘質土である。住居中央で床下掘り込みを確認した。

出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び住居形態から、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる。

81 号竪穴住居跡（第 112 図）

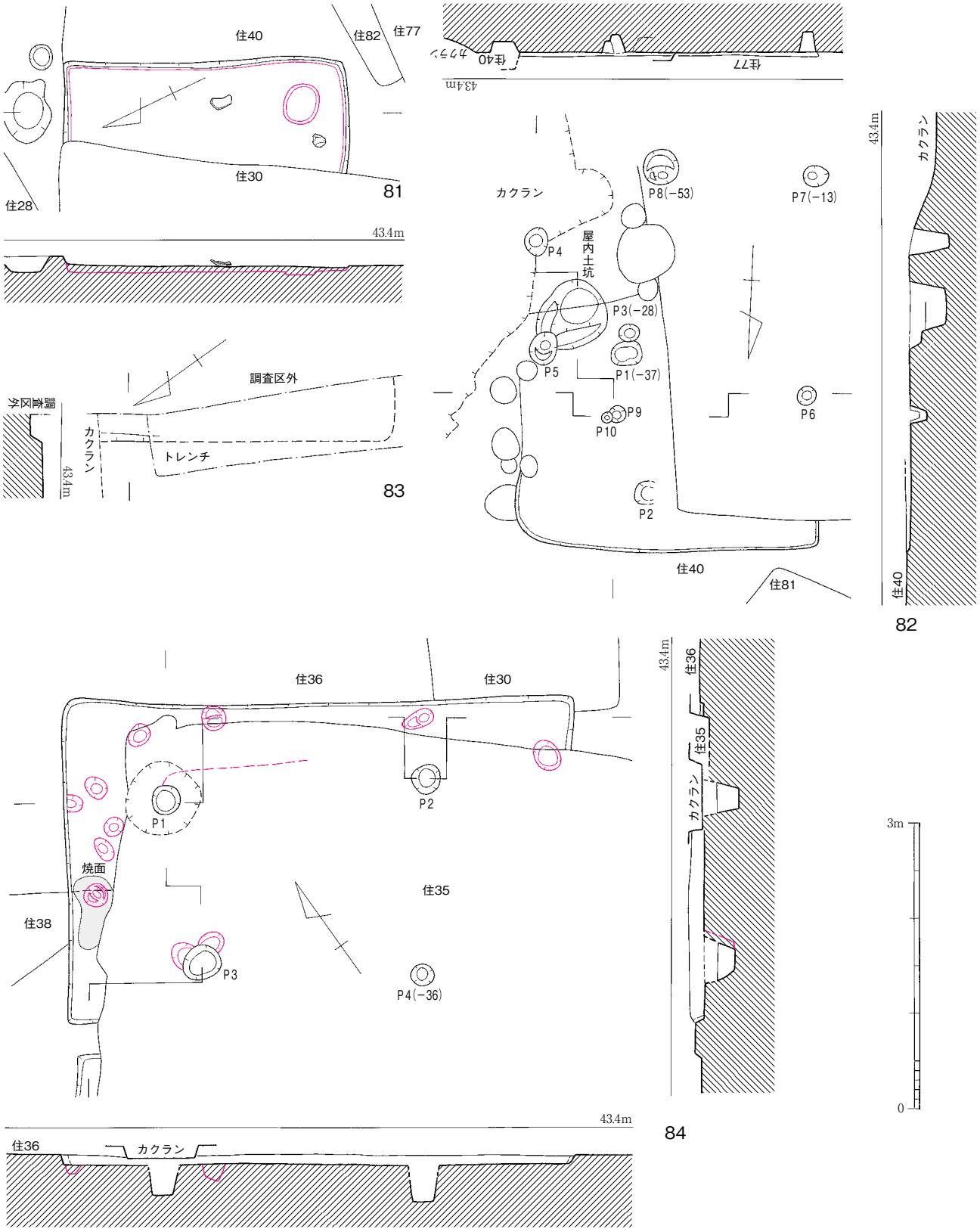
１区中央に位置し、30・40 号住居跡に切られる。住居大半を 30 号住居跡に壊されているため、住居東側の一部を検出したにとどまる。住居の規模は南北３m、東西 1.15 m以上、深さは最大６cmを測る小型の方形住居である。住居主軸方位は北から 26° 東に振れる。

住居床面にはピットはなく、床面から５cm浮いた状態で土師器甕が出土した。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。住居全面で床下掘り込みを確認した。

出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係及び埋土から古墳時代後期に位置づけられる。

82 号竪穴住居跡（第 112 図）

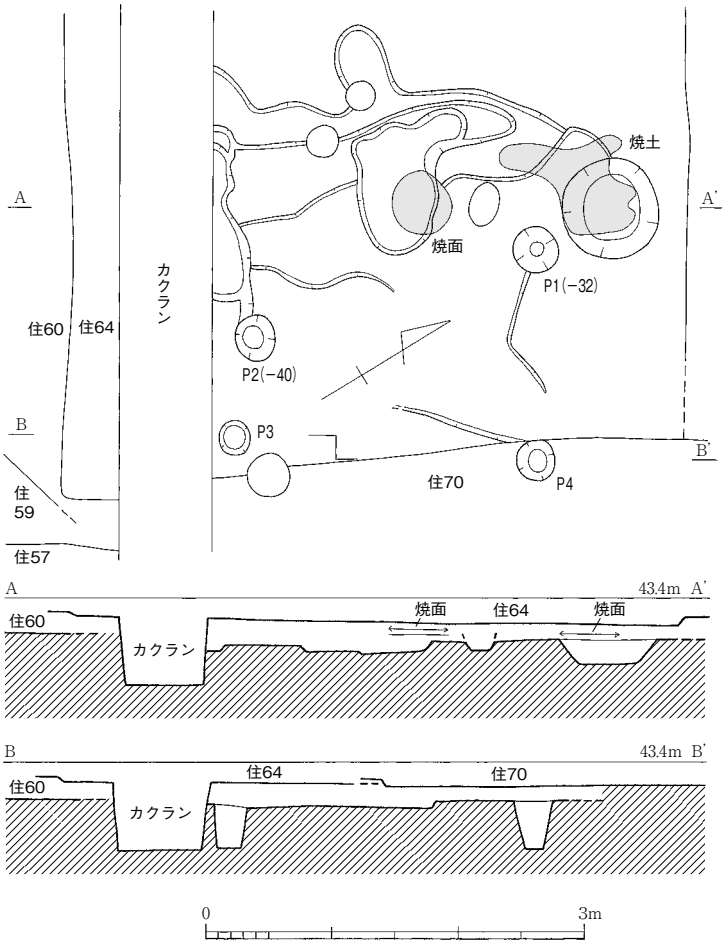
１区中央に位置し、40･76･77 号住居跡に切られる。住居大半を上層の竪穴住居跡で壊されるため、北壁全体と東・西壁の一部を検出したにとどまる。



第112図　5次1区　81～84号竪穴住居跡実測図（1/60）

また住居床面ではピット８基検出し、位置からＰ６～９が主柱穴となる４本柱住居になると思われ、その主柱穴まで住居の範囲に含めると、住居の規模は南北4.22ｍ以上、東西3.1ｍ以上、深さは最大４cmを測る、方形住居になる。住居主軸方位は北から３°西に振れる。

住居東壁際で屋内土坑を検出したため、当住居にはベッド状遺構が付設されていた可能性がある。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。



第 113 図　5 次 1 区　85 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土土器で図示できるものはないが、埋土及び住居形態から、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる。

83 号竪穴住居跡（第 112 図）

1 区中央の東壁際に位置する。住居のほとんどが調査区外であるため、検出時には竪穴住居の存在に気付かず、土層トレンチを掘削したところ、土層断面で住居の存在を確認した。また北側も撹乱を受けることから、壁自体は西壁のみ 310cm分検出したのみである。壁の高さは 10cmを測り、平面形は方形住居か。住居主軸方位は北から 56° 西に振れると思われる。埋土は暗灰褐色粘質土に焼土粒と炭が混じる。

出土土器で図示できるものはないが、埋土から弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる。

84 号竪穴住居跡（第 112 図）

1 区中央に位置し、35 号住居跡に切られ、30・36・38 号住居跡を切る。住居大半を 35 号住居跡で壊されるが、Ｐ１～４の４本柱住居の主柱穴を検出し、住居の規模は東西 5.4 m、南北 3.4 m、深さ最大 16cmを測る、東西に長い長方形住居である。住居主軸方位は北から 55° 西に振れる。

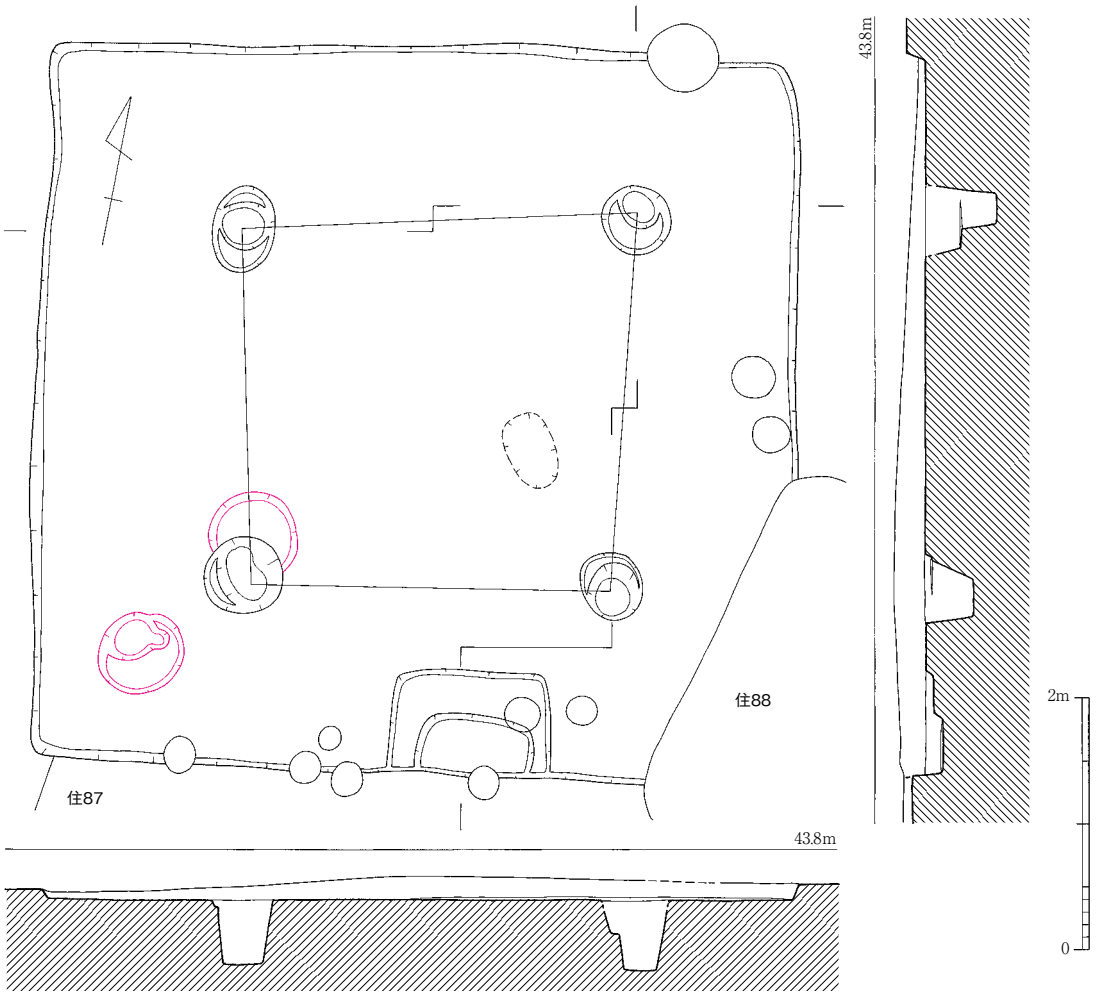
住居西壁中央やや南寄りで焼土の広がりを検出したことから（アミ）、カマドが存在した可能性がある。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。ピット状の床下掘りを多数確認した。

出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係から古墳時代後期に位置づけられる。

85 号竪穴住居跡（第 113 図）

1 区中央の南寄りに位置し、64 号住居跡の下層で検出した。64 号住居跡床下掘り込み調査時に焼土の広がりを２ヶ所検出し、柱穴になりうる深さのあるピットを４基確認したことから、下層住居の存在を確認することができた。住居壁は全く検出できていないが、中央の径 50cm前後の焼面がカマド焼面になる可能性があるため、その西側に南北に延びる段差のいずれかが当住居跡床下掘り込みを示す可能性がある。床面ではピット４基検出し、４本柱の住居となる可能性が高い。住居埋土は暗灰褐色粘質土である。また 64 号住居跡床下掘り込み出土土器の一部は当住居跡に属する可能性があり、第 96 図 23・27 は当住居跡に伴う可能性がある。

切り合い関係及び住居形態から、古墳時代後期に位置づけられる。



第 114 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡実測図（1/60）

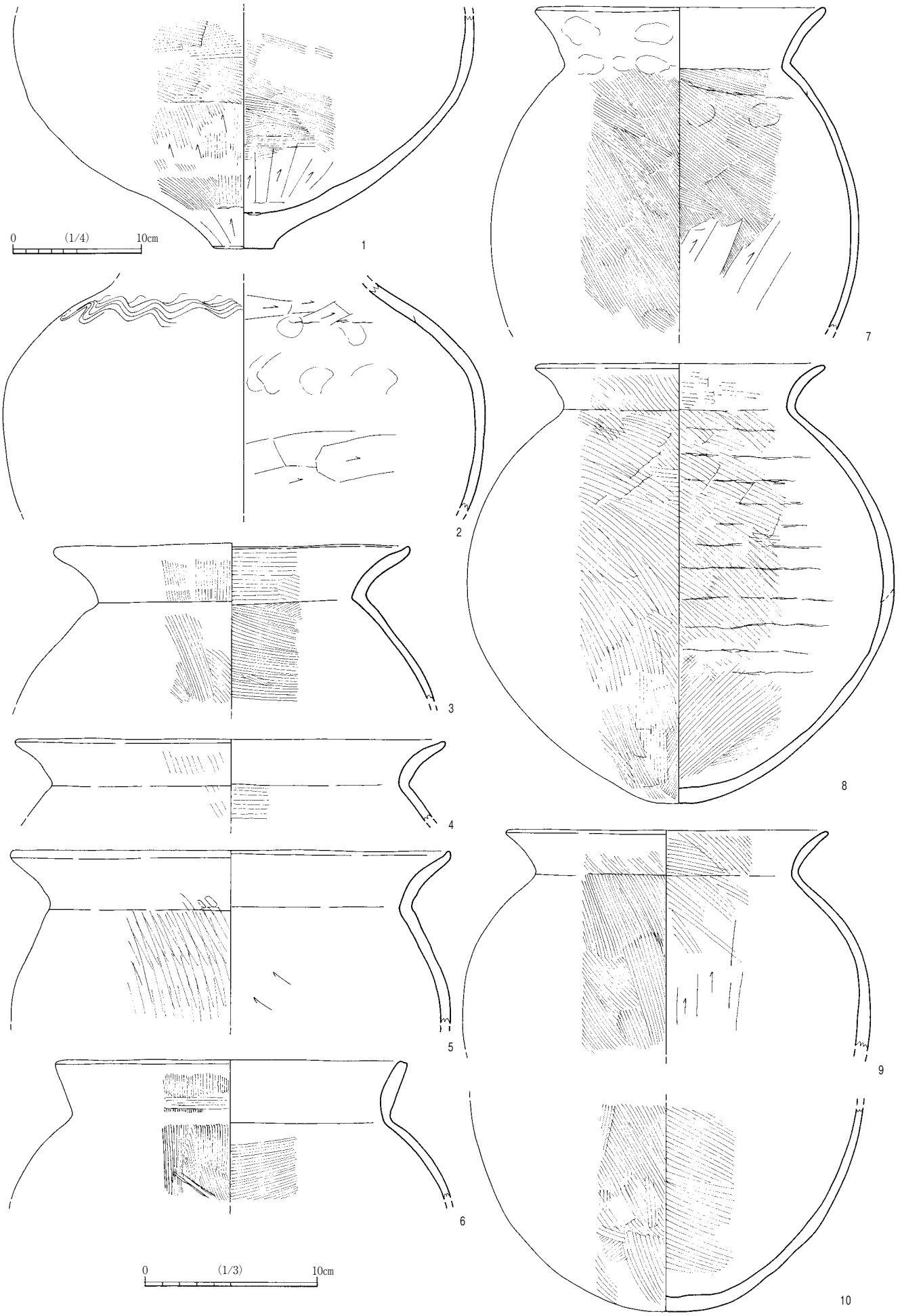
86 号竪穴住居跡（図版 42、第 114 図）

調査区の南東端に位置する竪穴住居跡である。87・88 号住居跡と切り合い関係にあり、88 号住居跡に南東隅を切られる。南側の 87 号住居跡との境界は埋土の色・質から判断がつきにくく、土器の埋没状況から本住居跡がより新しいものとして掘り進めた。後に 87 号住居跡の床硬化面が本住居跡の南壁部分で直線的に途切れていることを確認し、この切り合い関係を検証できた。主軸は略南北方向でわずかに西に振れる。長さが南北 5.70 m、幅が東西 5.92 mの正方形プランをもつ比較的大型の住居跡で、残存する深さは約 20cm。主柱穴は深さ 50cm前後のしっかりとした掘り込みで 4 箇所確認された。埋土は単層で土器を多量に含み、また貼床をもつ。柱穴埋土は貼床の土と類似し、貼床上面でその境界を明確にすることはできなかったが、地山土のブロックを含んでいたためおおよその場所は推測でき、貼床を剥いだ後に輪郭を確定した。これらのことから本住居設営時には貼床を行った後に柱穴を掘り込んだ可能性が高い。またしばしば出入り口施設に伴うとされる壁際土坑が南壁中央で確認された。採光に有利な南向き開口の住居であったことが推測される。埋土中の多量の土器は住居廃絶後にゴミ捨て場として廃棄されたものか。

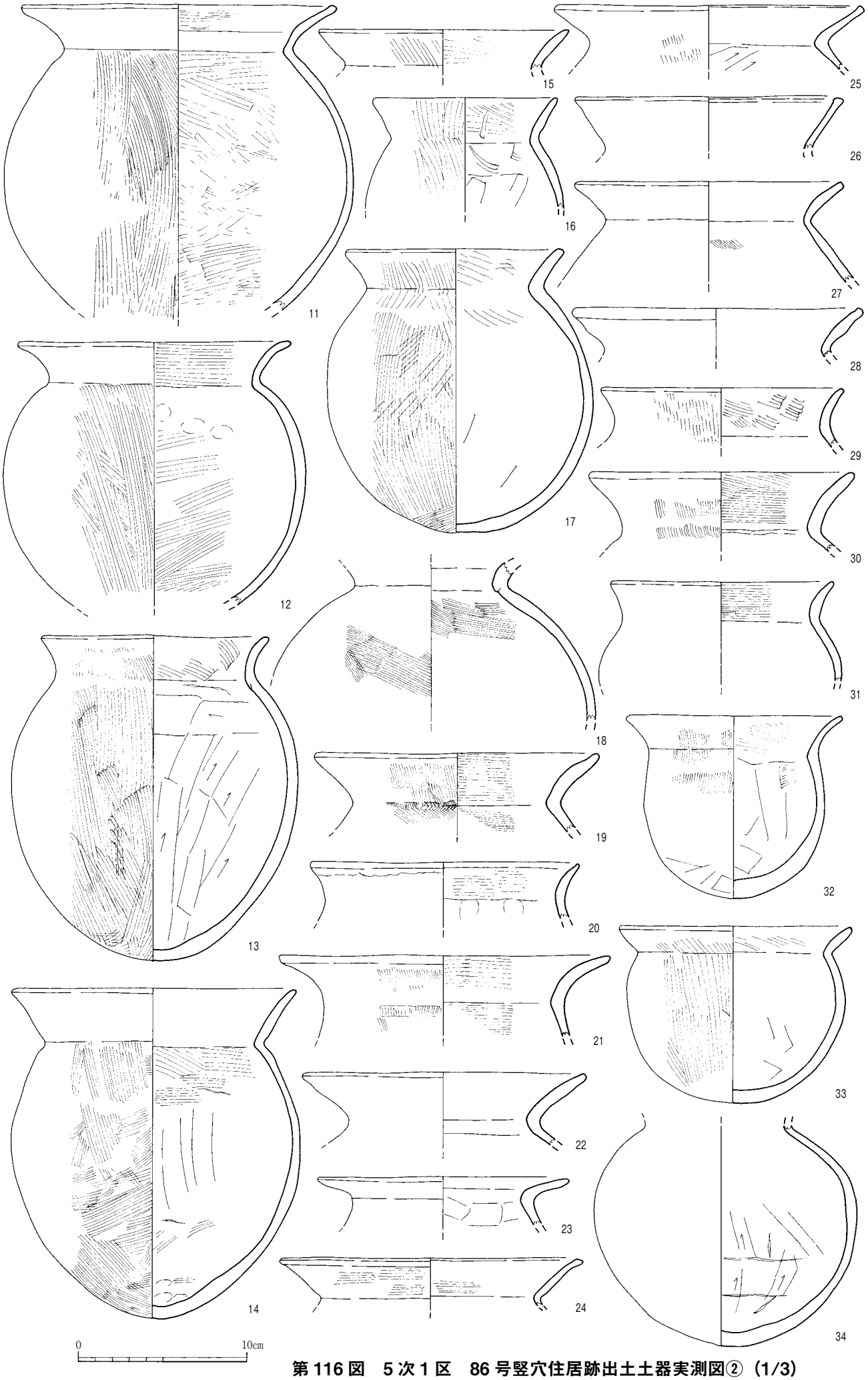
出土土器より、古墳時代前期後半に位置づけられよう。（細石）

出土遺物（図版 61 ～ 63、第 115 ～ 120 図）

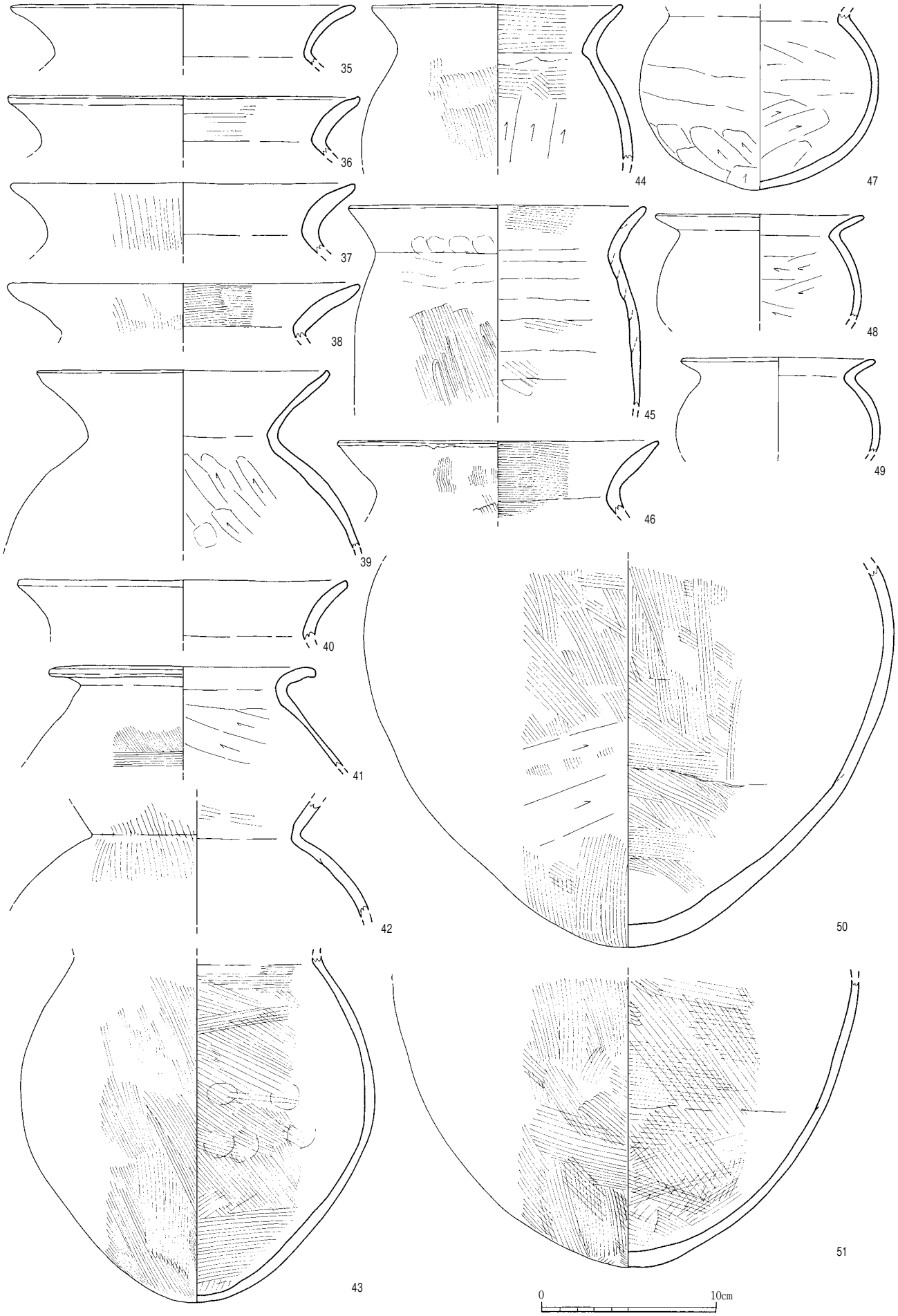
弥生土器（1）　1 は壷の下半部である。やや扁平な胴部下位から、小さな平底を形成する底部までが残る。器壁調整は内・外面ともにハケ目で、底部付近を板状工具で強くなでる。後期後半～末の資料か。



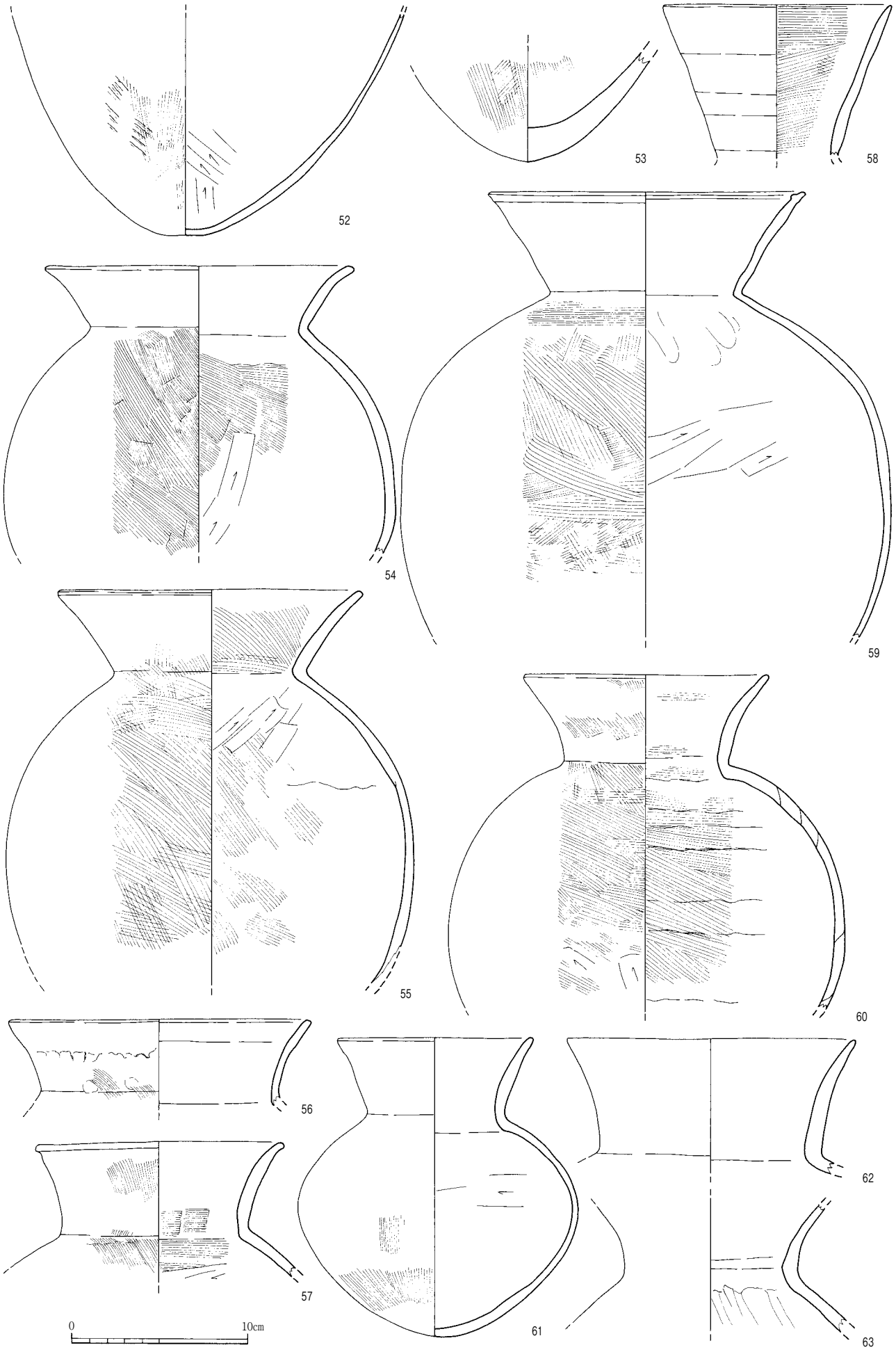
第115図　5次1区　86号竪穴住居跡出土土器実測図①（1は1/4、他は1/3）



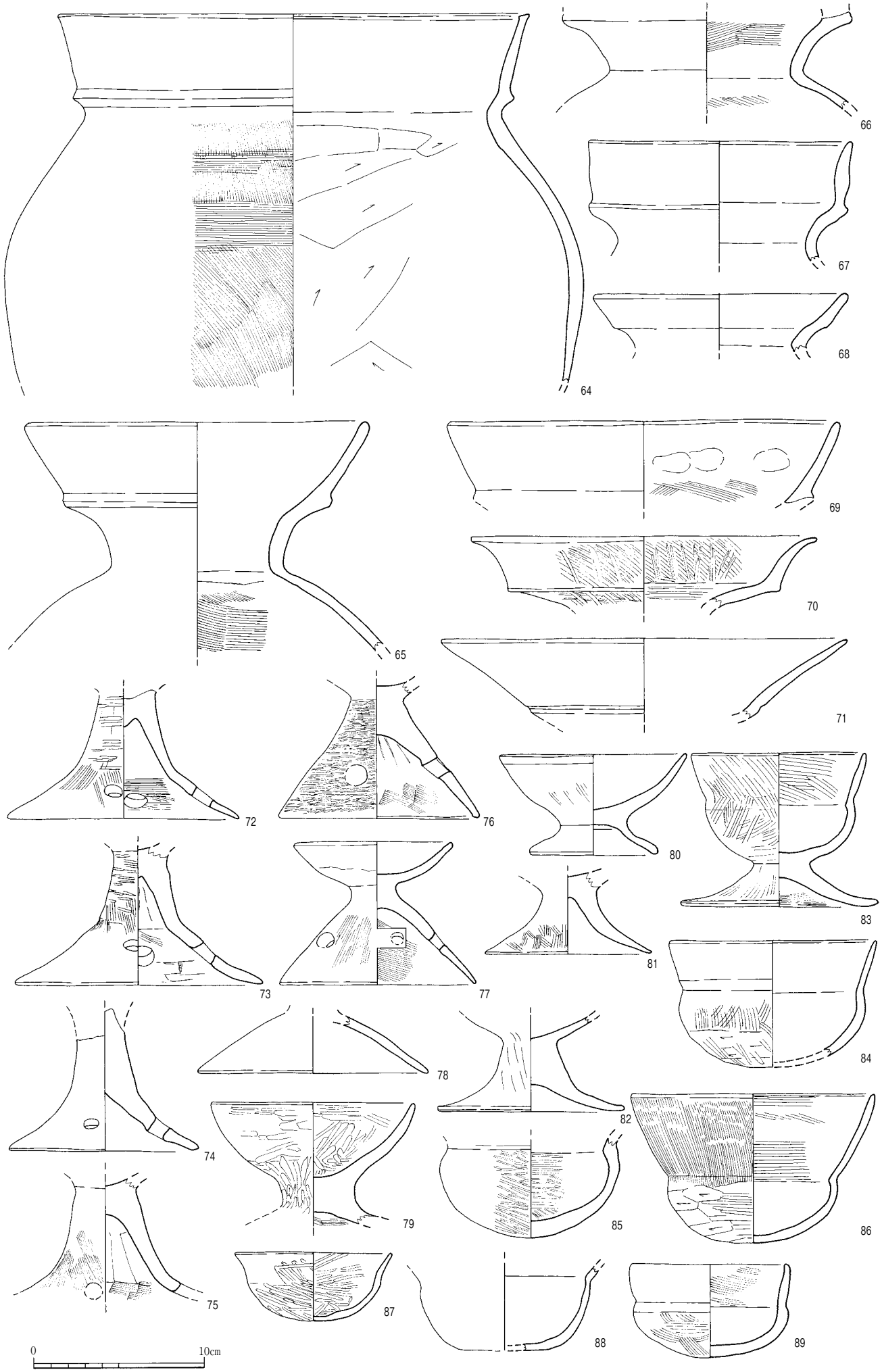
第116図　5次1区　86号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



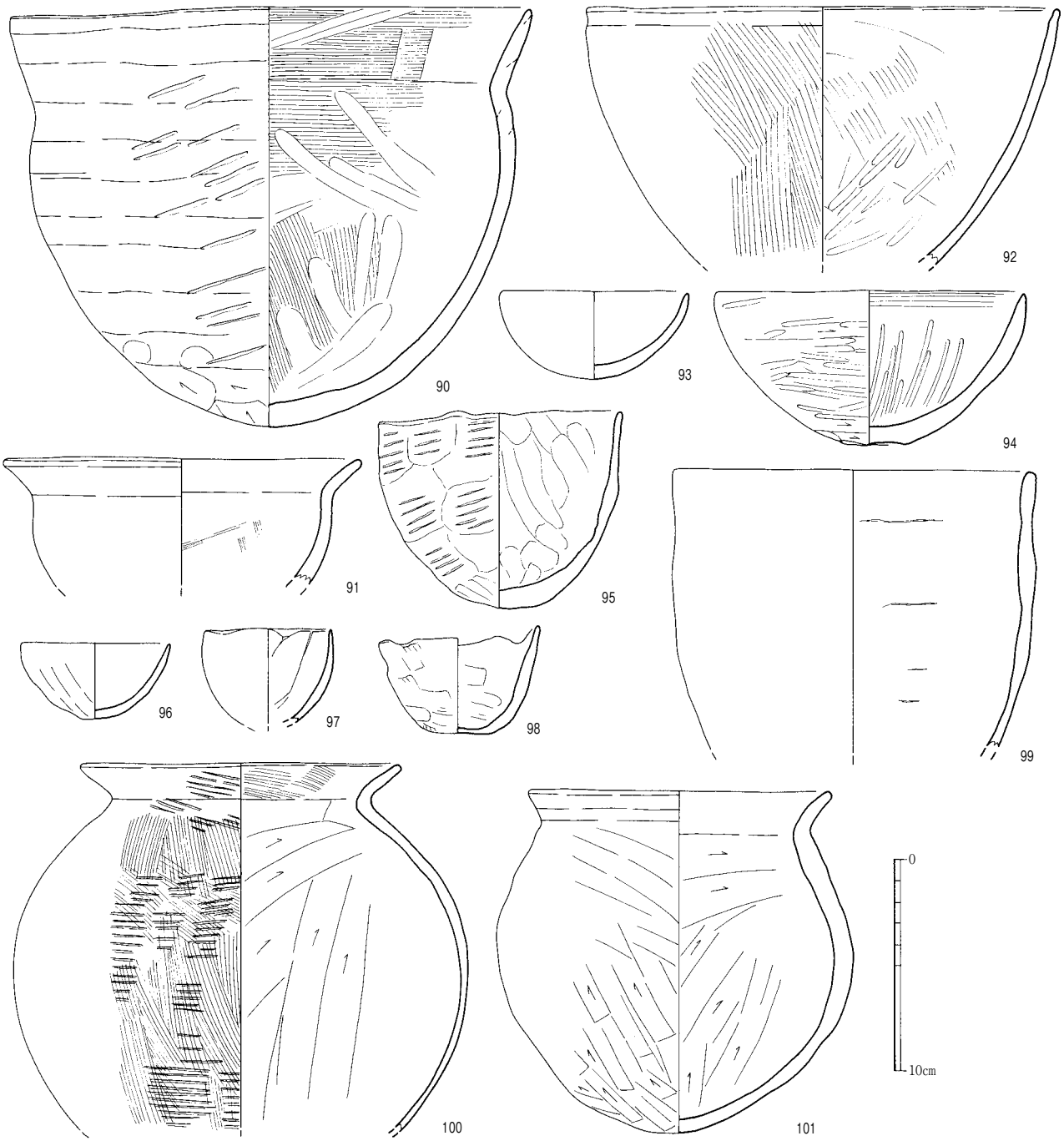
第 117 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第118図　5次1区　86号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）



第 119 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（1/3）



第 120 図　5 次 1 区　86 号竪穴住居跡出土土器実測図⑥（1/3）

土師器（２～101）　２～49 は甕型土器である。２～11 は大型の甕で、口縁部径は 17 ～ 26cm、胴部最大径は 22 ～ 30cmほどをはかる。大半が球胴と強く締まる頸部、短く外湾しながら開く口縁部を持つ。３・５は口縁部先端をわずかに上に引き上げており、布留（古）式の特徴をわずかにとどめる。２は胴部上位に櫛描波状文をめぐらせる。５・７はやや長胴気味で、在地系の系譜をくむものか。器壁調整は内・外面ともに口縁部はナデ、胴部はハケ目を残すものが多く、２は内面ケズリ、５は内面工具ナデ、９は内面下半部がケズリ。12 ～ 49 は中・小型の甕型土器である。比較的残りのよい中で最も小さい 16 の大きさをみると口縁部径が 11.0cm、胴部最大径が 11.8cm。最も大きな 11 が口縁部径 18.6cm、胴部最大径 20.0cmをはかる。大きく、中型・小型・特小型の３類型に分かれよう。形状は、基本的に丸底球胴と強く締まる頸部、短く外反する口縁部を持ち、中には頸部のしまりが緩くやや長胴気味となるであろう 20・21・23・45・46 のような資料や、胴部径に対し器高が低く寸胴で胴の膨らみが強い 47・49 のような資料も含まれる。器壁調整は、口縁部が内・外

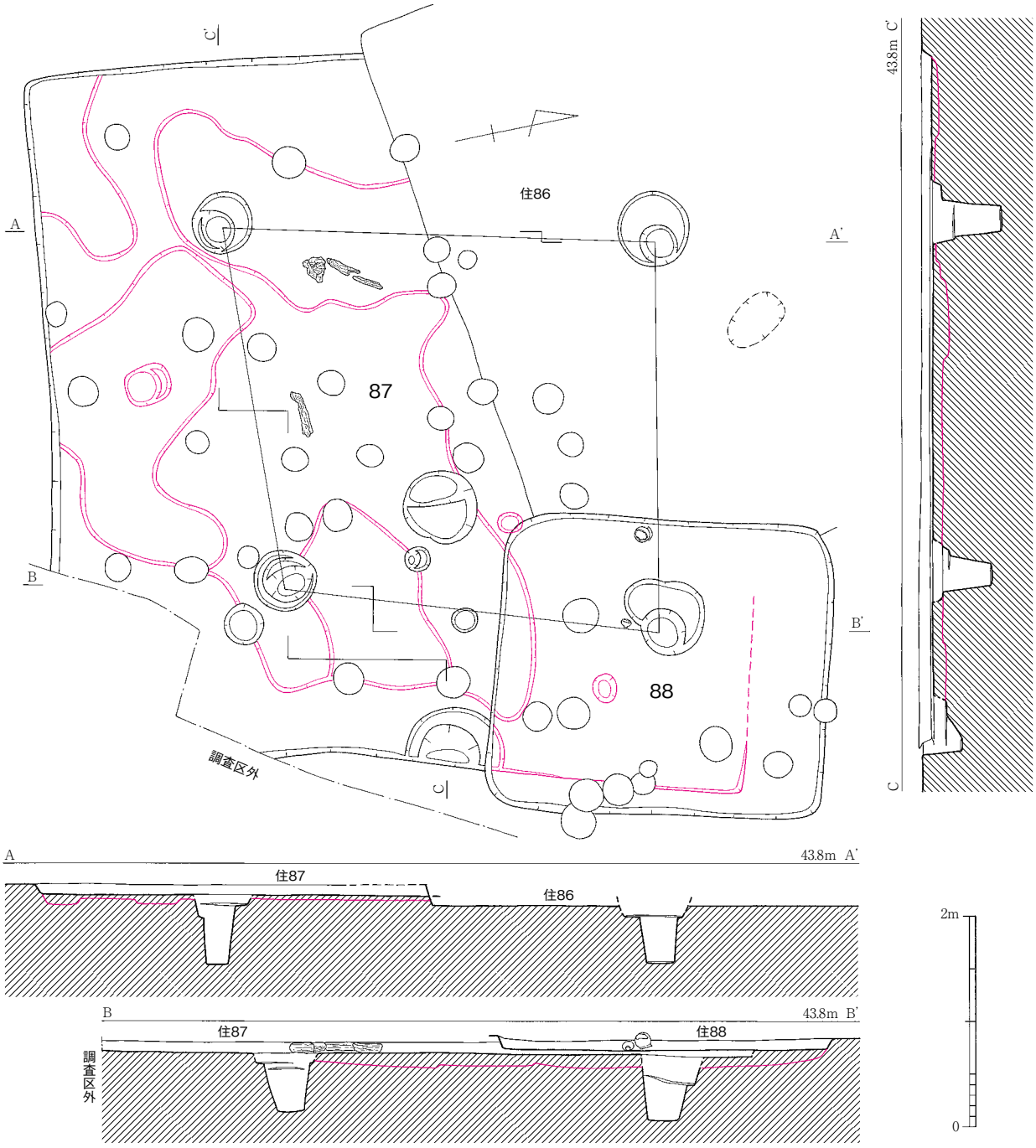
面ともにハケ目を一部で残しながらナデ、胴部外面には多くの資料でハケ目が見られ、内面はハケ目を残すものとケズリ痕が認められるもの、あるいは39のようにナデ上げるような工具痕を残すものもある。小型器種では底部外面にヘラ・板状工具による強いナデ上げが認められるものもある。なお、34・45のように、内面に粘土帯接合痕跡をよく残すものがみられる。50～53はおそらく甕型土器とみられる底部片である。50のように丸底球胴を指向する布留系の資料と、52・53のように尖底長胴を指向する在地系の資料が見られる。いずれも内外面にハケ目を残すものが多い。

54～70は壷型土器である。54～63は直口壷である。胴部が残るものはいずれも球胴で、口縁部はやや直線的に開きながら伸びる。一方では口縁部の伸びが短く、強く外反していて甕に形状の近い資料として54・55が、またもう一方では口縁部が比較的立っていてよく伸びる58・60・62などがあり、ほかの資料はおおよそその間の形状に収まる。59は大型、54・55・60などは中型、61などは小型品に該当しよう。60・61などには内面の器壁に粘土帯接合痕跡をよく残す。64～70は二重口縁壷である。64は球胴と締まりが悪くほとんど伸びない頸部が特徴的な山陰系の系譜を引くものである。胴部最大径が34cmと、大型である。67は口縁部がやや垂直気味に伸びるが、ほかは強く開き、二重口縁部内面の段が退化しているものが多い。器壁調整は頸部より上がナデ、胴部外面はハケ目を持つものが多く、64は内面にケズリを施す。70は内・外面に暗文様のヘラミガキが認められる。

71～75は高坏である。71は坏部上位が遺存する。屈曲部からわずかに外湾しながら直線的に開く。72～75は脚部が遺存する資料である。いずれもやや強く外湾しながら「八」の字に開く器形で、75は中位やや下でひときわ強く外湾するが、いずれも明瞭な屈曲部は形成しない。いずれも脚中位やや下部に穿孔を施しており、72・73は２孔、74・75は数不明。76・77は小型の器台である。76は脚部のみ、77は全体が復元できる。脚部はわずかに内湾しながら直線的に開き、77の坏部は浅い皿状を呈する。ともに脚中位に３孔をうがつ。78もおそらく器台の脚部であろう。76・77よりも強く開き、高さがない。

79～82は脚付碗である。79・80は浅い半球状を呈する碗部が残り、81・82は脚のみの資料。脚部は高さがなく、外湾しながら強く「八」字状に開く。79は内・外面ともにヘラミガキで仕上げる精製品。83は脚付の小型丸底壷で、つぶれた半球状の胴部に短く開く口縁部と、「八」字状に強く開く脚部を持つ。84～86は小型丸底壷に分類される資料であろう。いずれも胴部はつぶれた半球状を呈する。口縁部形状はそれぞれ異なり、84はごく短く外反、85はわずかに内湾しながら長く伸び、85は欠失する。85の器壁調整は特徴的で、鋭いヘラ状の工具で繰り返しナデることにより、ヘラの先端部で筋状の傷がついたものか。

87～89は小型の鉢に分類されるものか。87は頸部屈曲がやや不明瞭で口縁部がわずかに外湾しながら開く。88は底部が平底状になる。89は小型丸底壷がつぶれた器形である。90は大型の鉢であろうか。丸底にやや扁平な球胴、ほとんど締まらない頸部と短く外反する口縁部を持つ。外面はナデ仕上げだがその下にタタキ痕跡が残り、内面はハケ目のち指ナデ。特に外面に粘土帯接合痕跡が残る。91は小型の鉢である。つぶれた球胴と短く外反する口縁部を持つ。92～98は碗である。92は大型の資料で口縁部径が22.5cmをはかり、碗というより鉢に分類されるか。93は口縁部径が9.0cmの小型品、94は15cm程度の中型品で、いずれもつぶれた半球状の器形を持ち、比較的形の整った一群である。主な器壁調整は92がハケ目、93がナデ、94がヘラミガキと異なる。96～98は手



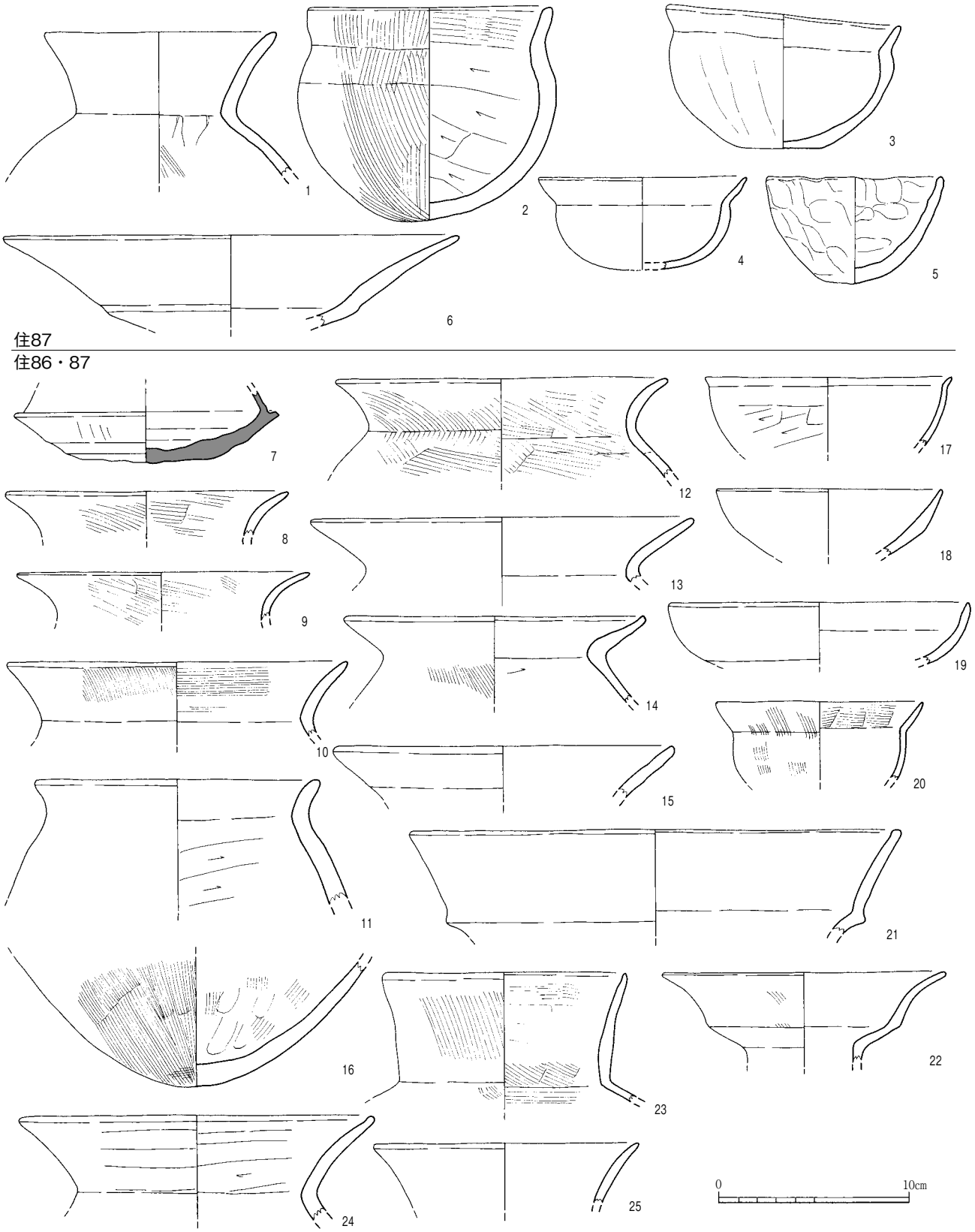
第 121 図　5 次 1 区　87・88 号竪穴住居跡実測図（1/60）

づくねの小型碗である。口縁部径が 10cm未満、器高は 5 cm前後の大きさである。99 は甑であろう。体部はわずかに湾曲し、口縁部は直線的に伸びる。全体的にナデ調整により仕上げており、内面には粘土帯接合痕跡が観察される。100・101 も甕型土器で、いずれもほぼ完形に復元できる。胴部は球状で、頸部はやや強く締まり、口縁部は短く外反する。器壁調整は 100 の外面がタタキのちハケ目、内面はケズリ。101 の外面は板状工具による強いナデ、内面はケズリ。

以上の資料はおおよそ古墳時代前期後半に比定できよう。（小澤）

87 号竪穴住居跡（図版 42、第 121 図）

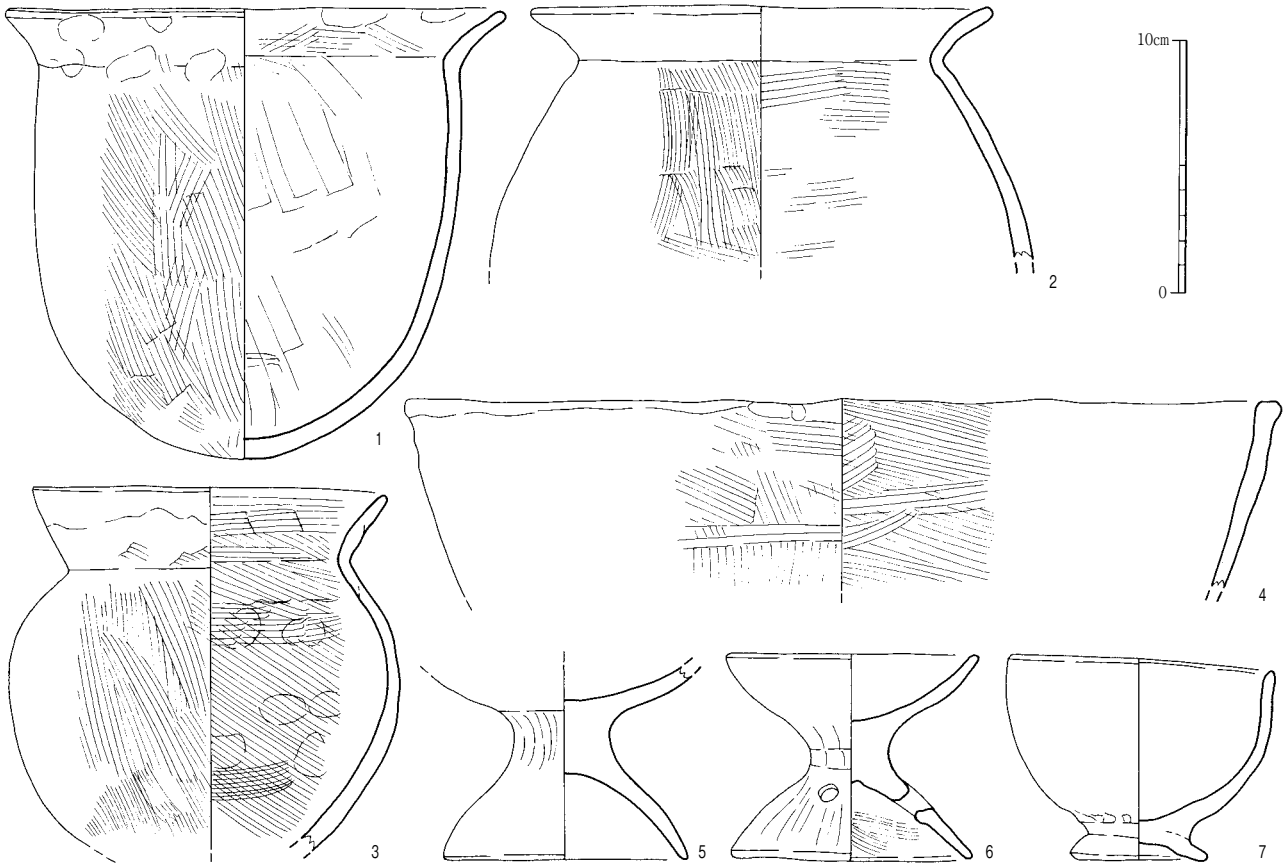
調査区の南東端に位置する竪穴住居跡である。86・88 号住居跡と切り合い、86 号住居跡に北辺を、88 号住居跡に北東隅を切られる。主軸は西北西－東南東にとり、規模は長さが東西 6.54 m、



第 122 図　5 次 1 区　86・87 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

幅が南北 6.84 mの略正方形プランをもつ、残存深さは約 10cm をはかる。主柱穴と考えられるピットが４つ確認された。また東壁中央に壁際土坑をもち、出入口に伴う可能性がある。埋土は単層で貼床をもつ。また、踏みしめられた床の硬化面をもつが、住居跡東側から住居中央部のみで、南壁側・東壁側では確認できなかった。

出土土器や切り合い関係から古墳時代前期後半に位置づけられよう。（細石）



第 123 図　5 次 1 区　88 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版 63、第 122 図 1 ～ 6）

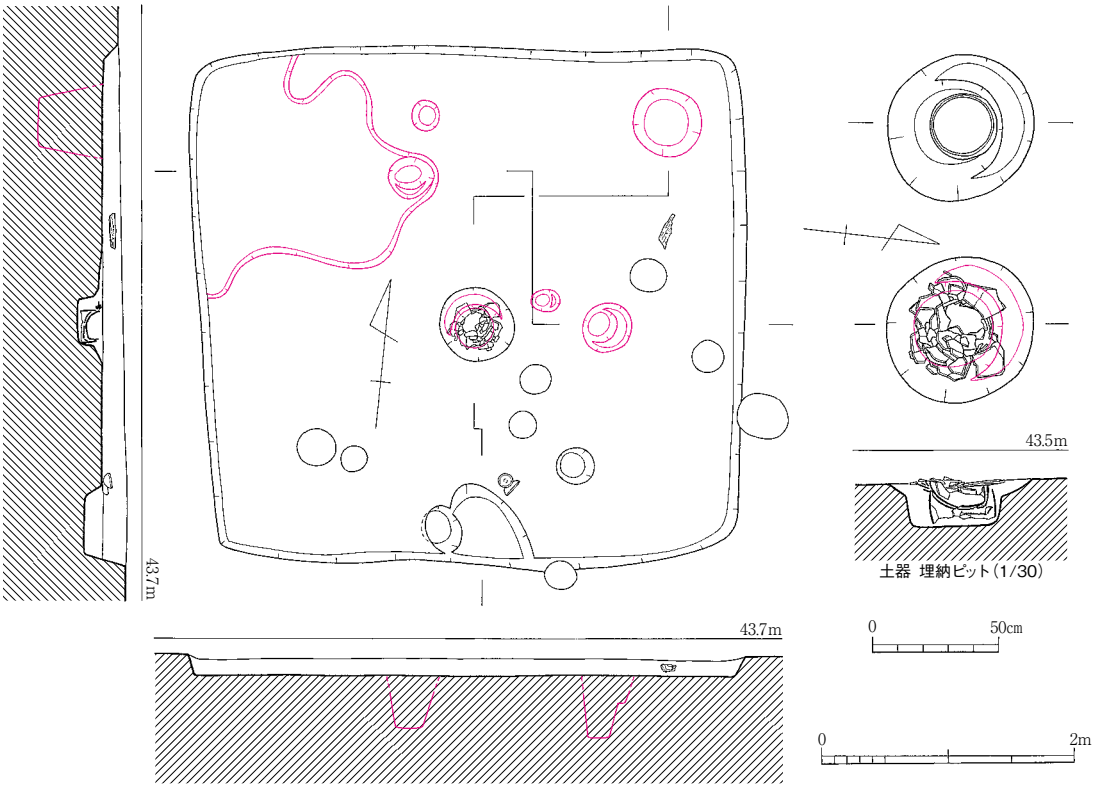
土師器（1 ～ 6）　1 は直口壷の頸～口縁部片である。胴部はおそらく長胴気味で、頸部は強く締まり、口縁部はわずかに外湾しながら斜め上方に開く。2 は小型甕である。球胴で頸部は締まらず、口縁部は短く直立気味に開く。胴部内面を板状工具によるナデにより整形する。3 は鉢である。底部は平底気味で、胴部は半球形をとり、口縁部は短く直立気味に開く。4 は小型の鉢である。胴部は浅く、口縁部はわずかに内湾しながら短く開く。5 は手づくねの碗。内・外面に指頭圧痕や指ナデ痕跡がよく残る。6 は高坏で、坏部中位の段より上が残る資料で、口縁部はわずかに外湾しながら強く開く。これらの資料は古墳時代前期後半に比定される。（小澤）

86・87 号竪穴住居跡出土遺物（図版 63、第 122 図 7 ～ 25）

86・87 号住居跡の切り合い関係については、遺構検出面では明確に把握することができず、数回にわたって両遺構の埋土を下げて検出を繰り返した。そのときに出土した遺物を、86・87 号住居跡の出土遺物として報告する。

須恵器（7）　7 はカエリを持つ坏身である。坏部はやや浅く、カエリはよく突出する。口縁部は強く内傾する。全体にナデ調整を施す。混入品であろう。

土師器（8 ～ 25）　8 ～ 15 は甕型土器である。8 ～ 10・12 は、頸部～口縁部が残る資料である。口縁部はいずれも外湾しながら短く開く。11 は器壁が厚く粗製品であろう。やや長胴気味の胴部上半と短く外湾しながら開く口縁部が残る。13 ～ 15 は口縁部の開きが強く、わずかに内湾するもので、布留（古）式の形態的特徴が残る資料である。16 はおそらく甕の底部とみられる。尖底に近い丸底で、やや長胴気味の器形となろう。



第 124 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡・炉跡実測図（1/60・1/30）

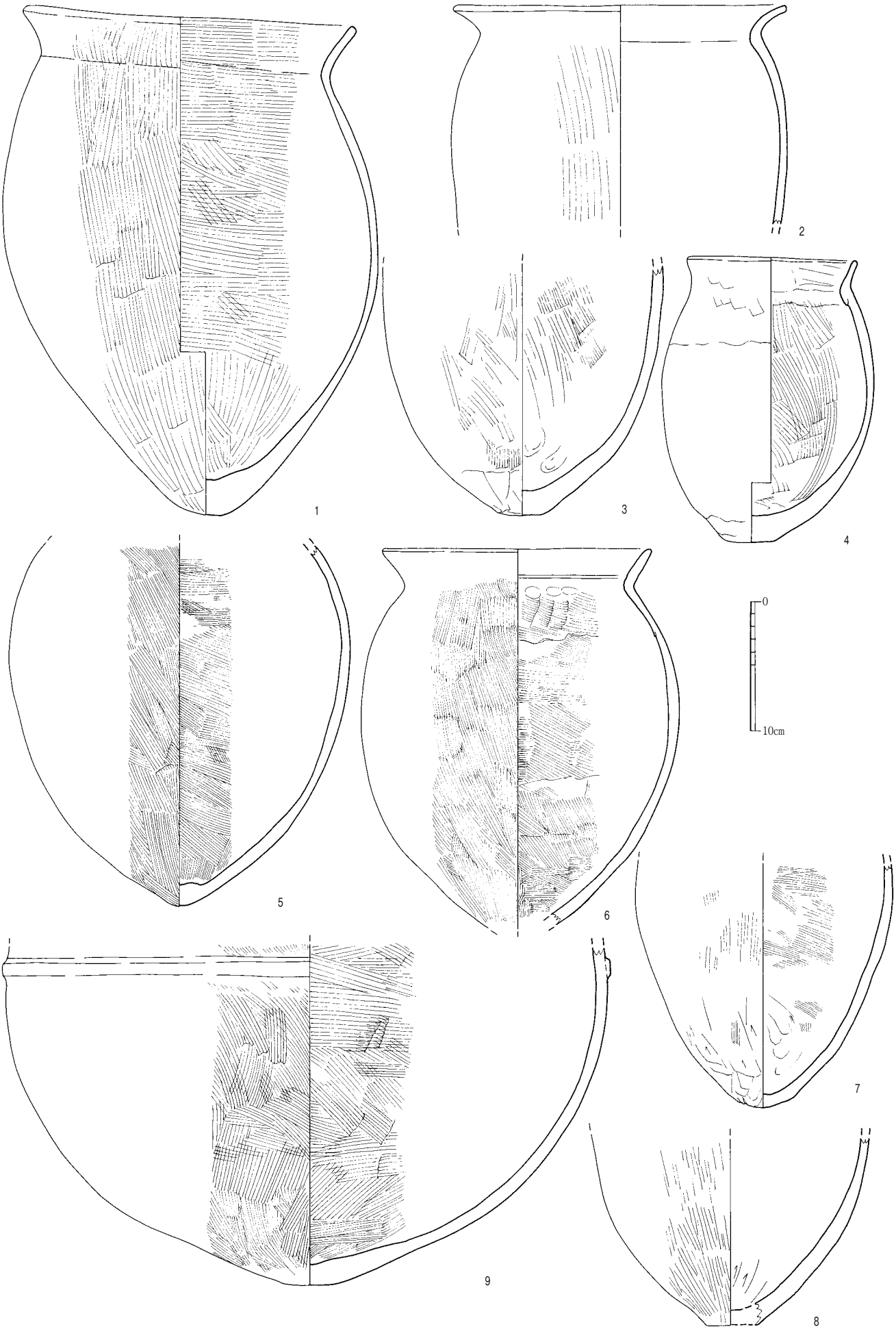
17 ～ 19 は碗である。17 は半球形の胴部とわずかに外湾する短い口縁部を持つ。外面に板状工具による強いナデが丁寧に施され、器壁が薄い精製品である。18・19 は胴部が浅く皿状を呈する碗である。18 は底部が丸く、19 は平底気味となって口縁部径が大きい。20 は小型の鉢である。つぶれた球状の胴部と、短くわずかに内湾しながら斜めに伸びる口縁部を持つ。器壁が薄く、調整も丁寧である。21・22 は二重口縁壷である。21 は口縁部が斜め上方に長く伸びており、おそらく頸部が短い山陰系の系譜を引く資料であろう。22 は内面の段をよく残しつつ口縁部が強く開く畿内系の資料であろう。23 ～ 25 は直口壷の口縁部片である。23 は頸部は強く締まり、口縁部は直立気味に伸びる。24・25 は口縁部が 23 に比べて強く開く。（小澤）

88 号竪穴住居跡（図版 42、第 121 図）

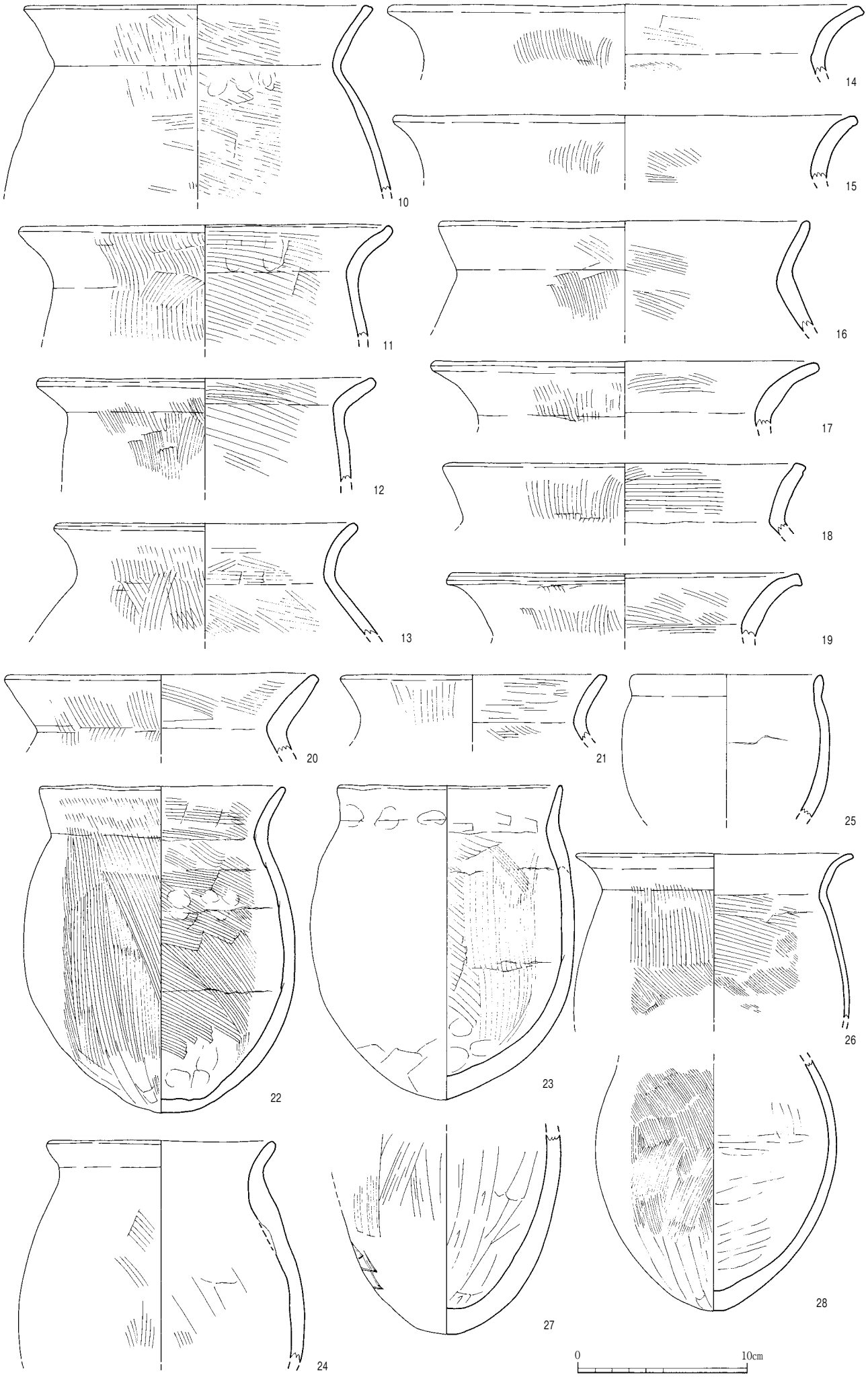
調査区の南東端部に位置する小型の竪穴住居跡である。86・87 号住居跡と切り合い関係にあり、この中では最も新しい。主軸を 87 号住居跡と同じく西北西－東南東にとり、規模は南北に 3.06 m、東西に 2.68 mのおよそ正方形のプランをもち、残存する深さは約 10cm である。主柱穴は床面を精査するも確認できなかった。住居跡埋土は単層で、貼床をもつ。ほかにカマドや炉跡等も確認できていない。出土土器のうち 1 点は 8 世紀代、ほかの多くは古墳時代前期に属するが、本住居跡と切り合いを持ち先行する 86・87 号住居跡が古墳時代前期に属すること、本住居跡が小型ではっきりとした柱穴を竪穴内に持たないなどの特徴から、本住居の時期を 8 世紀代にあて、古墳時代前期の土器は 86・87 号住居跡に由来するものと考えたい。（細石）

出土遺物（図版 63・64、第 123 図）

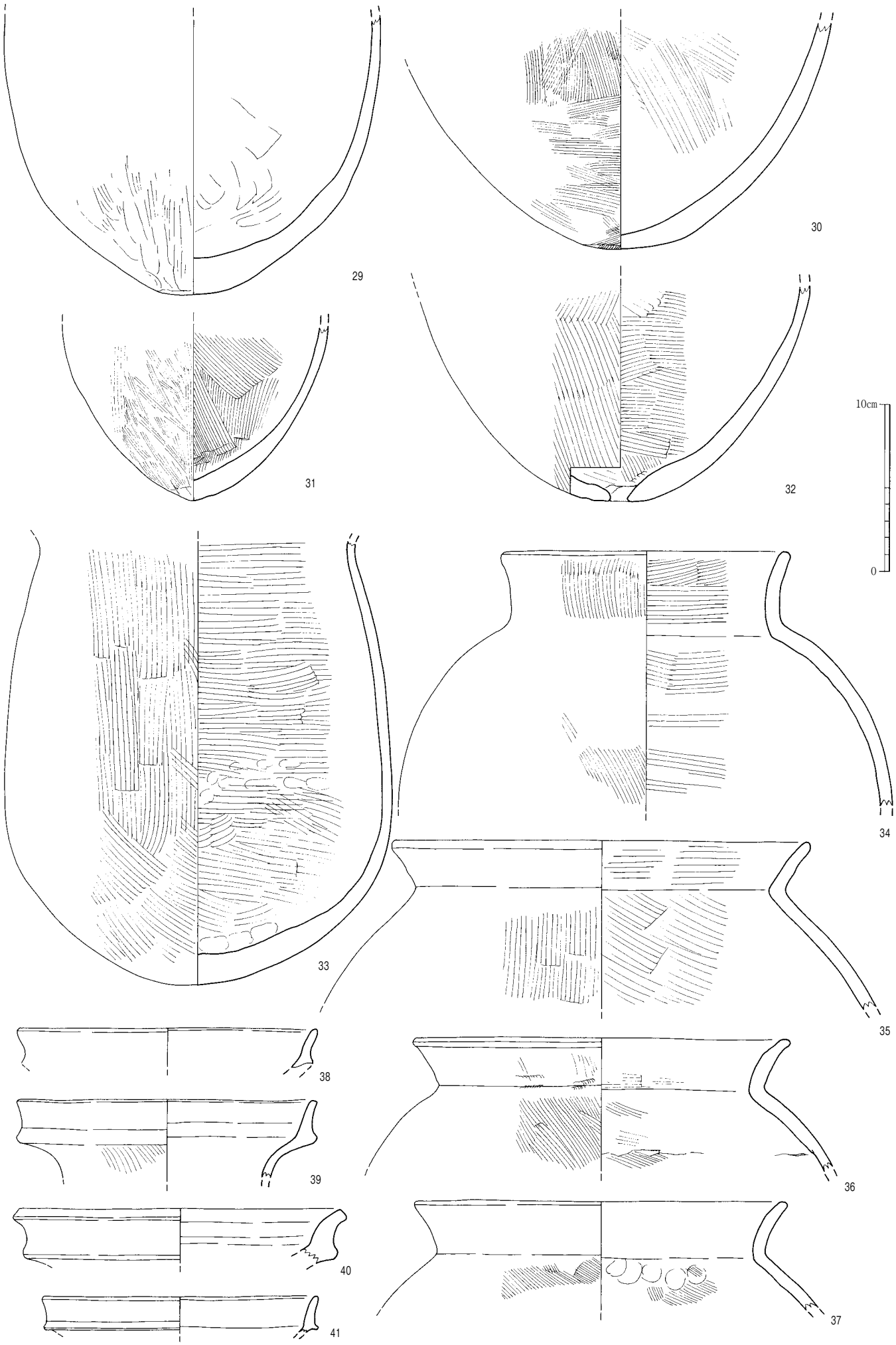
土師器（1 ～ 7）　1 は甕で、ほぼ全形が復元できる資料である。丸底で、胴部は緩やかに直立し、頸部はほとんど締まらない。口縁部は短く外反する。8 世紀代の資料か。2・3 も甕である。いずれも丸底球胴で頸部はやや強く締まり、口縁部は短く外反する。2 が大型品で胴部最大径は 21.4cm



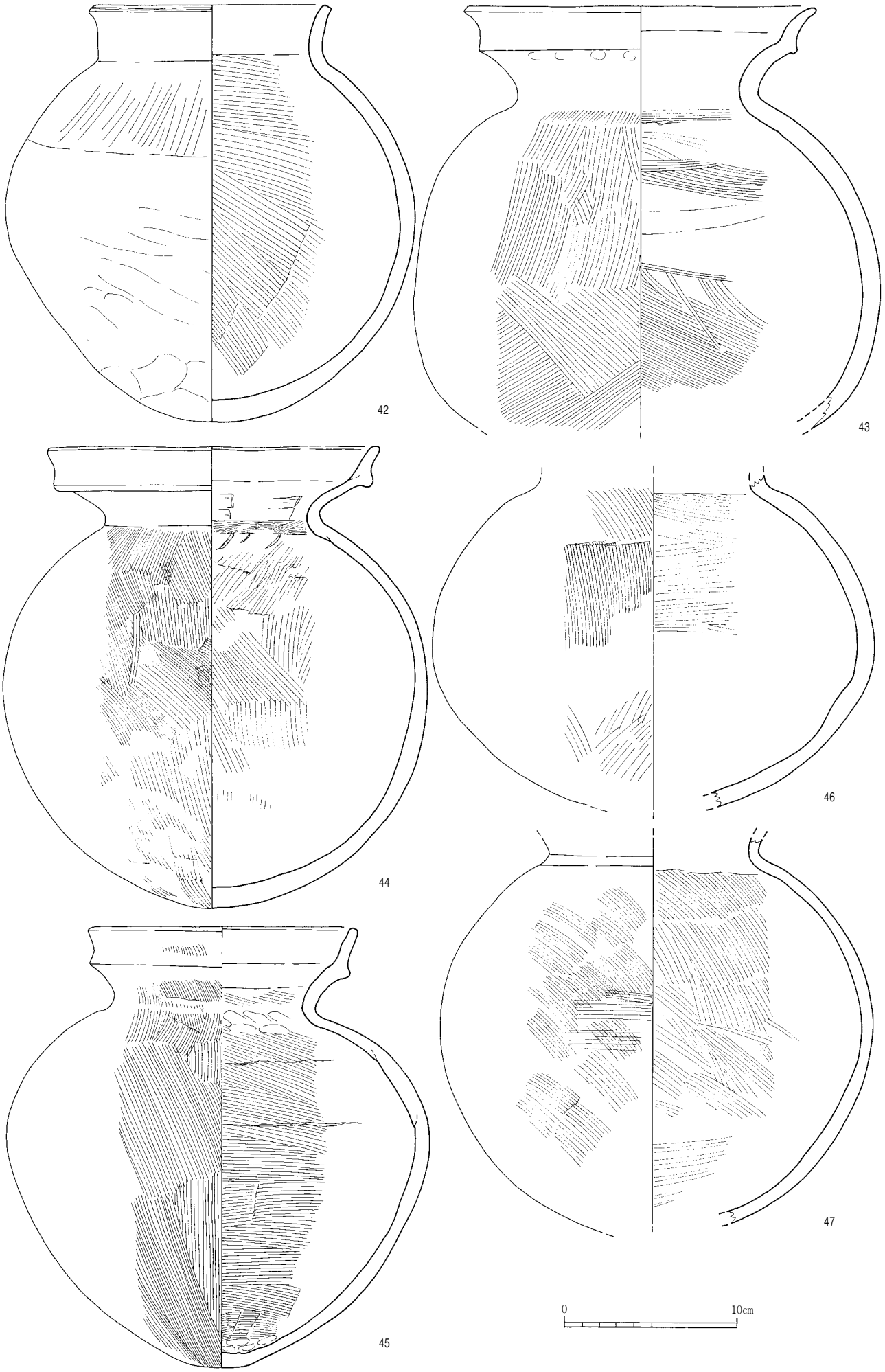
第125図　5次1区　89号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）



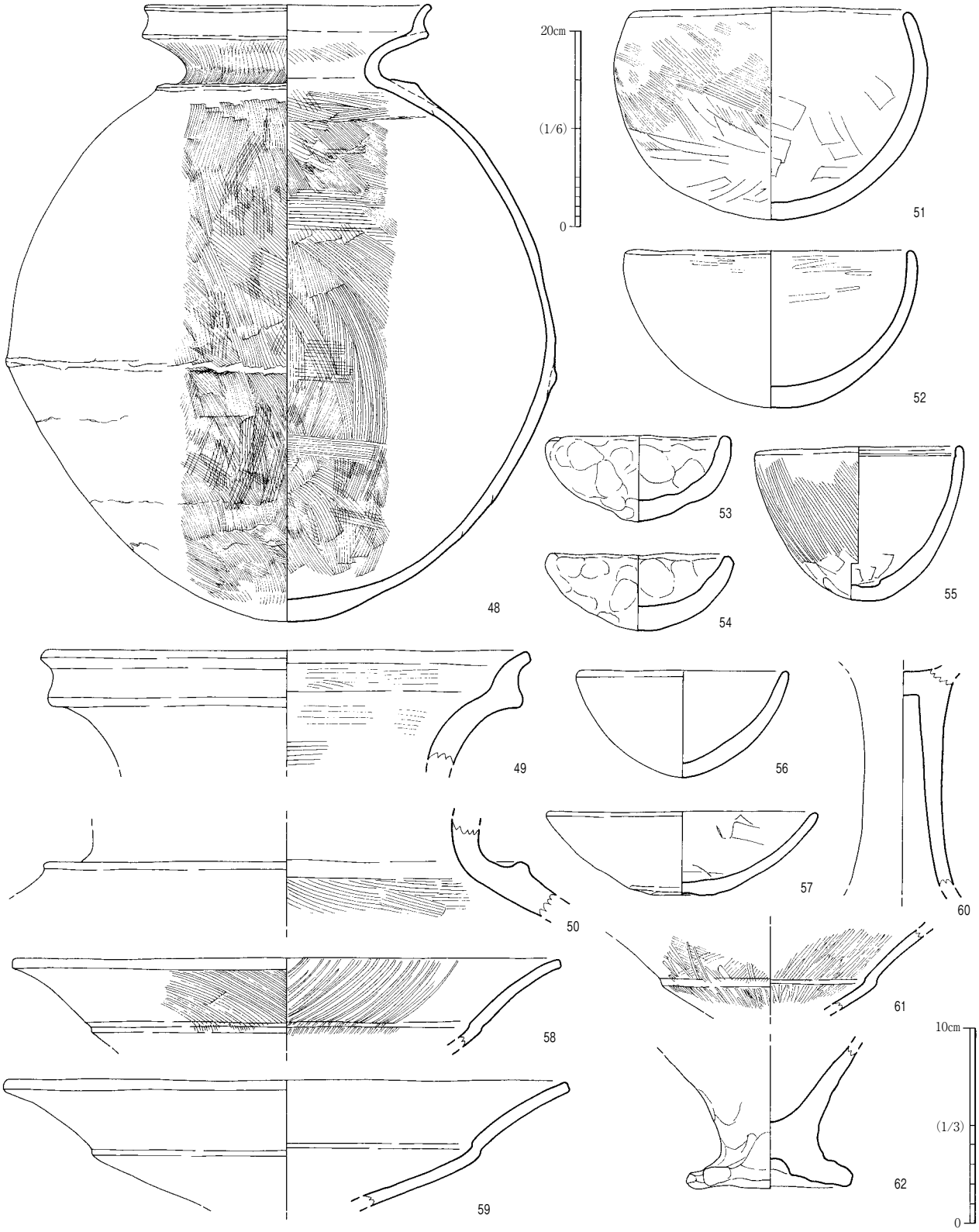
第 126 図　5 次 1 区　89 号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/3）



第127図　5次1区　89号竪穴住居跡出土土器実測図③（1/3）



第128図　5次1区　89号竪穴住居跡出土土器実測図④（1/3）



第129図　5次1区　89号竪穴住居跡出土土器実測図⑤（48は1/6、他は1/3）

をはかり、３は小型品で胴部最大径は15.2cmをはかる。４は甑の口縁部片か。小片で径はやや自信がない。わずかに内湾しながら直線的に開く。器壁調整は内・外面ともにハケ目。５・６は小型器台であろう。いずれも鼓形の器形を持ち、６は脚部上位に３孔をうがつ。７は脚付碗か。脚部はごく短い。碗は下半部が半球状で、口縁部は直立して先端がわずかに外反する。これらの資料は１・４をのぞき古墳時代前期後半に比定できよう。なお整理段階に混乱があり、１は86号住居跡出土の可能性もあるので注意されたい。（小澤）

89 号竪穴住居跡（図版 42・43、第 124 図）

調査区の南東部に位置する竪穴住居跡である。主軸は南北にとるが西に５度ほど振れる。長さが南北 3.96 m、幅が東西 4.16 mの略正方形プランをもち、残存する深さは約 15cm。主柱穴は床面を精査するも確認できなかった。埋土は単層で、貼床をもち、床面は踏みしめられ硬化していた。また壁際土坑とみられる浅い掘り込みが南壁中央に確認された。さらに住居跡のおよそ中心部に、床に形成された硬化面を掘り込む形で土器埋納遺構が検出された。土坑の底には口縁部を打ちかいた底部穿孔を施した甕（32）の胴部上半が置かれ、その内部・外周には内面を上に向けた土器片が重なっている。特に外周のものは花弁状に広がっていた。炉の可能性を想定したが灰や焼土、炭化物は確認されず、性格は不明である。住居跡の埋土掘り下げ時には気づかなかったこと、土器片の上位がおおよそ床面レベルでそろうことなどから、床面から掘り込まれた遺構である可能性が極めて高いが、その性格は不明とせざるを得ない。（細石）

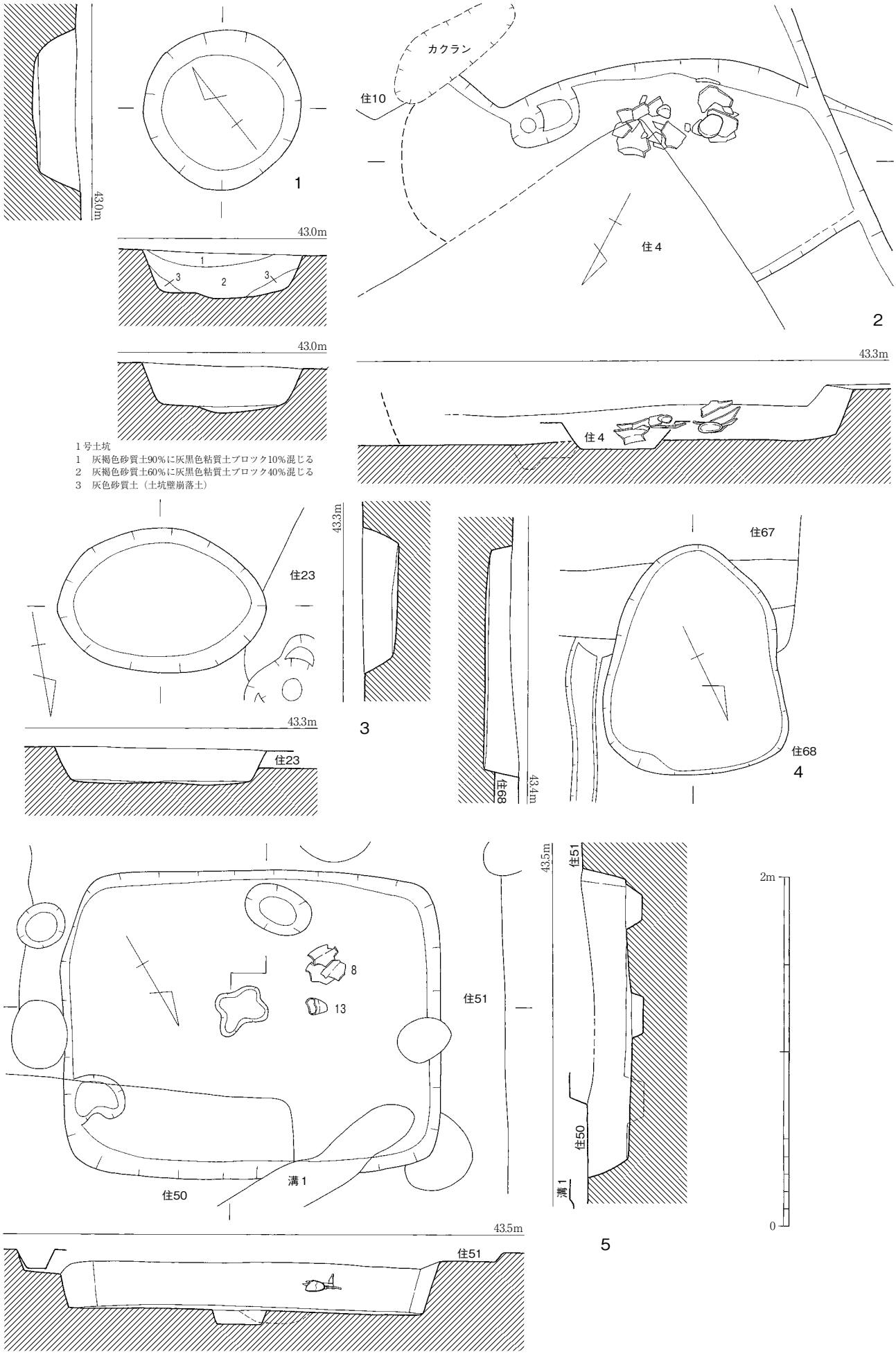
出土遺物（図版 64・65、第 125 ～ 129 図）

弥生土器（１～９）　１～８は甕である。いずれも長胴で、「く」の字形に外反する口縁部を持つ。器壁内・外面にハケ目またはナデ調整を施し、底部外面には板ナデ痕がみられるものもある。底部形状は、レンズ状を呈する（とみられる）４・８、尖底気味の１・３、尖底の５があり、ややバリエーションに富む。９は壷の胴下半部～底部片。胴部最大径付近に断面が低いカマボコ状の突帯を回す。底部はわずかにレンズ状を呈し、器壁調整は内・外面ともにハケ目。これらは弥生時代後期後半～末の資料である。

土師器（10 ～ 62）　10 ～ 33 は甕である。10 ～ 20 は口縁部径が 20㎝前後をはかる大型の甕で、「く」の字形に外反する口縁部付近が残る資料である。胴部が膨らむものとあまり膨らまないものの２者がある。器壁調整は内・外面ともにハケ目、口縁部付近のみその上からナデを施す。21 ～ 36 は口縁部径が 18㎝程度以下の中・小型の甕である。口縁部形状には、比較的明瞭に屈曲する 21・22・26 と、屈曲部が不明瞭で外反の程度が少ない 23 ～ 25 の２群がみられ、後者の方が器壁は厚く粘土帯接合部の凹凸が残る傾向があることから、粗製品と位置づけられよう。器壁調整は大型の甕と同じである。27 ～ 31 は長胴気味の胴部とやや尖底気味の丸底が残る資料で、いずれも口縁部形状は不明。32 も同様の器形を持つが底部に焼成前とみられる穿孔が施されている。33 は丸底にバケツ状の胴部を持つやや珍しい器形の甕の胴部片である。

34 ～ 50 は壷である。34 ～ 37・42 は短頸壷である。球状の胴部と、やや立ち気味に外反する短い口縁部を持つ。器壁調整は基本的に内・外面ともにハケ目がみられ、一部に板ナデ痕が認められる。35 が大型で口縁部径が 25.0㎝、胴部最大径は 35㎝程度になるか。34・36・37 は中型で、口縁部径が 18 ～ 22㎝、胴部最大径が 30㎝前後となろう。42 はやや小さく、口縁部径が 13.8㎝、胴部最大径は 24.2㎝をはかる。38 ～ 41・43 ～ 45・48・49 は二重口縁壷である。38 ～ 41・49 は口縁部付近のみが残る資料である。いずれも口縁部の屈曲から上がやや開き気味に外湾する形状である。43 ～ 45・48 は球状の胴部が残る資料である。いずれも頸部の締まりは中程度で頸部は短く、口縁部内面の段は退化しきっておらず、口縁部はわずかに外湾しながら開く。48 は胴部最大径 55.0㎝をはかる超大型品で、ほかは胴部最大径が 40㎝前後の大型品である。

50 は壷の頸部片である。頸部は強く締まり胴部上半は大きく開く。肩部外面に突帯を一条めぐらせる。51 ～ 57 は碗である。51 はやや深く口縁部が強く内湾する。52 は半球形を呈する。53・



第130図　5次1区　1～5号土坑実測図（1/30）

54は小型で浅く、内・外面に指頭圧痕を多く残す手づくね土器である。55は器高があり口縁部径が小さい。56は底部が尖底気味の資料で、57は浅い皿状を呈する。58～61は高坏である。58・59・61は坏部片である。いずれも中位に段を形成し、口縁部は強く開く。61は内・外面にミガキ調整を施しており、特に外面は放射状に施されたヘラミガキ痕が暗文状に見える精製品である。60は脚上位片である。筒状に成形されており坏底部が一部残る。

以上の資料は古墳時代前期前半～中葉に位置づけられる資料群であろう。（小澤）

（３）土坑

１号土坑（図版43、第130図）

１区北東隅に位置し、10号住居跡を切り、16号住居跡も切る。規模は径90cm、深さ最大25cmを測る、円形土坑である。床面中央が一段深くなり、壁の傾斜は緩やかである。埋土は１・２層がレンズ状に堆積し、３層は土坑の壁の崩落土である。

切り合い関係及び出土土器から古墳時代後期の土坑と考えられる。

出土遺物（第131図１～５）

土師器（１～５）　１～３は碗である。１は内湾する口縁部で、内外面にはミガキを施し、後黒化処理を行う。生地はこげ茶色。２は口縁部が外反するもので､内外面にミガキを施す。色は橙褐色。３は直口のもので、外面はハケのちミガキ、内面はミガキを施す。外面にはスリップを塗布する。色は灰黄褐色。４は鉢で、外面は浅いケズリ後ナデを施す。色は淡橙褐色。５は布留系器台の脚部か。外面にはスリップを塗布する。色は灰黄褐色。

２号土坑（第130図）

１区北東に位置し、４・10号住居跡に切られる。４号住居跡により土坑北側を大きく壊され、東壁は掘り失っているが、破線で復元した箇所に東壁が存在した可能性が高く、その部分で計測すると、規模は東西258cm、南北125cm以上、深さ最大30cmを測る、不整形土坑である。床面はほぼ平坦であるが､壁の傾斜は急である。床面から５cm程度浮いた状態で弥生土器甕（６）が出土した。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土土器から弥生時代後期終末の土坑と考えられる。

出土遺物（図版65、第131図６）

弥生土器（６）　ほぼ完形の甕で、口径22.3cm、器高35cmを測る。口縁端部は丸く収める。底部は小さな平底を持ち、底部をナデによりわずかに窪んだ上げ底状に仕上げている。内面胴部中位以上と外面はハケ調整である。外面は被熱痕とスス、内面には炭化物が認められる。

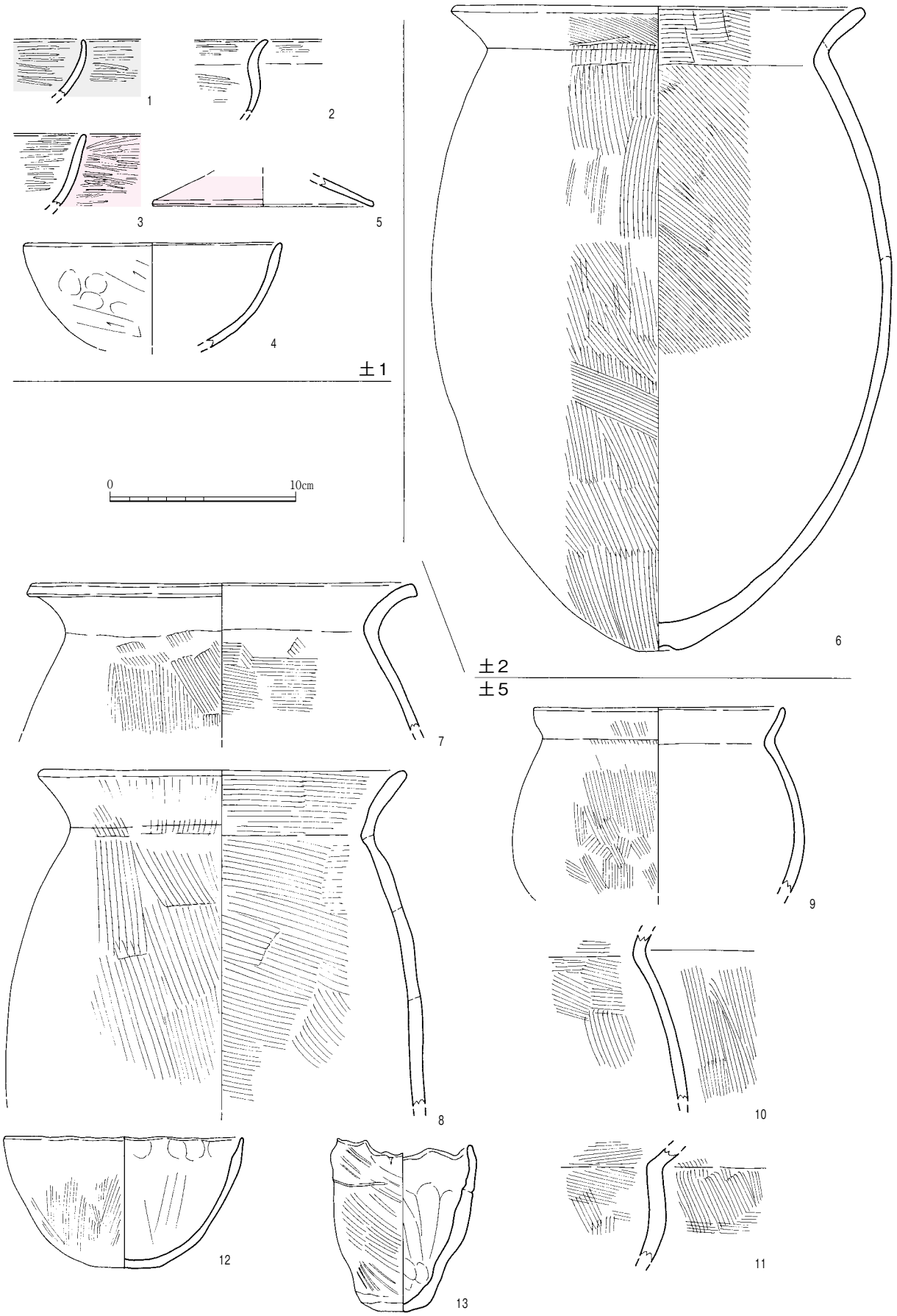
３号土坑（図版44、第130図）

１区北中央の西寄りに位置し、23号住居跡を切る。規模は東西120cm、南北83cm、深さ20cmの長楕円形土坑である。床面は平坦で、壁の傾斜は緩やかである。埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土土器はないが、切り合い関係及び埋土から古墳時代後期の土坑と考えられる。

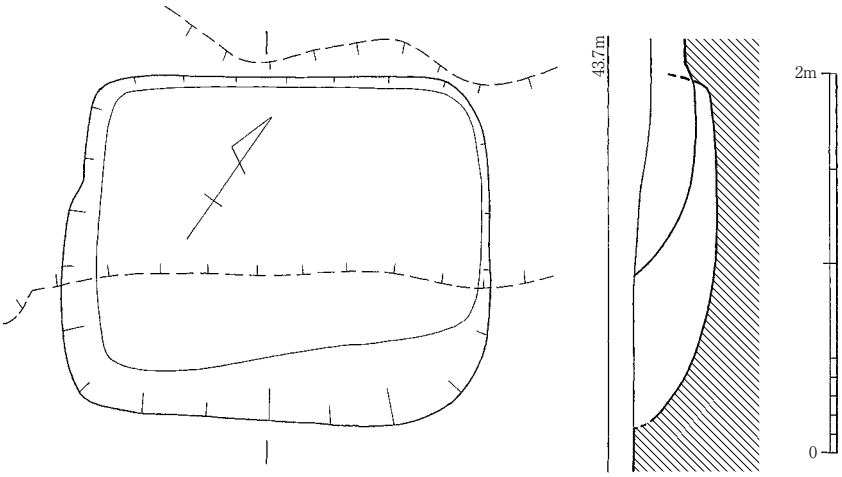
４号土坑（第130図）

１区中央の南東寄りに位置し、67・68号住居跡、１号溝を切る。検出時には土坑範囲に白色粘



第 131 図　5 次 1 区　1・2・5 号土坑出土土器実測図（1/3）

土が広がり、掘削したところ土坑内を粘土のみで充填させたものと判明した。規模は南北 132cm、東西 105cm、深さ 21cmの長楕円形土坑である。床面は平坦で、壁の傾斜はやや急である。



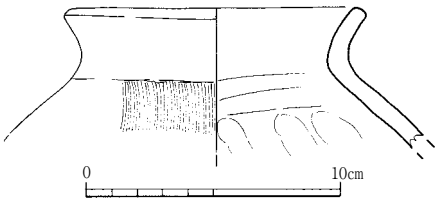
第 132 図　5 次 1 区　6 号土坑実測図（1/40）

出土土器で図示できるものはないが、切り合い関係埋土から古墳時代後期以降の土坑と考えられる。

５号土坑（図版 44、第 130 図）

１区南西に位置し、50・51 号住居跡、１号溝に切られる。規模は東西 219cm、南北 178cm、床面中央部の一段下がる部分まで深さ 35cmの隅丸方形土坑である。床面は平坦で、壁の傾斜は急である。床面から 13 cm浮いた状態で、在地系甕（８）と粗製鉢（13）が出土した。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器から古墳時代前期前半の土坑と考えられる。



第 133 図　5 次 1 区　6 号土坑出土土器実測図（1/3）

出土遺物（図版 65、第 131 図７～ 13）

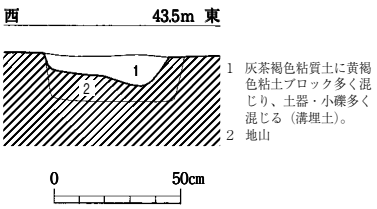
土師器・弥生土器（７～ 13）　７～ 12 は在地系甕である。色は７が黄褐色で、８～ 10 が灰黄褐色を呈する。７は口縁部を強く外反させるもの。８は長胴で、口縁端部は丸く収める。外面には黒斑と被熱痕、内面には被熱痕と炭化物が認められる。復元口径 20cmを測る。９は内湾する口縁部を持つ。11 は在地系外反口縁鉢である。色は灰黄褐色。12 は在地系直口鉢である。外面はハケ後ナデ、内面はナデで調整する。外面は強く被熱する。色は灰黄褐色。13 はほぼ完形品で、口縁部が波打つ粗製の鉢。口径 7.9cm、器高 9.4cmを測る。外面にはハケ後ナデを施し、内面にはナデの稜が残る。色は灰黄褐色。

６号土坑（図版 44、第 132 図）

調査区南東部に位置する隅丸長方形の土坑である。北西側の半分は撹乱によって上部が破壊されている。長軸は北東－南西にとり、規模は長軸 2.02 m、短軸 1.50 mを測る。残存深さは約 45cm。遺構埋土は暗褐色粘砂質土の単層で分層できない。底部はおよそ平坦な面をなすが、南東側はやや緩やかな傾斜の壁面をもつ。出土土器から古墳時代前期に位置づけられよう。（細石）

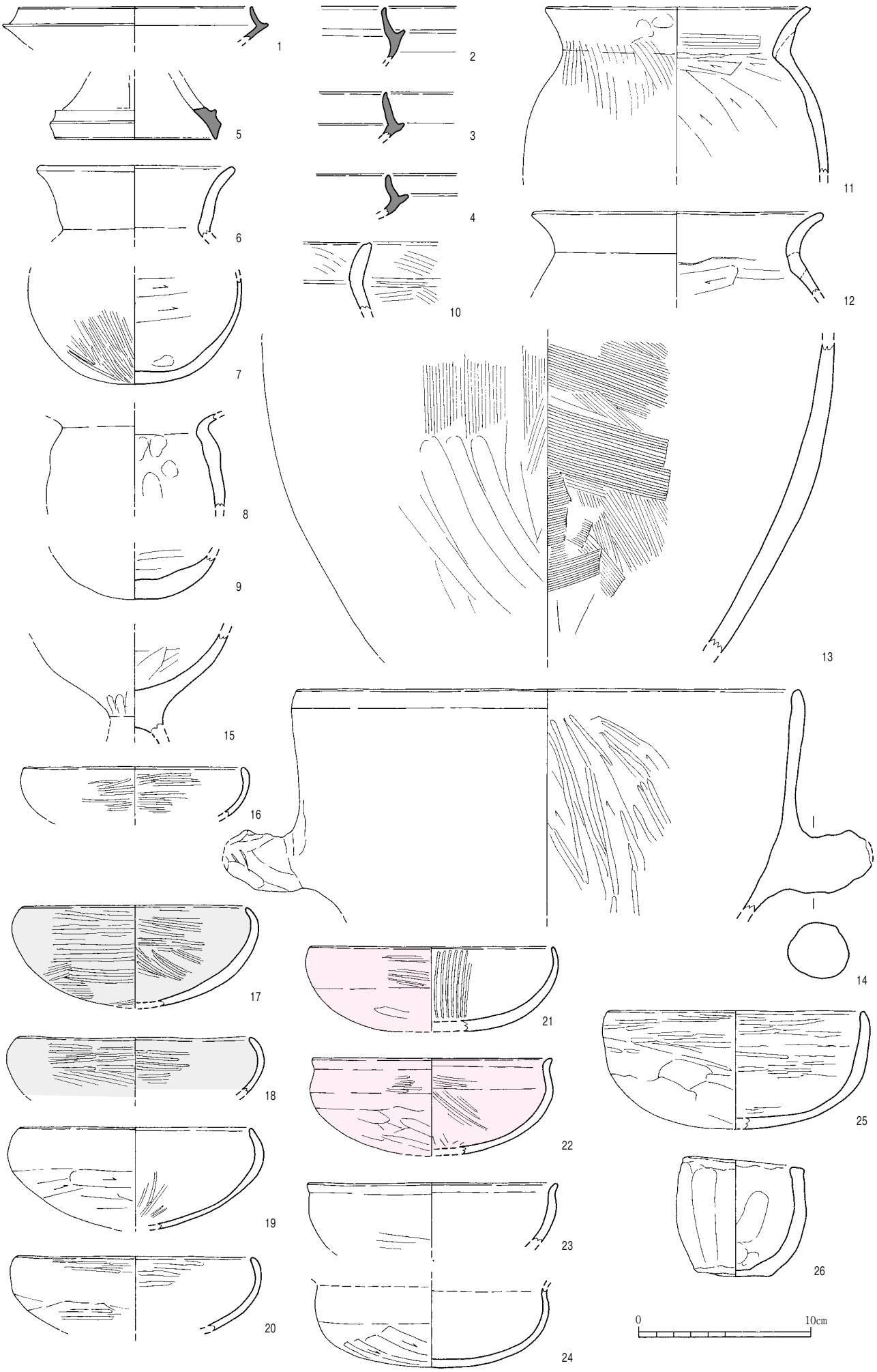
出土遺物（第 133 図）

文中写真 26　１号溝土層（南西から）



第134図　５次１区１号溝土層実測図（1/30）

土師器（１）　１は短頸壷の口縁部片である。口縁部は小さく、肩部以下の開きはやや緩やかで、おそらくやや長胴気味となろう。古墳時代前期の資料か。（小澤）



第135図　5次1区　1号溝出土土器実測図（1/3）

（４）溝

１号溝（第 134 図）

１区南を北東－南西方向に縦断する溝で、４号土坑に切られ 50・51・53・56・67 号住居跡、５号土坑を切る。１区では「コ」の字状に巡る近代の排水溝（撹乱として報告）の軸に合わせるように東西南北に耕作に伴うと思われる溝（撹乱として報告）を多く検出したが､当溝のみ軸が異なり、出土土器も古墳時代後期の土器に限定されることから、溝として報告する。溝は南西端と北西端で途切れるが、長さ 23.6 m以上、幅は中央部で最大 1.2 m、深さは中央部で 13㎝を測り、やや中央部が湾曲する平面形となる。床面のレベルから南西から北東に向かって傾斜するが、北東部で近代の排水溝と繋がり、溝はなくなるが、近代の排水溝に壊されて失ったことによるものと考えられる。溝の埋土は１の１層のみである。覆土より鉄素材の可能性がある不明鉄製品（第 142 図４）が出土した。

出土土器から最終埋没は６世紀末に位置づけられる。

出土遺物（図版 66、第 135 図）

須恵器（１～５）　１～４は坏身で、いずれも色は灰色を呈する。１は復元口径 13.8㎝を測るが、小片のため径が不安である。外面には自然釉が付着する。２は口縁端部をナデで面取りし、外面には自然釉が付着する。３は口縁部及び受け部端部に打ち欠きを行った可能性がある。５は高坏脚部で、透かし孔は４ヶ所施したか。外面には薄く自然釉が付着する。色は灰色。

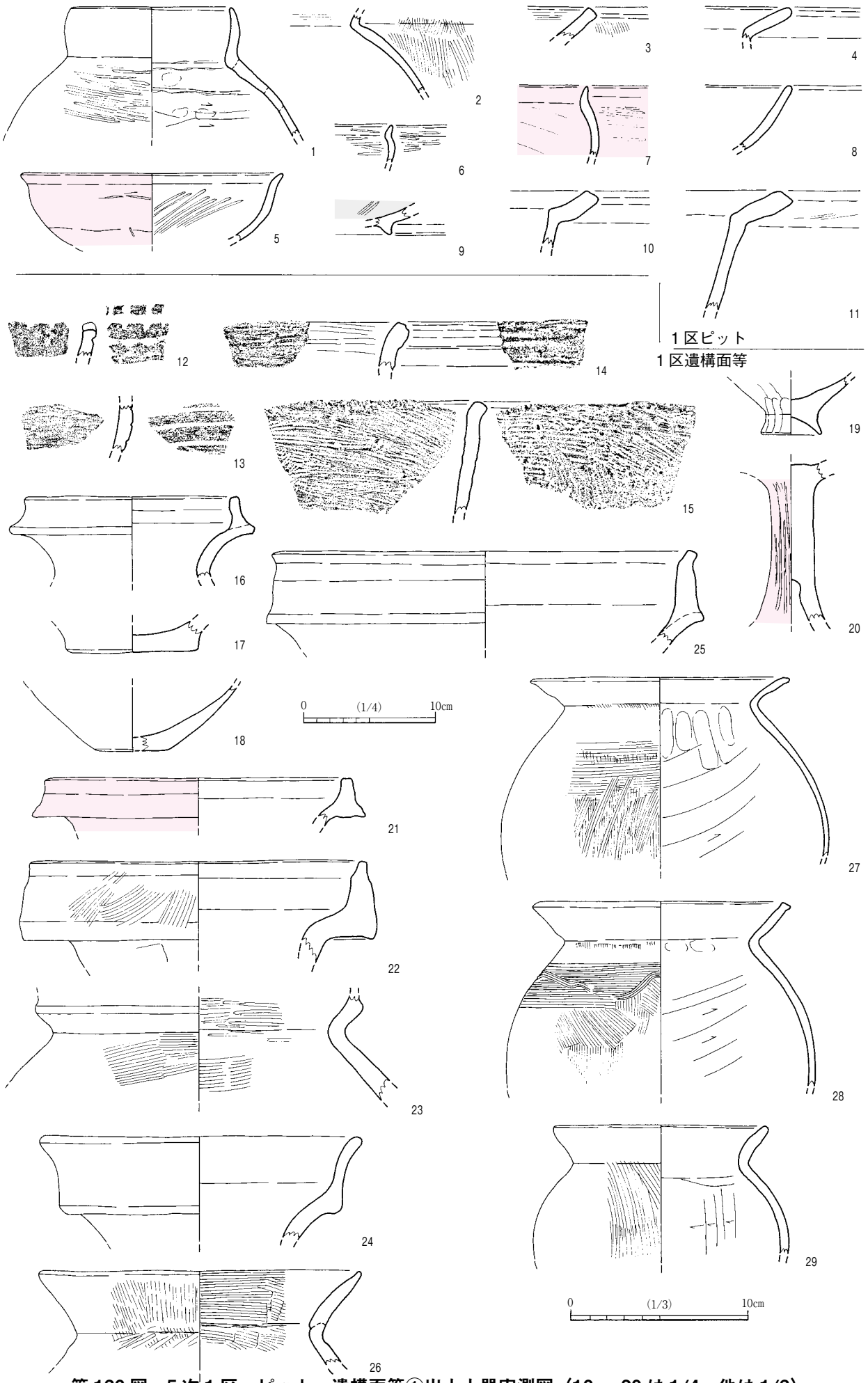
土師器（６～26）　６・７は壺である。６は直口壺口縁部で、口縁端部には黒斑あり。色は褐色。７は球状の胴部外面に縦ミガキ、内面中位以上はケズリを施す。色は橙褐色～灰黄褐色。８～ 13 は甕である。12・13 は黒斑、８・９・11・12 は被熱、９はススが認められる。色は８が褐色、９～ 11 が黄褐色、12 が暗黄茶褐色、13 は灰黄褐色を呈する。８は粗製で、内外面ナデで調整するが、指押さえ痕が多く認められる。10 は直立する口縁部で、頸部内面にはナデにより凹線状に窪んだ箇所がある。11 の内外面には粗いハケ後ナデを施し、胴部内面は頸部までケズリを施す。胴部内面には炭化物が付着する。12 は頸部内面までケズリを施す。13 は大型甕胴部片で、外面はハケ後胴部下位は縦ナデ、内面はハケ、内面下位は工具ナデ後ナデで調整する。色は灰黄褐色。

14 は甑で、復元口径 29.4㎝を測る。外面はナデ、内面はケズリ後縦方向の粗いヘラナデを施す。外面にはススが付着する。色は灰茶褐色。15 は高坏で、碗状の坏部を持つ。脚部外面と坏部内面はヘラナデを施す。色は褐色。

16 ～ 25 は碗である。20 ～ 22・25 は外面下位にケズリ後内外面ミガキを施す。17・18 は外面下位にハケ後内外面ミガキを施す。17・18 は内外面黒色処理、21 は外面のみ、22 は内外面スリップを塗布する。色は 17・18 が灰黒色、19 が橙褐色、20・21 は茶褐色、22・23・25 は黄褐色、24 は赤褐色を呈する。16 ～ 21 は口縁部が内湾するもの。16 は内外面ミガキを施し、内外面一部は黒化する。19 の外面下位はケズリ、外面上位はナデ、内面は暗文状のミガキを施す。21 の内面は暗文状のミガキを施す。22 ～ 24 は口縁端部が外反するもの。23 の外面下位にはナデの稜が残る。24 は内外面の摩滅が顕著である。25 は復元口径 15㎝を測るもので、外面には被熱痕とススが認められる。26 は手づくね土器。蛸壺の可能性がある。外面には黒斑あり。色は橙褐色。

（５）ピット出土土器（第 136 図１～ 11）

１・２は壺である。１は口縁部が内湾する古墳後期土師器壺で、胴部外面はミガキ、胴部内面中



第136図　5次1区　ピット・遺構面等①出土土器実測図（16～20は1/4、他は1/3）

位以下はケズリを施す。胴部内面には粘土継ぎ目痕が残る。色は黄褐色。Ｐ８出土。２は古墳前期直口壺胴部。外面にはススが付着。色は灰黄褐色。Ｐ 50 出土。３・４は弥生後期～古墳前期在地系甕口縁部。色は灰黄褐色。３はＰ 94 出土。４はＰ 97 出土で、外面にはススが付着する。５～７は古墳後期の外反口縁の碗。Ｐ８出土。５の外面下位はケズリ、内外面はミガキを施す。外面にはスリップを塗布する。色は灰黄褐色。６の色は橙褐色。７の外面はミガキ､内面は工具ナデを施す。内外面スリップを塗布する。色は暗黄茶褐色。Ｐ 17 出土。８は古墳後期直口鉢口縁部。外面下位はケズリを施す。Ｐ 33 出土。９は黒色土器Ａ類の高台付碗底部。内面はミガキを施し、黒化処理を行う。色は灰黄褐色。Ｐ９出土。10・11 は土師質土器鍋口縁部。いずれも外面にススが付着し、色はこげ茶色。10 はＰ 17、11 はＰ 33 出土。

（６）遺構面等出土土器（図版 66・67、第 136・137 図 12 ～ 105）

縄文土器（12 ～ 15） 12 は後期深鉢口縁部で、口縁端部にヘラ工具による刻目、口縁部下に押し引きの刺突を施す。内外面はナデ調整である。色は黄褐色。13 は後期末の深鉢胴部。外面はナデのち四条以上の平行凹線を巡らす。内面は条痕で調整する。色は淡褐色。14 は晩期前半の深鉢口縁部。口縁端部は肥厚し、内外面の調整は板状工具による擦過である。色は暗灰黄褐色。15 は晩期の粗製深鉢口縁部で、内外面板状工具による条痕を施している。色は灰黄褐色。

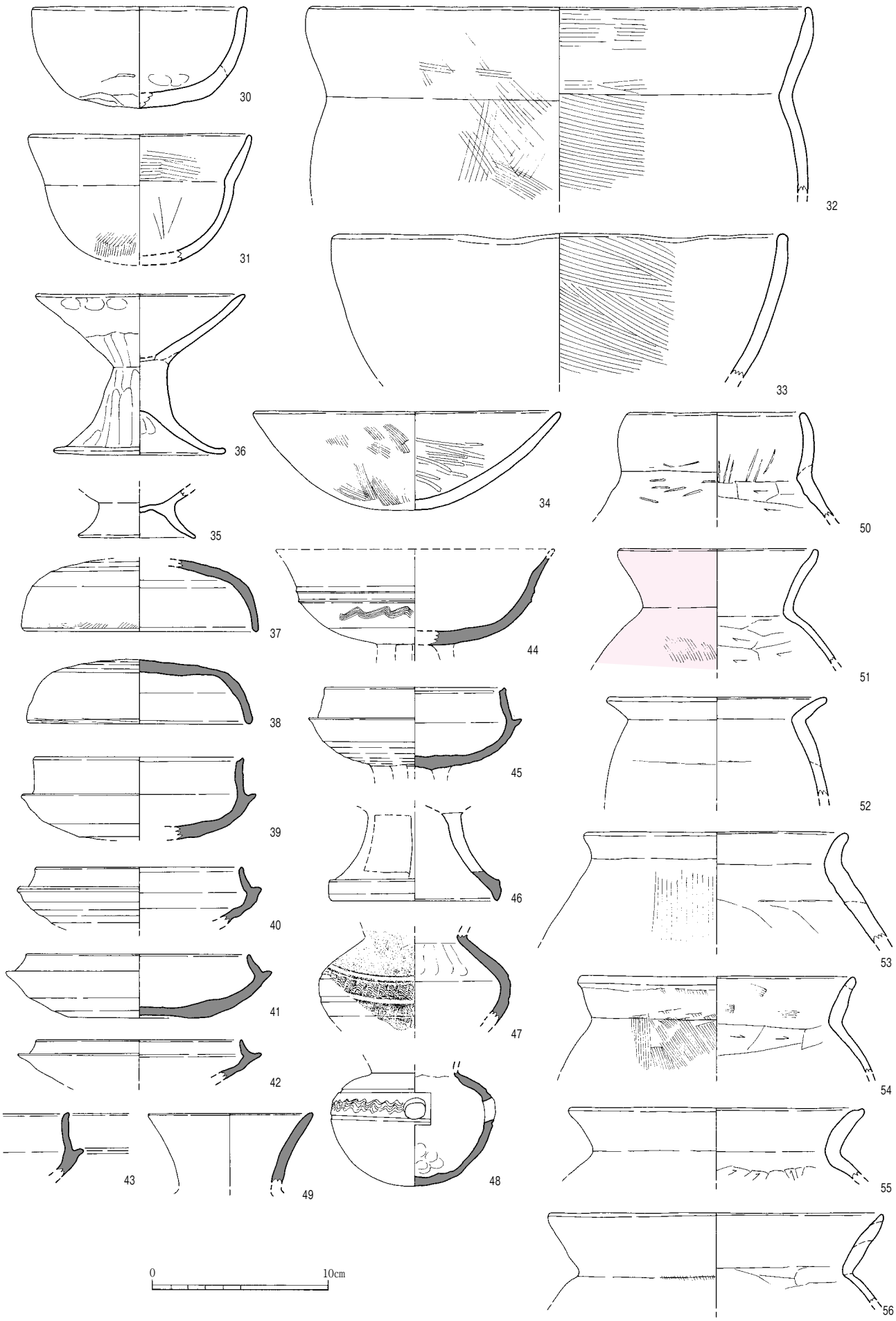
弥生土器（16 ～ 20） 16 は在地系二重口縁壺。内面には工具痕あり。色は灰黄褐色。17・18 は甕である。色はいずれも灰黄褐色。17 は若干凸レンズ状になるが、ほぼ平底である。18 は小さな平底を残した凸レンズ底である。内面には細かいハケを施す。19 は脚付鉢の底部か。外面には黒斑あり。色は灰黄褐色。20 は在地系高坏脚柱部で、外面はミガキ後スリップを施す。色は灰黄褐色。

古墳時代前期の土師器（21 ～ 36） 21 ～ 25 は壺である。色は 21・23 ～ 25 が灰黄褐色、22 が黄褐色を呈する。21 ～ 24 は在地系二重口縁壺口縁部。21 の外面にはスリップを塗布する。22 の口縁部外面にはハケを施し、頸部外面には工具ナデ後ナデを施す。23 の口縁部内面はミガキを施す。24 の口縁部は開く。25 は瀬戸内系二重口縁壺の口縁部。復元口径 24.2㎝を測る。内面には黒斑あり。

27・28 は布留系甕、29 は在地系甕である。27 ～ 29 の外面にはススが付着する。色は 27・28 が灰黄褐色、29 は褐色を呈する。27 は口縁端部を外につまみ出したもの。胴部外面上位は縦ハケ後横ハケ、最後に細い縦ハケを粗く施す。胴部内面のケズリは頸部から下がった位置に施す。28 の口縁端部は肥厚させたもので、胴部外面上位は縦ハケ後横ハケ、さらに二条の波状文を施す。胴部外面中位には厚くススが付着する。内面のケズリは頸部から下がった位置まで施す。内面には炭化物が薄く付着する。29 の外面はススが顕著に付着し、胴部内面の一部にヘラナデを施す。

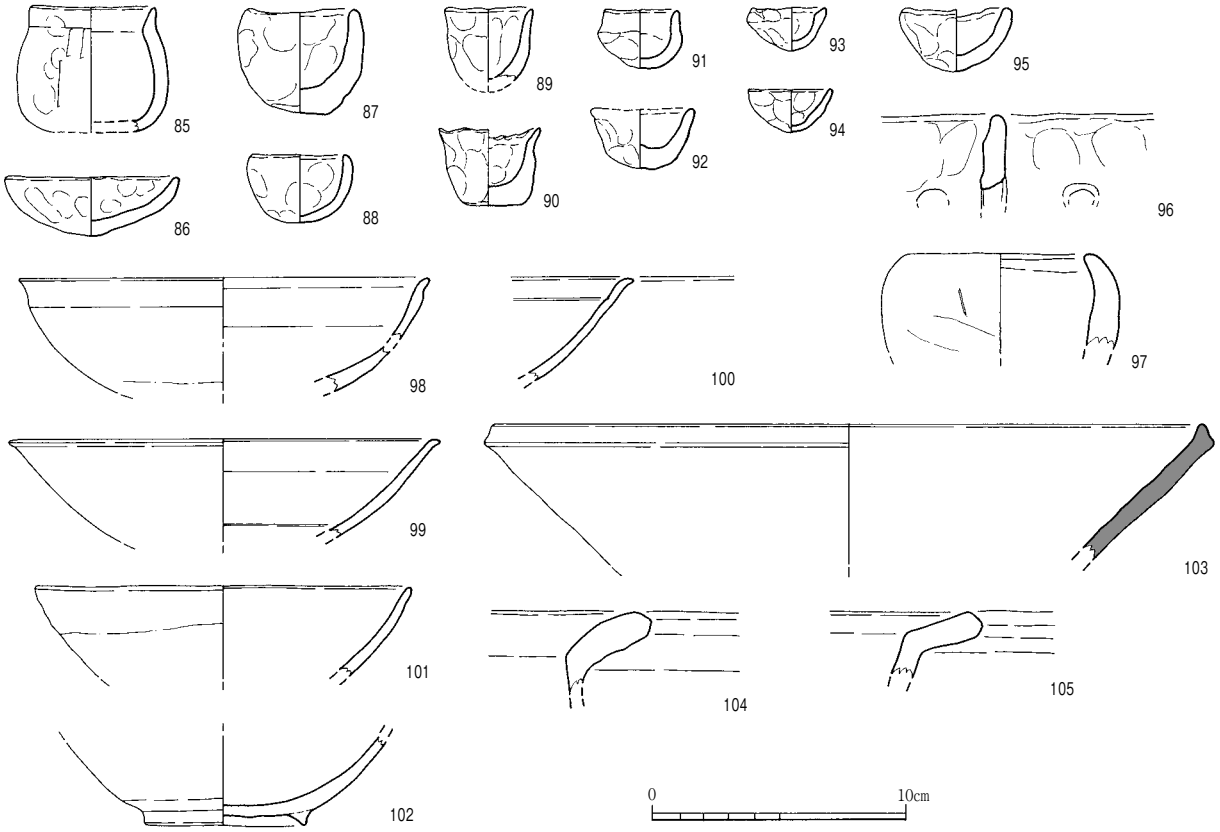
30 ～ 34 は在地系鉢である。色は 30 が灰黄褐色、31・32 が黄褐色、33 が褐色、34 は黄褐色を呈する。30 は器壁が厚い碗状のもので、底部外面はケズリを施し、粘土継ぎ目痕もみえる。31 は外反口縁鉢で、体部内面には工具痕あり。32 は大型鉢で、口縁部は内湾する。外面は粗いハケで、内面のハケと原体が異なる。外面にはススが付着する。33 は大型の粗製鉢で、口縁部は波打っている。外面にはスス、内面には炭化物が付着する。34 の外面は細かいハケ後ナデ、内面はミガキとナデで調整する。外面には黒斑あり。35 は脚付鉢の脚部で、色は淡黄褐色。36 は布留系譜の小型器台になるか。完形に近いもので､復元口径 12㎝を測る。内外面ナデで調整する。色は灰黄褐色。

須恵器（37 ～ 49） 37・44 ～ 48 は外面に自然釉が付着する。色は 37 ～ 43・45 ～ 47 が灰色、44・



第 137 図　5 次 1 区　遺構面等出土土器実測図②（1/3）

第 138 図　5 次 1 区　遺構面等出土土器実測図③（1/3）



第 139 図　5 次 1 区　遺構面等出土土器実測図④（1/3）

48 は青灰色、49 は灰黒色を呈する。37・38 は坏蓋である。いずれも口縁端部は丸く収め、口縁外端部にハケ目を施す。37 は復元口径 13.6cm。38 は復元口径 13cmを測る。39 ～ 43 は坏身である。39 は口縁端部にナデ凹線が巡る。復元口径 12.0cmを測る。42 の復元口径は 11.8cmを測る。43 の口縁端部はナデで面取りする。44 ～ 46 は高坏である。44 は無蓋高坏坏部で、二条のナデ凸線下に七条の櫛描波状文を施す。脚部には透かし孔を施すが、孔数は不明である。45 は有蓋高坏坏部で、復元口径 10.4cmを測る。口縁端部はナデで面取りし、受け部には重ね焼きした痕跡が認められる。透かし孔は 4 方向施したと思われる。46 は脚部で 3 方向に透かしを施す。内外面に自然釉が付着する。

47・48 は䐏体部である。47 は工具による二条の凹線間に四条の櫛描波状文を施す。なお、凹線下の細い凹線も意図的に巡らしたものの可能性がある。48 は二条の工具による凹線間に最大五条の櫛描波状文を施し、孔は 1 ヶ所焼成前に施す。外面肩部に「×」字形の針等の細い工具で刻んだヘラ記号が確認される。内面底部も自然釉が付着する。

古墳中後期土師器（50 ～ 97）　50・51 は直口壺口縁部で、胴部内面のケズリは頸部まで施す。50 は内湾する口縁部で、内外面には工具痕が顕著にみられる。色は灰黄褐色。51 は外面のみスリップを施す。52 ～ 57 は甕である。57 は黒斑、54 は被熱痕、54・56 はススが認められる。色は 52・53・55・57 が灰黄褐色、54 は褐色、56 は黄褐色を呈する。52 は口縁部が「く」の字形に屈折するもの。53 は短く口縁部が外反し、胴部外面は工具ナデ、内面は浅いヘラケズリを施す。54 は内面頸部までケズリを施す。口縁部外面には粘土継ぎ目痕あり。55 の口縁内端部にはナデ凹線があり、胴部内面のケズリは細かいものである。56 の胴部内面にはナデの稜が残る。57 の胴部外面は工具ナデ、内面にはケズリを施す。

58 ～ 68 は甑である。58・67 は黒斑、60・66 は被熱痕。60 はススが認められる。色は 58 が茶褐色、

59・64 ～ 66・68 が灰黄褐色、60・61・67 が灰橙褐色、62 が黄褐色、63 が暗黄茶褐色を呈する。58 は小型のもので、外面は工具ナデ、内面はケズリを施す。59 の外面はハケ、内面は口縁部付近は工具ナデ、体部はナデで調整する。60 の外面は顕著な被熱を受けるが、工具ナデ後ナデ、内面はケズリを行い、口縁部は後ナデを施す。61 は単孔で、内外面ナデ調整である。62 ～ 67 は把手である。68 は甑底部の桟である。胎土は精良である。

69 ～ 74 は高坏である。70・73 の内外面は黒化処理を行う。色は 69・74 が黄橙色、70・73 が灰黒色、71 が暗黄茶褐色、72 が灰黄褐色を呈する。69 は坏部で屈曲部の稜はわずかな段になっている。70 は坏部口縁端部をわずかに外反させる。外面下位はケズリを施し、後内外面ミガキを施す。71 は口縁部が強く内湾する碗状の坏部で、内外面はミガキを施す。72 は内外面ミガキを施した後スリップを施す。73 の脚裾部端部はナデで面取りする。

75 ～ 83 は碗である。75 ～ 79 は口縁部が直立するもの、80・81 は口縁部が内湾するもの、82・83 は口縁部が外反するものに分類し、それぞれ口径順に割り付けた。外面下位はケズリ、後内外面ミガキを施すものは 75・81、内外面黒化処理を行うものは 75・80 ～ 82 である。色は 75・77・79 ～ 81 が灰褐色、76 が茶褐色、78・82 は橙褐色、83 は灰黄褐色。75 の復元口径は 13.4cmを測る。76 の外面下位は粗いミガキ後ケズリを行う。77 は器高が浅く皿状になる珍しいもの。外面は粗いハケ、内面底部のみミガキを施す。81 の内面黒化処理は黒漆を使用した可能性がある。83 の外面下位はケズリ後ナデを行い、外面のみスリップを施す。84 は直口鉢口縁部。色は橙褐色。

85 ～ 95 は手づくね土器である。87 は黒斑、88・91 はススが認められる。色は 85・92 ～ 94 が灰黄褐色、86・88・89・95 が黄褐色、87 が褐色、90 が橙褐色、91 が淡茶色を呈する。85 は直口鉢形。外面には工具痕あり。87 はほぼ完形で、口径 6.4cmを測る。89・90 は端部が外反するもの。90 は完形で、口径 4 cmを測る。91 も完形で、口径 3 cm。95 は完形で、口径 4.5cm。96・97 は蛸壺である。色はいずれも黄褐色。96 の穿孔は焼成前に 1 ヶ所施す。97 の外面は工具ナデ後ナデを施し、外面には黒斑あり。

白磁（98 ～ 100） 98 ～ 100 は口縁部が嘴状に外に突出する白磁碗で、いずれも胎土は灰白色で、硬質、気泡があり、釉は灰緑色の暗い透明釉である。98 は丸みを帯びた体部で、外面下位は露胎である。太宰府分類Ⅷ類か。99 の内面には沈線が上下二条巡る。太宰府分類Ⅷ - 1 類。100 の内面には沈線が一条巡る。太宰府分類Ⅷ - 1 類。

瓦器（101） 101 は瓦器碗である。外面中位で色が暗灰色と灰白色に分かれる。

中世土師器（102） 102 は碗である。底部見込みに板状圧痕が残る。内外面被熱が顕著である。色は黄橙色。

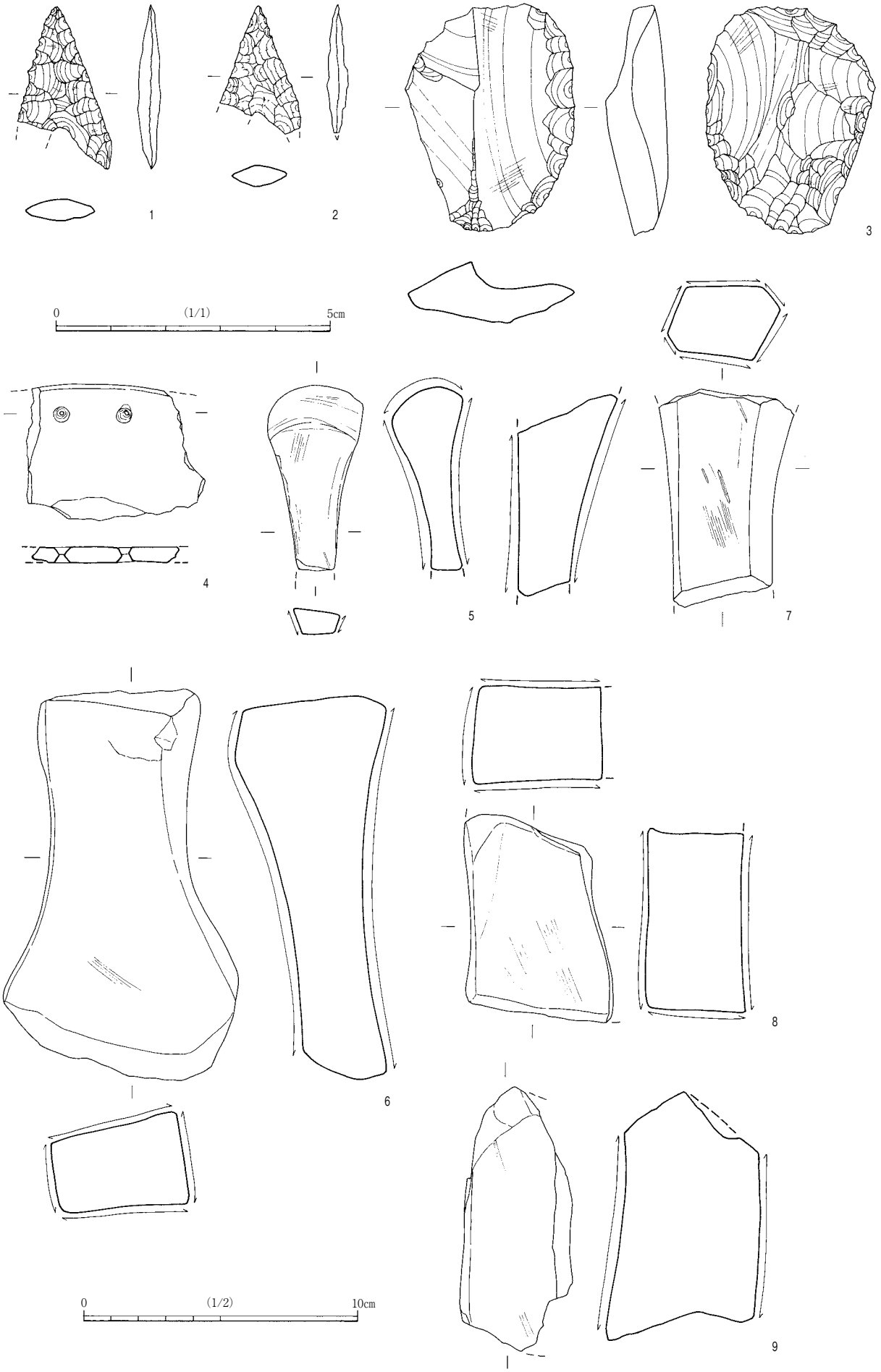
須恵器（103） 103 は須恵器鉢口縁部で、復元口径 29cmを測る。色は灰色。

土師質土器（104・105） 104・105 は土鍋口縁部で、ススが付着する。色は灰黄褐色を呈する。

（7） 1 区出土石器・石製品・土製品・玉類・金属器

1 区出土石器・石製品（図版 67、第 140・141 図、第 3 表）

1 ・ 2 は打製石鏃である。1 の左端部は欠損し、右側縁には使用痕あり。姫島産黒曜石製。65 号住居跡覆土出土。2 は両端部欠損する。安山岩製。35 号住居跡付近遺構面出土。3 はスクレイパーである。右側縁には使用による微細剥離があり、左側縁は自然面が残る。姫島産黒曜石製。10



第 140 図　5 次 1 区　出土石器・石製品実測図①（1 ～ 3 は 1/1、他は 1/2）

号住居跡覆土上層出土。

４は磨製石包丁である。背部はやや丸みを帯びるが、外湾刃半月形と思われる。刃部は欠損するが、最終段階にスクレイパーとして使用したため、欠損している可能性がある。右側の穿孔上面には紐ずれ痕がある。風化のため研磨痕が確認できない。片岩製。17 号住居跡覆土出土。

５～９は砥石である。５は４面砥面として使用されたもので、上端部は粗い研磨で加工している。持ち運び用の仕上げ砥である。粘板岩製。10 号住居跡覆土上層出土。６は完形品で、長さ 14.3cm、幅 8.5cm。厚さ 5.5cm、重さ 636 ｇである。粗砥で、側面４面砥面として使用する。花崗岩製。32 号住居跡床面直上出土。７は両端部が欠損するが、全側面は砥面である。頁岩製の仕上げ砥である。40 号住居跡覆土出土。８は右側面と上端部が欠損するもので、全ての側面に加え、下面も使用度は低いものの砥面として用いている。仕上げ砥で、頁岩製。１区南東遺構面出土。９は上面が主な砥面であるが、右側面及び下面は使用頻度が低いものの砥面として使用し、上下端部は再加工の際の研磨痕がみられる。仕上げ砥で、頁岩製。１区撹乱出土。

10・11 は磨石である。10 は４面磨面として使用する。砂岩製か。35 号住居跡覆土下層出土。11 は完形品で、長さ 12.1cm、幅 9.4cm、厚さ 2.5cm、重さ 428.1 ｇである。上面のみ磨面として用いる。砂岩製で、３号住居跡覆土出土。12 が台石で、全面被熱する。上下面に磨面が確認されるが、使用度は低いもの。凝灰岩製で、35 号住居跡ピット内出土。13 は完形の凹石で、長さ 17.3cm、幅 18cm、厚さ 6.4cm、重さ 2790 ｇである。中央部に径６cm程度、深さ３cm程度の凹みがある。凹み全体は鉄分が付着し、底面には１cm程度の鉄分の塊が付着する。この鉄分の塊りについては、鍛冶関連の痕跡を示すものとも考え、蛍光Ｘ線及びＸ線ＣＴスキャナによる分析を行ったが、いずれの方法でも明確な鉄成分は確認できなかった。27 号住居跡覆土出土。

１区出土土製品（図版 67、第 141 図 14 ～ 18、第３表）

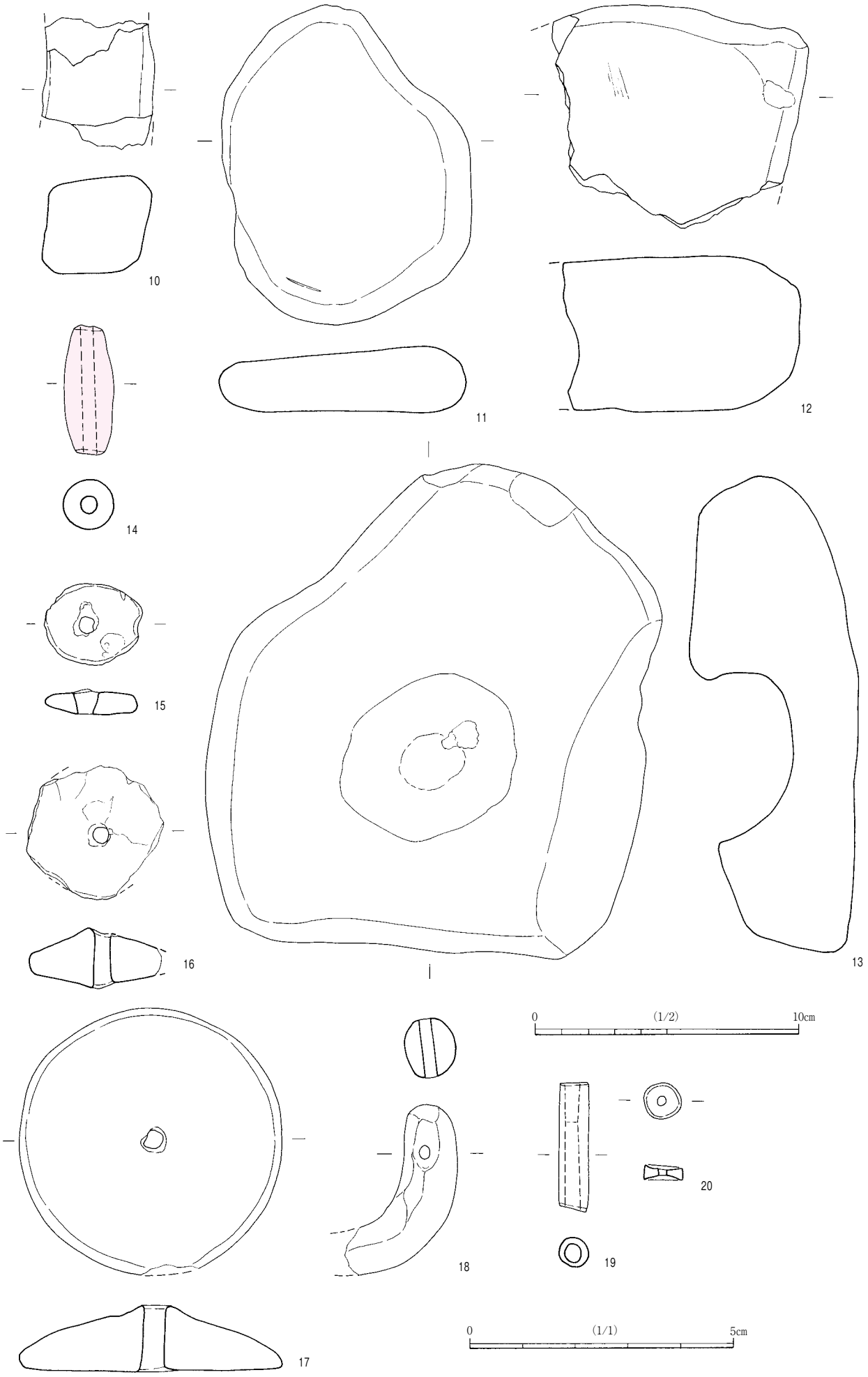
14 は完形の円柱形の土錘で、長さ 4.9cm、幅 1.9cm、孔径 0.6cm、重さ 18.1 ｇである。外面はナデ調整後スリップを施す。生地は淡黄褐色。50 号住居跡床下掘り込み出土。15 ～ 17 は紡錘車である。15 は右側縁に浅い抉りがあることから、土錘として使用された可能性がある。完形品で、長さ 3.1cm、幅 3.7cm、厚さ 1.1cm、重さ 8.7 ｇである。６号住居跡カマド内出土。16 は外面に手づくね状のナデを残し、中央部には径 0.5cmほどの孔を開ける。断面算盤形の側面を打ち欠きする。重さは 47.3 ｇ。下面には黒斑があり、色は灰茶褐色。１区南遺構面出土。17 は丁寧なナデを施したもので、紡錘車としては大きすぎるため、土錘の可能性も考えられる。ほぼ完形品で、径 10cm、厚さ 2.5cm、孔径 0.9cmを測る。下面には黒斑あり。色は黄褐色。71 号住居跡覆土出土。18 は土製勾玉で、下端部は欠損する。孔径は 0.2mmである。色は黄茶色。89 号住居跡覆土出土。

１区出土玉類（図版 67、第 141 図 19・20、第３表）

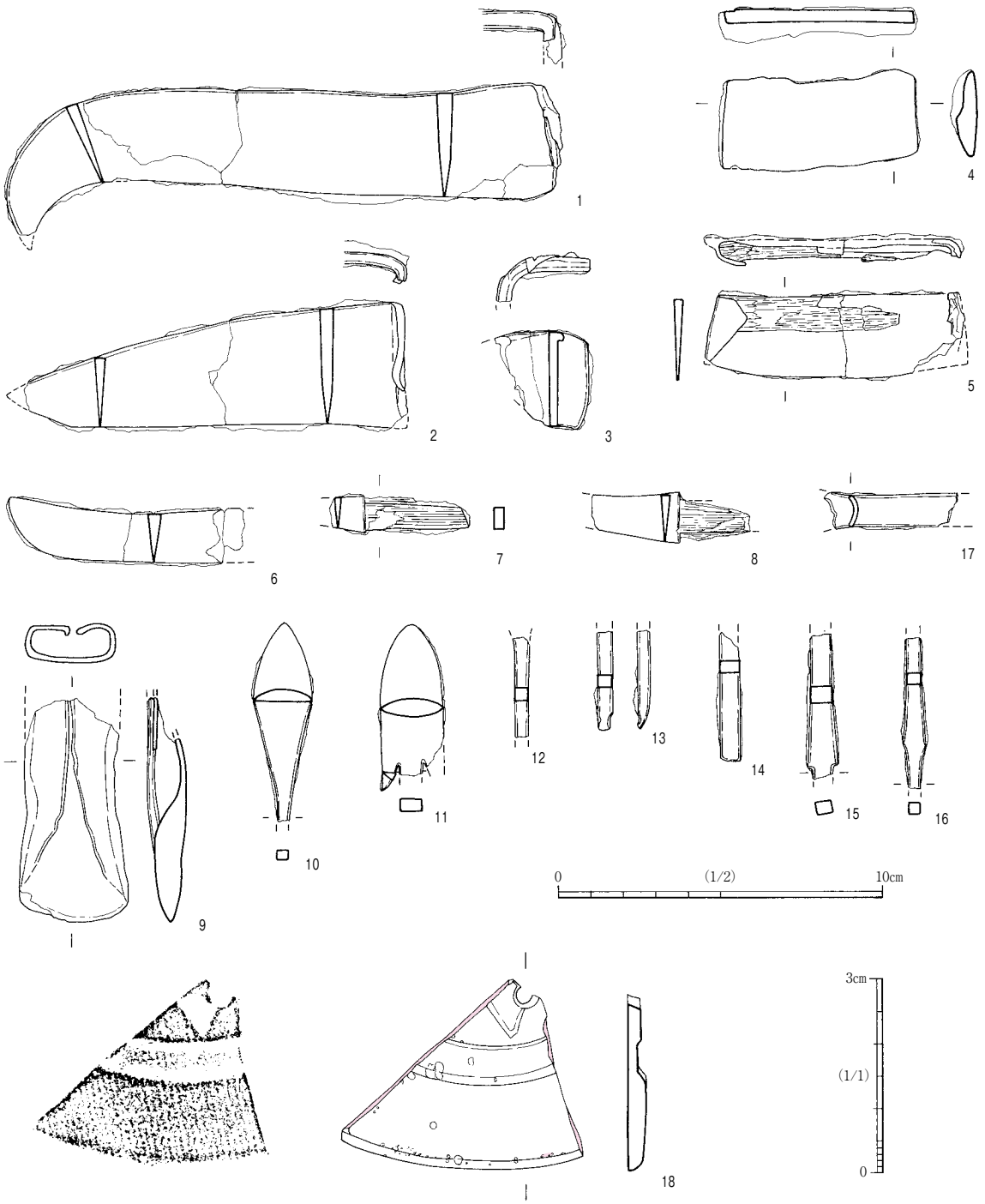
19 は暗深緑色を呈する緑泥片岩製の管玉で、孔は両面穿孔である。完形品で、長さ 2.4cm、幅 0.55cm、孔径 0.55cm、重さ 1.3 ｇである。64 号住居跡覆土出土。20 は滑石製臼玉で、上下面が凹むもの。完形品で、径 0.65cm、厚さ 0.25cm、孔径 0.2cm、重さ 0.2 ｇである。１区遺構面出土。

１区出土金属器・青銅鏡（巻頭図版４、図版 68・69、第 142 図、第３表）

１は曲刃鎌で、刃部先端と折り返し部が一部欠けるが、ほぼ完形品である。法量は長さ 17cm、幅 3.5cm、厚さ最大 5.5mm、重さ 76.1 ｇを測る。背部はほぼ直線で、先端に向かって緩やかに内湾し、刃部先端は背部とはほぼ直角になるまで折れ曲がる。折返し部は直角である。６号住居跡覆土出土。



第 141 図　5 次 1 区　出土石器・石製品②、土製品、玉類実測図（18 ～ 20 は 1/1、他は 1/2）



第 142 図　5 次 1 区　出土鉄製品・青銅器実測図（18 は 1/1、他は 1/2）

２は直刃鎌で、先端が一部欠けるがほぼ完形品である。長さ 16.8cm、幅 3.9cm、厚さ最大４㎜、重さ 38.8 ｇを測る。ほぼ直線刃であるが、先端部が一部研ぎ直しにより角度を変え、背部と交わる。折返し部は直角で、わずかに折り曲げたものである。37 号住居跡覆土出土。３は鎌の折返し部片で、破断面が強い力を加えたため破断したものと考えられること、また刃がないことから、折返し部を加工する際に破損したものか。なお背部は玉縁状に加工していることから、別の器種になる可能性もある。53 号住居跡ピット出土。４は鉄素材である。当初は摘鎌と考えたが、Ｘ線ＣＴスキャナによる調査により棒状の鉄素材であることが判明した。長さは 6.2cm、幅 2.9cm、厚さ 6.5㎜、重さ 38.4g を測る。１号溝出土。５は摘鎌である。右側縁が欠損するが、ほぼ完形品である。長さ 7.9cm、幅 2.5cm、厚さ 3.5㎜、重さ 17.7 ｇを測る。両側縁を内側に折り曲げて加工しており、木質が残る。

刃部は緩やかに外湾し、背部はほぼ直線である。１区遺構面出土。

６～８は刀子である。６は刃先が上に湾曲する形態のもので、刃は両刃である。71 号住居跡覆土出土。７は背部に関が付く方関で、刃は両刃、茎の断面は長方形である。茎には木質が残る。23 号住居跡覆土下層出土。８は両関のもので、茎部には木質が残る。１区遺構面出土。９は袋状鉄斧である。基部は欠損するが、両側縁を方形に折り曲げることで袋部を造りだしている。袋部の先端が内側になっているが、破損の際に内側に入り込んだものと考えられる。１区遺構面出土。

10 ～ 16 は鉄鏃である。10 は圭頭形の鏃身部で、片刃造のもの。茎部は欠損するが、棒状のものと考えられる。75 号住居跡覆土出土。11 は一重の腸抉の鏃身を持つ両腸抉式で、両丸造のものである。右側縁は一部欠損し、基部は棒状と考えられる。１区遺構面出土。12 ～ 16 は鉄鏃茎部である。12 は４号住居跡覆土出土。13 は基部が鉤状になることから、鉄鏃ではない可能性がある。46 号住居跡覆土出土。14 は端部が残り、14 号住居跡覆土出土。15 は両関が角張る角関で、基部は鏃身部に対し少し斜めになるもの。１区遺構面出土。16 は台形関のもので、１区南東遺構面出土。17 は断面が「Ｕ」字形となる不明鉄製品。何かの金具の可能性がある。１区南東撹乱出土。

18 は径 12cmの内行花文鏡の破鏡で、７号住居跡覆土出土。平面は三角形を呈する。外縁は素文で、端部は鋭角だったと思われるが、手ずれにより丸みを帯びている。外縁から無文の凸帯を挟んで、内向する半円弧を連ねた連弧文を巡らす。穿孔はこの連弧文上に工具で径 2.8mm上から開けている。左破面は丁寧に研磨している。全体的にベンガラが塗布され、わずかに残る。法量は長さ 2.95 cm、幅 3.75cm、厚さ 2.8mm、重さ 11.27 g を測る。銅質は良好で、色は深灰緑色を呈する。鏡面には鋳造時の気泡が目立つ。素文と連弧文の厚みがほぼ一緒であることから、岡村秀典氏の漢鏡６期にあたるものと考えられる。なお、デジタルマイクロスコープにより本鏡の詳細な観察を行なったので、参照されたい。(p252・253)

挿図	図版番号	出土遺構	種類	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	残存	備考
140-1	67	住65覆土	石器	打製石鏃	2.85	1.75	0.40	(1.30)	0.8	姫島産黒曜石
140-2	68	住35付近遺構面	石器	打製石鏃	2.85	1.45	0.40	(0.70)	0.8	安山岩
140-3	69	住10覆土上層	石器	スクレイパー	4.15	3.15	1.20	10.50	1	姫島産黒曜石
140-4	70	住17覆土	石器	磨製石包丁	(6.50)	(4.95)	0.60	(28.10)	0.4	片岩
140-5	71	住10覆土上層	石製品	砥石	(6.75)	3.50	2.55	(52.30)	0.6	粘板岩
140-6	72	住32床面直上	石製品	砥石	14.30	8.50	5.50	636.00	1	花崗岩
140-7	73	住40覆土	石製品	砥石	(8.00)	4.90	3.60	(127.40)	0.3	頁岩
140-8	74	1区南東遺構面	石製品	砥石	(5.60)	7.60	3.75	(278.00)	0.4	頁岩
140-9	75	1区撹乱	石製品	砥石	(9.60)	4.10	5.90	(234.10)	0.3	頁岩
141-10	67	住35覆土下層	石製品	磨石	(4.95)	4.25	3.70	(113.10)	0.2	砂岩？
141-11	67	住3覆土	石製品	磨石	12.15	9.40	2.50	428.10	1	砂岩
141-12	67	住35ピット	石製品	台石	(8.45)	(9.70)	6.00	(739.50)	0.2	凝灰岩
141-13	67	住27覆土	石製品	凹石	17.35	18.75	6.40	2790.40	1	安山質凝灰岩
141-14	67	住50床下掘り込み	土製品	土錘	4.90	1.95	1.90	18.10	1	外面スリップ
141-15	67	住6カマド	土製品	紡錘車	3.10	3.70	1.10	8.70	1	
141-16	67	1区南遺構面	土製品	紡錘車	(5.15)	(5.10)	2.40	(47.30)	0.8	側面打ち欠き
141-17	67	住71覆土	土製品	紡錘車	(10.20)	10.00	2.55	(206.40)	0.95	
141-18	67	住89覆土	土製品	勾玉	(3.20)	1.00	1.15		0.7	
141-19	67	住64覆土	玉類	管玉	2.45	0.60	0.60	1.30	1	緑色片岩
141-20	67	1区遺構面	玉類	臼玉	0.65	0.70	0.30	0.25	1	滑石
142-1	67	住6覆土上層	鉄製品	曲刃鎌	17.00	3.50	5.50	76.10		ほぼ完形
142-2	67	住37覆土	鉄製品	直刃鎌	16.80	3.90	0.40	38.80		
142-3	67	住53ピット	鉄製品	鎌	(3.00)	3.00	0.30	(8.10)		折り返し部
142-4	68	溝1	鉄製品	鉄素材	6.20	2.90	0.65	38.40		
142-5	68	1区遺構面	鉄製品	摘鎌	(7.90)	2.50	3.50	(17.70)		ほぼ完形、木質残存
142-6	68	住71覆土	鉄製品	刀子	(7.30)	1.60	4.00	10.70		
142-7	68	住23覆土下層	鉄製品	刀子	(4.30)	1.20	3.00	(4.60)		木質残存
142-8	68	1区遺構面	鉄製品	刀子	(4.90)	(1.50)	3.00	(5.10)		
142-9	68	1区遺構面	鉄製品	袋状鉄斧	(6.80)	(3.80)	1.20	(33.10)		
142-10	69	住75覆土	鉄製品	鉄鏃	(6.20)	1.90	0.40	(10.10)		圭頭形
142-11	69	1区遺構面	鉄製品	鉄鏃	(5.20)	1.90	0.60	(8.20)		両腸抉式、両丸造
142-12	69	住4覆土	鉄製品	鉄鏃	(3.10)	(0.40)	(0.40)	(1.40)		
142-13	69	住46覆土	鉄製品	鉄鏃	(3.00)	0.40	0.40	(1.80)		
142-14	69	住14覆土	鉄製品	鉄鏃	(3.90)	0.65	0.40	(2.50)		
142-15	69	1区遺構面	鉄製品	鉄鏃	(4.40)	0.90	0.55	(5.00)		
142-16	69	1区南東遺構面	鉄製品	鉄鏃	(4.65)	0.75	0.40	(3.30)		
142-17	69	1区撹乱	鉄製品	不明	(4.10)	0.90	0.15	(3.50)		
142-18	巻頭4	住7覆土	青銅鏡	破鏡(内行花文鏡)	(2.95)	(3.75)	0.28	(11.27)		赤色顔料付着

第３表　５次１区出土特殊品一覧表

(　)は残存値

４　塔田琵琶田遺跡第５次調査２区の報告

（１）調査の概要

２区は５次調査区の北西隅で、南北方向に延びた尾根状微高地上に位置する本遺跡でも北西端にあたる、約 520㎡の範囲である。当区の南には１・４区、東には３区、北には平成 11 年に豊前市教育委員会が調査した第１次調査区が位置する（第３図）。

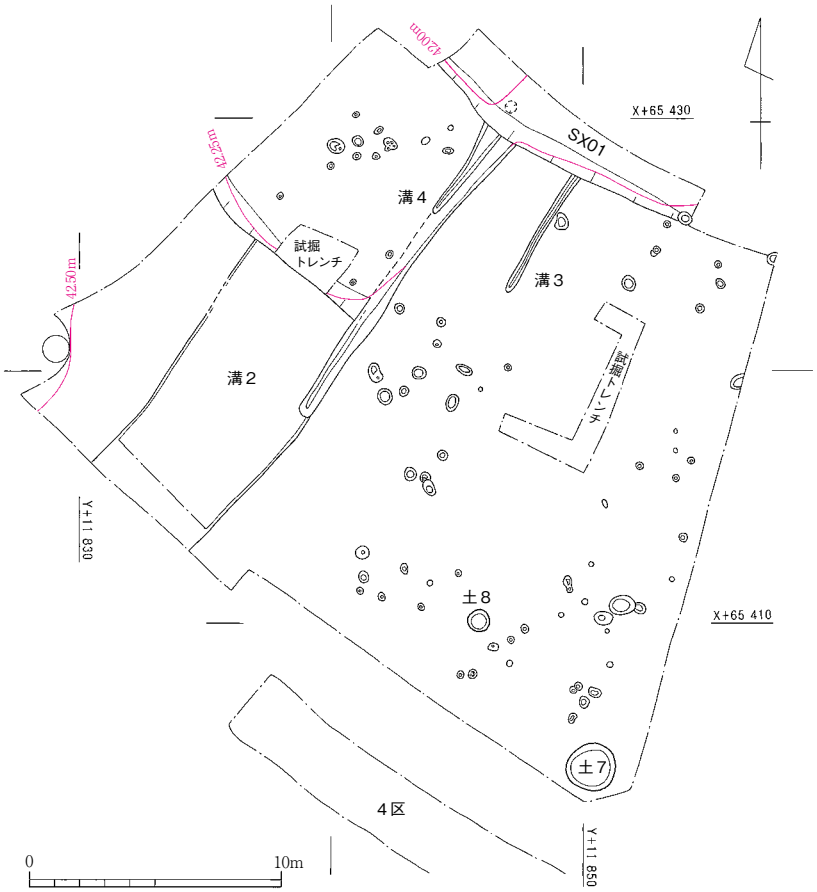
２区の調査前は水田で、かつ圃場整備が実施されていた。１区北端より遺構検出面が 70cm以上低い。また床土直下が遺構面で、その遺構面では１区の遺構面である火山灰堆積層である黄褐色砂質土とそれが風化した黒ボク土がほとんどなく、南西部を中心にその下層にあたる黄褐色砂礫土が見えていたことから、圃場整備時に削平され、その上に客土である水田の床土を置いたと想定される。また３区と同様、検出面で風倒木痕が多く検出したため、遺構面では風倒木痕の埋土である灰褐色土が、地山の黄褐色砂礫土との間に一面広がる状況であった。このため、検出した遺構は弥生時代後期～古墳時代後期の土坑２基と圃場整備前の溝３条、ピット、落ち（SX）と遺構の遺存状況は極めて悪い。

また遺構面はほぼ平坦であったが、南西から北東に向かって緩やかに弱く傾斜していた（第 143 図）。また２区北西では圃場整備前の水田を埋め戻して造成しており、旧地形では２区より西は西側に向かって傾斜している可能性が高い。

（２）土坑

７号土坑（図版 45、第 144 図）

２区南東隅に位置する。土坑の規模は、南北 216cm、東西 182cm、深さ最大 17cmを測る、やや南側が歪む楕円形土坑である。埋土は灰黒色粘質土である。

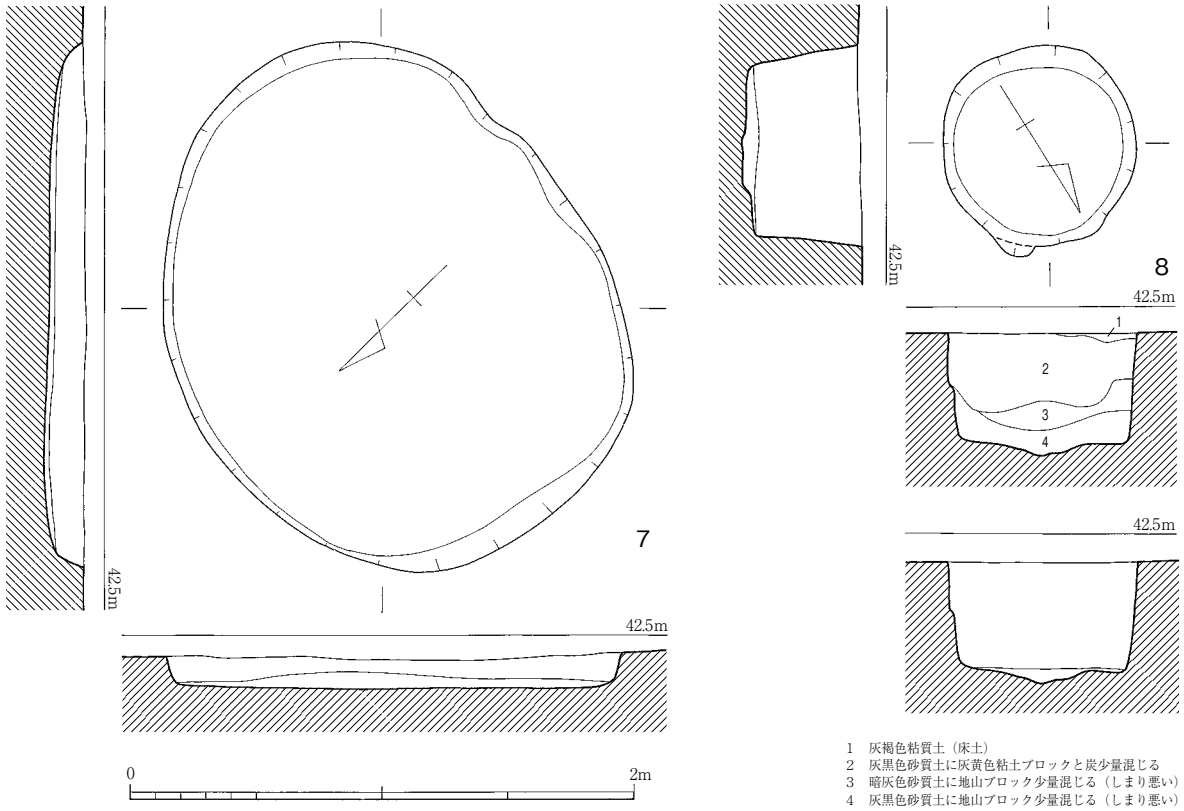


第 143 図　５次２区遺構配置図（1/300）

出土土器はないが、埋土から弥生時代後期～古墳時代後期の土坑に位置づけられる。

８号土坑（図版 45、第 144 図）

２区中央の南東寄りに位置する。土坑の規模は、南北 79cm、東西 76cm、一段深くなる床面中央部で深さ最大 49cmを測る、円形土坑である。埋土は１が床土、２層と３・４層で分かれることから、埋没期間や埋没状況が影響している可能性がある。出土土器から、古墳時代前期前半に埋没した

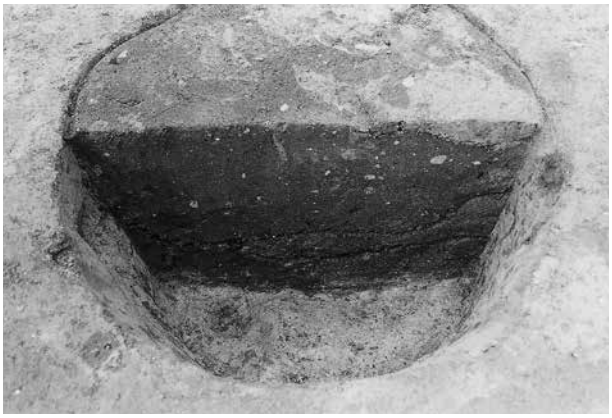


第144図　5次2区　7・8号土坑実測図（1/30）

土坑と位置付けられる。

出土遺物（図版69、第145図1・2）

土師器（1・2）　1は在地系甕で、口縁端部を丸く収め、内外面粗いハケ後横ナデを施す。色は橙褐色。2は外傾気味の在地系直口壺で、胴部の張りは弱い。復元口径12.6cmを測る。胴部内面中位以下にはケズリを施す。色は褐色である。



文中写真27　8号土坑土層（北東から）

（3）溝

2号溝（第143図）

2区西に位置する南北溝で、軸が一致することから4号溝と同一の溝となる可能性があるが、溝幅が大きく異なるため、別の溝として報告するが、図のように切り合う前後関係を有するのではなく、一連の溝として機能していた可能性が考えられる。

溝の規模は長さ11m以上、幅は最大5.7mを測る。調査では一段分しか掘り下げていないが、深さは北の段差で測ると床面まで15cmほどと、溝の幅にしては非常に浅い溝である。また床面まで掘削していないが、旧地形と4号溝との関係から、南から北に流れた溝と考えられる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物で図示できるものはないが、圃場整備前の田んぼの軸と一致することから、圃場整備前まで機能した新しい溝と思われる。

３号溝（第 143 図）

２区中央の北端に位置する南北溝である、溝の規模は、長さ 5.3 ｍ以上、幅 0.3 ｍ、深さ５㎝程度の小溝で、床面は平坦であるが、旧地形から南から北側に流れた溝と思われる。溝の埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物で図示できるものはないが、２・４号溝と軸が一致することから、圃場整備前まで機能した新しい溝と思われる。

４号溝（第 143 図）

２区北西に位置する南北溝で、軸が一致することから２号溝と一連の溝として機能していたと考えられる。溝の規模は長さ 13.7 ｍ以上、幅は溝床面が一段深くなる北端部分で 1.5 ｍ、深さも同部分で 37㎝を測る。床面は北側に向かって傾斜する。埋土は灰褐色粘質土である。

２・３号溝と同様、圃場整備前の田んぼの軸と一致すること及び出土遺物から、圃場整備前まで機能した新しい溝と思われる。

出土遺物（第 145 図３）

陶磁器（３）　３は近代の陶器大型鉢の体部片である。内外面灰白色の釉を施釉するが、外面下位は露胎である。内面は黄褐色釉と深緑釉の掛け分けを行う。生地は茶褐色である。

（４）不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ 01（第 143 図）

２区北端で検出した落ちで、40㎝一段下がる。２～４号溝と軸が一致すること、また出土遺物から圃場整備時に埋められた一段下がる田んぼと考えられる。

出土遺物（第 145 図６）

陶磁器（６）　６は近代の擂鉢片である。内面には最大十四条の櫛描波状文を施す。口縁部内外面は灰褐色の釉を重ねる。生地は灰色を呈する。

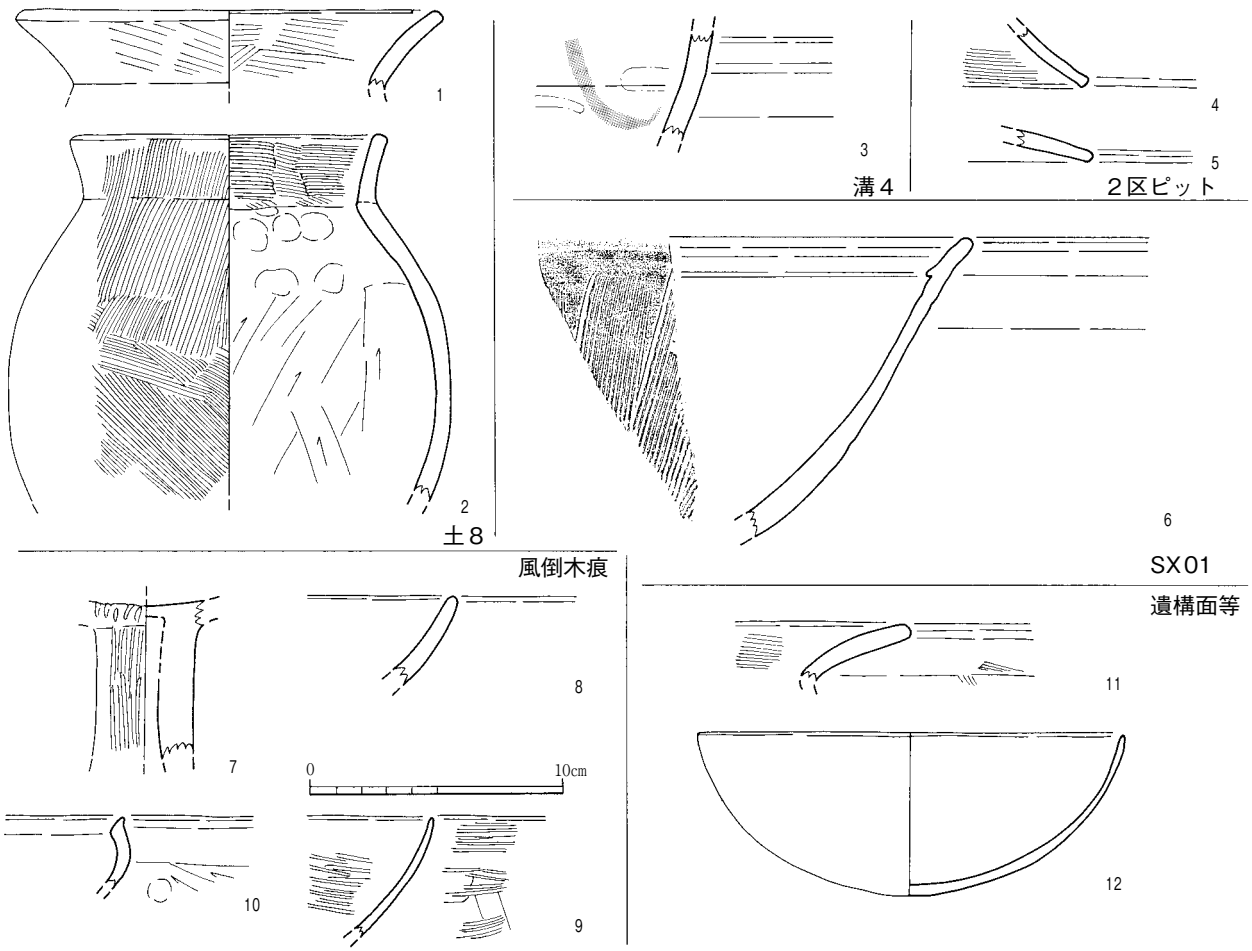
（５）ピット出土遺物（第 145 図４・５）

土師器（４・５）　４・５は弥生後期～古墳前期の在地系高坏の脚部と思われる。４の内面は横ハケのち横ナデを施し、外面は被熱する。色は茶褐色である。５は内外面横ナデを施し、色は灰黒色を呈する。

（６）風倒木痕内出土遺物（第 145 図７～ 10）

弥生土器（７）　７は弥生後期の高坏脚部である。脚部上端部には刻みを施し、坏部と接合しやすくしている。外面は縦ミガキ、坏内面もミガキを施す。外面には被熱痕あり。色は灰黄褐色。

土師器（８～ 10）　８は古墳前期鉢で器壁が厚い。色は灰茶褐色。９は古墳前期の器壁の薄い鉢で、内外面細かなミガキを施す。色は灰黄褐色。10 は口縁端部を短く折り曲げた古墳後期の碗である。外面下位はケズリ後内外面全体横ナデを施す。外面には黒斑あり。色は外が灰黄褐色、内が橙褐色である。



第 145 図　５次２区　８号土坑、４号溝、ピット、SX01、風倒木痕、遺構面等出土土器実測図（1/3）

（７）遺構面等出土遺物（第 145 図 11・12）

土師器（11・12）　11 は古墳前期在地系甕口縁部である。内面には横ナデ前の横ハケが残る。色は白灰黄色。12 は古墳前期在地系鉢である。被熱のため、内外面とも器表が荒れ、調整は不明である。色は黄褐色を呈する。

５　塔田琵琶田遺跡第５次調査３区の報告

（１）調査の概要

３区は５次調査区の北東で、南北方向に延びた尾根状微高地上に位置する本遺跡でも北東端にあたる、約 580㎡の範囲である。当区の南に１区、西に２区、南西に４区、北西には平成 11 年に豊前市教育委員会が調査した第１次調査区が位置する（第３図）。なお３区東側のバイパス用地から、平成 22 年度に福岡県教育委員会が発掘調査を行った久路土高松遺跡第２次調査区までの間は、平成 24 年７月 29・31 日に当館が試掘調査を行い、緩やかに傾斜する谷状地形であることが確認され、遺構・遺物ともに検出されなかった。

３区の調査前は水田で、かつ圃場整備が実施されていたため、ＳＸ 03 付近の旧地形で低かった北東部については最大 60cmほど盛土された後に水田を整備していた（第 153 図トレンチ１・２土層図）。一方元々地形が高かった３区南側については、２区と同様、１区北端より遺構検出面が 60 cm以上低く、かつ３区南側及び西側では床土下が遺構面であったため（第 149 図土層図参照）、圃場整備時に削平され、その上に客土である水田の床土を置いたと想定される。

地山は火山灰堆積層である黄褐色砂質土とそれが風化した黒ボク土と思われるが、２区と同様、検出面には風倒木痕が多く検出されたため、遺構面では風倒木痕の埋土となる灰褐色土が一面広がる状況であった。

遺構面は南西から北東に向かって緩やかに傾斜しており、７・８号溝を境に北東への傾斜がややきつくなる状況であった（第 146 図）。また３区南東にも落ちであるＳＸ 02 を検出し、当区から東はすぐに谷状地形が広がることを確認した。このことから、当区が集落の北東隅でそれより東は集落が展開しないことがわかる。なお３区南と西側の竪穴住居跡が確認された範囲には黒ボク土が比較的良く検出され、かつ遺構埋土は黒ボク土に有機物などが混入して粘性が高まった灰黒色粘質土系の土を基調とするため、３区でも地形の高い場所に竪穴住居を造っている。

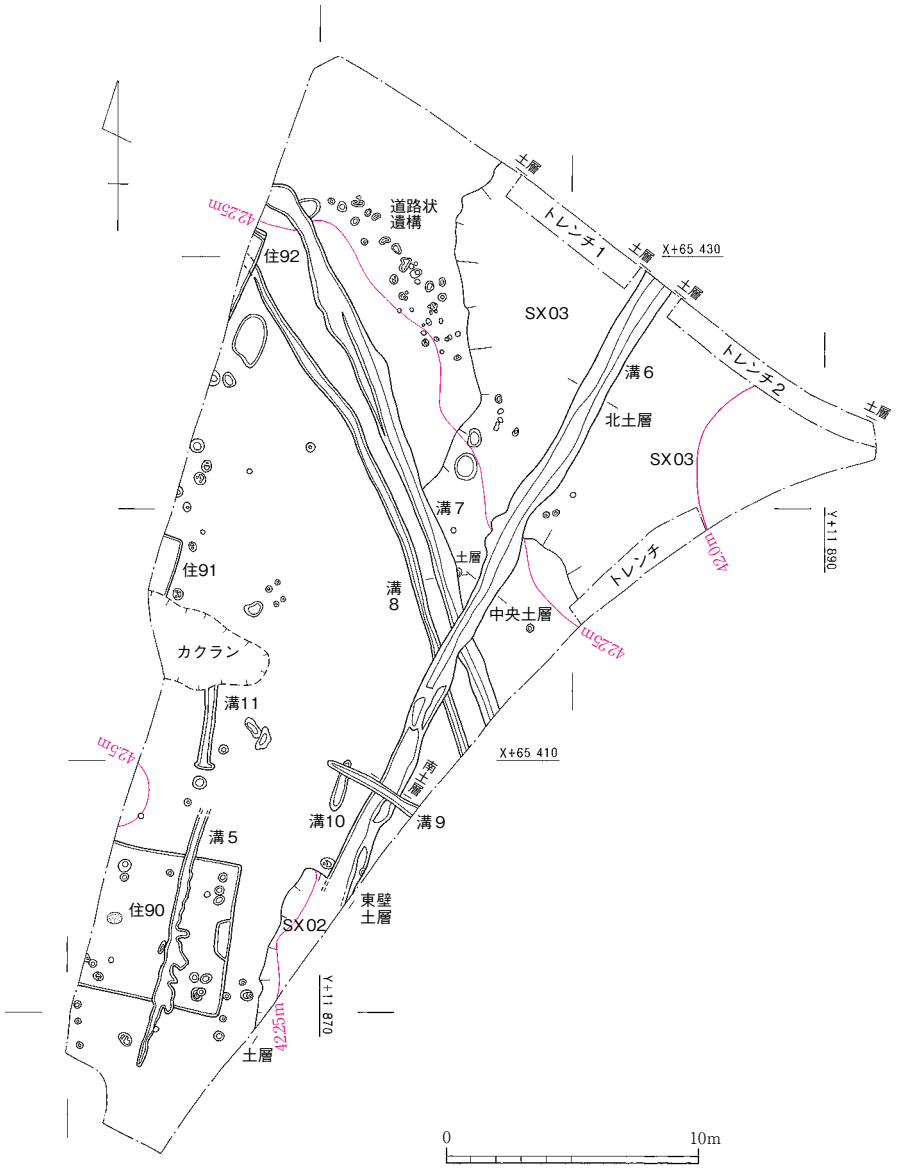
検出した遺構は、竪穴住居跡３棟、溝５条、道路状遺構、落ち、ピットである。遺構の所属時期は古墳時代後期と近代を主体とする。

（２）竪穴住居跡

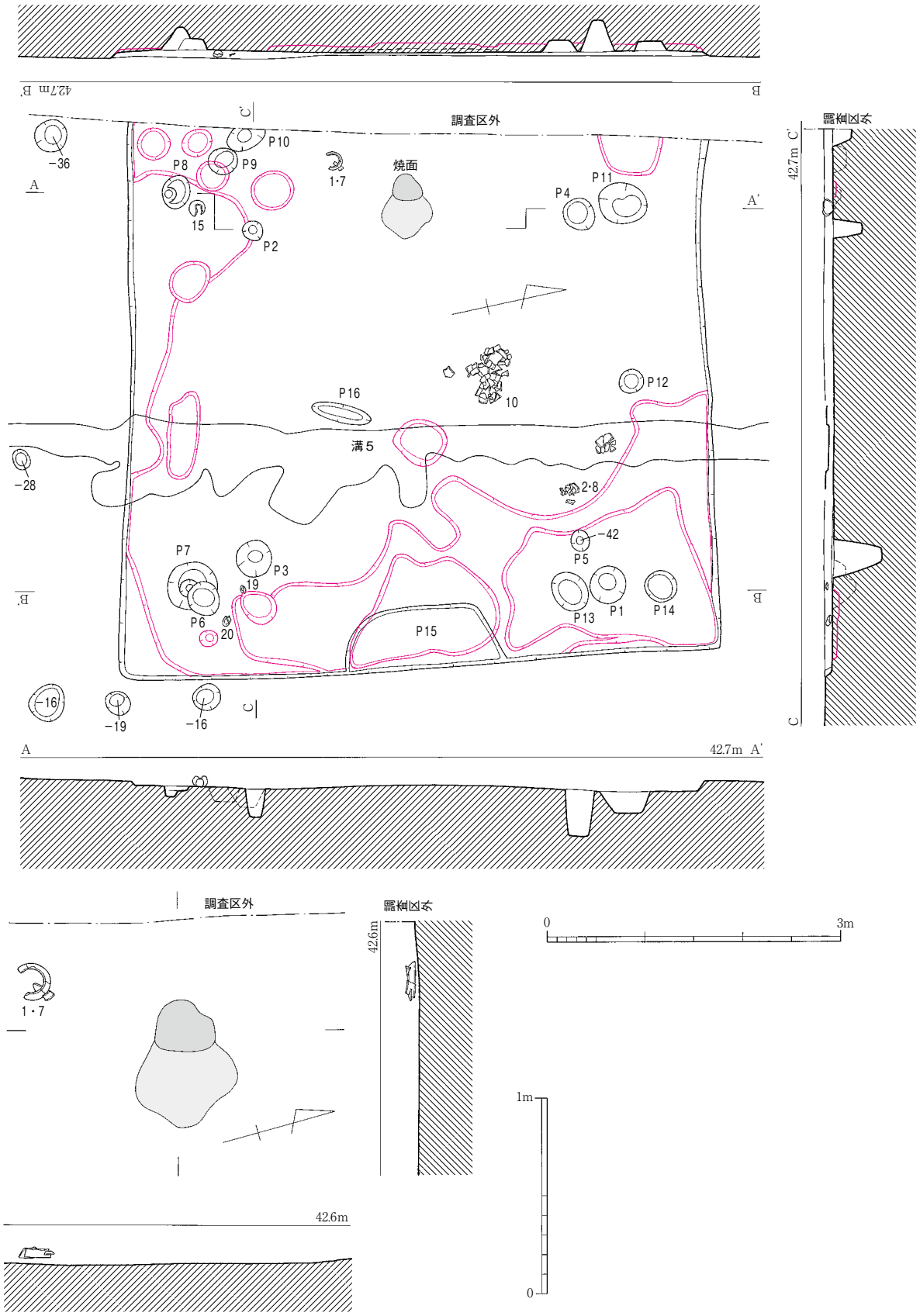
90 号竪穴住居跡（図版 47、第 147 図）

３区南端に位置し、５号溝に切られる。西壁は調査区外になるが、西壁際で当住居カマドの硬化面及び焼面を検出したことから、あと 50cm 前後で西壁に至ると推測される。住居の規模は、主軸長で 5.5 m 以上、南北 6.1 m を測り、深さは住居全体が削平を受けることから北壁で最大７cm しか残存していない。平面形はほぼ正方形の住居になると思われる。住居西壁中央にはカマドを付設する。住居主軸方位は北から 75° 西に振れる。

床面ではピット 16 基検出し、位置・深さからＰ１～４が主柱穴となる４本柱の住居である。４本の主柱穴はいずれも床面の硬化面から２～３cm下で検出しており、貼床が施されていたと考えられる。またＰ６・８、Ｐ９・



第 146 図　５次３区　遺構配置図（1/300）



第147図　5次3区　90号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

10、P５・13と主柱穴周辺に深さのあるピットが存在することから、当住居は建替えが行われた可能性がある。またP 16は住居内仕切り溝の可能性があるもので、P 15は浅いもののカマド対面に位置することから、屋内土坑の役割を果たしていた可能性がある。

文中写真 28　90 号住居跡カマド
（北から）

住居床面直上では土師器甕（１・２・７・８）、高坏（10）、把手付鉢（15）、碗（19）、蛸壺（20）など多くの土器が出土した。埋土は灰黒色粘質土である。住居全面で床下掘り込みを確認した。

出土土器から、６世紀前半に位置づけられる。

カマド（図版 47、第 147 図）

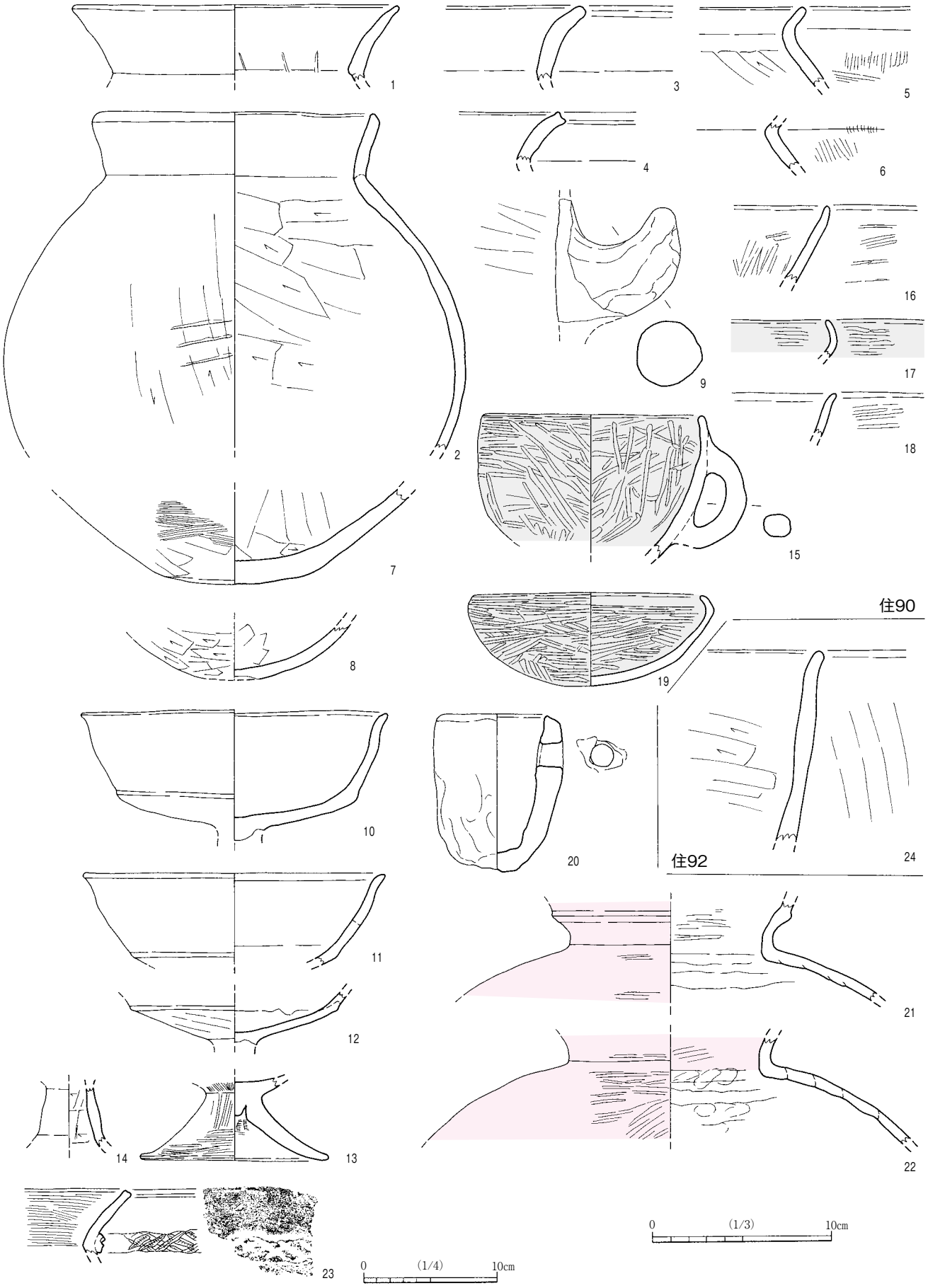
住居西壁に付設したと考えられるカマドで、壁際から 40cm手前で 30 × 25cmのかなり焼けた硬化面（濃いアミ）、その前面には灰白色粘土と焼土が広がる焼面（薄いアミ）を検出したため、カマドの存在を判断した。袖は痕跡も残っていないことから、廃絶時に全て壊したものと考えられる。

出土遺物（図版 69、第 148 図１～ 23）

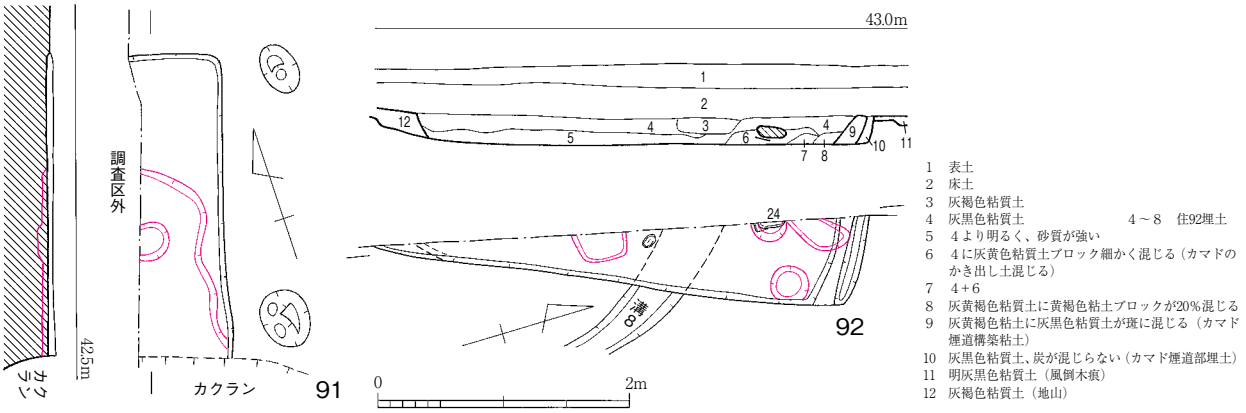
土師器（１～ 22）　１～８は甕である。１は口縁部で、７と同じくカマド南西で出土したが、同一個体ではない。内面頸部には横ナデ前のハケ工具痕が残る。色は白黄褐色。２は口縁端部がやや内湾気味になる直口の甕で、復元口径 15.4cmを測る。胴部外面はタタキ後縦方向の工具ナデ、その後ナデを施す。胴部内面は頸部近くまでケズリを施す。外面にはススが付着する。色は外が黄褐色、内橙褐色。８と一緒に出土したが、同一個体ではない。３は器壁の厚い口縁部で、口縁内端部には工具痕が認められるが、刻目ではない。色は黄橙褐色。４は小型甕口縁部で、口縁端部をナデで面取りする。外面はハケ後横ナデを施す。色は黄茶褐色。５は頸部内面にナデ上げ痕が明瞭に残る。色は黄褐色。６は頸部片で、色は黄茶褐色。７・８は底部である。７の外面は工具ナデ後細かいハケ、内面は工具ナデ後ナデを施す。内面は黒化し、色は黄褐色。８の外面はケズリ、内面は工具ナデ後ナデ調整を行う。外面は被熱し、色は黄褐色を基調とする。９は甑把手である。色は灰黄褐色～淡橙褐色を呈する。

10 ～ 14 は高坏である。10 は口縁部が立ち、端部は短く外反、屈曲部には鈍い稜を巡らす。坏部外面底部は工具ナデ後ナデで調整し、それ以外の内外面は横ナデを施す。脚部は充填法で接合する。外面には一部ススが付着する。色は橙褐色。11 も口縁端部を弱く外反させるもので、同じく屈曲部の稜は鈍い。外面には黒斑があり、色は茶褐色を呈する。12 は器壁が薄く小型のもので、稜は丸味を帯び鈍い。坏部内面底部には工具痕が残る。脚部とは充填法で接合する。色は外が茶褐色、内が灰黄褐色を呈する。13・14 は脚部である。13 の外面はミガキ、脚柱部内面下位はナデを施し、脚柱部内面上位はハケ工具で絞る。色は褐色である。14 は小型のもので、内面はケズリを施す。色は橙褐色。

15 は把手付鉢で、口径は 12.6cmを測る。１ヶ所に環状の把手を張り付け、その後内外面ミガキを丁寧に施し、黒化処理を行う。生地は灰褐色。16 は鉢で内外面ミガキを施す。色は灰黒色。17 は強く内湾する碗で、内外面ミガキを施し、黒化処理も行っている。生地は灰黒色。Ｐ 15 出土。18 は口縁端部を短く外反させた碗で、外面はミガキ、内面はナデ調整を行う。色は橙褐色。Ｐ４出土。19 も 17 と同じく、口縁部が強く内湾する器形である。口径 12.8cm、器高 5.3cmを測る。外面下位にはケズリ後内外面丁寧にミガキを行い、黒化処理も行う。生地は灰褐色。20 はほぼ完形蛸壺で、口径 5.6cm、器高 8.9cmを測る。焼成前には１ヶ所穿孔を施す。色は白黄褐色である。



第 148 図　5 次 3 区　90・92 号竪穴住居跡出土土器実測図（23 は 1/4、他は 1/3）



第 149 図　5 次 3 区　91・92 号竪穴住居跡実測図（1/60）

21・22 は古墳前期の土器で、混入品。21 は精製の在地系二重口縁壺である。外面はミガキ後スリップを塗布する。口縁部内面もミガキを施し、胴部内面はケズリ後ナデ調整を行うが、粘土継ぎ目痕が残る。生地は黄褐色。22 も精製の直口壺で外面全体と口縁部内面にはミガキ後スリップを塗布する。胴部内面はケズリ後ナデ調整を行うが、粘土継ぎ目痕が残る。生地は灰黄褐色。

弥生土器（23）　23 は弥生後期甕口縁部で、頸部には端部にハケ工具による「×」刻みを施した突帯を貼り付ける。色は橙褐色。混入品。

91 号竪穴住居跡（図版 48、第 149 図）

３区中央の西壁際に位置する。住居大半が調査区外で、かつ南側は撹乱を受けるため、住居北東部の一部を検出したにとどまる。住居の規模は、南北 2.4 m以上、東西 0.68 m以上、深さ最大６cm の残りの悪い方形住居である。住居埋土は灰黒色砂質土である。住居床下掘り込みも確認した。

出土土器はないが、埋土から古墳時代中後期に位置づけられる可能性が高い。

92 号竪穴住居跡（図版 48、第 149 図）

３区北西の壁際に位置し、８号溝に切られる。住居大半が調査区外で、住居北東部の一部を検出したにとどまる。また南側は掘りすぎているため、破線で復元している。住居の規模は、南北 3.5 m以上、東西 0.7 m以上、深さ最大 16cmの方形住居である。住居北壁には北西隅に向かって煙道が延びるＬ字状カマドを付設する。住居床面から３cm程度浮いた状態で土師器甑（24）が出土した。住居埋土は４～８層で、カマド前面の６～８層はカマドを破壊した際のカマド構築土が混じっていると考えられる。住居床下掘り込みも確認した。

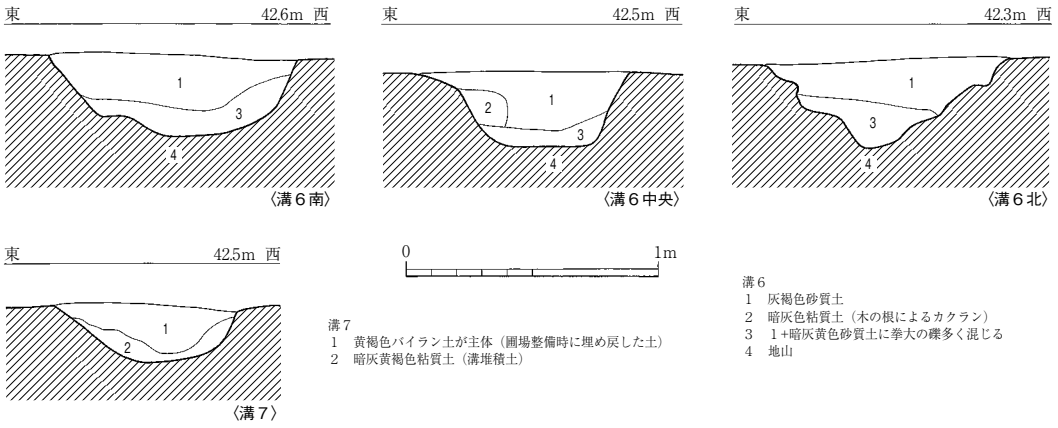
出土土器及び切り合い関係、埋土から古墳時代後期に位置づけられる。

カマド（図版 48、第 149 図）

住居北壁に付設されたＬ字状カマドで、煙道部先端のみ検出した。煙道部壁は９層で構築しており、煙道断面は土層図の箇所で長三角形状を呈し、下端で 10cm、上端で２cmと狭い。また煙道部床面は東の先端に向かって上がっている。煙道部埋土の 10 層は住居外からの流入土である。

出土遺物（第 148 図 24）

土師器（24）　24 は甑口縁部である。外面は縦方向の工具ナデ、内面中位以下はケズリを行い、口縁部内外面は横ナデを施す。外面にはススが付着し、色は灰黄褐色を呈する。



第 150 図　５次３区　６・７号溝土層実測図（1/30）

（３）溝

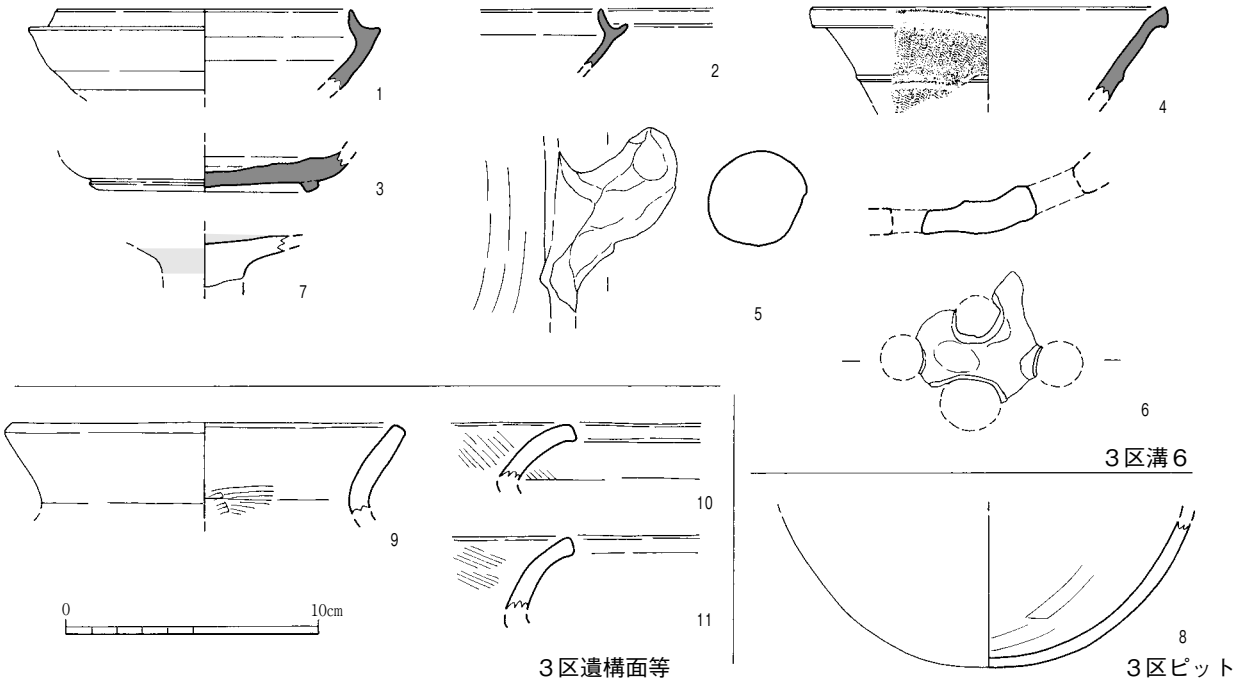
５号溝（第 146 図）

３区南の中央に位置する南北溝で、90 号住居跡を切る。11 号溝と近接し、同一の溝となる可能性があるが、軸が異なることから別の溝として報告する。溝は北端で途切れるが、溝の規模は長さ 10.3 m以上、幅は最大１ｍほどを測るが幅 0.4 ｍを基本とし、深さは３㎝程度の非常に浅い溝である。溝埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器で図示できるものはないが、埋土及び軸から圃場整備前まで機能した耕作に関わる溝の可能性が高い。

６号溝（図版 49・50、第 146・150 図）

３区東側に位置する南北溝で、９号溝に切られ、７・８号溝及び道路状遺構を切る。９・10 号溝と軸が直角になることから、時期的に近接する可能性が高い。北端は調査区外、南端はＳＸ 02 と一体化する。溝の規模は長さ 27.5 ｍ以上、幅は１ｍ前後、北側がより幅広くなる。深さは南端で 20㎝、北端で 35㎝と、床面は北側に向かって傾斜する。溝埋土の３層に拳大の礫が多く混じるが、溝で堆積した礫とは考えにくく、耕作のための排水溝として礫が意図的に入れられた可能性が



第 151 図　５次３区　６号溝、ピット、遺構面等出土土器実測図（1/3）

ある。

出土土器は古墳時代～古代のものであるが、摩滅していることから、混入品の可能性がある。埋土及び軸から圃場整備前まで機能した耕作に関わる溝の可能性が高い。

出土遺物（第 151 図１～７）

須恵器（１～４）　１・２は坏身で、いずれも色は灰色を呈する。１は器壁が厚めのもので、焼成はやや甘い。３は高台付坏身である。底部見込みには粘土輪積み痕が良好に残る。色は灰色を呈する。４は壺口縁部で、鈍い稜の突帯を挟んで六条以上の櫛描波状文を上下２段巡らす。内面には自然釉が付着する。色は灰色。

土師器（５～７）　５は甑把手で、内面には縦ナデが残る。色は灰黄褐色。６は底部に平坦面が認められる多孔式甑底部で、４ヶ所の孔が残る。色は茶褐色。７は高坏脚部で、坏内面にはミガキ後内外面黒化処理を行う。生地は灰黒色。

７号溝（図版 49・50、第 146・150 図）

３区北西から南東に延びた溝で、６号溝に切られる。また８号溝と軸がほぼ一致することから、時期的に近接する可能性が高い。溝の北西端及び南東端は調査区外であるが、溝の規模は長さ 23 m以上、幅は溝中央で最大 1.25 m前後になるが、風倒木痕により溝上端を正確に検出できなかった可能性が高く、溝の幅は 0.7 m程度を基本とすると思われる。深さは北西端で３㎝、南東端で 25 ㎝と、床面は南東に向かって傾斜する。

出土土器で図示できるものはないが、１層の存在から圃場整備前まで機能した耕作に関わる溝の可能性が高い。

８号溝（図版 49、第 146 図）

３区北西から南東に延びた溝で、６号溝に切られ、92 号住居跡を切る。また７号溝と軸がほぼ一致することから、時期的に近接する可能性が高い。溝の北西端及び南東端は調査区外であるが、溝の規模は長さ 20.8 m以上、幅は 0.4 m前後、深さは北西端で 15㎝、南東端で 12㎝、床面は７号溝とは逆に北西に向かって傾斜する。溝埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器で図示できるものはないが、８号溝と軸がほぼ一致することから、圃場整備前まで機能した耕作に関わる溝の可能性が高い。

９号溝（第 146 図）

３区中央の南東壁際に位置し、６・10 号溝を切る東西溝である。６・10 号溝と軸が直角になることから、時期的に近接する可能性が高い。東側は調査区外まで延びるが、溝の規模は長さ４m以上、幅最大 0.5 m、深さは５㎝を測る。溝埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器で図示できるものはないが、埋土及び軸から圃場整備前まで機能した耕作に関わる溝の可能性が高い。

10 号溝（第 146 図）

３区中央の南東寄りに位置し、９号溝に切られる南北溝である。6･11 号溝と軸がほぼ一致する。

溝の規模は長さ２ｍ、幅0.4ｍ、深さは最大10cmを測る。溝埋土は灰褐色粘質土に拳大の礫が多く混じり、溝内に充填された様相を示す。

出土土器で図示できるものはないが、埋土及び軸から圃場整備前まで機能した耕作に関わる溝の可能性が高いが、礫が多く混じることから、機能は溝とは異なる可能性がある。

11号溝（第146図）

３区中央の南西寄りに位置する南北溝である。５号溝と近接し、同一の溝となる可能性があるが、軸が異なることから別の溝として報告する。溝北端は撹乱を受けるが、溝の規模は長さ3.5ｍ以上、幅0.4ｍ程度、深さは最大15cmを測る。床面は北に傾斜する。溝埋土は灰褐色粘質土である。

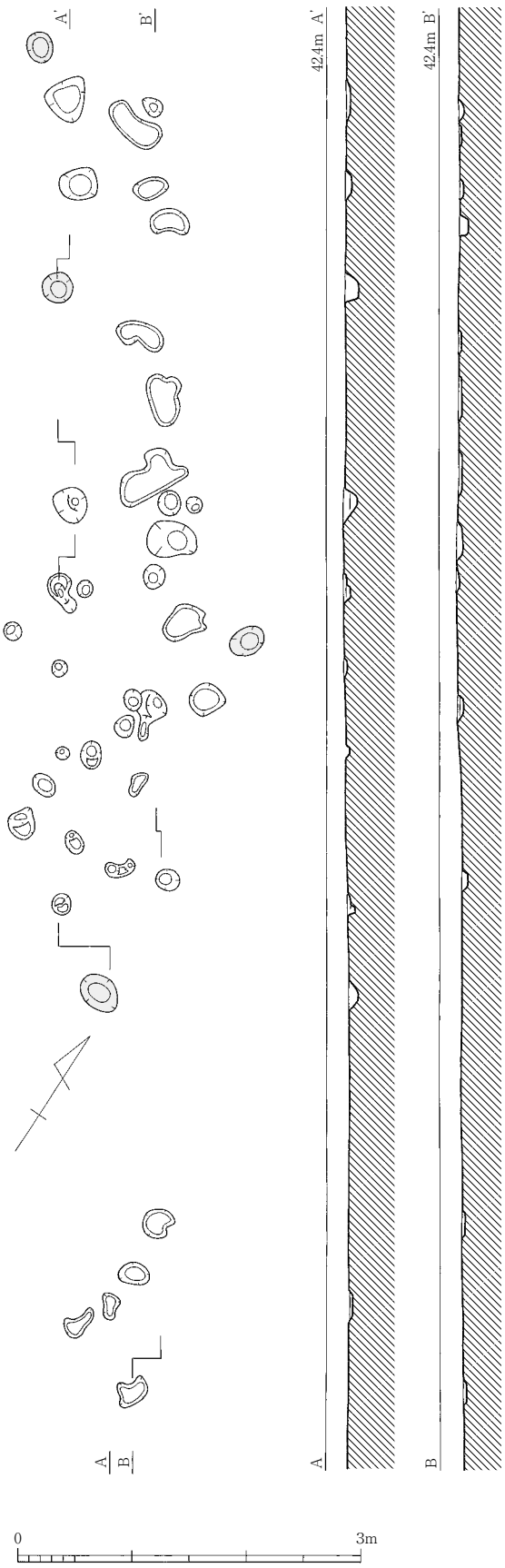
出土土器はないが、埋土及び軸から圃場整備前まで機能した耕作に関わる溝の可能性が高い。

（４）道路状遺構（図版50・51、第152図）

道路状遺構は３区北西に位置し、６号溝に切られる。道路状遺構は灰褐色粘質土を埋土とする径15～30cm前後、深さ３cm前後の小ピット群が北西から南東方向に並び、東端は６号溝を挟んで位置する３基のピットまで含まれると考えられる。

道路状遺構の規模は、長さ15.5ｍ分を検出した。なお、第152図のアミをかけた４基のピットは埋土が暗灰褐色砂質土と埋土が異なることから、道路状遺構に伴う可能性は低い。

ピットからの出土遺物はないため、時期は不明であるが、ちょうど集落の東端に位置し、地形も北東に向かって傾斜する地点に造られることから、道路を造る際に軟弱な地盤を改良するために造られたものと考えられる。

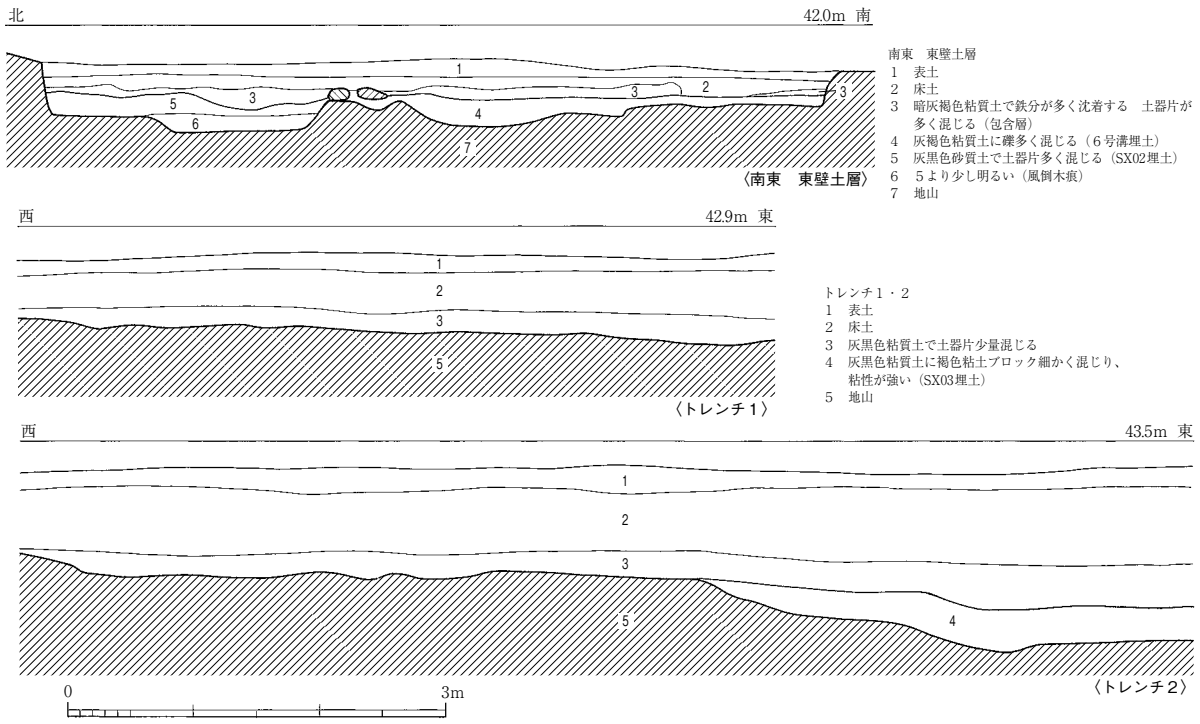


第152図　５次３区　道路状遺構実測図（1/60）

（５）不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ02（第146・153図）

３区南東に位置する地形の落ちで、北側で南北溝である６号溝と一体化する。第153図の南東東壁土層の５層が埋土にあたり、西側の集落から投棄されたと考えられる土器小片を多数含む。この



第 153 図　５次３区　南東東壁及びトレンチ１・２土層実測図（1/60）

ことは、ＳＸ 02 が集落東端にあたることを示すと考えられる。

ＳＸ 03（第 146・153 図）

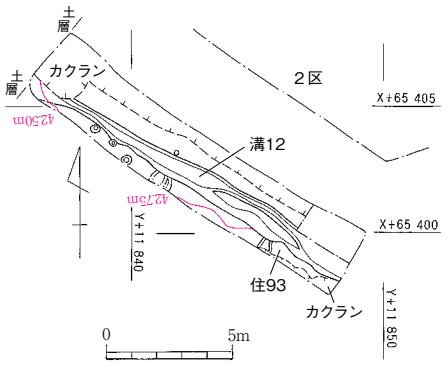
３区北西に位置する地形の落ちで、７号溝、道路状遺構より北西側は緩やかに地形が傾斜する。第 153 図のトレンチ１・２の土層でＳＸ 03 の堆積状況を示すが、トレンチ２の４層がＳＸ 03 の埋土にあたる。ＳＸ 02 と同じく、ＳＸ 03 が集落東端にあたることを示すと考えられる。

（６）ピット出土土器（第 151 図８）

土師器（８）　８は甕底部である。内面には工具ナデ痕が残り、それ以外の内外面はナデ調整である。外面は被熱痕とススが多く付着する。色は灰黄褐色を呈する。Ｐ 525 出土。

（７）遺構面等出土土器（第 151 図９～ 11）

土師器（９～ 11）　９～ 11 は甕口縁部で、色はいずれも灰黄褐色を呈する。１は内面頸部にハケを施す。ＳＸ 03 出土。10 は外面被熱痕及びススが付着する。11 は端部をナデで面取りしたもの。



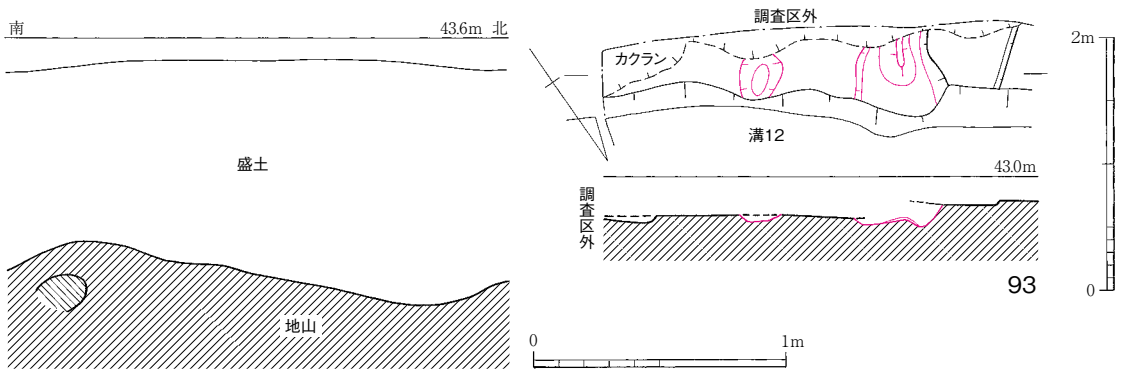
第 154 図　５次４区　遺構配置図（1/300）

６　塔田琵琶田遺跡第５次調査４区の報告

（１）調査の概要

４区は５次調査区の中央に位置する約 43㎡の範囲である。当区の南に１区、北に２区、北東に３区、南西に３次調査区と２次Ｉ区が位置する。

４区の調査前は市道で、バイパス工事でこの市道をまたぐボックスを設置するため、迂回路を設置して道



第 155 図　5 次 4 区　西壁土層（1/30）・93 号竪穴住居跡実測図（1/60）

路下を掘削する工事であったことから、県土整備事務所と協議を行い迂回路設置後から掘削までの期間、合計３日間発掘調査を行った。

市道は圃場整備前から存在したため、地下には遺構が良好に残っていると予想されたが、圃場整備時に道路をやり直し、地表下 90㎝の黄褐色砂礫土が露出する地山まで大部分掘削されていた（第 155 図左土層図）。検出した遺構は、掘削が及んでいなかった調査区南隅に残存していた竪穴住居跡１棟、溝１条、ピット３基、風倒木痕を検出したのみである。93 号竪穴住居埋土は灰黒色粘質土であるため、本来は集落が広がっていたことが予想される。

（２）竪穴住居跡

93 号竪穴住居跡（図版 51、第 155 図）

４区南西隅に位置し、12 号溝に切られる。住居の大半が調査区外であり、西壁の一部を含む竪穴住居のほんの一部を検出したにとどまる。住居の規模は東西 2.73 m、南北 0.7 m以上、深さ最大 10㎝の住居である。住居埋土は灰黒色粘質土である。住居床下掘り込みを２ヶ所で確認した。

出土土器から５世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（第 156 図１）

土師器（１）　１は口縁部が強く内湾する碗である。外面下位はケズリ後ミガキ、外面上位と内面下位はミガキ、内面上位は横ナデを施す。色は灰黒色。

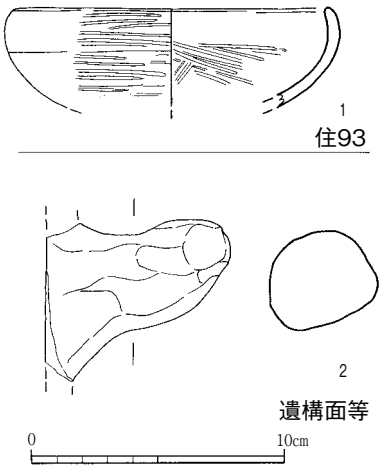
（３）溝

12 号溝（第 154 図）

４区中央で検出した北西－南東方向に直線的に延びる溝で、93 号住居跡を切る。溝の規模は長さ 12.7 m以上、幅最大 1.1 m、深さは最大 37㎝を測る。埋土には灰褐色粘質土である。出土遺物で図示できるものはないが、２区２号溝に直交し、埋土も同じであることから、圃場整備前まで機能した溝と思われる。

（４）遺構面等出土土器（第 156 図２）

土師器（２）　２は甑把手である。内外面ともナデで調整する。色は灰黄褐色を呈する。



第 156 図　5 次 4 区　93 号竪穴住居跡、遺構面等出土土器実測図（1/3）

Ⅳ　自然科学分析

１　出土炭化物の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

（１）はじめに

久路土芝掛遺跡は、豊前中津平野の北部に位置し、埋没低地によって周囲を取り囲まれた、南北方向に帯状に延びる微高地上に立地している。これまでの発掘調査では、弥生時代の貯蔵穴、古墳時代中期前半の竪穴住居跡、古墳時代前期末～中期前半頃の環濠の可能性がある溝などが確認されている。塔田琵琶田遺跡は、久路土芝掛遺跡に近い丘陵上に位置し、弥生時代後期終末～古墳時代前期および古墳時代中期～後期の集落に伴う遺構が検出されている。特に、古墳時代中期～後期の集落は、Ｌ字状カマド、いわゆるオンドル状遺構を持つ竪穴住居が多数確認されている。

今回の分析調査では、久路土芝掛遺跡第２次及び塔田琵琶田遺跡第５次の竪穴住居跡から出土した炭化材を対象として、遺構の構築・廃絶に関わる年代推定のため放射性炭素年代測定を実施した。

（２）久路土芝掛遺跡・塔田琵琶田遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

a. 試料

試料は、久路土芝掛遺跡第２次１号竪穴住居跡から出土した炭化材４点、塔田琵琶田遺跡５次１区３・16・87 号竪穴住居跡から出土した炭化材７点・炭質物１点、計８点の総計 12 点である。

各炭化材の性状および測定試料の採取位置、樹種同定結果を第４表に示す。樹種同定の結果、広葉樹のクヌギ節・アカガシ亜属・クスノキ科・アワブキ属・シャシャンボ・カキノキ属・ハイノキ節の７分類群が同定された。以下に各分類群の解剖学的特徴を記す。

・クヌギ節（Quercus subgen. Quercus sect. Cerris）　ブナ科コナラ属

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し､壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科コナラ属

放射孔材で、道管壁の厚さは中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15 細胞高のものと複合

№.	遺跡	遺構	炭№.	種類	状態	樹皮の有無	年数	測定試料採取位置
1	久路土芝掛2次	1号竪穴住居跡	炭④	ハイノキ節	破片	無	5-6年分	外3年分
2	久路土芝掛2次	1号竪穴住居跡	炭⑦	アワブキ属	ミカン割状	無	5-6年分	外3-4年分
3	久路土芝掛2次	1号竪穴住居跡	炭⑧	アワブキ属	破片	無	6-7年分	外3-4年分
4	久路土芝掛2次	1号竪穴住居跡	炭⑩	シャシャンボ	破片	無	5-6年分	外3-4年分
5	塔田琵琶田5次	87号竪穴住居跡	炭①	カキノキ属	破片多数	無	最大3年分	最も大きい破片の外3年分
6	塔田琵琶田5次	87号竪穴住居跡	炭2b	アカガシ亜属	ミカン割状	無	不明	外側1cm(2-3年分程度)
7	塔田琵琶田5次	3号竪穴住居跡	炭①	ハイノキ節	半裁状	無	6-7年分	外4-5年分
8	塔田琵琶田5次	3号竪穴住居跡	炭②	炭質物	土塊に薄く付着	無	不明	全面からそぎ落として採取
9	塔田琵琶田5次	3号竪穴住居跡	炭③	クスノキ科	破片	無	18～20年分	外6-7年分
10	塔田琵琶田5次	16号竪穴住居跡	炭①	クヌギ節	破片2片	無	最大5年分	大きい破片の外3年分
11	塔田琵琶田5次	16号竪穴住居跡	炭②	クヌギ節	破片5片	無	最大12年分	大きい破片の外4-5年分
12	塔田琵琶田5次	16号竪穴住居跡	炭③	クヌギ節	柾目板状	無	17年分	外5年分

第４表　放射性炭素年代測定試料一覧

放射組織とがある。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または２～３個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・アワブキ属（Meliosma）　アワブキ科

散孔材で、道管は単独または２～４個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、１～３細胞幅、１～60細胞高。

・シャシャンボ（Vaccinium bracteatum Thunb.）　ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、単列で８細胞高前後のものと５～７細胞幅、30～60細胞高のものがある。放射組織には鞘細胞が認められる。

・カキノキ属（Diospyros）　カキノキ科

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または２～４個が時に年輪界をはさんで放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、１～３細胞幅、10～20細胞高で層階状に配列する。

・ハイノキ節（Symplocos sect. Lodhra）　ハイノキ科ハイノキ属

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独または２～５個が複合して散在し、年輪界に向かって径を減少させる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高。

（３）分析方法

測定試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、３MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（yrBP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、

RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0（Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.1.0. のマニュアルに従い、１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果はσ・2σ（σは統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、2σは真の値が 95.4% の確率で存在する範囲）の値を示す。また、表中の相対比は、σ・2σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表された値を記す。

（４）結果および考察

a. 久路土芝掛遺跡第２次

年代測定結果および暦年較正結果を第５表、第 157 図に示す。

№. 遺構・炭№. 試料状態	処理方法	測定年代 yrBP	δ ^{13}C (‰)	補正年代 (暦年較正用) yrBP	暦年較正結果				Code №.
					誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
№.1 1号竪穴住居跡　炭④ 炭化材片：ハイノキ節	AAA	1,710±20	−25.40±0.33	1,710±20 (1,705±24)	σ	cal AD 264 − cal AD 273	cal BP 1,686 − 1,677	0.127	IAAA-150590
						cal AD 331 − cal AD 385	cal BP 1,619 − 1,565	0.873	
					2σ	cal AD 255 − cal AD 301	cal BP 1,695 − 1,649	0.248	
						cal AD 316 − cal AD 398	cal BP 1,634 − 1,552	0.752	
№.2 1号竪穴住居跡　炭⑦ ミカン割状炭化材：アワブキ属	AAA	1,810±20	−25.43±0.61	1,800±20 (1,800±24)	σ	cal AD 141 − cal AD 159	cal BP 1,809 − 1,791	0.140	IAAA-150591
						cal AD 166 − cal AD 196	cal BP 1,784 − 1,754	0.279	
						cal AD 209 − cal AD 251	cal BP 1,741 − 1,699	0.581	
					2σ	cal AD 133 − cal AD 257	cal BP 1,817 − 1,693	0.884	
						cal AD 284 − cal AD 290	cal BP 1,666 − 1,660	0.011	
						cal AD 295 − cal AD 322	cal BP 1,655 − 1,628	0.105	
№.3 1号竪穴住居跡　炭⑧ 炭化材片：アワブキ属	AAA	1,770±20	−28.07±0.50	1,720±30 (1,715±25)	σ	cal AD 260 − cal AD 279	cal BP 1,690 − 1,671	0.260	IAAA-150592
						cal AD 326 − cal AD 382	cal BP 1,624 − 1,568	0.740	
					2σ	cal AD 252 − cal AD 305	cal BP 1,698 − 1,645	0.357	
						cal AD 311 − cal AD 392	cal BP 1,639 − 1,558	0.643	
№.4 1号竪穴住居跡　炭⑩ 炭化材片：シャシャンボ	AaA	1,770±20	−22.82±0.54	1,800±30 (1,803±25)	σ	cal AD 141 − cal AD 159	cal BP 1,809 − 1,791	0.172	IAAA-150593
						cal AD 165 − cal AD 196	cal BP 1,785 − 1,754	0.302	
						cal AD 208 − cal AD 247	cal BP 1,742 − 1,703	0.527	
					2σ	cal AD 131 − cal AD 257	cal BP 1,819 − 1,693	0.902	
						cal AD 284 − cal AD 289	cal BP 1,666 − 1,661	0.009	
						cal AD 295 − cal AD 321	cal BP 1,655 − 1,629	0.089	

1)処理方法のAAAは、酸処理－アルカリ処理－酸処理を示す。アルカリ濃度が1N未満の場合にはAaAと表記している。

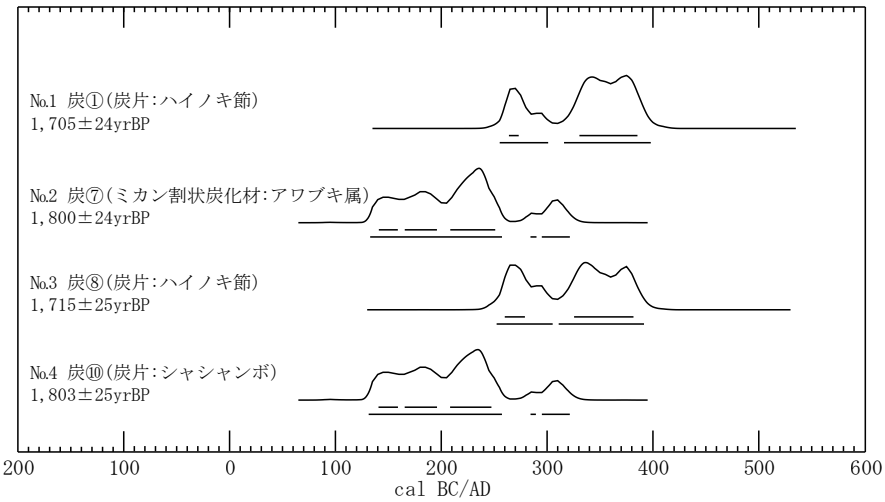
2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

3)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986−2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第５表　久路土芝掛遺跡２次竪穴住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定・暦年較正結果

今回測定対象とした１号竪穴住居跡の炭化材は、住居廃絶後の人為的に埋め戻された堆積物中（住居床面より５～ 10cm以上の高い位置）から出土したものである。炭化材の樹種は、炭④の破片が常緑広葉樹のハイノキ節、炭⑦のミカン割材と炭⑧の破片が常緑・落葉広葉樹の種を含むアワブキ属、炭⑩の破片が常緑広葉樹のシャシャンボに同定された。これらの樹種は周辺に生育していたとしても矛盾しない種類である。

炭化材の年代測定結果は、炭④と炭⑧、炭⑦と炭⑩が近似する値を示す。炭④・炭⑧は、補正年代値（同位体効果による補正を行った年代値）で 1710 ± 20yrBP、1720 ± 30yrBP、暦年較正年代（2σ確率１位）で cal AD 316-398、cal AD 311-392 を示す。一方、炭⑦・炭⑩は補正年代値で



各曲線の下部にある二段の直線は、上段が１σ、下段が２σの範囲を示す。

第 157 図　久路土芝掛遺跡２次１号竪穴住居跡出土炭化材の暦年較正結果

1800 ± 20yrBP・1800 ± 30yrBP、暦年較正年代は、cal AD 133-257、cal AD 131-257 を示す。このように炭④・⑧が４世紀代、炭⑦・炭⑩が２世紀前半～３世紀中葉を示しており、約 80 ～ 90 年の年代差がある。炭化材片の場合、二次肥大成長する木材（年輪）のどの部分が残存しているか判断できないため､得られた年代値が必ずしも伐採や枯死年代を示しているとは限らない(古木効果)。

そのため、得られた年代値は下限年代として認識する必要があり、１号住居跡の廃絶時期が新しい方の年代値である４世紀以降と推定される。本住居跡の年代は、出土遺物から５世紀前半と考えられていることから、同調的な結果といえる。なお、測定した炭化材が住居廃絶後の人為的営力下で形成された堆積物中からの出土であることを踏まえると、埋め戻しに使用された堆積物中に元々存在したものが含まれている可能性もある。

ｂ.塔田琵琶田遺跡第５次

各住居跡の年代測定結果および暦年較正結果を第６表、第 158 図に示す。以下に竪穴住居跡別に記載する。

３号竪穴住居跡：測定対象とした炭①～③は、竪穴住居跡のカマド床面近くから出土した炭化材である。いずれも検出時には幅 10cm程度の細い材で、建物の主要構築材でなく、住居廃絶時に人為的堆積物とともに取り込まれた建築部材と推定されている。また、炭②は検出当初は板材であったが、調査時の掃除の際に炭部分がほとんどなくなってしまったと考えられるため、年代測定では残存する炭質物について実施した。炭化材の樹種は、炭①の破片が落葉高木となるカキノキ属、炭③が多くの種が常緑広葉樹で高木～低木の種を含むクスノキ科に同定された。

補正年代値・暦年較正年代は、 炭①が 1,680 ± 30yrBP・cal AD 327-418、炭②が 1,820 ± 20yrBP・cal AD 127-249、炭③が 1,620 ± 20yrBP・cal AD 389-474 を示す。炭②の炭質物は炭①・③に比較して約 200 年古い年代値を示す。これら年代値から、残存部位は炭①が４世紀前半～５世紀初頭、炭②が２世紀前半～３世紀初頭、炭③が４世紀後半～５世紀後半と推定される。古木効果を考えると、住居廃絶の時期は４世紀後半～５世紀後半以降と推定される。本住居跡の年代は、出土遺物から５世紀後半と推定されており、同調的な結果といえる。

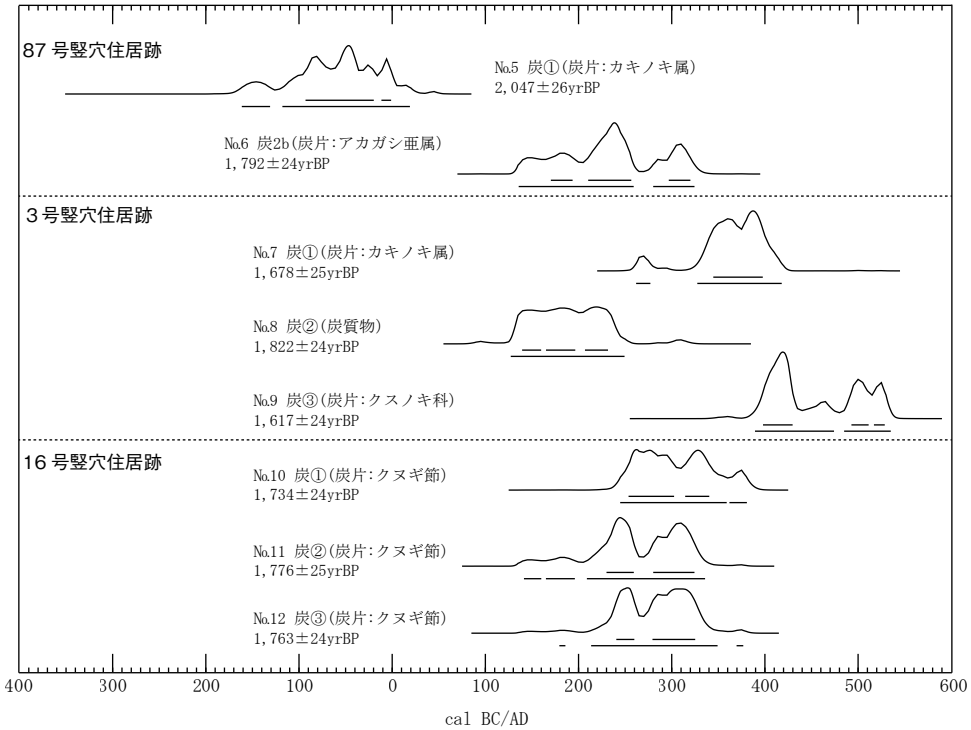
№ 遺構・炭№ 試料状態	処理方法	測定年代 yrBP	δ ^{13}C (‰)	補正年代 (暦年較正用) yrBP	暦年較正結果 誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	Code №
№5 87号竪穴住居跡　炭① 炭化材片:カキノキ属	AAA	2,070±20	−26.41±0.70	2,050±30 (2,047±26)	σ	cal BC　93 − cal BC　20 cal BC　12 − cal BC　1	cal BP 2,042 − 1,969 cal BP 1,961 − 1,950	0.890 0.110	IAAA- 150594
					2σ	cal BC 161 − cal BC 131 cal BC 118 − cal AD 19	cal BP 2,110 − 2,080 cal BP 2,067 − 1,931	0.082 0.918	
№6 87号竪穴住居跡　炭2b ミカン割状炭化材: アカガシ亜属	AaA	1,820±20	−26.47±0.53	1,790±20 (1,792±24)	σ	cal AD 170 − cal AD 194 cal AD 210 − cal AD 257 cal AD 297 − cal AD 320	cal BP 1,780 − 1,756 cal BP 1,740 − 1,693 cal BP 1,653 − 1,630	0.166 0.615 0.219	IAAA- 150595
					2σ	cal AD 136 − cal AD 259 cal AD 280 − cal AD 324	cal BP 1,814 − 1,691 cal BP 1,670 − 1,626	0.771 0.229	
№7 3号竪穴住居跡　炭① 半裁状炭化材:ハイノキ節	AAA	1,680±20	−25.05±0.59	1,680±30 (1,678±25)	σ	cal AD 345 − cal AD 398	cal BP 1,605 − 1,552	1.000	IAAA- 150596
					2σ	cal AD 262 − cal AD 277 cal AD 327 − cal AD 418	cal BP 1,688 − 1,673 cal BP 1,623 − 1,532	0.051 0.949	
№8 3号竪穴住居跡　炭② 炭質物(発掘調査時は 板材と判断されたもの)	AaA	1,860±20	−26.99±0.57	1,820±20 (1,822±24)	σ	cal AD 139 − cal AD 160 cal AD 165 − cal AD 196 cal AD 207 − cal AD 232	cal BP 1,811 − 1,790 cal BP 1,785 − 1,754 cal BP 1,743 − 1,718	0.254 0.409 0.337	IAAA- 150597
					2σ	cal AD 127 − cal AD 249	cal BP 1,823 − 1,701	1.000	
№9 3号竪穴住居跡　炭③ 炭化材片:クスノキ科	AaA	1,680±20	−28.65±0.66	1,620±20 (1,617±24)	σ	cal AD 398 − cal AD 430 cal AD 493 − cal AD 511 cal AD 517 − cal AD 529	cal BP 1,552 − 1,520 cal BP 1,457 − 1,439 cal BP 1,433 − 1,421	0.621 0.245 0.134	IAAA- 150598
					2σ	cal AD 389 − cal AD 474 cal AD 485 − cal AD 535	cal BP 1,561 − 1,476 cal BP 1,465 − 1,415	0.625 0.375	
№10 16号竪穴住居跡　炭① 炭化材片:クヌギ節	AAA	1,790±20	−28.50±0.60	1,730±20 (1,734±24)	σ	cal AD 254 − cal AD 303 cal AD 314 − cal AD 340	cal BP 1,696 − 1,647 cal BP 1,636 − 1,610	0.664 0.336	IAAA- 150599
					2σ	cal AD 245 − cal AD 359 cal AD 362 − cal AD 381	cal BP 1,705 − 1,591 cal BP 1,588 − 1,569	0.918 0.082	
№11 16号竪穴住居跡　炭② 炭化材片:クヌギ節	AAA	1,780±20	−25.16±0.69	1,780±30 (1,776±25)	σ	cal AD 230 − cal AD 259 cal AD 280 − cal AD 324	cal BP 1,720 − 1,691 cal BP 1,670 − 1,626	0.432 0.568	IAAA- 150600
					2σ	cal AD 141 − cal AD 160 cal AD 165 − cal AD 196 cal AD 209 − cal AD 336	cal BP 1,809 − 1,790 cal BP 1,785 − 1,754 cal BP 1,741 − 1,614	0.029 0.061 0.909	
№12 16号竪穴住居跡　炭③ 柾目板状炭化材:クヌギ節	AAA	1,820±20	−28.20±0.55	1,760±20 (1,763±24)	σ	cal AD 241 − cal AD 260 cal AD 279 − cal AD 325	cal BP 1,709 − 1,690 cal BP 1,671 − 1,625	0.297 0.703	IAAA- 150601
					2σ	cal AD 179 − cal AD 186 cal AD 214 − cal AD 349 cal AD 370 − cal AD 377	cal BP 1,771 − 1,764 cal BP 1,736 − 1,601 cal BP 1,580 − 1,573	0.005 0.990 0.006	

1)処理方法のAAAは、酸処理ーアルカリ処理ー酸処理を示す。アルカリ濃度が1N未満の場合にはAaAと表記している。

2)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

3)暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第６表　塔田琵琶田遺跡５次各竪穴住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定・暦年較正結果



各曲線の下部にある二重の直線は、上段が１σ、下段が２σの範囲を示す。

第 158 図　塔田琵琶田遺跡５次各竪穴住居跡出土炭化材の暦年較正結果

16 号竪穴住居跡：測定対象の炭①～③は、竪穴住居床面から 10cm以上高い位置で出土した炭化材である。いずれも幅 20cm程度の炭化材で、建物の主要材ではなく、住居廃絶時に土とともに埋めた不要な建築部材であったと考えられている。また、住居跡の年代は、出土遺物から５世紀後半と推定されている。炭化材の樹種はいずれも落葉広葉樹で高木となるクヌギ節であった。

補正年代値・暦年較正結果は、炭①が 1,730 ± 30yrBP・cal AD 245-359、炭②が 1,780 ± 30yrBP・cal AD 209-336、炭③が 1,780 ± 20yrBP・cal AD 214-349 を示し、試料間で近似する値を示した。暦年較正結果に基づくと、これら炭化材は３世紀～４世紀中葉を示していることになる。上記したように本住居跡の年代は５世紀後半と推定されており、得られた年代値と約 100 年の差が生じていることになる。古木効果を踏まえると、矛盾しないものの年代差は大きく、別要因の可能性もある。

87 号竪穴住居跡：炭①・2b とも竪穴住居床面近くで出土した炭化材である。いずれも幅 10cm程度の細い材であることから、建物の主要材でなく、住居廃絶時に堆積物とともに埋めた不要な建築部材であったと考えられている。出土遺物から古墳時代前期後半、４世紀の竪穴住居跡と推定されている。樹種は、炭①が落葉広葉樹のカキノキ属、炭 2b が常緑広葉樹で高木となるアカガシ亜属であった。

補正年代値・暦年較正年代は、炭①が 2,050 ± 30yrBP・cal BC 181-cal AD 19、炭 2b が 1,790 ± 20yrBP・cal AD 136-249 を示し、試料によるバラツキが大きい。この結果から、埋め戻し堆積物の形成年代は３世紀後半以降と推定される。出土遺物からみた住居の推定年代よりやや古い年代値を示しているが、炭化材の樹種が年輪が緻密な場合が多いアカガシ亜属であったことから古木効果の影響は充分考えられる。

２　塔田琵琶田遺跡出土カマド粘土の土壌分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

（１）はじめに

塔田琵琶田遺跡第５次１区６号竪穴住居跡カマドの構築粘土の特性を把握・記録化することを目的として、カマド粘土の薄片作成鑑定とスサの可能性がある痕跡の植物珪酸体分析を実施する。

（２）試料

試料は第５次１区６号竪穴住居跡のカマドに使用されていた粘土塊１点である。調査所見によると、カマドは粘土のみで構築した朝鮮半島由来とされるＬ字状カマド（いわゆるオンドル状遺構）で、住居中央にカマド燃焼部を置き、そのカマドで生成された煙が粘土で構築された長い煙道部を通り、住居右隅に抜け、住居の暖房を兼ねていたとされる。６号住居跡カマドは、煙道天井部近くまで残る残りの良いものであるが、粘土のみでは 10cm× 20cmの煙が通る空間（煙道）を保持するのは難しいと思われ、粘土に混和材を混ぜて補強し、かつ木組みなど何らかの構造物がないと構築できなかった可能性が考えられている。

カマド粘土塊試料は、大きさ９cm 程度の塊であり、堅く締まっている。粘土塊の表面には、酸化鉄の沈着部分や、埋没後に付着したとみられる黒色腐植質土壌が認められる。このように埋没後の汚染の影響を受けている可能性が高く、粘土塊を半裁して層相を観察した（第 159 図）。半裁断

面では、幅１mm 以下の孔隙が多数確認され、部分的に幅２～１mm 程度の直線状の孔隙も確認される。この孔隙に画くされた基質部分（泥部分）は灰白色～褐色を呈する､不定形のブロック土（偽礫･微小ブロック）からなり、岩片や炭質物の可能性がある黒色物質が混在する。また、粘土ブロック周縁部は中心部に比較して、相対的に暗色を呈している部分が多い。確認された幅２～１mm 程度の直線状の孔隙内表面には植物組織を示す繊維状構造は確認されなかった。

植物珪酸体では、粘土塊中の直線状の孔隙の側壁部分、および基質の中心部の泥部分、粘土塊周縁部の暗褐色泥部分より試料を採取し、分析に供した。また土壌薄片は半裁試料面で作製した。

（３）分析方法

a. 植物珪酸体分析

竈や壁などを構成する人為的堆積物中には､切り藁などの「スサ」が利用されている場合がある。堆積物中に取り込まれた切り藁などは、遺存状態によって残存する場合、経年変化の過程で分解する場合があるが、後者の場合、植物体に由来する珪化組織片や、あるいは印象化石として残存する場合がある。

今回のカマド粘土塊は、明瞭な苫痕跡は確認されておらず、その可能性がある直線状の孔隙壁、孔隙に画くされた基質部分（試料中心の灰白色部分と周縁部周辺の暗褐色部分）の堆積物について珪化組織片の有無確認を目的として、植物珪酸体の分離・濃集を次の方法で試みた。試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理･化学処理を行い、珪化組織片や植物珪酸体を分離･濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下･乾燥させる。乾燥後プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下､短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（近藤 2010）の分類を参考に同定・計数する。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。

b. 薄片作製鑑定

試料の堆積物断面について、肉眼による観察記載を行った後、縦 10cm、横７cm、厚さ１cm の板状に調整する。調整試料を 80℃で１日間乾燥した後、樹脂（ペトロポキシおよびシアノボンド）で固化する。固化した試料は、一次研磨、80℃乾燥、樹脂による再固化、二次研磨を経て片面の研磨を終了、室温で約１時間の減圧乾燥をした後、スライドガラスにスーパーセメダインで接着する。二次切断をしてもう片方の面を研磨、乾燥した後、カナダバルサムによりカバーグラスを接着する。最後に仕上げ整形を行い完成させる。

土壌薄片は、実体顕微鏡・偏光顕微鏡・生物顕微鏡を用いて、構成する砕屑物の特徴および構造について観察記載を行う。なお、土壌薄片による層相や構造記載は、久馬・八木久訳監修の「土壌薄片記載ハンドブック」（久馬・八木久 1998）を参照した。

（4）結果

a. 植物珪酸体の産状

結果を第７表に示す。基質泥部分、暗褐色泥部分、孔隙壁部分の３箇所の分析の結果、いずれの場所からも珪化組織片は認められなかった。また、作製した土壌薄片では、単体の植物珪酸体は検出されるものの、植物珪酸体組織片は認められなかった。検出される珪酸体は保存状態の悪いタケ亜科の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体などである。

種　類	住居6カマド粘土		
	試料中心 灰白色泥	試料周縁 暗褐色泥	孔隙壁 泥部分
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケ亜科	1	2	2
不明	3	1	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科	9	5	3
不明	4	5	3
合　計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	4	3	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体	13	10	6
検出個数	17	13	10

第７表　植物珪酸体の産状

b. 土壌薄片観察結果

①鉱物学的特徴

薄片は、偏光顕微鏡下において観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量（＞50%）、中量（20～50%）、少量（５～20%）、微量（＜５%）およびきわめて微量（＜１%）という基準で目視により判定した（第８表）。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行った。以下に鏡下観察結果を述べる。

砂礫の種類構成													
鉱物片						岩石片					その他		
斜長石	黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	ガラス質流紋岩	デイサイト	凝灰岩	脈石英	風化岩	火山ガラス	植物珪酸体	偽礫
＋	±	＋	±	±	±	±	±	±	±	＋	±	±	○

量比　◎:多量　○:中量　△:少量　＋:微量　±:きわめて微量

第８表　カマド粘土中の砂礫の種類構成

薄片試料は、粗粒シルト～小礫サイズの砕屑片を少量程度含んでおり、淘汰は不良である。鉱物片は径 0.1 ～ 1.5mm 大で微量含まれ、斜長石、角閃石が主体となっており、他に斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物なども認められる。岩片は径 0.3 ～ 4 mm 大で微量含まれ、亜円礫状を呈し、凝灰岩、火山岩が原岩とみられる風化岩が主体となっている。その他、凝灰岩、ガラス質流紋岩、デイサイト、脈石英なども含まれている。その他の砕屑片としては、植物珪酸体、バブルウォール型の火山ガラスなどがきわめて微量含まれている。基質は中量～多量存在し、褐色を呈する粘土、シルトから構成され、炭質物や水酸化鉄が不均質に分布している。基質には径 0.5 ～ 10mm 大で不定形粒状のブロック土となっている部分が中量程度存在し、散点状の分布を示す。試料写真中の△矢印箇所はほとんどがこのブロック土に相当し、一部の濃色の粒子は風化岩である。偽礫・微小ブロック中ではシルト分がやや多い傾向を示す。一方、薄片面ではやや暗褐色～褐色を呈する領域と明色を呈する領域が存在するが、構成砕屑物が周囲と異なるという傾向は認められない。

一方、カマド粘土であることから焼成の影響も想定される。土壌が焼成を受けて褐色化する原因は水酸化鉄の酸化によるものである。水酸化鉄は、一般に 270 ～ 325℃ 程度の焼成を受けると脱水し、赤鉄鉱へ変化することが知られている（吉木 1959）。水酸化鉄が赤鉄鉱化することにより、顕微鏡下においては赤味が強くなっている部分が確認できる。しかし、本試料に含まれる水酸化鉄は、暗褐色～暗赤褐色を呈しており、水酸化鉄は酸化していないと判断される。そのことから、本試料が焼成を被ったとしても 270 ～ 325℃ 程度の温度には達していなかったと考えられる。

②微細構造

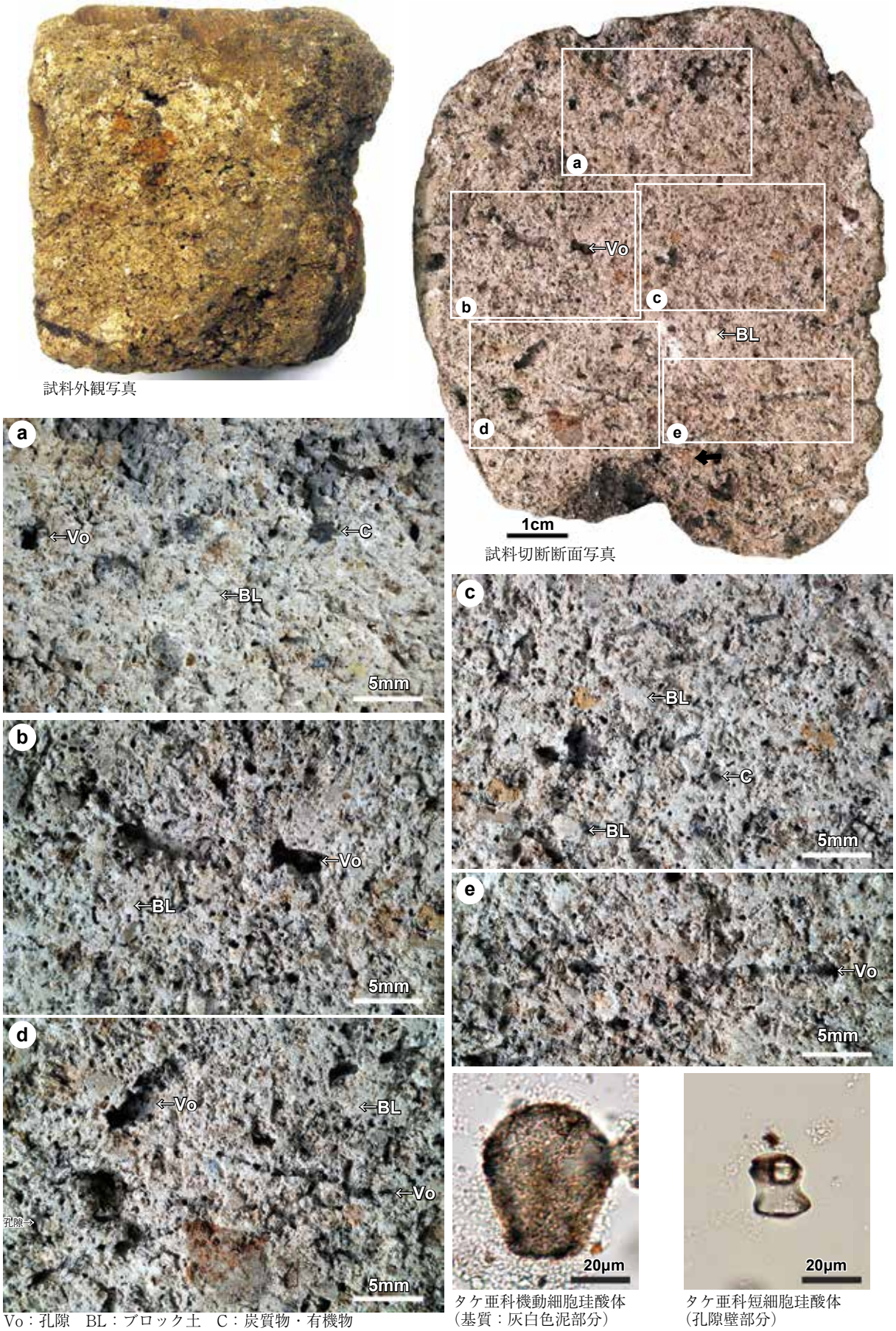
土壌微細構造的特徴として顕著であるのは、孔隙の多さである。観察できる主要な孔隙は、不定形のバグ孔隙と管状のチャンネル孔隙であり、一部にチェンバー状のものも認められる。薄片内の砂粒や鉱物片とその基質（泥質部分）では、ともに明瞭な配向や葉理が観察されない。基質（泥質部分）は、0.1 ～ 0.5mm の粘土・シルトブロックからなる。粘土・シルトブロックは亜角から亜円を呈するもの、微細な有機物ないし腐植質が混在するものがあり、これらが団粒状に集合しているものが多く、斑状かつ不均質に分布する。このほか、岩片、砂、５mm 以下の炭質物が僅かに散在する。粘土・シルトブロックや団粒状の集合体の周囲は孔隙で画くされている部分が多いものの、孔隙の発達の悪い領域も存在する。また粘土塊全体の周縁部１cm 程度の範囲は相対的に孔隙の発達が顕著で、微細な炭質物や腐植質を含む粘土・シルトブロックが多く認められる。

（５）考察

本遺跡が所在する豊前市には、後期中新世～前期中新世に活動した英彦山火山岩類（石塚他 2009）が広く分布している。英彦山火山岩類は、主に安山岩 - デイサイト溶岩と同質の火山砕屑岩類からなり、玄武岩溶岩、デイサイト火砕流堆積物、流紋岩降下軽石を伴う。本火山岩類は、犬ヶ岳 - 大平山、釣鐘山、樋桶山等の高標高部や山国川河床部などに溶岩が分布し、周防灘報告へ緩やかな火山麓扇状地を形成している。火山麓扇状地は、ラハール堆積物、火山岩塊火山灰流堆積物、軽石質火砕流堆積物および岩屑なだれ堆積物から構成されている。

観察したカマド粘土に含まれる岩片は、凝灰岩、火山岩が原岩とみられる風化岩、凝灰岩、ガラス質流紋岩、デイサイト、脈石英であった。脈石英の由来は不明であるが、火山岩、火山砕屑岩類から構成される岩片組成は概ね上記の地質と整合していることから、カマド粘土には英彦山火山岩類を母材とした堆積物が使用されているとみることができる。

カマド粘土の微細構造は多数の孔隙が存在することが特徴である。孔隙に画くされた基質部分（粘土部分）は、上述のように大きさや形状・性状の異なる粘土・シルトブロックと、これらが団粒状に集合した集合体からなり、砂や炭質物・有機物に由来する物質が散在している。このような基質の状態から、カマド粘土材料は、粘土・シルトを主体とし、少量～微量の砂・岩片が混じる堆積物・土壌が使用されており、良く撹拌ないしは練り合わせていることが窺える。また、微細構造からは、構成物質が流動や圧密といった強い外的営力を受けていないようにみえる。孔隙が多い理由については不明である。もしこれらの孔隙が形成時に伴うものであった場合には、構成物質が圧密を受けることなく、しまりのない状況で形成されたことになるが、カマド粘土試料の固結状況をふまえると、その可能性は低いと判断される。孔隙の多い理由については、カマド粘土構築後の乾燥収縮や使用時の被熱の影響と関係している可能性がある。カマド構築に使用される粘土は、芯などの植物遺体を補強材として練り合わせて作製されるのが一般的であるが、今回のカマド粘土には、肉眼および土壌薄片観察でも芯を示す植物組織を有する部分は確認されなかった。ただ、土壌薄片では幅２mm 程度の有機物ないし炭質物（第 160 図ｆ・ｉなど）が確認されている。この炭質物はカマド粘土使用時の被熱により炭化しているものだとすれば、カマド粘土材料として植物体が利用されていることになる。粘土塊の基質部分と孔隙壁部分より採取した堆積物の植物珪酸体分析結果では、珪化組織片が認められなかったことから、イネ科（イネやムギなど）植物体が芯として使用されて



試料外観写真

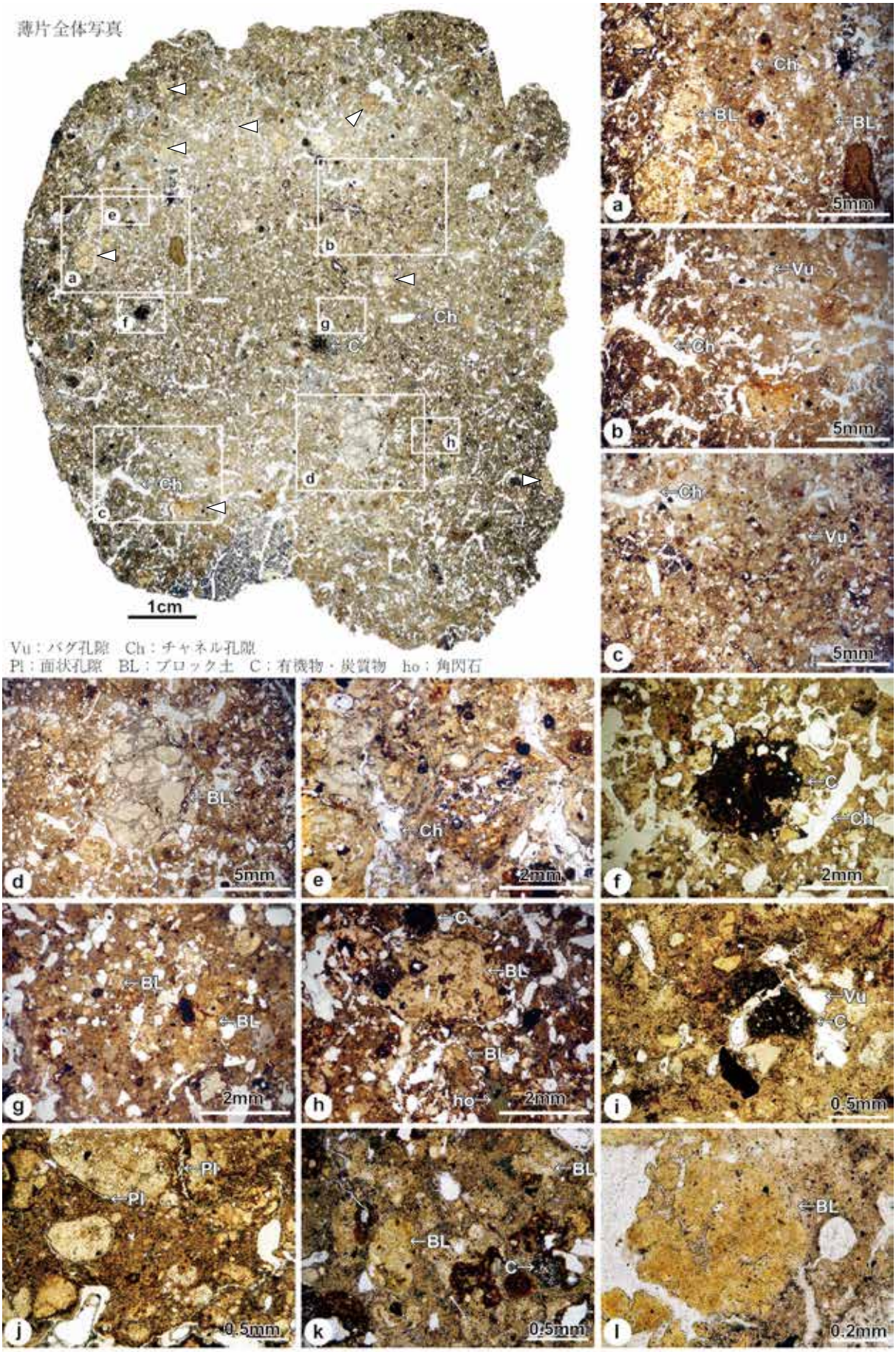
試料切断断面写真

Vo：孔隙　BL：ブロック土　C：炭質物・有機物

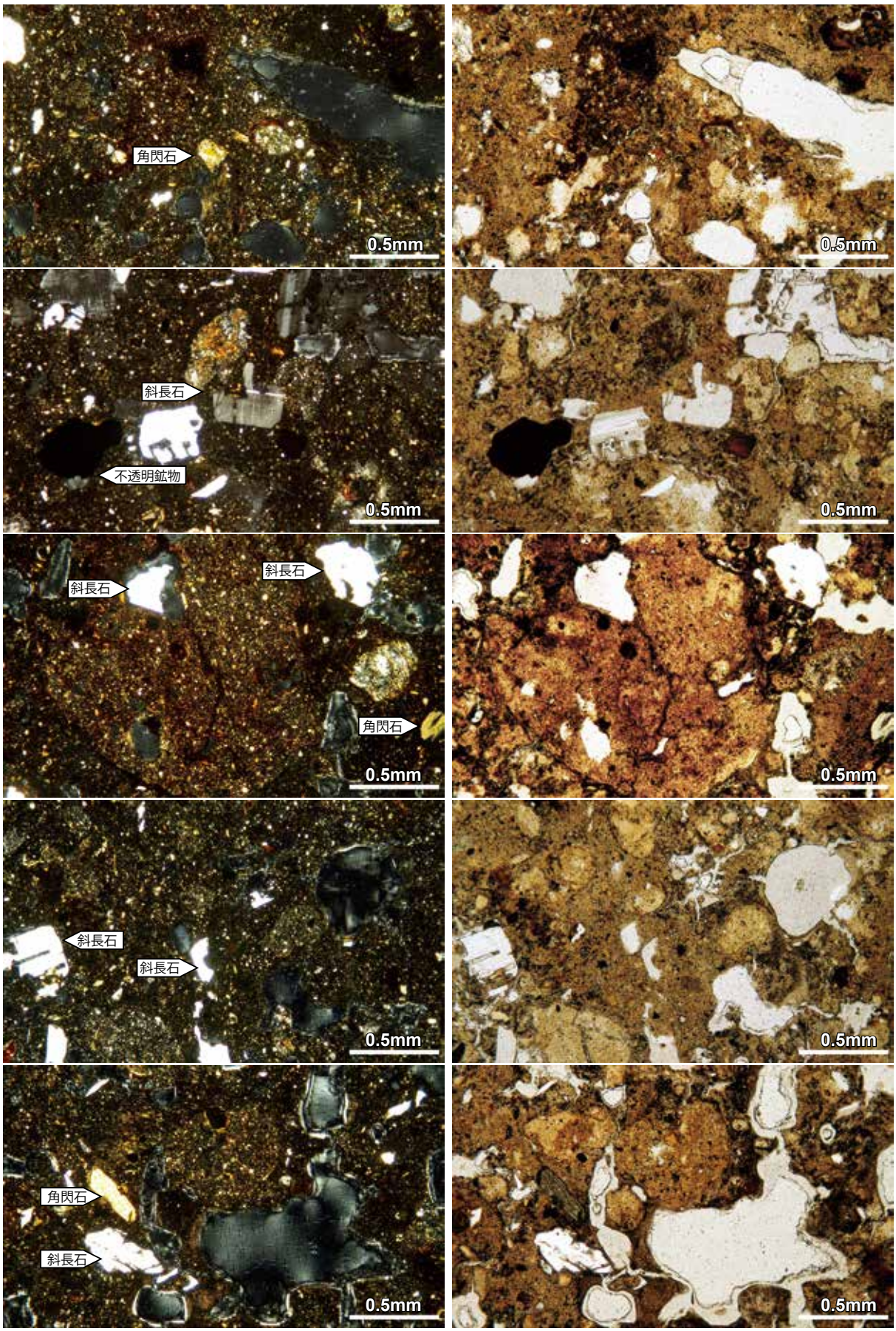
タケ亜科機動細胞珪酸体
（基質：灰白色泥部分）

タケ亜科短細胞珪酸体
（孔隙壁部分）

第 159 図　カマド粘土の試料写真および植物珪酸体写真



第 160 図　カマド粘土薄片写真および拡大写真



直交ポーラー　　下方ポーラー

第 161 図　カマド粘土の薄片拡大写真

いたことを積極的に支持することは難しいが、イネ科以外の植物が利用されていた場合、珪化組織片の残留は考えにくく、他の種類の植物体利用を全く否定することはできない。なお、僅かに産出した単体のタケ亜科の植物珪酸体は保存状態が悪く、カマド粘土に使用された堆積物中にもともと存在したものに由来する可能性が高い。このようにカマド粘土内には何らかの植物体が取り込まれていた可能性があるものの、特定できない。

以上、今回のカマド粘土の特徴について述べてきたが、微細構造の特徴である多数の孔隙の成因については、被熱の影響などを踏まえた実験考古学的な検証が必要である。また、輿石・井田（輿石・井田 2008）によると、壁土などの乾燥収縮は壁土の種類によらず含水比によって決まり、粒度が細かい壁土ほど塗りつけ時の水量が多くなるため、結果として乾燥収縮が大きくなるとされる。

また、粒度の細かい壁土ほど凝集力が強く、無拘束状態で乾燥固化させた壁土全体の圧縮強度は大きくなることが指摘されている。このような工学的な検討も今後の課題である。

引用文献

吉木文平 1959『 鉱物工学』 技報堂　710p

久馬一剛・八木久義訳監修 1989『土壌薄片記載ハンドブック』 博友社　176p

輿石直幸・井田達哉 2008「主要産出地における荒壁土および中塗土の性質　小舞土壁に用いる壁土に関する研究　その１」『日本建築学会構造系論文集』第 73 巻　第 631 号　1467-1474p

石塚吉浩・尾崎正紀・星住英夫・松浦浩久・宮崎一博・名和一成・実松健造・駒沢正夫　2009 『20 万分の１　地質図幅「中津」』　産業技術総合研究所地質調査総合センター

近藤錬三 2010『プラント・オパール図譜』 北海道大学出版会　387p

３　塔田琵琶田遺跡第５次１区 30 号竪穴住居跡出土土器の顔料分析

（１）はじめに

５次１区 30 号竪穴住居跡の床面直上で出土した土師器外反口縁鉢（第 65 図 14）は、内面全体、特に内面頸部付近に厚く赤色顔料が付着していた（第 162 図）。この赤色顔料の種類を同定することを目的に科学的分析による調査を行った。

（２）調査方法

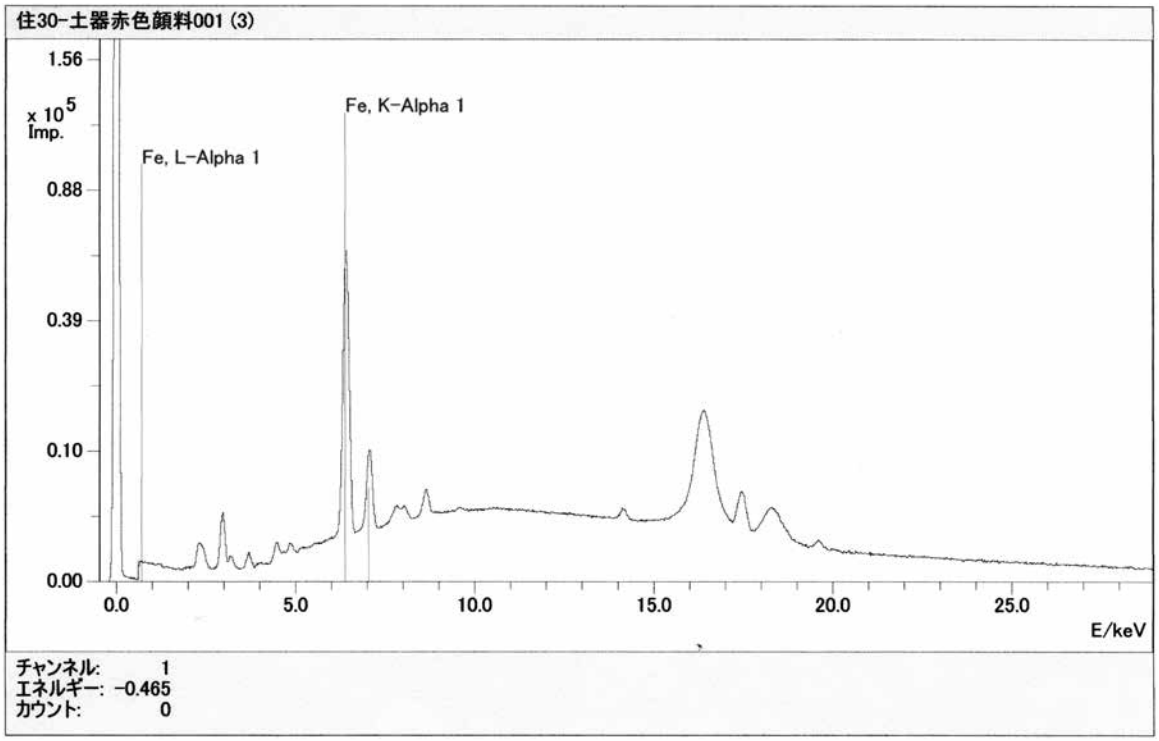
測定は九州歴史資料館にて行い、測定機器及び分析条件は以下のとおりである。

・使用機器：エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SPECTRO　MIDEX）

第 162 図　１区 30 号竪穴住居跡出土土器顔料付着状況

・分析条件：電圧 45kV/ 電流 0.3 m A/ 対陰極　モリブデン（Mo）検出器
シリコンドリフト検出器 / 測定雰囲気　待機 / 測定範囲　0.3 ミリ / 測定時間　300 秒

（３）調査結果



第 163 図　1 区 30 号竪穴住居跡出土土器の顔料分析

測定にあたっては、主たる元素の存在を、検出されたスペクトルのピークから定性的に判断を行った。この外反口縁鉢については、Fe（鉄）にピークが明瞭にみられることから、この赤色顔料はベンガラ（主成分は酸化第二鉄）と推定できる。このベンガラは内面のみかつ主に口縁部内面中位以下に付着することからスリップ（化粧土）ではないと判断される。また顔料付着状況及び出土状況から、ベンガラを入れたまま床面上に意図的に置かれたものと想定される。

以上のことから、この外反口縁鉢はベンガラの容器として利用されていたものと考えられる。

（4）まとめ

当地域においては、上毛町郷ヶ原遺跡２号溝状遺構から弥生時代後期終末の内面朱付着土器（鉢）と石杵が各１点出土している。また行橋市辻垣畠田・長通遺跡で多数の内面朱付着土器が出土しているが、特に瀬戸内地域と同形態である甕を半裁し把手を付けた形状の把手付広片口皿（広片口三耳鉢）は、北部九州で最も早く弥生時代後期中頃に朱精製技術・道具と一体になって、地理的に瀬戸内地域からの窓口となる当地域に伝播し、さらに当地域から北部九州各地へこの技術・道具が伝播したと考えられている。

一方ベンガラについては、弥生・古墳時代を通じて墳墓や集落で利用されている。本例のように土器内にベンガラを入れて住居床面直上に置いた事例は、古墳時代前期前半の行橋市延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ - ＡＢ区 27 号竪穴住居跡でも確認されており、当地域における古墳時代前期の住居廃絶行為の一つであったと想定される。今後さらなる類例の増加に期待したい。

引用文献

本田光子 1998「Ｖ自然科学分析－豊前バイパス郷ヶ原遺跡・金居塚遺跡出土赤色顔料分析－」『郷ヶ原遺跡』一般国道豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 10 集　福岡県教育委員会

大庭孝夫 2015「Ⅲ -AB 区 27 号竪穴住居出土土器の顔料分析」『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ』一般国道行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告第５集　九州歴史資料館

Ⅴ　塔田琵琶田遺跡第５次調査の遺構と遺物の検討

１　塔田琵琶田遺跡第５次調査区における遺構の変遷について

（１）はじめに

本来なら塔田琵琶田遺跡全体の遺構変遷の検討を行った後に、５次調査で検出された遺構・遺物の特徴を論じるべきであるが、本遺跡３～６次及び西ノ原遺跡、時末遺跡報告書は、整理期間の関係から今年度末に計５冊同時刊行予定であり（p14・15)、現時点で本遺跡の全容は把握できておらず、以下では５次調査区のみの遺構の変遷の検討を行う。なお塔田琵琶田遺跡６次調査報告書において、小澤佳憲氏が５次調査区を含む本遺跡全体の遺構の変遷を詳細に検討予定のため、本書での検討と合わせてご覧いただきたい。

以下の検討で用いた時期区分については、以下の基本的に『行橋市史』で示された弥生土器・土師器・須恵器編年を用いているが、『行橋市史』が対象とする豊前北部の京都平野の資料と本遺跡が位置する豊前平野の資料とでは、特に土師器の様相が異なるため、『行橋市史』のような細分が難しかったこと、竪穴住居出土土器は基本的に竪穴住居廃絶後の埋没に伴って廃棄されたもので、型式的にもある程度の時間幅が認められるため、ある程度まとめて時期を示している。

弥生土器：武末純一・上田龍児 2006「弥生土器の編年と地域交流」『行橋市史 資料編』　行橋市　p344 ～ 380

土師器：宇野愼敏 2005「豊前北部の土師器と編年」『行橋市史 資料編』　行橋市　p478 ～ 499

須恵器：小田富士雄・長直信 2005「豊前の須恵器生産」『行橋市史 資料編』　行橋市　p504 ～ 535

（２）　集落の時期別変遷について

弥生時代後期以前

27 号住居跡埋土から残りの良い縄文時代後期の粗製浅鉢（第 67 図 12）をはじめ、１区中央部を中心に縄文時代後晩期の土器と石器（第 140 図１～３）が少量出土するが、遺構は確認できなかった。１・２次調査でも縄文時代後晩期の土器・石器が少量出土するが、１区出土遺物は摩滅が少ないことから、近接地に縄文時代後晩期の遺構が存在する可能性があり、今後注意が必要である。

弥生時代後期～古墳時代前期

当区で最も古い時期の遺構は、弥生時代後期終末の４・13・18・26・74 号住居跡、２号土坑である。後期後半の土器が調査区内から出土しているため、本遺跡の形成は弥生時代後期後半まで遡る可能性がある。後期終末の竪穴住居構造は、古墳時代前期前半と同様上層の竪穴住居に破壊されているため不明な点が多いが、74 号住居跡は住居中央に炉跡、屋内土坑、２本主柱穴、壁二方にベッド状遺構を付設しており（第 106 図)、周辺遺跡の様相から 74 号住居跡が当該期の竪穴住居構造の基本形になると考えられる。後期終末の遺構は１区北～中央にまとまるが、重複はない。

続く古墳時代前期前半になると、竪穴住居数が急増かつ密集して営まれ、急激に集落が拡大して１度目の盛期を迎える。１区中央の 22 号住居跡付近で礫層が露出しているため、旧地形ではこの付近の標高が最も高いことが予想される。また１区では北東部以外で前期前半の竪穴住居が重複・

密集して展開するが、１区中央では礫層が露出していること及び竪穴住居の残存状況から、１区中央から北東部にかけて旧地形が若干高かった可能性が高い。よって前期前半の１区では地形が高い箇所は竪穴住居を営まない空間（広場や畑など）で、その空間を囲んだ若干地形的に下がる箇所に竪穴住居を営んだ可能性が考えられる。当該期の竪穴住居構造は、75 号住居跡で４本主柱穴、屋内土坑以外の壁３方にベッド状遺構を付設していることから（第 108 図）、当該期以降２本柱から４本柱に変化し、ベッド状遺構の住居内に占める割合が高くなると思われる。また住居床面積では、壁三方にベッド状遺構を付設する 28 号住居跡は床面積 20㎡弱程度であるのに対し、７号住居跡は床面積 40㎡近くと、住居面積が大小２分化する様相が認められる。なお、この７号住居跡埋土中から後漢鏡の破鏡が出土することから、住居規模の大小が集落内の格差を示す可能性もある。

さらに当該期の土器様相は、前期前半古段階は弥生土器系譜の在地系が主体で、畿内系土器は非常に少ない。畿内Ｖ様式・庄内系・布留系といった畿内系土器と在地系土器の要素が融合した土器群が出現することをもって前期前半新段階と考えたため、本調査区の古墳時代前期前半は宇野編年（宇野 2006）の前期初頭と前半をあわせた時期設定にしている。

また 15 号住居跡埋土から胎土から搬入品と考えられる東海系の棒状浮文土器壺口縁部（第 55 図８）が出土した。この棒状浮文土器については、檀佳克氏が北部九州における古墳時代初頭前後の地域間交流を顕著に示す資料として検討を行っている（檀 2005）。檀氏は混入品であるが上毛町郷ヶ原遺跡 13 号溝状遺構から１点出土した例以外の北部九州の出土例は佐賀・筑後地域に集中し、いずれも器形から近江系と考えられるが、郷ヶ原遺跡出土例は器形から東海系と考えられること、棒状浮文土器は１例を除き１遺跡１点の出土で、他の東海系・近江系土器群と共伴しないことから棒状浮文土器そのものに意味があり、小集団による長距離交易等短期間の往来に伴う受容・模倣製作という想定を行っている。本例と郷ヶ原遺跡例を比較すると、色調はいずれも灰黄褐色で、成形も粗雑である。郷ヶ原遺跡例が二条のナデ凹線後に棒状浮文４本１セット（計４ヶ所）貼り付け、胴部上位には径４㎝の焼成前円孔を施すのに対し（飛野 1998、第 136 図）、本例は口縁部外面横ナデ後棒状浮文を３本１セットで貼り付けるという違いがある。なお郷ヶ原遺跡を含む唐原地区遺跡群は３条の円形環濠を有し、環濠内は南北約 300 m、東西約 500 mの規模を誇る山国川下流左岸の大規模な拠点集落で、環濠から内行花文鏡の破鏡１面が出土する。本遺跡は東西を谷で囲まれ、集落域は南北約 500 m、東西約 100 m程度、さらに竪穴住居２棟から内行花文鏡の破鏡各１面が出土することから、集落規模では先の唐原地区遺跡群には及ばないが、棒状浮文土器の存在や竪穴住居数、破鏡などから岩岳川流域の拠点集落の一つと考えられる。よってこの棒状浮文土器の存在は、本遺跡が古墳時代初頭前後、瀬戸内海を通じての地域間交流の場であったこと、また古墳時代前期前半における拠点的な集落としての位置づけを裏付けることのできる資料の一つと思われる。

古墳時代前期後半になると、前期前半に比べ竪穴住居が急激に減少し、検出した遺構は１区南東の 86・87 号住居跡のみである。当該期の竪穴住居構造は、86 号住居跡で屋内土坑及び４本主柱穴を持つが、ベッド状遺構を付設していない。

古墳時代中期～後期

５世紀前半の遺構は本調査区では未検出、２次調査区も同様であることから、集落が一時断絶している可能性がある。なお、本遺跡北東に位置する久路土芝掛遺跡第２次調査１号住居跡で当該期の土器一括資料が出土している。

５世紀後半～６世紀前半になると、再び竪穴住居が密集・重複して営まれ、２度目の盛期を迎える。当該期の竪穴住居は３区 90 号住居跡も含めた調査区北側、中央西側、南西側の３ヶ所でまとまり、特に竪穴住居にＬ字状カマドを含むカマドを付設するといった、住居構造のみならず炊事生活様式も大きく変化している。豊前市内では最も早く導入した、本遺跡の特徴の一つであるＬ字状カマドは、５世紀後半、６世紀前半、６世紀後半～末と時期が下るにつれて、竪穴住居数の増加に反比例するようにＬ字形カマドが少なくなり、通常の造り付けカマドが増加する。なおＬ字状カマドはＶ－４で簡単にまとめているので、ご覧いただきたい（p258 ～ 262）。また当該期の竪穴住居は一辺４ｍ程度の小型のものが多く、竪穴住居規模とＬ字形カマドは相関関係にはない。なお６世紀中頃の竪穴住居は、前後にあたる６世紀前半・後半に比べ竪穴住居数は少ないと思われるが、６世紀中頃にあたる土師器は明確に把握できなかったため、第 162 図では６世紀後半に含めている。

６世紀後半～末になると、１区南側を中心に密集・重複して竪穴住居が営まれ、３度目の盛期を迎える。２度目の盛期である５世紀後半～６世紀前半とは異なり、１度目の盛期である前期前半と同様、旧地形が高かったと考えられる１区北東部に竪穴住居はなく、その空間を囲むように地形的にやや下がった位置に密集して竪穴住居が営まれる。当該期には 35・36・79・84 号住居跡のように、同一箇所で重複する竪穴住居が増加するのと同時に、古墳時代前期の竪穴住居主軸は、旧地形に沿った主軸であるが、当該期の竪穴住居主軸は北から 60° 程度西に振れる方位でほぼ統一されており、宅地の成立や集落内規制を考える上で注目される。また当該期の豊前地域の竪穴住居のサイズについては、吉田東明氏（吉田 2012）と小澤佳憲氏（小澤 2012）が検討しており、いずれも大（床面積 40㎡弱）と小（床面積 15㎡前後）に二極分化する傾向があると指摘している。本調査区では、35 号住居跡床面積が 30㎡強、11・45 号住居跡床面積が 23㎡、36 号住居跡床面積が 20㎡強、44 号住居跡床面積が 10㎡と、４つに分かれる傾向があり、多様な状況を示す。この多様性については、小澤氏によると、竪穴住居に居住する親族単位のサイズの多様性を示していると理解されている。なお１区南に位置し、切り合いから最も新しい竪穴住居である 44 号住居跡は先の通り床面積 10㎡と小型で、カマドも袖の突出する長さが短く、主柱穴も検出できていない。出土土器から６世紀末と考えられるが、埋土から出土したものであり、住居の時期は７世紀前半まで下る可能性がある。

古代以降

７世紀の確実な遺構はないが、８世紀には 88 号住居跡がある。住居規模は小さくなっているが、カマドはなく、詳細は不明である。その後の遺構としては、13 号住居跡を切り込むピットから、13 世紀前後の土器が出土しており、１区東側の高まりに小規模な中世集落が存在した可能性がある。なお中世以降本遺跡周辺は田畑として利用され、２・３区で検出された溝も灌漑用の溝である。

引用・参考文献

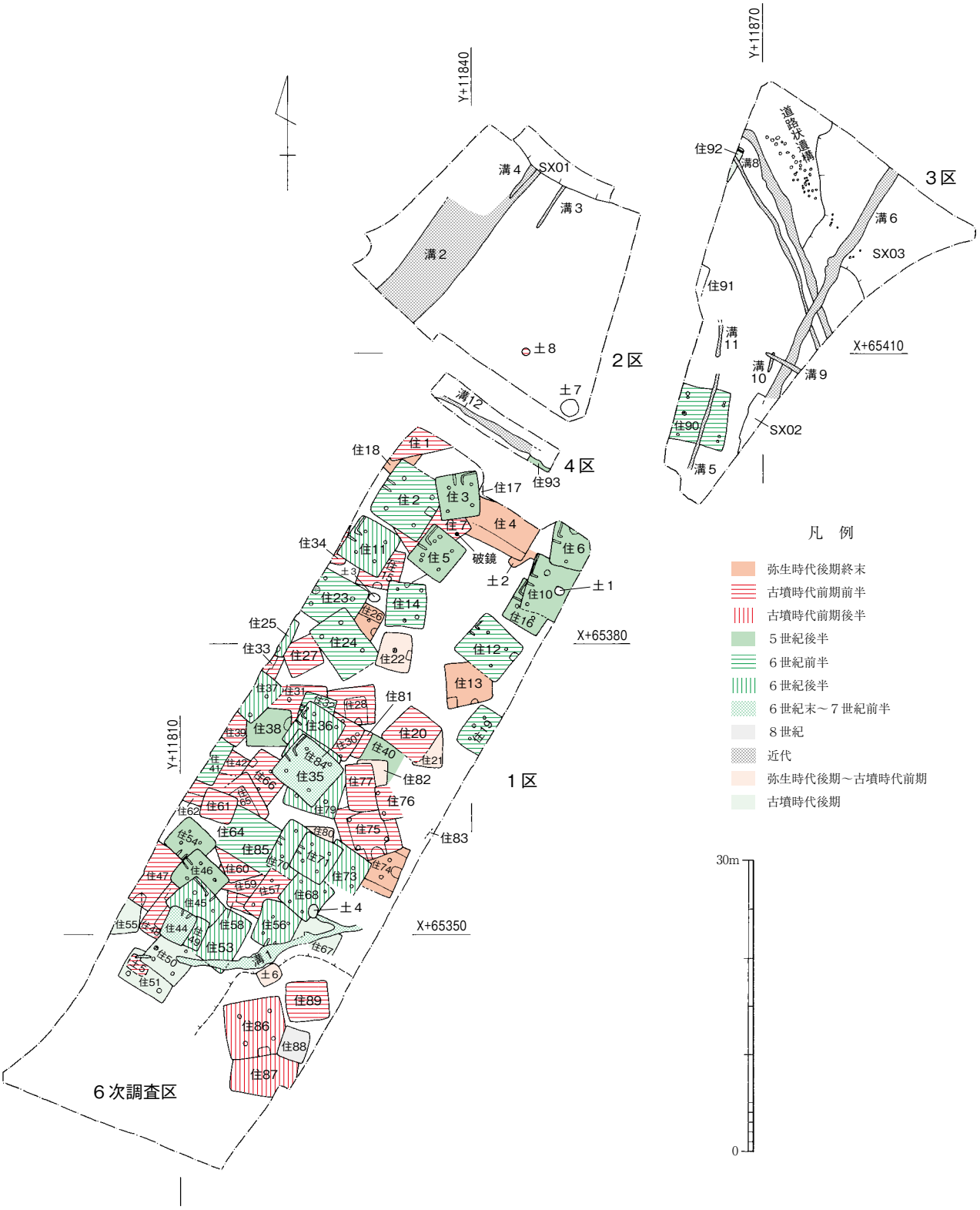
飛野博文編 1998『郷ヶ原遺跡』一般国道 10 号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 10 集　福岡県教育委員会

檀佳克 2005「九州出土の棒状浮文を有する土師器に関する一考察」『九州考古学』第 80 号　九州考古学会

行橋市史編纂委員会編 2006『行橋市史　資料編　原始・古代』　行橋市

吉田東明 2012「豊前の古代集落」『古文化談叢』第 68 集　九州古文化研究会

小澤佳憲 2012「豊前地域の集落－古墳時代後期から奈良時代にかけての一考察」『集落から見た７世紀』第 61 回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料　埋蔵文化財研究会



第164図　第5次調査区遺構変遷図（1/600）

２　１区７号竪穴住居跡出土破鏡について

（１）はじめに

先述のとおり、本遺跡５次１区７号住居跡床面から10cmほど浮いた位置から、後漢鏡である内行花文鏡の破鏡が出土した（第38図、第165図１）。肉眼による観察結果についてはp219に記しているが、ここでは当館所蔵デジタルマイクロスコープによる詳細な観察により、新たな知見が確認されたため、項を改めその観察結果及び当地域出土破鏡の様相について若干の検討を行いたい。

（２）デジタルマイクロスコープによる詳細観察結果

肉眼観察では、鏡背の文様、外区縁端部及び左破断面全体に顕著な手摺れ痕が確認された一方、右破断面には研磨痕がなく、手摺れ痕もほとんど認められなかった。この違いは現形態の生成要因及び製作、伝世期間などに影響されていると考えたため、当館所蔵デジタルマイクロスコープにより詳細な観察を行った。なお観察にあたっては、当館小林啓主任技師の協力を得た。

まず研磨痕は、本鏡全体が分厚い銅サビで覆われかつ研磨された箇所には手摺れ痕が顕著に認められたため、穿孔部も含めて明瞭な研磨痕は全く確認できなかった（穿孔部拡大写真：第165図２）。破断面については、左破断面は手摺れ痕が顕著であるものの、研磨を行い平滑に仕上げていると思われるが（第165図３）、右破断面は未研磨のため、破断した際の凹凸が表面に残り、一部は地金が露出する（第165図４）。穿孔部両側の破断面も未研磨で、右破断面と同様の凹凸が表面に残る（第165図２）。ただし右破断面及び穿孔部両破断面の端部は手摺れにより、角が取れ丸味を帯びている。また穿孔部は使用により、角が取れより丸味を帯びる（第165図２）。鏡縁端部及び左破断面には顕著な手摺れがあり、特に鏡縁左端部は角が丸く（第165図５）、破鏡になって後、相当の使用期間が見込まれる。

以上のように各破断面の状況が異なることから、穿孔が全周しかつ右破断面にも鏡片が加わった現在よりも大きな鏡片（一次破鏡）であった可能性があり、一次破鏡右側に何らかの要因で力が加わった際に、全周していた穿孔部と右側は破損してしまい、現在の形態（二次破鏡）になってしまったと推測される。なお先述のとおり右破断面及び穿孔部破断面端部にも手摺れにより丸味を帯びることから、二次破鏡になった後もある程度の使用期間が見込まれる。

先行研究による破鏡生成のプロセスは、穿孔による鏡片分離に加え、完形鏡を意図的に破砕してその鏡片の一部を抜き取る行為、完形鏡の分割配布、偶然に割れ鏡片になったものを破鏡として利用するなどが考えられている。本鏡については、一次破鏡の生成要因は不明であるが、現在の形態で（二次破鏡）の生成要因として、一次破鏡の一部が何らかの要因で破損した後も破鏡（二次破鏡）としてある程度の期間使用された、２回の破鏡生成プロセスが想定される事例となった。

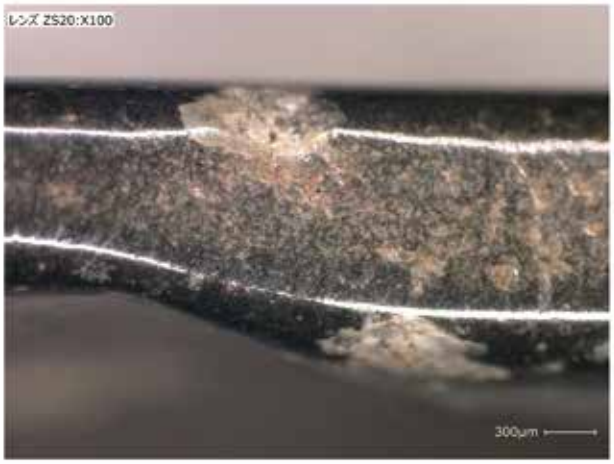
本事例のような生成プロセスが想定できうる事例が増加することで、当時の破鏡の在り方・使用方法・意識など破鏡についての様々な問題を解決する糸口の一つになると思われる。今後デジタルマイクロスコープによる調査による類例の増加に期待したい。

（３）破鏡へのベンガラの塗布について

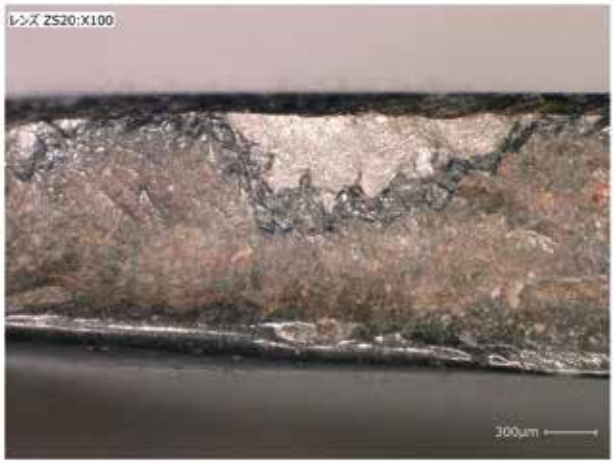
前節に記された目的のため、デジタルマイクロスコープで本鏡を観察していたところ、外区鏡縁及び両破断面に赤色顔料がわずかに残存していることが確認された（第165図６、第165図２～４

1　1区７号竪穴住居跡出土破鏡

2 穿孔部拡大
（角が取れ丸みを帯びる、赤色顔料付着）



3 左破断面
（研磨により平滑、手摺れ痕、赤色顔料付着）

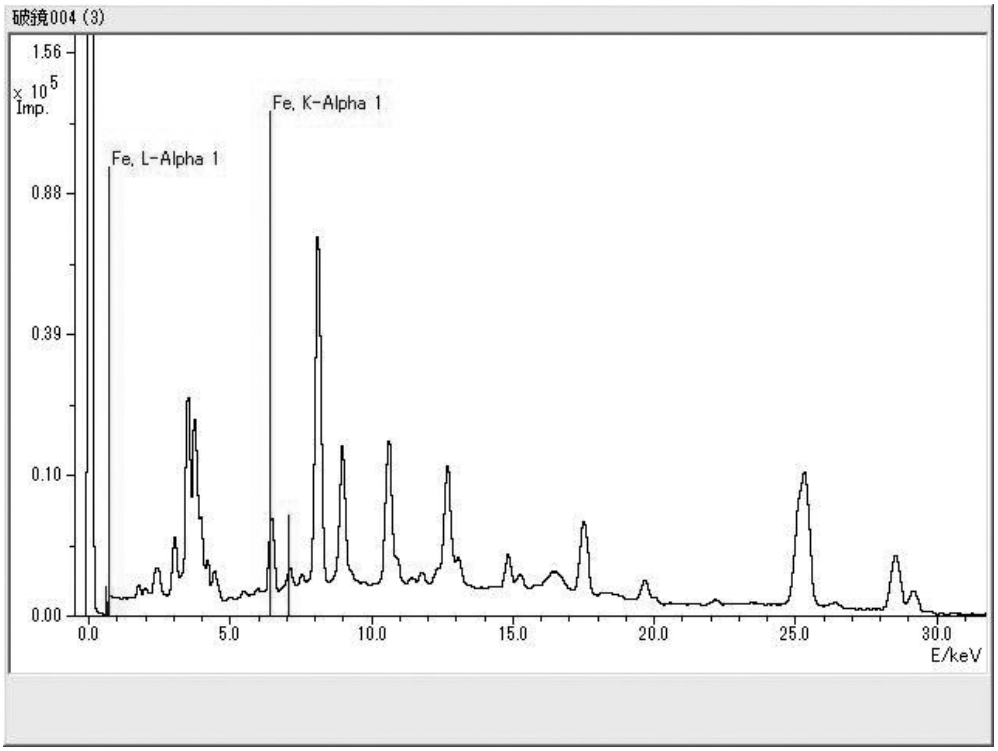


4 右破断面
（破断による凹凸、地金が露出）

5 外区鏡縁左端部
（角が丸くなる、顕著な手摺れ痕）

6 外区鏡縁拡大
（赤色顔料が付着）

第 165 図　出土破鏡詳細観察写真



第 166 図　出土破鏡付着赤色顔料分析

でも残存状況が確認できる)。赤色顔料の特定のため、当館所蔵の蛍光 X 線分析装置（エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SPECTRO　MIDEX)、分析条件は電圧 45kV/ 電流、0.3 m A/ 対陰極、モリブデン（Mo）検出器　シリコンドリフト検出器 / 測定雰囲気　待機 / 測定範囲　0.3 ミリ / 測定時間　300 秒）で分析したところ、Fe（鉄）にピークが明瞭にみられることから、この赤色顔料はベンガラ（主成分は酸化第二鉄）と推定できる（第 166 図)。また左右の破断面にベンガラが認められることから、前節で検討した本破鏡（二次破鏡）の生成プロセスも考慮すると、二次破鏡後にベンガラを塗布ないしは散布し、付着した可能性が高いと思われる。

破鏡になった後にベンガラを塗布した事例として、筆者がかつて福岡県みやま市藤の尾垣添遺跡６区１号溝出土破鏡（異体字銘帯鏡外区片）で検討したことがある（大庭 2012)。この事例では、本鏡とは異なり孔が完全に残る穿孔内部にベンガラが良く残存していたことから、懸垂の役割が終了した後、溝に廃棄される直前に塗布した可能性が高いことを指摘しているが、本例も７号竪穴住居跡に廃棄する直前にベンガラを塗布した可能性が想定できる。さらに本書Ⅳ－３で、古墳時代前期前半段階の竪穴住居廃絶行為の一つとして、竪穴住居床面直上にベンガラを入れた壺を置く行為の存在を推測している（p246・247)。以上のことから、古墳時代前期前半段階に行われた集落の祭祀行為として､破鏡にベンガラを塗布ないしは竪穴住居床面上にベンガラを入れた壺を置くなど、竪穴住居廃絶に伴いベンガラを用いた祭祀行為が北部九州内で広く行われていたと予測されよう。

（４）本鏡からみた古墳時代前期の塔田琵琶田遺跡

最後に旧上毛郡（現豊前市・吉富町・上毛町に相当）出土破鏡の在り方について概観し、破鏡から古墳時代前期の塔田琵琶田遺跡の位置づけを若干検討することで、まとめにかえたい。

旧豊前国出土の弥生時代～古墳時代前期の青銅器は､長嶺正秀氏による優れた基礎研究がある（長嶺編 2007)。旧上毛郡から出土した銅鏡は、小石原泉遺跡の弥生時代後期末～古墳時代初頭とされ

る自然流路内から飛禽鏡とされる復元径 9.2cmの破鏡、上唐原田代遺跡の弥生時代後期終末前後の環濠内から復元径 10.8cmの内行花文鏡の破鏡、弥生時代後期終末前後の穴ヶ葉山遺跡 40 号墓に副葬された復元径 17.3cmの内行花文鏡の破鏡、古墳時代前期の能満寺古墳群から小型仿製鏡・浮彫式獣帯鏡・夔鳳鏡の破鏡各１面、鬼木四反田遺跡から最古段階小型仿製鏡の鏡片（破鏡の可能性もあり）、古墳時代中期前半に埋没したとされる本遺跡２次２区 66 号住居跡埋土中から内行花文鏡の破鏡と本例が出土している。なお、能満寺古墳群や穴ヶ葉山遺跡は墳墓副葬で、小石原泉遺跡・上唐原田代遺跡及び本例、鬼木四反田遺跡例は集落の祭祀行為に伴うものと考えられる。

一方、豊前北部の旧京都郡・旧仲津郡域においては、破鏡は弥生時代後期終末前後の墳墓への副葬がほとんどであるという違いが認められる（長嶺編 2007）。弥生時代後期後半前後の大分県大野川流域では竪穴住居内から出土する破鏡が多いことから、本地域は破鏡を用いた祭祀行為としては、大分県南部の在り方に近い可能性を示している。また古墳時代前期に成立した完形鏡分配システムの確立に伴い、それまで様々な儀礼行為の場で使用されてきた破鏡が、完形鏡に準ずる二次的な存在として扱われ主に古墳に副葬され、この副葬という古墳時代前期末までで収束するとした辻田淳一郎氏の指摘（辻田 2005）によれば、本遺跡出土例が古墳時代前期前半、古墳時代中期前半の廃棄と考えられることから、本地域は古墳時代中期前半まで破鏡を伝世し、かつ竪穴住居に廃棄するという弥生時代の伝統が強く残る地域と思われる。

破鏡や小型仿製鏡は必ずしも階層上位者に限定されるわけでもなく、威信材としての位置づけは困難であることが指摘されているが（辻田 2005）、本地域では弥生時代後期～古墳時代前期の集落の調査例は多くあるが、破鏡１面が出土した小石原泉遺跡と上唐原田代遺跡は環濠ないしは自然流路で囲まれた当地域の中心的な拠点集落である。調査面積が広いこともあるが検出した古墳時代前期前後の竪穴住居数からみても、本遺跡は古墳時代前期前半段階では岩岳川流域の拠点集落で、本地域では拠点集落に破鏡が集中する傾向にあることが指摘できよう。

引用・参考文献

辻田淳一郎 2005「破鏡の伝世と副葬－穿孔事例の観察から－」『史淵』第 142 輯　九州大学人文科学研究院

長嶺正秀編 2007『瑞穂の国の成立Ⅰ』2007 年秋の苅田町歴史資料館特別展示図録　苅田町教育委員会

大庭孝夫 2012「破鏡に見られる工具痕－福岡県みやま市藤の尾垣添遺跡出土破鏡の観察から－」『九州歴史資料館研究論集』37　九州歴史資料館

３　本遺跡出土飯蛸壺について

（１）はじめに

本遺跡では本文中で蛸壺としたいわゆる飯蛸壺が多く出土するが、調査面積が広く検出した竪穴住居が非常に多いという理由があるものの、飯蛸壺焼成土坑が発見された飯蛸壺生産遺跡である中津市定留遺跡、犬丸野田遺跡を除けば、旧豊前国内で最も飯蛸壺が出土した遺跡と考えられる。

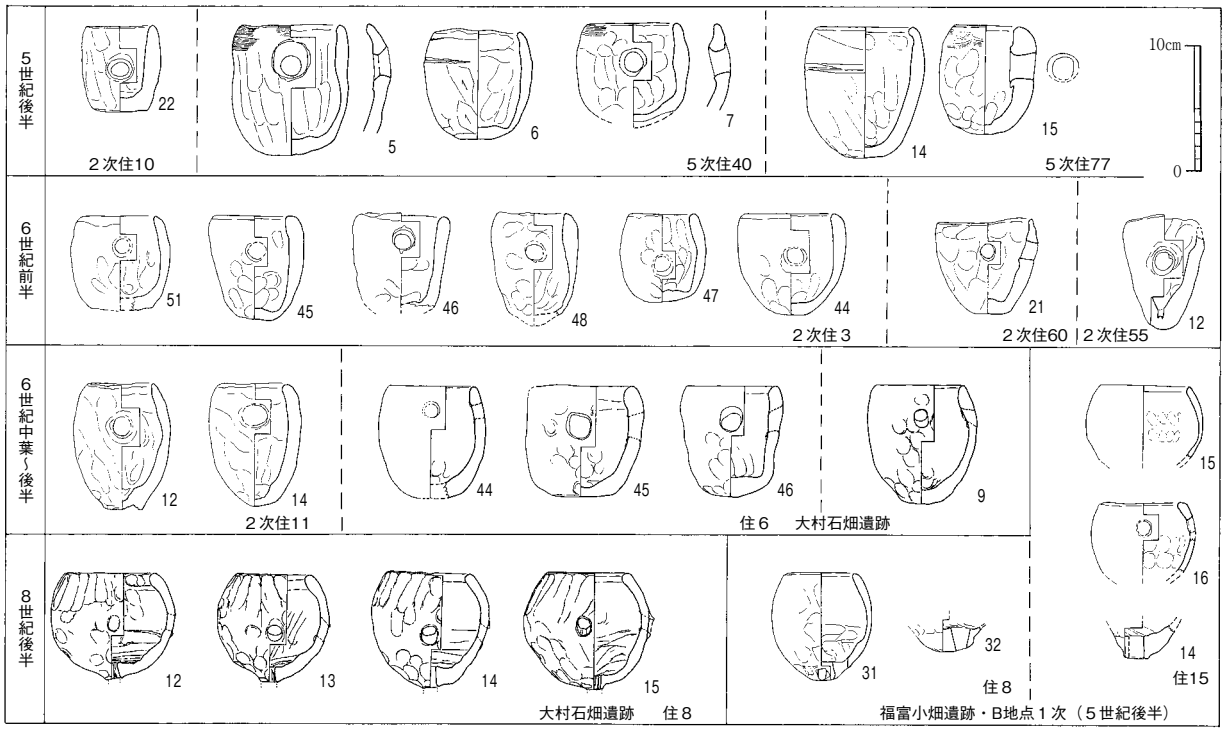
本遺跡では古墳時代中期後半から飯蛸壺が現れるが、ちょうど竪穴住居へのカマドの付設が開始され、集落規模が急速に拡大する時期と同じくすることから、飯蛸壺を用いた漁労活動を行うことが本集落の発達と関係があることも考えられた。さらに近年、豊前地域では古墳時代前期の苅田町石塚山古墳竪穴式石室墓壙内、古墳時代中期の行橋市福富小畑Ｂ地点出土飯蛸壺など、古墳時代

中期～後期の資料が増加し、古墳時代から古代にかけての飯蛸壺の変遷が確認できるようになったが（平尾 2002・山中 2006）、本遺跡５次出土飯蛸壺を整理する中で、形態から豊前地域内における豊前市域出土の飯蛸壺の独自性を把握できたこと、また胎土・色調、調整から、本遺跡における飯蛸壺出現段階に搬入品と考えられる特徴的な飯蛸壺を認識できた。そのため本節では、本遺跡及び周辺遺跡出土の飯蛸壺について先行研究をもとに概観し、若干の検討を行うことで、漁労具からみた本遺跡の在り方ついてみていきたい。

（２）本遺跡における飯蛸壺の特徴

豊前地域の飯蛸壺については、平尾和久氏及び山中英彦氏による優れた先行研究がある。まず平尾氏は、豊前地域の遺跡出土飯蛸壺の集成・分類・編年作業を行い、豊前地域では飯蛸壺は古墳時代後期に出現し、古代まで継続して認められること、器形は氏の分類Ⅴ・Ⅵ類とする球状、碗状のもののみが分布することなど豊前地域における飯蛸壺の変遷を明らかにするとともに、須恵器窯跡での飯蛸壺の生産の在り方､豊前と豊後における飯蛸壺出土差の背景について検討を行っている（平尾 2002）。山中氏は豊前北部の漁労具全般について検討を行った中で、飯蛸壺については先の平尾氏の研究を基礎に新たな出土事例も加えて、弥生時代後期～古代を通した飯蛸壺の変遷を明らかにするとともに、漁労具出土の意義及び豊前北部の古代の漁労活動の在り方の検討を行っている（山中 2006）。今回の検討ではこの先行研究を基礎に行うが、本遺跡の報告は昨年度末２冊刊行、今年度末４冊刊行と現段階では本遺跡出土飯蛸壺すべての時期や特徴は把握することができないため、今回の検討は報告書刊行された２次調査区と本調査区を中心に検討することとしたい。

まず２・５次出土の飯蛸壺は、平尾氏分類Ⅳ類（口縁部から底部に向かい胴部の張りが弱く、比較的直線的にすぼまるもの）・Ⅵ類（器高が低く、器高／口縁の値が１に近いもの）で厚手のものが主体である。飯蛸壺は手づくねで成形されることから、個体差があり型式的には一部Ⅴ類に分類されるものもあるが、主体となるⅣ・Ⅵ類の資料と同様、器壁は厚く、後述する８世紀後半の豊前市大村石畑遺跡で出土する球状でやや薄手のⅤ類とは形態や穿孔箇所が大きく異なるため、本遺跡のⅤ類は個体差の範囲に収まる可能性が高い。底部形態は、平尾分類ａ・ｂ・ｃ類全てみられ、丸底のａ類が最も多くの割合を占める。時期は５世紀後半～６世紀後半の主に竪穴住居跡埋土中から出土し、６世紀前半をピークとし、６世紀後半のものは少ない（第 167 図）。本遺跡や６世紀後半の豊前市大村石畑遺跡出土例（第 167 図）と山中氏が指摘した古墳時代前期の苅田町石塚山古墳出土例や古墳時代中期～後期前半の行橋市福富小畑遺跡Ｂ地点出土例（第 167 図）でみられた球状が主体となる様相と異なることから、豊前北部内でも京都平野と豊前平野では飯蛸壺の伝播元・系譜が異なる可能性がある。このことは、いずれも６世紀後半に属する築上町上別府園田遺跡１号住居跡出土例（Ⅴ・Ⅵ類）と築上町安武・土井の内遺跡 23 号土坑出土例（Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類）から（平尾 2002）、ちょうど京都平野、豊前平野の中間に位置する築上町を境に飯蛸壺の様相が異なる可能性が考えられる。しかし、８世紀後半の豊前市大村石畑遺跡出土例はⅤ・Ⅵ類のみと豊前北部内で飯蛸壺の形態が統一されていることは、豊前国の成立や律令体制の確立が影響していると思われる。また周辺の遺跡から７世紀に属する飯蛸壺は出土していないが、築上町広幡遺跡で７世紀後半の 10 号住居跡内から器壁が厚い飯蛸壺Ⅴ類が 50 個体近くまとまって出土しており、上記の空白期間を埋めることができる。以上のことから、本地域における飯蛸壺は５世紀後半～６世紀後半にか



第167図　塔田琵琶田遺跡及び周辺遺跡の飯蛸壺（1/6）

けて厚手のⅣ・Ⅵ類、７世紀になると厚手のⅤ類、８世紀には薄手のⅤ類が主体になると形態的な変遷が認められる。なお、本遺跡出土Ⅳ・Ⅵ類は数値的に明確にすることはできなかったが、６世紀前半に属するものより５世紀後半のものの方が、若干器高が高く、玄界灘沿岸地域に分布するⅢ類に近い形態となることは、伝播問題から注目される。

また５次１区40号住居跡出土飯蛸壺は、口縁部に一部ハケを巡らし、胎土は極めて精良、色調は白黄褐色で､その他の土師器とは胎土･色調も明瞭に異なり､他遺跡からの搬入品と考えられる（第78図５～７）。混入品であるが１区77号住居跡出土飯蛸壺（第107図14・15）も同様の特徴を有するもので、その他の遺構内や遺構面等からもこの特徴を有する飯蛸壺片が少数出土する。一方１区10号住居跡覆土上層（第43図68）及び３区90号住居跡（第148図20）出土飯蛸壺等は、胎土が良いものの精良と呼べるほどのものではなく、色調も黄橙色を呈し、先述した１区40号住居跡出土飯蛸壺と比べ、全体的につくりがやや粗い印象で、この飯蛸壺は胎土から本遺跡周辺で製作された可能性が高いと考えられる。他遺跡産と思われる40号住居跡出土飯蛸壺等の特徴を持った飯蛸壺の類例は発見することはできなかったが、基本的に手づくねで成形した土器である飯蛸壺に使用した胎土としては極めて精良で、口縁部の一部にハケを巡らす個体もあるなど、一目で判別できる非常に特徴的なものである。また１区40号住居跡は５世紀後半の埋没と本遺跡における飯蛸壺出現期にあたり、先に指摘した本遺跡出土の５世紀後半の飯蛸壺は玄界灘沿岸地域出土の飯蛸壺に近い形態と思われることから、飯蛸壺の問題にとどまらず、５世紀後半段階の集落の発達、Ｌ字状カマドやカマド導入の要因を解明できる可能性がある。

なお飯蛸壺の焼成土坑が確認された中津市定留遺跡は古代当時約300ｍまで海が迫っていたと考えられる立地で、集落内においても飯蛸壺製作専用空間の存在が指摘されている（高橋編2006）。定留遺跡の在り方から、本遺跡より周防灘に近い立地でこの精良な飯蛸壺を製作した遺跡は存在すると推測され、さらに本地域でも天観寺山窯跡や船迫窯跡群という須恵器窯跡で須恵質の飯蛸壺を製作していることを考えると、通常の土師器製作とは異なり、飯蛸壺を製作する集落は非常に限定

され、その製作も特注品的な在り方が想定されることが、40 号住居跡出土飯蛸壺のような異質な土師器が存在する要因となった可能性も考慮に入れる必要があろう。

（３）漁労活動からみた塔田琵琶田遺跡

上記で検討したように、本遺跡からは５世紀後半～６世紀後半の飯蛸壺を多く発見しているが、その他の漁労具については、土錘などの網用錘、製塩土器がごく少数の出土したのみで、出土漁労具に偏りが認められる。先の大村石畑遺跡では、８世紀後半の竪穴住居からＶ類の飯蛸壺に加え、棒状土錘がまとまって出土し、かつ製塩土器もみられるのに対し、６世紀後半の竪穴住居は本遺跡と同様、漁労具は飯蛸壺のみである（坂梨 2007）。

山中氏は豊前地域における漁民の類型として、半農半漁の農民的漁民が多いことが特色であるとする（山中 2006）。本遺跡及び周辺の古墳時代後期集落では飯蛸壺漁以外はごく小規模な網漁、製塩活動が確認されるのみで、山中氏が指摘するように漁業専業は無理であったことは想像に難くない。豊前海は比較的浅い砂泥底の海域で、現在ではアサリ、カニ、エビ、カレイなどの資源にめぐまれている（山中他 2003）。このような自然環境を利用して行う古墳時代の漁労活動について今後さらなる検討が必要であり、また資料の蓄積が期待される。

引用・参考文献

平尾和久 2002「周防灘沿岸地域における飯蛸壺形土器の展開」『究班Ⅱ』 埋蔵文化財研究会

山中英彦他 2003『海の幸を求めて - 古代の漁具 -』行橋市歴史資料館平成 15 年度特別展　行橋市歴史資料館

山中英彦 2006「海の生業用具 - 豊前周辺とその特色 -」『行橋市史　資料編　原始・古代』 行橋市

高橋章子編 2006『定留遺跡　八反ガソウ地区発掘調査報告書』中津市文化財調査報告第 38 集　中津市教育委員会

坂梨祐子編 2007『大村石畑遺跡』豊前市文化財報告書第 22 集　豊前市教育委員会

４　カマドについて

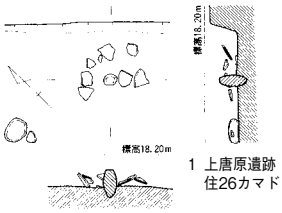
（１）はじめに

古墳時代中期～後期の本遺跡では、別名オンドル状遺構と呼ばれ、朝鮮半島由来とされるＬ字状カマドがカマドで高い割合を占めることが最大の特徴である。本調査区においても、古墳時代中期後半～後期末のカマドを有する竪穴住居 26 棟のうち、Ｌ字状カマドを有する竪穴住居は 11 棟、43％を占める。なお本遺跡のＬ字状カマドを含むカマドついて、今年度末に同時刊行される『塔田琵琶田遺跡６次』報告書内で小澤佳憲氏により詳細に論考される予定のため、本書では本調査区で確認したカマド廃絶行為及びカマドの調査にあたって幾つか気づいた点をまとめることとしたい。

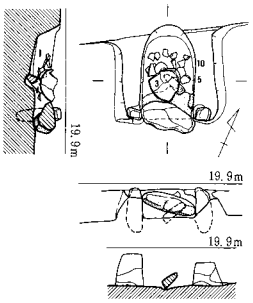
（２）本調査区カマドの構造的な特徴について

a. 竪穴住居造営に伴うカマド築造の在り方

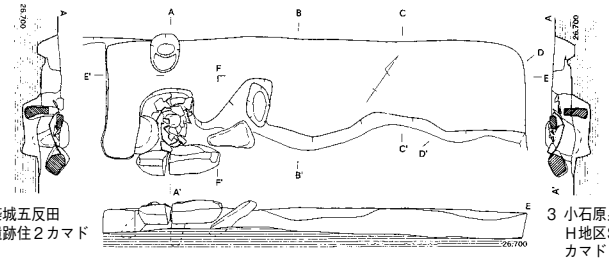
カマドの調査では最後に袖及び煙道壁の断ち割りを行っているが、ほとんどのカマドで竪穴住居貼り床上にカマドを構築していることが確認され、特に２・６・11 号住居跡カマドではその状況が顕著に認められた。またカマド袖部を全て破壊するカマド廃絶行為を行っている 19・90 号住居



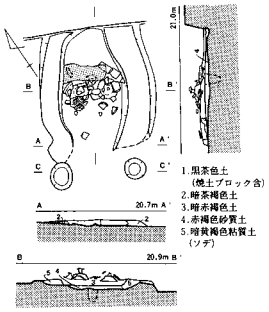
1 上唐原遺跡
住26カマド



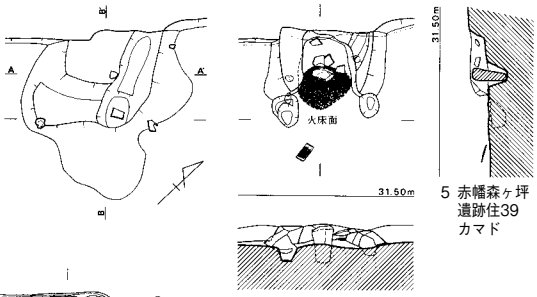
2 築城五反田
遺跡住２カマド



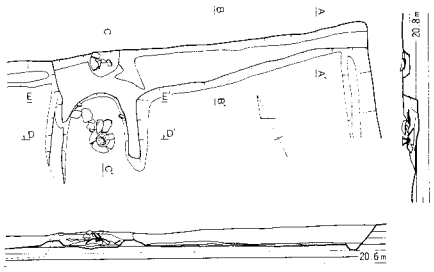
3 小石原泉遺跡
Ｈ地区SH153
カマド



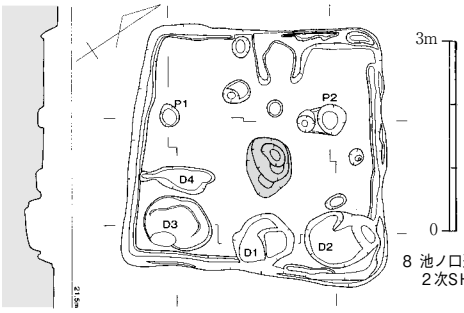
4 上唐原了清遺跡住16カマド



5 赤幡森ヶ坪
遺跡住39
カマド

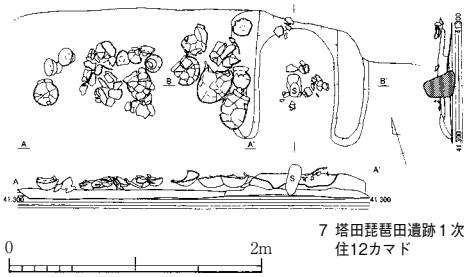


6 池ノ口遺跡１次住27カマド



8 池ノ口遺跡
２次SH18カマド

1 両袖を破壊、支脚はそのまま
2 支脚のみ倒す
3 両袖石・天井石を倒す
4 粘土でカマドの一部を被覆、
土器を置く
5 粘土でカマド全体を被覆
6 煙道に土器を置く
7 土器を壊したカマドの上に置く
8 カマドと炉の両方設置



7 塔田琵琶田遺跡１次
住12カマド

番号	遺跡名	調査次数	検出遺構	カマド型式	時期	カマド付設方位	カマド法量 長さ(袖造り付け長)cm	幅(煙道部含む)cm	燃焼部幅(支脚)cm	燃焼部奥壁～支脚間距離cm	備考
1	塔田琵琶田	5	住2	造り付け	6c前半	北西	101	98	57	84	石製支脚そのまま 両袖ほとんど破壊し、焼土を焚口に集める 土器そのままカマドをつぶす
2		5	住3	L字状	5c後半	北	136	239	56	73	石製支脚 煙道部と燃焼部非直角 土器そのままカマドをつぶす カマド天井土器祭祀
3		5	住5	L字状	5c後半	北西	103	262	53	48	石製支脚 煙道部幅8cmと狭い
4		5	住6	L字状	5c後半	北西	118	282以上	60	71	石製支脚 粘土で燃焼部被覆 土器そのままカマドをつぶす カマド粘土分析(粘土をよく撹拌して構築、粘土被熱温度270° 以下)
5		5	住10	L字状	6c前半	北西	111	313	77	70	石製支脚そのまま、天井部を破壊した煙道部に完形土器を置く祭祀 住16カマドを破壊
6		5	住11	L字状	6c後半	北西	103	277	55	63	支脚高坏そのまま
7		5	住12	L字状	6c前半	北西	82	207以上	65	43	支脚高坏を動かす 土器そのままカマドをつぶす
8		5	住14	造り付け	6c前半	南				50	支脚高坏のみ残存 両袖破壊
9		5	住16	L字状	6c前半	北西	90以上	252	57程度	62	支脚高坏 住10カマドにより破壊
10		5	住19	―	6c前半	北西					硬化面のみ
11		5	住23	―	6c前半	北西					焼面のみ カマド両袖破壊か
12		5	住32	造り付け	6c前半	北西	94	79	45	57	石製支脚及び両袖石ピットのみ
13		5	住35	L字状	6c末	北西	108	300	67	70	石製支脚そのままで、両袖石は動かす 天井石で焚口塞ぐ 煙道部と燃焼部非直角
14		5	住36	L字状	6c後半	北西	90	263か	63	46	石製支脚動かす
15		5	住44	造り付け	6c末	北北東	69	94	63	34	石製支脚そのままで、両袖石は動かす 天井石で焚口塞ぐ
16		5	住45	L字状	6c後半	北東	72	306	66	38	石製支脚動かす 左に延びる唯一の煙道 土器そのままつぶす
17		5	住46	造り付け	5c後半	北西	82	82	40	42	支脚高坏
18		5	住50	―	古墳後期	北西					焼面のみ
19		5	住51	―	古墳後期	北西					焼面のみ
20		5	住54	造り付け	5c後半	南西	96	89	42か	80か	支脚残存せず
21		5	住56	造り付け	6c中葉	南南西	87	100	57	48	石製支脚
22		5	住64	―	6c前半	西北西					焼面のみ
23		5	住70	造り付け	6c中葉～後半	西北西	72	105	63	45	石製支脚動かす
24		5	住71	造り付け	6c後半	西北西	84	78	48	41	石製支脚・両袖石そのまま 土器そのままカマドをつぶす
25		5	住90	―	6c前半	西					焼面のみ 両袖完全に除去
26		5	住92	L字状	6c前半	北北東					煙道部のみ検出
27		1	住1	L字状	6c前半	北東	138	306	53	68	石製支脚そのまま 土器そのままカマドつぶす
28		1	住3	造り付け	5c後半	南西	63	85	42	24	石製支脚そのまま 燃焼部奥壁まで粘土を使用
29		1	住6	L字状	5c後半	西	122	300	52	75	支脚ピット 左に延びる煙道
30		1	住8	L字状	6c前半	西	89	232	34		土器そのままカマドをつぶす
31		1	住9	造り付け	5c後半	北	75	88	38		燃焼部奥壁まで粘土を使用、両袖上に土器を置く
32		1	住10	L字状	6c前半	西	107	310	73		土器そのままカマドをつぶす 煙道1/4周巡らすか
33		1	住12	造り付け	6c前半	北	102	112	60	50	石製支脚 左袖上～左壁にかけてに多数土器を置く 土器そのままカマドをつぶす
34		1	住13	L字状	―	西	98	214	30		削平のため、構造不明 煙道1/4周巡るか
35		1	住14	L字状	古墳後期	西	88	267	62	53	石製支脚動かす 貼床上にカマドを構築
36		1	住15	―	古墳後期	東					焼けた粘土のみ検出
37		1	住18	L字状	6c中葉	西	120	住1/2	55	32	石製支脚動かす 煙道住居半周巡る 土器そのままカマドをつぶす
38		1	住22	L字状	5c後半	西	120	250	40	50	石製支脚 土器そのままカマドをつぶす 左袖外で土器がまとまって出土 住居右壁に沿った排煙溝？
39		1	住23	造り付け	―	西	92	83	42		破壊したカマド壁体と考えられる焼土がカマド周囲に広がる
40		1	住24	造り付け	―	西					破壊したカマド壁体と考えられる焼土がカマド前面にまとまる
41		1	住26	造り付け	6c前半	北西	78	108	58	35	石製支脚動かす 燃焼部奥壁まで粘土を使用 土器そのままカマドをつぶす
42		1	住28	造り付け	古墳後期	西	130	104	38		
43	上別府園田		住3	L字状	6c末	北	90	234	50	28	石製支脚・両袖石そのまま
44	下唐原伊柳		SH51	L字状	6c末	北西	118	220以上	42	18	煙道住居隅まで延びない 燃焼部奥壁は住居壁の30cm手前で、奥壁は粘土で構築
45	池ノ口	1	住24	L字状	5c前半	北	87	200	36	26	石製支脚そのまま 土器そのままカマドをつぶす
46		1	住27	L字状	5c前半	北	100以上	252	46	30	支脚高坏そのまま 土器そのままカマドをつぶす 煙道部で土器祭祀を行ったか
47		1	住30	L字状	5c前半	北東	82	163	23	20	支脚高坏そのまま
48		2	SH15	L字状	―	北西	74	164	40	27	支脚高坏そのまま
48		2	SH18	L字状	5c前半	北西	88	200	44	36(推定)	支脚高坏そのまま 土器そのままカマドをつぶす
50	小石原泉(報告書図面掲載分のみ)	H	SH43	L字状	6c末	北	68	255	45	25	支脚及び両袖石ピット検出 石抜き取りか 燃焼部奥壁まで粘土を使用
51		H	SH58	L字状	5c後半	北西	90	480	62	45	遺跡最大規模の竪穴住居跡 石製支脚そのまま 左袖石のみ動かす 天井石と左袖石焚口をふさぐ 土器そのままカマドをつぶす 燃焼部奥壁まで粘土を使用 住居外に延びるトンネル状の排煙溝検出
52		H	SH91	L字状	6c中葉	北西	78	住1/4	46	25	石製支脚そのまま 両袖石抜き取り 煙道住居1/4周巡る 壁周溝上に構築 煙道トンネル10×8cmの断面楕円形そのまま検出 カマド煙道部上に土器
53		H	SH153	L字状	6c末	北	93	330	42	22	石製支脚そのまま 両袖石と天井石を動かし、焚口をふさぐ 燃焼部奥壁まで粘土を使用 土器そのままでカマドをつぶす
54		H	SH154	L字状	6c末	北	70	290	50	24	構造不明

第168図　カマド廃絶行為が認められるカマド（８のみ1/120、他は1/60）と参考カマド一覧表

跡カマドにおいても、袖部が存在したと予想されるカマド焼面両側は貼り床されていた。このことから、本調査区では竪穴住居を造営する際、まず竪穴を掘削し主柱穴を立て、床を貼った後にカマドを造ることを基本とすることが分かる。さらにＬ字状カマドの煙道壁の一方は住居壁をそのまま利用しており、竪穴掘削当初から後にカマドを築く位置は当然決まっていたと考えられるが、本調査区ではカマド床下掘り込みなど､防湿に関わる構造を全てに施したわけではないことが分かる。なお本調査区で検出したＬ字状カマドは、煙道先端が住居隅より内側に位置することから、煙を排気するためには煙道先端に竹などを用いた空洞の構造物や排気溝などと繋ぐ必要があるため、基本的に屋根を架ける前にカマドを造る必要があると思われる。

ｂ．Ｌ字状カマドの構造について

６・10・35号住居跡カマドは、支脚部分での燃焼部幅が60cm以上、燃焼部奥壁から支脚までの距離が70cm程度、カマド全体の長さ３ｍ程度となる大規模カマドで、基本的に灰白色系粘土のみで構築する。これらのカマドはカマド廃絶行為によりいずれも破壊されており、カマド本来の高さは残っていないが、両袖石と天井石が残されていた35号住居跡で高さを復元すると、燃焼部天井上面が平坦か円形になることで若干高さの違いがあるが、両袖石に天井石がそのまま乗っていたとすると、燃焼部床面からの高さが40cm以上となり、６号住居跡カマド煙道部は高さ30cm残るため、燃焼部の高さが40cm程度に復元されることは妥当である。なお６号住居跡カマド燃焼部は105×60cm、高さ40cm程度に復元され、袖石も用いてないことから、カマドを粘土で構築する際には何らかの骨組み的な構造物が必要と考え、煙道粘土の土壌分析を行った。分析結果は補強材としてのスサなどの植物遺体及び骨組み等の構造物の存在は認められなかったものの、良く撹拌した粒度の細かい粘土を使用したことで、乾燥固化させた粘土全体の圧縮強度が高まり、カマド構造を保持した可能性が指摘されていることから、今後カマドの工学的な検討も必要であろう（p239～246）。

また第168図表から、Ｌ字状カマドは通常の造り付けカマドに煙道を付けただけでなく、燃焼部幅及び燃焼部奥壁から支脚までの距離から、燃焼部自体も通常のカマドより規模が大きいものが多い。さらにＬ字状カマドの燃焼部奥壁から支脚までの距離が60～70cmと40cm程度のものの２つに明瞭に分かれるが、煙道幅は15cm程度がピークで、多くが10～20cm程度に収まるため、この差は煙道幅の問題ではなく、燃焼部構造の違いによる可能性が考えられる。なお、５世紀前半の上毛町池の口遺跡のＬ字状カマドは燃焼部幅及び燃焼部奥壁から支脚までの距離が小さく、６世紀後半を中心とするＬ字状カマドを多く検出した豊前市小石原泉遺跡でも、燃焼部幅及び燃焼部奥壁から支脚までの距離が小さいことから、遺跡毎にＬ字状カマド燃焼部の上部構造に差異があった可能性がある。さらに本調査区の６世紀後半～末のＬ字状カマド（35・45号住居跡）は粘土で構築した煙道壁の厚さが薄く、時期が新しくなるとカマド煙道は貧弱になる傾向が認められ、それに伴い燃焼部構造も小さく、貧弱になっている可能性が考えられる。

（３）カマド廃絶行為について

本調査区では、カマド廃絶に伴ったと思われる様々な行為の存在が認められた。以下に上げた様々な行為について、第168図で旧上毛郡域を中心とする他遺跡の類例を示した。

①カマド両袖を跡形もなく破壊する（第168図１）：19・90号住居跡カマド

カマド天井部及び両袖基底部まで破壊、除去し、焼面のみ検出できたもの。通常の造り付けカマ

ドに行われた祭祀行為と思われる。２号住居跡カマドも袖大半を破壊していることから、このタイプの略したものと思われる。なお支脚は、除去するものとそのまま置くものがある。

②支脚、両袖石を動かす（第 168 図２・３）：35・36・44・45・70・71 号住居跡カマド

石製（土製）支脚及び両袖石を外す、動かすという毀損行為を行うことで、カマドとしての機能を停止する「火落とし」的な行為を行ったと考えられるもの。12 号住居跡カマドも土師器高坏転用支脚が床面から浮いた状態であったことから、外す毀損行為を行ったと思われる。なお、外した袖石・天井石を焚口に置き、カマド封じ的な行為を行ったもの（35・44 号住居跡カマド）はこのタイプの延長的な行為に位置づけられる。

③粘土でカマドを被覆（第 168 図４・５）：６号住居跡カマド

６号住居跡カマドでは、両袖上部を破壊、除去し、土製紡錘車とカマドで使用したと思われる土師器甑片を燃焼部内に置き、最後に厚さ 10cm程度の黄褐色系粘土でカマド燃焼部を被覆した、カマド封じ的な祭祀行為が確認できた。両袖を壊すというカマドの機能停止行為だけではなく、さらに粘土で被覆した数度の祭祀行為が認められることから、６号住居跡は悪しき事など何らかの特殊な事情が存在した可能性がある。

④煙道天井部を破壊、除去し、完形の土器を入れる（第 168 図６・７）：10 号住居跡カマド

10 号住居跡カマドは、本調査区内で最も規模の大きなＬ字状カマドであるが、煙道にいずれも黒色処理を施した土師器碗３点・土師器鉢１点・高坏（脚付碗）１点を煙道天井部の破壊・除去後に煙道内に入れるという行為を行っていた（第 40 図）。燃焼部ではカマドをつぶす際に一緒に土器を破砕している例が多いが、Ｌ字状カマド煙道の天井部を破壊する行為のみならず、煙道部に完形土器をそのままを入れる祭祀行為（煙道部を土器で封じるないしは祭祀？）という、Ｌ字状カマドでは燃焼部と煙道部で異なる祭祀行為を行っていたことを確認した。またこの祭祀に用いられた黒色処理を施した土師器碗、鉢及び高坏は、祭祀行為に用いられる場面が多かったことも指摘できよう。また３号住居跡カマドではＬ字状カマド煙道上面に土師器甕を置いており（第 30 図）、カマドをつぶした後最終段階の廃絶行為として土器を置く行為が存在したと考えられる。

⑤天井部を破壊する：ほとんどの竪穴住居カマド

燃焼部及び煙道の天井を破壊した行為はほとんどのカマドで確認されており、カマドの種類に問わずカマドを廃絶する際の一般的な祭祀行為であったと考えられる。

（４）おわりに

本遺跡におけるカマドは５世紀後半から６世紀末まで少なくとも約 100 年間の継続使用が確認され、様々な祭祀行為を連綿と受け継いでいるが、祭祀行為の時期変遷やカマドの種類の違いに伴う祭祀行為の在り方などについて、本調査区のカマドでは明らかにすることができなかった。

本遺跡は豊前市内で最古級のカマドを持つこと、またＬ字状カマドの存在から渡来系要素を持つ集落とされ、（３）④で例示した煙道天井部を破壊・除去し、完形の土器を入れる行為はＬ字状カマドのみ可能な行為であるが、この行為が渡来的要素かどうかの類例は管見では確認することができなかった。

滑石製品を中心とする北部九州の古墳時代集落祭祀を検討した平尾和久氏によると、Ｌ字状カマドを有する上毛町池ノ口遺跡 24 号住居跡では滑石製品と手づくね土器を用いた倭的祭祀と渡来系

遺構が共存すると指摘しており（平尾 2012)、L 字状カマドを含むカマド廃絶行為も当地域導入段階から在地系祭祀行為に属する祭祀行為を行なっていた可能性が考えられる。また北部九州と中心とした古墳時代竪穴建物（住居）を検討した吉田東明氏によると、古墳時代中期前半段階では在来の竪穴建物（住居）を基盤としてカマドのみ受容していること、カマドと屋内炉との交代は比較的スムーズに進行したと思われること、L 字形（状）カマドは古墳時代中期から地域的な偏りがみられ、後期まで続く地域もあること（豊前地域)、当地域の L 字形（状）カマド以外に渡来系要素を認めることは難しく、渡来後の副次的伝播等も念頭に置く必要があると指摘する（吉田 2012)。このことは、５世紀前半の池ノ口遺跡２次 SH18 で２本柱主柱穴、L 字状カマドと炉が併存していることも併せて考えると（第 168 図８)、当地域でも渡来系集団が在地系集団に抵抗なく受け入れられたと考えられる。

なおカマド自体が渡来系要素であるため、カマド祭祀行為も何らかの渡来系祭祀要素を基盤としていると考えられるが、定着後間もなく在地系祭祀行為も加味し、新たなカマド祭祀を創り出したと想定される。今後朝鮮半島や北部九州の導入期カマドとの比較検討を通じて、渡来系カマド祭祀行為の抽出を行う必要があると思われる。今後の調査進展やカマド調査技術の発達により、上記のカマド祭祀行為の類型化が可能になることで、上記の課題の検討ができることを期待したい。

引用・参考文献

武田光正・伊崎俊秋 1986「A. 古墳時代後期の竪穴住居と遺物に関する問題」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告８』 福岡県教育委員会

平尾和久 2012「日韓集落祭祀からみた変化と画期」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第 15 回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集　九州前方後円墳研究会

吉田東明 2012「九州の集落からみた変化と画期」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第 15 回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集　九州前方後円墳研究会

５　塔田琵琶田遺跡第５次調査のまとめ

塔田琵琶田遺跡は、東西を谷底平野に囲まれた南北に細長い沖積微高地上に立地する。本格的な遺跡の形成は弥生時代後期終末以降になるが、遺跡内から縄文時代後晩期の土器・石器が出土しており、遺跡周辺に縄文時代後晩期の遺構が存在する可能性がある。

本格的な集落が形成される弥生時代後期終末段階は小規模な集落であるが、谷底平野を挟んだ本遺跡西の千束原台地上に位置する弥生時代後期中葉～終末の環濠集落である西ノ原・大西遺跡を母体として遺跡が成立した可能性がある。

古墳時代前期になると急速に集落規模が拡大し、多くの竪穴住居が営まれる。この要因としては、まず遺跡東西に広がる谷底平野の開発に伴うものと推測されるが、長距離交易等短期間の往来に伴うものと考えられる 15 号住居跡出土の東海系棒状浮文土器（p249）及び７号住居跡出土破鏡などから、周防灘沿岸各地域との地域間交流を担う集落として発達した可能性がある。なお、古墳時代前期前半の出土土器は在地系が主体で、畿内系・山陰系土器は出土量も少なく、その土器相も在地系と融合・変容したものがほとんどである。よってこの交流は、後述する中期後半以降にみられる渡来系集団の受容や豊前北部の苅田町石塚山古墳及びその周辺遺跡から出土する比較的精美な畿内系

土器などと比較すると、間接的かつ小規模な交流であったと予測される。しかし、古墳時代前期における地域間交流を担う本遺跡の性格が、中期後半以降の渡来系集団の受容の素地となったと考えられる。

古墳時代前期後半には集落規模が急激に縮小し、中期前半には一旦断絶すると思われるが、中期後半になると前期前半とほぼ同規模の集落が再び展開し、後期中頃は集落規模がやや縮小傾向になったと思われるものの、後期後半にかけて安定的して集落が展開する。この中期後半段階には、竪穴住居にＬ字状カマドを含むカマドが導入され、それまで漁労具がほとんど出土しなかったがこれ以降多量の飯蛸壺が出土するという、古墳時代前期以前の居住集団とは性格が大きく変化した可能性が高い。

そのうちカマドの導入については、旧上毛郡域では中期前半段階に上毛町池ノ口遺跡・上唐原了清遺跡で既に導入されており、本遺跡カマドは豊前市内では最古であるものの一段階遅れて導入される。この導入時期の差については、旧上毛郡西部にあたる豊前市内では古墳時代前中期の古墳が未確認で、古墳時代後期の首長墓系列も明確でないのに対し、旧上毛郡東部の上毛町・吉富町では古墳時代前～後期の前方後円墳や大型円墳からなる首長墓系列を追うことができることから、先端技術を携えた技術者集団であった渡来系集団の積極的な移住を図ったと推測される首長層の有無がカマド導入時期の差に影響した可能性がある。また中期後半以降の飯蛸壺導入に際しては豊前北部に既に分布する飯蛸壺の形態よりも、玄界灘沿岸地域の飯蛸壺に形態的に類似することは（p257)、カマドをもたらした渡来系集団の故地についても示唆を与えるものである。なお、この渡来系集団の役割については、２次調査において小澤佳憲氏が集落内での鍛冶を指摘することに加え（小澤佳憲 2015「Ⅳ－３まとめ」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -22-』九州歴史資料館)、直接的な証拠はないものの、６世紀後半以降本遺跡下流域の台地上を中心に遺跡が展開するようになり、この渡来系集団がこれらの台地上及び台地下の谷地形の開発にも関与したことで、時代は下るが三毛門・久路土条里に続く耕地の拡大に役割を果たしたと思われる。

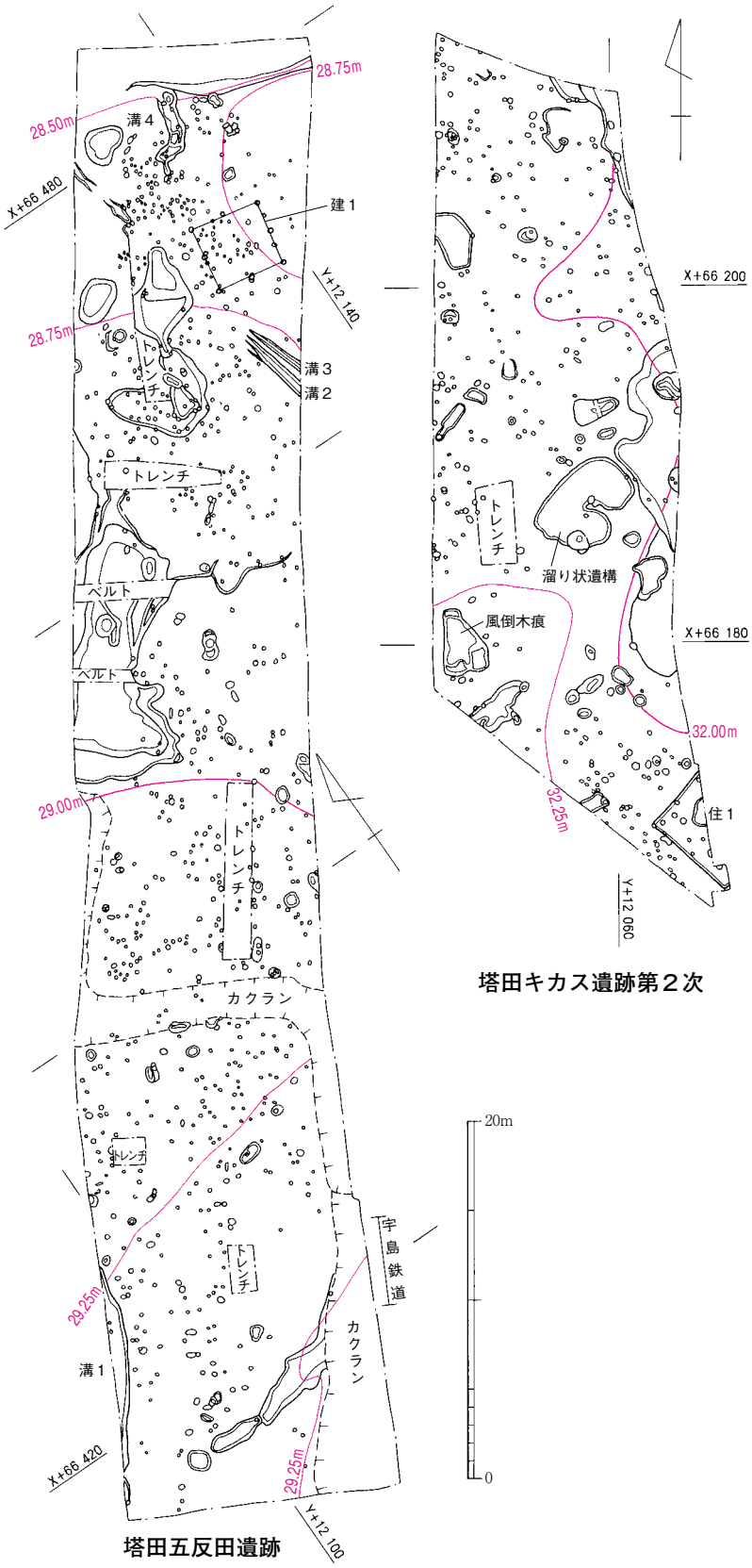
本地域では６世紀前半以降も豊前市小石原泉遺跡に代表される、Ｌ字状カマドや大壁建物など渡来系要素を持った集落が複数認められることから、数度の渡来系集団の移住が推測されているため、本遺跡でも新たな渡来系集団を受容している可能性もある。一方、本遺跡では後期後半までＬ字状カマドが築造されるが、Ｌ字状カマド自体の構造は大きな変化がなく、中期後半に移住した渡来系集団が伝統として築造した可能性もあるため、この課題については今後の課題である。

自然科学分析の成果では、まず褐色化したカマド粘土は 270℃～ 350°Ｃ程度以下の焼成を受けたものと考えられ（p241)、Ｌ字状カマドの煙道が実際に暖房の役割も果たした証拠となった。またカマド粘土にスサ等の混和物は検出できなかったが、粒度の細かい粘土を良く撹拌ないしは練り合わせたことが確認され、この精選された粘土に水分を多く混ぜることで乾燥・固化させた際の圧縮強度が大きくなるとの指摘は（p246)、カマドの構築工法にとって重要な視点を加えたと思われる。さらに 30 号住居跡出土の内面ベンガラ付着土器（p247）及びベンガラが付着した７号住居跡出土破鏡（p254）から、古墳時代前期前半段階の竪穴住居廃絶行為に伴うベンガラの使用が確認され、その類例が行橋市延永ヤヨミ園遺跡やみやま市藤の尾垣添遺跡で認められることから、北部九州内で広く行われた竪穴住居廃絶行為の一つである可能性が指摘されたことは注目される。

以上、簡単ながらまとめを行ったが、今回の県道犀川豊前線バイパス及び東九州道関連の調査で

本遺跡大半の発掘調査を行ったことになるが、多くの成果とともに課題も多く残ってしまった。今後周辺の発掘調査及び報告が進展することで、残された課題が明らかになることを期待したい。

Ⅵ　塔田五反田遺跡の調査の報告



第 169 図　塔田五反田遺跡・塔田キカス遺跡遺構配置図（1/400）

１　遺跡の概要

遺構の検出面の標高は 28.7 ～ 29.3 m で、南から北に向かって緩やかに傾斜している。基本層序は地表面から灰色土、黄褐色粘質土＋灰色土（新期埋め土）、黒色粘質土（遺物包含層）で、北半部には部分的に暗黄褐色粘質土（遺物包含層）が堆積している。黄褐色粘質土層には黄褐色粘質土のブロックがわずかに混じっていることから、流路状の旧地形を埋め戻して生活面を形成した整地層と考えられる。この層位中には弥生土器と思われる遺物の細片が含まれていた。また、やはり北半部の地山直上に茶褐色層が薄く堆積している部分があり、その中からナイフ形石器が出土したため周辺部にグリッドを組んで掘り下げたが、他に遺物の出土はなかった。

遺構は黒色粘質土下層の黄褐色粘質土面（北半部では暗黄褐色粘質土の上面）で検出したが、黒色粘質土は二層に分層でき、その下層が遺構面となる可能性もある。また、調査区の南東部には礫層が広がり小さな谷が入っており、試掘調査の結果でもこれよりも南側において遺構が確認されていないため塔田キカス遺跡とは限られる。

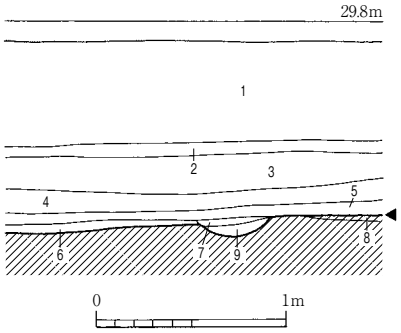
発掘調査の結果、検出した遺構は掘立柱建物跡１棟、溝３条、溜り状遺構１である。

２　検出遺構

（１）掘立柱建物跡

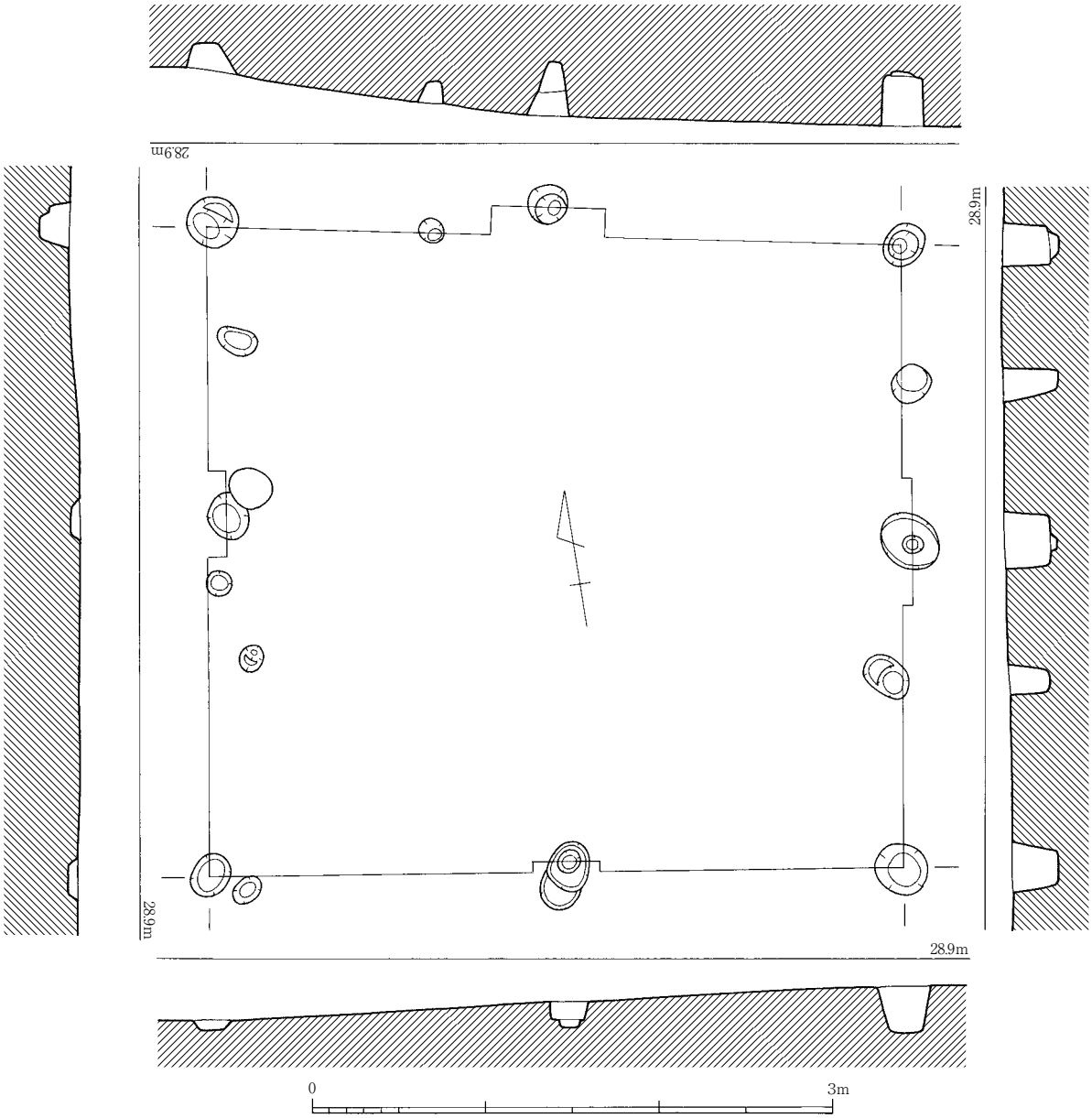
１号掘立柱建物跡（図版 71、第 171 図）

調査区の北端部で検出した２間×２間の建物跡である。東側の柱筋には、中央の柱の両側にも建物に伴う可能性があるやや小ぶりのピットが存在するものの西側には対応するものがみられない。建物規模は東西 4.0 m、南北 3.6 ～ 3.75 mを測る。柱間は東西が 2.0 m等間、南北は東側の柱筋が 1.75 m、1.85 m、西側の柱筋は 1.65 m、2.1 mと不揃いである。柱掘方は径 20cmの円形で、深さは 25cmほどを測る。



1 盛土
2 灰色土（旧表）
3 黄褐粘＋灰色土
4 黒色土（下層にくらべてしまりなし）土器片混
5 黒色土（粘性をおびる）土器片混
6 暗褐色土（包含層）
7 黒色土
8 茶褐色土
9 黒色土＋暗褐色土

第 170 図　土層模式図（1/40）



第 171 図　塔田五反田遺跡１号掘立柱建物跡実測図（1/40）

（２）溝

１号溝（第 169 図）

調査区の南側、西壁際で東肩を確認したのみで全形はわからないが、溝として報告する。埋土は黒色土。

２号溝（第 169 図）

調査区の北側を南東から北西に向かって走る。中央部は削平により遺存していないが、長さ 18 m分を確認した。上端幅 0.6 m、下端幅 0.3 m、深さ 0.1 m、断面はＵ字形となる。埋土は黒色土。

３号溝（第 169 図）

調査区の北側、２号溝に接して長さ 3.5 m分を確認した。２号溝とは軸が振れているため、先後関係にあるものと思われる。上端幅 0.3 m、下端幅 0.1 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は黒色土。

（３）落ち込み

溜り状遺構（図版 71、第 169 図）

調査区の中央部、西壁際で検出した不整形の落ち込みである。南西側は調査区外に延びる。長さ 13 m、最大幅６mで、底面は中央に向かって傾斜し、最も深いところで 0.4 mを測る。埋土は黒色の粘質土で遺物は含まれていない。

（５）その他の遺構

宇島鉄道線路敷き盛土（図版 74、第 175 図）

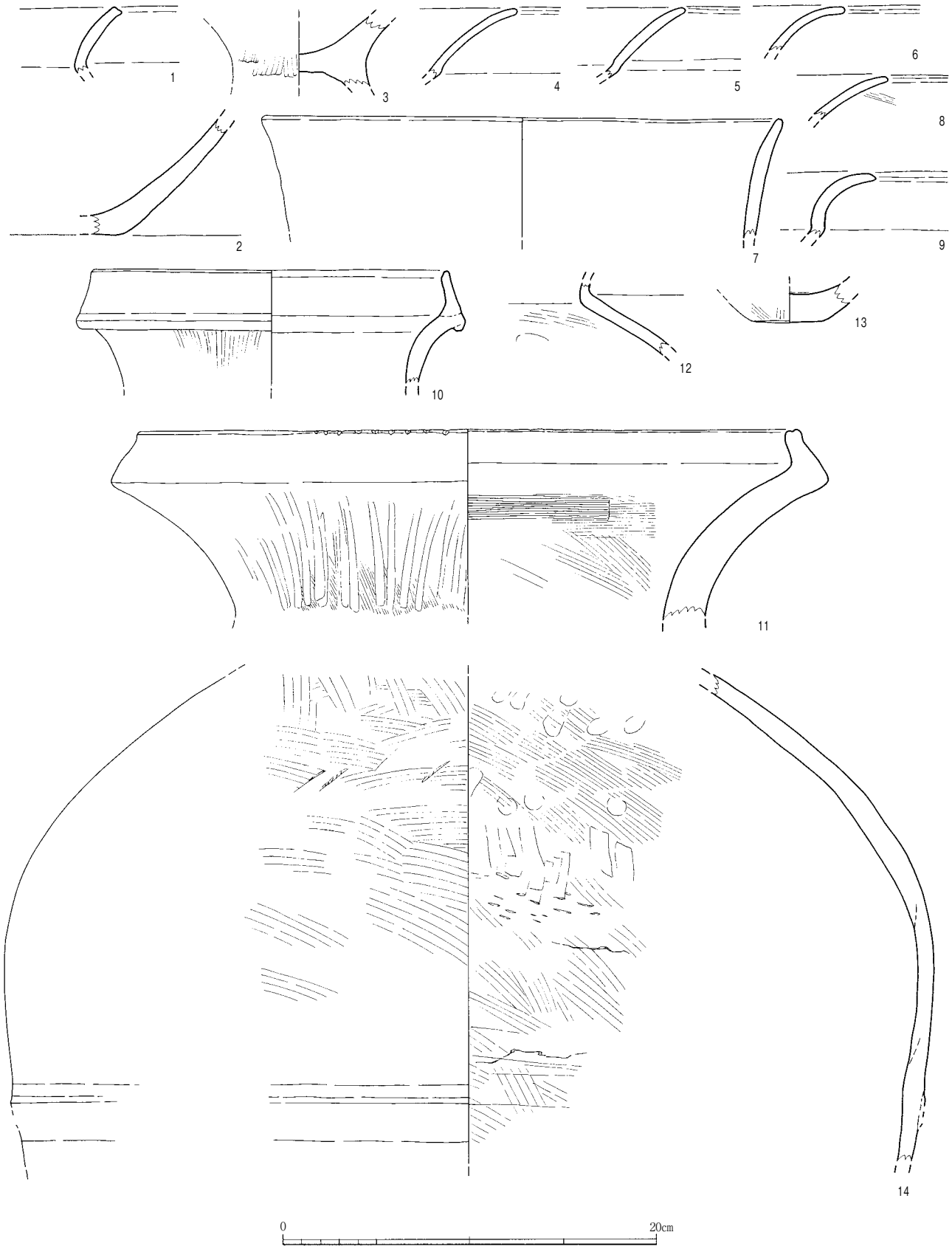
調査区の南端部から南東側に長さ 92 m、北西側に 35 mの盛土が延びている。調査対象地内ではすでに削平されていたが、この盛土は宇島鉄道の千束駅－塔田駅間の線路敷きに伴う盛土とみられる。宇島鉄道は豊前市宇島駅を起点とし大分県耶馬溪まで 17.7㎞に及ぶ鉄道で、1914 年（大正３年）に敷設され 1936 年（昭和 11 年）に廃線となった。調査区際の東側に盛土が遺存していたため、その部分の土層を観察している。基盤層は黄褐色砂礫と径３～ 20㎝の円礫の混成層で、その上部灰色粘質土層の上に盛土を行っている。盛土は下部の盛土を上部の土が覆うように積んでおり、各層とも堅固に突き固められた様子は窺えないが、沈下を防ぐためか円礫を多く含む層を間層として挟んでいる。最上層（表土下）は径３㎝ほどの円礫を特に多く含む。なお、南東側には橋梁も遺存している。

３　出土遺物

土器（図版 75、第 172・173 図）

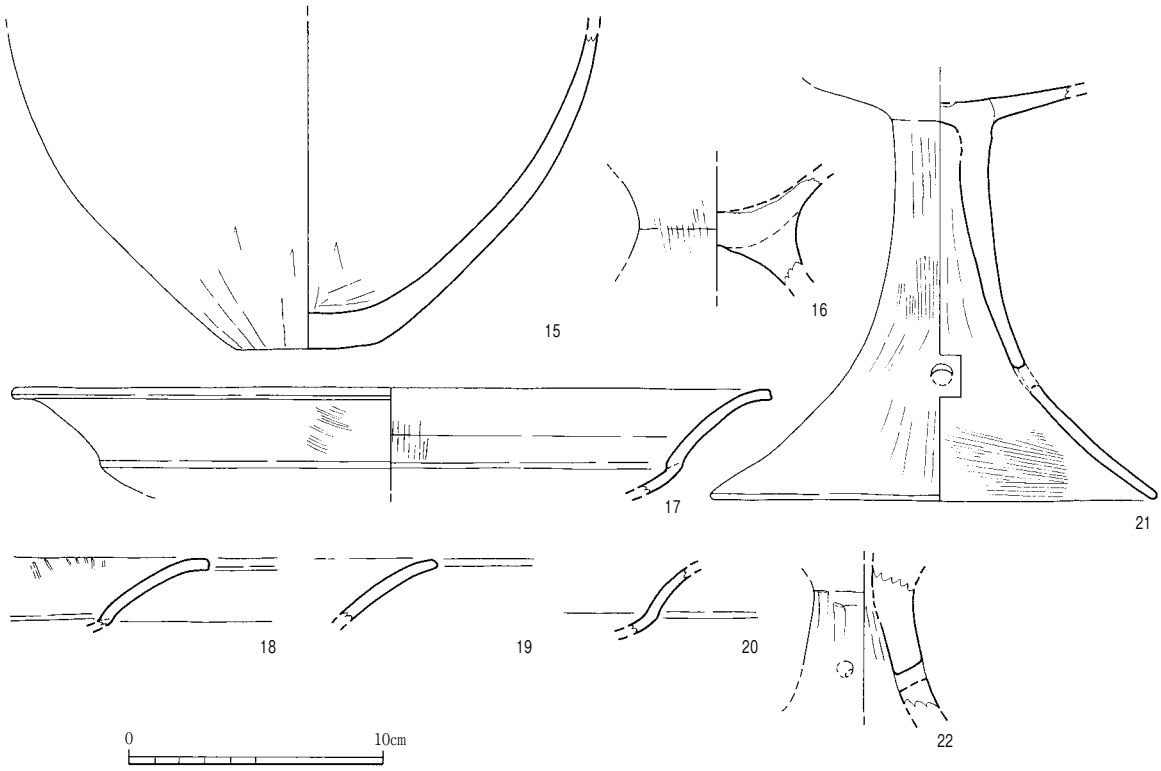
１～３は甕。１はく字形の口縁部。２は甕の底部。３は上げ底の甕の底部。４～６は高杯の口縁部。６は口縁部が大きく外反する。調整は２の外面にハケ目が残るほかは摩滅により不明。いずれも２号溝から出土。７は直口壺か。口縁部がやや緩く外反する。８・９は高杯。９は口縁部が強く外反し、外面の屈曲からみて二重口縁壺の可能性もある。いずれも遺構検出時に出土した。

10 ～ 15 は壺。10・11 は複合口縁壺。10 は屈曲部が下方に出っ張る。調整は頸部外面がハケ。



第 172 図　塔田五反田遺跡出土土器実測図①（1/3）

復元口径 19.3cmを測る。11 は大型品。口縁の端部をくぼませ、外端部に刻みを施す。頸部の器壁が分厚い。調整は口縁部がヨコナデ、頸部外面が斜位のハケのち暗文、内面は横もしくは斜位のハケ。12 は直口壺の頸部。内面に指頭圧痕が残る。13 は小型の壺の底部と思われる。底部がわずかにレンズ状になる。14 は壺の胴部。体部下位に断面台形の低い突帯が巡る。調整は外面がハ



第 173 図　塔田五反田遺跡出土土器実測図②（1/3）

ケ、内面は斜位のハケで、肩部は下から上方向の板ナデを行う。外面には黒斑が残る。15 は壺。調整は内外面ともケズリののちナデ。16 は上げ底の甕の底部。

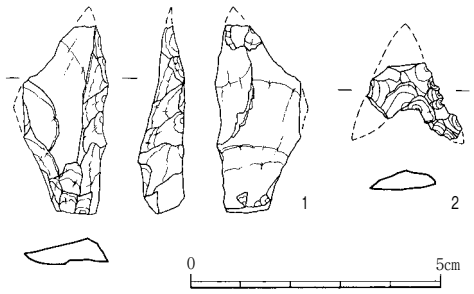
17 ～ 22 は高杯。17 は浅い杯部に強く外反する口縁がつく。いずれも摩滅が著しいが 17 にはハケ目が残る。21・22 は高杯。21 の調整は外面が縦位の細かいハケ、内面は斜位の細かいハケ。穿孔は一箇所のみ残る。22 は脚柱部。三方に焼成前の穿孔がある。調整は外面が縦位のミガキ。

10 ～ 22 は黒色土層から出土した。

石器（図版 75、第 174 図）

１はナイフ形石器。先端部および左側縁部の一部を欠失している。素材の縦長剥片の剥離面を生かして刃部とし、右側縁部および基部にブランティングをおこなう。基部には打点が残る。現存長 3.7cm、現存幅 1.7cm、最大厚 0.8cmを測る。茶褐色土から出土した。安山岩製。

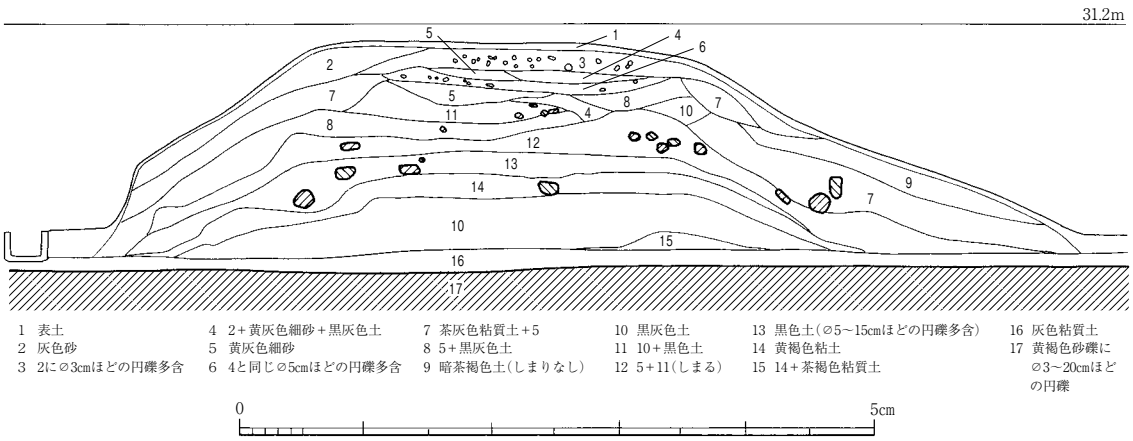
２は石鏃。先端部と片側の脚部を欠失している。抉りは深い。現存長 1.4cm、最大厚 0.3cmを測る。灰味を帯びた黒曜石製。



第 174 図　塔田五反田遺跡出土石器実測図（2/3）

4　小結

今回の調査では掘立柱建物１棟と浅い溝状遺構を検出したに留まった。地形及び試掘結果からみると、遺構は谷地形となっている調査区の南側と東側には展開せず、西側及び北側に広がっているものとみられる。掘立柱建物跡の柱穴から時期を特定し得る遺物の出土はなかったが、調査区から出土した遺物の時期が古墳時代前期を下限とすること



第175図　宇島鉄道盛土土層断面図（1/60）

から、弥生時代後期後半から古墳時代前期に帰属する可能性が高い。溝状遺構についても出土遺物から掘立柱建物に近い時期と考えられる。また、一部には弥生時代中期初頭に遡る遺物も見られるため、調査区の西側に当該期の集落も存在したものとみられる。

Ⅶ　塔田キカス遺跡第２次調査の報告

１　調査の概要

遺構の検出面の標高は32.0ｍ前後で、調査区の北側には谷が入っていて塔田五反田遺跡とは区別される。また、南側では遺構は確認されておらず、地形から見ると調査区の西側に展開し、今回の調査区は集落の東端部にあたるものと考えられる。基本層序は表土下の茶褐色土（遺物包含層）下が遺構面となり、部分的に茶褐色土の下に黒灰色土が堆積している。遺構は黒暗黄褐色粘質土面で検出した。

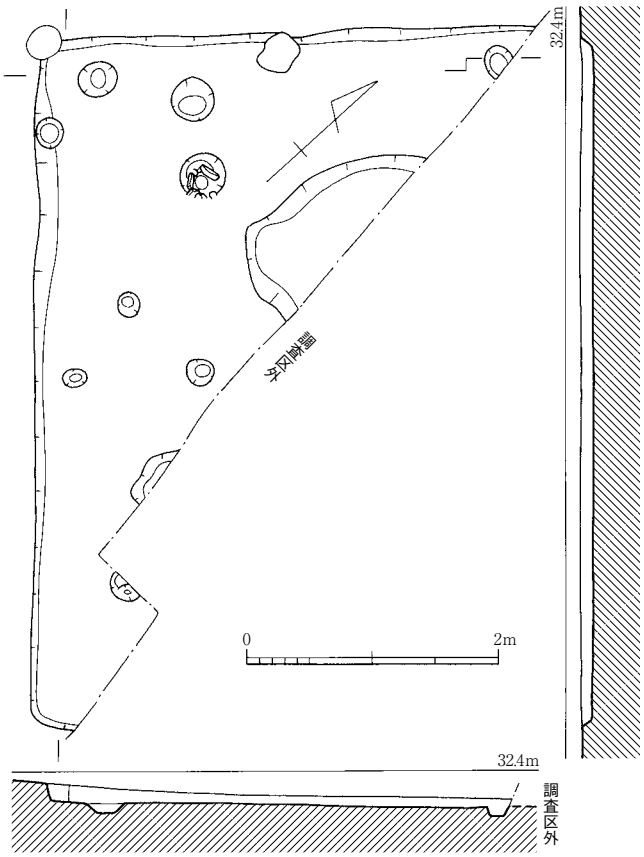
発掘調査の結果、検出した遺構は竪穴住居跡１軒、溜り状遺構１、ピットである。

２　検出遺構

（１）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第176図）

調査区南東隅部で検出した方形の竪穴住居跡で東半分は調査区外に延びる。規模は5.5ｍ×4.0ｍ以上で、東側は調査区外に延びる。主柱穴は明確ではないものの西側の深さ30cmほどのピットが柱穴とすれば四本柱に復元できる。また床面の北側で長軸1.6ｍ、深さ５cmほどの浅い落ち込みを確認したが、埋土は住居跡と同じ黒色土で、炭層などはみられなかった。



第176図　塔田キカス遺跡１号竪穴住居跡実測図（1/60）

（２）落ち込み

溜り状遺構（第 169 図）

調査区の中央部で検出した長軸 5.0 ｍ、短軸 4.0 ｍの浅い落ち込みである。当初は二つの遺構が切り合っているものとして掘削したが、結果的には堆積の違いで同一の遺構と判断した。深さが数㎝と浅く、壁はきわめて緩く立ち上がるため上部を覆う黒色土層とも不分明であるため包含層の一部と考えた方がよいのかもしれないが、この部分からまとまって遺物が出土したことから遺構として報告する。

３　出土遺物

土器（図版 76、第 177 図１～ 36）

１は土師器の壺。調整は外面がハケ、内面はナデで粘土帯の継ぎ目が明瞭に残る。２・３は土師器の甕。２の調整はヘラケズリ。３は口縁端部が明瞭な面をなす。４は器台。１～４は１号竪穴住居跡から出土した。

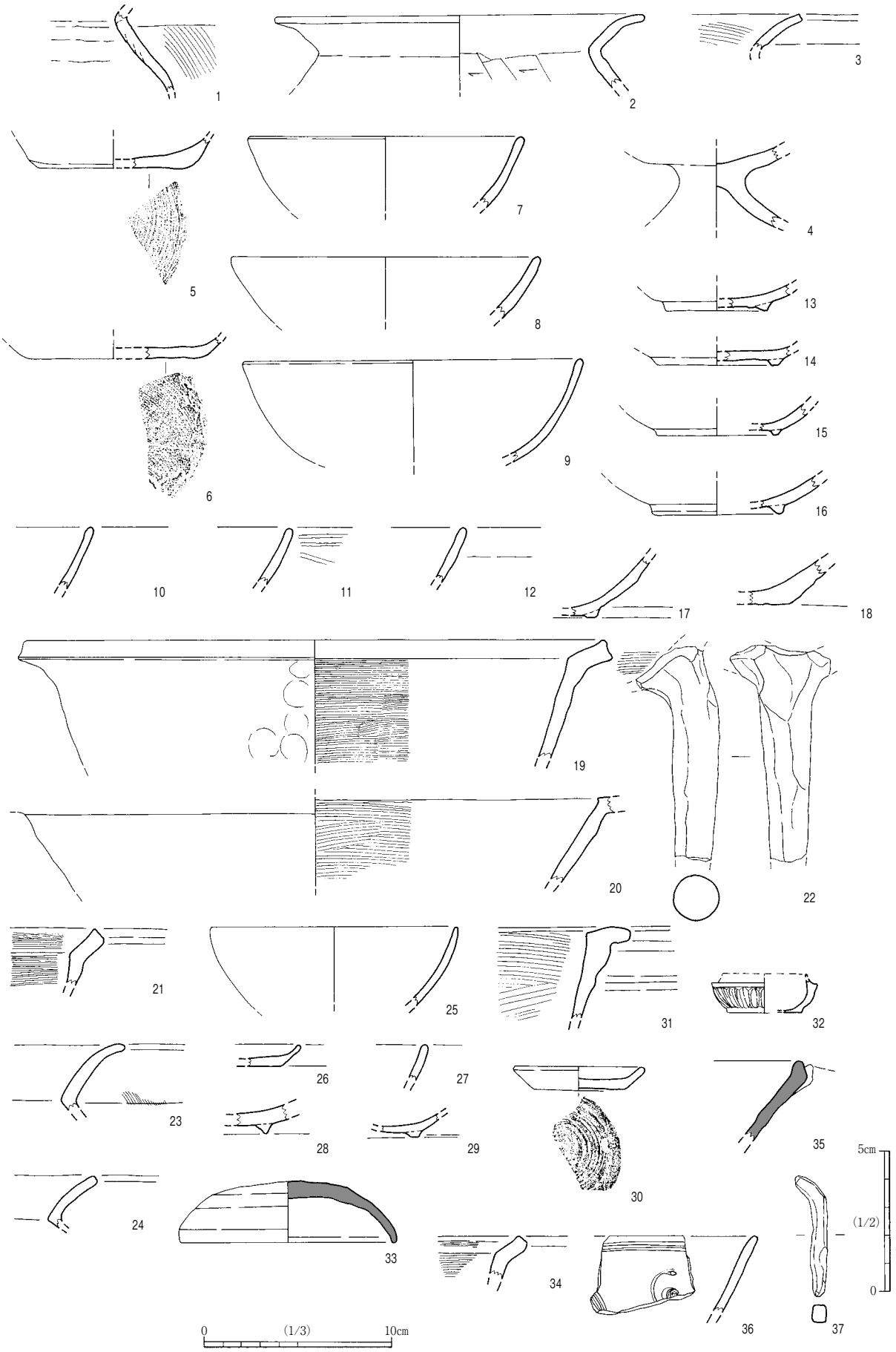
５・６は土師器の杯。いずれも底部は糸切りである。底径はそれぞれ 8.0㎝、9.0㎝を測る。７～ 17 は瓦器椀。全体的に摩滅が著しいが、調整が確認できるものはミガキを施している。高台の形状は 13・16 が断面三角形で、ほかは低い断面四角形となる。口径は 14.4 ～ 18.2㎝、高台径は 5.4 ～ 7.0㎝を測る。18 は瓦器の鉢。調整は内外面ともナデ。19 ～ 22 は土師質土器の鍋であるが焼きは瓦質に近い。20 は口縁部が平坦になるタイプである。調整は内外面とも横方向の細かいハケ。19・20 には煤が付着する。22 は三足鍋の脚。端部は欠失している。調整はナデ。脚部の上位には煤が付着する。いずれも溜り状遺構から出土した。

23･24 は土師器の甕。23 は口縁部が強く外反する。25 は土師器の椀。器壁が薄く丁寧なつくりで、調整もナデである。26･30 は土師器小皿。底部は糸切り離し。30 は口径 7.0㎝、底径 4.9㎝、器高 1.3㎝を測る。外面に煤が付着する。27 ～ 29 は瓦器椀。高台形状は 28 が断面三角形、29 が断面台形となる。31 は土師質土器の鍋。口縁下が断面瘤状に肥厚している。調整は内面が横位のハケ。外面に煤が付着する。32 は青白磁の合子の身。口縁端部と底部を欠失する。体部には細かな蓮弁が型押しされている。灰白色の胎に白色の釉を施す。底部は露胎となる。以上はピットから出土した。

33 は須恵器の杯蓋。口径 11.7㎝、器高 3.3㎝を測る。全体的に丸みを帯びた器形で、口縁端部はまるく収める。調整は天井部外面が不整方向の手持ちヘラケズリ、天井部内面が工具ナデ。試掘時に出土。34 は土師質土器の鍋。口縁端部を上方につまみ上げる。調整は内面が横方向の細かいハケ。35 は須恵質土器の鉢の片口部分。調整は内外面ともヨコナデ。遺構検出面から出土。36 は龍泉窯系青磁椀。調査区南西部の風倒木痕から出土した。内面に花文を片彫りしている。胎土は淡灰色で灰緑色の釉を施す。

鉄製品（第 177 図 37）

37 は棒状の鉄製品で上部が屈曲している。断面形状は各辺がやや膨らんだ四角形である。器種はわからない。ピットから出土した。



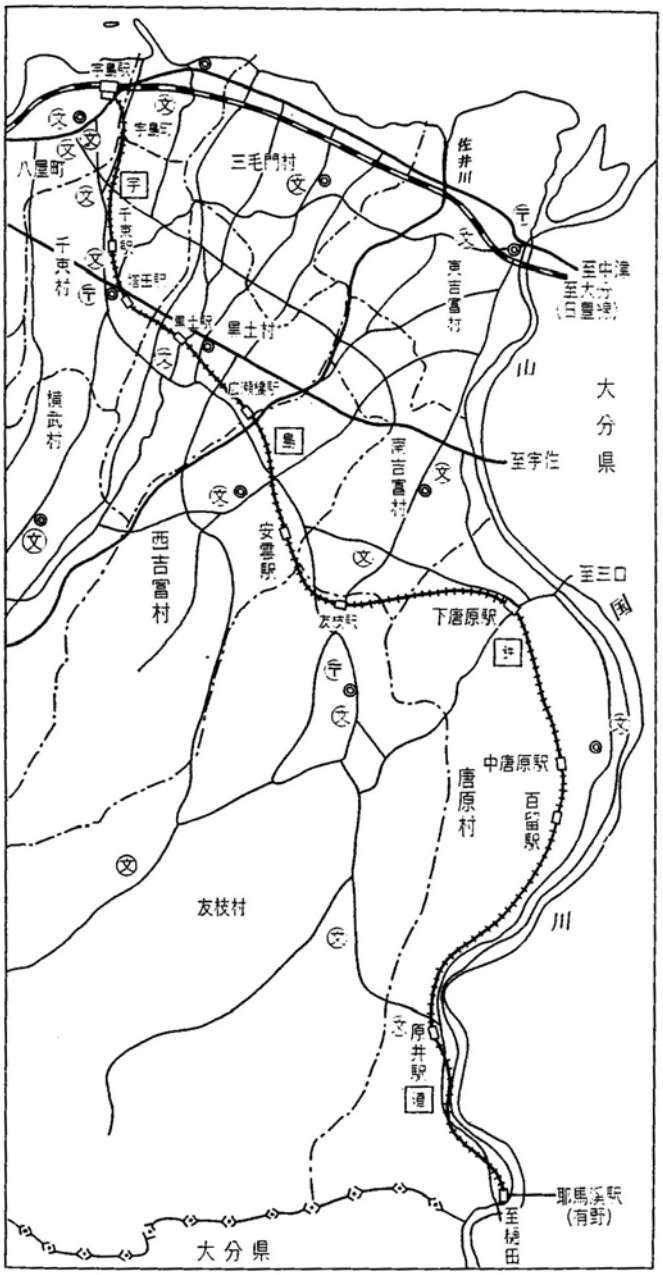
第 177 図　塔田キカス遺跡出土土器・鉄製品実測図（37 は 1/2、他は 1/3）

4　小結

塔田キカス遺跡の発掘調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡１軒を確認した。調査区の北側と東側は谷地形になっており、また、南側も試掘調査の結果では遺構が確認されていないため、西側に展開する集落の縁辺部にあたるものとみられる。当該調査区の南方には久路土芝掛遺跡があり、さらに南側には同じ時期の中核的な遺跡である塔田琵琶田遺跡が位置する。塔田キカス遺跡はこうした遺跡群の一角を占めるものと考えられる。

また、溜り状遺構からは13世紀の遺物が破片ではあるが一括出土した。検出ピットも同時期のものであるため集落の一角を占めることは間違いないが、調査範囲内では建物跡や井戸等を検出することができず、中世の集落の広がりについては今後の調査に期待したい。

Ⅷ　宇島鉄道のあゆみ



第178図　宇島鉄道路線図　（『豊前市史 下巻』より）

1　はじめに

日豊本線宇島駅からはかつて、内陸に向かって宇島鉄道という小さな鉄道が延びていた。海沿いの町から、山国川を上り、景勝地耶馬渓の名を終点に冠していたこの鉄道であるが、現在では同じ耶馬渓を目指した大分県側の耶馬渓鉄道の陰に隠れている感が強い。本稿ではこの宇島鉄道について、耶馬渓鉄道との比較も交えながら、その姿と経営について迫ってみたい。

2　宇島鉄道の創立と運行

宇島鉄道は明治44年、軽便鉄道法に基づく軽便鉄道の敷設認可を受け、大正３年１月21日､宇島～耶馬渓間10マイル49チェーン、約17.7kmが開業した。軽便鉄道とは、法的には軽便鉄道法に基づいた簡易な規格の地方輸送用鉄道のことであるが、実際にはレール幅が当時の日本の国有鉄道（現ＪＲ在来線）のレール幅であった３フィート６インチ、すなわち1067㎜よりも狭い軌道を採用した鉄道のことを指すことが多い。この宇島鉄道も、レール幅は当時全国の軽便鉄道が数多く採用していた２フィート６インチ＝762㎜であり、法的にも実態としても軽便鉄道であった。

この宇島鉄道については、豊前市の自治体史 において概要が紹介され、また耶馬渓鉄道とともに宇島鉄道の株主構成や輸送状況などを分析した水島卓麿の論考がある 。本稿ではこれらに依拠しつつ、各年度の「鉄道統計」も参照し、宇島鉄道の姿について見てみたい。「鉄道統計」は、鉄道省などの監督官庁が、全国の鉄道の基礎データをまとめて一年ごとに製作した統計である。正式名称は戦前の場合、明治 40 年度までは『鉄道局年報』、明治 41 年度からは『鉄道院年報』、大正５年度からは『鉄道院鉄道統計資料』（『鉄道院年報』から統計部分が分離独立）、大正９年度から『鉄道省鉄道統計資料』、大正 15 年度から『鉄道統計資料』、昭和 12 年度から『鉄道統計』と変化しているが、本稿では煩雑さを避けるため全て「鉄道統計」で統一した。現在は復刻版が日本経済評論社発行の『明治期鉄道史資料』『大正期鉄道史資料』『昭和期鉄道史資料』シリーズに収められており、本稿もこの復刻版を利用している。

この「鉄道統計」から、まず車両については見てみる。車種と両数は【第９表】のとおりで、開業から廃止まで、無蓋車が増えている以外は変化がない。機関車はすべてタンク機関車で、ここには記していないが総重量が変わらなかったことから、更新せず終始同じ機関車を使っていたものとみられる。また客車ついては、二等・三等合造車と三等車の保有が記されている。「鉄道統計」を見ると、宇島鉄道では二等車の乗客数は少なく、収入額も小さかった。そのため専用の二等車ではなく、三等との合造車で間に合わせていたのであろう。実際に大正 12 年度を最後に、宇島鉄道では二等車の乗客数と旅客収入額の記載がなくなっており、収入の少ない優等車両を廃止してモノクラス化している。なお合造車についてはその後も「鉄道統計」上では存在し続けているが、これをそのまま実際は三等車として走らせ続けていたのか、それとも三等への格下げ改造を行っていたのかは不明である。この車両構成の推移は、機関車や客車が増加し、後に気動車も導入した耶馬渓鉄道とは対照的である。

次に【第 10 表】から職員構成についてみると、最初は 50 人以上の所帯であったが、昭和に入るころには半減していた。その分は一人当たりの給与は一旦増加しているが、それでも山国川の対岸を走る耶馬渓鉄道と比べると、人数・給与水準共に見劣りしているのが現実であった。

３　宇島鉄道の経営

次に、宇島鉄道の経営面についてみてみる。株式会社としての宇島鉄道は、事業免許が下付された翌年の明治 45 年に正式に設立された。発起人として、行橋の実業家柏木勘八郎、小倉の実業家友枝梅太郎、蔵内保房（炭鉱主、政治家として有名な蔵内治郎作の養子）ら、さらに地元関係者が名を連ねている 。設立後の株主も約半数はこれら発起人であり、他に麻生太吉らもいたが、全員が福岡県の居住者であり、すべて県内、特に豊前地域の地元資本で作られた鉄道といえる。ちなみに耶馬渓鉄道については地元に加え、新潟や大阪、神戸に住む株主もいた 。

次に、宇島鉄道の輸送量を【第 11 表】から見ると、収入の多くは旅客収入であり、貨物収入は全体の１～２割という年が多い。また旅客・貨物ともに大正９年ごろをピークに輸送量が減少に転じている。これは当時、宇島で操業していた木材会社とレンガ工場が相次いで経営難に陥り、両者に関係していた貨物輸送と工場への通勤輸送が減少したためではないかと指摘されている 。

そして、宇島鉄道が運んだ旅客数は、耶馬渓鉄道に比べると圧倒的に少なかった。双方の旅客数を【第 12 表】に示したとおりである。これは、耶馬渓観光へのアクセス利便性の相違による、観

光客数の違いからくるものと考えられる。昭和３年、宇島鉄道が発行した『宇島鉄道沿線案内』（現在豊前市立図書館が複製を所蔵、同館ホームページでデジタル公開中）では、その「はしがき」に「本鉄道の終点たる耶馬溪駅前水気清冽たる山国川に架設せる太平橋を渡れば直に昔禅海和尚が三十余年の努力に成れる洞門の絶景に入り早くも仙境に在るの快感に打たる」とあり、さらに沿線の絶景を讃えた上で「天下の絶景耶馬溪の風光を探らむと欲する人士は日豊線宇島駅にて下車。直ちに本鉄道を利用せらるゝこと最も便利にして興趣深し」と記し、耶馬溪観光にはこの鉄道が最も便利であるかのように書かれていた。しかし実際には、山国川の手前までしか線路を伸ばすことができなかった宇島鉄道よりも、大分県側を走る耶馬溪鉄道の耶馬溪駅の方が耶馬溪には近く、実際の旅客数も耶馬溪鉄道の方が圧倒的に多かった。

もちろん、宇島鉄道も何も施策を行っていなかったわけではなく、前述の『宇島鉄道沿線案内』などを発行するなど宣伝活動を行っていた。もっとも、この本は沿線案内と銘打っているものの、よく読むと実際の案内記事は全体の半分以下であり、残りは沿線企業の広告で占められていた。そのためこの本は乗客誘致の宣伝あるとともに、広告料収入を狙った本であるともいえよう。

このような輸送量の宇島鉄道であったから、その経営は相当苦しかった。「鉄道統計」から損益計算を見ると、宇島鉄道は多くの年で営業成績は赤字であり、これに副業の自動車事業や政府、地元自治体からの補助金などを加えた最終の損益計算でも、なお赤字となることが多かった。ちなみに【第 13 表】で宇島鉄道と耶馬溪鉄道の鉄道事業に限った利益額をグラフにしたが、耶馬溪鉄道が毎年相当の利益を上げているのに対し、宇島鉄道の厳しい経営状況が見て取れる。なお【第 11 表】には載せていないが、宇島鉄道はついに一回の配当も出すことはなかった。

こうした経営をいつまでも続けていける筈は無く、宇島鉄道は昭和９年に一部区間廃止、昭和 11 年には全線が廃止された。

４　おわりに

以上、宇島鉄道の運行と経営について、簡単に概観した。一回も配当を出せず、赤字を積み上げてその歴史を終えた宇島鉄道は、経営面からみた場合は決して成功した鉄道とはいえないであろう。しかし宇島鉄道はこの地域にとって、単に赤字だけもたらしたのではなかった。

宇島鉄道は前述した木材やレンガ工場への貨物輸送に活躍し、一時的とはいえこの地の産業発展に大きな役割を果たした。さらに宇島鉄道は、各種郷土行事のための臨時列車を走らせ、またこの地に劇場も誘致し、そして自社従業員一座による演芸部まであったという。その意味で宇島鉄道は、耶馬溪鉄道のような華やかな観光輸送や潤沢な利益金には恵まれなかったものの、豊前の地の産業・文化の発展に少なからぬ貢献を残していった鉄道といえるであろう。

引用・参考文献

広瀬梅次郎編・発行『豊前市産業百年史』（1966）、豊前市史編纂委員会『豊前市史　下巻』（豊前市、1991）

水島卓麿「資金調達と輸送実績から見た大正･昭和初期の耶馬溪鉄道･宇島鉄道の性格」『地理空間』第５編第２号（地理空間学会、2012）

宇島鉄道											耶馬渓鉄道										
年度	蒸気機関車	客車					貨車			合計	蒸気機関車	客車					気動車	貨車			合計
		二等車	二・三等合造	三等車	郵便・荷物車	計	有蓋車	無蓋車	計			二等車	二・三等合造	三等車	三等・手荷物	計		有蓋車	無蓋車	計	
大正7	3		2	4		6	4	18	20	29	4	1	2	4	2	9		5	26	31	44
昭和2	3		2	4		6	4	30	34	43	5	1	4	9	3	17		5	41	46	68
昭和10	3		2	4		6	4	30	34	43	6			14	4	18	3	6	30	36	63

第９表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道車両一覧

宇島鉄道

年度	重役			庶務			会計			建築・保線			汽車			運輸			計			一人平均給料月額及諸給与（除重役）
	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	
大正7	12			1						9	142		13	193		17	293		52	628		16
昭和2	9			1	36					5	175					9	242		24	453		30
昭和10	7			1	10	2				3	74	6				8	181	15	19	265	23	24

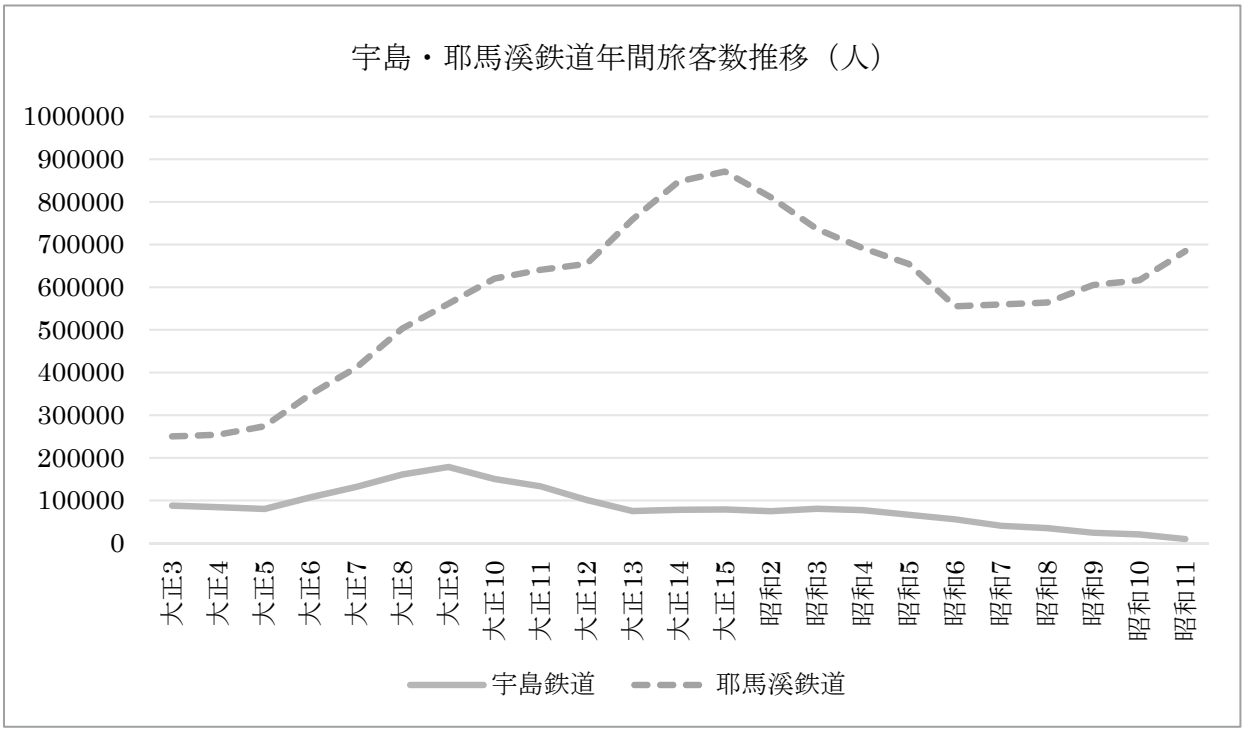
耶馬溪鉄道

年度	重役			庶務			会計・倉庫			建築・保線			汽車			運輸			計			一人平均給料月額及諸給与（除重役）
	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	人員	給料月額	諸給与月額	
大正7	15	115		4	63		2	52		12	276		15	308		26	434		74	1248		
昭和2	14	333	666	3	180	71	5	249	57	29	1233	207				97	3458	470	148	5453	1471	43
昭和10	13	192		4	174	38	6	284	71	28	950	77				165	4982	349	216	6582	535	34

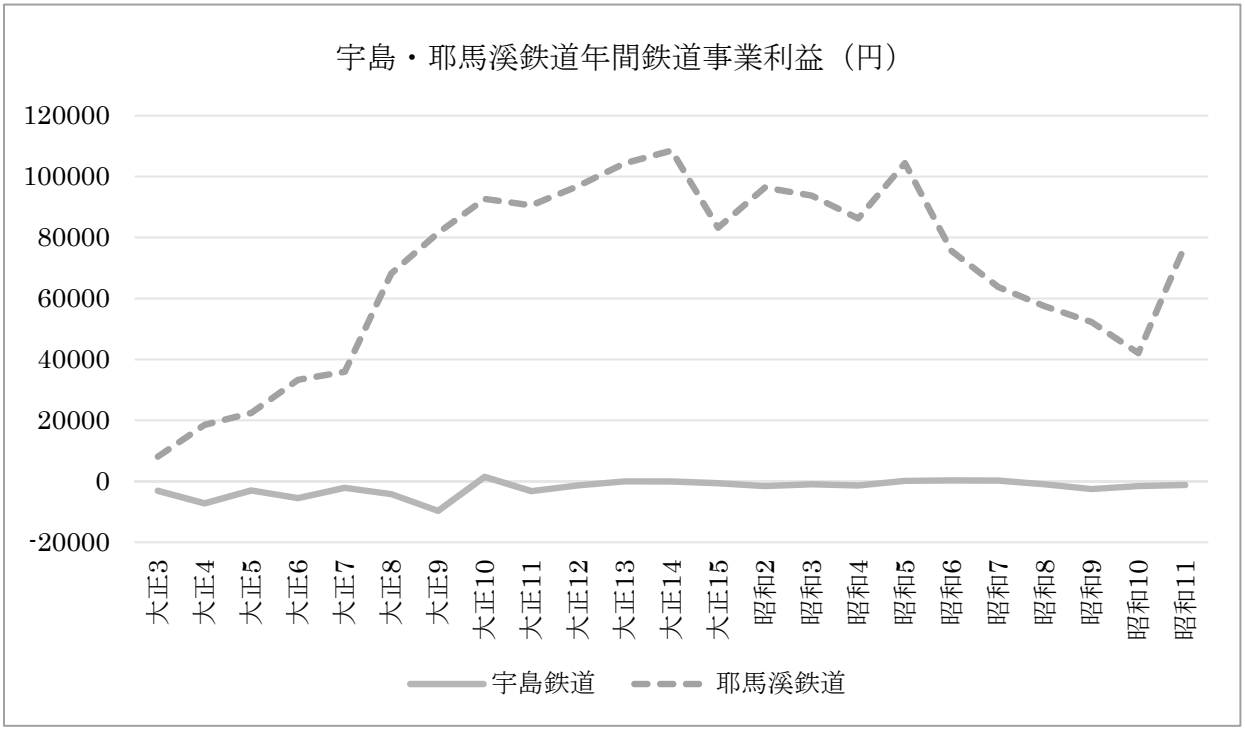
第 10 表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道職員数・給与一覧

年度	輸送量			鉄道営業収入					鉄道営業支出						鉄道事業利益金	損益					
	旅客	手小荷物	貨物	客車収入	貨車収入	運輸雑収	雑収入	計	保存費	汽車費	運輸費	総係費	諸税	計		政府補助金	利子	償却金・雑損	純益	前年度繰越金	後年度繰越金
大正3	87898		1787	7046	578	3	112	7739	1367	4342	3404	1663	76	10852	−3113	8949	17563		−11727	1039	−10688
大正4	84059		2778	6975	881		493	8349	1436	5932	2347	5527	341	15583	−7234	18127	21555		−10662	−10416	−21078
大正5	79971		5368	6695	1607		242	8544	1713	6116	1887	1496	333	11545	−3001	18355	15287		67	−21077	−21010
大正6	1E+05		7627	8681	2281		492	11454	2160	11132	2206	1403	54	16955	−5501	18424	14574	604	−2337	−20807	−23144
大正7	1E+05	8	18074	13538	8012		1068	22618	3396	15962	3631	1370	390	24749	−2131	18541	14756	1654			
大正8	2E+05	34	28829	20503	15624	7	1258	37392	5253	27480	5732	2349	794	41608	−4216	18608	14914	1232	−1754		
大正9	2E+05	38	13910	25728	12558	974	100	39360	6737	31227	6979	2684	1446	49073	−9713	19008	15163	43	−5911	−22051	−27962
大正10	2E+05	37	9565	24034	8177	957	194	33362	5265	16858	5853	2237	1681	31894	1468	19438					
大正11	1E+05	29	8042	22784	6481	848	132	30245	6203	17811	5408	2477	1550	33449	−3204	19432					
大正12	1E+05	17	4674	19044	3686	745	120	23595	5763	12307	3424	2255	1163	24912	−1317	19424	14905		3202	−21283	−18081
大正13	75164	11	4203	15579	3465	612	54	19710	4282	10058	2559	1980	869	19748	−38	1064	14499		−13473	−18082	−31555
大正14	78090	8	3180	14122	2630	525	39	17316	4331	8230	2243	1750	828	17382	−66		7255		−7321	−31554	−38875
大正15 昭和1	79034	7	2841	13429	2299	444	390	16562	3742	9044	2051	2267	85	17189	−627		29	1804	−2460	−38875	−41335
昭和2	74889	4	1903	12324	1508	413	104	14349	4763	8071	2223	736	101	15894	−1545	沿線八ヶ町	85	7578	−9208	−41335	−50543
昭和3	80440	30	2779	14252	2325	417	137	17131	5198	9773	2867	191	113	18142	−1011	2000	599	11230	−10840	−50542	−61382
昭和4	77316	30	3365	13467	3198	711	72	17448	5121	9776	3160	613	156	18826	−1378	2000	823		−201	−61382	−61583
昭和5	66798	22	2710	11134	2578	931	125	14768	4204	6876	2853	629	74	14636	132	自動車業	721	5	−594	−61583	−62177
昭和6	55825	17	1811	8637	1507	1075	37	11256	2343	5953	2213	394	67	10970	286	466	521		231	−62177	−61946
昭和7	40729	18	1189	6250	1265	1155	183	8853	1354	4972	1738	492	92	8648	205	847	644	627	−219	−61946	−62165
昭和8	34980	16	2056	5300	1711	1252	13	8276	1851	4852	1788	678	91	9260	−984	1013	445		−416	−62165	−62581
昭和9	24376	8	1890	4307	1233	1197	1	6738	1341	5721	1636	475	96	9269	−2531	1020	415		−1926	−62582	−64508
昭和10	20416	27	644	3217	552	1425	5	5199	769	4211	1372	351	91	6794	−1595	973	32		−654	−64507	−65161
昭和11	9784	260	775	1581	392	1259	5	3237	550	2804	775	229	81	4439	−1202	714		103	−591	−65161	−65752

第 11 表　宇島鉄道輸送量・損益推移



第 12 表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道年間旅客数推移



第 13 表　宇島鉄道・耶馬溪鉄道年間鉄道事業利益

報告書抄録

ふりがな	どうだびわたいせき　とうだごたんだいせき　とうだきかすいせき
書名	塔田琵琶田遺跡第３・５次　塔田五反田遺跡　塔田キカス遺跡第２次
副書名	福岡県文化財調査報告書
巻次	第252集
シリーズ名	県道犀川豊前線バイパス建設関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第２集
編著者名	大庭孝夫（編集）・小澤佳憲・吉村靖徳・渡部邦昭・細石朋希・パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢5208－3（Tel：0942-75-9575　Fax：0942-75-7834） HP：http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/
発刊年月日	2016年（平成28年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とうだびわたいせき 塔田琵琶田遺跡	ぶぜんしおおあざとうだ 豊前市大字塔田・くろつち 久路土	40214	150156	33°35′22	131°7′38″	2012.6.3～ 2013.6.28	約3,033㎡	県道バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塔田琵琶田遺跡 第３次	集落	古墳時代	竪穴住居跡９棟、落ち込み１	土師器・弥生土器・須恵器	古墳時代前期の竪穴住居跡群を検出。
塔田琵琶田遺跡 第５次	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡83棟、土坑８基、溝12条、道路状遺構１基、落ち込み３	弥生土器・土師器・須恵器・石器・石製品・土製品・鉄器・破鏡	・古墳時代前期の１区７号竪穴住居跡から破鏡が出土。 ・古墳時代中後期のL字状カマドを付設した竪穴住居を10棟検出。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とうだごたんだいせき 塔田五反田遺跡	ぶぜんしおおあざとうだ 豊前市大字塔田	40214		33°35′57″	131°7′51″	2013.10.10 ～2014.1.31	約1,000㎡	県道バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塔田五反田遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	掘立柱建物跡１棟、溝３条、溜り状遺構１、宇島鉄道線路敷き盛土	弥生土器・土師器・石器	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とうだいせき 塔田キカス遺跡	ぶぜんしおおあざとうだ 豊前市大字塔田	40214	150305	33°35′43″	131°7′47″	2013.11.25 ～2014.1.31	約570㎡	県道バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塔田キカス遺跡 第２次	集落	古墳時代 中世	竪穴住居跡１棟、溜り状遺構１	土師器・瓦器・土師質土器・鉄器	

要約

塔田琵琶田遺跡は、平野中の微高地（埋没低台地）上に営まれた古墳時代の大規模な集落跡である。集落が存続した時期は主に古墳時代前期と中期後半～後期で、密集する多くの竪穴住居跡から構成される。特徴的な遺構である。Ｌ字状カマドは、５次調査区ではカマドを持つ竪穴住居跡の約半分、計10基付設されていた。また古墳時代前期前半に埋没した５次１区７号竪穴住居跡の埋土中から破鏡が出土した。

塔田五反田遺跡では、古墳時代初頭前後の集落の一部を検出し、宇島鉄道の線路敷盛土の調査も実施した。

塔田キカス遺跡では、古墳時代前期の集落の一部を確認した。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 27	登録番号 0009

塔田琵琶田遺跡第３・５次
塔田五反田遺跡　塔田キカス遺跡第２次
上巻（本文編）

福岡県豊前市塔田・久路土所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書第 252 集

平成 28 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館
〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　株式会社 プリンティングコガ
〒 831-0034　福岡県大川市大字一木 736-5